# 大北横穴群

## 本文編

1981

伊豆長岡町教育委員会

# 大北横穴群

## 本文編

1981

伊豆長岡町教育委員会

大北横穴群遠景

「若舍人」銘石櫃
(24号横穴出土)

# 序

全国有数の観光地として脚光を浴びている当町伊豆長岡町は、源氏再興ゆかりの地として、また霊峰富士を望む歴史と自然に恵まれ、さらには農耕文化の花開いた時代の文化遺産である横穴群が各所に存在し、埋蔵文化財の包蔵地としても知られているところであります。

このたび、未知の貴重な文化財に光を当て、その保護施策を講ずべく昭和52年より４か年計画で発掘調査を実施し、ここに大北横穴群の報告書が見事に完成刊行されましたことは、誠に喜びにたえません。

この大北横穴群は、当所北江間の南面する山林中腹にあり、発掘調査は斎藤忠氏を団長に、長田実氏を副団長にお願いし、その指揮のもとに静岡県教育委員会文化課、植松章八、佐藤達雄、山下晃の諸先生が担当され、また土地所有者伊奈昌孝氏のあたたかい御理解を賜わり、地元の方々の熱心な御協力で進められ、かつてない詳細な研究検討が行われ、多大な収穫をおさめることができたのであります。

いうまでもなく、文化財は我々の遠い祖先の貴重なる遺産でありまして、地域の誕生と発展の跡を究めることは、今の時代を背負う我々の重大な責務であると考えます。

ここに、調査に御協力をいただいた多くの方々に深甚なる謝意を表すると共に、本報告書が当町及び周辺地域の歴史解明と郷土を育む資料として広く活用されることを切望して発刊の序といたします。

昭和 56 年３月

伊豆長岡町長　　松　本　重　造

# 序

伊豆長岡町にある大北横穴群の調査は、昭和52年12月に着手され、同55年7月に終了した。恐らく、一横穴群について、このような長期にわたる発掘調査が行われた事例は比較的少いであろう。この間、我々は、寒気のきびしい12月にも、暑熱のはげしい7・8月にも、この横穴群の調査にたくましく力をつくしたのであった。そして、48基にわたる横穴を確認するとともに、その形態を詳細に把握した。しかも、火葬骨を納めた石櫃を23例ほど検出したほか、特異な構造をもつ超小型横穴の存在を明確にした。横穴というと、とかく土葬による墓と認識され勝ちであるが、本大北横穴群は、土葬墓のほかに、これらの火葬墓をも含み、一地域における土葬から火葬への転移の問題にも重要な資料を提供し、かつ、火葬の特殊な方法のあったことを示唆する内容を秘めていることもわかった。この点、この種の調査の中で画期的な成果を収めたものと自負する次第であり、文化財としての大北横穴群の価値がきわめて高いものであることを強調する所以でもある。

このような意義をもたらした大北横穴群の調査には、多くの人々の力があった。私を助けられた副団長の長田実氏や調査員の小野弘氏をはじめ、県教育委員会の植松章八・佐藤達雄・山下晃諸氏及び多くの調査の方々の協力、終始事務的な処理をつづけられた町教育委員会の内田敞夫氏の好意、さらに土地所有者伊奈昌孝氏のご理解と地元の方々のあたたかい芳情とは、大北横穴群を前景とした富士山の崇高な姿にはじめて接したときの印象の強烈さとともに、いつまでも、記憶に残るものとなるであろう。

ここに協力された多くの方々に感謝の言葉をささげたい。

昭和56年3月

大北横穴群発掘調査団長　斎　藤　　忠

# 例　　言

1　本書は、昭和52年12月から、55年８月まで（延133日間）に実施された、静岡県田方郡伊豆長岡町北江間字男坂に所在する大北横穴群の発掘調査報告である。

2　発掘調査は、昭和52～55年度のⅣ次にわたって、国および静岡県の補助金を得て、伊豆長岡町教育委員会が調査主体となって実施したものである。

3　発掘調査に関連して、既に次の年次概報が刊行されているが、本書はこれらを総収するとともに若干を補正した正報告であり、本編でもある。

『大北横穴群Ⅰ』　伊豆長岡町教育委員会　昭和53年
『大北横穴群Ⅱ』　伊豆長岡町教育委員会　昭和54年
『大北横穴群Ⅲ』　伊豆長岡町教育委員会　昭和55年

4　発掘調査は、調査団長　斎藤忠(静岡県文化財保護審議会委員)、副調査団長　長田実（静岡県文化財保護審議会委員）の両氏を委嘱して実施されたが、それらの関係者の名簿は巻末に付した。

5　本書の執筆は次の通りである。

斎藤　忠　……第Ⅴ章第２節　第Ⅵ章
長田　実……第Ⅴ章第６節
埴原和郎……第Ⅳ章第４節
小野　弘……第Ⅱ章第１節
高橋　豊……第Ⅱ章第１節　第Ⅴ章第５節
植松章八……第Ⅱ章第２節　第Ⅲ章第１節　第２節　第Ⅳ章第１節　第３節　第Ⅴ章第１節　第４節
佐藤達雄……第Ⅰ章第１節　第２節　第３節　第Ⅲ章第１節　第Ⅳ童第２節　第Ⅴ章第３節　付載１
山下　晃……第Ⅲ章第１節
大川敬夫……第Ⅲ章第１節
渡辺康弘……第Ⅲ章第１節　第Ⅳ章第１節　付載２
内田敞夫……第Ⅰ章第１節

うち、第Ⅲ章第１節については、５名で執筆しその各分担は文末に記した。

また、出土遺物のうち人骨類については、東京大学理学部人類学教室の埴原和郎博士に鑑定を願い、その成果および所見についての玉稿をいただき、本書に収めた。

6　測図および遺物の整理は主に植松・佐藤・渡辺があたり、川崎陽子・鈴木清子・丹嶋かつ子の協力を得た。

7　本書の編集は、斎藤団長の指示のもとに植松・佐藤があたった。

8　編集にあたっては、各執筆者の文章を、斎藤団長がその責任において若干の補正加除を加え、あわ

せて文体・用語の統一もはかった。

9　発掘調査の資料のうち、出土品は伊豆長岡町教育委員会に、図面および写真類は静岡県教育委員会に、カラースライドは各一部ずつ保管される。

10　なお、本横穴群は、さきに指定された大師山横穴群、新たに発見されて前者に接する大北東横穴群、割山横穴群とともに、〝北江間横穴群〟の名称で、現在、国の史跡指定が確定されているが、本報告書の名は従来の概報と同じく、「大北横穴群」とした。

11　本調査および本報告刊行に関する事務は伊豆長岡町教育委員会があたった。

# 大　北　横　穴　群

## 目　　次


序　　伊豆長岡町長　　松本重造
序　　大北横穴群発掘調査団長　斎藤　忠
例言

**第Ⅰ章　調査の経過** …… 1
第1節　調査の目的と調査に至る経過 …… 1
第2節　調査の方法 …… 2
第3節　調査の経過 …… 3

**第Ⅱ章　環　　境** …… 9
第1節　自然環境 …… 9
第2節　歴史環境 …… 11

**第Ⅲ章　遺　　構** …… 17
第1節　横穴の構造と遺物の出土状態 …… 17
1号横穴 …… 17
2号横穴 …… 17
3号横穴 …… 23
4号横穴 …… 24
7号横穴 …… 28
8号横穴 …… 30
9号横穴 …… 31
10号横穴 …… 33
11－1号横穴 …… 34
11－2号横穴 …… 35
12－1号横穴 …… 38
12－2号横穴 …… 39
13－1号横穴 …… 40
13－2号横穴 …… 42
14号横穴 …… 43
15号横穴 …… 46

16 号 横 穴 …… 46
17 号 横 穴 …… 47
18－1号横穴 …… 51
18－2号横穴 …… 51
21－1号横穴 …… 54
21－2号横穴 …… 54
23－1号横穴 …… 57
23－2号横穴 …… 57
24 号 横 穴 …… 60
25－1号横穴 …… 63
25－2号横穴 …… 65
26 号 横 穴 …… 65
27 号 横 穴 …… 66
28 号 横 穴 …… 71
29 号 横 穴 …… 72
30 号 横 穴 …… 74
31 号 横 穴 …… 74
32 号 横 穴 …… 76
33 号 横 穴 …… 79
34 号 横 穴 …… 79
35 号 横 穴 …… 83
36 号 横 穴 …… 83
37 号 横 穴 …… 86
38 号 横 穴 …… 87
39 号 横 穴 …… 89
40 号 横 穴 …… 91
5・6・19・20号横穴 …… 91
第2節 階段と通路 …… 93

**第IV章 遺 物** …… 101
第1節 土 器 …… 101
第2節 鉄 器 …… 134
第3節 石 櫃 …… 136
第4節 人 骨 …… 146

**第V章 考 察** …… 149
第1節 横穴の形態及び群構成について …… 149
第2節 石櫃及びミニ横穴について …… 167
第3節 横穴掘鑿及び石櫃加工の工具について …… 189
第4節 土器について …… 203
第5節 地学上からみた大北横穴群の位置 …… 213

第6節　北伊豆の横穴について …… 227

**第VI章　総　　括** …… 243

付載1　割山横穴群の発掘調査 …… 249
付載2　大北東横穴群の測量調査 …… 254

あとがき　　伊豆長岡町教育委員会教育長　中野　勇

題字　　伊豆長岡町長　松本重造

# 挿　図　目　次


第 1 図　位　置　図 …… 1
第 2 図　大北横穴群・A群にみられる横穴の配列と断裂（割れ目）との関係模式図 …… 10
第 3 図　箱根山古墳群出土土器実測図 …… 12
第 4 図　大師山横穴群出土土器実測図 …… 13
第 5 図　花坂古窯跡出土瓦拓影図 …… 13
第 6 図　伊豆国郡郷里要図 …… 15
第 7 図　1号横穴実測図 …… 19
第 8 図　2号横穴実測図 …… 21
第 9 図　3号横穴実測図 …… 25
第 10 図　4号横穴実測図 …… 27
第 11 図　7号横穴実測図 …… 29
第 12 図　8号横穴実測図 …… 30
第 13 図　9号横穴実測図 …… 32
第 14 図　10号横穴実測図 …… 34
第 15 図　11－1号横穴実測図 …… 35
第 16 図　11－2号横穴実測図 …… 36
第 17 図　11－2号横穴蓋実測図 …… 37
第 18 図　12－1号横穴実測図 …… 38
第 19 図　12－2号横穴実測図 …… 40
第 20 図　13－1号横穴実測図 …… 41
第 21 図　13－2号横穴実測図 …… 43
第 22 図　14号横穴実測図 …… 44
第 23 図　15号横穴実測図 …… 45
第 24 図　16号横穴実測図 …… 47
第 25 図　17号横穴実測図 …… 48
第 26 図　17号ミニ横穴実測図 …… 50
第 27 図　18－1号横穴実測図 …… 52
第 28 図　18－2号横穴実測図 …… 53
第 29 図　21－1号横穴実測図 …… 55
第 30 図　21－2号横穴実測図 …… 56
第 31 図　23－1号横穴実測図 …… 58
第 32 図　23－2号横穴実測図 …… 59
第 33 図　24号横穴実測図 …… 61
第 34 図　24号横穴出土　Ⅱ－1号石櫃拓影 …… 62
第 35 図　24号横穴　Ⅱ－1号石櫃下礫状態実測図 …… 63
第 36 図　25－1号横穴実測図 …… 64
第 37 図　25－2号横穴実測図 …… 66
第 38 図　26号横穴実測図 …… 67
第 39 図　26号横穴墓前域　Ⅱ－2号石櫃下造り出し実測図 …… 68
第 40 図　27号横穴実測図 …… 69
第 41 図　27号横穴開口部礫出土状態実測図 …… 70
第 42 図　27号横穴出土　Ⅲ－2号石櫃拓影 …… 70

第 43 図　28号横穴実測図 …… 71
第 44 図　29号横穴実測図 …… 73
第 45 図　30号横穴実測図 …… 75
第 46 図　32号横穴実測図 …… 77
第 47 図　33号横穴実測図 …… 80
第 48 図　34号横穴実測図 …… 81
第 49 図　34号横穴封鎖部礫出土状態実測図 …… 82
第 50 図　35号横穴実測図 …… 84
第 51 図　36号横穴実測図 …… 85
第 52 図　36号ミニ横穴実測図 …… 86
第 53 図　37号横穴実測図 …… 87
第 54 図　38号横穴実測図 …… 88
第 55 図　38号横穴床面小孔実測図 …… 89
第 56 図　39号横穴実測図 …… 90
第 57 図　40号横穴実測図 …… 92
第 58 図　A群横穴にみる階段と通路 …… 95
第 59 図　階段と通路集成図 …… 100
第 60 図　横穴タイプ分類図 …… 156
第 61 図　群　構　成　図 …… 163
第 62 図　統一新羅時代の石櫃 …… 168
第 63 図　石櫃集成図　① …… 170
第 64 図　石櫃集成図　② …… 171
第 65 図　石 櫃 諸 形 式 …… 172
第 66 図　栓 の 諸 形 式 …… 173
第 67 図　Ⅲ－８号石櫃とその栓 …… 174
第 68 図　石 櫃 出 土 状 態 …… 176
第 69 図　床面小孔の集成 …… 177
第 70 図　大師山横穴群１号横穴内床面小孔実測図 …… 178
第 71 図　ミ ニ 横 穴 集 成 …… 179
第 72 図　現在の蔵骨器の各種 …… 181
第 73 図　32号・８・14号横穴ノミ痕模式図 …… 191
第 74 図　石屋の道具　① …… 194
第 75 図　石屋の道具　② …… 195
第 76 図　石切り　（『人倫訓蒙図彙』より） …… 196
第 77 図　丁場　（『日本山海名産図会』より） …… 196
第 78 図　各横穴ノミ痕実測図 …… 197
第 79 図　土器タイプ分類図 …… 204
第 80 図　墓前域出土土器集成図 …… 208
第 81 図　静浦層群の層序模式断面図 …… 214
第 82 図　静浦山地地質図・地質断面図 …… 216
第 83 図　北伊豆平野の地形図 …… 217
第 84 図　北伊豆平野（沖積層）の模式断面図 …… 217
第 85 図　北伊豆平野中央部（第83図地点下）のボーリングコア柱状断面図ならびに珪藻化石群集 …… 219
第 86 図　北江間後背湿地型地形にみるボーリングコアの柱状断面図（長岡北小学校） …… 219
第 87 図　北江間の後背湿地型地形図 …… 220
第 88 図　大北A群（１～17号）横穴にみる断裂分布図 …… 221

第 89 図　大北Ｃ群（21～26号）横穴にみる断裂分布図 …… 222
第 90 図　大北Ｂ群（33～39号）横穴にみる断裂分布図 …… 223
第 91 図　（割れ目）の面の示す走向・傾斜模式図 …… 225
第 92 図　玄室床面にみる主要断裂の走向・傾斜投影図（Ａ群１～17号）…… 225
第 93 図　玄室床面にみる主要断裂の走向・傾斜投影図（Ｃ群21～26号）…… 225
第 94 図　玄室床面にみる主要断裂の走向・傾斜投影図（Ｂ群31～39号）…… 225
第 95 図　断裂（割れ目）の面の広がる方向と角度 …… 226
第 96 図　横穴の玄室床面にみる主要断裂の分布模式図 …… 226
第 97 図　割山横穴群横穴配置図　1 …… 249
第 98 図　割山横穴群６号横穴実測図　2 …… 250
第 99 図　割山横穴群６号横穴出土土器実測図　3 …… 251
第 100 図　大北東横穴群現況平面図 …… 254
第 101 図　８号横穴墓前域出土石櫃実測図 …… 255

# 挿　表　目　次

第 1 表　第Ⅰ次調査経過表 …… 3
第 2 表　第Ⅱ次調査経過表 …… 4
第 3 表　第Ⅲ次調査経過表 …… 5
第 4 表　第Ⅳ次調査経過表 …… 6
第 5 表　横　穴　一　覧 …… 93・94
第 6 表　横穴別出土土器一覧 …… 106
第 7 表　土 器 観 察 表 …… 107～133
第 8 表　鉄　器　一　覧 …… 135
第 9 表　石　櫃　一　覧 …… 145
第 10 表　玄室形態分類表 …… 150
第 11 表　横断面形態分類表 …… 150
第 12 表　横断面形相互対応表 …… 151
第 13 表　平面形・横断面形対応表 …… 151
第 14 表　玄室平面形・墓前域対応表 …… 152
第 15 表　横穴形態分類表 …… 157
第 16 表　横穴形態別編年表 …… 159
第 17 表　横穴総括表 …… 160
第 18 表　Ａ支群の構成 …… 161
第 19 表　Ｂ支群の構成 …… 162
第 20 表　Ｃ支群の構成 …… 164
第 21 表　石櫃の形式分類 …… 169
第 22 表　石櫃の形式と横穴 …… 173
第 23 表　石櫃とその出土状態 …… 175
第 24 表　石櫃における小孔 …… 181
第 25 表　現在の蔵骨器計測表 …… 181
第 26 表　各横穴ノミ痕観察表 …… 190
第 27 表　ノミ痕頻度表 …… 192

第 28 表　横穴の加工の状態 ……198
第 29 表　石櫃ノミ痕観察表 ……200
第 30 表　須恵器・土師器の共伴 ……206
第 31 表　土器編年表 ……209
第 32 表　地質総括表 ……214
第 33 表　狩野川下流沖積層Ｃから産出した貝化石 ……218
第 34 表　大北Ａ群の玄室にみる断裂面の走向・傾斜 ……224
第 35 表　大北Ｃ群の玄室にみる断裂面の走向・傾斜 ……224
第 36 表　大北Ｂ群の玄室にみる断裂面の走向・傾斜 ……224
第 37 表　北伊豆横穴地名表 ……240・241
第 38 表　割山横穴群横穴一覧 ……251
第 39 表　大北東横穴群横穴一覧 ……255

# 図　版　目　次


巻頭図版Ⅰ　大北横穴群遠景
巻頭図版Ⅱ　「若舎人」銘石櫃（24号横穴出土）

図版　1　横穴分布図
図版　2　横穴配置図
図版　3　A群横穴配置図
図版　4　B群横穴配置図
図版　5　C群横穴配置図
図版　6　周辺環境　航空写真 遠景
図版　7　A群横穴　全景、調査前景
図版　8　1号横穴　横穴正面、開口部　奥壁、墓前域
図版　9　2号横穴1　横穴正面、墓前域（排水溝）、奥壁
図版　10　2号横穴2　石棺正面、石棺部分
図版　11　3号横穴1　横穴正面
図版　12　3号横穴2　奥壁、開口部（玄室から）、土器出土状態
図版　13　4号横穴　横穴正面、墓前域、封鎖施設、奥壁、封鎖施設（玄室から）
図版　14　5・6号横穴　5号横穴正面、奥壁、Ⅰ－3号石櫃出土状態、6号横穴正面
図版　15　7号横穴　横穴正面、奥壁、墓前域、封鎖施設
図版　16　8号横穴　横穴正面、墓前域、奥壁、Ⅰ－1号石櫃出土状態
図版　17　9号横穴　横穴正面、墓前域、奥壁、開口部右台状遺構
図版　18　10号横穴　横穴正面、奥壁、土器出土状態、排水溝
図版　19　11－1号横穴　横穴全景（含11－2号横穴）、横穴正面、天井部平坦面
図版　20　11－2号横穴　横穴正面、封鎖状態（復元）、墓前域
図版　21　12－1号横穴　横穴正面、排水溝、奥壁、墓前域
図版　22　12－2号横穴　横穴正面、墓前域
図版　23　13－1号横穴　横穴正面、墓前域、奥壁
図版　24　13－2号横穴　横穴正面、墓前域、墓前域区画ノミ痕
図版　25　14号横穴　横穴正面、墓前域、Ⅰ－5号石櫃出土状態
図版　26　15号横穴　横穴正面、奥壁、土器出土状態
図版　27　16号横穴　横穴正面、天井部平坦面、墓前域
図版　28　17号横穴1　横穴正面、墓前域、奥壁、Ⅰ－6・Ⅰ－7・Ⅰ－8号石櫃出土状態
図版　29　17号横穴2　ミニ横穴全景、ミニ横穴正面、ミニ横穴玄室
図版　30　18－1号横穴　横穴正面、土器出土状態、奥壁、調査前景
図版　31　C群横穴　21－1～23号横穴全景、21－1～21－2号横穴周辺
図版　32　18－2号横穴　横穴正面、墓前域、Ⅲ－13号石櫃、奥壁
図版　33　21－1号横穴　横穴正面、封鎖施設、横穴周辺（含21－2号横穴）、奥壁
図版　34　21－2号横穴　横穴正面、奥壁、土器出土状態

| | | |
|---|---|---|
| 図版 35 | 23－1号横穴 | 横穴正面、調査前景（含24号横穴）、開口部礫群 |
| 図版 36 | 23－2号横穴 | 横穴正面、玄室、土器出土状態 |
| 図版 37 | 24号横穴1 | 横穴正面、Ⅱ－1号石櫃出土状態 |
| 図版 38 | 24号横穴2 | Ⅱ－1号石櫃出土状態、玄室、排水溝、仮設横穴保護施設 |
| 図版 39 | 25－1号横穴 | 横穴正面、奥壁、開口部礫群 |
| 図版 40 | 25－2号横穴 | 横穴正面、奥壁 |
| 図版 41 | 26号横穴1 | 横穴正面、Ⅱ－2号石櫃出土状態 |
| 図版 42 | 26号横穴2 | 玄室、Ⅱ－2号石櫃、Ⅱ－2号石櫃下部施設 |
| 図版 43 | 27号横穴1 | 横穴正面、調査前景、奥壁、開口部礫群 |
| 図版 44 | 27号横穴2 | 開口部礫群、開口部礫群(玄室から)、Ⅲ－2号石櫃出土状態、Ⅲ－2号石櫃出土状態（玄室から）、Ⅲ－3号石櫃、Ⅲ－4号石櫃 |
| 図版 45 | 28号横穴 | 横穴周辺（含29・30号横穴）、横穴正面 |
| 図版 46 | 29号横穴1 | 開口部礫群Ⅲ－6号石櫃出土状態 |
| 図版 47 | 29号横穴2 | 開口部礫群（Ⅲ－6・Ⅲ－7号石櫃）、Ⅲ－5・Ⅲ－6・Ⅲ－7号石櫃、Ⅲ－5号石櫃下礫群、Ⅲ－6号石櫃 |
| 図版 48 | 30号横穴1 | 横穴正面、墓前域排水溝 |
| 図版 49 | 30号横穴2 | Ⅲ－8・Ⅲ－9号石櫃、奥壁、墓前域、右側階段、土器出土状態 |
| 図版 50 | 32号横穴1 | 横穴正面 |
| 図版 51 | 32号横穴2 | 調査前景、開口部床面段差、開口部ノミ痕、墓前域礫群 |
| 図版 52 | B群横穴 | 33～39号横穴全景、33～36号横穴調査前景 |
| 図版 53 | 33号横穴 | 横穴正面、墓前域、奥壁 |
| 図版 54 | 34号横穴1 | 横穴正面、墓前域、封鎖施設 |
| 図版 55 | 34号横穴2 | 奥壁、墓前域、Ⅲ－10号石櫃出土状態、土器出土状態 |
| 図版 56 | 35号横穴 | 横穴正面、奥壁、墓前域、土器出土状態 |
| 図版 57 | 36号横穴1 | 横穴正面、墓前域、玄室 |
| 図版 58 | 36号横穴2 | ミニ横穴正面、Ⅲ－11号石櫃、土器出土状態、Ⅲ－11号石櫃出土状態 |
| 図版 59 | 37号横穴 | 横穴正面、開口部礫群、墓前域、奥壁 |
| 図版 60 | 38号横穴1 | 横穴正面、墓前域、開口部礫群 |
| 図版 61 | 38号横穴2 | 奥壁、床面の小孔、床面小孔の拡大 |
| 図版 62 | 39号横穴 | 横穴正面、墓前域、鉄器出土状態 |
| 図版 63 | 40号横穴 | 横穴正面、調査前景、土器出土状態 |
| 図版 64 | 土器 1 | （1・3・4・8号横穴出土） |
| 図版 65 | 土器 2 | （7・9・10号横穴出土） |
| 図版 66 | 土器 3 | (12－1・12－2・13－1号横穴出土) |
| 図版 67 | 土器 4 | (13－1・14・15号横穴出土) |
| 図版 68 | 土器 5 | (16・17号横穴出土) |
| 図版 69 | 土器 6 | (17・18－2横穴出土) |
| 図版 70 | 土器 7 | (18－1・21－2・23－1・24号横穴出土) |
| 図版 71 | 土器 8 | (23－2・25－1・26・27・29・30・32号横穴出土) |
| 図版 72 | 土器 9 | (33・34・35・36号横穴出土) |
| 図版 73 | 土器 10 | (36・37・38・39・40号横穴出土・表採) |
| 図版 74 | 鉄器 | |
| 図版 75 | Ⅰ－1号石櫃 | （8号横穴出土）・栓 |

図 版　76　　Ⅰ－2号石櫃　（9号横穴出土）
図 版　77　　Ⅰ－3号石櫃
図 版　78　　Ⅰ－4号石櫃　（12－1号横穴出土）
図 版　79　　Ⅰ－5号石櫃　（14号横穴出土）
図 版　80　　Ⅰ－6号石櫃　（17号横穴出土）・栓
図 版　81　　Ⅰ－7号石櫃　（17中横穴出土）
図 版　82　　Ⅰ－8号石櫃　（17号横穴出土）
図 版　83　　Ⅱ－1号石櫃　（24号横穴出土）
図 版　84　　Ⅱ－1号石櫃　銘「若舎人」
図 版　85　　Ⅱ－2号石櫃　（26号横穴出土）
図 版　86　　Ⅲ－1号石櫃
図 版　87　　Ⅲ－2号石櫃　（27号横穴出土）・栓
図 版　88　　Ⅲ－4号石櫃　（27号横穴出土）・栓
図 版　89　　Ⅲ－5号石櫃　（29号横穴出土）蓋
図 版　90　　Ⅲ－5号石櫃　（29号横穴出土）身
図 版　91　　Ⅲ－5号石櫃　石櫃内火葬骨出土状態
図 版　92　　Ⅲ－6号石櫃　（29号横穴出土）
図 版　93　　Ⅲ－7号石櫃　（29号横穴出土）
図 版　94　　Ⅲ－8号石櫃　（30号横穴出土）・栓
図 版　95　　Ⅲ－9号石櫃　（30号横穴出土）・栓
図 版　96　　Ⅲ－10号石櫃　（34号横穴出土）
図 版　97　　Ⅲ－11号石櫃　（36号横穴出土）
図 版　98　　Ⅲ－12号石櫃
図 版　99　　Ⅲ－13号石櫃　（18－2号横穴出土）、方孔部拡大
図 版 100　　石櫃内火葬骨
図 版 101　　横穴内ノミ痕状態
図 版 102　　割山横穴群　6号横穴
図 版 103　　割山横穴群　6号横穴出土石櫃1
図 版 104　　割山横穴群　6号横穴出土石櫃2
図 版 105　　割山横穴群　6号横穴出土石櫃3
図 版 106　　大北東横穴群
図 版 107　　周辺横穴群

# 大北横穴群

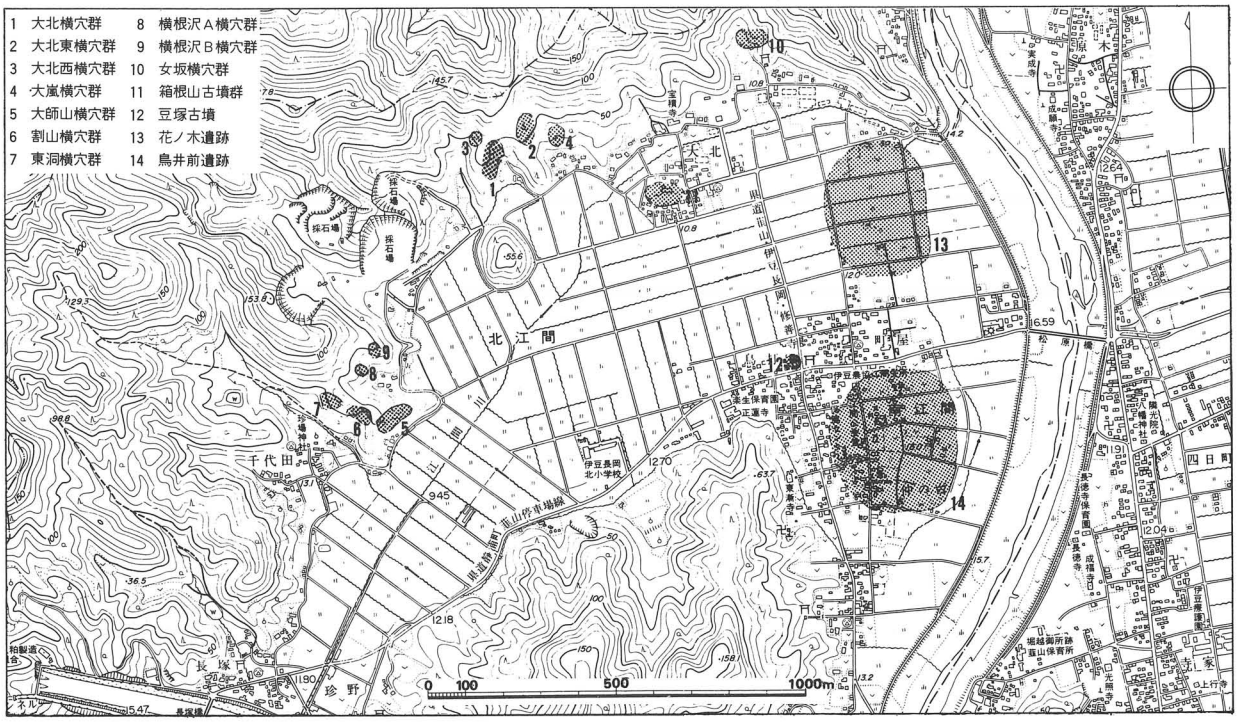
## 第Ⅰ章　調査の経過

### 第1節　調査の目的と調査に至る経過

近年、北伊豆地域の横穴調査は、その輪を広げ、かつ保存対策が着々と進められている。函南町柏谷横穴群の調査（昭和48年3月、49年7月）と国史跡指定（昭和51年2月）、伊豆長岡町大師山横穴群の調査（昭49年11月）[註1]と国史跡指定（昭51年12月）、沼津市江ノ浦横穴群の分布調査[註2]と県史跡指定[註3]である。

これらの横穴群は、いずれもかなり以前より一般に知られ、特に前二者は明治年間より中央の学界において注目されていたものであった。しかし、今回調査対象とした大北横穴群は、幕末に既に知られていたらしいが、注目されはじめたのは[註4]比較的新しく、昭和36年刊行の『伊豆長岡町の史跡及び名勝』（伊豆長岡町教育委員会刊）[註5]に30数基の存在が報じられ、「近き将来総合的な発掘調査がなされなければならない古墳群である。」と指摘されているのが近年文献で取りあげられた最初のものであろう。昭和47年の県内全域の分布調査の際には「藪で確認困難な状態である。9基確認……」と報告されている。

昭和49年11月、斎藤忠・長田実両先生を依嘱して、静岡県教育委員会及び伊豆長岡町教育委員会共催による、大師山横穴群の調査が実施された。これを契機として、周辺の同時代の様相を把握することが大きな課題となり、まず、その分布状況の実態把握[註6]が地元に委ねられた。町文化財専門委員小野弘・久保田健治氏等は精力的に北江間の分布調査を行い、割山（珍場東洞）横穴群、大北東横穴群が次々と




第1図　位置図

発見されていった。

大北地域において[註7]は、昭和51年1月末から2月初めにかけて分布調査が行われ、さらに3月初旬から中旬にかけて、2回にわたり、町教育委員会職員をまじえて各横穴へ番号をつけての詳細分布調査が行われた。

昭和52年1月下旬、県文化財保護審議会委員、斎藤忠・長田実先生が現地を視察し、今後の取り扱いの方向について協議がもたれた。ここで、昭和52年度の国および県の補助金を申請し、横穴群の範囲確認と概要の把握の調査を実施する方針が打ち出された。

同年3月には分布地域全域の下刈りを、5月には各横穴の標柱の設置作業が進められ、町文化財指定の準備を進めた。5月19日には文化庁の小林達雄調査官の視察もうけた。

9月初旬、斎藤忠博士・長田実先生・県及び町教育委員会・地元大北区等関係者が集まっての打ち合せ会がもたれ、調査についての全体計画、53年度調査計画が検討された。この席上で、調査は3ケ年計画とすることが打ち出された。

調査は、伊豆長岡町教育委員会が調査主体となり、大北横穴群調査団を編成して行われた。調査団長斎藤忠・副団長　長田実の両氏、調査には県教育委員会文化課の山下晃・植松章八・佐藤達雄の三氏があたった。

なお、大北という名称は正式な字名ではないが、北江間の中心という意味で大正期より地元で使用されているものであり、本横穴も大北にある横穴として、大北横穴群と一般によばれてきていたものである。

## 第2節　調　査　の　方　法

調査前の地形測量は業者に委託して実施した。調査はこの地形測量の際の測点BMをそのまま使用し、横穴実測に際しては補助点を適宜設定した。

KBM1－29,973m、KBM2－35,760m、KBM3－44,622m、KBM4－29,175m

横穴の番号は分布調査の際のものをそのまま踏襲している。分布調査の際には不明確なものは、12－2号のように枝番をつけて保留しており、かなりの数にのぼっていた。その後の調査で確認できたものは、とりあえずそのまま枝番をつけて呼称することとした。しかし調査が長期にわたったため、これらの呼称が固定してしまった観があり、番号をつけ直すと資料操作に混乱をきたすので、変則的ではあるがそのまま用いることとした。

実測図は10分の1縮尺を原則とし、大型の横穴（1・2・3・32号横穴）のみ20分の1縮尺とした。また、小型横穴・ミニ横穴等は2分の1縮尺で実測した。側壁・天井部分の実測は形態上特徴あるもののみにとどめた。全体図は20分の1縮尺で作成し、階段・通路状遺構もこの中に記入した。遺物の実測は実大を原則とし大型の一部の石櫃については2分の1縮尺とした。これにより詳細なノミの観察が可能となった。

写真は大型カメラ（ビュー　5×7、4×5）、中型カメラ（6×7　1眼レフ）、小型カメラ（35mm 1眼レフ）を使用し、遺構等は主として中型カメラで撮影、小型カメラはスライド及びメモ用とした。また必要に応じて6×7判のスライドも作成している。

なお、実測図は全てマイクロフィルムに撮影し原図の保管と利用の便をはかっている。[註8]

# 第 3 節　調 査 の 経 過

調査は昭和52年から昭和55年までⅣ次にわたって実施した。以下その概要を述べる。

**第Ⅰ次調査**

昭和52年12月14日～27日、昭和53年２月10日～３月１日の２回に分けて実施した。調査対象は１号～20号横穴で、本横穴群の西側のグループでＡ群と呼んで横穴の密集している部分である。

12月14日、調査関係者は伊豆長岡町役場に集合、打合せののち器材点検、現地にて明日からの発掘の準備をする。翌15日、９時、調査に先だち、慰霊祭をとりおこない、あわせて調査の無事を祈る。調査は、１～３号横穴より着手する。上段のためほとんど開口しており、流入土がわずかに認められる程度であった。各横穴の作業の経過は別表に示す通りである。

12月17日には、８・９号横穴の調査にはいる。９号横穴右側撹乱層中より小さな穴を穿った切石が検出された。Ⅰ－２号石櫃である。これから続々と石櫃が検出され、第Ⅰ次の調査では表採も含めて８個を数える。

12月18日、１・２号の実測を完了し３号横穴実測に入る。除々に下段にと調査範囲を拡大。７・10 11－１・11－２・12－１号の調査に入る。11－２号と12号横穴との間に新たに横穴を発見12－２号横穴とする。

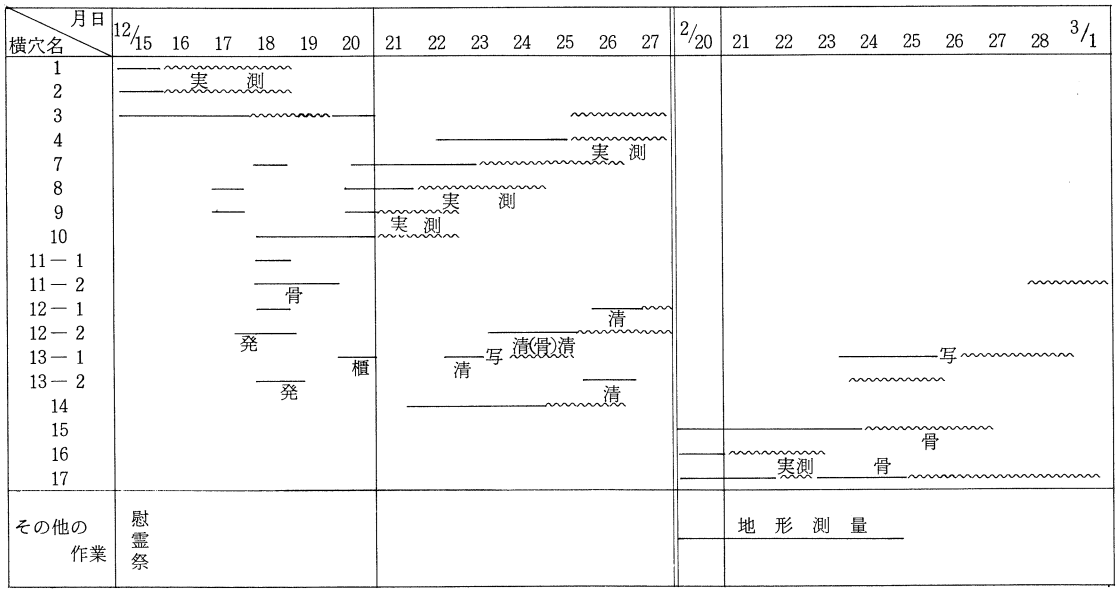
12月27日、４・12－１・12－２の各横穴の実測を完了。年内の調査を終了する。

２月20日調査を再開。今回は調査地域の地形測量を主体に進める。（縮尺 1/50等高線 50 ㎝）。また併行して、15号・16号・17号横穴にも着手。

17号横穴墓前域のブナの木を倒すと、左側袖部壁に10×10㎝前後の方形の小穴が発見された。奥行きは21㎝あまり。内部には黒褐色のやわらかな土がつまっていたが、特に遺物らしきものは認められない。超小型横穴である。11－１号、11－２号横穴とあわせて注目されるところである。

３月１日、13－１号、17号横穴の実測を最後に、今年度調査を終了。最終的には今回18基の横穴の調査を実施した。

**第１表　第Ⅰ次調査経過表（昭和52年度）**



## 第Ⅱ次調査

昭和53年７月18日から８月12日まで延25日間実施された。調査の対象は、第Ⅰ次調査区の東下方にあり第Ⅰ次調査で注目されながら手の及ばなかった18－１号横穴、横穴群のほぼ中央に位置し屋根形の造り出しのある32号横穴、東側の切り立った崖面に掘削されている21～26号横穴のグループ、である。このうち22号横穴は岩盤の崩落の危険があるため対象外とし都合10基の調査を実施した。作業の経過は表に示す通りである。

７月18日、教育委員会に集合し打ち合わせをし、器材の点検・準備をするとともに、現地では下草刈り、調査前の写真撮影を行った。19日午前９時、墓前祭を行い、実質的な調査にはいり、21－１号、21－２号、32号横穴に手をつけはじめた。21－１、21－２、32号の各横穴が清掃され姿をあらわしたところで、７月22日には文化庁阿部義平調査官の視察をうけた。

７月25日より24号横穴の調査に着手。崩落礫を取り除いた段階で石櫃のあることを確認する。流入土は約20㎝と厚く石櫃はわずかに上部を見せている状態であった。27日、流入土を除去していく作業中24号横穴内の石櫃正面に『若舎人』の文字が刻んであるのを発見、これ以後は24号の調査を中心に全体の作業が進められた。このため当初予定していた18－２号の調査は石櫃の存在を確認した段階で途中で断念せざるを得なかった。Ⅱ－１号石櫃とした24号横穴の石櫃は大型の箱形で方形の刳り込みを有しており蓋はすでに失われていた。石櫃は実測、採拓等詳細な検討を加えた上で、アクリル樹脂製ケースをかぶせて横穴内に安置し、さらに開口部には壁を傷つけない方法で鉄柵を設けて、当面の保存方法を講じた。

また８月４日小雨の中を、伊豆長岡町古奈で現に採石業を営んでおられる小川敬造・丸山幸の両氏が来跡され、直接現地の状況をみながら石屋の道具や技術についてお話をうかがうことができた。非常に興味深い内容で両氏より教示をうけた諸点を中心にして第Ⅴ章第３節でまとめている。

８月上旬には発掘作業はほぼ終了し、実測等詳細な検討の段階にはいったので、これと併行して８月７日より完掘状態の地形測を開始し、９日に終了した。８月12日には墓前で盛大な供養祭を挙行して調査を完了した。

なおこの間に、８月１日夜、大北区公民館で斉藤忠団長による講演会を開催し、『若舎人』刻銘石櫃の発見を報告した。公民館はあふれる聴衆で盛況であった。

**第２表　第Ⅱ次調査経過表（昭和53年度）**

| 横穴名＼月日 | 7/18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 8/1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 18－1 | 準備・下草刈り・調査前写真 | ―― | ―― | ―― | ―― | 発掘 | ―― | ―― | ―― | ―― | ―― | 写真 | 休み | ～～ | 実 | 雨 | 測 ～～ | | | | | | | | | |
| 18－2 | | | | | | | | | | | | | | | | | ← | ―― | ―― | 発掘 | ―― | ―― | → | | | |
| 21－1 | | ← | 発掘 | ―― | ―― | ～ 実測 ～ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 21－2 | | ← | 発掘 | ―― | ―― | | | ～ 実測 ～ | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 23－1 | | | | | | | | | | ← | 発掘 | → | | ← 写真 → | ～ | | 封鎖石 | ～～～～～～ | | ～ 実測 ～～ | | | | | | |
| 23－2 | | | | | | | | | | ← | 発掘 | → | | ← 写真 → | | | 実 測 | | ← 発掘 → | | ～～実測～～ | | | | ～～ 石櫃 実測 ～～ | |
| 24 | | | | | | | | ← | 発 | 掘 | → | ←写真→ | | | | | | | ～～実測～～ | | | | | | | |
| 25－1 | | | | | | | | | ← 発掘 | → | ～ 封鎖石 | ～～～～～ | | ～～～～～～ | | | ～～ | 墓前域実測 | ～～～～～ | | | | | | | |
| 25－2 | | | ← | 発掘（墓前域） | → | 実測 | | | | | 実 測 | | | ← 写真 → | | | ← | 実 | 測 | → | | | | | | |
| 26 | | | | | | | | | ←発掘→ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 32 | | ←清掃→ | 玄室内実測 | | 墓前域発掘 | → | | | ～～～～～～～～～～～～～～ | | | 実測 | | ～～ | | | | ← 清掃・写真 → | | | | | | | | |
| その他の作業 | | | | | | | | | | | | | | | | 土器整理 | 石屋さんに聞く | | | ←― 地形測量 ―→ | | | | | ← 全体写真 → | |

## 第Ⅲ次調査

調査に先だって、昭和54年7月12日、大北横穴群の基本的な取り扱いについての打ち合せを行い、①3年計画を4年に延長し、昭和54年度にC群及びB群の調査、55年度にB群の一部の調査及び整理・報告書刊行とすること、②調査の終了をまって、国指定史跡の申請をして保存措置を講ずること、の基本方針が決定された。

調査は、昭和54年7月23日から8月31日までにわたって延40日間実施した。

対象は、本横穴群の北限を構成する27号横穴から北のグループ（27～31号横穴）、32号横穴を中心として下段に続くグループ（18―2号・33～41号横穴）である。内31号横穴は崩壊の危険が大きいため開口部の確認にとどめ、また、40・41号横穴は最下段に位置するため、作業手順のうえからみあわせ、都合12基の調査を実施した。

7月23日、現地に集合し打合せののち、器材の点検、雑木・草・竹等の伐採、調査前の状況写真の撮影等を行う。午後1時、関係者参列して慰霊祭ののち調査にはいる。

まず、27号横穴より調査をはじめ、伐採終了とともに28～30号横穴のグループに着手。各横穴より次々と石櫃を検出。27号横穴より3、29号横穴3、30号横穴2とこのグループだけで石櫃は8を数える。

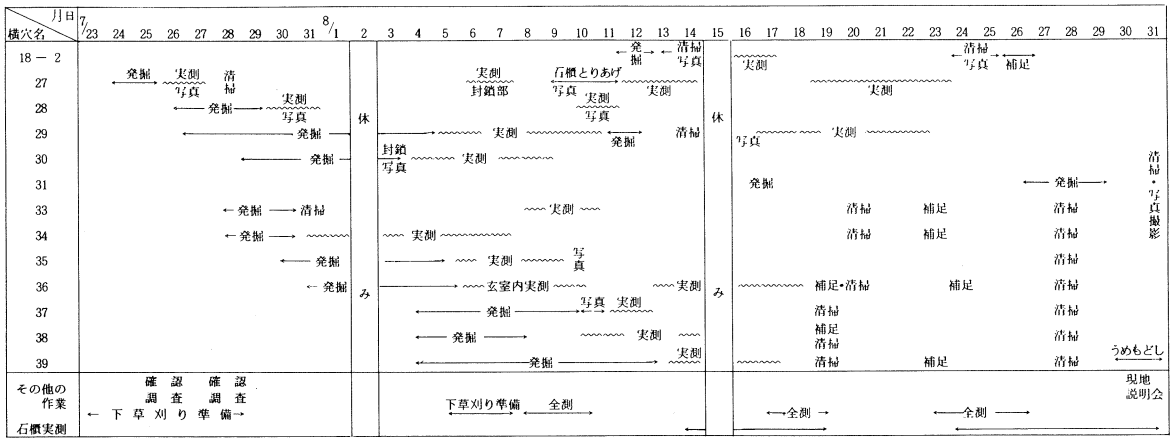
これに併行して、31号横穴より北側を中心にして所在確認調査を行う。尾根の稜線まで大きく伐採し、横穴の可能性のありそうな所をチェックして試掘したが、いずれも横穴とは認められない。以前に横穴の可能性ありとして枝番をつけて留保した、27―2・30―2・31―2号横穴等もいずれも横穴ではないことが判明した。この結果31号横穴を本横穴群の北限と判断してよいものといえる。

7月末には、33号横穴以下のB群にも着手。8月はじめには、今回の対象区域全域に作業が広げられた。石櫃は総数13（内2は表採）を数える。

8月14日、未開封であったⅢ―4号・Ⅲ―5号・Ⅲ―8号石櫃を、町長・教育長・調査団長・副団長以下関係者及び現場に来られた東京大学文学部考古学研究室上野佳也助教授ほかの方々立会いのもとに蓋をあける。いずれも人骨が遺存、特にⅢ―5号石櫃の人骨の保存状況は非常に良好である。さっそく実測するとともに、8月18日には、東京大学理学部人類学教室・埴原和郎教授に現地においでいただき、鑑定・指導を受ける。

8月の後半には各横穴の実測にはいり、石櫃の実測も併行して進める。8月27日までに各横穴の実測をほぼ終了、8月31日、盛大に慰霊祭を行うとともに、斎藤団長による現地説明会を行い、現地調査を終了した。本説明会は、Ⅰ～Ⅲ次調査の〝まとめ〟として、とくに計画したもので、大北区をはじめ地元の方々多数が参加された。この席で、町教育委員会は、大北区及び地主伊奈昌孝氏に感謝状を贈呈した。

**第3表　第Ⅲ次調査経過表（昭和54年度）**



## 第Ⅳ次調査

昭和55年７月15日～８月８日（延24日間）実施した。調査の目的は、本横穴群最下段の確認と、これまでの調査での問題点の検討と補足である。

７月15日、現地に集合し今までの実測図等を検討、補足作業をはじめる。検討すべき問題点として残っていた最大のものは、Ａ群における階段と通路の表現である。第Ⅰ次調査では50分の１縮尺で地形図を作成したため、これらの詳細について表現することができなかった。そこで、これらの部分については20分の１縮尺図を作成し、階段・通路の検討と認定の作業を行った。

この間、小野・高橋は地質関係の調査を行った。凝灰岩の層理・断裂の走向・傾斜を測定し、横穴の配置との関連、及び横穴が掘鑿されている江ノ浦凝灰岩の分布と横穴群との関係等の問題について調査した。

７月21日、慰霊祭ののちに40号・41号の調査にはいる。横穴をおおっていた枯葉を取り除き崩落土を除去する。その結果、41号としたものは横穴ではないことが判明、また40号も墓前域を全面破壊されていることがわかった。玄室内には多量の礫が投げ込まれたような状態で入りこんでおり、残存状況は悪いかと思われたが、これを取り除くと、10㎝程度の流入土があり、須恵器坏蓋・身、長頸坩等が検出された。これらの処理に２日を要し、７月24日40号横穴調査終了。これより下段については凝灰岩の露頭はなく、傾斜もゆるやかとなり、ボーリングステッキによる確認調査においてもそれらしきものは認められず、本40号横穴が最下段のものと考えられる。

７月28日４号横穴の調査にはいる。第Ⅰ次調査で封鎖石部分の調査を未了として残していたところである。封鎖石を除去し、玄室内を清掃、実測図を作成した。

発掘作業がほぼ終了したので、７月30日供養祭を行い、Ⅳ次にわたった発掘調査を終了した。補足作業はその後も継続し、８月８日に全ての作業を終了した。

また、調査の最後にあたって、今まで木杭であった、Ｐ３、Ｐ５、ＳＢ１、ＮＢ１の４本のポイントをコンクリートの永久杭に打ちかえた。

周辺横穴群の踏査は、長田副団長と小野を中心として９～12月の間、断続的に実施した。またこの間、各調査員も必要に応じて踏査を実施している。この踏査の中で、横根沢Ａ、竹の花、鏡池等の横穴群を新発見し、総計46ケ所の横穴群を確認、北伊豆の横穴群の概要を把握し得たものと考えられる。

**第４表　第Ⅳ次調査経過表（昭和55年度）**

| 横穴名＼月日 | 7/15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 8/1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 40号<br>4号<br>補足 | 写 | | 1号 | 3号 | | | ←慰霊祭 | 発 | 掘 | → | 雨<br>現地作業休み | | | | 供養祭 | | | 3号 | 33号<br>34号<br>38号 | 休み | 写 | 2号 | 1号 | 7号 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | 39号 | | | | | | | 18-1号 | 13-1号 | 15号 | |
| 測量 | ←→ A群 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 踏査 | ←→ 大北東 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ←→ 大北西 | |

遺物整理は第Ⅱ次調査よりはじめ各調査に併行して水洗・注記を完了。現地調査を終了後は静岡に持ち帰り、接合・復元・実測を行った。石櫃については持ち運び困難なⅡ－1、Ⅲ－2、Ⅲ－4、Ⅲ－5、Ⅲ－10号石櫃等については現地で実測、その他小型のものについては持ち帰り実測・写真撮影を実施した。

また、関連調査として昭和54年12月10日～12月22日、割山（大師山西）横穴群の調査が実施されている。石櫃をもっている横穴があるということで、以前から関心をひいていた横穴群である。伊豆長岡町教育委員会主催で、横穴群の全体測量と第6号横穴の発掘調査を実施した。（付載1参照）

大北東横穴群については、第Ⅳ次調査終了後の昭和55年9月、雑木を伐採し、業者に依託して測量を行い、同年12月周辺横穴群踏査の作業の中で各横穴を略測し測量図を補正して完成させた。この横穴群も石櫃をもっており、また、非常に小型の横穴を含んでいる。（付載2参照）

註　1　静岡県教育委員会・函南町教育委員会の共催で、昭和48年測量、昭和49年4基の発掘及び清掃実測が実施された。それぞれ報告書が刊行されている。山内昭二『柏谷百穴測量調査報告』静岡県教委・函南町教委・昭和48年、山内昭二他『伊豆柏谷百穴』静岡県教委・函南町教委　昭和50年

2　6基の発掘・清掃実測を実施した。斎藤忠・平野吾郎ほか『大師山横穴群』伊豆長岡町教育委員会　昭和51年

3　沼津市教育委員会が実施し、4群84基の横穴と3基の円墳が確認された。沼津市歴史民俗資料館『江ノ浦横穴群・古墳群測量調査報告書』沼津市教育委員会　昭和50年

4　大野延太郎（雲外）「伊豆国横穴を観る」『東京人類学会雑誌』200号　明治35年

5　『伊豆国君澤郡北江間村地誌御調書上帳』嘉永2年（1849）6月に村内の岩窟が挙げられており、大北横穴群とおもわれるものは31を数え上げている。相原隆三氏の教示による。

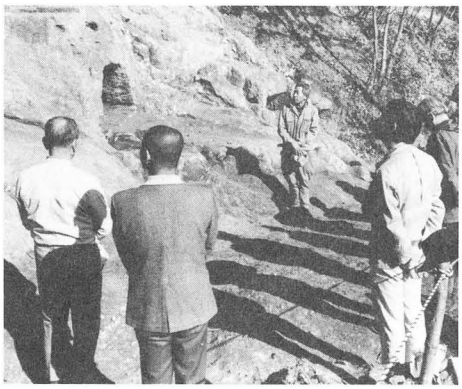
6　この調査中、周辺遺跡踏査の一貫として、斎藤忠団長は、大北横穴群を訪れている。

7　近年は里に近い山林でも下刈り等の手入れをしない所が多く、笹や蔓の密生により、横穴の分布調査は特に困難をきわめる。これらの悪条件の中でこの基礎作業に従事された町文化財保護審議会委員ほかの町文化財関係者に深く感謝したい。

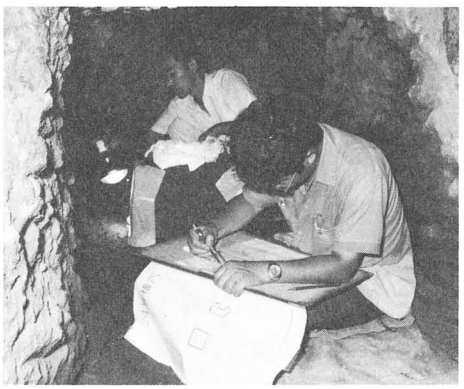
8　マイクロフィルムはアパチュアカードを使用、各図面ごとに一葉とし、他の遺跡の資料とともに県教育委員会文化課で統一保管している。またこれを利用して、原図の½縮尺のコピーを作成し通常の利用に供している。

第Ⅰ次調査
現地説明会

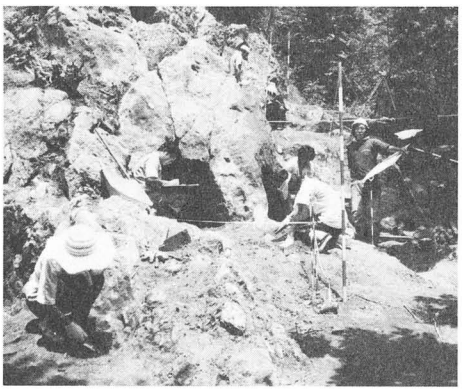
第Ⅱ次調査
墓　前　祭



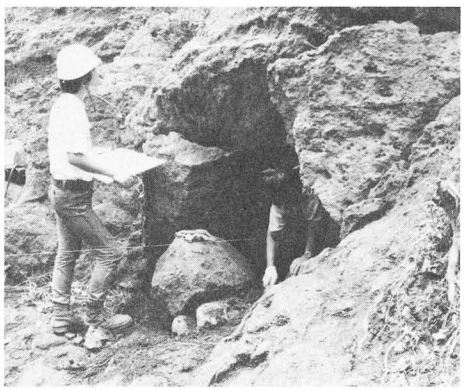
第Ⅰ次調査
現地説明会



第Ⅱ次調査
24号横穴石櫃実測



第Ⅱ次調査
実　　測



第Ⅲ次調査
27号横穴発掘

第Ⅱ次調査
文化庁阿部技官視察

第Ⅲ次調査
埴原博士人骨調査

# 第 II 章　環　　境

## 第 1 節　自然環境

### 1　大北横穴群をとりまく地理的環境

大北横穴群は、北江間の後背湿地型地形を眼下に、鷲頭山塊支脈の南斜面に構築されている。

沼津の南、北伊豆の基部には、西に駿河湾を臨み、東に狩野川の流れを擁し、狩野川の沖積平野に埋没し、沖積面と入り組んだ境界をみせる急峻な山地よりなる。この山地は、沼津市の香貫山 178 m から南に、徳倉山 156 m、鷲頭山 392 m を主峯とし大平山 356 m・大嵐山 191 m と東へ延びる鷲頭山塊、南の伊豆長岡地域の花坂の大堤山 273 m の山塊、葛城山 452 m の山塊を経て、達磨山へと連なっている。そのうち徳倉山から大堤山の地域をこの報告書では一応静浦山地と呼称する。静浦山地は新第三系中新統の〝静浦層群〟、沼津地質図幅にみる江ノ浦凝灰岩層が山麓に、中復以上には、これを貫く鮮新統の火山岩類が山頂、尾根に突出し[註1]、深く浸食を受けて急峻な山容をみせている。

静浦山地は、沼津市の香貫山 178 m から南に、徳倉山 156 m、鷲頭山 392 m を主峯とし大平山 356 m・大嵐山 191 m と東へ延びる鷲頭山塊、南の伊豆長岡地域の花坂の大堤山 273 m の山塊、葛城山 452 m の山塊を経て、達磨山へと連なっている。

静浦山地から東へ延びる数本の山脚のつくる、東に開いた谷は、沖積層に埋没され、北上する狩野川の自然堤防にせきとめられ、徳倉・大平・北江間の後背湿地型地形をみせている。中でも、北江間の後背湿地型地形は、東西に細長くのび、海へは、山道を 1 km、海抜60 m 程の峠を越せば出られるほど奥深い。この北江間の後背湿地型地形を南に、鷲頭山―大平山―大嵐山と静浦山地にみる大きな東西性の尾根が、比較的急な南斜面をみせ、東へのびるのをみる。中復以上には安山岩及び同火山角礫岩がみられ、山麓には凝灰岩層をみる。大北横穴群は、海抜15～45 m の、この凝灰岩層に構築されている。

### 2　大北横穴群周辺の地質

北伊豆の横穴群が構築されている岩類の多くは、静浦層群を構成する第三系中新統の凝灰岩類と、箱根火山西麓に広く分布する、流出年代 49,000 ± 700 年 B．P．の箱根新期軽石流である。

凝灰岩類に構築された横穴は、大北横穴群、大師山横穴群をはじめ、沼津から大仁の宗光寺守木におよぶ広い地域に多数知られている。これら横穴の基盤をなす凝灰岩は、沼津地質図幅では江ノ浦凝灰岩層と呼ばれ、本文では静浦層群の凝灰岩層に相当する。凝灰岩の岩相は多様であり、静浦山地の海岸沿いには、斜交葉理ををみる江ノ浦白色凝灰岩層が露出し、静浦山地の東麓には、これと異質な暗灰色で、安山岩質角礫と淡黄灰色の凝灰岩片が同質細粒物質で膠結された大井凝灰角礫岩層や、緑色をおび雑色性の日守凝灰岩層をみる。また南の伊豆長岡から守木にかけては、長岡凝灰岩を主体とする緑色凝灰岩層をみる。

これら凝灰岩層には、これを貫く火山岩類の貫入に伴う展張応力や、別の断層運動により生じた、規則的に広がる断裂（割れ目）をみる。この断裂は、横穴の構築に少なからず影響を与えているようにおもわれる。

もう 1 つの、横穴の構築基盤、箱根新期軽石流は上部・下部両軽石流に分けられる。3 ～18 cm の新鮮で溌泡のよい灰白色軽石と安山岩片よりなる下部軽石流には柏谷の百穴の例をみる。上部軽石流は、狩野川流域では段丘堆石物を構成するのをみる。北江間の後背湿地型地形の最奥部、放水路沿いや長岡温

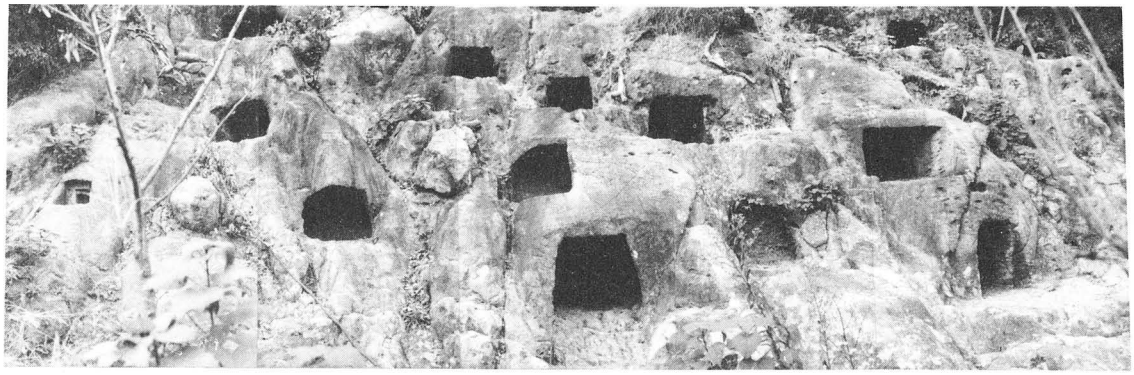
泉の台地に、この軽石流をみるが、横穴の構築をみない。

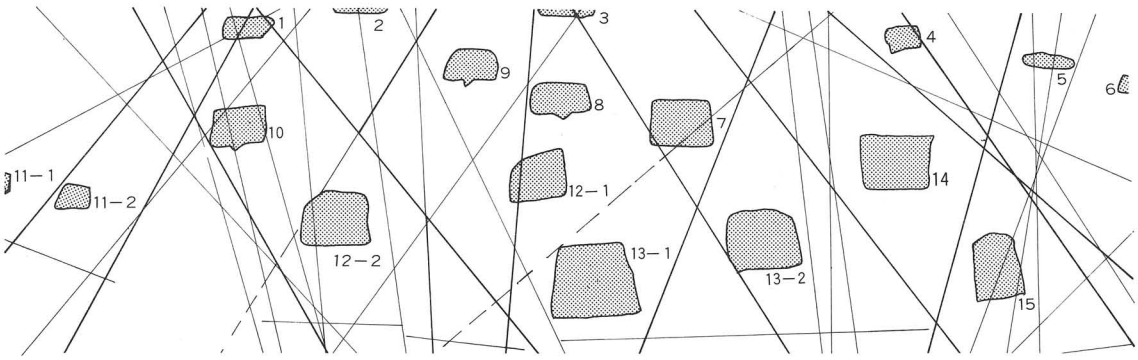
### 3　大北横穴群の構築基盤にみられる地質学的特徴

大北横穴群の構築された凝灰岩には、はっきりした層理の発達をみないが、粒径1㎝前後の緑色、雑色性凝灰岩岩片や安山岩岩片からなる、10～20㎝の厚さの粗粒凝灰岩層に注目すると、わずかに、東へ、右下がりに、しかも北側へ傾くのをみる。つまり、基盤の凝灰岩の走向・傾斜はN60°～40°W、15°NEである。地層の走向・傾斜と横穴の配列との関係は不明である。

大北横穴群の構築をみる凝灰岩は、江ノ浦白色凝灰岩層に相当し、一見塊状均質にみえるが、岩相は部分によってかなり変化に富む。混入する相当大きな安山岩片も、一般には変朽の程度が進んでおり、周囲との区別がつきにくく、硬さも同じで、したがって、横穴の占地構築にあたっては大師山横穴群の場合と異なり層準を特に選択したという形跡はみられない。

大北の凝灰岩層には多くの断裂（割れ目）が走るのをみる。南江間の大男山の東麓を北上し、大北と日守岩崎との間をぬけるとおもわれる南北性の断層は、これと平行し、雁行する多くの小断層を伴う。さらに、鷲頭山塊上部を構成する安山岩類、岩株の貫入に伴う展張応力により、大小様々な断裂（割れ目）が発達するのをみる。第2図は、本横穴群の中、西の端にみられるA群の横穴群を南から撮ったもので、凝灰岩にみられる断裂（割れ目）と横穴の配列分布との関係がよく表われている。横穴の占地構築されている斜面は35°～45°と急斜面で、表土が薄いことからしても、基盤の岩石が露出していたと考えられる。断裂（割れ目）の面の広がる方向は、N50°～70°W、これと交叉するN10°～30°Eの2方向に卓越する傾向をみせている。また断裂（割れ目）が集中、交叉する部分は侵食が進み、溝をなしており、深い溝と溝の間の尾根は、〝馬の背〟状に露岩が突出するのをみる。〝馬の背〟状に突出する露岩の部分は、断裂が少なく、岩盤が塊状をなしている。大北の横穴は、この部分に、横穴の主軸方向が破砕の著しい溝の部分にかかることを避けて、構築を進めている。しかも、山腹斜面の最大傾斜方向に向って掘り進み、墓前域を構築するための排石量を少なくする結果となっている。大北横穴群の配列は、極めて密集複雑な配列をしている点に特色がある。北伊豆の横穴群は一般に横の配列で1段ないし2～3段のものが多いが、本群ではこうした配列が凝灰岩の層理、断裂の走向・傾斜によるものとはいえない。






**第2図　大北横穴群・A群にみられる横穴の配列と断裂（割れ目）との関係模式図**

## 第 2 節　歴史的環境

### 1　周辺の遺跡と〝北江間横穴群〟

周辺の遺跡からみることにするが、横穴群については〝第Ⅴ章第6節北伊豆の横穴群について〟で詳細に報告されるので、ここでは重複を避けつつ、やや視点をかえて検討してみたい。

周辺の遺跡のうち、本横穴群成立の歴史的背景となり得るものとして、まず、弥生〜古墳時代遺跡、なかでもいわゆる集落遺跡がある。こうした遺跡として、釜石場（南江間）・町屋（南江間）・鳥井前（南江間）・花の木（北江間）・長塚（北江間）・珍野（北江間）の各遺跡を列挙することができる。もちろん多くは内容不明瞭といわざるを得ないが、それでも、釜石場・鳥井前・花の木・珍野遺跡については、多少の資料が明らかになっている。

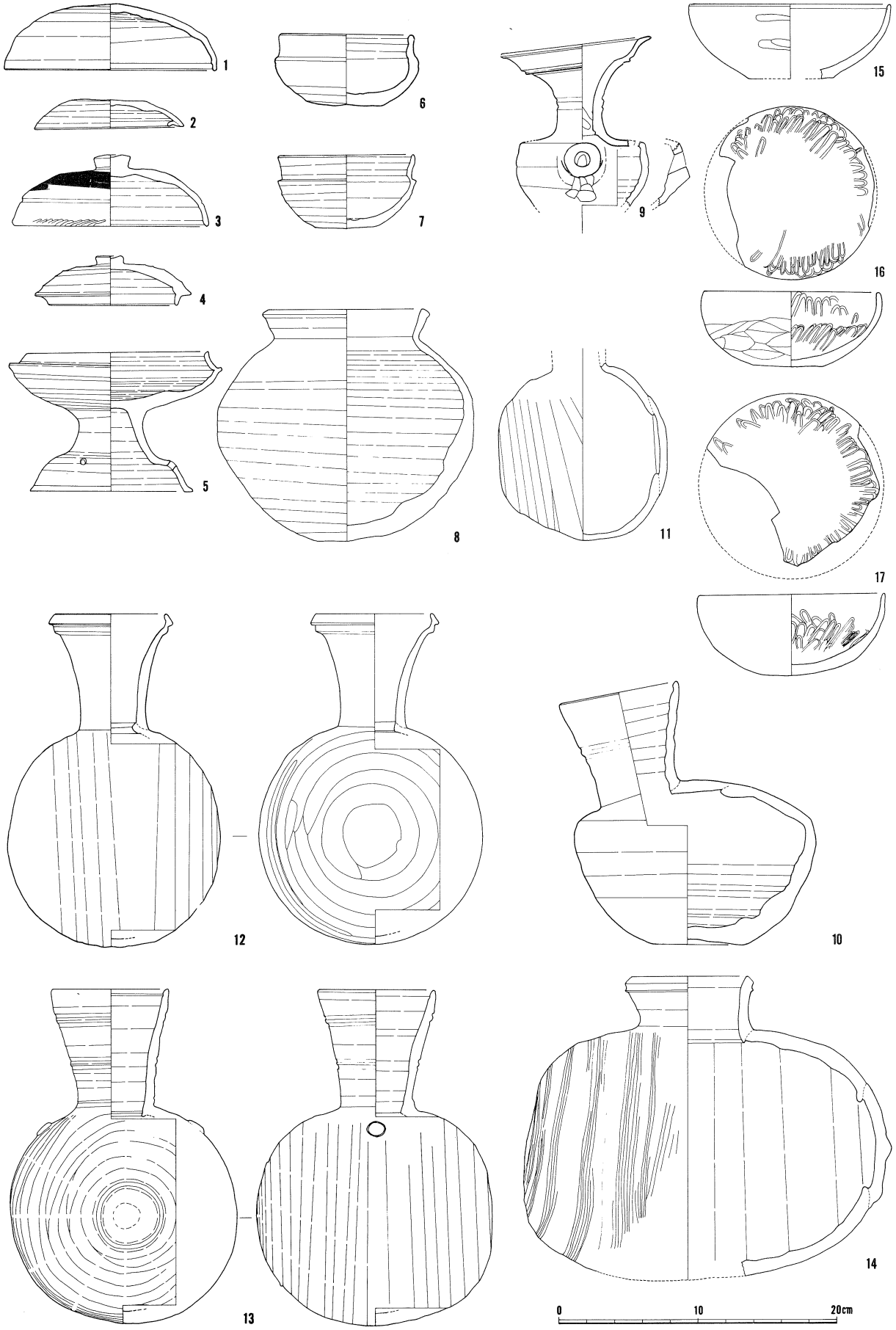
釜石場遺跡は、大男山の中腹、海抜150 m ほどの通称「馬の背場」と呼ばれる平坦地に立地する。大北横穴群とは江間[註1]低地をはさんだ反対側ということになり、約2.5 km 前後の距離を測る。昭和32年7月に、2日間の発掘調査を実施したが、その契機は畑地開墾によるという。土師器類が出土したが、遺構等は確認できなかったとのことである。

鳥井前遺跡は、『静岡県史』第一巻において、「この地（江間村をさす）も原史時代遺跡の多いところであるが、江間尋常小学校付近から[註2]縄文式や弥生式土器が、土師器などを伴って地中から出ている。現品は同小学校に保管されている。」と指摘されて注目されるが、その中心部が、昭和52年に約150 ㎡ほど緊急発掘調査された。調査は加藤学園考古学研究所の小野真一氏が担当して、現在整理報告準備中であるが、住居跡8[註3]軒が発見され、その時期は4〜9世紀であったというから、古墳時代の当初から平安時代まで及ぶということになる。また付近には弥生中期・後期の土器出土地点もあるとのことである。大北横穴群から東南約1.5 km ほどの距離を測るが、それは狩野川の自然堤防上で、花の木遺跡の南方ということになる。

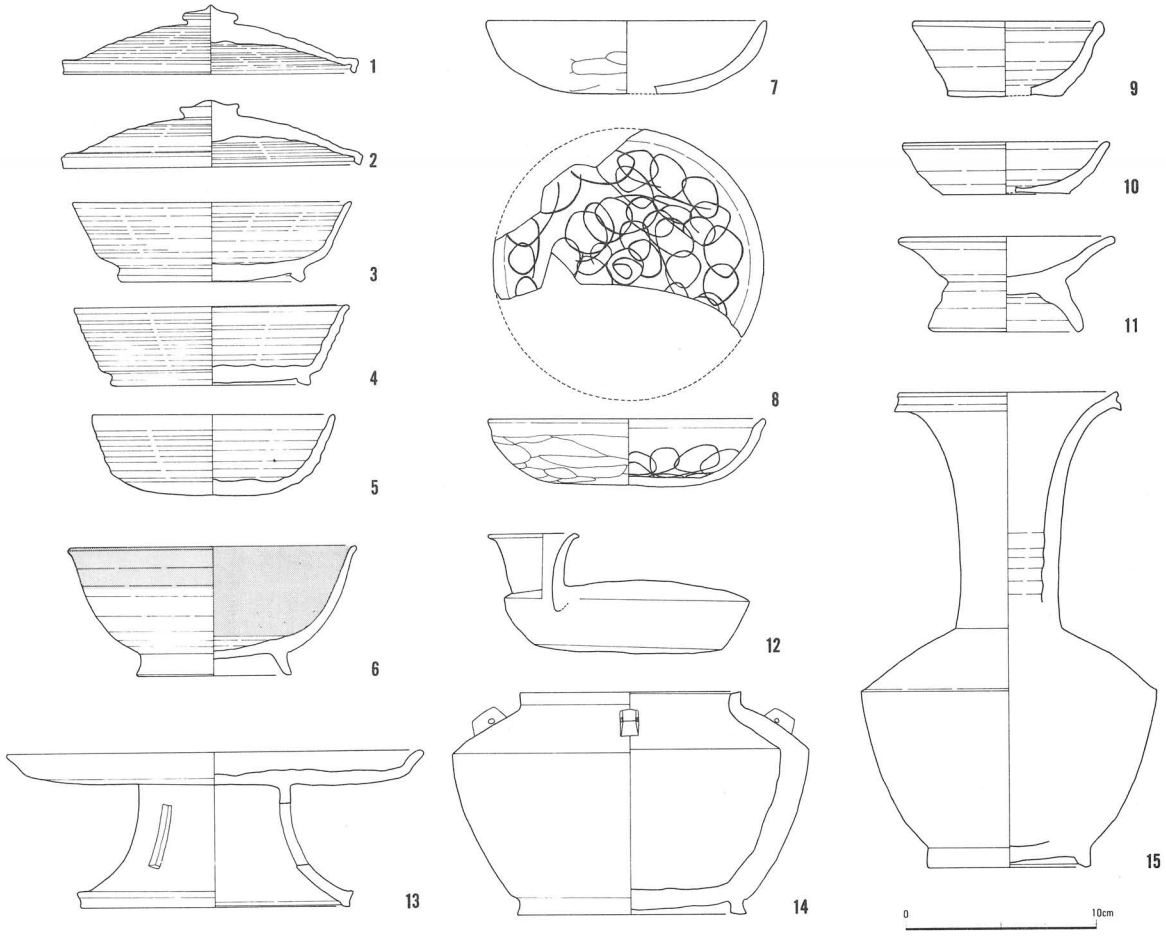
花の木遺跡は、狩野川の左岸、江間平野の北東隅で、大嵐山麓に接した大北集落の東側にあたる。大北横穴群から[註4]は、直線で約1 km ほど東行したところということになる。ここが耕地整理をうけることになって、遺跡が発見され、昭和29年3月、4日間にわたる発掘調査が実施された。これによって、折り重なった300個前後の土師器、ガラス小玉・臼玉のほか、数個の須恵器が伴出したが、遺構は確認できなかった。これについて、調査にあたった、日本大学の軽部慈恩氏と長岡中学校の斉藤宏氏は、「おそらく窯場の倉庫か、売場のような所」と推定したが、小野真一氏はこれを「今日の知見からすれば、集落址に接近して設けられた祭礼場の跡と考えるべきであろう。」としている。土器類の年代は和泉式から鬼高Ⅰ式を主体とするが、伴出した須恵器類は小野氏により[註5]図示されている。当地方では最古にちかいタイプと認め得るものであろう。

珍野遺跡は、現狩野川放水路の工事によって、昭和27年と昭和36年に遺跡が発見され、とくに後者では緊急調査[註6]が実施された。かなり多量な土器類や木器類が出土したが、時期としては縄文晩期から弥生・古墳時代までを含んだもので、ほぼ継続性が認め得るようであった。立地としては、大北横穴群とは江間低地を挟んだ南反対側で、約2 km に満たない距離を測って、山麓に形成された小舌状台地であった。また、本遺跡の西側には長塚遺跡があって、やはり狩野川放水路線内に発見されているが、両者の遺跡範囲等はきわめて不明確とされている。

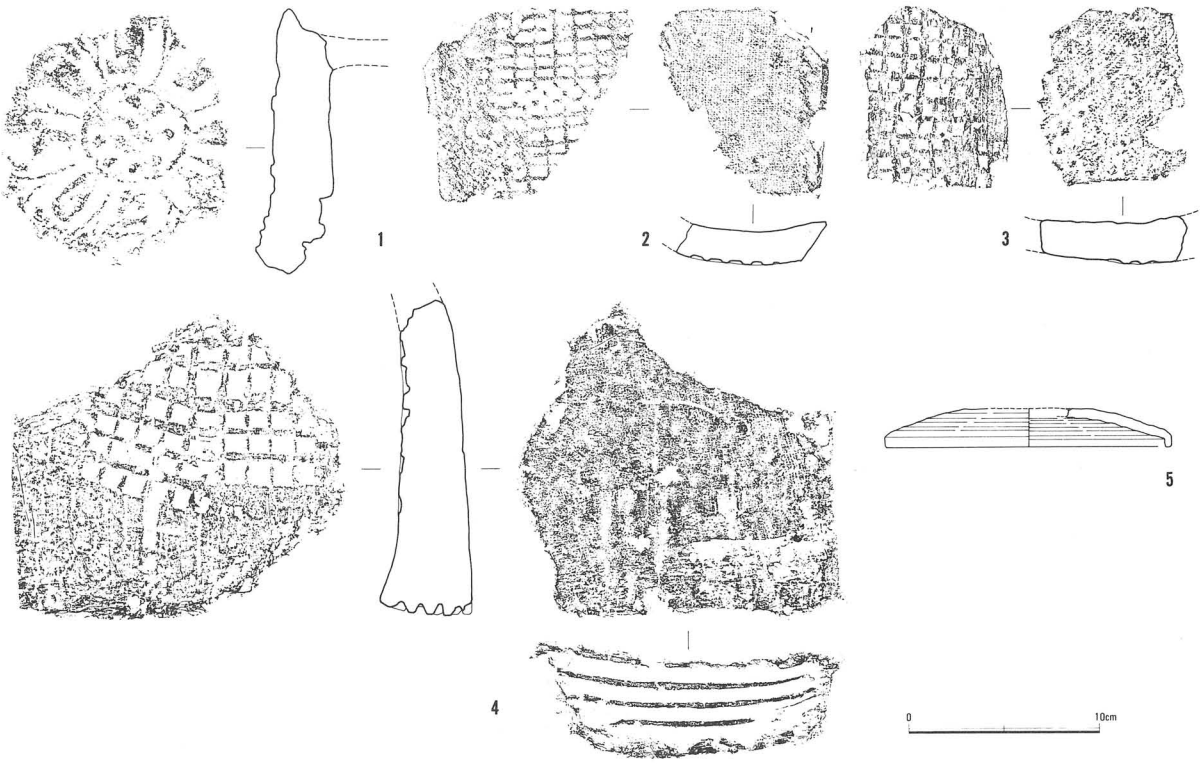
以上の4遺跡によって、江間低地とその周辺部における弥生時代から古墳時代にいたる遺跡をみたのであるが、ここではさらに古墳を検討しておく必要があろう。江間周辺においては、豆塚古墳（南江間）と箱根山古墳群（北江間）を列挙できる。




第 3 図　箱根山古墳群出土土器実測図




第 4 図　大師山横穴群出土土器実測図




第 5 図　花坂古窯跡出土瓦拓影図

豆塚古墳は、式内社徳高神社といわれる豆塚神社の境内にある小円墳である。未発掘で、現状では1基しか確認[註7]できない。本大北横穴群から、東南方向へ約1㎞ほど、大男山の山麓部末端に位置するといえる。

箱根山古墳群は、字小山根にあることから小山古墳群とも称されてきた。大正ごろから、伊奈重美氏宅地内の裏山一帯[註8]から須恵器等が出土しているとのことで、ここにかなり多くの古墳が群集しているようである。現状でも、横穴式石室の断面らしきものを観ることができる。ここは、大嵐山の山裾にひろがる低地に突出する残丘状の小丘で、本大北横穴群からはわずか500 ｍほどの距離しかない。本調査中に、伊奈重美氏所蔵資料を整理実測して、第3図に掲げた。

採集資料ではあるが、箱根山古墳群に限られるものであることは確実である点重要といえる。まず、注目されるのは須恵器蓋坏類で時期的には、6世紀中葉に比定できるものから、7世紀中葉ごろまでを含むようで、器類もバラエティーに富んでいる。土師器坏類にも注目できるが、胴下半部をヘラケズリした形跡が明らかといえる。

本古墳群の出土資料からすると、江間地域における群集墳は6世紀中葉には成立することになる。これは、愛鷹山麓地方における群集墳の成立が、富士市東端から沼津市西端の船津〜石川付近で、たぶん6世紀中葉といえる状況と見事に一致することになる。すなわち、愛鷹山麓で群集墳が成立するそのほぼ同時期に、当江間地域にも箱根山古墳群が成立するといえるのである。そして、その終末は、資料で観る限り7世紀中葉であって、7世紀後葉になると、本大北横穴群をはじめとする横穴群の隆盛期となるらしいのである。あるいは、これほど図式的に示すことは避けるべきであるかも知れないが、北伊豆地方において横穴群の密集する南地区とでもいうべき本江間地区の群集墳は、広く愛鷹山麓地方とほぼ同一といえる成立・発展・終末のテンポを基本的には歩んだものと認めてよいようである。

つぎに、窯の壇（南江間）窯跡についてみる。窯の壇窯跡は、本大北横六群から南東へ約1㎞前後で、狩野川の自然堤防の縁辺にあって[註9]、それは先の花の木・鳥井前遺跡とかなり隣接する位置関係を有する。確認された範囲でも、南北約500 ｍほどもあって、多数の窯跡が営まれたものと推定し得る。瓦陶窯跡と解されている。

また、本窯跡から南西2㎞ほどに、花坂島橋（花坂）・屋敷台（長岡）・牛ケ原（長岡）の窯跡が集中する地点がある。昭和29年に三島市誌編纂事業として日本大学の軽部慈恩氏により、昭和49年に沼津女子高校の郷土研究部・考古学研究所の秋本真澄氏[註11]によって調査されたりした窯跡[註10]を含むものである。

ここからは、三島国分寺をはじめ、市ケ原廃寺、塔ノ森廃寺（以上三島市）・宗光寺（大仁町）に製品が供給されているという。（第5図に町教育委員会保管資料を示す。）

以上によって、大北横穴群の景観をつくる江間低地とその周辺の概略を述べてみた。これによると、縄文晩期は、江間低地のいわば奥端部を占める珍野遺跡において確認されるが、弥生中期以降になると、その入口部の自然堤防上にも鳥井前遺跡等が形成されるようになる。その際注目されるのは、前者の珍野遺跡が古墳時代初頭まで継続して終るのに対して、後者の鳥井前遺跡をはじめ花の木遺跡等も含む自然堤防上の遺跡群は、古墳時代から歴史時代にまで継続して盛えるものとなる。すなわち、江間低地が人々の生活基盤としての生産性を有し得るようになったのは縄文晩期以降のことらしく、その自然堤防上における本格的な集落形成はたぶん弥生時代に入ってからといえるようである。

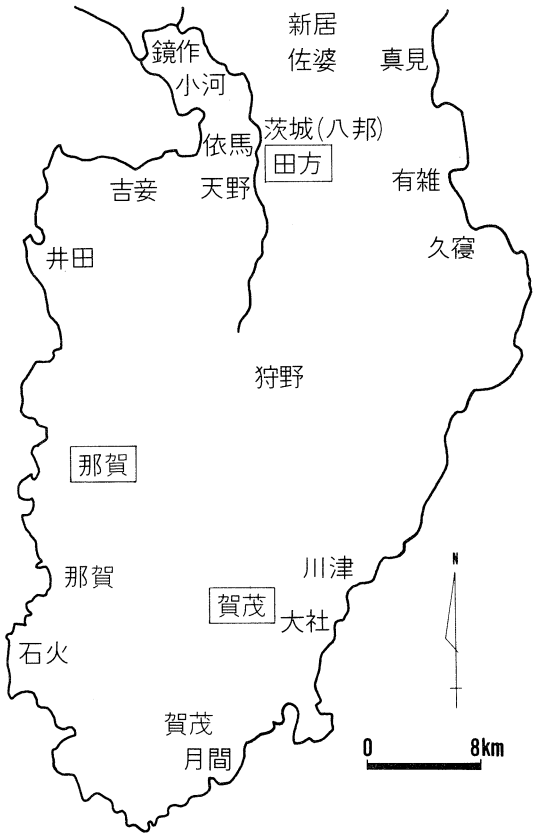
こうした歴史的背景のもとに、6世紀中葉ごろになると、後期群集墳がこの地にも成立・発展するようになり、やがて7世紀中葉以降になると、〝北江間横穴群〟の成立がみられるようになる。いうまでもなく北江間横穴群とは、北江間地域[註12]に密集する横穴群の総称で、大きく大北横穴群グループと大師山横穴群グループに分けることも可能である。前者は東から西へ約800 ｍほどの範囲に、女坂（2基）・大嵐（4基）・大北東（15基）・大北（47基）・大北西（2基）の各横穴群、計5横穴群70基が密集する。後

者は、そこから約450 m前後離れて、やはり東から西へ約400 mほどの範囲に、横根沢B（2基）・横根沢A（3基）・大師山（10基）・割山（14基）・東洞（2基）の諸横穴群、計5横穴群31基がみられる。総数は10横穴群、101基という確認数になるが、各横穴群の詳細は第V章第6節に述べる。

**2　国部郷里制**

本大北横穴群の所在する伊豆長岡町は、律令時代、伊豆国田方郡に属する。こゝでは、〝和名類聚抄〟を中心に、当時の地方組織の復元を試みたいと思う。

そもそも、伊豆国は、『旧事紀』「国造本紀」に「神功皇后御代、物部連祖麁鉾命八世孫、若建命定賜国造難波朝御世、隷駿河国、飛鳥朝分置如故」とある。すなわち、仲哀天皇の神功皇后の時初めて伊豆国が置かれ、物部氏の一族が国造に任ぜられたが、それは難波朝（孝徳天皇）の大化改新の際に一旦駿河に合併され、さらに飛鳥朝（天武天皇）で再分割されたというのである。『旧事紀』の信憑性について問題があるとしても、一応参考にされるものであろう。また、『扶桑略記』にも「天武天皇九年庚辰七月、別駿河二郡置伊豆国」と記して、天武天皇9年（西暦681年）に伊豆国が独立したことを述べるが、これも一応参考となるものであろう。




**第6図　伊豆国　郡郷里要図**

こうした経過をもつと考えられる伊豆国は、『和名類聚抄』に至ると、次の郡郷里から構成されるようになる。

田方郡　新居・小河・真見・佐婆・鏡作・茨城・依馬・八邦・狩野・天野・吉妾・有雑（辨）・久侵

那賀郡　井田・那賀・石火

賀茂郡　賀茂・月間・川津・三嶋・大社

これによると、田方郡は13里で上郡、那賀郡は3里で小郡、賀茂郡は5里で下郡となる。また、伊豆国府および田方郡家は、大仁町田京、後三島市というのが、『増訂豆州志稿』[註13]に記され、また『静岡県史』[註14]第三巻もこれに従う通説だが、『三島市誌』[註15]では強くこれを批判して当初からの三島説を主張している。その三島では、市ケ原廃寺・塔之森廃寺・天神原廃寺・伊豆国分寺等が白鳳～天平期寺院として、田京では宗光寺廃寺が白鳳期寺院として注目される。そして、この両地への瓦供給地が本江間付近であることはすでに述べた。

いま、これらの郷里を可能な限り現在地に比定し地図上におとしてみた。なかには、やや疑問を含む要素もあるが、大略の傾向は知り得よう。ところで、こうした状況を示すその時期については、「大体に9世紀から10世紀前半、特に9世紀前半」[註16]とみなし得る可能性が強いようである。すなわち、8世紀における郷里の状況を反映した9世紀前半[註17]の様相を記載するものと解し得よう。

こゝで注目されるのが〝依馬〟で、現江間、いうまでもなく本横穴群の所在地である。近隣では、茨城と天野が目立つ。茨城は、現韮山町原木に比定されるが、江間とは狩野川を挟んだ対岸で、東方約2 kmほどとなる。天野は、現伊豆長岡町天野とされて、江間から約4 km前後南方にあたる。また、八邦を

現韮山町山木に仮定すると、それは東方約4㎞ほどとなる。

ところで、本横穴群を含む北伊豆地方横穴群の年代決定を、一定の精密さで試みようとすると、確実といえる伴出土器はきわめて少い。それでも、現状では、総体的に7世紀後葉から8世紀にかけてであろうとすれば、一応無理ないところといえる。すると、倭名類聚抄に残された、伊豆国田方郡の状況は、8世紀に全盛を謳歌した本地方横穴群を直接に形成した郷里の様相ということになる。

また、第V章で詳細に検討される北伊豆地方横穴群の分布が、田方郡の領域とほぼ一致したものとなる点も注目に値する。このことは、天武天皇9年（西暦681年）すなわち、7世紀後葉に伊豆国が駿河国から再分割されるという、そうした歴史的背景にあるものが、本地方横穴群の隆盛と共通する基盤から発展するものであろうと解したいのである。

註1　伊豆長岡町史跡名勝調査委員会『伊豆長岡町の史跡及び名勝』伊豆長岡町教育委員会　昭和36年

2　静岡県『静岡県史』第一巻　昭和5年

3　調査者小野真一氏の教示による。

4　註1文献に同じ。

5　小野真一「伊豆長岡町花ノ木出土の須恵器」『静岡県考古学会シンポジューム2、須恵器――古代陶質土器――の編年』　静岡県考古学会　昭和54年

6　註1文献、小野真一・笹津備詳「伊豆長岡町珍野遺跡出土弥生土器」『駿豆考古』第5号『伊豆国珍野遺跡略報』沼津女子商業高等学校考古館

7　註1文献

8　同上

9　同上

10　軽部慈恩「大化の改新から奈良平安時代にかけての三島地方」『三島市誌』上巻　昭和33年　三島市

11　秋本真澄「伊豆長岡町花坂島橋窯址調査報告」『駿豆の遺跡研究』(2)昭和51年　加藤学園沼津女子商業学校郷土研究部

12　斎藤忠他『大師山横穴群』静岡県文化財調査報告第14集　静岡県教育委員会　昭和51年

13　秋山富南・萩原正平・正夫『増訂豆州志稿』

14　静岡県『静岡県史』第二巻　昭和6年

15　註10文献

16　『増訂豆州志稿』静岡県『静岡県史』第三巻　昭和11年

若林淳之『静岡県の歴史』山川出版社　昭和45年

を参考として比定してみたが、うち、いくつか問題となる郷名が残る。〝鏡作〟について、『増訂豆州志稿』は現沼津市香貫を比定し、『県史』は「伊豆国府楊原神社と関係あるか」を理由に「函南村の内か」と比定するが、いずれもやゝ無理したものゝようである。こゝでは、一応〝玉造〟（駿河郡）と対になるよう香貫説をとってみた。ついで〝有雑（辨）〟については、『伊東市史』（伊東市教育委員会　昭和33年）によって、現伊東市宇佐美付近とし、〝八邦〟については、小野真一氏（『蛭ケ島』韮山町教育委員会　昭和54年）によって、邦は〝牧〟で現韮山町山木付近という説があることから一応図示しておいた。

17　池辺彌『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文社　昭和56年

# 第 III 章　遺　　構

## 第1節　横穴の構造と遺物の出土状態

### 1 号 横 穴（第7図・図版8）

本横穴は、大北横穴群中、最西端に位置する。調査前は、完全に開口しており、玄室内の埋土はみられなかった。ただ若干の土砂と封鎖石に使用されていたと思われる礫が墓前域の左側部分にみられた。

玄室：長さ 4.67 m、開口部巾 1.68 m、同高さ 1.26 m、中央部巾 2.42 m、同高さ 1.77 m 、奥壁巾 3.12 m、同高さ 1.97 mで、その平面形はフラスコ型を呈する。ただ、細かくみれば開口部付近の左側壁が大きく外に弯曲して歪みをみせる状況で、左右の均衡がややくずれている。この部分が封鎖部とみられる。

奥壁は、やや弯曲し、床面との傾斜度（奥壁下部と最高部を結ぶ線に対し、床面との角度)は、76°で、天井部及び床面の傾斜も加わって、かなり内傾している。横断面形はアーチ型を呈している。

側壁は、右壁が左壁に比してやや急傾斜となっている状況で、天井部の構造も右側が左側よりやや高くつくられるが、こうした側壁・天井部のあり方は前述の開口部付近での左右側壁の歪みに連るものであろう。その横断面形は底面を広くとるアーチ型で、床巾に対して高さは約 3 ： 2 の比率となる。

天井部は、奥壁からやや外弯し弧をえがきながらその開口部側ではかなり強い急傾斜となる。

床面は平坦で整形等のノミ痕はほとんどみられない。横断面形からみると、床面はとくに開口部付近でやや凹状を呈している。縦断面では、床はかなり急傾斜で、開口部付近は奥壁部より約50㎝下る。

開口部の上部は剥落し、当初の状況は明確ではない。壁は左右対象とならず、左壁がやや短かいことはすでに述べたが、地形に左右されたとも、隣接する 2 号横穴に左右されたとも考えられる。

墓前域：両袖をもつ台形で、左側は隣接する 2 号横穴の墓前域の前端部通路を一部切って設計された可能性もある。長さは 1.73 mとみて、その前よりの最大巾 1 m前後の緩斜面を通路とみておく。

床面は玄室内傾斜がほぼ連続する状況であるが、その傾斜はやや強まって10°を測る。床面の左半部には巾 1 m 前後の広く浅い溝かともいえる状況がみられた。これを墓道と認めるかどうかやや躊躇したが、強いて認定することとした。同様に、床面両側端部に破線で図化した部分も、やや無理していわゆる〝床面緩斜面〟としておく。前より通路の 2 号横穴側東端部に階段 1 段を認定しておきたい。

出土遺物：墓前域左側よりほぼ床面に接して土師器丹塗り坏片・須恵器坏片等が出土している。(山下)

### 2 号 横 穴（第8図・図版9 ・10）

本横穴は、 1 号横穴の左やや上に位置し、隣接している。内部に造付けの棺をもつことによって、本横穴群中では特異な存在のものである。調査前は、完全に開口し、墓前域も完全に露出していた。

玄室：長さ 5.24 m、開口部巾 1.24 m、同高さ 1.55 m、中央部巾 2.16 m、同高さ 1.90 m、奥壁巾 2.90 m、同高さ 2.16 mである。平面形は、一部に造付けの棺もあるが、全体的にはフラスコ型といえる。

奥壁部には、床面から高さ 1 m程の所に棺の上面があり、横位置に棺身が刳り抜かれている。したがって、奥壁最奥部は、低いものとなっている。奥壁は石棺により変形されているが、基本的にはアーチ型をしている。壁面の整形には、巾 3.0 ㎝、 4.0 ㎝、 4.5 ㎝の 3 種のノミが使用されている。ノミは、刃を立てて、大部分壁面に対して右上方から下方へ打ち込んでおり、ノミを細かく何度も打ち込んで整形する方法がとられている。荒い整形である。側壁の広がりは、左右やや不均衡で、左側が開口部より奥壁にかけて、そのまま、ほぼ直線的に延びているのに対し、右側は、開口部より60㎝あたりから、やや広が

りを増し、棺身の近くで、方向を変えて、奥壁に向かうという胴張りをしている。この両側壁の変化は、左側壁のクラックと、棺蓋の搬入との関連の中で、必要にせまられた状況と思われる。右側壁の、棺身に近い所は、巾 4.5 ～ 4.6 ㎝ のノミを、上方より下方に打ち込み、棺身横では、巾 4.5 ㎝のノミを、ほぼ水平に奥壁の方向に打ち込んでいる。左側壁は棺近くからクラックが入り、開口部にかけて剥落が大きい。棺身横あたりでは、その整形は、右側壁とほぼ同じである。

天井部は、一部剥落がみられるが、縦断面からみると、奥壁部より開口部にかけて、ほぼ、13°の傾斜をもって下る。横断面形からみれば、天井部は、ほぼアーチ型を呈するが、奥壁部棺座付近から玄室中央にかけては、中央部がより高められている。天井部の整形は、巾 4.5 ㎝のノミを主に使用し、開口部より奥に向けて、刃痕は長い。また棺付近の天井部には、巾 3 ㎝のノミで、上方から下方への整形がみられ、ノミ痕が交差している。開口部に比して、奥壁の整形は丁寧である。

床面は、造付け石棺付近で、左側壁側が右側壁側より若干低く掘られており、こうした状況は開口部付近にまで及んでいるように観察された。排水を考慮した構造とみてよいものであろう。ノミ痕は脇刃によるＶ字状痕を認めるが、風化による摩滅が激しい。

開口部は、天井部がほぼ原形にちかいものと観察されるが、両側壁の袖部は大きく剥落している。風化も激しく、そのため整形手法の把握は不可能であった。

墓前域：平面形はほぼ台形を呈し、両袖部が大きく開くタイプである。長さは 2.86 ｍで 1 号横穴よりやや長い形態となる。

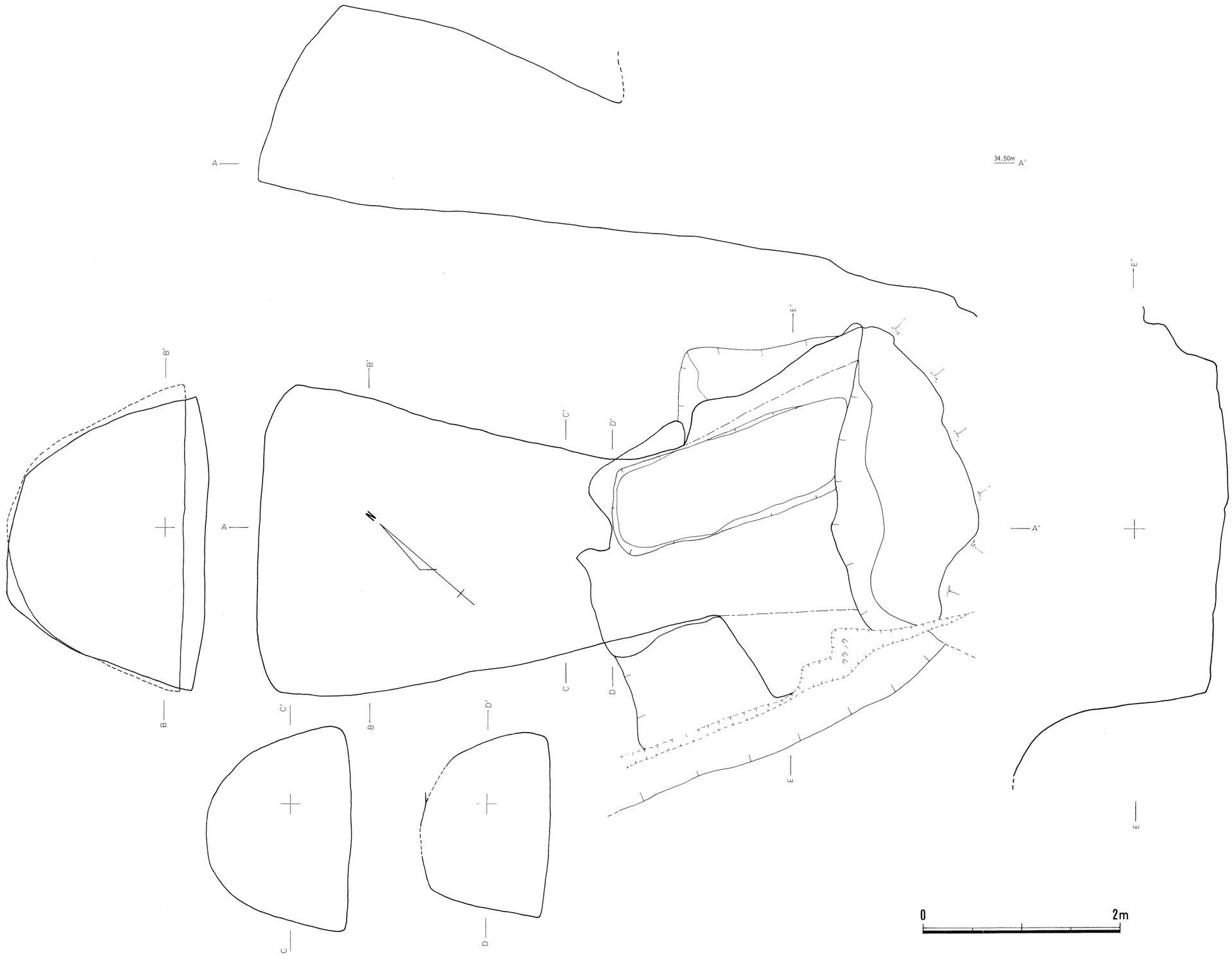
床面は玄室の床面傾斜がそのまま延長する状況で 3 °を測る。床面左半部には排水溝があり、全長 4.2 ｍ・巾50～ 100 ㎝で、深さ30～50㎝前後の大規模なものである。溝底は断面Ｖ字状を呈するが一部Ｕ字状となって、巾 5.5 ㎝前後の明瞭なノミ痕を認め得る。明らかに人為的なものと扱ってよく、その先端は 9 号横穴の右側に達する。

床面の両側端部には、巾50～60㎝前後の緩斜面が認められた。墓前域側壁の垂直面から平地な床面に移行した部分に設けられた構造と判断できる。

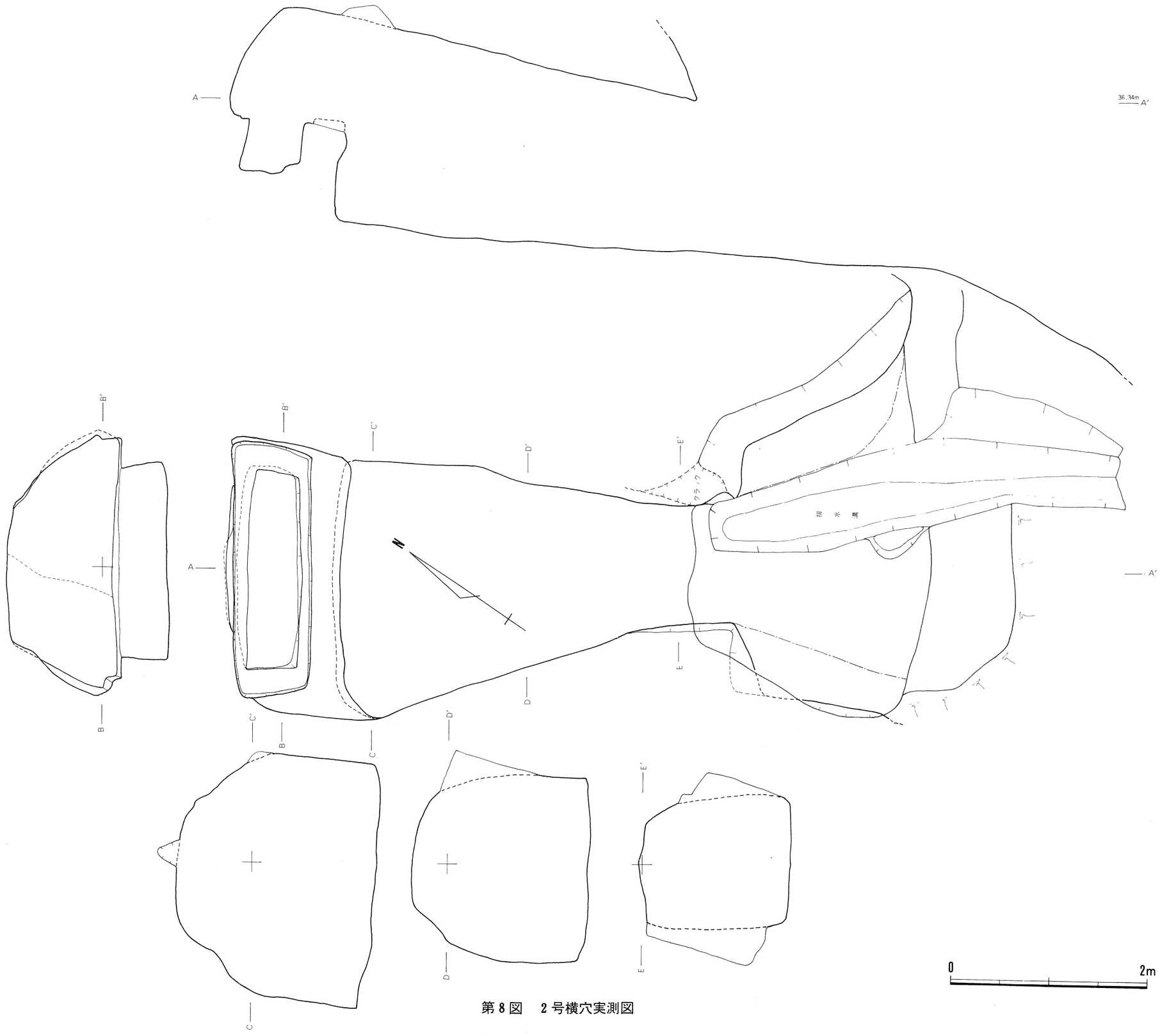
本墓前域の前方には、巾50～90㎝前後のかなり強い傾斜面があってその先端が自然傾斜に入っていた。この人為的な傾斜面を通路と認めておくが、その東端部には 4 段の階段状構造があって 3 号横穴墓前域に連絡する。

造付棺：棺身は、玄室床面により、1 ｍほどの高さをもった棺座面に、横位置に刳り抜かれている。棺座上面は、ほぼ水平で、棺座中央部上面から天井までは、 1.15 ｍである。右側壁側は、壁画がやや不鮮明である。棺座上面は、蓋受け部が、一段低くつけられている。蓋受け部の整形は、巾 3 ㎝のノミを使用し、かなり丁寧である

これらの蓋受け部から蓋の寸法を復元すれば、長さ 2.30 ｍ程、巾80㎝ほどの平面形をもつものであり、高さは、側壁の傾斜等から考えると、40㎝前後になると思われる。この棺蓋の一部が、墓前域右前方に存在した。急傾斜面にあるため、全体を明確に把握できないが一端が比較的良く残っているため、ほぼその全体像を推定できる。蓋は、横穴本体と同じ岩質で、切妻の屋根形で、現在長さは66㎝、巾は80㎝、高さは40㎝、蓋頂部には、巾12㎝の平坦部があり、そこから両側50°の傾斜で、ほぼ直線的に下る。屋根の斜面は、53㎝となる。蓋の内側は、刳り抜きがなく、平坦と思われる。棺身は、当横穴の主軸方位に対し、直角に刳り抜かれている。即ち、棺の主軸方位は、Ｎ－59°－Ｅであった。




第7図　1号横穴実測図




第 8 図　2 号横穴実測図

棺の内法は中央部で、長さ199.5 ㎝を測り、巾（奥行）は、中央部で、56.5㎝を測る。ただ、棺下部は、上部に対しやや袋状を呈し、広まっている。深さは、中央部で、53㎝である。棺内床面は、棺内側壁面の整形に比し、かなり凹凸が激しく、粗雑で左側壁側から右側壁側にかけて、ほぼ4°の傾斜をもって下っている。なかでも、その左端部は巾35㎝前後で約5㎝前後高くつくられる平坦面が設けられているものと観察された。こうした状況から本石棺の埋葬法を推定すると、頭を左側壁側に安置したものと思われる。棺内の整形は、主として巾4.5㎝のノミを上方から下方へ打ち込んでいる。（山下）

**3 号 横 穴（第8図・図版11・12）**

本横穴は、2号横穴の左側に位置し、規模からいっても、本横穴群中最大のものである。調査前、玄室内は、ほぼ完全に開口しており、埋土はみられなかった。ただ開口部付近、右側から墓前域にかけては、大きく崩壊して原形を失い、かなりな埋没によって、開口部がやや狭くなっていた。

玄室：長さ8.16 m、開口部巾2.00 m、同高さ1.81 m、中央部巾2.52 m、同高さ2.13 m、奥壁巾2.55 m、同高さ2.04 mで現開口部より奥へ2 mあたりまでは、右側壁部分で、クラックのための変形その他があるが、その平面形は、フラスコ型を呈している。

奥壁の形態はアーチ型で、やや外湾し、床面との傾斜度は、79° 30′であった整形は、中央部やや左上から右下にかけて、大きくクラックが入り、天井の最高部を、このクラックにあわせた形跡がみられる。壁面左側は、岩質がもろく、整形も粗雑で、作業中崩れたとみられる個所もある。特に左側壁との接触部分は、顕著で、クラック部分に、意識的にさけた状態がみられる。右側部分は、岩盤も固く、ノミ痕も明瞭で、その巾は、5.7、5.8、6.0㎝がみられる。ノミの使用法も、右側部分が、奥壁に対しほぼ直角あるいは、刃をやや上方から下へ刃を向けており、ノミ痕の走行も、短かい。

玄室の横断面を見ると、比較的均衡のとれたアーチ型を呈しているが、奥壁部付近では、右側壁は、やや直線的で、天井部との接点もかなり明瞭な稜をつけているに対し、左側壁においては、一部剥落もあり、中程から、かなり内傾を強めている。天井部の最高部が中心よりやや左側に来ていること等を考えると、掘削途中での岩盤の剥落防止に伴なう一種の設計変更か、剥落による変形と考えられる。

側壁部の整形は、右側壁では、ノミの脇刃で整形し、ノミ痕は、細巾（1～2.5㎝巾）の線状となり、左側壁では、刃を壁面に平行させ、ノミ痕も、3～6.4㎝と広巾をなし、両側壁とも、奥壁部に近づくにつれ、その整形は丁寧である。多く使用されているノミ巾は、6.0㎝である。

天井部の整形は、ノミの脇刃で行ない、深いV字状を呈し、その痕は右側から奥壁最高部に向い、この部分の天井は、開口部へ約12°と、やや急傾斜である。その先約2 mは、巾5.7～6.0㎝のノミを主に使用し、整形も良好で、この間の天井は、開口部へ約1.5°と、水平に近い。

床面は、中央部でゆるやかな凹状を呈し、左側壁よりが、右側壁よりに対し、やや高いが、全体的には、5°の傾斜をもって、開口部へと下っている。床面の整形は粗雑で、凹凸が激しい。

開口部付近は、剥落が大きく、特に壁部分は激しい。

墓前域：平面形は台形で、大きく両袖を有するタイプである。調査前の状況は厚い埋没土と崩壊礫によって覆われていたことはすでに述べたが、この下部には、右側よりで床面に密着して封鎖状態の残存と推定される状況がみられた。

玄室と本墓前城を明瞭に区別する施設等は設けないで、玄室床面からスムーズに連結して床面をつくる。この床面左平面に巾80～90㎝前後、深さ数㎝から7.8㎝前後の溝状遺構かと思われる状況があった。ここではかなり意識的になるがこれを墓道と認めておきたい。また、床面の両側端部に略三角形状の緩斜面が比較的良好な形態を残していた。

本墓前域の前側には、一段低くつくられた巾1 m数10㎝ほどの施設があり、その西端部は2号横穴に

連絡する3段の階段もあって、全体に若干の段差はもつが通路と認めた。

出土遺物：開口部右平面の封鎖石の残存に伴出して、須恵器蓋坏・碌・長頸坩がほぼ一括で出土した。

（山下）

**4 号 横 穴（第9図・図版13）**

本横穴は3号横穴の東側3 m前後の位置にあり、レベルとしては、それより2 m低くつくられている。調査着手前の状況としては、約60 cmほどが開口していた。内部は、土砂、礫が開口部付近にわずかに堆積していた。

玄室：長さ3.35 m、開口部巾1.10 m、中央部巾1.62 m、奥壁巾1.74 mである。平面形はフラスコ型を呈し、床面の傾斜はかなり強い。横断面形は、奥壁・中央部・開口部とも、アーチ形を呈している。形状は、平面では1号横穴にも類似して、主軸に対し、面側の壁が対称につくられ、整った形である。開口部上面は、巾28 cm程垂直に整形し、その上部には、巾19 cm、長さ2 m前後の平坦部が造り出されている。

ノミは、巾ほぼ5 cm前後のものが多く、奥壁ではいわゆる「打ち込み型」が多い。その剥離の方向も左右又は下方向が多く、右壁よりでは左斜め下方向、左壁よりでは右斜め下方向に打ち込みがみられる。これらは明らかに奥壁と両壁との境を意識し打ち込まれたものと思われるが、右壁側が明瞭な区画をなしているのに対し、左壁側はこれに比べると不明瞭なものである。両側壁では天井部との境に、開口部から奥壁に向って水平に「V字状型」の打ち込みがみられ、他は開口部から奥壁にむかうにしたがってやや下る傾向がある。天井部では開口部から奥壁に向っての「V字状型」であり、その整形はかなり粗雑である。床面も天井部と同様ではあるが、凹凸は天井部に比べて少ない。

封鎖施設：開口部から奥より60 cm前後の位置に、2枚の板状立石がある。この板状立石は50 × 60 cm前後の大石を横位に立て並べたもので、あたかも玄室への進入を阻むかのようであった。本立石の前よりには約40 cmほどの間隙をおいて径40～50 cmほどの大円礫が並置されており、ここにはやゝ小さくなる礫群が密積されていた。

こうした施設を封鎖施設と認めておくが、調査によれば本封鎖石はほぼ床面直上と認め得る状況ながら、その下部に数cm前後の黒色土を敷き込んでいた。この黒色土には人骨細片をかなり多量に含む状況からすれば、本封鎖石は追葬の最後の段階の姿を残すものとして扱ってよいようである。

本横穴群中、封鎖施設が残ったきわめて数少い例ということになる。

墓前域：平面形をほゞ長方形につくる形状で、長さ1.38 m、最大巾2.19 mを測るが、その形状は右奥から、中央部へと大きく連なるクラックにより破壊をうけているようであった。

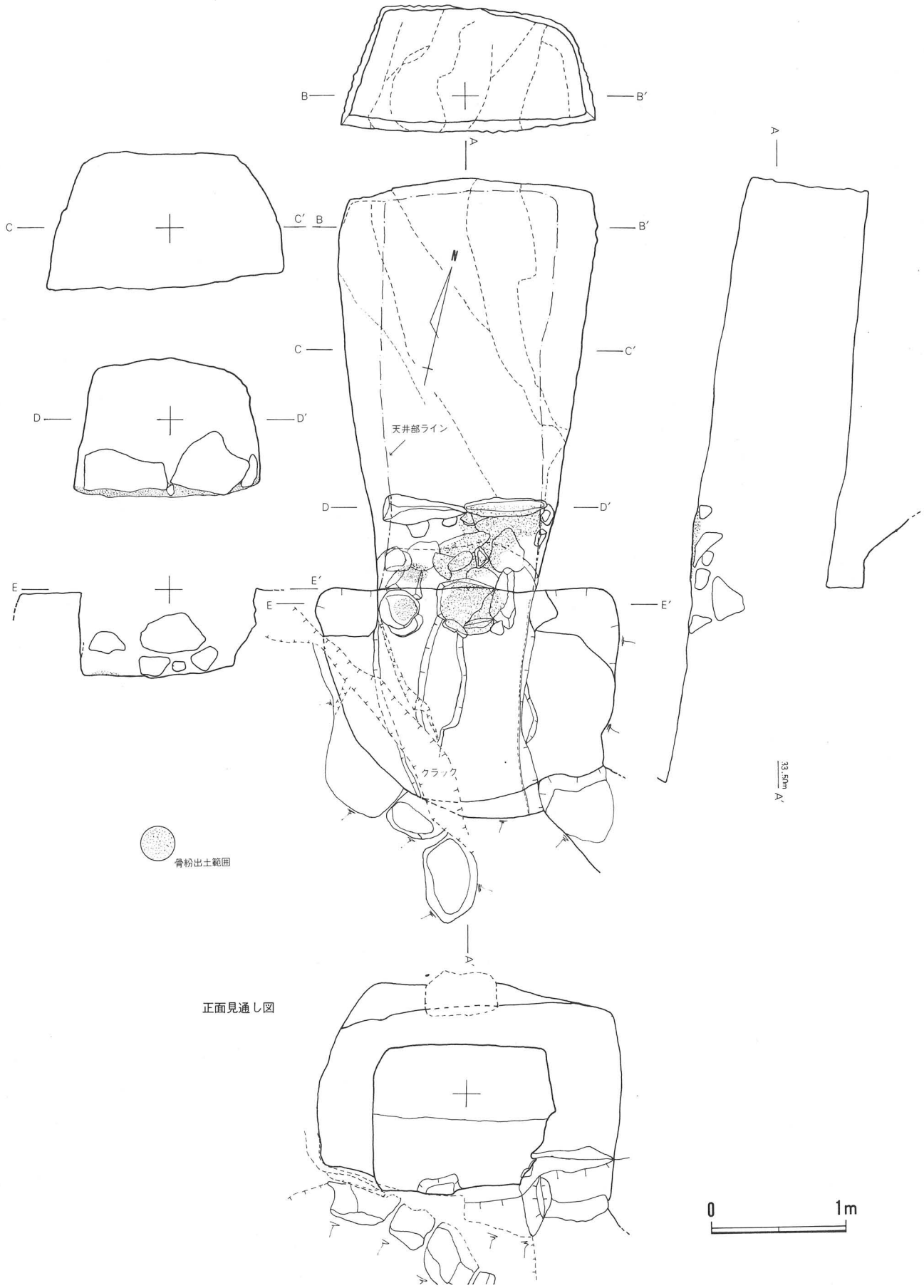
本墓前域は、大きくわけて墓道・排水溝および墓道外の平坦面から形成されている状況であった。

墓道は、玄室側壁がそのまゝ延長して段差を設けた構造で、巾は90～110 cmほどを測った。うち、左側壁例はきわめて明瞭な段差を有していたが、右側壁例は弱くそのうえクラックによる破壊が目立って認定に躊躇したが、それでも同様に判断してみた。

墓道の中央には、巾20～35 cm前後で深さも10 cmに満たない溝状遺構があった。先端部はクラックにより消失するが、いわゆる排水溝と扱っておく。また、この墓道の外縁部は開口部のつくる袖部との通路に平坦面をつくり出していた。

特徴的なのは本墓道の先端部である。約20 cm前後の狭いものであるが、玄室から延長される墓前域の傾斜が稜をもって明確に変化して、墓前域床面より強い傾斜面を造り出している。この部分に通路を比定してみたが、すると、その床下側（5号横穴側）に認定された階段とスムーズに連絡し、23号横穴方向へ至ることになる。こうした墓道内を横断する通路の設定は他に例をみないが、それでも状況からすれば以上のあり方を認めてよいようである。

A
A'
36.00m
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
クラック
クラック
クラック
階段
階段
階段
階段
階段
0
2m




第10図　4号横穴実測図

出土遺物：玄室内から人骨片および土師器坏類が出土し、開口部付近では、須恵器・土師器坏類等が発見された。また、墓前域左撹乱部からも土師器坏破片（図版64－13）が出土している。（大川）

**7 号 横 穴（第11図・図版15）**

本横穴は、3号横穴の下段にあって、右上に8号横穴、左下に14号横穴と隣接する位置を占める。調査前、3分の1ほど開口しており、奥壁部は5㎝、玄室中央部で20㎝前後の埋土がみられたが、墓前域は埋没していた。

玄室：長さ2.17ｍ、開口部巾1.06ｍ、同高さ0.99ｍ、中央部巾1.12ｍ、同高さ1.02ｍ、奥壁巾0.69ｍ、同高さ0.78ｍ。平面形は、一応長方形に分類しているが、きわめて特徴的な形態が目立っていた。それは右側壁の中央部やゝ後よりに、約20㎝ほどの張り出しがみられることであるが、しかもいわゆる胴張り状ではなくて三角形状に突出しているものであった。あるいは、隣接する8号横穴との連結を避けるための設計変更の結果からかとも推定されたが、それほど近接しているわけではない。

奥壁は、床面巾に対し、高さのある、やや胴長な台形を呈している。奥壁面はやや内湾した形態で、床面から30㎝ほど高い部位が奥壁の最深部となるが、その傾斜は93°であった。整形は左側から中央部にかけてクラックが入り、一部に剥落もみられるが、巾5.0㎝で刃先にやや丸味をもったノミを使用している。ノミ痕は打ち込み痕が目立つ。

側壁を横断面からみると、開口部付近では、一部剥落もみられるが、均衡のとれた台形を呈している。右側壁における整形は、比較的良好で、巾5㎝のノミの刃を壁面に平行にして使用している箇所がみられる。ノミ痕は、全体的には、開口部より奥壁部にかけて、約16°で下っているが、開口部付近は、上部はほぼ水平、下部は20°となる。奥壁部付近の整形は、やや粗雑で、ノミ痕は明瞭に残っており、中央部で11°、下部で22°で下っている。ノミ巾は5㎝前後で左側壁は、クラックの関係もあって、やや粗雑である。開口部より1.6ｍ前後までは、脇刃でかなり良く整形されているが、それより奥壁部にかけては、右側壁と同じく粗雑で、意図的な結果とみなし得る可能性がある。

天井部の形状も右側壁の張り出しに影響された痕跡が、約5㎝ほどの段差として残っている。整形は、脇刃の使用がめだち、意識的に深いＶ字状を残し、特に奥壁部の近くでは、凹凸が激しい。

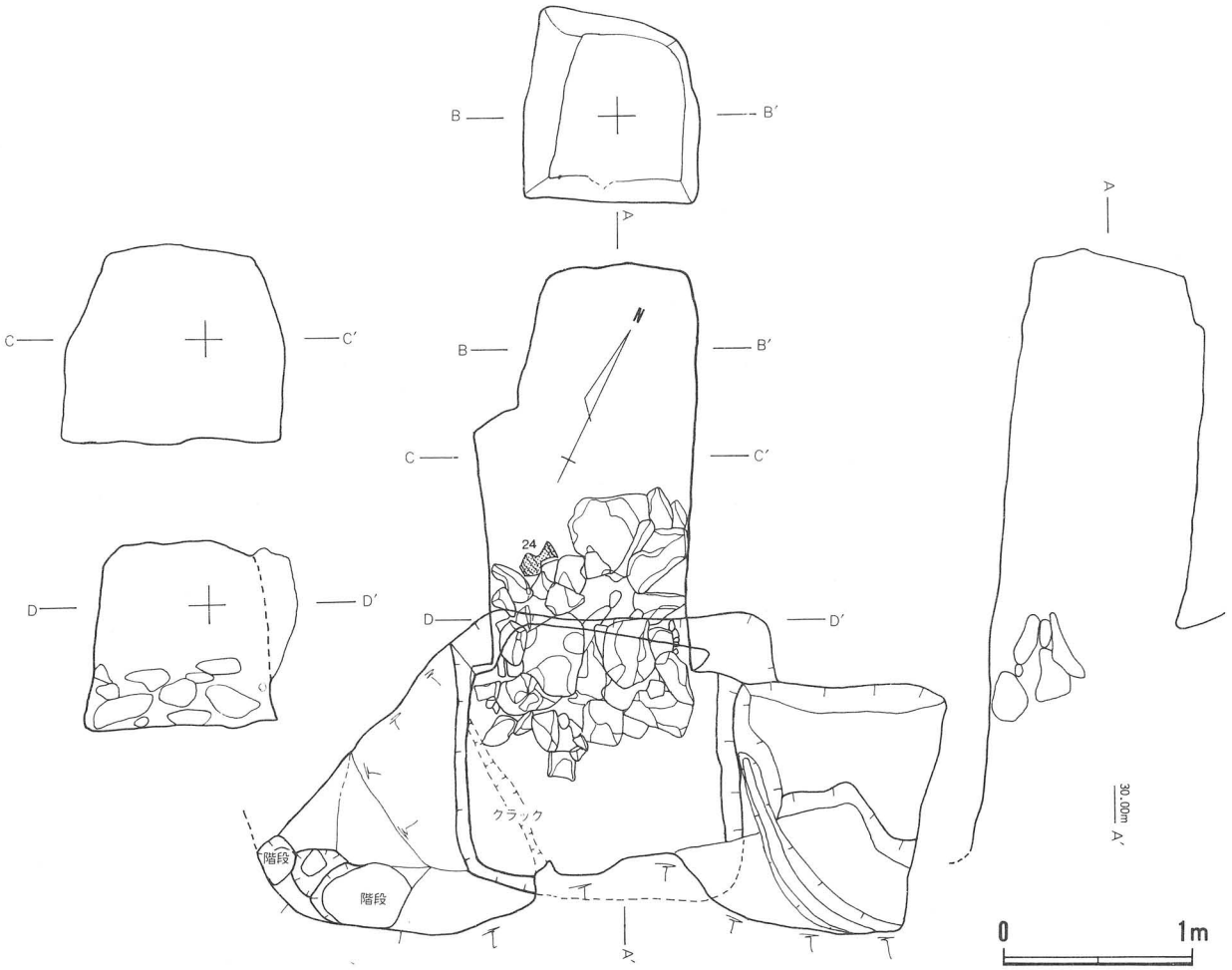
床面の凹凸は激しいが、全体的には平坦で、奥壁部より開口部にかけて、約6°の傾斜で下る。

開口部は左側壁の上半部を大きく剥落するが、右側壁および天井部ではわずかな剥落をみる。整形に使用されているノミは、巾5.0㎝一種である。開口部の正面上部にはいわゆる上部平坦面が認められるが、それは高さ38㎝ほどの垂直面とその上部の傾斜面によって構成している。開口部より墓前域にかけて、わずかではあるが、両袖がある。

封鎖施設：開口部付近から玄室内約1ｍにわたり、最高35㎝前後の高さで、礫群が発見された。径30～40㎝のやや大型のもろい岩片を中心に、かなりの土砂が小岩片とともに、混入していた。この状況を封鎖石とみなすと一部が玄室内に50㎝前後崩落しているものと思われる。また、板状のやや大型の礫が2枚ほど玄室寄りの所にあったことなどから、4号横穴のような板状石による区画の存在も推定し得る。

墓前域：平面形を長方形につくる方形区画墓前域である。床面の左右両端部は基本的には10～20㎝前後の段差によって区画されるが、一部には数㎝ほどの段差をそれと認めざるを得ない箇所もある。前端部は崩落により中央部の大部を失うが、左端部の数十㎝は数㎝ほどの段差ながら残存していた。

本墓前域は、左外に特殊な付属施設を伴っていた。すなわち、床面の右外は、8号横穴墓前域ないし階段・通路から本墓前域床面をつくる急傾斜面となっているのみであったが、左外には緩斜面と溝を一体とする施設がみられた。その施設は墓前域床面より約30㎝前後高いレベルをもつ緩斜面が縦40～60㎝前後・横90㎝前後の範囲にあり、その上方にはこれを造り出すための垂直面が、その下方には巾6.0㎝



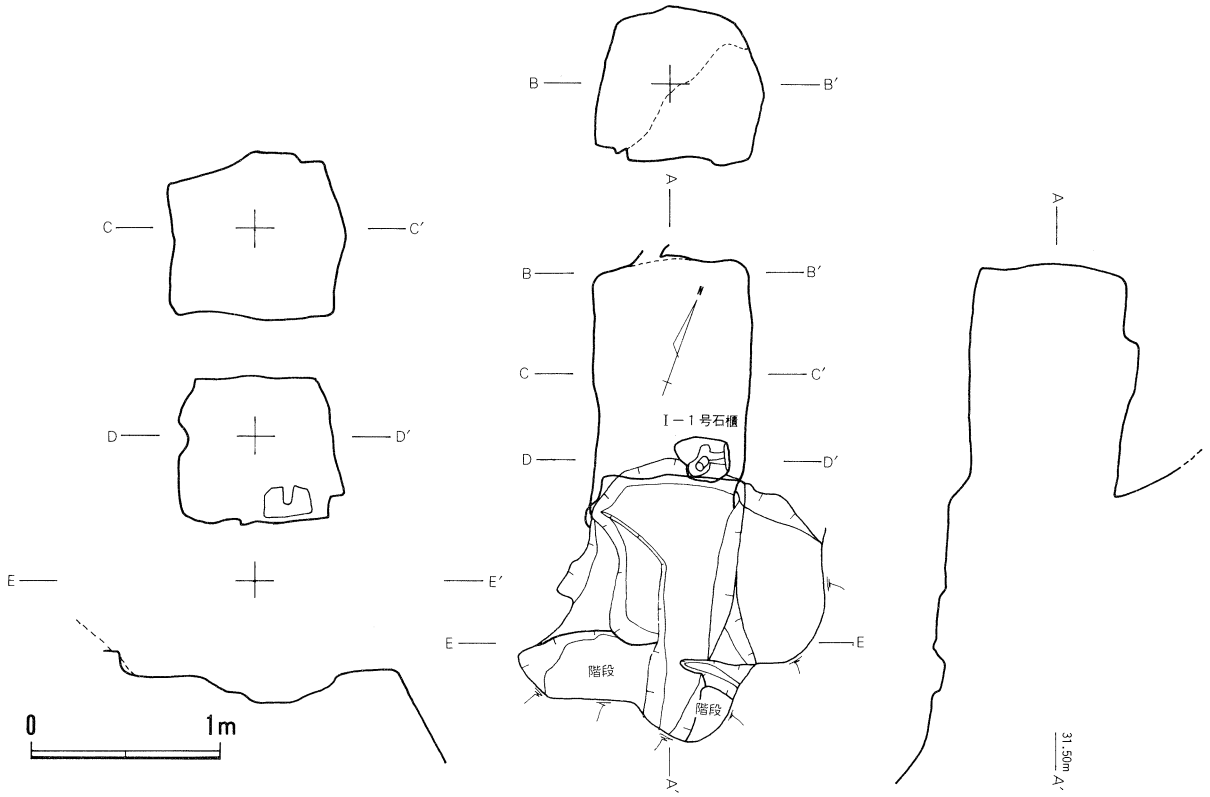

**第11図　7号横穴実測図**

のノミによる一撃で大きく打ち欠かれた平坦面（大ノミ痕跡）が約10数㎝ほど低い位置にあった。こうした施設と7号墓前域床面との間に、巾10数㎝、最深5㎝前後で長さ90～100㎝ほどの溝状遺構が認められた。なお、この前方は通路となっていたが、剥落によりその大半を失っていた。

ところで、以上の内容をもつ本付属施設については、その意味づけあるいは解釈について判断に迷う状況がめだった。まず、溝状遺構については、墓前域床面より6～8㎝前域高い位置にあることからその排水の機能を果し得ないことは確実である。一方大ノミ痕跡を緩斜面に伴う構造の一部とみると、溝状遺構もこれらに伴う区画といい得ることになる。こうしたあり方は9号墓前域右側の様相にも共通するが、すると、通路は溝状遺構の前よりということになって、そのほとんどは剥落により欠失したと解されることになる。この場合、通路の14号から7号墓前域への連絡はややスムースを欠くことになる欠点がある。現況からみると、本大ノミ痕跡は7号墓前域前側に設けられた道路の東端部を占める階段であって、この解釈によれば、14号横穴面から7号横穴への連続性はきわめてスムースなものとなる。ただ、溝状遺構についての意味づけがかなりむずかしくなってしまう。あるいは、本大ノミ痕跡は、以上の両側の機能を兼ねて果したとしてもよいかも知れない。また、緩斜面の機能については、一応、9号横穴墓前域右側の施設に共通するものとしておきたい。

通路については、墓前域および付属施設の前方部に巾30～40㎝の平坦部が東西両端部に残存するものと認定した。

そうした墓前域の状況に玄室の条件も配慮すると、本横穴が8号横穴よりも新しく構築された可能性は指摘し得るかも知れない。




**第12図　8号横穴実測図**

出土遺物：玄室内の封鎖石寄りの床面に接して字形の須恵器の高台付長頸坩（図版65－24）が出土し、墓前域からは須恵器の裏片等が出土した。（山下）

**8 号 横 穴（第12図・図版16）**

本横穴は、7号横穴の右上、9号横穴の左下に隣接している。ともに通路・階段を経て連絡しているが、その様相は、低い7号・高い9号にはさまれて本横穴が存在するといえる。調査前、3分の1ほど開口しており、奥壁部で15㎝前後、開口部内側で30㎝前後の埋土がみられた。

玄室：長さ1.36 ｍ、開口部巾0.74 ｍ、同高さ0.75 ｍ、中央部巾0.83 ｍ、同高さ0.85 ｍ、奥壁部0.80 ｍ、同高さ0.81ｍ 。平面形はほぼ長方形、横断面は、奥壁は台形、中央・開口部は方形をなす。

奥壁は、床面から天井までのほぼ中心付近でややふくらんで胴張りした形状を呈し、その整形は、巾4.5～4.6㎝のノミを使用するが、かなり粗雑である。

側壁はとくにその奥半部が奥壁とともに粗雑な造りで、各部に歪みがみえる。整形は、巾4.4㎝及び4.5㎝前後のノミを使用し、特に左壁に良く残っている。ノミも壁面に平行に使用しているものが目立ち、ノミ痕はほぼ水平である。巾4.4㎝のノミは、先が少し丸くなり、刃こぼれ（4箇所）がみられる。右壁と比し、比較的よく整形されている。右壁は風化が進行し、ノミ痕も明瞭でない。ノミ痕の傾斜はゆるやかで、ほぼ水平に使用されたものが多い。下部の形は粗雑である。また右壁の開口部附近は、凹凸が激しく、ノミ痕もV字状で4～4.5㎝の深さを測るものもみられる。

天井部は、巾4.5㎝前後のノミをを用し、天井面に対し、ほぼ平行して進めている。 刃は中央部で、2箇所刃こぼれがある。天井部を縦断面形でみると、奥半部でやはり歪みがみられる。

片面は、凹凸がきわめて強く、脇刃で実施した後、床面に刃を平行にして調整した所も一部みられる。ノミ痕も多くV字状で、深い所は、3.5～4.5㎝もある。整形は、右側に比し、左側は良好である。ノミ刃巾は、明確にし得なかったが、刃こぼれのしているものを使用している。床面の傾斜はなく水平で0°

を測る。

開口部は、左袖部下半がその大部分を剥落によら失っている。床面には10㎝前後の明瞭な段差がありここが墓道の奥端となっている。

墓前域：平面形を長方形とする方形区画墓前域を認めた。

床面の中央部に大きく墓道がある。前述の開口部床面段差から発するもので、基本的にはラッパ状に形態を示すが、やや歪みをみせる。それでも、その墓道の右外側に5～10㎝といえる段差が廻って明瞭な区画を残し、方形区画墓前域と認められた。この場合、墓前域床面とその中央部墓道との区別は、やや高いレベルで残された床面にV字状のノミを用いて横穴の主軸と直交する方位に4本の荒い剥離痕を残していた。こうした状況は左側でも同様で、墓道の左側壁がかなり外に寄るためか、墓前域区画との識別は困難であるが、それでも前端部に大きなノミ痕2条がみられて共通していた。

また、この方形区画の左右の外側には、ともに床面より10㎝余も高い平坦面がみられた。ここでは墓前域外として扱っておきたい。

石櫃：石櫃は、開口部直下、その一部を床面の段差の部分に位置づけ、一部、下部に板状の石を据え、方孔部を上面にする横位置で栓も挿入した状態で発見された。

出土遺物：開口部附近の墓前域を中心に、須恵器の大型甕片が検出された。（山下）

**9 号 横 穴（第13図・図版17）**

本横穴は8号横穴の右上に隣接し、それは7・8・9号と続く一連の横穴群の最上部にあって、2・3号横穴の直下段に位置するものとなる。7・8号横穴等とは道路・階段により連結して1つの組み合わせを形成している。調査前、2分の1ほど開口し、開口部分で40㎝程の埋土があり、奥壁付近の1ｍほどは、床面がすでに露出していた。

玄室：長さ2.61ｍ、開口部巾0.96ｍ、同高さ0.95ｍ、中央部巾1.09ｍ、同高さ0.86ｍ、奥壁巾1.04ｍ、同高さ0.39ｍ。開口部より奥壁側が若干広がる形態であるが、全体的には、その平面形は長方形である。

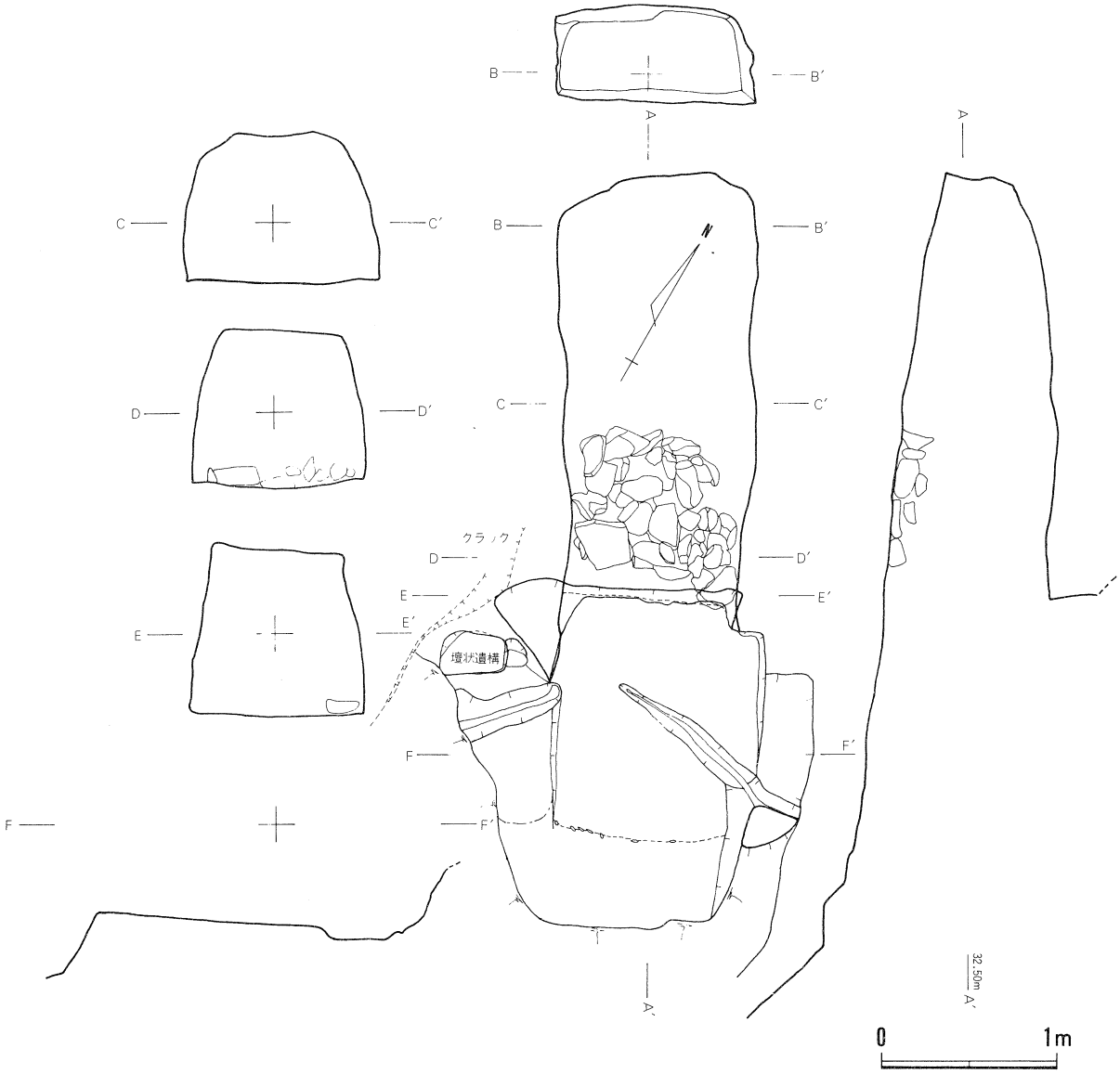
奥壁は高さのきわめて低い横広の台形で歪みも目立っている。整形は、巾2.6～2.7㎝のノミで、凹凸は激しくやや粗雑である。ノミ痕は、上部は縦、右側は奥壁に面して左下り、左側はその逆、中央下部では水平か、やや右下りが多い。奥壁と床面との傾斜度は、93°とやや開いている。

玄室の横断面形は、奥壁・中央・開口部とも台形となる。左側壁の整形は、巾は不明確だが4.0㎝以上のノミで脇刃を多く使用している。壁面の凹凸は激しく、2～3㎝の凹凸部もみられる。ノミ痕は、中央部で16°前後、開口部付近では、ほぼ水平から10°前後で下り、ほぼ一定方向である。右側壁は一部剥落もみられる。ノミ痕は、奥壁より1ｍほどが、脇刃を主に使用する状況は左側壁と同様であるが、上方へ打ち上げたものもあって、菱形状の交差を示している点では相違がめだつ。中央部から開口部にかけては、脇刃使用が多く、荒く、凹凸も激しい。開口部付近も脇刃を中心として整形し、ノミは、水平か6°前後の下りを示しているが、一部には比較的巾広の、先が少し丸味をもったノミで、巾30㎝ばかりの間、ほぼ水平に整形している箇所もみられた。

天井部は奥壁にむかって全体に下り傾斜を示しているが、類例のない特異な状況といえる。ノミは、奥壁に向かってほぼ平行して走っており、凹凸は激しく、小さな突起状を呈している。粗雑というよりは、深い溝状の線を残すことに意義があるようにもみえる。ノミは、その巾を明瞭に残す例はなかった。

床面の傾斜はかなり急で6°を測る。そこには、V字状のノミ痕が顕著で、凹凸が激しい。

開口部は比較的良く残っており、わずかに左側壁下端部に剥落がみられるほかは保存良好といえる。その天井部上部には、巾30㎝前後の垂直面と緩傾斜面が造り出されていた。いわゆる上部平坦面の典型




**第13図　9号横穴実測図**

例に含め得よう。いずれも風化が激しくノミ痕等は観察できなかった。

封鎖施設：開口部直下から奥よりへ約80㎝ほどにわたって礫群が発見された。ほぼ2段積み程度で明らかに上部を失ったものと観察されたが、床面に密着した出土状況からすれば、封鎖施設の一部が残存したものといえた。問題は本礫群のすべてが最終埋葬時の封鎖石の底部と認め得るのか、それとも崩落礫を含んだものであるのかであるが、前者とすれば埋葬可能範囲はわずか1.4 ㎡前後ということになる。

墓前域：平面形を正方形にする方形区画墓前域であった。床面の左右側壁は、ごくわずかながらも段差が認められて床面を低くする区画と構造がみられた。前端部には段差といえるほどではないが、ノミの打ち込み痕が8・9個所列置された状況で、明らかに区画を意識した構造と認め得た。

その床面の奥壁中央部のやや前よりから左前端部隅にむかって溝状遺構があった。巾10〜20㎝余、深さ数㎝で、長さは1㎡余であった。いわゆる排水溝と称し得る状況で、墓前域床面を斜めに横切る状況が特徴的であり、その先端が階段に流入する状況で消失する点も注目された。

墓前域床面を区画する段差の位置は左右で若干異なっていた。左側段差は開口部左袖の約20㎝ほど外

側に設けられていたが、右側は玄室側壁がそのまま延長する位置にあった。こうした相違は、右外側に特殊な外部施設が設けられていたことによるが、それは35×25㎝前後の規模をもつ“壇状遺構”を中心とするものであった。壇状遺構は墓前域床面より約30㎝前後も高いレベルにあって、その前方には溝状遺構と平坦面とが設けられていた。溝状遺構は巾18～23㎝前後、深さ5～6㎝前後、長さ60㎝ほどで、平坦面は90×80㎝ほどの範囲で、ともに床面右側段差の上面となっていた。溝状遺構の出発は墓前域床面の右側段差付近からで、その先端は剥落により失われていた。すなわち本壇状遺構は、排水のためというよりもむしろ区画のための設置といえる溝状遺構を伴っていたと認め得よう。

出土遺物：石櫃と土器類がある。石櫃（Ⅰ－2号石櫃）は、墓前域右外の壇状遺構に伴なう平坦部の上部撹乱層から逆位で出土した。身のみで栓はみられなかった。状況からすれば本横穴壇状遺構の石櫃である可能性が強い。

須恵器・土師器の坏蓋・坏身片・甕片等が墓前域撹乱層中および封鎖石中から出土している。（山下）

**10 号 横 穴（第14図・図版18）**

本横穴は、9号横穴の西4m前後で、1号横穴の直下にあたるが、それは12－2号横穴の西2m前後でそれより1.7m前後高い位置を占めるというべきであろう。12－2号横穴または11－1・11－2号横穴との関連が深そうな状況で、それらと連結するための階段、通路がみられる。調査着手前の状況としては開口部付近にかなり土が堆積しており、玄室内では、須恵器片と骨片とが散乱していた。

玄室：長さ2.05m、開口部巾0.85m、中央部巾0.83m、奥壁巾0.77mである。平面形は長方形を呈し、床面の傾斜はかなり強い。横断面形は、奥壁では天井部の中央がやや盛り上った台形で、中央部では右壁上部が丸みをおびた台形を呈する。開口部は天井部・西側壁とも剥落するが、残存部から推定すると台形といえよう。天井部は、全体的に左側にくらべ右側の方がやや低くつくられている。

ノミ痕は、奥壁では上部においてはいわゆる“打ち込み型”が多く、下部ではやや粗雑で上方より下方に左斜めに打ち込んでいる。天井部・床面および側壁では、開口部から奥壁に向ってのいわゆる“V字状型”が一般的で、他の玄室とのきわだった相違は見られなかった。

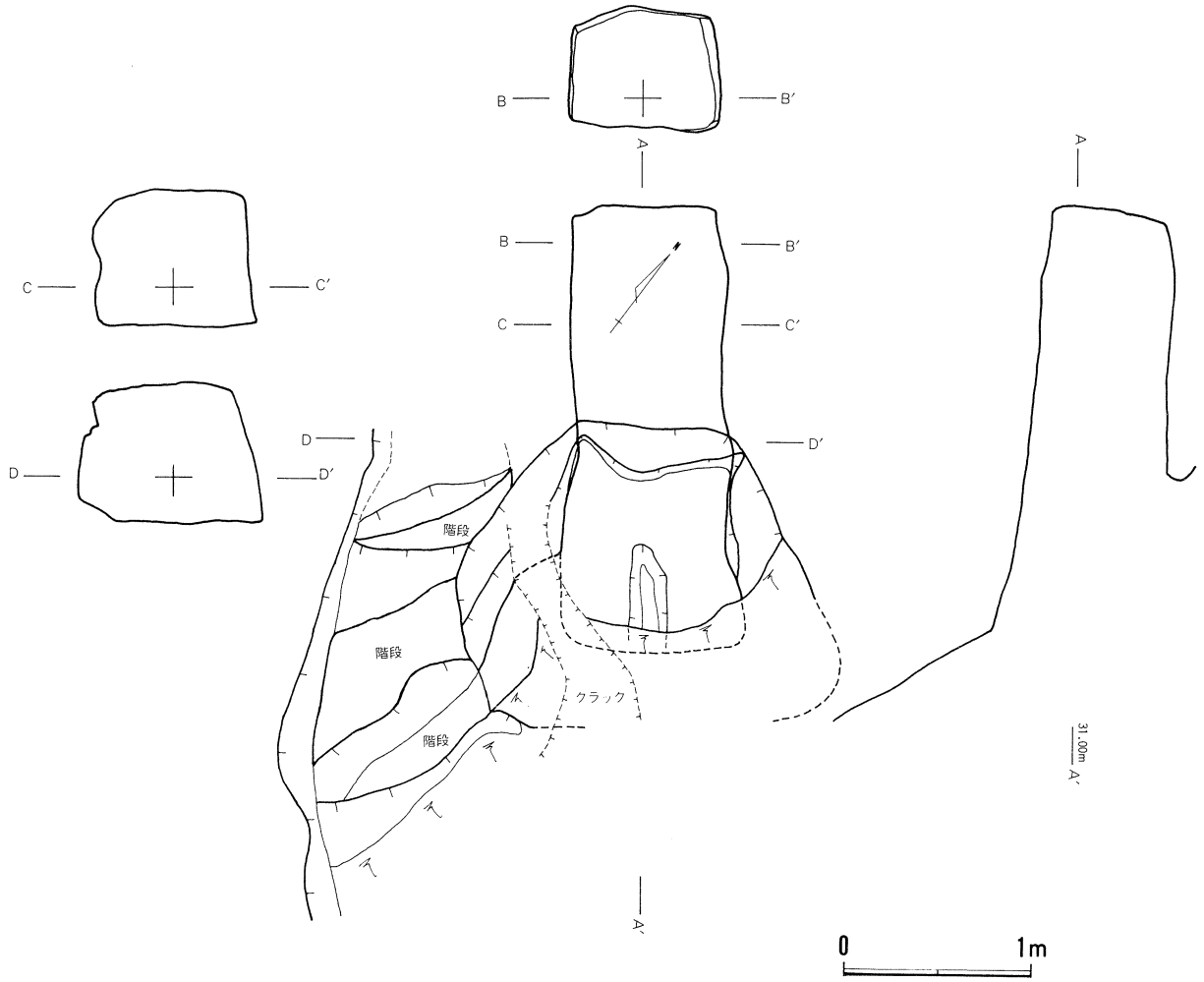
墓前域：床面前端巾1.15m前後で、長さ0.84mが残存し、その平面形は菱形とみられる。残存する床面の右外側に大きく認められる人為的加工面を、その本横穴よりを墓前域袖部、外側を階段（第　図）とすると、本墓前域は左外の張り出し部をも袖部として、大きく袖を張り全体として台形につくるタイプということになる。要するに、本墓前域は床面と袖部の大部を崩落により失って極度の変形を受けたために、その形態を誤りやすい状況となってしまったと理解しておく。

床面の中央部にはいわゆる排水溝がある。巾7.8～15㎝前後で、その大部は深さ数㎝と浅く、長さ45㎝前後が残存している。

なお、本墓前域右外側には、最大巾が1mにもちかい大きな階段があって、3段を認めてみた。

出土遺物：石櫃と土器類がある。石櫃（Ⅰ－3号石櫃）は、上半部を欠失するが、墓前域左外で12－2号横穴右外に、正立した状態で出土した。位置的には12－2号横穴にちかくなるが、レベル的にはその床面よりやや高くなる。こうした状況が本横穴に所属させてみた理由であるが、あるいは12－2号横穴のものである可能性も残る。

土器類としては、玄室内から須恵器坏身片・土師器丹塗坏片等が、かなりな人骨片とともに出土した。その出土状況があたかも散乱されたかのようで床面に接したものがみられなかったことはすでに述べた。墓前域では排水溝の上部から須恵器坏片・提瓶片等が発見された。（大川）




**第14図　10号横穴実測図**

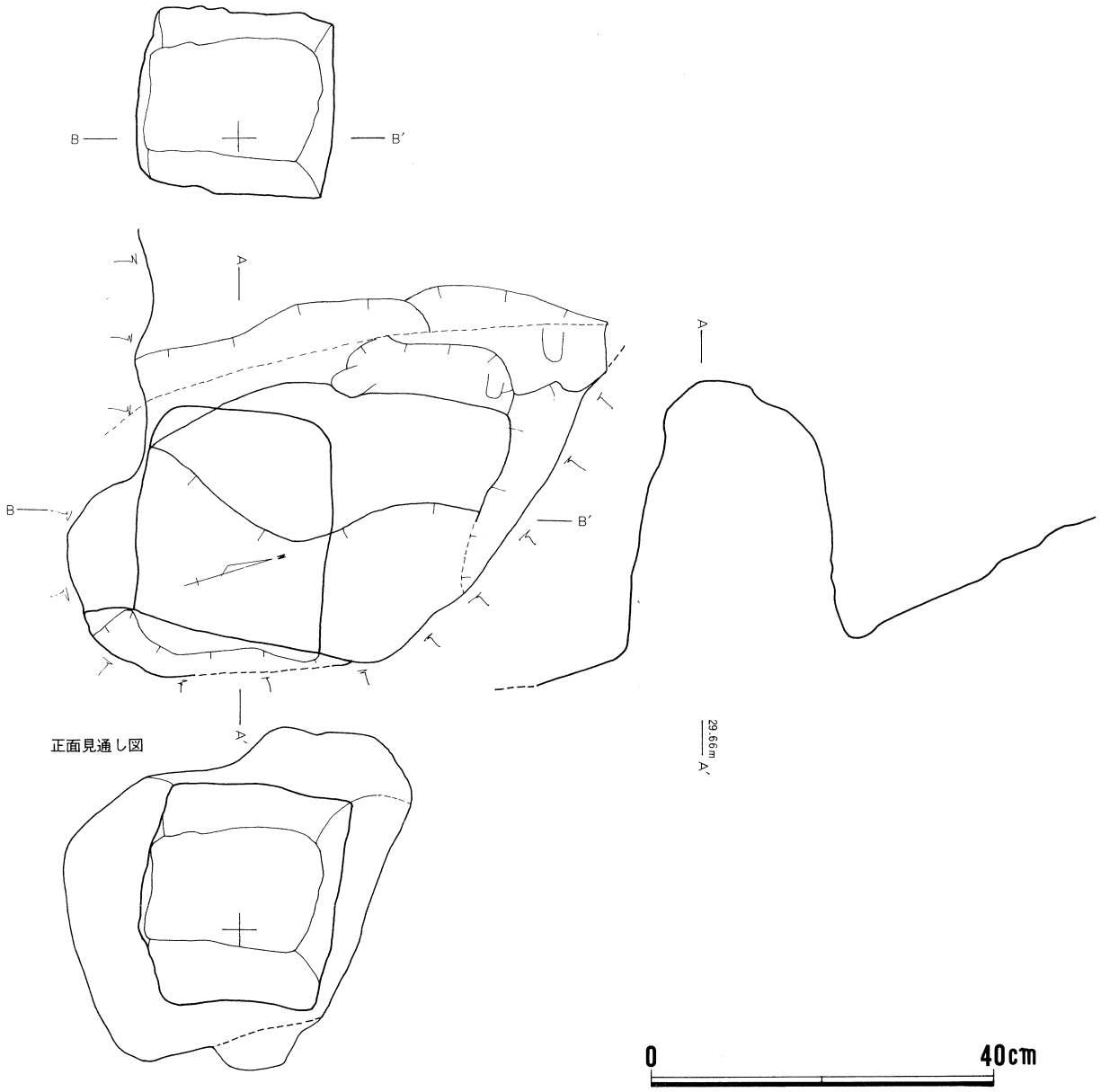
**11－1号 横穴（第15図・図版19）**

本横穴は、本群中の最西端部最下段に位置する。たぶん11－2号横穴とセットをなして配された状況で、ともにミニ横穴と呼んだもののなかで独立して存在するタイプとなる。本墓域の西端部に認められる小規模な断層差の前端を占めて、調査前は完全に開口していた。

玄室：長さ28.5㎝、開口部巾21.5㎝、同高さ25.9㎝、中央部巾20.8㎝、同高さ21.6㎝、奥壁巾20㎝、同高さ14.5㎝を測る。

平面形は長方形プランを呈し、横断面形は奥壁・中央・開口部とも方形となる。開口部は保存良好で、その正面には巾4.5～10㎝前後の平坦面が設けられる。いわゆる枠どり状を呈するのである。また、開口部上部平坦面もみられるが、それは開口部の約30㎝ほど上位にあって、奥行20㎝前後の明瞭な平坦面とそれに伴う垂直面を削り出している。墓前域は当初から設けられなかったようであった。

整形は、奥壁に打ち込み痕がみられるほか、天井・側壁・床面とも脇刃使用によるV字状痕を基本とし、やや粗雑といえるが、それらの前よりの7～8㎝前後はV字状痕を消したかのような部分もあって注目された。人為的なものか風化等の結果か、明瞭とは言いにくい状況であったが、あるいは11－2号横穴と同様に、石蓋の存在を推定できるかも知れない。（山下）



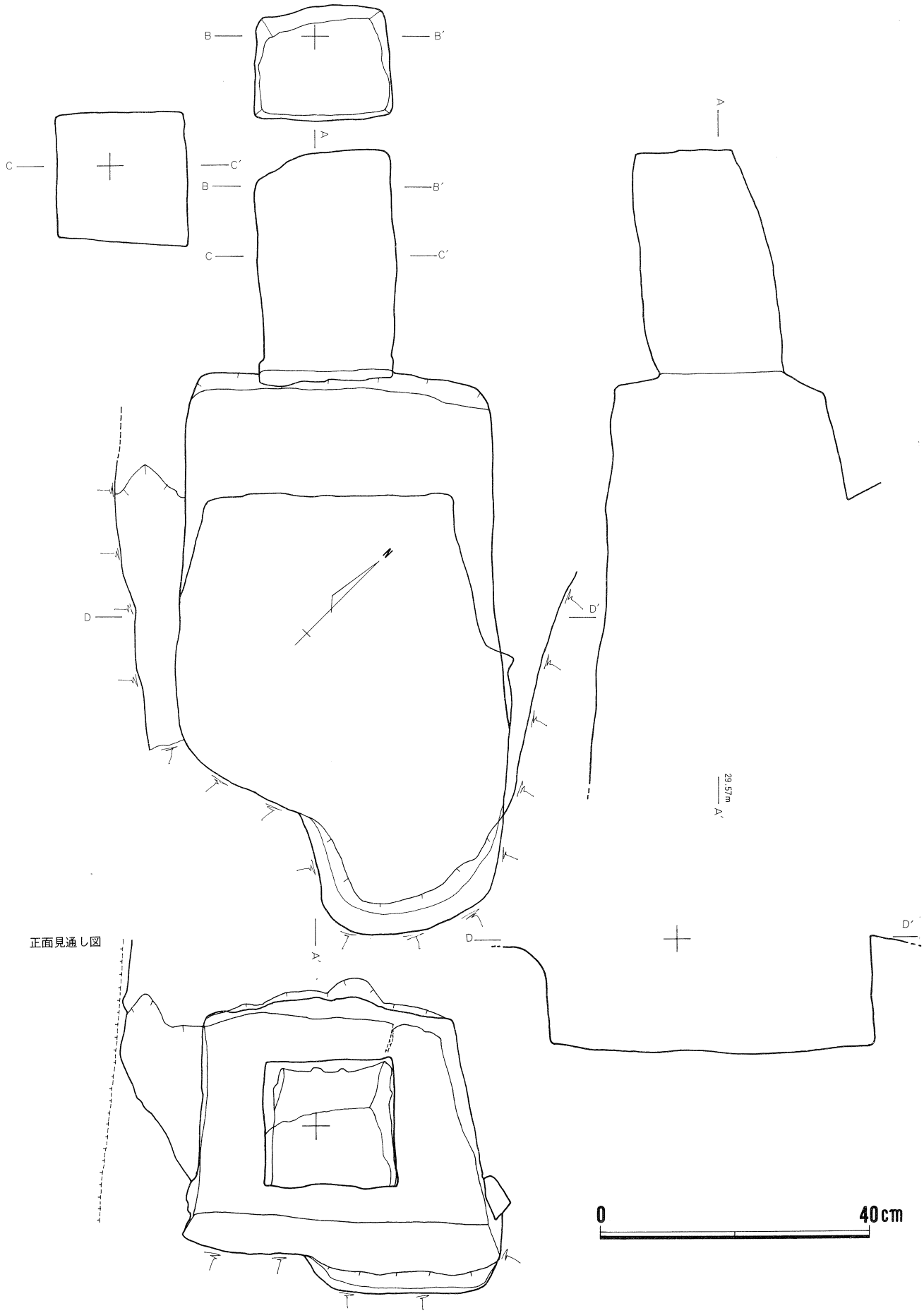

**第15図　11―1号横穴実測図**

**11―2号横穴（第16図・図版20）**

本横穴は、11―1号横穴の左側に隣接し同じくミニ横穴と称したものである。せり出した岩の先端部を穿って造られている。調査前、墓前域はほとんど埋没していたが、石蓋をした玄室が観察可能であった。石蓋はすでに何度かとりはずされた状況とみられたが、内部には3分の2ほど土砂が流入していた。

玄室：長さ33㎝、開口部巾20㎝、同高さ17.4㎝、中央部巾19.6㎝、同高さ19.5㎝、奥壁巾18.5㎝、同高さ14㎝。平面形は、奥壁部において多少の不均衡はみられるが、ほぼ長方形である。

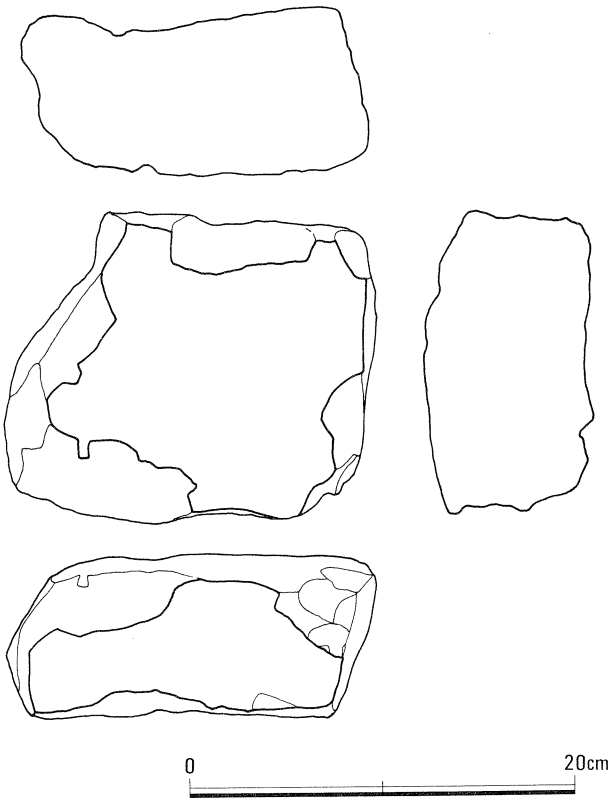
奥壁はほぼ垂直であるが、床面が開口部と奥壁の中間部をわずかに低くする構造となるので、床面との角度は95°である。その整形には、巾2.5㎝前後のノミを使用する打ち込み痕がめだって、凹凸は激しく粗雑である。




第16図　11―2号横穴実測図

両側壁・床面・天井部はともにV字状ノミ痕を基本とするやや粗雑なもので、その形状は床面・天井部とも奥側にむかって低く打っていた。こうした玄室床面あるいは玄室形状のあり方は、横穴の構造としてはかなり特異なものであって、多くの横穴ではむしろ前よりを低くする構造がみられたが、後に述べる横口式石櫃では奥よりを低くする構造が一般的なものといえた。すなわち本玄室の構造は横穴というよりも横口式石櫃に一致するものとなる。

また、本玄室の開口部よりの5～8㎝前後ほどは、各面とも平ノミ痕が明瞭に認められて、V字状痕を基本とする掘削手法のなかで際立った段差を造り出していた。明らかに石蓋挿入のための構造とみてよい。




**第17図　11―2号横穴蓋実測図**

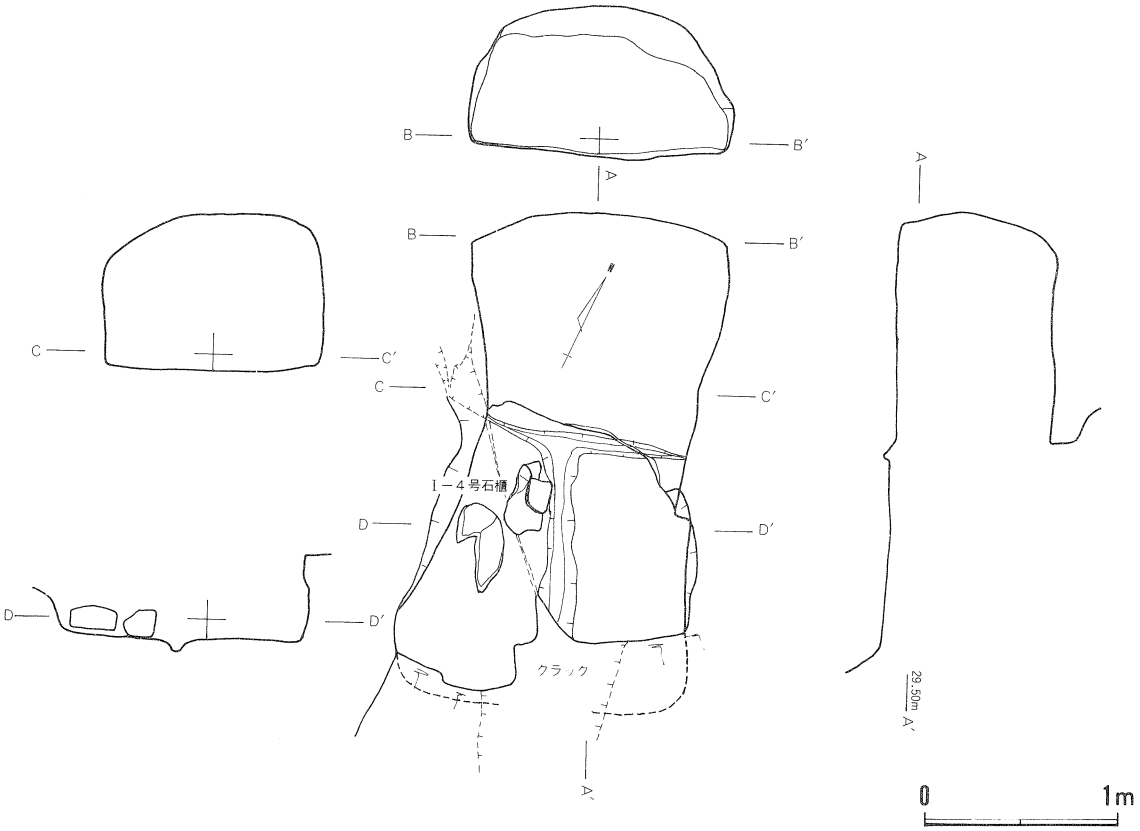
封鎖施設：開口部には、石蓋が存在した。石質は、横穴本体と同質でかなりもろい。形状は直方体で、中央部がやや薄く一部に欠損・風化もみられるが、稜線は明瞭で保存良好といえる。表裏ともによく整形されており、表はゆるやかな凸状を、裏は同様な凹状を呈している。横穴開口部への挿入を、より容易にするために、裏側をやや小さくつくっている。横穴開口部の大きさを考えると、この蓋では、完全に密封の状態にならない。また横穴床面の傾斜を考えると、蓋はやや不安定である。

墓前域：玄室の開口部の所で、床面は約6.5㎝下って、墓前域床面へと続く。開口部正面は、左右上下ともに整形され、ほぼ方形を呈している。開口部前面上部には、18.5㎝の長さのヒサシ状の造り出し部がみられる。これは、開口部より12.5°の傾斜をつけて上っている。整形はやや粗雑で、V字状痕がよく残っている。両袖部が墓前域に延びて、一見前室的な感じを与えている。墓前域の一部に屋根と壁が付けられた状態になっている。墓前域左側壁のノミ痕は、開口部付近の15㎝程は、床面と平行にやや溝状に走り、ヒサシ状の造り出しから外は、上から下へ巾の広いノミ痕（6㎝前後か）が走る。右側壁においても、風化がやや目立ったが、ほぼ同じである。

墓前域床面は、不整形ながらほぼ長方形をしている。床面はノミの刃を床面に平行にしての整形がていねいに行なわれており、特に開口部付近は顕著である。ノミ巾は明確には確認できないが、4㎝以上ではある。床面は、ほぼ4°の傾斜で下るが、開口部付近では、右側（11―1号横穴側）から左側へ、ほぼ5°の傾斜をつけて下る。また先端部分では、床面の中央部がやや凹状（深さ1.8㎝）を呈している。

なお、本墓前域前端左半部には、巾数㎝、深さ1㎝前後の溝をもって巾30㎝、長さ10㎝前後の区画が認められた。方形区画墓前域の一種と扱ってよいものであろうとしたい。

出土遺物：玄室内の流入土中から、若干の骨粉が発見されたほか、特記すべきものはなかった。（山下）




第18図　12―1号横穴実測図

**12―1号横穴（第18図・図版21）**

本横穴は、11―2号横穴の左側というより、むしろ8号横穴の右下に近い。調査前、3分の2以上開口しており、開口部内側で25㎝ほど、奥壁部で10数㎝前後の埋土がみられた。

玄室：長さ1.20 ㎡、開口部巾1.00 ㎡、同高さ0.81 ㎡、中央部巾1.25 ㎡、同高さ0.82 ㎡、奥壁巾1.32㎡、同高さ0.80㎡。平面形は、口の広いズングりしたフラスコ型を呈しており、とくに奥行きの極端な短かさが特徴的といえる。横断面は、奥壁・開口部ともアーチ型を呈する。

奥壁は、大きく外湾してその中央部がもっとも外に張り出す形状となる。その整形は粗雑で、左側部分には、剥落もみられる。ノミの使用方向は種々で、巾5.6㎝前後のノミが使用されている。左側上部では、一部に、刃を壁面に平行にしての使用もみられるが、左側壁との接点は、不明確で、また天井部分も低い。右側壁との接点は明瞭なコーナーをつけている。奥壁中央上部に、巾5㎝弱のノミ痕がみられるが、刃の先はほぼ中央に巾0.7㎝ほど凹部がある。

右側壁は、天井部との接点が奥よりではかなり明瞭な稜をなしているが、開口部に近づくにつれて不明瞭となる。整形は主に脇刃法で、凹凸は激しい。左側壁も、上部において一部にノミの刃を壁面に平行にして使用しているが、多くは脇刃によっている。

天井部・床面の状況もかなり凹凸が激しい粗雑なもので、整形は脇刃法であった。

開口部の右半部はクラックによる破壊をうけて、いわゆる雨落ち部はその左半部を残存している。この開口部直下には床面段差が認められたが、その形状は高さ数㎝から5㎝前後を有しながらも、巾数㎝から10㎝前後を測る溝状遺構とみなすことも可能な状況であり、かつその前方の墓前域床面より全体と

して数㎝は低い構造が認められた。

開口部付近の左側壁も特徴的であった。すなわち、玄室側壁のみが、雨落ち・床面段差（溝状遺構）より約30㎝ほど前方まで延長する構造となっていた。加えて、その正面観は床面巾で10㎝前後の平坦面をつくることになるが、開口部右半部がクラックにより破壊されているとはいえ、少くとも対称となる構造ではなかったものと観察される。

墓前域：平面形はやや不整形ながら台形といえる。前端部と、右側壁を大きく剥落して欠失するが、それでも残存する床面上の右側壁面痕跡をみると、床面段差を境に大きく外方にひらく構造となっている。よって、先述の開口部にみられた左右の相違は、墓前域床面および側壁の相違となって表現されたといえよう。

床面中央部には、床面段差から発する排水溝がみられた。巾10～15㎝、深さ７～８㎝前後であるが、その前端部ではクラックにより大きく変化していた。

出土遺物：石櫃と土器類が出土している。石櫃は、Ｉ－４号石櫃で、墓前域右側の床面に接して、小孔部を下方にむけた状況で出土した。全体に欠失多く、形態の復元やや困難である。本石櫃に隣接して、長さ43㎝・厚さ12㎝で平面形を隅丸長方形といえる板石が発見された。剥落・欠失が多く、石櫃として図示するのは躊躇せざるを得なかったので、石櫃ナンバーを付することは避けたが、一部には良好なノミ痕もみられるので、あるいは石櫃の一種である可能性もあった。その場合には、Ｉ－５号石櫃（14号横穴）の屋根形に類似する蓋である可能性が強いかも知れない。

土器類は、須恵器と土師器の坏類破片が墓前域から出土しているが、多くは撹乱土層中であった。(山下)

**12－２号横穴（第19図・図版22）**

本横穴は、12－１号横穴の右下に位置するが、本調査中新たに発見したもので、調査前は完全に埋没していた。奥壁部では16㎝前後の埋土がみられた。

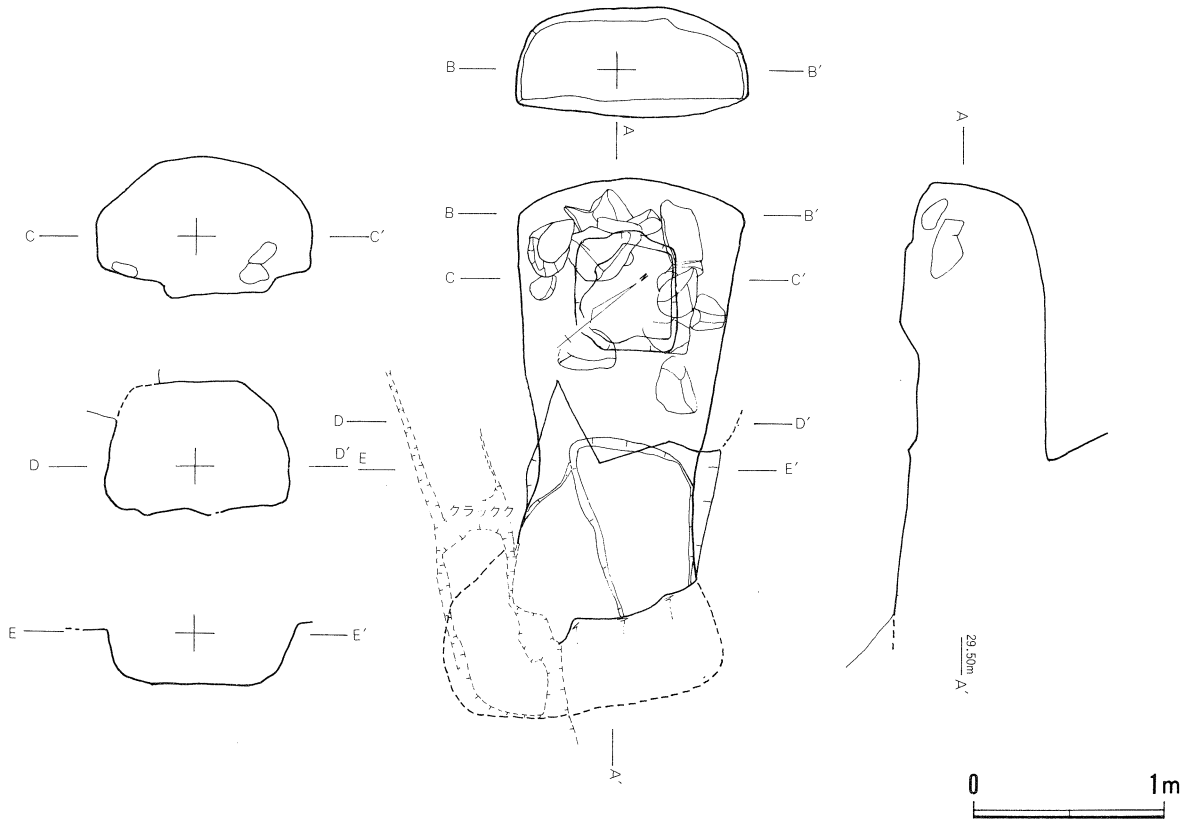
玄室：長さ1.55ｍ、開口部巾0.80ｍ、同高さ0.71ｍ、中央部巾1.05ｍ、同高さ0.68ｍ、奥壁巾1.17ｍ、同高さ0.43ｍ。平面形は、やや開口部の広いフラスコ形を呈する。

奥壁は巾に対し高さが低く、天井部、側壁部、床面との区画が明確でない。整形はやや粗雑で、巾4.6～4.7㎝と3.0㎝を測る２種のノミが使用されている。後者は、刃の中央部0.5～0.6㎝が凹状をしており、〝刃こぼれ〟の痕跡と考えられる。ノミの方向性としては、右側壁側では壁面に対して左下りに打ち込んだものが多く、左側壁側でも同様な打ち込み方をしているものが多い。

奥壁部から玄室中央にかけての側壁は、天井部との境が明確ではなく、断面からみると、アーチ型をしている。側壁は低く、多少外傾している。側壁面の整形はやや粗雑である。右側壁でも、奥壁でみられた特殊なノミの使用がみられ、また開口部付近では、一部に巾６㎝のノミの使用もみられる。左側壁では、さきの特殊のノミを壁面に平行に使用し、水平から10°前後の角度をつけて打ち込んで整形している。また開口部付近では、巾約1.5㎝の、刃部がかなり薄いノミが使用されている。

天井部は全体的に低く、縦断面形からみると、奥壁部から40㎝ほどは、18°の傾斜で下り、以後開口部にかけては、ほぼ水平でのびている。整形は、巾1.8～1.9㎝のノミも使用されているが、特殊ノミの使用が目立つ。ノミは脇刃部分を多く使用しており、凹凸が激しい。特に開口部付近は、ノミ痕が３～4.5㎝の深い溝をなし、ツララ状となる。

床面も一般に粗雑で荒いノミ痕が目立っていた。なかでも、奥より中央部には、50×60㎝前後の範囲と大きなノミ痕で周囲よりやや深く削平した構造が指摘できた。かなり荒い状況と観察できたが、こうしたあり方を石櫃安置のための施設と理解しておこうと思う。なお、本床面には、かなりの礫が散在していたが、多くは床面からやや浮いた状況であり、石櫃もしくはその一部といえる例はまったくみられ




**第19図　12―2号横穴実測図**

なかった。

開口部は、一見すると天井部の左半部から左側壁にかけてと左側壁の下端部が残存するようであるが、詳細に検討すると、そのすべてが崩壊をうけているらしい。この部分の床面には床面段差と墓道とが認められる。その構造は墓道が左側壁にまで接して、その右半部にのみ段差が設けられて、玄室と墓前域の区画としていた。

墓前域：平面形は長方形といえるが、前端部は剥落をうけてかなり大きく崩壊している可能性がある。

本墓前域の左側壁に接して、墓道が認められた。深さは、大略数㎝から5～6㎝前後で浅いが、巾は65～80㎝前後と広い。

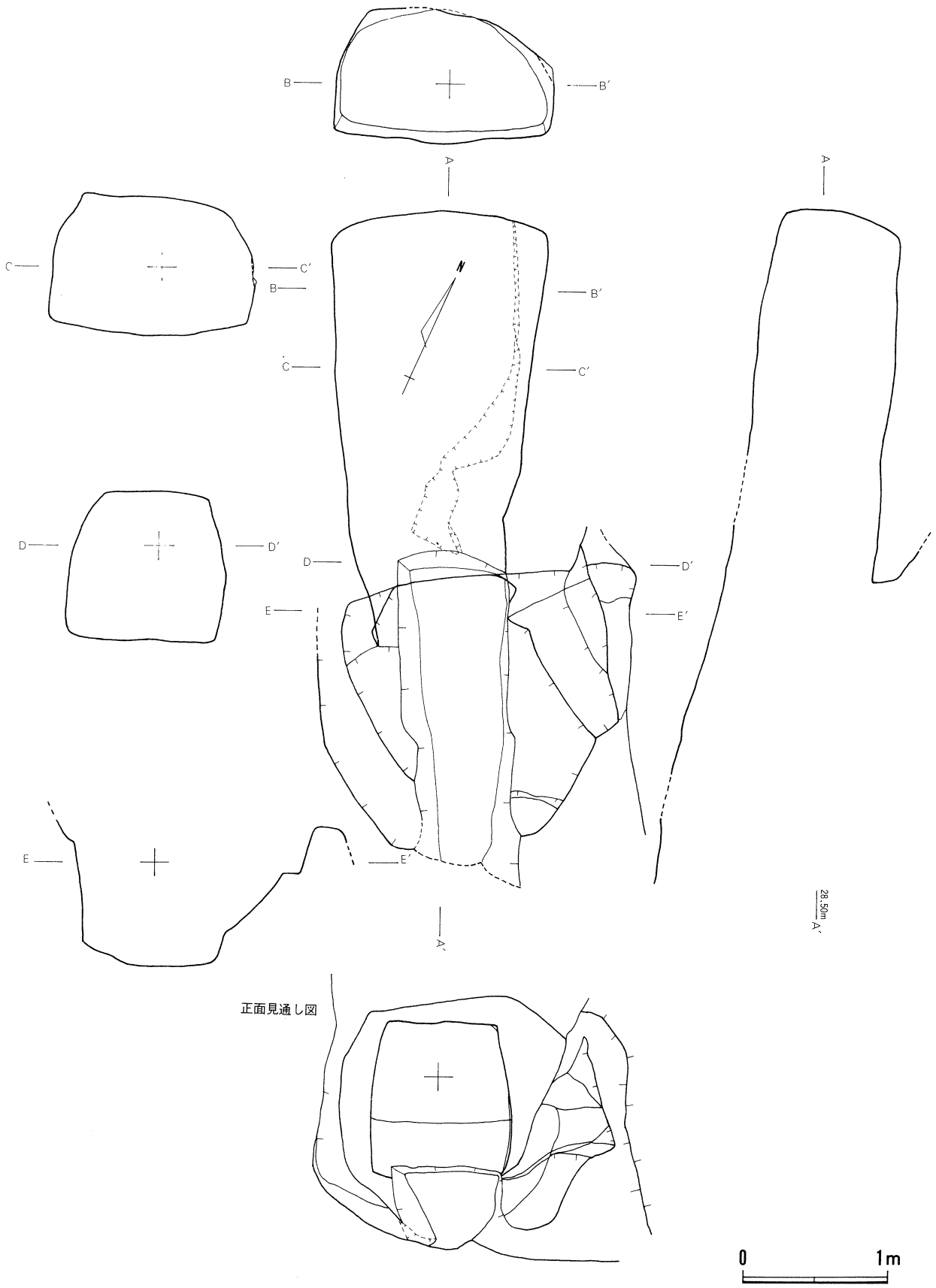
出土遺物：玄室内上部よりかなりの骨片が出土した。また、本横穴右側から、すでに述べた10号横穴の溝を穿った切石が検出されている。出土レベルが、当横穴墓前域床面よりもやや高位置であったので、10号横穴のものとして一応扱ったが、当横穴のものの可能性もないとはいえない。他に、若干の須恵器・土師器破片があった。

（山下）

**13―1号横穴（第20図・図版23）**

本横穴は12―2号横穴の左下、12―1号横穴の直下にあり、それはA群のほぼ中央部最前列に位置する。調査前、3分の1ほどが開口して玄室最奥部で約15㎝前後の埋土がみられた。また、開口部付近の床面上には、厚く堆積した土砂の上部にかなりな大礫を集積して、あたかも封鎖施設のような観を呈していたが、検討の結果、本横穴に伴う施設とは認められなかった。

玄室：長さ3.06ｍ、開口部巾0.86ｍ、同高さ1.05ｍ、中央部巾1.29ｍ、同高さ0.95ｍ、奥壁巾1.40ｍ、




第20図　13―1号横穴実測図

同高さ0.85m。平面形は、開口部より徐々に奥壁に向けて左右均衡に広がるやや胴の長いフラスコ型を呈している。

奥壁面は、比較的良く整形されているが、その形状はやや歪んで、左側に対し右側がかなりの出張りをみせている。クラックの存在を意識した結果かとも判断される。奥壁を縦断面形でみると、床面からほぼ垂直に40cmほど上り、以後徐々に内傾して天井部に接していく。床面との傾斜度は97°である。ノミは巾4.0cmで使用されており、壁面に対して、左下りに打ち込まれた状態が多い。

右側壁の整形は巾が4.5cmのノミが使用されており、多くは脇刃で施された痕跡が良く残っている。その状況は奥壁部に行くにしたがって荒く粗雑になっているが、開口部の近くで一部ノミの刃を壁面に平行にして整形したところがみられる。床との境はきわめて明確である。

左側壁には、全体に大きなクラックが入っており、剥落が大きく、とくに奥部では著しい。開口部からそのまま延びている壁は、1.3mあたりから玄室内への内傾を強め、天井との境を不明確にしていく。中央から奥壁あたりでは、壁の高さは45cmくらいしかない。整形は、ノミの脇刃を主にしており、クラックのためか、ノミの使用も右側壁に比較してやや細かい。

天井部は、縦断面からみれば、奥壁部から20cmほどで20°の傾斜で上り、ここで大きなクラックが天井を横切っている。天井はこのクラックを境にして、5cmほどの落差をつけて、少しの間弧を描き、以後開口部まで一気に5°の傾斜で下っていく。この弧を描いている部分は、中央部でわずかであるが、巾5.9～6cmのノミを壁に平行にして整形している。全体的に玄室内は、幅に比して天井が低い。クラックによるものかとも考えられる。

床面は、横断面形からみれば、両側壁側に比して中央部がやや低くつくられていて、排水を意識した構造とみることができる。ノミ痕はかなり明瞭に残るが、全体にやや荒れた様相で凹凸が激しい。

開口部の状況は良好で、天井部で高さ20cm前後、左右両側壁では巾30cm前後の平坦面が造り出されている。また開口部直下の床面上にはやや不明瞭ながら段差を認めた。ノミ痕は荒く凹凸に富むが、墓道右側壁に連続する床面段差を強いて認めてみた。

墓前域：右袖部を大きくクラックで欠失するが、その本来の平面プランはおよそ菱形といえよう。すなわち残存する左袖部は直角三角形状をなす傾斜面で、その中間に巾狭の平坦面2面をもって2・3段の構造につくっている。なお、クラックで破壊された右袖部の外側には3段ほどの階段がみられる。

床面には墓道が認められたが、その左側壁は玄室側壁がそのまま延長して高さ20cm前後の段差をつくり、右側壁は玄室側壁より20～30cmほど内側に高さ10cm前後の段差を認めた。すなわち、床面の右側端部にのみ玄室床面から連続する平面があって、それは前方にかなり強く傾斜しながら外から内側に低くなる緩斜面となっていた。

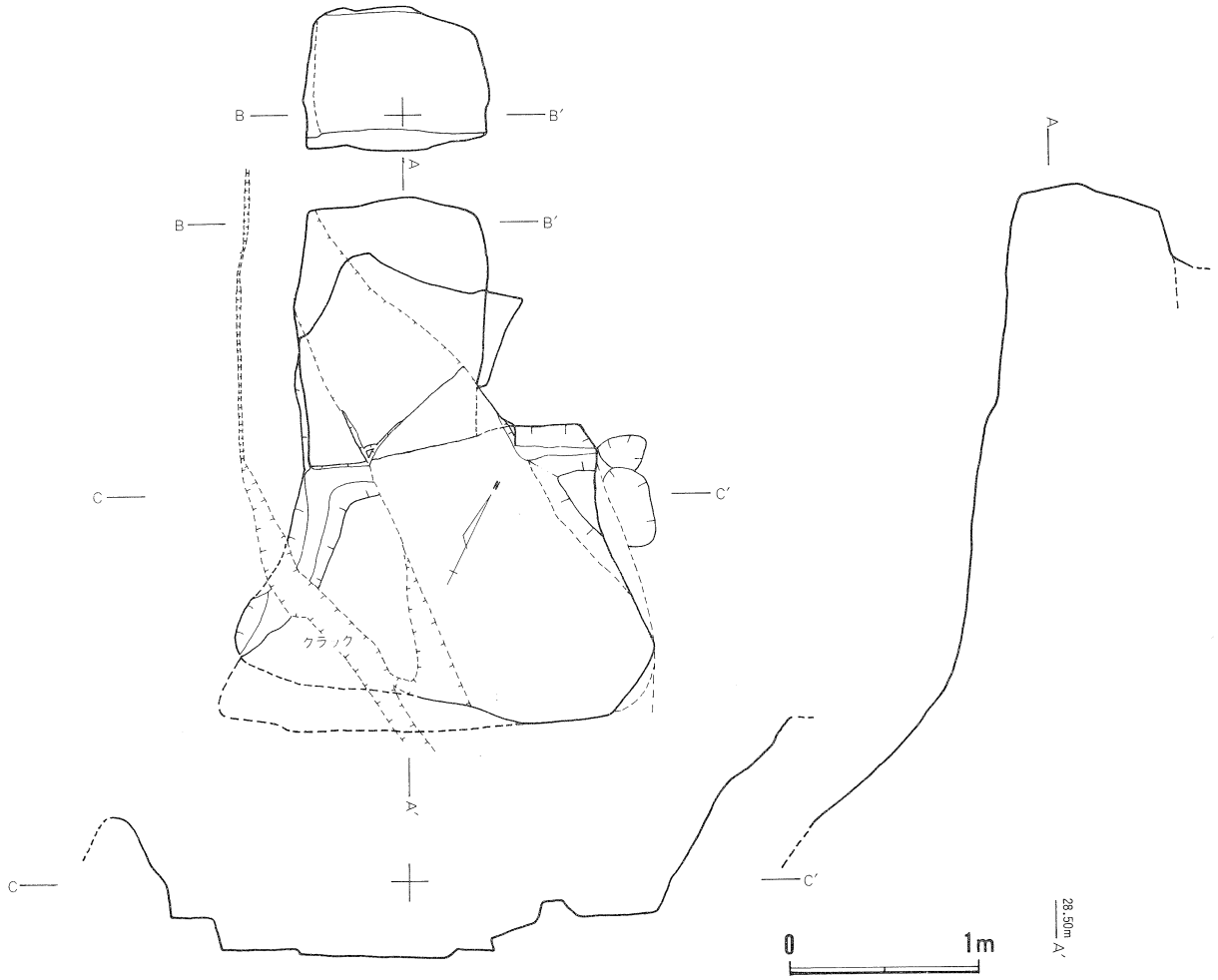
出土遺物：玄室内から開口部付近にかけて土師器甕・土師器坏・須恵器坏・須恵器坏蓋等が出土した。量的にはかなり多かったが、いずれも覆土中からで床面に密着したものはみられなかった。また、墓前域からは、須恵器の坏・蓋・鍔・長頸坩等が出土したが、いずれも覆土中であった。（山下）

**13―2号横穴（第21図・図版24）**

本横穴は、13―1号横穴のやや高位にあり、それは7号横穴の直下にあたる。調査前から、天井部の一部が観察し得たが、明確でなく今次調査中の新発見と扱っている。

玄室：長さ1.43m、開口部巾0.89m（推定）、中央部巾0.99m、奥壁巾0.88m、同高さ0.53mで、平面形は長方形プランとなる。天井と側壁の大部分が崩落して、内部には黒色土と砕石が充鎮していた。

奥壁の横断面形は方形を呈し、床面との傾斜角は96°である。そのノミ痕巾は4.0～4.1cmと6.0cmの2種があり、多くは後者が使用されているが、かなり粗雑な状況でブロック状の凹凸が目立っている。




第21図　13―2号横穴実測図

両側壁とも大きく崩落していることはすでに述べたが、左側壁の残存部では巾 6.0～6.2 ㎝のノミ痕が観察された。

床面も左前端部を欠失するが、残存部でのノミ痕は脇刃法で凹凸は激しい。その開口部付近には高さ10㎝前後の明瞭な床面段差が認められ、現状で35㎝ほど残存し、やや鈍角にひらきながら墓前域右側壁に連続する構造につくる。

墓前域：右半部のみが残存した状況であるが、平面プランは台形であったものと推定し得る。

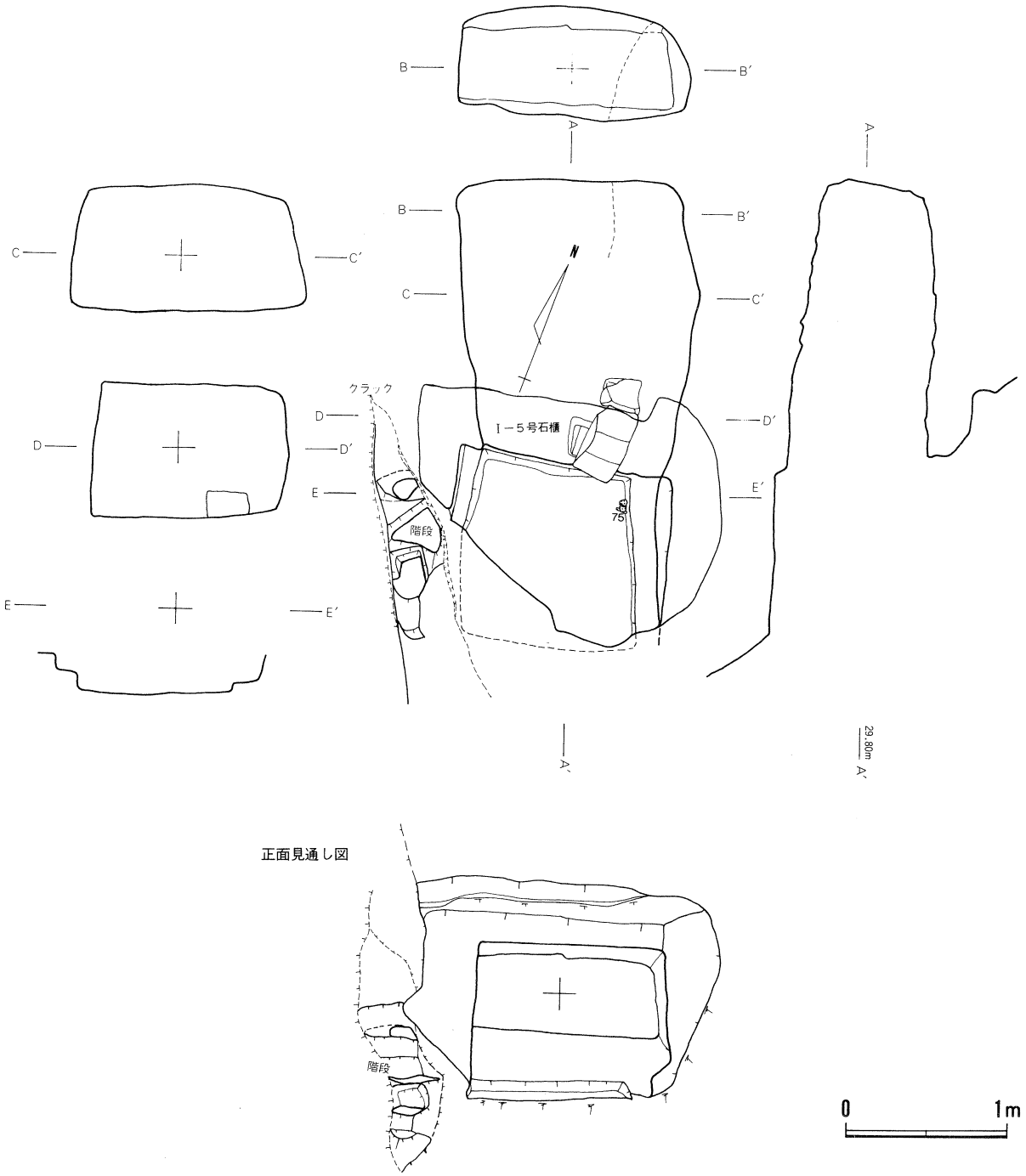
前述の床面段差は溝状をなしていて、玄室前方から右側壁にまで及んでいるが、溝巾は玄室前方で6～7㎝、側壁よりでは10～15㎝ほどとなり、その深さは数㎝前後の浅いものであった。

出土遺物：若干の土器細片が出土しているのみであった。　（山下）

**14 号 横 穴（第22図・図版25）**

本横穴は、7号横穴の東側で、9・8・7号から連続した東端の位置を占める13―2・15号横穴の上段となっている。調査着手前の状況としては、天井部数10㎝ほどが開口し、内部に土砂が流入していた。

玄室：長さ 1.79 ㎡、開口部巾 1.14 ㎡、同高さ 0.86 ㎡、中央部巾 1.44 ㎡、同高さ 0.80 ㎡、奥壁巾1.36㎡、同高さ 0.47 ㎡である。平面形は、長方形を呈し、床面の傾斜はかなり強い。横断面形は、奥壁・中央部・開口部とも台形といえる。開口部上面には、長さ 1.50 ㎡、巾25㎝前後を測る上部平坦面がもうけられ

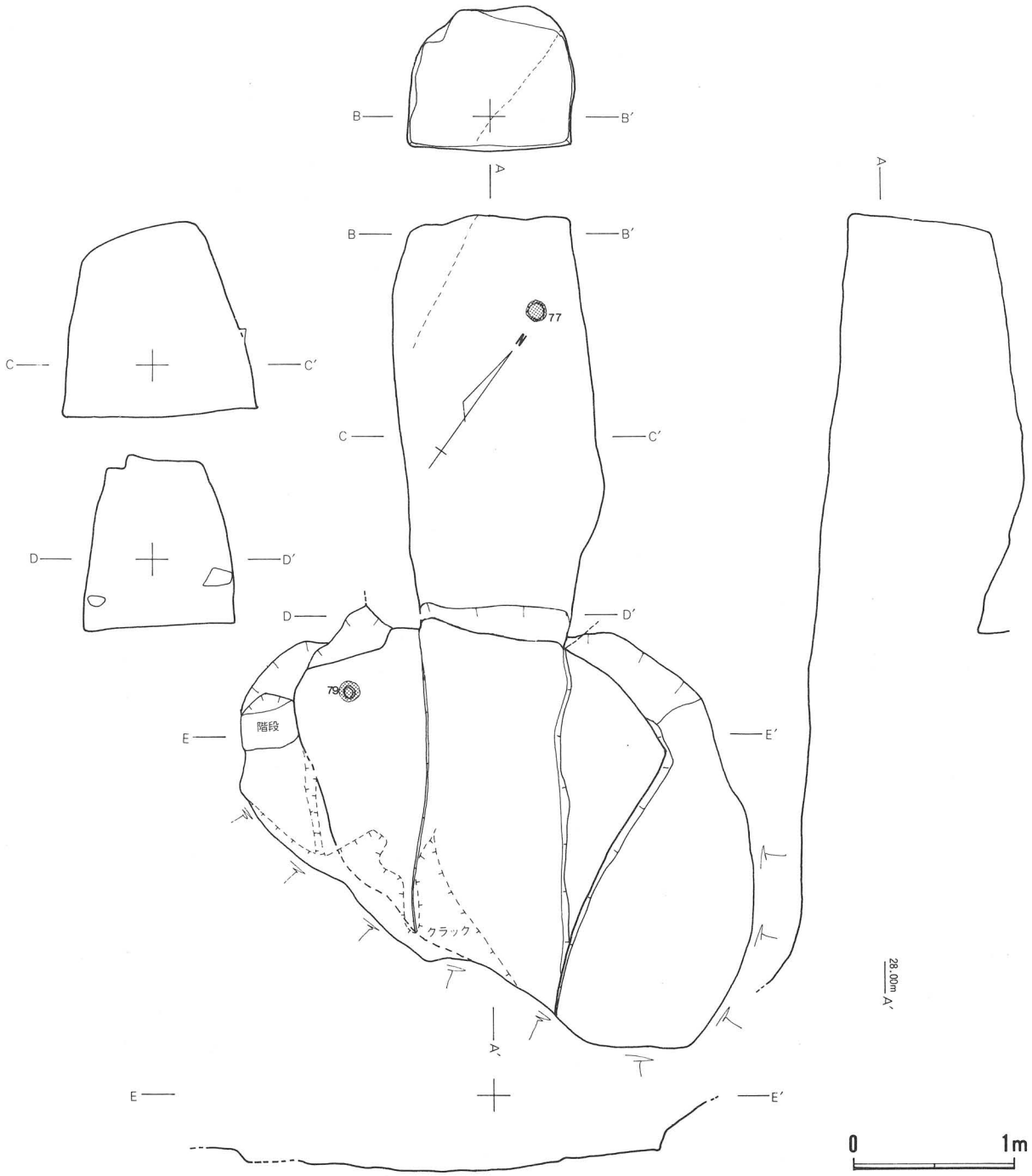



**第22図　14号横穴実測図**

ている。

ノミ痕は、奥壁ではいわゆる“打ち込み形”が多く、両側壁では開口部から奥壁にむかっての“V字状型”痕が観察された。ノミ痕は巾4.8～4.9㎝と6.0㎝であった。

開口部の構造は特異なもので類例をもたないといえるが、それは左袖のみが天井部前端の厚みの上端から出て、墓前域前端に連続していた。すなわち、玄室左側壁が墓前域にまで連続して、開口部天井と右側壁は別個の構造となるのである。また本開口部は玄室中心軸に対して、大きく右方向をむいた状況を示している。また、床面段差が認められて、その高さは10㎝前後を測った。




**第23図　15号横穴実測図**

墓前域：前端部を大きく崩落しているが、残存する両側壁の外開き傾向から推定すれば、本来の平面プランは長方形である可能性がつよい。

本墓前域の左袖側には巾10～15㎝前後で、玄室床面から連続する平坦面がみられ、右袖には側壁ラインの外側に巾10㎝前後で玄室床面より7～8㎝も高い構造となっていた。こうした両側の特異な部分をのぞく中央部は玄室床面より7～8㎝低く墓道と認め得る状況であった。確かにその平面プランは奥端部がきわめて端正につくられている点でも特異であったが、墓道として扱い、あわせて13－1号横穴と

よく対称的な構造を示す点に注目しておきたいと思う。

ノミ痕は、開口部方向にむかう“Ｖ字状型”痕で、その整形はかなり粗雑といえるものであった。なお、本墓前域の右外側に階段状遺構がみられる。

出土遺物：玄室内遺物は、人骨片と石櫃があった。人骨片は、流入土に混じった状況で小量が発見された。石櫃（Ｉ－５号石櫃）は開口部付近の床面左半部で一部を床面段差にかける状況で出土した。無孔の屋根形蓋で棟部を上位にする正方向といえた。墓前域からは、土師器高坏片が出土している。(大川)

**15 号 横 穴（第23図・図版26）**

本横穴は、14号横穴の直下で、13－２・16号横穴と並列する位置にある。調査前、３分の１ほど開口しており、開口部で60㎝、奥壁部で５㎝の流入土がみられた。

玄室：現存の長さ2.43ｍ、開口部巾0.88ｍ、同高さ1.02ｍ、中央部巾1.22ｍ、同高さ1.22ｍ、奥壁巾0.97ｍ、同高さ0.82ｍ。平面形は、開口部でややせばまってはいるが、ほぼ長方形にちかい。

奥壁の傾斜度は、87°で、床面から天井部にむかって垂直にのびる。その正面観は、右壁側が左壁側より若干前に出ており、各壁面との稜は比較的明瞭であるが、うち天井部との接点は右側壁が左側壁より約15㎝前後低くなって、やや歪んだ形状といえる。

両側壁内には何条かのクラックが入っていて、そのためかやや不整形な平面プランとなっているが、それでもノミ痕としては水平方向のＶ字状使用が良好に残存している。

床面には大きなクラックが走っており、やや粗雑ではあるが平坦に整形している。ノミの使用法はＶ字状で、右側壁前から左側壁奥方向への走行が目立っている。

開口部は、右側壁前端部に比較的大きな剥落がみられるが、その正面観は上部に現況最大巾10㎝ほどの平坦面が造り出され、左袖に残存して連続する構造となる。また、床面に玄室と墓前域を区画する施設はみられなかった。

墓前域：面積としては１・２・３号横穴に続く規模といえるが、その平面プランは両袖部を大きく突出させる菱形を呈するものとなる。

中央には、玄室巾をほぼ延長する墓道が認められた。その認定は、左側壁が６～７㎝ほどの段差をなして明瞭であることから、中央部（玄室前方部）と右側壁でも強いてこれを認めることとした。

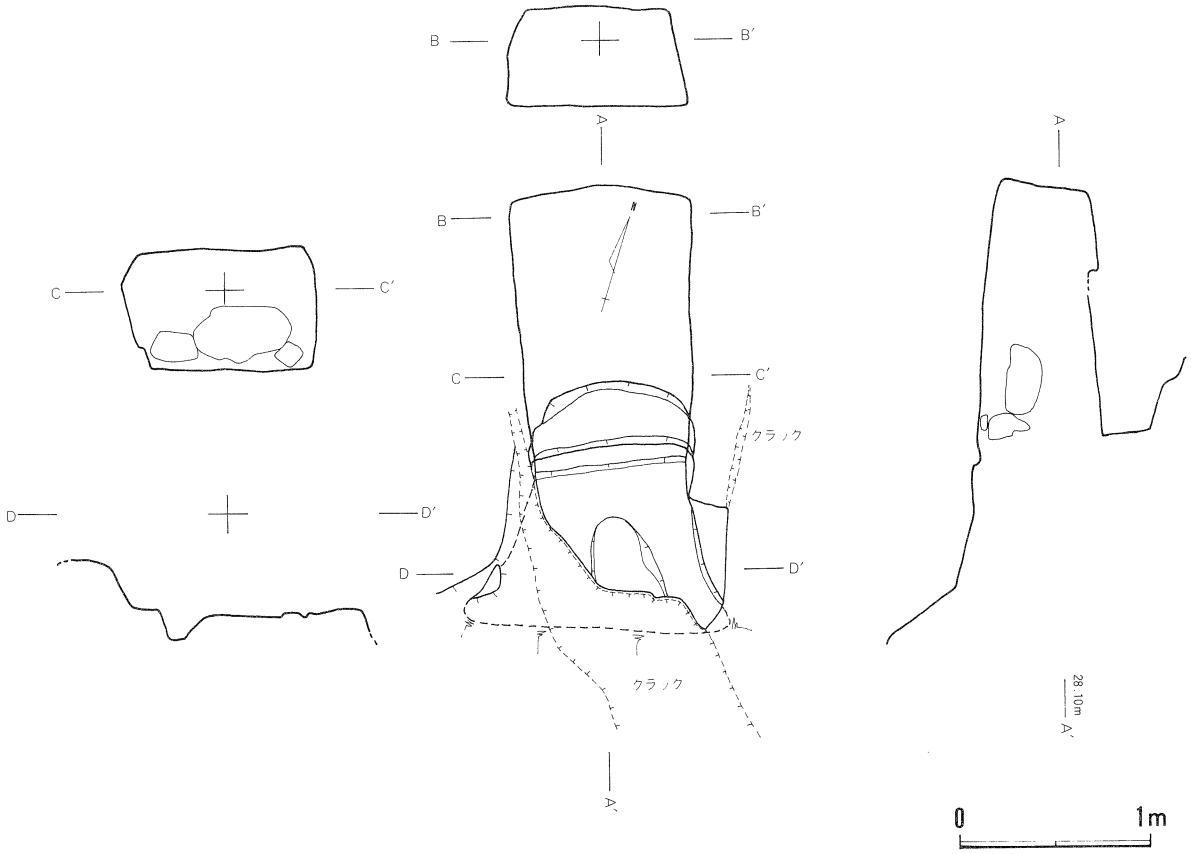
出土遺物：玄室内遺物としてはかなりな人骨片と土器類があった。人骨片は覆土上層中に混在していたが、土器類のうち須恵器坏身が玄室奥よりの床面上から検出されたほか、開口部付近にかけて須恵器坏・蓋等が出土したがそれらはやや浮いた状況にあった。

墓前域遺物としては、開口部の右外側付近に集中する土器片が多く、なかでも須恵器長頸坩・坏身は並列して床面上から検出された。(山下)

**16 号 横 穴（第24図・図版27）**

本横穴は15号横穴の東隣にあって、それは17号横穴に連続する中間の位置にある。調査着手前の状況としては、開口して玄室内に大礫と土砂とが堆積していた。

玄室：長さ1.47ｍ、開口部巾0.81ｍ、中央部巾0.80ｍ、奥壁巾0.95ｍである。平面形は開口部よりも奥壁の方がやや広い長方形を呈し、床面の傾斜はかなり強い。横断面形は、奥壁が台形、中央部・開口部が方形だが、全体的に風化が激しく、天井部と両側壁にはかなり大きなクラックが入っていた。両側壁は、開口部天井よりも25㎝前後せり出しており、特に右壁では左壁にくらべ剥落がはげしい。開口部上面は、巾30㎝ほど垂直に整形され、その上部には、長さ95㎝、巾30㎝前後の上部平坦面が造り出されている。




第24図　16号横穴実測図

ノミ痕は、奥壁ではいわゆる〝打ち込み〟で、奥壁と床面との境はかなり明瞭であった。右側壁ではV字状に打ち込まれており整形は良好である。左側壁では開口部から奥に向ってのV字状で、下からやや上へ向っての使用法が多かった。床面は開口部から奥にむかっての走行で、かなり平坦化されていた。

開口部付近には高さ4㎝前後の床面段差が認められて、玄室と墓前域との区画としていた。そしてノミ痕の相違から、ここから墓道が発していないことが確認できた。

墓前域：長さ0.66 m、奥端巾0.80 m前後となる。右側は大きなクラックにより破壊されているが、平面プランは台形にちかいものであるかも知れない。開口部の左前方部はやや外開きに広がっているが、現状でクラックとなっている右側も同様であったかも知れない。ただし、このクラックの外側は15号横穴の墓前域となっているので、それほど大きな広がりを占めなかったことだけは確かであろう。

墓前域は、ノミ痕が玄室内に比してやや粗雑といえるが、V字状の使用法で平坦に整えられていた。

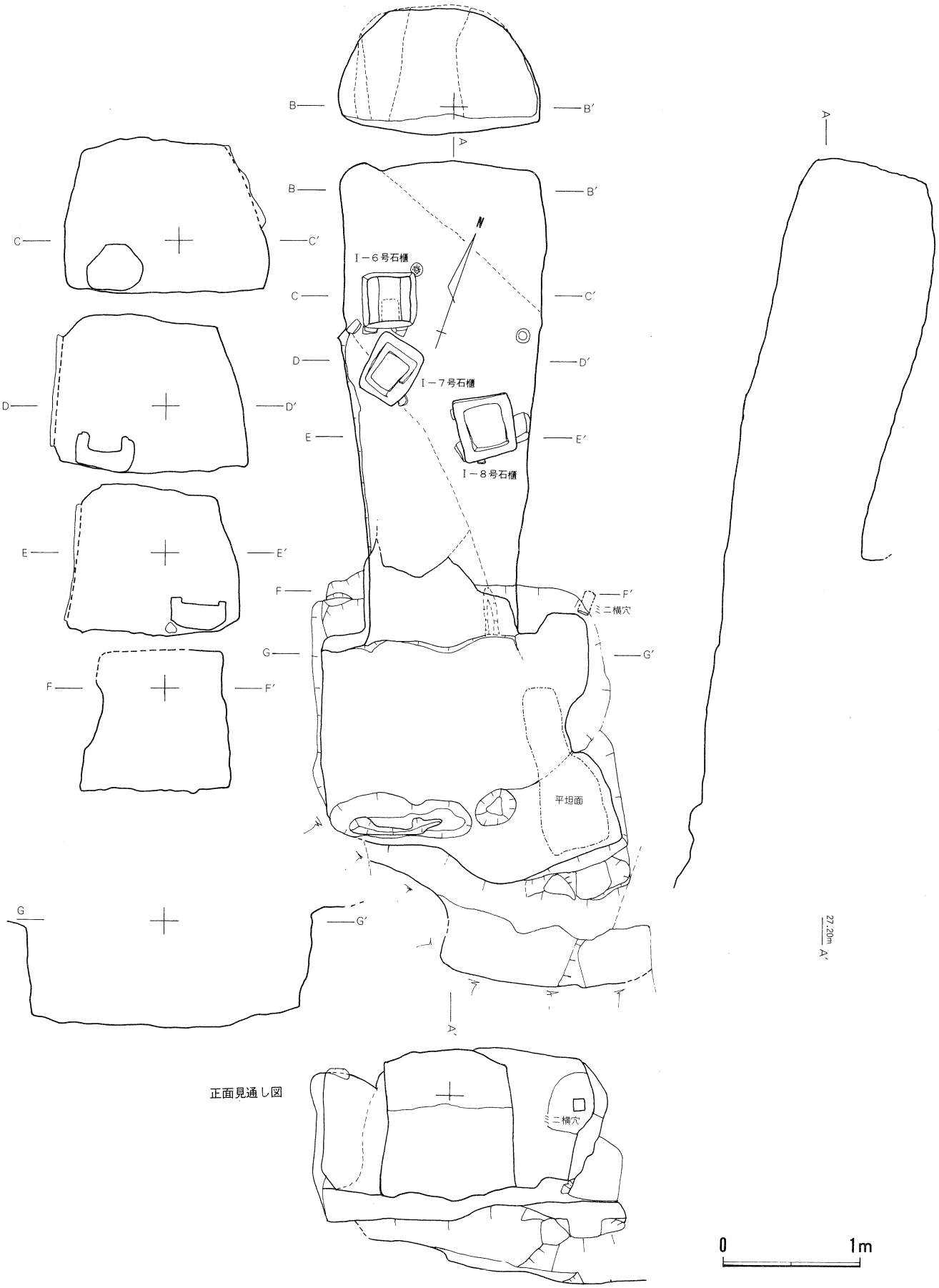
出土遺物：玄室内から人骨片、墓前域から須恵器長頸坩等がいずれも覆土中に混じた状況で出土した。

（大川）

**17 号 横 穴（第25・26図・図版28・29）**

本横穴は、16号横穴の左下に隣接し、18－1号横穴の右上の位置にある。調査前に高さ20㎝ほどが開口して、玄室内には屋根形の石櫃がわずかに観察できる状況であった。それでも奥壁附近の床面は流入土がなく露出していた。

玄室：開口部巾1.07 m、中央巾1.39 m、同高さ1.11 m、奥壁巾1.21 m、同高さ0.82 m。平面形は、開口部より奥壁が若干広くつくられるフラスコ型といえる。




第25図　17号横穴実測図

奥壁面はやや外彎していて、床面との傾斜角は96.5°であるが、床面の傾斜がかなりつよいため前傾した状況となる。その形状は角の張ったアーチ型を呈する。整形には、巾4㎝ほどのノミをかなり粗雑に使用している。ノミは左側壁側では、天井部から側壁面に沿って下方へ打ち込まれ、床部に近い一部には、下方より上方に打ち上げた痕もみられる。

右側壁は、左側壁に比して壁面がより垂直にちかい。開口部附近から1.3㎡ほどまでは全面的に剥落していてノミ痕を観察することはできない。その奥壁よりではノミ痕が明瞭に残り、巾4㎝のノミを脇刃に使用して荒く整形した後、その上面を巾5㎝ほどのノミで、刃を壁面に平行にあてて整形している。この場合、床面に近いところでは奥壁側から開口部にむけて水平にノミを走らせる整形をした状況がみられる。

左側壁は右側壁に比して玄室内への傾きが強い。その整形は右側壁より明瞭に残る状況で、手法的には右側壁にほぼ等しく、5㎝巾のノミ痕が観察できる。

天井部は、一部に剥落もみられるが、その整形は巾5㎝のノミで、刃を面に平行にする例もあるが、多くは脇刃での整形となる。

床面は、開口部附近で高さ5㎝ほどの床面段差をつけている。かなり凹凸は激しいが、摩滅のためノミ痕は明確に把握できない。

開口部は、天井前端の中央から右側壁にかけて大きく崩落しているが、いわゆる雨落ち部の正面には高さ10数㎝ほどの垂直面が削り出され、それが左右に大きくひろがって墓前域の両袖部をつくる構造が特徴的であった。

墓前域：長さ1.40㎡、巾2㎡前後で、平面プランは長方形を呈する。すでに述べたように垂直となる玄室正面とその両袖部から直角状に折れる墓前域側壁が連続してつくられる。その側壁前端付近の床面には、墓前域前端を区画するかのように溝状遺構が設けられていた。巾30㎝ほど、深さ10㎝前後で、長さ1.40㎡ほどを測る溝状遺構がその右端を右側壁の前端に接してあり、さらに左隣には長さ30㎝前後の連続部が残っていた。

こうした特徴をもつ墓前域を〝方形区画墓前域〟とよんで、本側をその典型例としてみたが、それは①平面プランが方形となること、②四辺がそれぞれの施設で区画されること―開口部側は床面段差と両袖壁面、両側壁は開口部から連続する擁壁面、前端部は溝状遺構からなる構造であった。

床面は全体に凹凸が激しいが、その中央部がやや凹状を呈して低くなる状況が指摘できた。溝状遺構といえるほどではないが、一種の排水機能を果しただろうことは推察できるかも知れない。

ノミ痕は、開口部を中心とする奥端部にいわゆる打ち込み痕がみられ、他の側壁面および床面はV字状痕を基本としていた。

なお、本墓前域には、その正面左袖部にミニ横穴が付設されていた。

ミニ横穴：超ミニ横穴とでも称すべきもので、開口部の高さ9.5㎝、同巾10.0㎝、玄室長さ21.0㎝を測り、平面プランは長方形を呈する。その位置は正面左袖部の左端部にちかく墓前域床面から約50㎝ほども高くなるが、その周辺部垂直面と前方部墓前域には明らかな整形面が設けられていた。

周辺部の垂直面には、高さ45㎝ほど、巾35㎝前後で、巾6㎝の平ノミ使用による平坦面が削り出され、いわば開口部あるいは袖部を形成していた。加えて、前方部の墓前域床面の左側壁よりには巾60～70㎝ほどの緩斜面が設けられ、明らかに同一な平ノミによる整形痕が観察された。ミニ横穴に伴う墓前域を意識した施設と認め得るものといえよう。

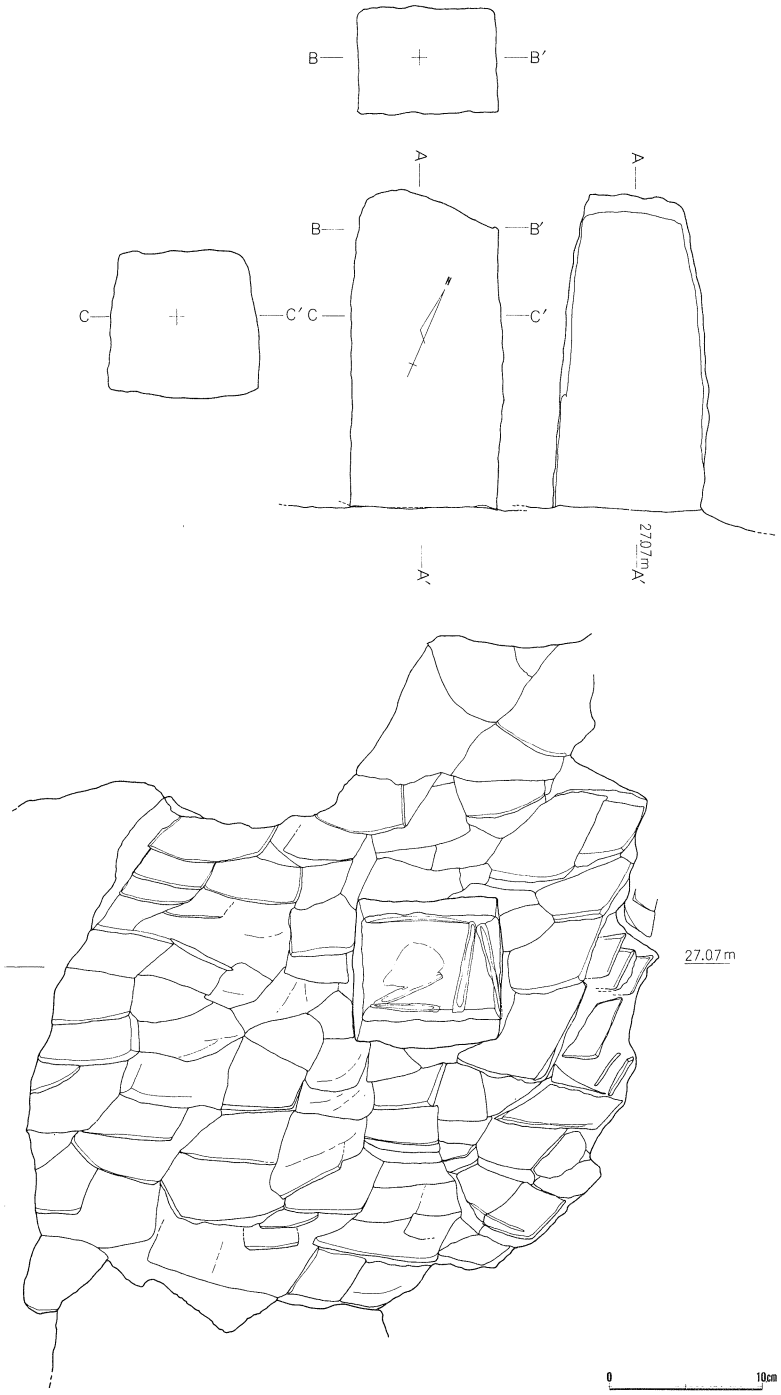
玄室は、開口部から7～8㎝までは比較的丁寧で、床面はV字状、天井・側壁は平ノミ痕を主とするが、それより奥よりはかなり粗雑で凹凸が目立ち、奥壁も大きく歪んでいる。こうした開口部付近の良好な整形は、あるいは石櫃にみられる栓や蓋を付設した構造といえるかも知れないが、積極的な根拠は

認め得なかった。

出土遺物：石櫃・人骨類と土器類とがある。

石櫃は3個あって、玄室中央部付近から床面に接した状況で発見され、奥から順番にⅠ－6～8号石櫃と命名された。

Ⅰ－6号石櫃は、奥壁から約70㎝ほど離れた右側壁よりにあって、小型方孔を有する屋根形となる。その方孔部を前方にむけ屋根の棟方向を横穴の長軸方位にほぼ一致させて、しかも石櫃下面の前半部には板状の礫3個を敷き込んで本体の安定を保つ工夫がなされていた。ほぼ確実に埋葬当初の状況を大きく変えてはいないと認め得るものである。また、本石櫃に付される栓は約1㎞ほど前方のⅠ－8号石櫃の傍らから発見された。よって、本石櫃はすでに開口して、内部には黒色土が充鎮した状況で骨片等は確認し得なかったが、方孔部付近の床面上には骨片が散在していた。




第26図　17号ミニ横穴実測図

Ⅰ－7号石櫃は、奥壁から1.2㎞ほど離れた右側壁よりで、Ⅰ－6号石櫃からわずか5～6㎝ほどしか離れていない。大型方孔を有する方形の身で、方孔部は上位に保つが、正面を玄室長軸に対して約45°前後動かしている。底面には板状の礫を敷き込んで安定を保った工夫もみられるが、現状ではやや左下りとなっていた。また、この底面には骨片も混入した状況で、本石櫃は埋葬当初の位置をわずかではあるが動いたものと見るべきかも知れない。なお刳り込み内部には黒色土が充鎮しており、その底部には骨片も残存していた。

Ⅰ－8号石櫃は、Ⅰ－7号石櫃とセットをなす蓋で、位置はそれより約60㎝ほど前方の左側壁よりとなるが、一部を床面に接していた。裏面を上位にしたほぼ水平状況で、この付近の黒色土中からは、や

や多くの骨片が発見された。

土器類の出土量は本横穴群中でもっとも多く、約50点を図化し得た。玄室内からは多く床面に接する状況で、須恵器の坏・坏蓋・甕・平瓶・土師器の坏等がかなりの完型品を含めて出土した。開口部付近から墓前域にかけては、多く床面から10～20㎝前後浮く状況で、須恵器坏・坏蓋・高坏・長頸坩・瑕・甕・土師器坏等が散在していた。かなりの完型品を含んでいたが、とくにまとまった出土状況はみられなかった。なお、注目すべき出土状況としては、ミニ横穴直下の床面に接して正位で発見された須恵器坏（図版68－103）がある。完型品でもあり、あるいはミニ横穴に供献されたといい得るものかも知れない。（山下）

**18－1号横穴（第27図・図版30）**

17号横穴の左側に接し約1㎡下方に位置する。調査前はほとんど土に埋もれており、開口部が高さ15㎝、奥行20㎝ほどあいている状況であった。

玄室：平面プランは長方形で、長さ2.37㎡、開口部巾1.17㎡、同高さ1.24㎡、中央部巾1.31㎡、同高さ1.02㎡、奥壁巾1.14㎡、同高さ0.86㎡。横断面形は奥壁・中央部・開口部とも台形を呈する。整形は比較的よいが、ノミ巾の測定はあまりできない。それでも、奥壁上部に残るノミ痕では巾4.6㎝のものが認められる。

とくに開口部はていねいに整形されておりその上部には1.7㎡×0.9㎡ほどの屋根状の上部平坦面が造り出されている。この部分でのノミ痕は荒く明瞭に観察できる。ここでも使用されているノミの巾は4.6㎝である。

開口部床面の右よりに排水溝が設けられている。自然のクラックが利用された構造で、ノミによる整形が観察されるのは開口部から90㎝ほどまでであるが、さらに奥壁の左隅方向へと延びている。またその排水溝は墓前域の墓道奥端に接続する構造となるが、ここに床面段差が設けられていた。やや変形した状況で、その右半部はやや奥よりに左半部は前よりに造られていた。

封鎖施設：発掘当初掘り下げの過程で、墓前域の前面に平面半円形に広がる礫の堆積が認められ封鎖石かと思われたが、礫の下には床面まで70～80㎝の混礫褐色土の堆積があり、しかもそれが上層と変化ないこと等により、封鎖施設とは認められないと判断した。

墓前域：開口部で左右に巾50㎝ほど岩盤を削り取り、長さ2.65㎡、奥端巾2.17㎡、前端巾2.57㎡の平坦面を造り出して床面とし、この床面中央部やや右よりに巾約1㎡、深さ30㎝の墓道を掘り込んでいる。

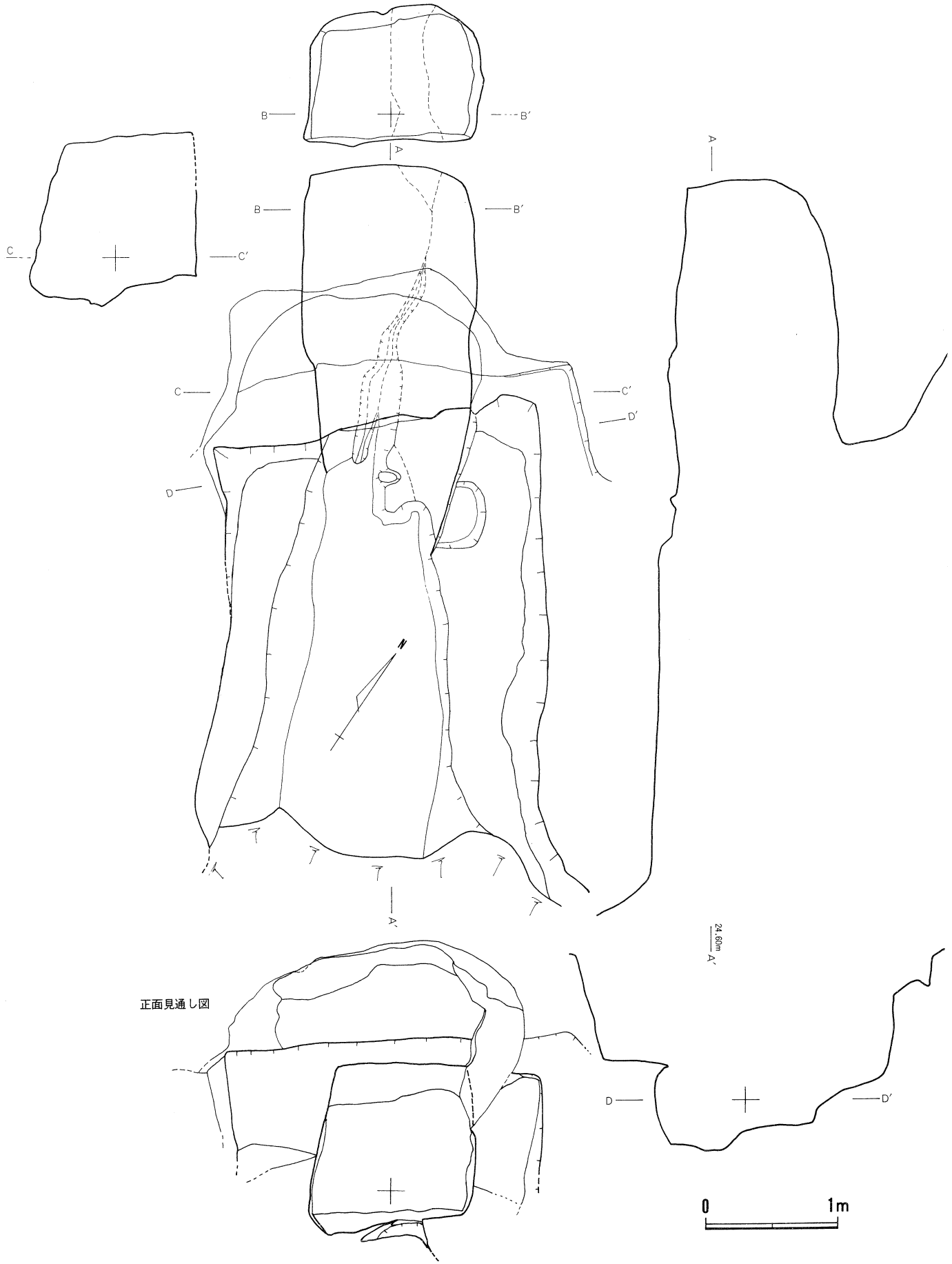
出土遺物：玄室内覆土から土器類を得た。須恵器の長頸坩、土師器の坏・坏蓋・甕等で、いずれも床面から30～40㎝ほど浮いていた。開口部の礫群中から須恵器坏・広口坩のほか甕破片多数（口縁で4個体分）・土師器甕を発見している。こうした出土状況からみて、この遺物群が本横穴の埋葬時期を直接に示すものでないことは明らかである。（佐藤）

**18－2号横穴（第28図・図版32）**

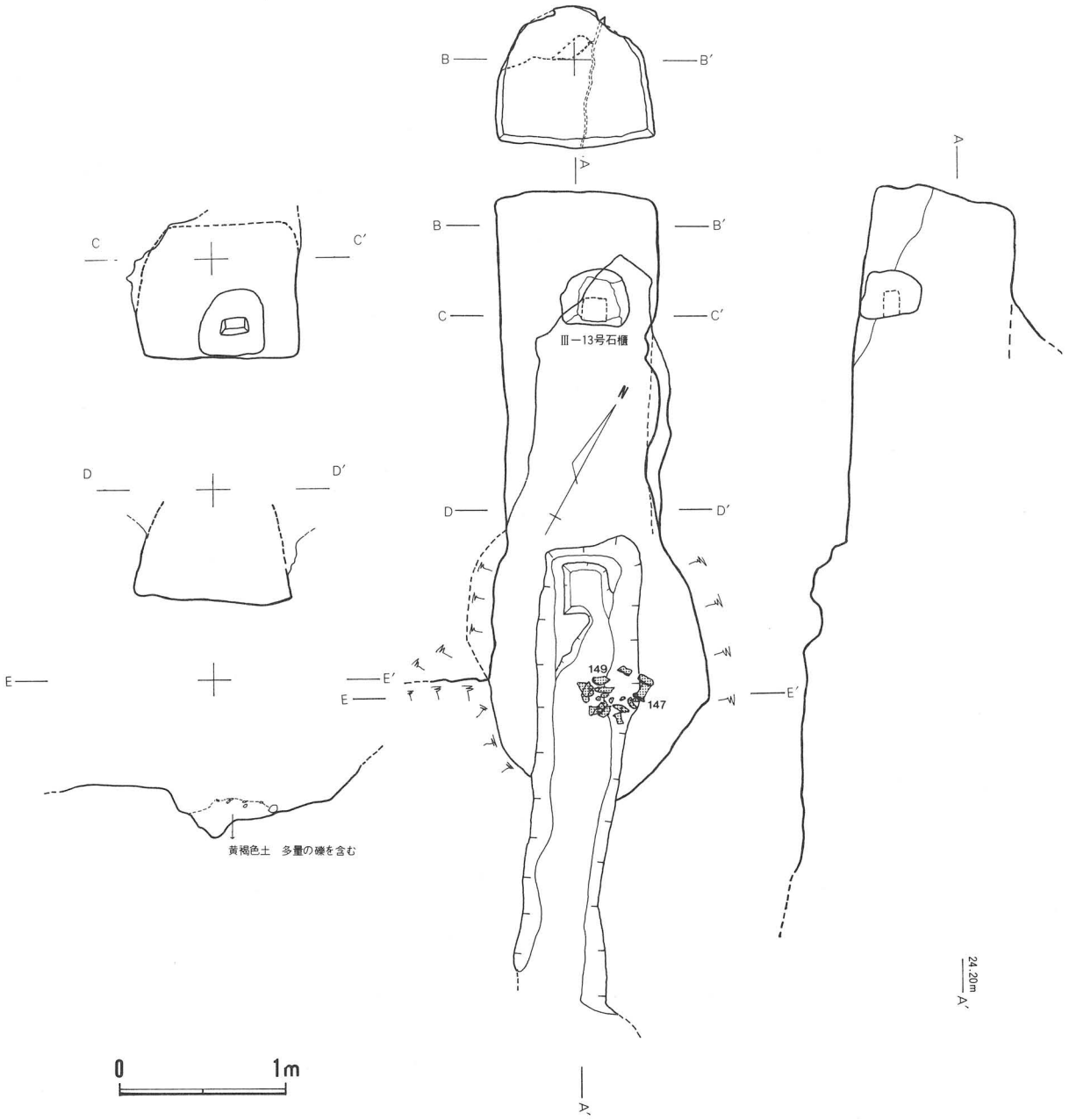
18－1号横穴と32号横穴との中間で、18－1号横穴よりやや上位に位置する。調査当初の全体測量における確認作業でも枝番をつけて保留したほど不確実であって、天井部がほぼ全面的に崩落して地山土が流入していた。

玄室：全長2.16㎡、開口部巾0.92㎡、奥壁巾0.86㎡で、長方形の平面プランを有する。高さは奥壁で0.83㎡を測るものの開口部では、落盤しており不明である。奥壁での横断面形は角アーチ形を呈する。また床面は奥壁から開口部に向って傾斜し、5°を測る。

墓前域：玄室と墓前域を明確に区分できないが、奥壁より2㎡付近で側壁が外開きし、これより前方




第27図　18―1号横穴実測図




**第28図　18－2号横穴実測図**

を墓前域と考えている。中央に、巾50～60㎝、深さ10～15㎝の墓道が造られ、玄室前端にまで延びている。

出土遺物：石櫃と土器類とがある。石櫃(Ⅲ－13号石櫃)は、玄室中央部の床面上に正位で発見された。周囲には径30㎝程度の大礫が多数集積していたが、これらは天井及び上部からの落ち込みと判断できた。その出土状況は刳込み部を正面の若干上向きにしてすえられていたが、既に蓋はなく、内部には土砂が流入していた。それでもわずかに骨粉らしき状況が観察されたが採収は不能であった。石櫃底面が床面と接しており、原位置を保っているものと判断できる。

土器としては、墓前域中央の墓道埋土上面に、須恵器破片が散乱して出土した。器形を復元できたものは、長頸坩である。　(渡辺)

**21—1号横穴（第29図・図版33）**

本横穴は、22・21—2号横穴と並ぶ3基のグループの中位に位置する。22号横穴の床面から20㎝ほど低いレベル差があり、さらに21—2号へと続く。調査着手前の状況としては、開口部の約半分ほどが埋まっており、玄室内部にも多量の礫の散乱が観られた。

玄室：長さ2.83 ㎡、開口部巾1.14 ㎡、中央部巾1.33 ㎡、奥壁巾1.34 ㎡である。平面プランは、わずかに開口部付近が狭くなる長方形で、床面の傾斜はかなり強い。横断面形は、奥壁では角の張るアーチ形、中央部では台形を呈するが、開口部は崩落のため不明である。

ノミ痕は、巾4.5㎝のものが多用され、奥壁右側では巾4㎝のものがわずかに見られる。玄室の整形はやや粗雑で、天井部にくらべ床面の方がより荒い。また、開口部左側壁のノミ痕には刃こぼれ痕があって注目されたが、中央部から奥壁にかけてはそれが認められなかった。刃を焼き直して使用した可能性を認め得るものであろう。奥壁では打ち込み形が目立つが、その多くは下方向に剥離している。両壁では開口部から奥壁に向ってのV字状が一般的であった。

開口部の天井前端は崩落により欠失するが、その床面上には高さ15㎝の段差が認められて、玄室と墓前域の区画としていた。

封鎖施設：この段差の前方部90㎝ほどの範囲に礫が積まれていた。礫は床面と側壁に密着して、正面観を小口積みとする基本構造を認め得るものであった。左側壁よりは欠失が多かったが、右側壁では1.1㎡ほどが残存していた。石質は凝灰岩で風化が激しく一部は砂化していたが、確実に封鎖施設であった。

墓前域：長さ2.59 ㎡、巾1.40 ㎡前後で、平面プランは台形を呈する。傾斜はゆるやかで、封鎖石から前方1.7 ㎡で自然の傾斜にはいり、大きく落ち込む。左側は22号横穴が未発掘のため不詳であるが、右側は開口部から前方にわずかな広がりをみせ、その先端は21—2号横穴の墓前域によって切られる状況となる。これがただちに横穴相互の新旧関係を物語ると断定することはできないかも知れないが、いずれにしても注目される構造といえよう。また、開口部直前の床面中央付近には、巾70㎝、深さ10㎝前後の凹みがみられたが、これを一応墓道の奥端として、主軸方位から大きく右に傾く墓道の存在を認めておきたい。ここではノミ痕は明瞭ではない。

出土遺物：玄室内覆土から土師器細片が発見されたのみであった。（大川）

**21—2号横穴（第30図・図版34）**

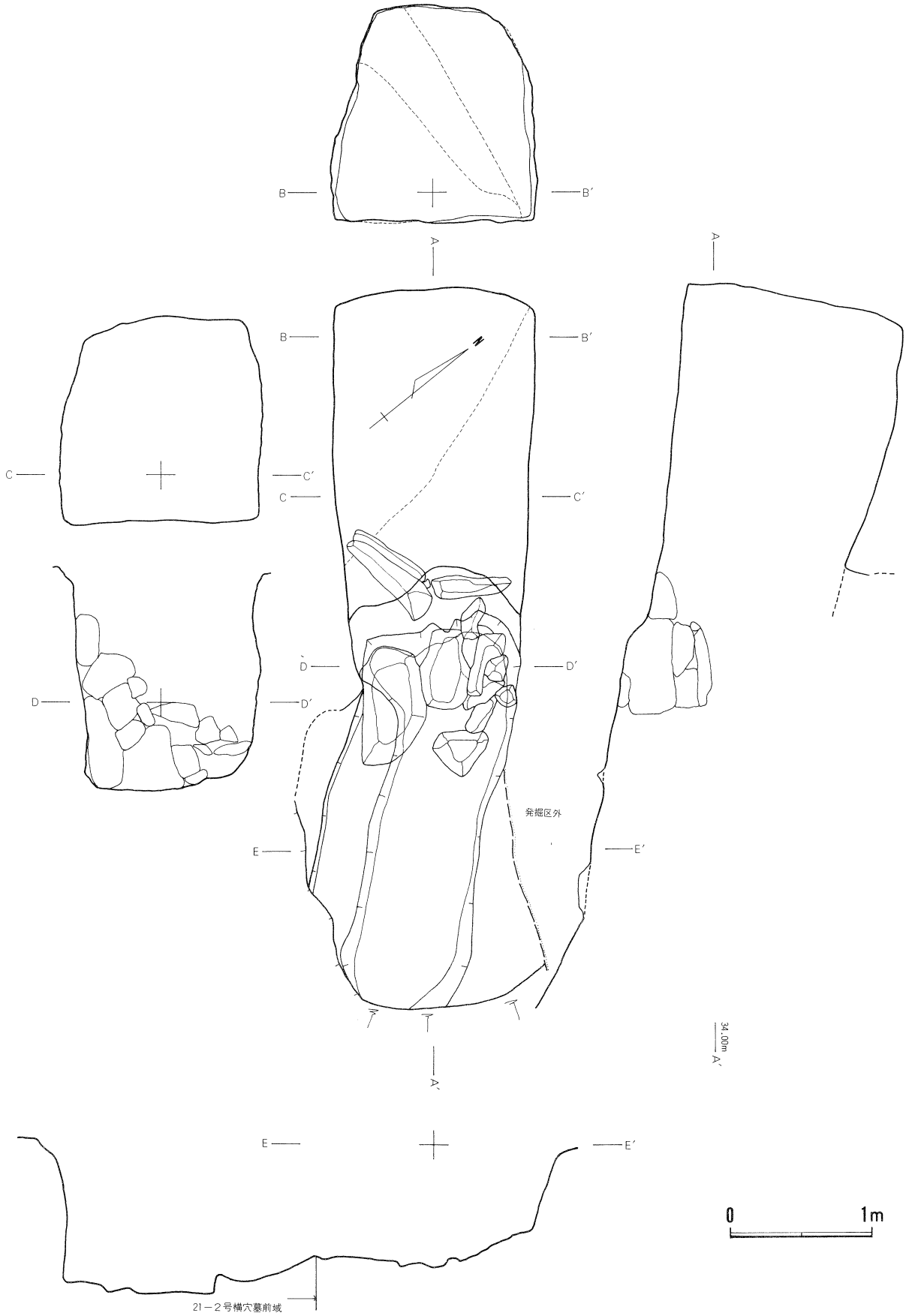
21—1号横穴の右下方で、22号横穴を含めた3基のグループの中では最も低い位置にある。調査前は完全に埋没し前面には大きな木が生えていた。調査当初の地形測量時には確認できず、その後のボーリングにより発見したものである。

玄室：長方形の平面形をもち、長さは1.83 ㎡、巾は開口部1.10 ㎡、中央部0.96㎡、奥壁0.82㎡を測る。高さは奥壁で0.75 ㎡、中央部で0.92 ㎡、それより前方は失われている。横断面は奥壁が方形で、中央部では台形を呈する。整形は荒く両側壁で明瞭にノミ痕を観察できる。入口から奥にむかって水平にノミを走らせる手法は左右とも同じであるが、奥壁は4.2～4.3㎝巾のノミが使用されているのに対し左側壁開口部付近でのみ3.5㎝巾のノミ痕が観察されている。

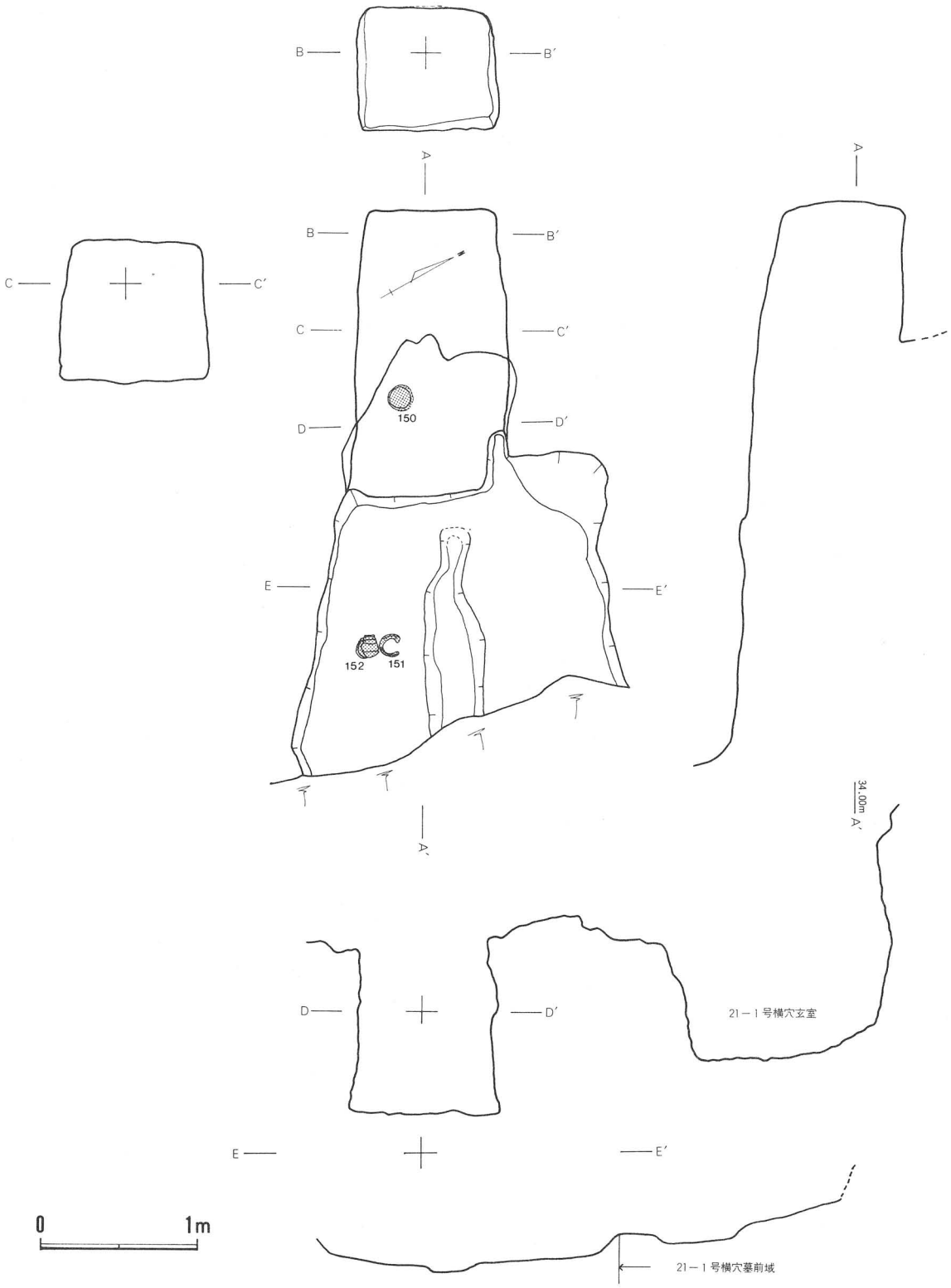
開口部付近の天井・側壁が大きく失われていることはすでに述べたが、その床面には高さ約5㎝ほどの段差が認められた。

墓前域：長さ1.77㎡、巾1.5～2.0㎡ほどの範囲で、平面プランは台形を呈する。いずれにしても前端は自然傾斜の中に吸収された状況にある。

床面周囲の側壁は約10～15㎝前後の高さを有するが、とくにその左側壁の前端が21—1号横穴の墓前域を切ることはすでに述べた。




第29図　21―1号横穴実測図




第30図　21―2号横穴実測図

床面の中央部に巾40㎝、深さ5㎝前後の墓道を認めてみた。全長1.2ｍほどで自然傾斜の中に消えるが、そのノミ痕は風化によりきわめて不明瞭であった。やや強いて認めた墓道といえよう。

ところで、本墓前域右側壁の大部は黄褐色ローム土を掘り込んだもので、それは凝灰岩を掘削している本横穴群のなかでは唯一の例外であった。このことは、その切りあい関係から本横穴が21―1号横穴より新しいといえることと関連して興味ある事実であった。本横穴に限ればその占地において、岩塊の縁辺にちかくかなり不十分な条件に従わざるを得なかった事情を反映する可能性が指摘できるかも知れない。こうした占地の規制についても注目しておきたい。

出土遺物：土器類がある。玄室中央部のやや右より床面上から、逆位の状況で須恵器坏蓋が出土している。墓前域では中央部右壁ちかくに、床面から10㎝ほど浮いた状況で須恵器の長頸坩1と坏1が並列して発見された。（佐藤）

**23―1号横穴（第31図・図版35）**

本横穴は、24号横穴の西側に並列する位置にあり、23―2号とともに23～26号横穴のグループの最前端にあたる。本横穴の開口部左端には約20㎝ほどの高さを有する境を設けて24号横穴と区別している。調査着手前の状況としては、天井側の数十㎝が開口して玄室内に土砂の流入が見られた。

玄室：長さ2.45ｍ、開口部巾1.03ｍ、中央部巾0.91ｍ、奥壁巾0.81ｍである。平面プランは、奥壁よりもわずかに開口部が広くなる長方形である。開口部の天井前端は崩落してその原形をとどめないが、奥壁の高さ0.79ｍ、中央部高さ0.97ｍを測る。横断面形は、奥壁・中央部とも台形といえる。また、床面はかなり強い傾斜を有する。

ノミ痕は、巾2.5㎝前後で、奥壁では下側に剥離した打ち込み形が多く、両側壁では開口部から奥にむかってやや低くなるＶ字状痕が連続する手法を基本としていた。

床面の前端で、墓前域と墓道との区画には、わずか数㎝前後ではあるが、段差が認められた。やや強いて認定したのであるが、ここから墓道が発する構造となった。

封鎖施設：開口部には比較的良好な保存状況といえる封鎖石が残存していた。封鎖石の全長は約1.8ｍ前後もあって、それは奥壁から1.1ｍほどの空間を残して、そこから開口部前方にまで及ぶものであった。もちろん内部への転落石をも含むものであろうが、その前端部には巾55㎝、高さ40㎝、厚さ20㎝前後を測る板石があたかも玄室入口を塞ぐかのように横位に立てられている特徴的構造が観られた。

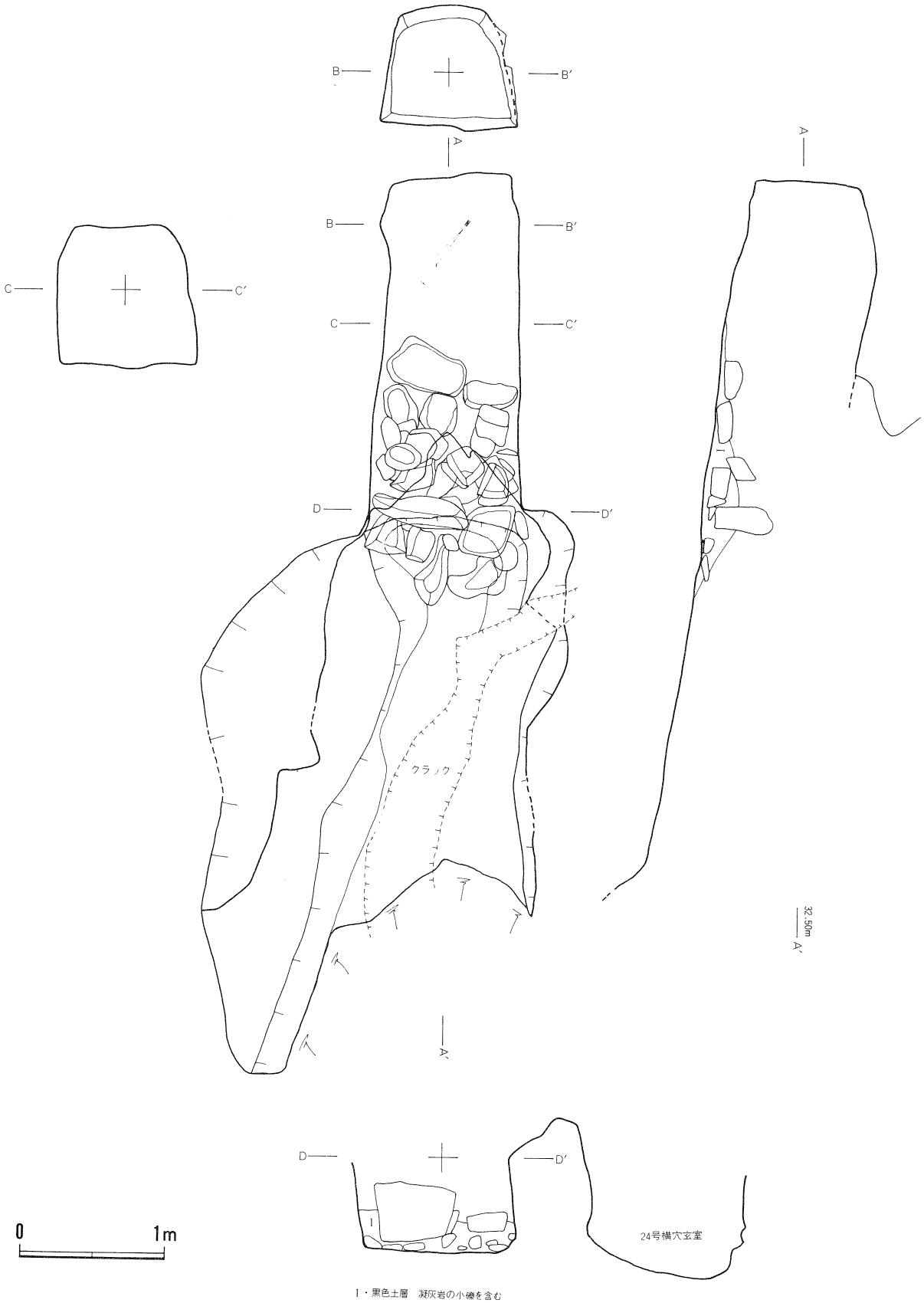
墓前域：大略長さ3.9ｍ、前端巾2.21ｍ前後の範囲を有するものである。平面プランは、開口部でわずかに両袖をもって広がる菱形を呈する。中央部には、巾1.0ｍ～1.5ｍ前後の墓道があり、その奥端には床面段差が認められたことはすでに述べた。墓道は、最深でも十数㎝ほどにすぎなく、その方位は、24号横穴の墓道とは対称的にやや左方向に走っている。すると、本横穴の開口部・墓前域・墓道は、24号横穴の施設と各々が対称となる構造に観察できるものであった。

本墓前域の前端は地山に連続して不明瞭となり、その墓道左半部には大きなクラックもみられて、全体にかなり荒れた状況であった。そのためノミ痕も観察しにくかったが、基本的にはＶ字状痕であった。

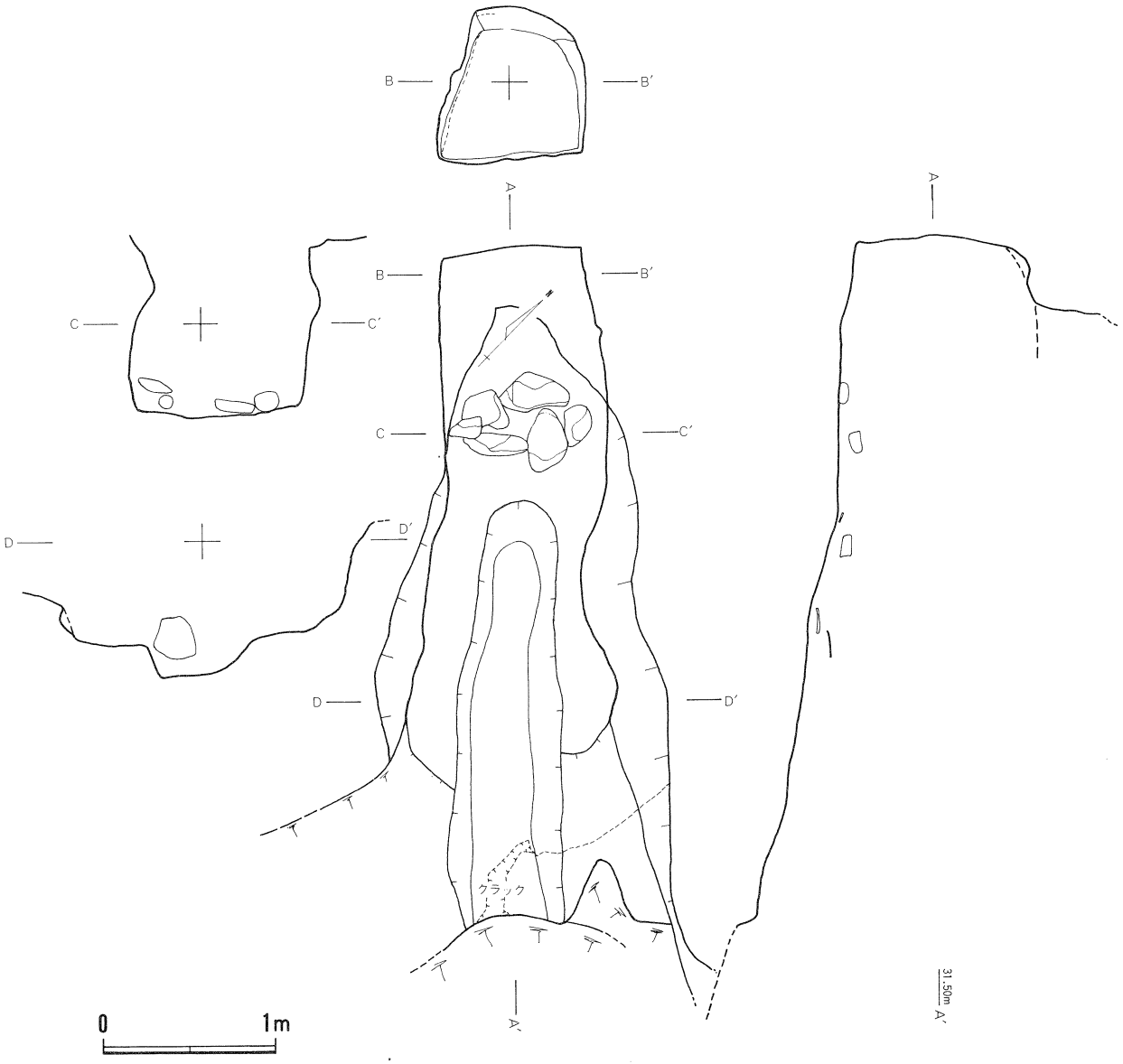
出土遺物：土器類があり、封鎖石中から、須恵器坏・坏蓋破片を得ている。（大川）

**23―2号横穴（第32図・図版36）**

本横穴は、23―1、24号横穴から約2ｍ程西南側に位置する。Ｃ群の中でも最下段に占地する。調査前の状況としては、天井の大部分が落盤し、全域にかなり厚い流入土がみられたため、表面観察で横穴の有無を確認できなかった。調査当初のボーリング調査で横穴の可能性を認め、枝番をつけて保留したものである。




第31図　23—1号横穴実測図




**第32図　23―2号横穴実測図**

玄室：奥壁から墓道奥端までを玄室として認めると、その長さ1.70 m、開口部付近での巾0.88 m、中央部巾0.92 m、奥壁巾0.79 mを測って、やや歪んだ長方形の玄室床面が考えられる。天井はその大部分を失っていて、わずか長さ0.75 m前後がその中央部に残存していたにすぎない。奥壁での高さは0.75 mを測った。横断面形は台形を呈する。玄室床面はほぼ水平をなすが、開口部から墓前域にかけてはその傾斜度を増し、そのまま地山に消失する。

封鎖施設：わずかに6個の封鎖石根石が認められた。また墓道内にも若干の礫が認められたが、それらは転落石として理解した。注目しておきたいのは、封鎖石の位置が墓道奥端からかなり奥に検出されたことで、玄室奥壁から封鎖石までの長さが0.75 m前後であり、玄室有効面積の狭小さが指摘できる。23―1号の有効長が1.7 m、24号が2 m前後であるのに比べ、その差は極めて大きいと言えるであろう。

墓前域：中央部に巾40～65㎝前後・深さ10～15㎝前後の墓道が造られ、墓前域は墓道奥端からその中ほどまでの長さ1.60 m余りの範囲に想定できた。墓前域前端は風化侵食が進んでおり、そのまま地山面

に連続して消失するようであるが、微弱ながらそこに段差が認められ、またノミ痕の様子からも追認できた。本横穴では、墓道奥端から奥壁までを玄室として理解したが、詳細に観察すると、玄室と墓前域との区別は、①墓道奥端よりもわずかに奥寄り付近で若干のくびれ部を認めることができ、ここから墓道が開くように観察できること、②玄室のノミ痕はV字状であるが、墓前域床面に比べ平坦に仕上げられていることを傍証に両者を区別すると、前述の玄室長はやや短かく計測することができ、1.40 ～ 1.45 m前後の値が得られよう。

さらに構造が極めて類似する18－2号横穴との比較を加えてみると、本横穴がやや小型であり、石櫃を有していない点と封鎖石根石が残存している点が相違する。本横穴の床面実効長と18－2号横穴のそれを比較してみれば、両横穴とも玄室の最も奥まった個処で実効値を測ることができ、18－2号横穴は奥壁から石櫃前端までのその値が0.80 m前後となり、本横穴の実効値0.75 mと近似することは、横穴の空間処理の問題を考える上で極めて重要な視点を提供していると言えよう。さらに21－2号横穴をはじめとする、墓道奥端が玄室と墓前域を区画する床面段差と一致をみない横穴との関連も指摘できよう。

出土遺物：本横穴の墓前域からはかなり多量の土器が出土したが、破片が多く、封鎖石の流出に伴って移動・破砕されたものと思われる、玄室内から土師坏身一点が検出された。（渡辺）

**24 号 横 穴（第33図・図版37）**

本横穴は23－1号横穴の東隣に位置するもので、各部においてそれに対称する様相が観られたことはすでに述べた。調査前の状況としては、開口部で約60～70㎝、奥壁で20～30㎝前後の厚さを測る流入土があって、玄室内石櫃がわずかに観察され得た。

玄室：長さ2.43 m、開口部巾0.95 m、中央部巾0.98 m、奥壁巾1.14 mを測って、奥壁がやや広くつくられるフラスコ形を呈する。玄室前端の天井部には比較的大きな崩落が観られるが、中央部高さ1.00 m、奥壁高さ0.84 mで、やや中央部の高くなる状況であった。また床面の傾斜は、奥壁より開口部が約20㎝ほど低くなるとともに、その前端には長さ45㎝前後で巾5㎝ほどの小溝があって、排水施設と認められた。玄室の横断面形は奥壁・中央では台形、開口部では方形となる。ノミ痕は、床面・側壁においては開口部から奥にむかうV字状使用が多く、そのノミ巾は3.5、4.2～4.3、4.5㎝の計測値が得られた。

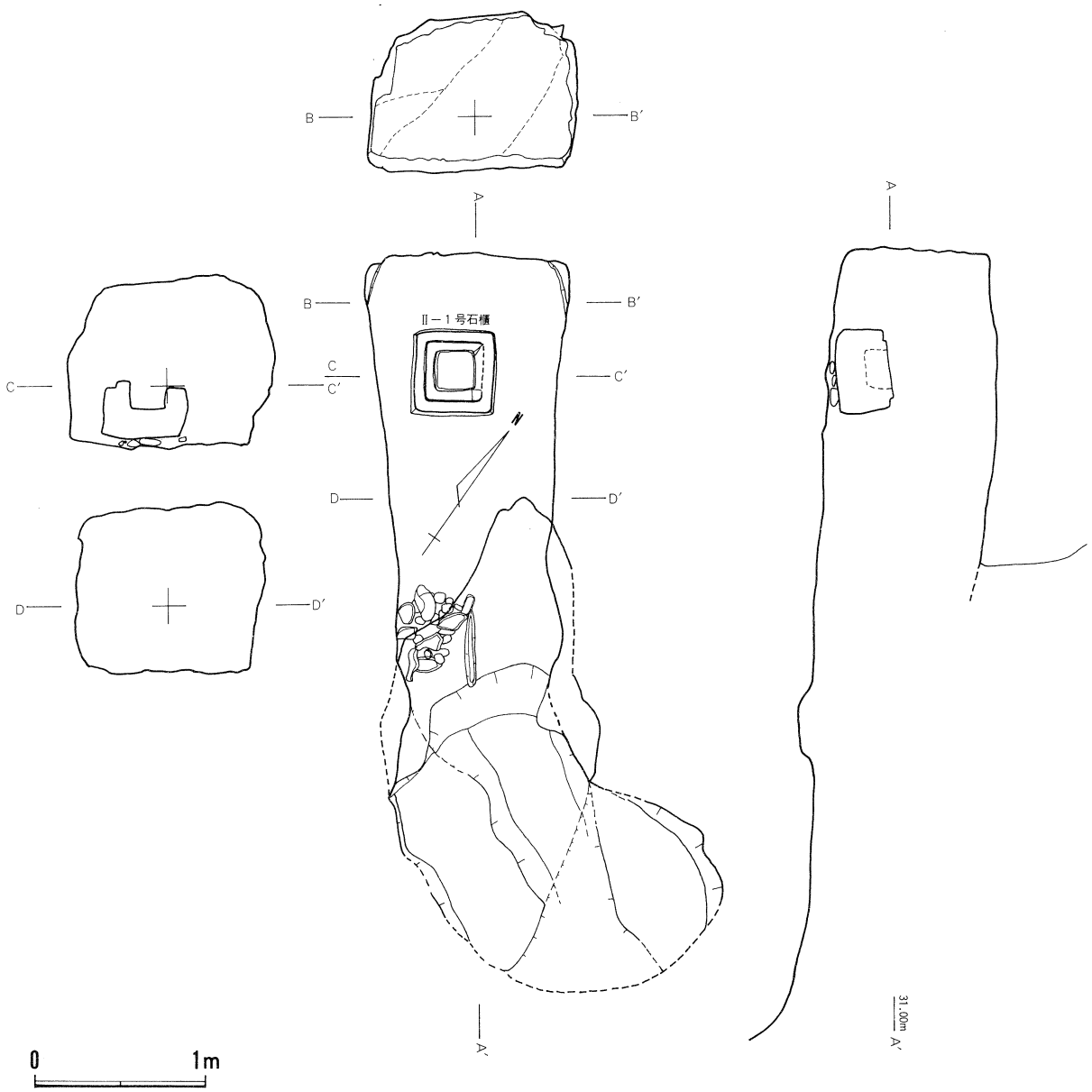
玄室床面の前端には、最大値で10㎝にちかい段差が設けられて、墓前域との境界を示していた。しかもその右端は左端より40～50㎝も前方に張り出していて、その点でも23－1号横穴と対称をなしていた。

封鎖施設：開口部付近には封鎖石と認められる礫群が存在したが、原位置を保つものと観察できたのは床面前端の右側半分に残る20数個からなる礫群にすぎなかった。掌大程度の礫で封鎖石の最下面に敷かれた礫群の一部とみてよいものであろう。

墓前域：本墓前域は大略1.8 × 1.6 mほどの範囲にあって、平面プランは、主軸方位から大きく左に傾いた菱形といえる。その中央には巾40～70㎝前後で深さ15～20㎝前後を測る墓道が認められたが、その最奥部は床面段差となり、しかも開口部巾よりやや狭くつくられる構造といえた。また、墓道を含む墓前域全体は、やや左側に斜走する方位を有しており、前端は地山に連って不明瞭となっていた。

出土遺物：石櫃と土器類とがあるが、とくに石櫃（Ⅱ－1号石櫃）は銘文を有して注目された。

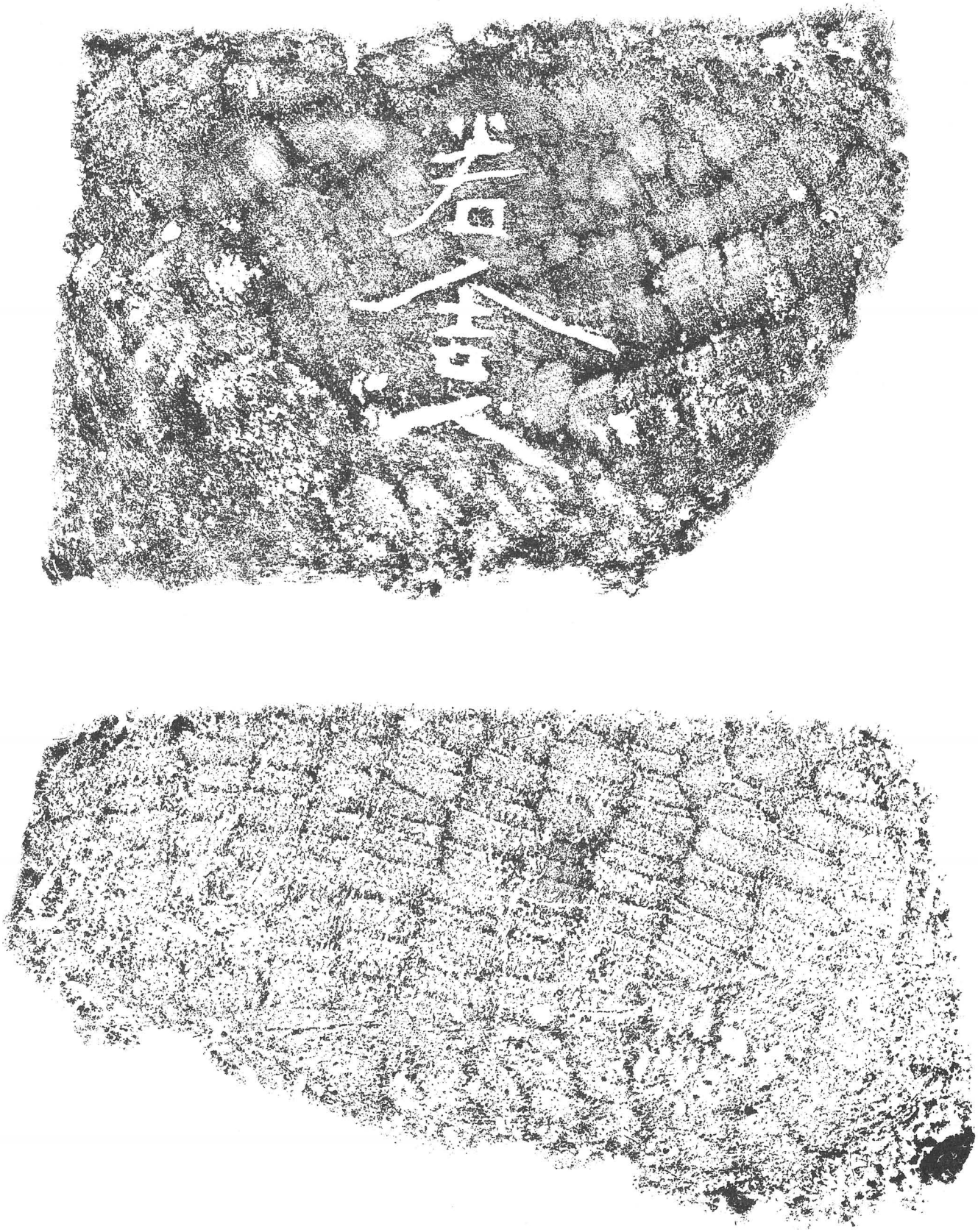
石櫃は、玄室の奥壁から40㎝ほど前方のやや右よりに位置していた。大型方孔の箱形を呈し、すでに蓋を失って、その刳り込み部および外部左側の床面から覆土内に人骨細片が散乱する状況で、明らかに撹乱をうけたものと観察された。底面には小礫に土砂を混じた敷石をつめて、その肩部を水平にちかづける工夫がみられたが、それは玄室床面の傾斜と、石櫃背面が正面よりやや低くつくられた構造との調整をはかるためといえた。石櫃安置の状況が良好に保存されたきわめて僅少な例として重要である。なお、本石櫃正面中央部には、〝若舎人〟の銘文が認められた。薬研堀りで良好な保存といえた。



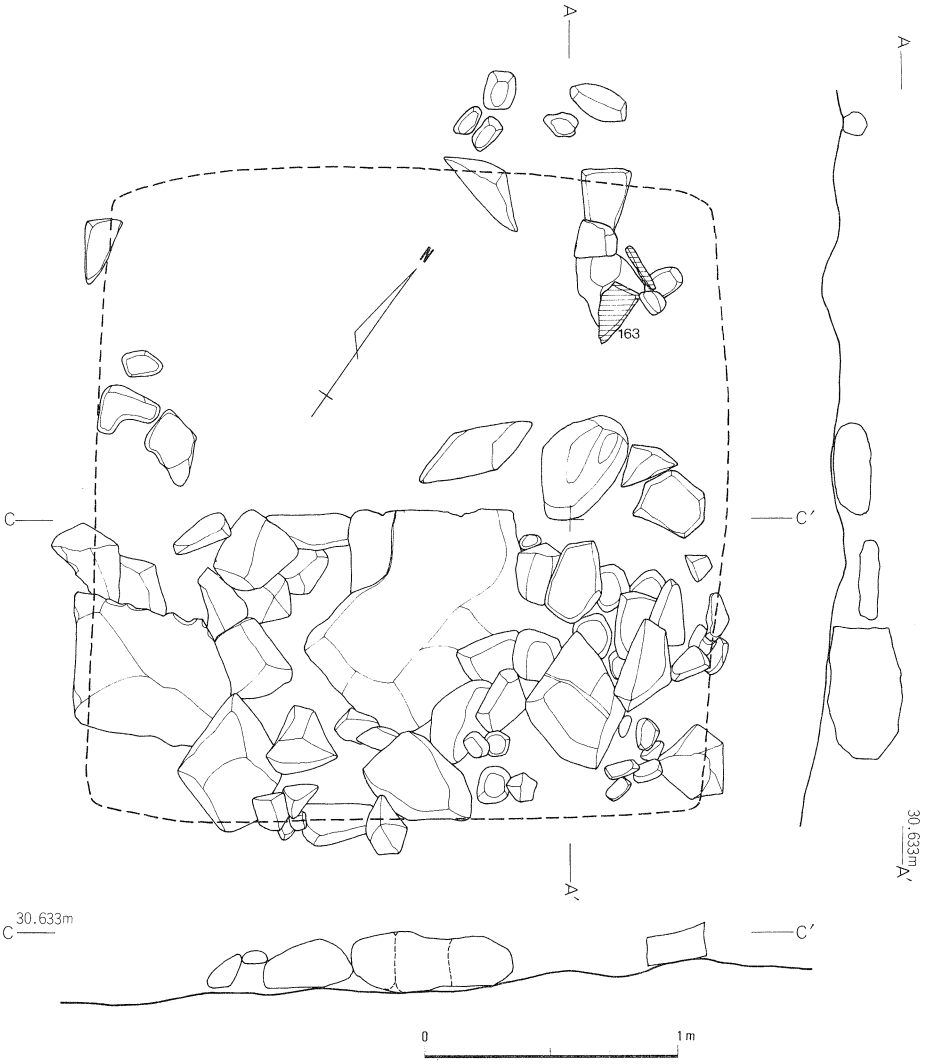

**第33図　24号横穴実測図**

土器類には、玄室内および墓前域から得られた須恵器がある。うち、玄室内から出土した蓋坏は、石櫃の前後左右付近の覆土中で多くは床面から高さ10㎝前後までの範囲で破片の大部分が発見された。こうした状況からすれば床面土器とは認め得ないが、それでも本横穴ないし石櫃の時期に深くかかわるものであろう。

他に、玄室内から甕破片、墓前域から長頸坩破片を得たが、いずれも覆土中からであった。また、図示し得なかったが、坏蓋の口縁部破片が、石櫃の左後端部でかなり凹んだ部分をつくったその底面敷石上に検出された。その出土状況からすれば、石櫃設置時に敷き込まれたというより、むしろ設置後に持ち込まれたか流入したものと扱うべきであろう。小片で時期の確定は困難であるが、それでも絶対年代で8世紀代に入るものとしてよい。（植松）



第34図　24号横穴出土　Ⅱ－1号石櫃拓影



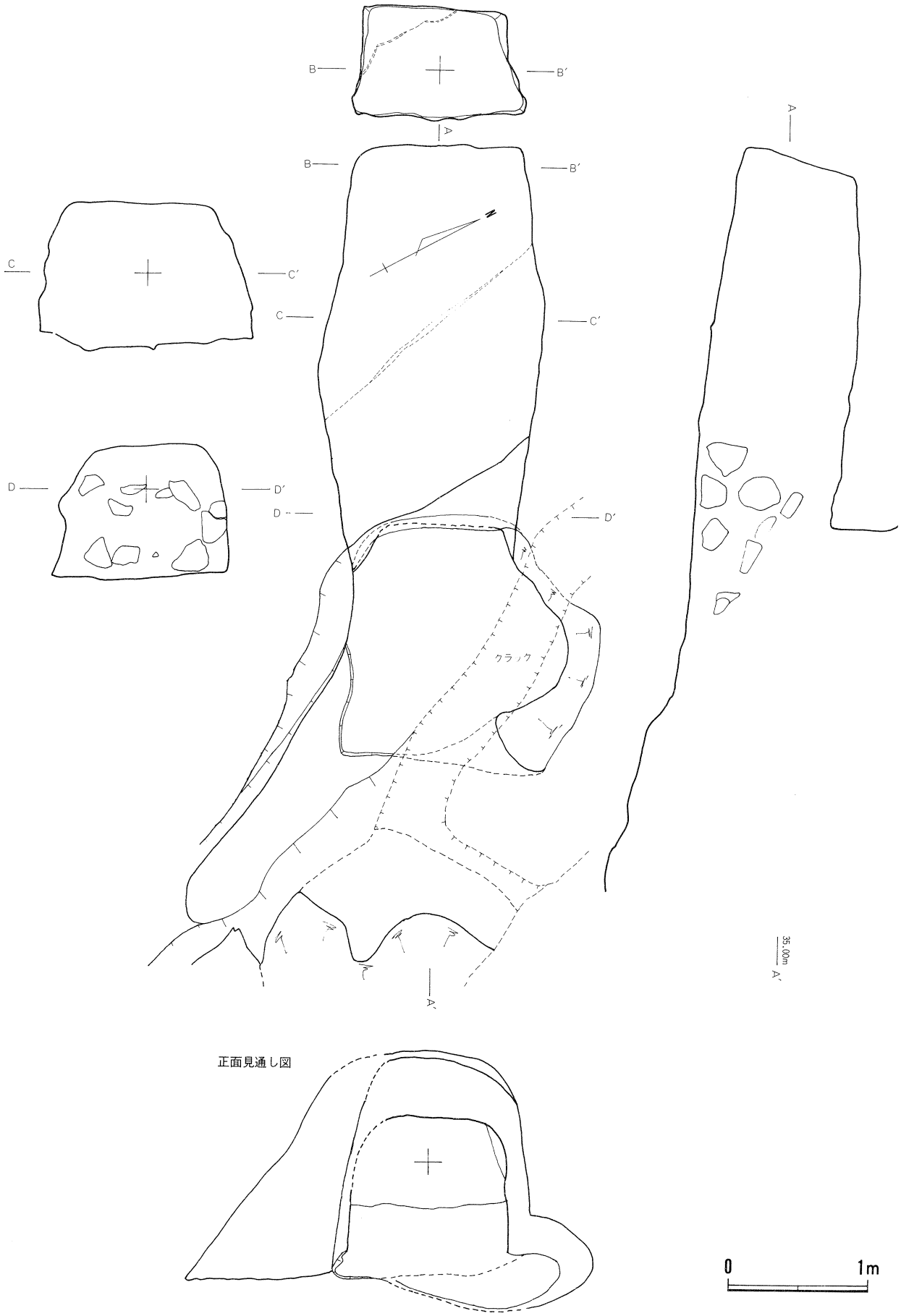

**第35図　24号横穴　Ⅱ—1号石櫃下礫状態実測図**

**25—1号横穴（第36図・図版39）**

本横穴は、25—2号横穴の左側下段のやや手前に位置する。調査前の状況としては、天井部が数10㎝開いて、わずかに内部を伺い得る程度であり、玄室内への流入土もきわめて少なかった。

玄室：床面は、長さ3.05ｍ、開口部巾1.14ｍ、中央部巾1.56ｍ、奥壁巾1.21ｍで、胴張りの長方形を呈していた。天井部も保存は良好で、床面からの高さは、開口部で0.93ｍ、中央部で1.03ｍ、奥壁で0.80ｍを測り、奥壁をやや低くつくる状況が認められた。床面は奥壁より開口部が30㎝ほど低いが、その傾斜のまま墓前域に連続していた。玄室の横断面形は、奥壁・中央部・開口部とも台形である。墓前域前端は高さ50㎝前後の垂直面を造り出していたが、その側壁への延長はクラック等により不明瞭であった。

封鎖施設：開口部には礫群が存在し、あたかも封鎖石の良好な残存といえる状況と観察されたが、詳細に検討した結果、封鎖石とは判断できなかった。規模は長さ1.2ｍ、高さ0.7ｍほどで、石質は凝灰岩と砂質凝灰岩が半々に混在しており、なかには明らかに人為的な加工面とみなし得る平坦面を有するものも数例あったが、それを接合復元することはできなかった。礫の積み方も下段側に比較的大きな礫




第36図　25―1号横穴実測図

を置いて上段よりにやや小さい礫を積む方法を採用して、4・21－1・23－1号横穴等の例にみられる状況とはやや異なるとはいえ、人為的な積み石であることは確かだった。ところが、その底面には明らかに自然堆積と認定される黒色土が10㎝前後あって、本礫群を本横穴の最終埋葬時の築成と理解すると、横穴の構築当初からその最終時までの間にそうした堆積を可能にする開口期間が存在したことになる。よって、本礫群は確実に人為的な積み石といえる状況ながら、本横穴に伴う封鎖石とは認め難かった。

墓前域：本墓前域は大略1.4×1.6ｍで概ね方形と言える。左側は不整形で中央部が膨む状況を呈し、前端部左半はクラックによって失われていた。左側壁は垂直に近く、1.2ｍ前後の高さに造られており、その上部は25－2号横穴に連なる状況がみられた。本墓前域前端は高さ1㎝に満たない段差が方形区画状に施されており、そこにはノミ痕の相違が観察できた。その範囲は80×35㎝ほどであった。尚、本墓前域の右前方には、巾40～60㎝前後の平坦面が造り出されていて、所謂通路といえる状況であった。

出土遺物：土器類がある。玄室内から土師器坏が、墓前域の東側外から一括で発見された須恵器坏等の破片数点が発見された。後者は本横穴墓前域に伴う遺物とは考えられず、26号横穴墓前域付近からの転落遺物と思われる。（渡辺）

**25－2号横穴（第37図・図版40）**

25－1号横穴の右斜め上方に位置する。藪におおわれていたため気づかれず第Ⅱ次の調査時に発見したものである。

玄室：長さ1.80ｍ、巾は開口部0.81ｍ、中央部0.93ｍ、奥壁0.81ｍの長方形プランで、高さは奥壁で0.68ｍ、中央部で0.90ｍを測る。奥壁中央部から墓前域右方にかけてクラックがはいり開口部は大きく剥落している。床面は平均15°と大きく傾斜している。横断面形は、奥壁では天井と側壁を明確にわけ台形を呈しているが、前に出るに従って稜を失い丸味を帯びてくる。

整形は比較的荒く、ノミ痕を明瞭に観察できる。側壁では、入口から奥に向かって水平にノミを用いているが中央付近からだんだんと斜め下に向いていくようになる。またノミ巾をみると側壁では4.6～4.7㎝、奥壁では4.6㎝と使いわけが認められる。

墓前域：開口部と同じ巾（約1ｍ）で延びて、その前端部を崩落により失っている。奥壁より2.65ｍのところでノミの使用方法が変化して、わずかではあるが段差が認められる。ここまでを墓前域と判断すると約0.9×1ｍの方形区画と理解できる。

出土遺物：玄室内への土砂の流入はみられず、遺物はまったく発見されなかった。（佐藤）

**26号横穴（第38図・図版41）**

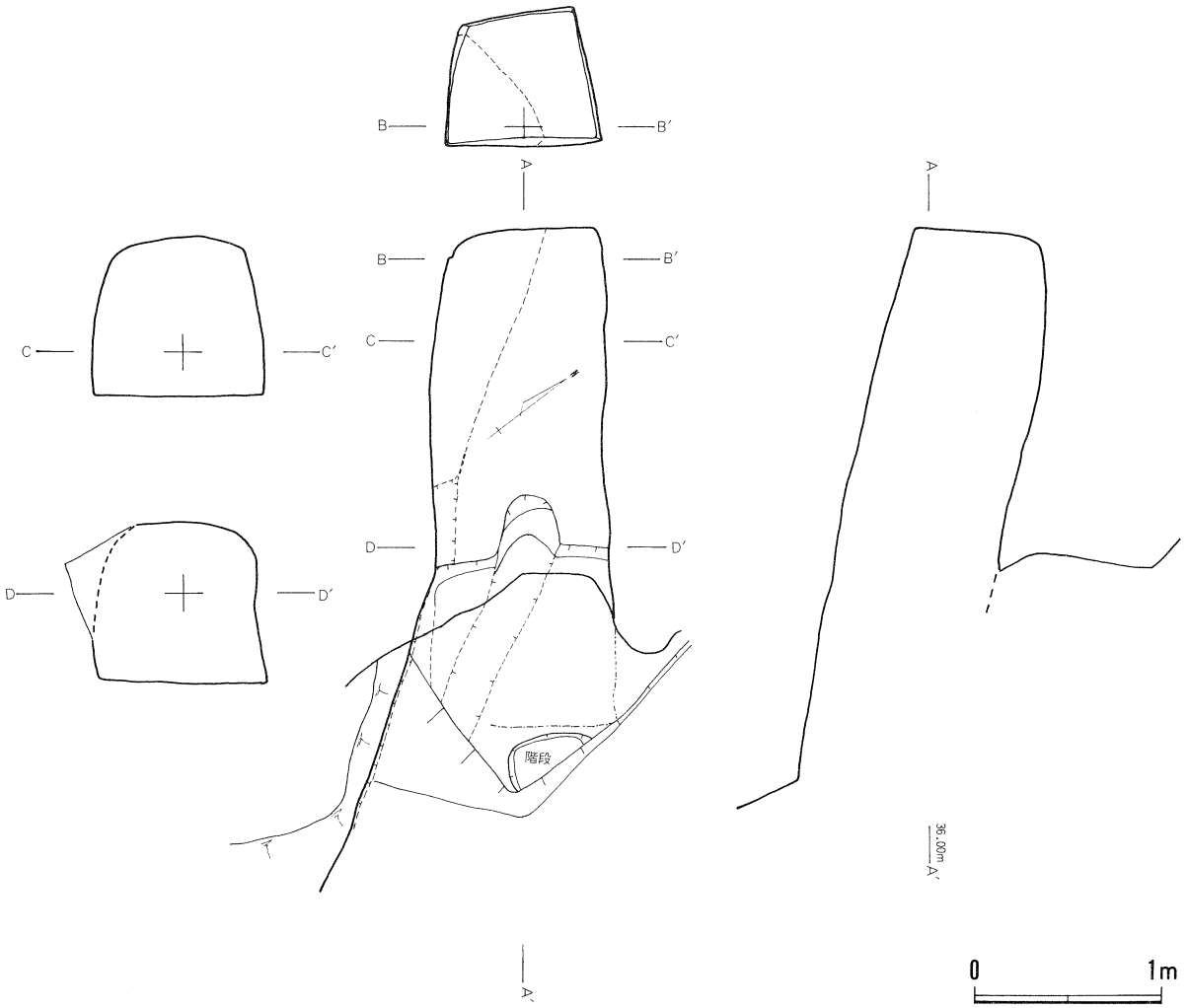
25－1号横穴の東側一段高い位置にあり、27号横穴とほぼ同レベルにあたる。

玄室：開口部巾1.44ｍ、高さ1.14ｍ、中央部巾1.82ｍ、高さ1.30ｍ、奥壁巾1.87ｍ、高さ1.28ｍで若干奥の広いフラスコ形の平面を有する。横断面形は、奥壁で角アーチ、中央部・開口部で台形を呈する。床面は開口部のやや奥よりに段差を設けて玄室と墓前域とを区画している。

整形は比較的荒くノミ痕が明瞭に観察できる。巾4.5㎝のノミが多用され、わずかに奥壁下半で巾3㎝の例が認められる。

墓前域：前よりをクラックにより大きく破壊されておりその規模を明確につかみ得ない。墓前域前端をどこと判断するかには問題がのこるが、長さ1.9ｍ、巾1.3ｍ前後と観るのが妥当かと思われる。

本墓前域の左袖部分に岩盤を掘削して平坦面がつくり出されていた。ここには石櫃がすえられていたが、その位置関係は墓前域の外側であって、いわゆる墓前域外施設とみなし得た。この平坦面には、さらに安置のための掘り込みがあるが、この西側はクラックにより破壊されて全容を確認し得ない。それ




**第37図　25—2号横穴実測図**

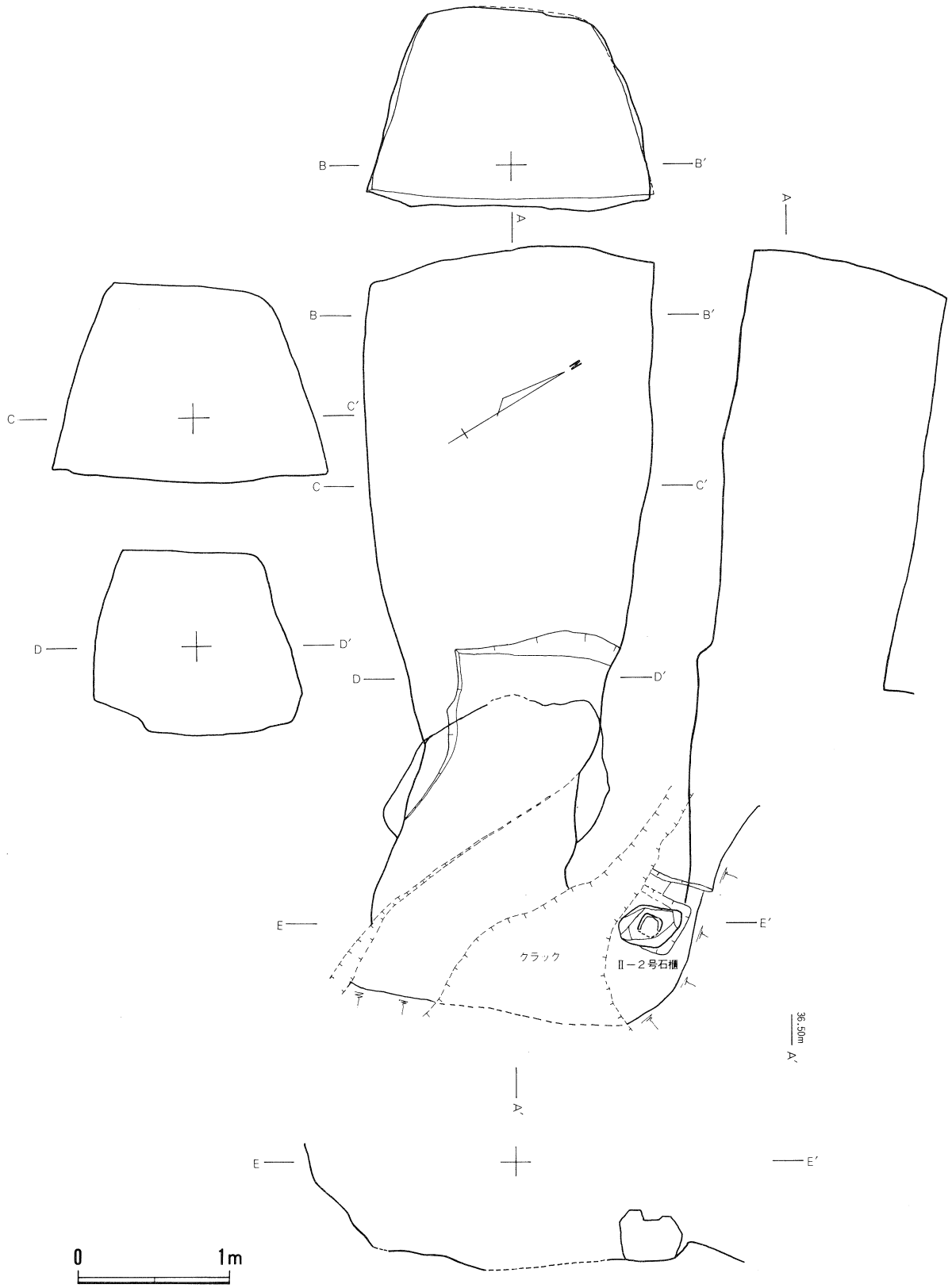
でも保存良好な部分は深さ5～9㎝、一辺が40㎝ほどで、たぶん台形を呈する形状になると推定し得た。石櫃本体は風化が著しく大きく摩耗した状況で原形を復元することはかなり困難であるが、玄室外部における石櫃安置の確実例として重要であった。

出土遺物：石櫃と土器類とがあるが、すでに石櫃（Ⅱ—2号石櫃）については述べた。土器は玄室内で土師器坏破片を、墓前域前方のクラック内の堆積土中でかなりの須恵器坏・蓋等を得た。その出土状況からすれば、25—1号横穴で述べた様相に類似して、本横穴の掘削時期の決め手にはならない。むしろ、25—1号例を含めて、先に述べた墓前域安置の石櫃との関係が注目されよう。（佐藤）

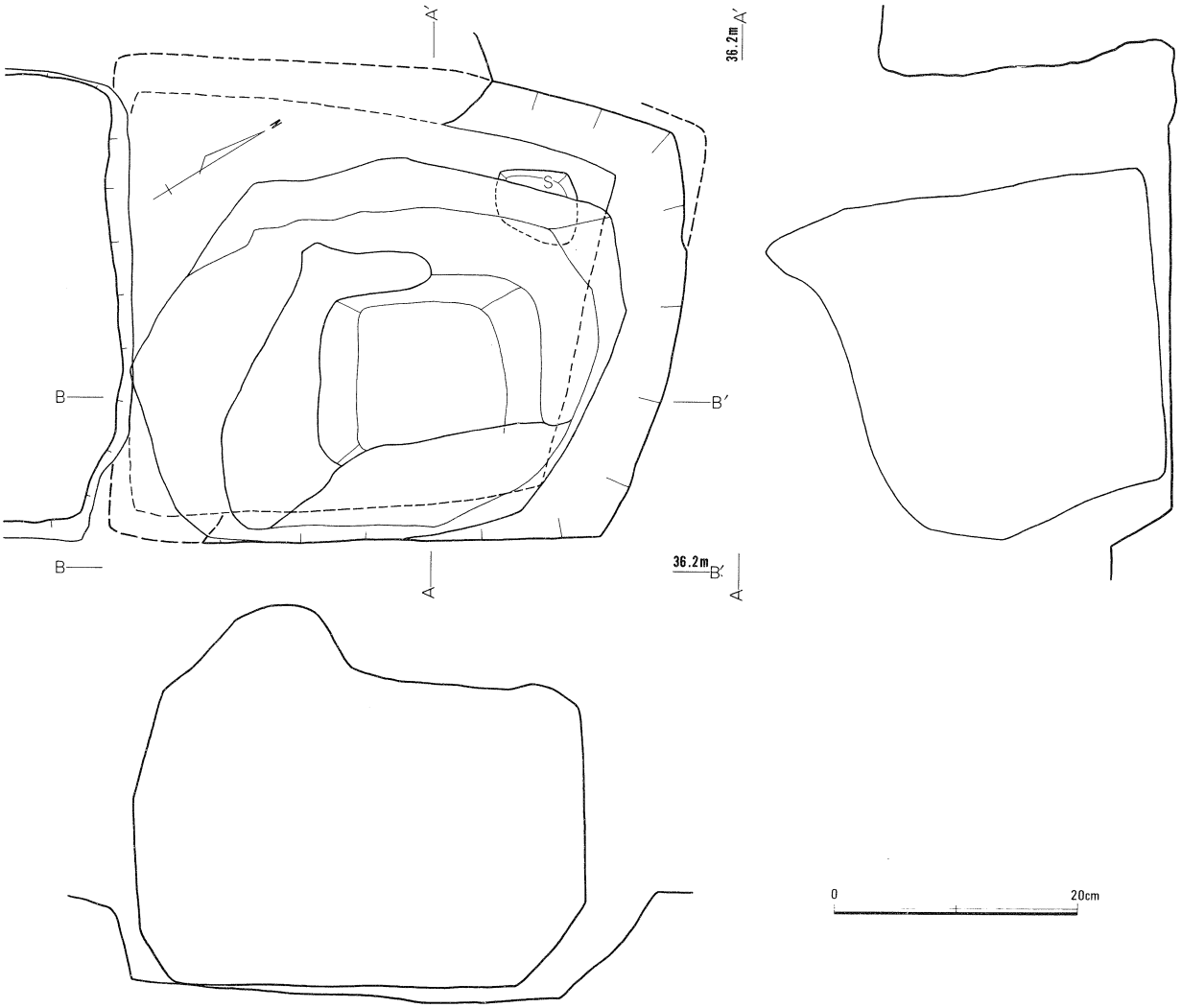
**27号横穴（第40図・図版43）**

26号横穴の北側約50㎝下方に位置する。すでに上部はくずれ、天井推定線より下へ約70㎝開口していた。しかし内部への土の流入はすくなく床面から10㎝程度であった。全体にクラックによる破損が著しく、特に天井ではクラックの隙間から外部が見えるほどであった。

玄室：長さ2.80㎞、奥に張り出しを有する二段づくりの異形フラスコ形の平面形できわめて特徴的である。開口部で巾1.20㎞、中央で巾1.56㎞、奥壁で巾1.32㎞、張り出しは、間口1.5㎞、奥巾1.20㎞をは




第38図　26号横穴実測図

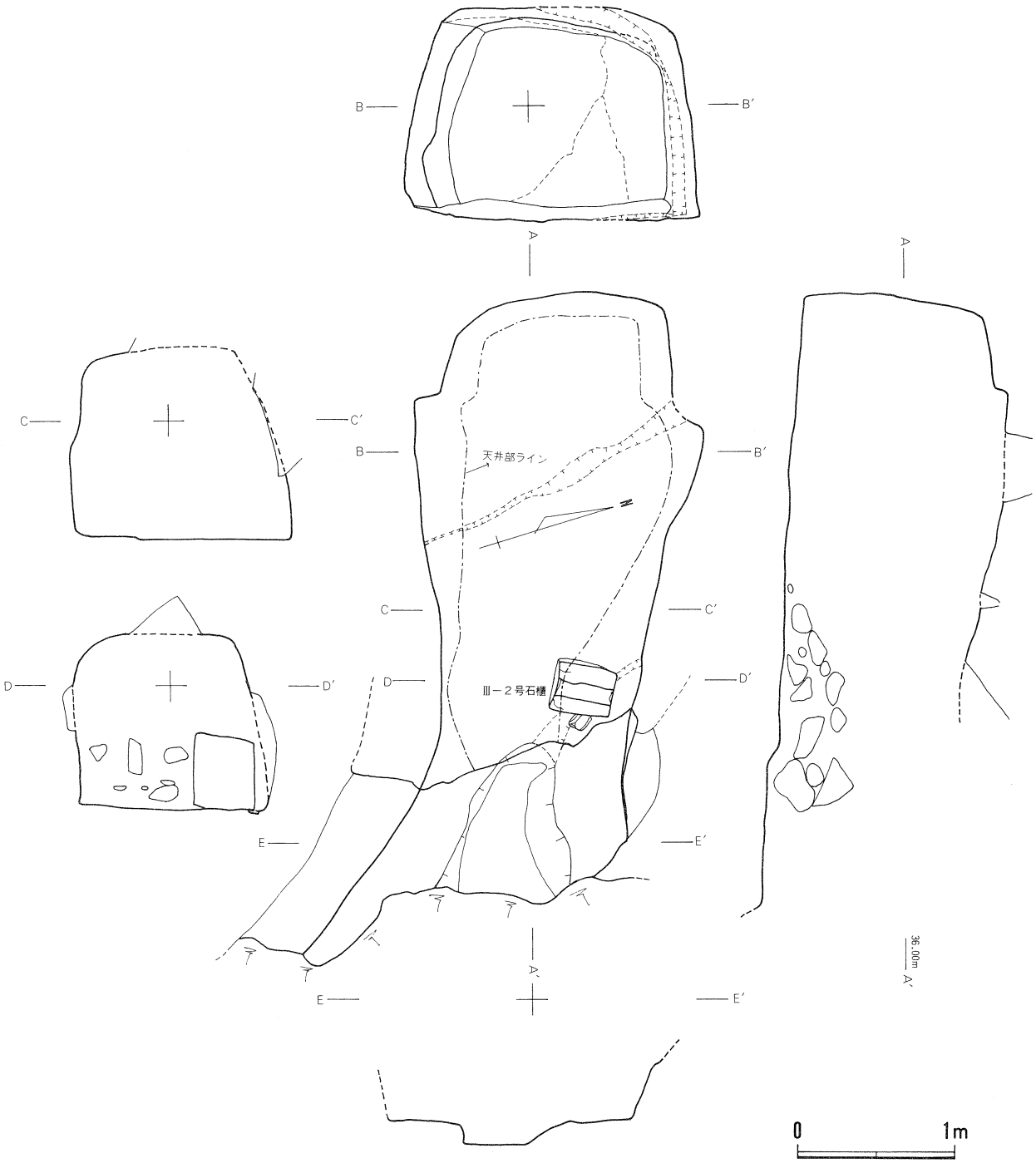



**第39図　26号横穴墓前域　Ⅱ－2号石櫃下造り出し実測図**

かる。高さは中央部で 1.34 m、奥壁で 1.13 m で開口部よりゆるやかなカーブで徐々に高くなり、中央部で最高となって奥壁に続く。奥壁では約10㎝下って張り出し部分が刳り込まれ、奥端で高さ 1.14 m を測る。横断面形は奥壁・中央部・開口部ともに台形を呈する。整形は比較的荒く、ノミ痕は明瞭であるが、クラックにより大きく破壊されているためノミ巾を知り得る例は比較的少ない。巾 2.8～3.0㎝ の平ノミで、ノミに関する限り、巾・技法とも奥端張り出し部でも変化は認められない。同時に掘られたものと判断してよいと思われる。

封鎖施設：多量の礫群が床面より高さ 50㎝、巾 1.2 mほど認められた。それらは人頭大の地山凝灰岩及び砂質凝灰岩で構成され、その中には石櫃 3 例が認められた。一見、封鎖施設かとみえたが、詳細に観察すると床面から約 10～20㎝ほどの厚さで小礫を含む黒色土が堆積しており、それより上に崩壊礫を多く含む黄褐色土が認められた。先の礫群の多くは、この黒色土の上にのっており、これは礫群部分のみならず玄室内・墓前域などかなり広範囲にわたっていた。さらに礫群下の黒色土中から土器破片が検出された。

墓前域：前方がクラックによって大きく崩壊しているために確定できないが、大略長さ 1.1 m、巾 1.46 m程度と考えられる。中央部に開口部下まで至る大きなクラックが認められたが、ノミ痕が認められず墓道とは判断できなかった。




**第40図　27号横穴実測図**

出土遺物：玄室内から石櫃3例、土器破片が出土した。Ⅲ－2号石櫃は厨子形を呈するもので正面を向き正立で床面に接しており、この石櫃のみが原位置を保っているものと判断できた。Ⅲ－3号石櫃は小型のもろい凝灰岩製で、床面より浮いて出土した。またⅢ－4号石櫃は大型のもので方孔部には栓がなされていて未開封であり、黒色土の上面から礫群に混在して出土した。

墓前域では、前方のクラック中から碧1、長頸坩1、須恵坏身2等の破片が出土した。　（佐藤）

第41図　27号横穴開口部礫出土状態実測図

第42図　27号横穴出土　Ⅲ－2号石櫃拓影

第43図　28号横穴実測図

**28 号 横 穴（第43図・図版45）**

27号横穴の上段に2基並ぶグループの右側で、29号横穴より約50㎝高い所に位置する。開口部では約40㎝ほどの堆積土が認められたが、床面傾斜の強いこともあって内部への流入は少ない。

玄室：全長約2.60 m、開口部巾0.87 m、中央部巾0.92 m、奥壁巾0.99 mの長方形プランで、左側壁が中央で若干広がる胴張りのタイプである。高さは中央部で1.00 m、奥壁で0.75 mをはかる。横断面形は奥壁では台形で、開口部でも、台形あるいは方形が推定できる。床面の傾斜がかなり強く平均6°、玄室奥半では16°をはかる。

封鎖施設：開口部には土石群が約40㎝ほど堆積していて、あたかも封鎖石群かのようにみえた。それは上下2層に分けられ、下層は小礫を含む黒色土で18～20㎝前後、上層は崩落礫を多く含む黄褐色土で

20㎝前後をはかる。封鎖石かと思われた大礫群はこの黒色土上にのっていて、床面から20㎝あまり浮いていたことになる。そのうえ、黒色土は玄室内及び墓前域のかなりの範囲に広がっており、明らかに自然の堆積といえた。こうした状況は29号横穴においても同様で、封鎖施設とは認め得がたかった。

墓前域：縦横に走るクラックにより大きくこわされ前端部を失った状況であるが、台形であろうか。開口部の両裾も大きく開いているが、これもクラックにより不明確である。1.7 × 1.6 ｍあまりを想定するのが妥当であろうか。中央にクラックを利用した溝が認められる。これには側壁にノミ痕が認められることから明らかに人為的な遺構といえる。墓前域の左側は、一見すると、29号横穴の墓前域によって大きく壊されているように見えるが、この判断の根拠はなく、29号との前後関係は保留しておく。

出土遺物：遺物は全く認められなかった。（佐藤）

**29 号 横 穴（第44図・図版46）**

本横穴は28号横穴とわずかなレベル差をもってほぼ南北に並び、それは27・30号横穴の上段に位置する。調査前の状況としては、天井から30㎝ほどが開口して、玄室内にかなり多量な土砂が流入していたが、その右よりに石櫃の上部がうかがい得た。

玄室：長さ 3.83 ｍ、開口部巾1.12 ｍ、中央部巾 1.54 ｍ、奥壁巾 1.51 ｍである。平面形は奥壁にくらべ開口部がやや狭くなるフラスコ型をなす。天井部前端のほぼ 3 分の 1 ほどはクラックのため崩壊しているが、残存部分における床面からの高さは、中央部で 1.22 ｍ、奥壁部で1.18 ｍでほぼ等しい。横断面形は奥壁から中央部にかけてアーチ形を呈するが、開口部付近は不明であった。床面の傾斜は、開口部付近と奥壁付近とで、25㎝前後の比高差をもち比較的緩かといえる。

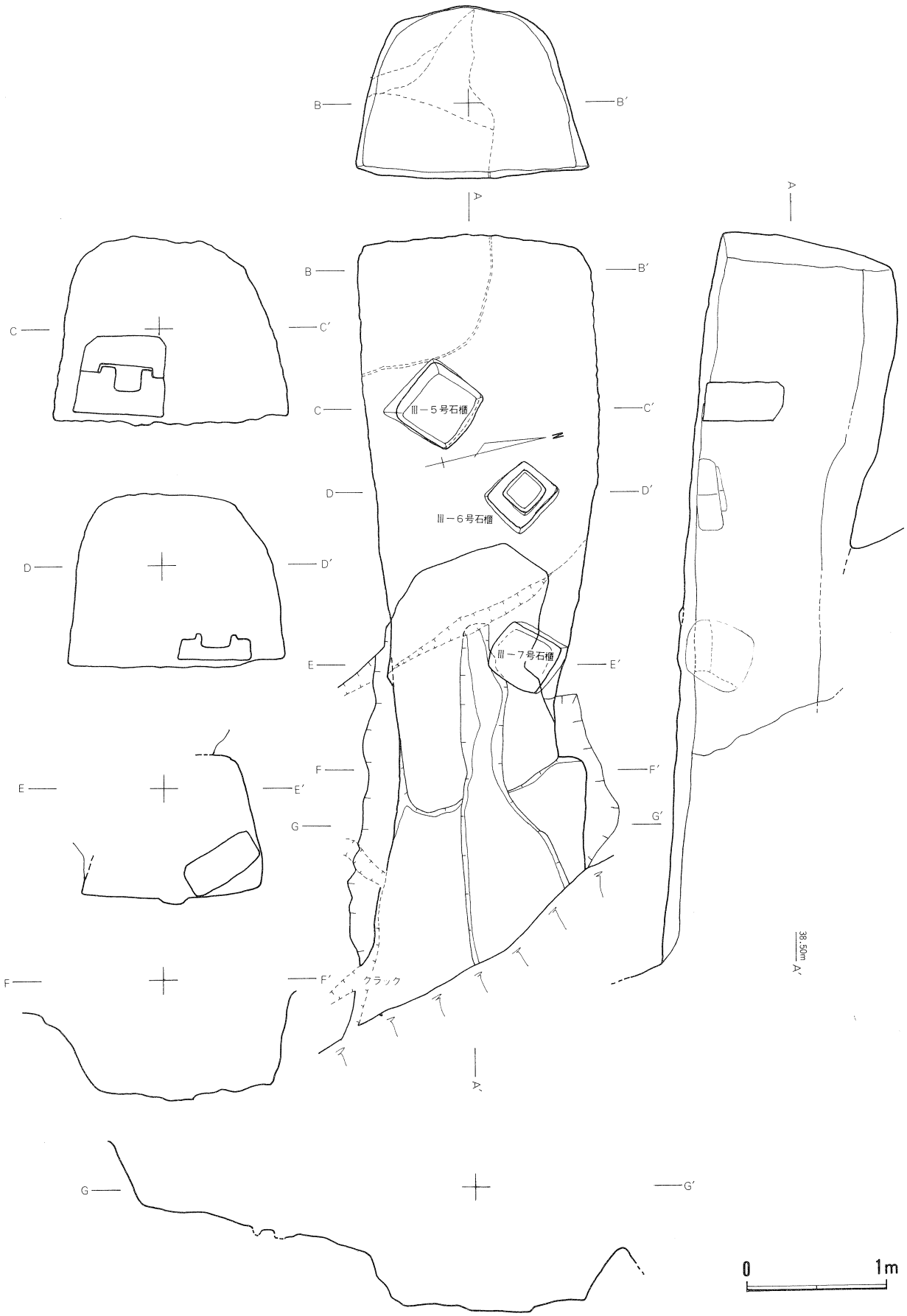
玄室前端、すなわち開口部は天井を崩落していたが、左側壁前端は大略残存していて、直角状のコーナーを有して墓前域に連続する状況が確認された。この両側壁がもっとも内側に入り込んで最端巾となる部分を玄室前端と判断してみた。

この開口部の床面上には、最大高 1.5 ㎝ほどの段状の高まりがあって注目された。その形状はほぼ連続面となる玄室と墓前域との境界に、両側壁前端をゆるやかな弧で結んでその中央部に墓道を残していた。本横穴群中唯一といえる構造であるが基本的には床面段差と共通するものとしてよいかもしれない。

墓前域：長さ 1.6 ｍ、奥巾 1.3 ｍ、中央最大巾 1.3 ｍ前後の範囲で、前端部はクラックにより大きく崩壊しているが基本的には台形プランを呈する。28号横穴墓前域より約35㎝前後低くつくられているため、本墓前域右端部には壁が形成されている。中央部には深さ 5～6 ㎝前後で、奥巾 20 ㎝前後、大略は 30～70㎝前後の巾で、現在長 2.4 ｍの墓道がある。その奥より 1.2 ｍほどは前述の玄室・墓前域の区画から玄室内に入り込んでいた。

本横穴と28号横穴墓前域の前後関係については、層位的に明確にはできなかったが、本墓前域の形状が左右で異ること、28号横穴墓前域がクラックにより不明瞭とは言いながら狭く切られているらしいことからすれば、本墓前域がより新しいといえるかも知れない。ただ27・30号横穴との主軸方位の共通性からすれば29号がより類似して28号が後出的であるといえる。こうした前後関係の検討により、むしろ28号横穴が、墓前域を極端にせばめ、主軸方位を変えても、ここに築成せざるを得なかった事情を重視すべきかも知れない。

出土遺物：石櫃と土器類とがあった。石櫃は 3 例あって、すべて玄室内から発見されたが、中央部奥より右側にⅢ－5 号石櫃（蓋身）、その前より左例にⅢ－6 号石櫃（身）、開口部から 50 ㎝ほど奥よりの左壁に接してⅢ－7 号石櫃（蓋）があった。いずれも大型方孔箱形で、うちⅢ－7 号石櫃は一部を床面に接するとはいえ明らかに撹乱をうけていた。Ⅲ－5 ・Ⅲ－6 号石櫃は、玄室主軸方位に対して約 45°前後傾いた状況であったが、その下部には小礫と土砂を敷いて石櫃の水平をはかった工夫が明らかであった。




第44図　29号横穴実測図

原位置をやや動かされていると観るべきであろうが、ほぼその範囲内での移動とみてよかろう。

なお、注目すべき出土土器としては、Ⅲ－5号石櫃の下部から発見された土師器坏破片（図版71－179）がある。坏底部の大部が残ったもので口縁部を欠くが、内面にラセン状の暗文を施している。また、Ⅲ－7号石櫃の右より付近の撹乱土層中から土師器小型甕が発見された。（大川）

**30号横穴（第45図・図版48）**

本横穴は27号横穴の北側5 m前後の位置にあるが、レベルはそれとほぼ同一で、並列する景観を呈して、ともに28・29号横穴の下段にあたる。調査前の状況としては、玄室前端が崩落し、天井部から約80㎝ほどが開口して、玄室内への土砂の流入がみられて石櫃がわずかに認められた。

玄室：長さ2.69 m、開口部巾0.82 m、奥壁巾0.90 mである。平面プランは長方形を呈し、床面の傾斜はわずかである。横断面形は、奥壁・中央部とも台形を呈している。開口部では天井が大きく崩壊するが、残存する側壁から台形になる状況と判断できる。開口部付近の床面で約40㎝前後も玄室内に入り込む位置に、高さ5㎝前後を測る段差が認められ、そこから墓道がはじまっていた。

墓前域：長さ1.77 m、巾1.4 m前後で、平面プランはほぼ長方形で、床面の傾斜はほとんどない。本墓前域の右前端から左奥端にかけては、大きなクラックが走っているが、残存状況は良好といえる。

開口部左袖は鋭角状に大きくひらくコーナーを有して、墓前域左側に連続している。こうした左奥端のあり方は、右奥端が、開口部からわずかにひらいて墓前域右側に連らなる状況とは著しい相違を示す。

中央部には、床面段差から発する墓道があって、巾70㎝～80㎝前後、深さ5～15㎝前後を測った。やや浅く巾広い構造で、底面は中央にむかって傾斜をもつ構造が認められた。その中央部には巾20数㎝前後の溝状遺構が刻まれて、それは墓道奥端から前端まで延びて、自然の傾斜に吸収される状況であった。典型的な排水溝と認めておきたい。

先述の開口部左袖にあたるコーナーはクラックによるもので人為的な構造とはいえないが、そこに18×18㎝で、深さ8㎝前後の方形ピットと、そこから巾9㎝、深さ数㎝ほどの溝状遺構が延びて墓道左側の中央部付近にまで達する施設とが検出された。あるいは床面小孔に含め得るものかも知れない。

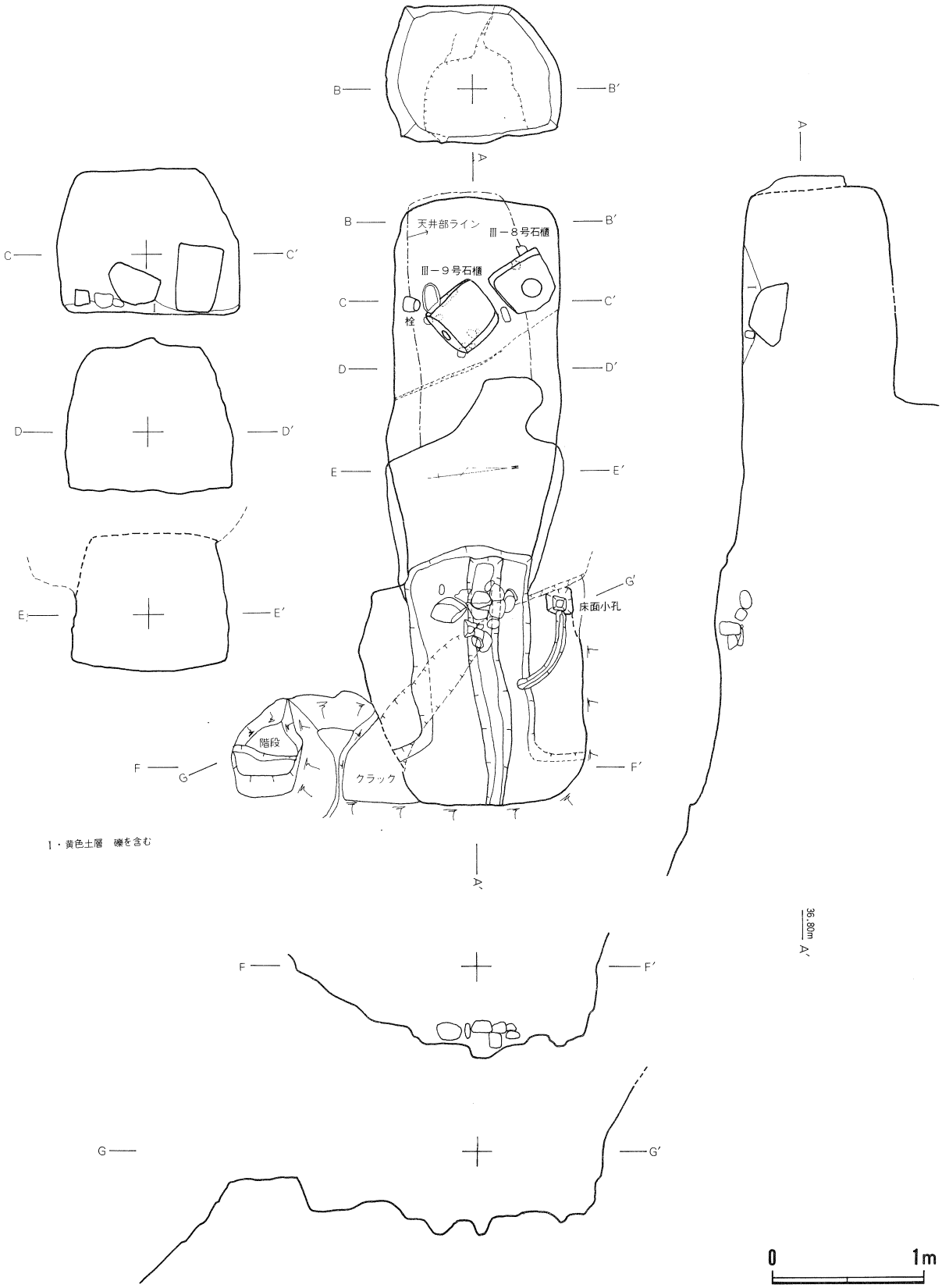
出土遺物：石櫃と土器類とがある。石櫃は玄室内から2例を得たが、奥壁から数十㎝で左側壁に接してⅢ－8号石櫃、そのやや前よりで左側よりにⅢ－9号石櫃で、両方ともに小型円孔家型に属する。Ⅲ－8号石櫃は円孔部を上面にした縦長の状況で発見され栓は未開口で着装していたが、その底面には細礫を含む黄褐色土があって須恵器坏・蓋も埋入していた。Ⅲ－9号石櫃は円孔部を前方にするが逆位で、底面にはやはり黄褐色土を敷いて、栓は傍に転落していた。ともに、確実に撹乱をうけていた。

なお、Ⅲ－8号石櫃下に発見された須恵器坏・蓋は、前述の黄褐色土の下層となる床面直上の黒色土中にあった。ほとんど床面土器といえたが、わずかに浮いた状況であった。明らかにセットとなる例であるとともに、本横穴の年代を知るうえで重要な資料といえよう。（大川）

**31号横穴**

29・30号横穴の左斜め上方、若干離れた所に位置する。現在のところ本横穴群中の最北にあり、一応北限と理解している。レベルとしても本横穴群中の最高であって、開口部床面で標高40.5 mを測る。主軸方位はちょうどクラックの方向と一致し、そのため天井は落ち込み側壁はたおれ込んできわめて危険な状態にあるので、調査は開口部の確認にとどめた。開口部では巾1.01 m高さ0.55 m、断面は台形を呈する。

本横穴群では岩盤の目に対しては非常に注意をはらっているようで、今までに調査したものはほとんどクラックに対して若干の角度を持ち、意図的な様相がうかがえるが、31号横穴のみが、クラックと主軸方位と一致しているのは興味深い。（佐藤）




第45図　30号横穴実測図

**32 号 横 穴（第46図・図版50・51）**

本横穴はＡ群とＣ群とのほぼ中間に位置し本横穴を一番上位にして33号～40号までのグループを形成する。規模のうえではそのいずれよりも大きく、中央部最上段に位置し標高38ｍである。33号以下とともに１グループを形成するか、それとも単独横穴といえるか問題を残すところであろう。いずれにしても本横穴群中で規模・内容ともに最大級のものである。

調査前の状況は、すでに全面開口して玄室内にはほとんど埋土も認められない。そのため第二次大戦後の数年間、乞食が居住していたとのことである。それでも墓前域にはかなり厚い埋土が認められて、表面から墓道の存在に気づくことはできなかった。

玄室：長さ 4.56 ｍ（ただし天井前端までは 4.12 ｍ）、中央部巾 2.93 ｍ、奥壁巾 3.35 ｍを測って、奥よりをきわめて広くつくるフラスコ形といえる。床面からの開口部の高さは 1.49 ｍ（ただし床面段差部を延長した位置からでは 1.42 ｍ）、中央部高さ 1.73 ｍ、奥壁高さ 2.16 ｍを測って、奥壁が開口部より 0.9 ｍちかくも高くつくられる形状がみられた。床面の傾斜は奥壁より段差部が15㎝ほど低い緩かさで、一見水平にちかいものと観察できた。玄室の横断面形は奥壁よりから中央部にかけてはアーチ形で、それが天井部両端を明瞭に変化させて、開口部では天井が若干狭まる台形となっていた。

床面前端には高さ20㎝余を測る段差が認められて、そこが墓道の奥端につくられていたが、その位置は天井部前端から50㎝余も奥よりにみられた。

墓前域：長さ 7.0 ｍ前後、奥端巾3.2 ｍ、中央巾3.0 ｍほどの範囲で、長方形の平面プランとなる。開口部を大きく垂直面としそこから両側壁が発する形状でいわゆる袖部がつくられていた。こうした開口部施設については類例なく、かなり目立つ構造といえた。

封鎖石といい得るものはまったく発見できない。開口部の天井と左右側壁の前端部に、巾７～８㎝から10㎝前後で、深さ５㎝前後を測る“刻み込み部”が認められた。その機能・役割を明らかにできる根拠は得ていないが、それでも玄室の封鎖に関連する構造の一部であることは確実とみてよかろう。

さらに刻み込み部の外周には、高さ 2.2 ｍ前後、巾４ｍ前後の方形とみえる平坦面がつくり出されていて、その右端には平坦面から20～30㎝前後まで高く延びた断面三角形にちかい柱状の構造がみられた。開口部外端につくり出された袖部と認めて、右側のみが残存したものと観ておきたい。この柱状袖部と玄室下端との間には、３段からなる段差が認められて、それは墓前域にむかってそれぞれ 1.5 ｍ前後から 3.5 ｍほども延長する献況が観察された。いずれの先端部も剥落や風化によって不明瞭となっている状況からすれば、本来それは墓前域前方に延びるにしたがって徐々に小さくなって消失するとみてよいかも知れない。こうした構造は左側では若干異った様相を呈して、階段は２段に認め得るがその延長部はわずかに残るのみで、袖部は剥落したといえるようであった。したがって、左側が右側の構造と対称してつくられたものかどうか確実には判断できなかったが、いずれにしても、特異な開口部構造であることは確かである。

床面の中央部には、奥端の床面段差から発する墓道が認められた。奥巾は 1.5 ｍ前後を測るが、開口部付近から前よりはかなり急激にせばまって 0.8 ｍ前後となり、前端は残存する右裾部からすればラッパ状に開くものと観察できる。深さは、奥よりが30㎝前後、前よりが20㎝前後で、前方部をやや浅くつくっている。

墓道前端の左側袖部には、長さ 2.5 ｍ・巾 1.5 ｍほどの範囲で墓道の内外にわたって積み重なった礫群が発見された。玄室開口部から測って 4.7 ｍほどがその礫群の北端にあたるが、高さは60㎝前後もあって断面形は山形を呈していた。礫はいずれも割石で、自然礫を含まず、径５～50㎝前後の大きさであった。礫群に混入した埋土に変化が認められて、西半部では黒色土（すなわち墓道埋土）、それ以外の東半部では褐色土となっていた。さらにその東半部のなかには比較的大きな礫に小礫を裏込めしたかのよ

第46図　32号横穴実測図

うな状況がみられたこと、西半部の墓道床面とその上部の礫との間にはわずかながら黒色土の堆積が認められたこと、西半部下部の一部には長径25㎝と40㎝の大礫2個があってそれが墓道左壁に見なし得ること等から、元来本礫群は墓道前端部の左壁として築成されたもので、その一部が後に崩壊したものと判断し得たが、復元することは困難であった。

出土遺物：玄室内からは皆無で、墓道前端の礫群付近からは須恵器𤮈・甕破片が出土した。（佐藤）

**33 号 横 穴（第47図・図版53）**

32号の左下方に位置する。開口部の約3分の2が埋もれ、土砂が多量に流入していた。

玄室：長さ2.98 m、巾は奥壁で1.39 m、中央1.72 m、開口部1.31 mで、基本的には長方形プランであるが、両側壁が中央部で大きくふくらむ胴張りタイプである。奥壁の断面形はアーチ形で、高さは0.56 m、横巾に対して高さのない扁平アーチ形とでもいうべきものである。床面傾斜が比較的大きく、中央部では高さ0.98 mとなりアーチ形、開口部でも若干角張るがアーチ形を呈する。奥壁から2.4 mのところに高さ1～2㎝前後のわずかな段差を認めてみた。全体に薄弱といえるが、それでも右側は比較的しっかりしており、ここでノミ痕の変化もみられるので、玄室と墓前域の区画と理解しておきたい。

墓前域：左側がクラックにより大きく破損しているが、大略1.8×1.2 m程の長方形を呈し、その両袖部がやや開きながら側壁面をつくる。この両側壁は岩盤の傾斜に添って、前端を低くするが、現況では剥落も多い。またその左外側下には25×50㎝ほどの平坦面があり、上下に急斜面も設けて、階段状遺構と認められた。

床面は前端部をやや狭くして、とくにその右側端部には平ノミによる剥離痕が連続して認められたことからプランの確定ができたが、床面全体としては、中央部がやや低くなる傾向がみられた。

出土遺物：墓前域から長頸坩・短頸坩の破片が発見されているが、いずれも、クラック内の遺物であり、時期決定の決め手にはなり得ない。（植松）

**34 号 横 穴（第48図・図版54・55）**

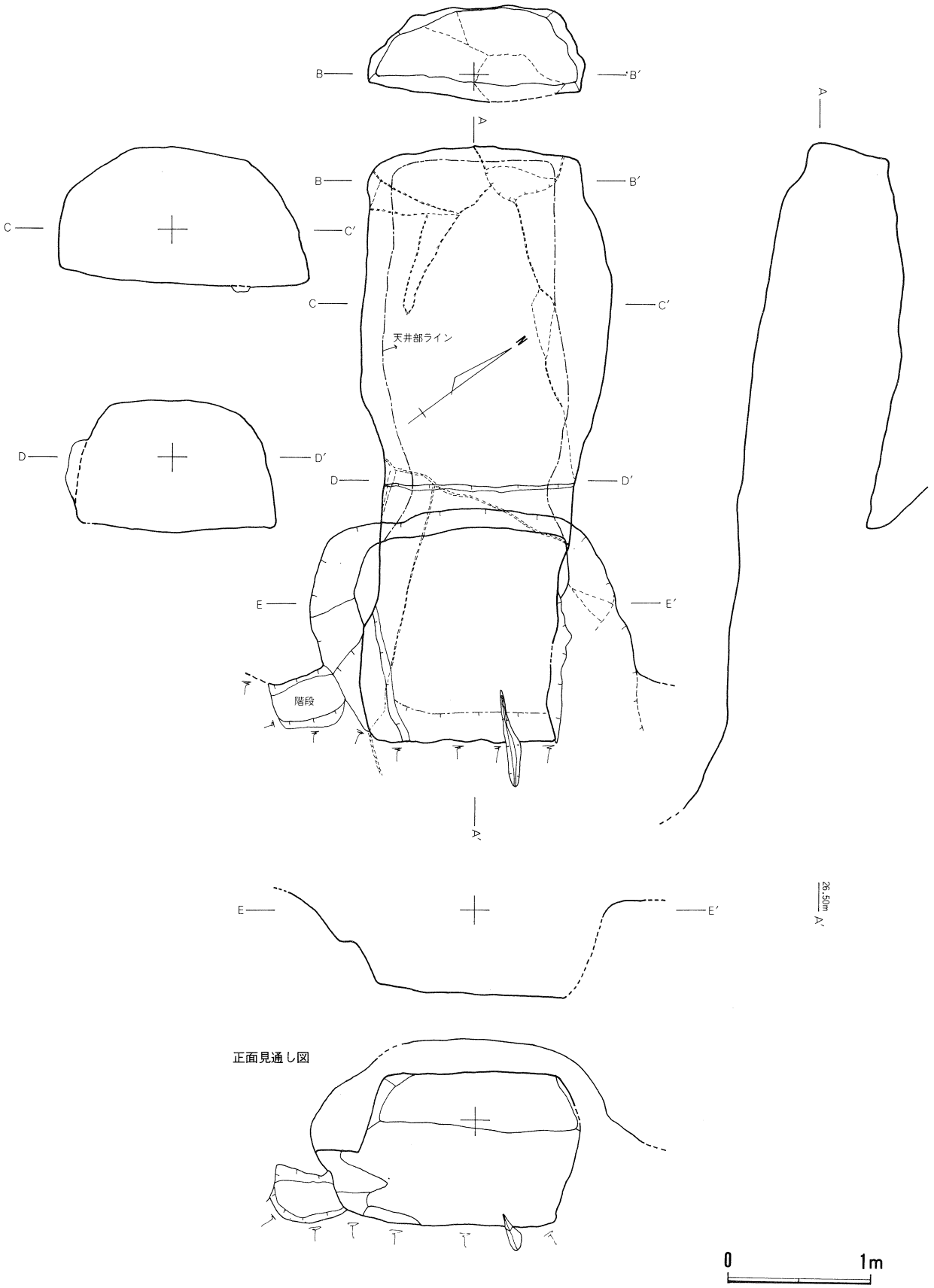
32号横穴の南側に群在するグループのうち、上から2段目の東側に本横穴がある。調査前の状況としては、天井から40㎝ほどが開口していて内部への流入状況がうかがえた。

玄室：長さ2.55 m、開口部巾1.16 m、中央部巾1.31 m、奥壁巾1.18 mを測って、やや前よりが狭くなる長方形プランとなる。床面から天井部までの高さは、開口部で0.86 m、中央部で0.90 m、奥壁部で0.77 mとなって、前よりがやや高くつくられる。床面の傾斜は、開口部と奥壁付近との比高差が40㎝前後あって、かなり急となる。玄室の横断面形は、奥壁は弱い稜を認め得るほぼ角アーチ形で、開口部に進むに従って、天井部の平垣化が顕著となって台形を呈する。

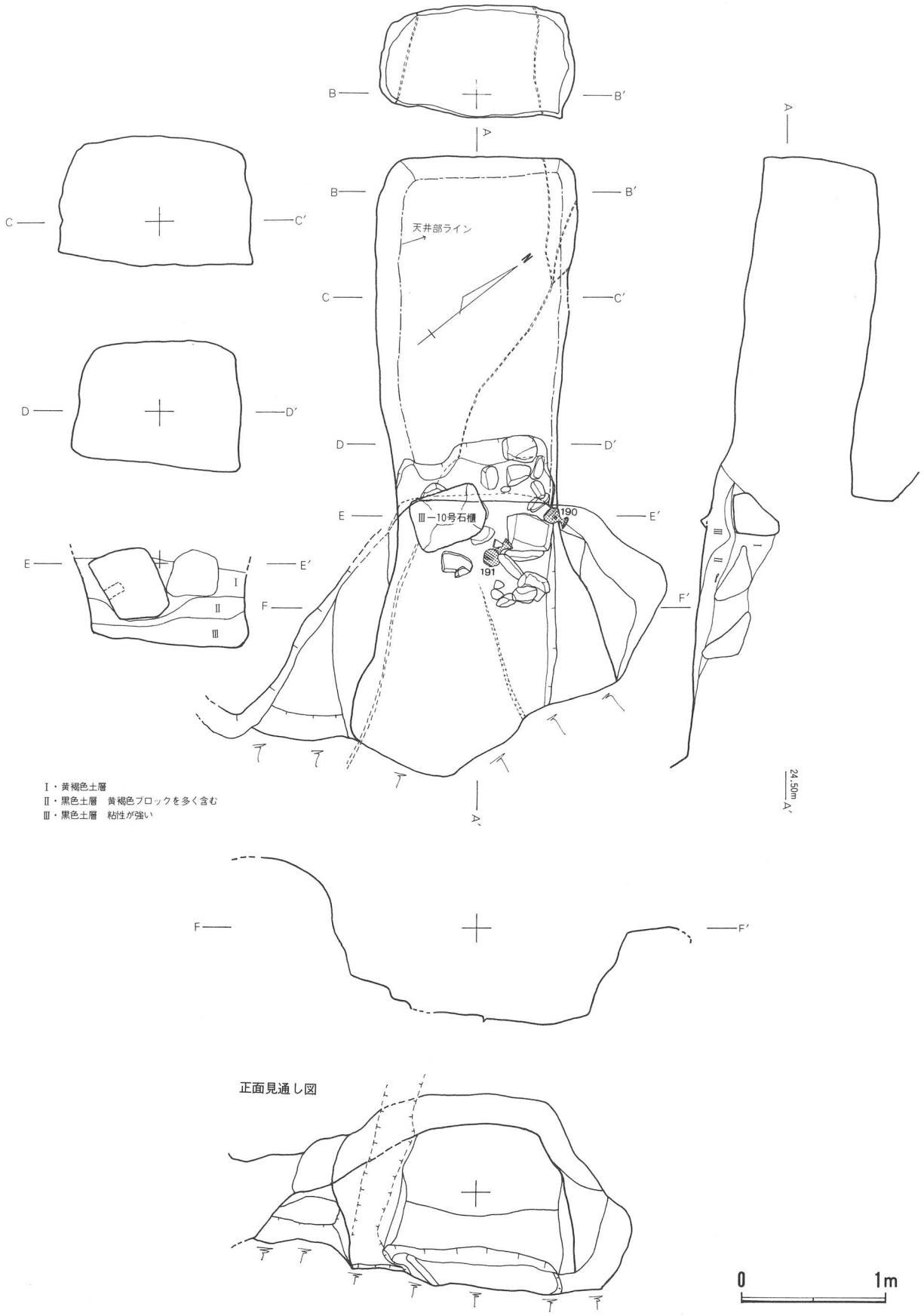
天井部前端から約40㎝前後奥よりの床面上には、高さ20㎝前後で明確な段差が認められた。左側がやや前によった形状を呈していたが、ここから墓道が始まっていた。

埋土の除去を進めていくと、本開口部には、あたかも封鎖石とみなし得る礫群が発見された。それは、径40～50㎝前後を測るかなりの大礫8～9個が立体をなしていたが、いずれも天井前端に接しながらも玄室には入り込まない状況であった。この右奥側には石櫃も含まれていたが、調査の結果、礫群の下部には、10～20㎝前後の厚さを測る黄褐色土と黒色土の堆積が認められて、後世の撹乱によるものと判断された。ただ、この床面直上となる黒色土の中には、床面に接して拳大を立体とする礫20個前後からなるまとまりがあった。ここには、完形の須恵器や鉄釘類が伴っていて、撹乱によって原形を失いながらも、封鎖石の一部が残存した状況と判断された。

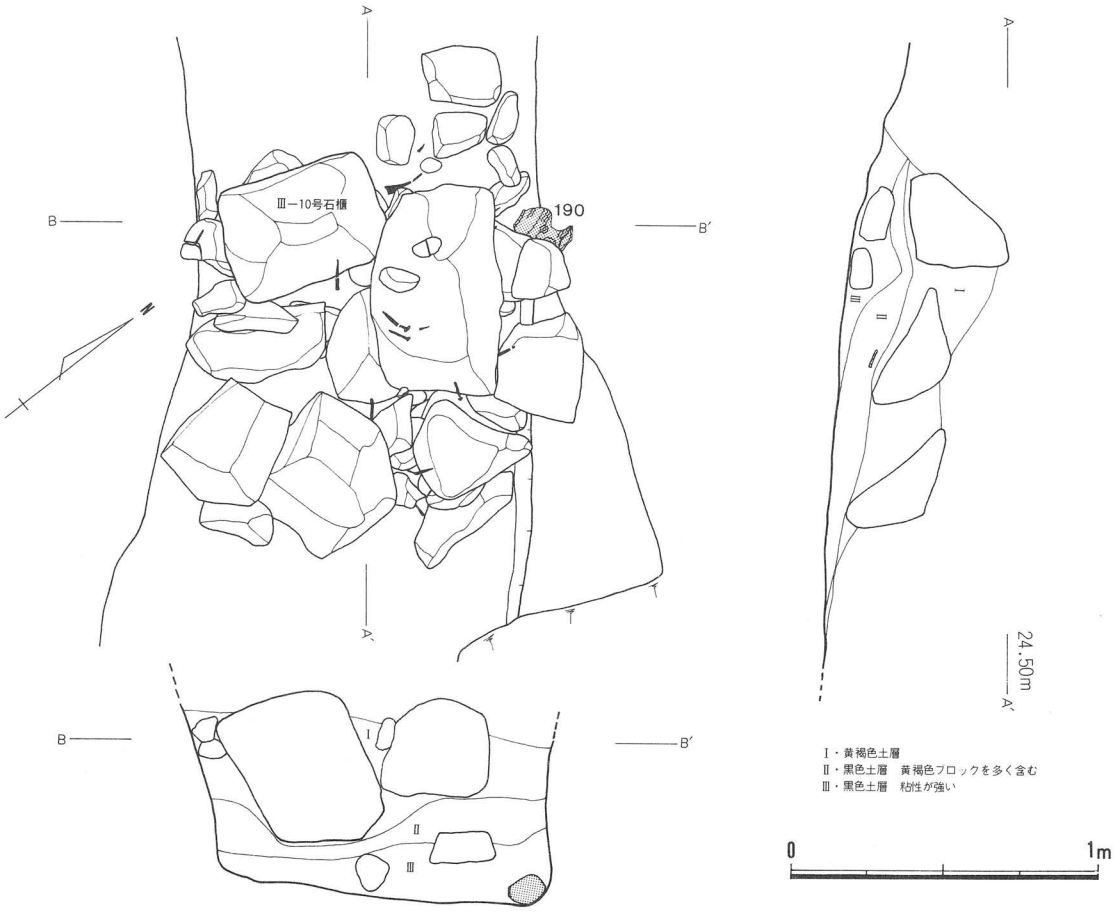
本開口部前端には巾20㎝前後の平垣面があって、いわゆる天井部の上部平垣面が認められた。これは、




第47図　33号横穴実測図




第48図　34号横穴実測図




**第49図　34号横穴封鎖部礫出土状態実測図**

側壁側では、やや巾広くなりながら傾斜を有する構造に変化していた。

墓前域：長さは、床面段差から2.3 m前後、天井前端から1.9 m前後であるが、開口部側壁前端からは1.3 mほどにすぎなかった。最大巾1.6 m前後であるから、比較的狭く台形を呈する墓前域とみてよい。

その中央部に、床面段差からはじまる墓道があった。奥壁ではほぼ床巾一坏にひろがり前よりに進むとやや狭くなる状況がみられた。

本墓前域の両側壁は、天井上部平垣面から連続する傾斜面によって形成されていた。なかでも、右側壁は、その中央部前よりに、平面形が三角形を呈する緩斜面(むしろ平垣面にちかい)を有していた。こうした状況は、墓道前端の右外に認められた平垣面と関連する構造として注意された。あるいは、一種の階段状遺構と認めるべきものかも知れない。

出土遺物：石櫃と土器類・鉄器類とがある。石櫃(Ⅲ—10号石櫃)は、すでに述べたように、天井部前端の右前よりで、床面上に厚く堆積した黒色土層の上にのる黄褐色土層中に含まれていた。逆位で刳り込み部を下にして栓も失っていたことから、撹乱による移動をうけたものとしておく。

土器類は玄室内覆土から土師器坏、墓前域覆土から須恵器長頸坩・碌等が出土したが、注目されたのは、墓前域で発見された鉄器類であった。鉄釘12以上・鉄鏃1で、多くは先の黒色土層の上部に含まれ、封鎖石の残存と認めた範囲内から発見された。　(植松)

**35 号 横 穴（第50図・図版56）**

B群の上から3段目西側にあって、それは37・38号横穴の中間、上方に位置する。調査前の状況としては、天井から30㎝ほどが開口しており、内部がうかがえた。

玄室：長さ3.34 m、開口部巾1.24 m、中央部巾1.23 m、奥壁巾1.26 mの長方形プランを呈する。高さは、開口部で0.99 m、中央部で1.08 m、奥壁で0.93 mを測り、床面はやや急な傾斜を有する。横断面形は、奥壁はアーチ形に近いが、中央部では、やや稜を不明瞭にする台形、開口部では台形に変化する。床面の前端部には、高さ10㎝前後を測る床面段差が認められ、ここから前方が墓道となっていた。開口部天井には、約10㎝ほどの平坦面が削り出されており、ここから連続する開口部側壁は床面から70～80㎝前後で稜を有していた。

墓前域：長さ2.2 m前後、中央部巾1.3 mほどで、平面プランは台形を呈し、その前端は地山の自然傾斜と明確な区別が認められた。中央部には、玄室前端の床面段差から発する墓道があり、巾60～70㎝前後で、深さは5㎝前後を測り、その前端まで及んでいた。

出土遺物：土器類があった。玄室内覆土から土師器坏が出土したが、なかには墓前域出土の破片と接合できたものもあった。注目される土器としては、墓前域奥端の墓道中央部において発見された須恵器長頸坩の一括がある。完形に復元されたが、その供献状況を残すかも知れない状況といえる。（渡辺）

**36 号 横 穴（第51・52図・図版57・58）**

B群横穴群の上から4段目東側に位置し、37号横穴の左手上段にある。調査前の状況としては約30㎝余ほど開口しており、内部がうかがえた。

玄室：長さ2.60 m、開口部巾1.08 m、奥壁巾0.70 mで開口部側がやや広い長方形プランを呈する。

高さは、開口部で0.85 m、中央部で0.93 m、奥壁で0.69 mとなり、中央部から開口部方向をやや高くつくる。床面の傾斜は、やや急なタイプに属する。横断面形は中央部から奥よりでやや歪む方形、開口部では台形としてよいであろう。奥壁、側壁と天井部との境には明瞭で強い稜を認めることができる。

天井前端には巾10㎝前後の上部平坦面があり、それから連続する開口部側面観は緩かな傾斜面となっていた。この両側壁前端は、右側が左側より約50㎝ほど奥よりにあって左右でかなりな相違が目立ったが、それは後述するミニ横穴を設けるための構造と観察される。

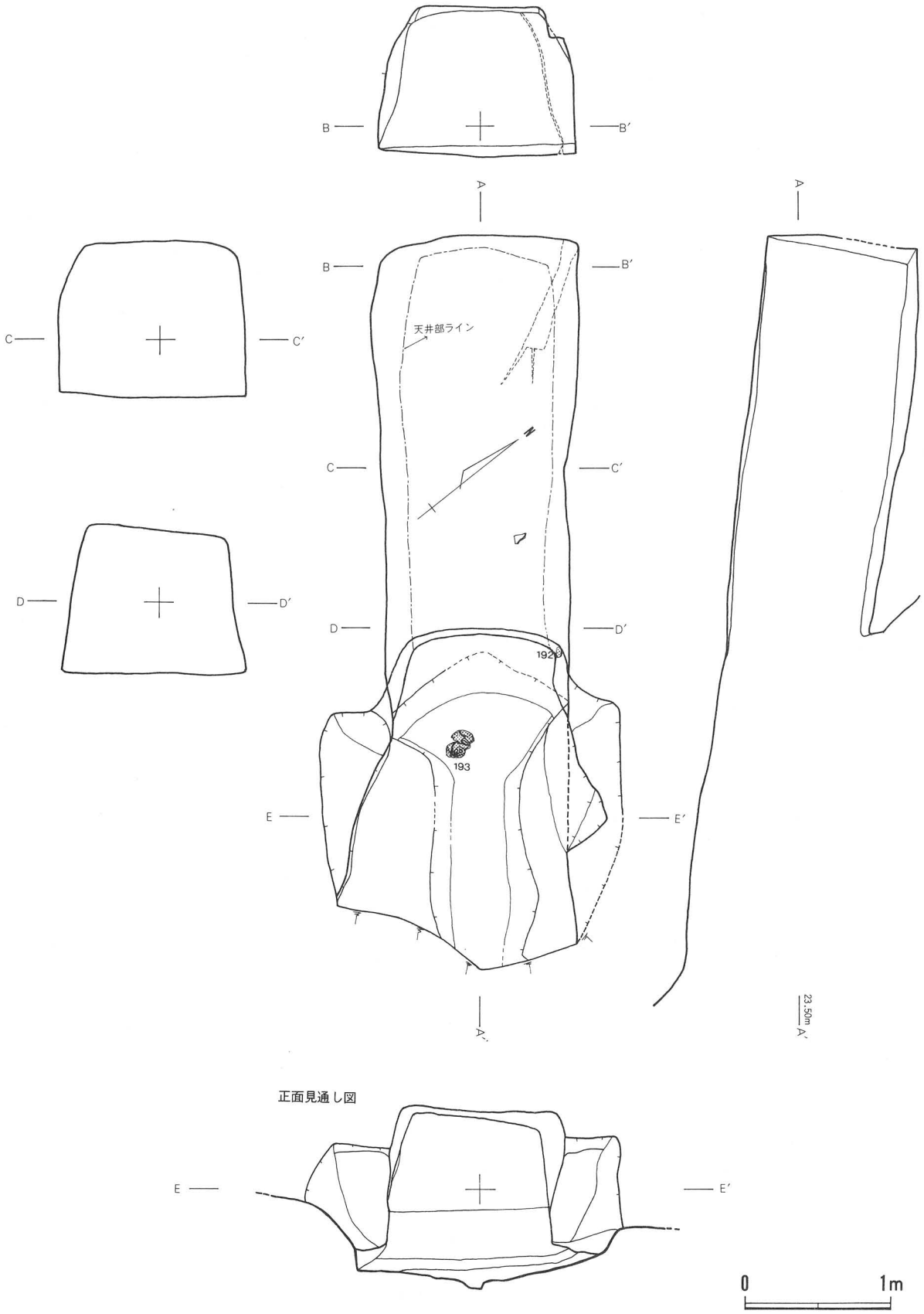
墓前域：天井前端から1.2 m前後、最大巾1.1 mを測って、長方形プランとなる。

中央部には奥端を丸くする形状の墓道が認められたが、それはミニ横穴を意識して、その前端を大きく左側にカーブさせている。深さ5～10㎝前後、最大巾60㎝を測る。

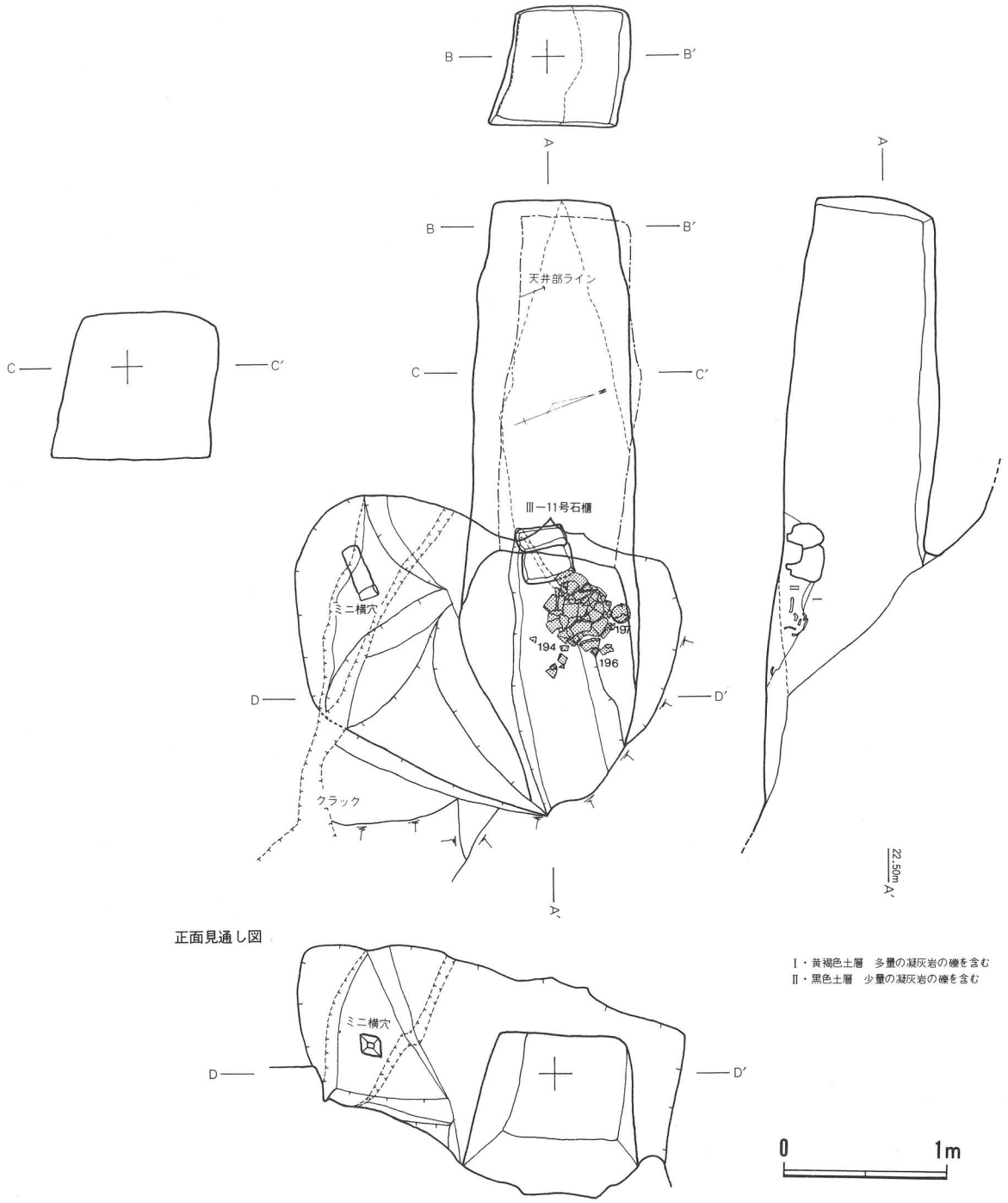
ミニ横穴：本墓前域の開口部右側にはミニ横穴が発見された。長さ32.8㎝、開口部巾12.0㎝、奥壁巾6.2㎝で、開口部高さ11.3㎝、奥壁高さ2.0㎝を測る。床面プランは稜を明瞭にする長方形で、その横断面形はほぼ正方形にちかい。開口部高が奥壁高に比して大きく、よって縦断面形は略三角形ないしロート型となる。また、主軸方位は36号横穴本体より大きく西に傾いてほぼ真西にちかい。

本ミニ横穴は高さ・巾とも70～80㎝ほどの略三角形をなす傾斜面のほぼ中央に穿たれているが、そこは左側に段差を設けて本体正面と、右側に段差を設けて横穴外界と、下端部には巾広の段差を設けて本体の墓前域と区画していた。なかでも下端部には、最大巾30㎝前後の略三角形の平坦面とみなし得る部分とその下よりにもかなり大きな緩傾斜面があって注目された。すなわち、平坦面と緩斜面で、この施設をミニ横穴に伴う、いわば墓前域に類する施設と認めておきたい。この部分にみられるノミ痕は、平行ノミによるものであって、いわゆる本体墓前域のV字状痕とは異っていた。手法のうちでも独立する施設であることを意識したものかも知れない。

このミニ横穴と付属施設の前よりには、長さ40～50㎝、巾1 m前後の範囲に、大略2回のノミ使用を




第50図　35号横穴実測図

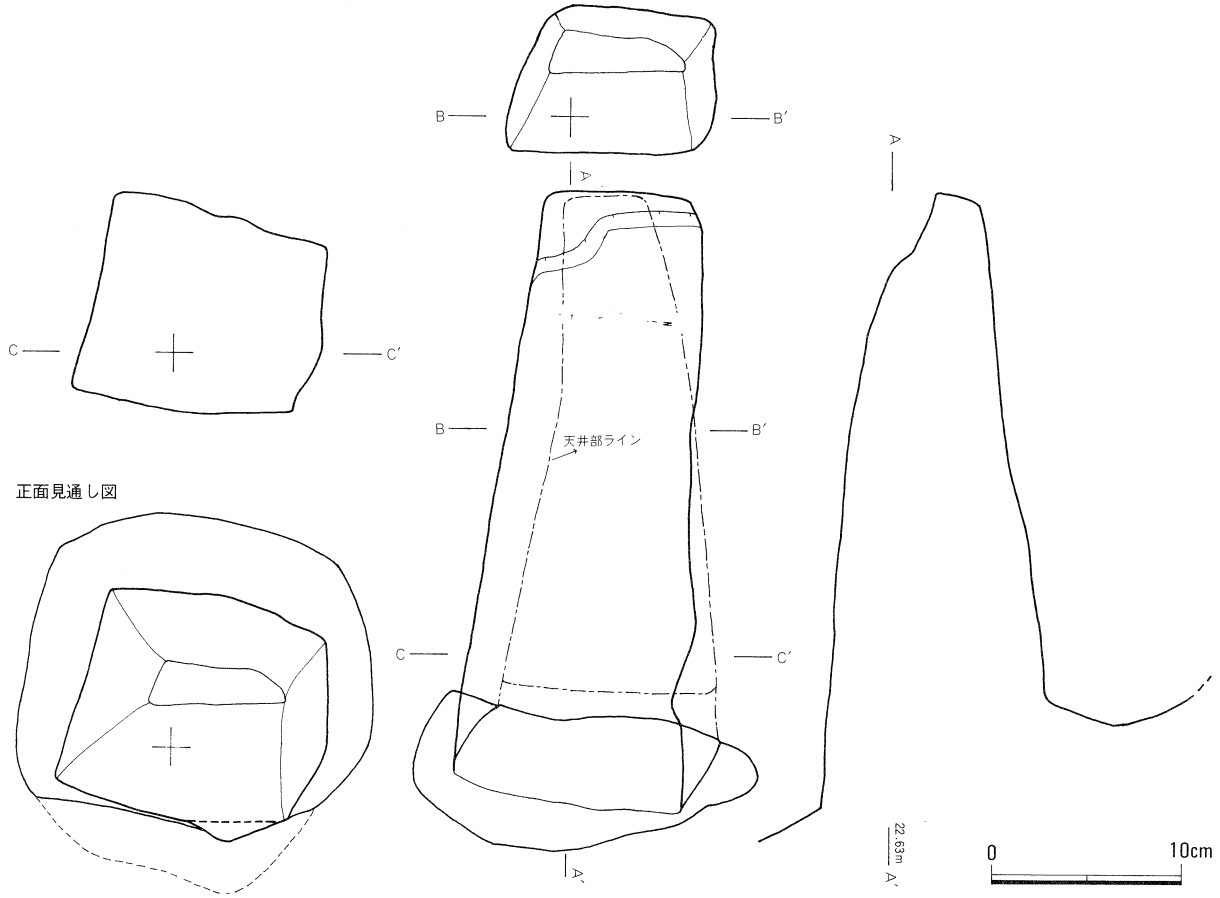



**第51図　36号横穴実測図**

うかがわせる大ノミ痕がみられて、２つの三角形面がつくられていた。ミニ横穴を含めた全構造を外界と区画するための平坦面とでも認めておくべきであろう。

出土遺物：石櫃と土器類があった。石櫃（Ⅲ－11号石櫃）は、開口部中央の床面からわずかに浮いた状況で、刳り込み部を下位にする逆位で発見された。その下部からは、須恵器坏破片も含まれていた。

土器類は、開口部付近から、須恵器・土師器が出土したが、とくに、石櫃に接する前よりの床面上からは須恵器大型甕の一括と碌がセットで発見された。注目される出土状況としてよい。　（渡辺）




**第52図　36号ミニ横穴実測図**

**37 号 横 穴（第53図・図版59）**

32号横穴の南側グループの上から5段目東端にあって、それは37号横穴と並列する。調査前の状況は、天井部から約20㎝ほどが開口して、わずかに内部がうかがえた。

玄室：長さ2.08 ｍ、開口部巾1.01 ｍ、中央部巾1.00 ｍ、奥壁巾0.81 ｍで、平面形は長方形プランを呈する。床面から天井までの高さは、開口部で0.90 ｍ、中央部で0.93 ｍ、奥壁で0.79 ｍを測って、ほぼ等しいといえる。床面の傾斜は、開口部と奥壁との差が約30㎝余もあって、かなり強い。横断面形は、台形で共通して、明瞭な稜によって各部を分ける。

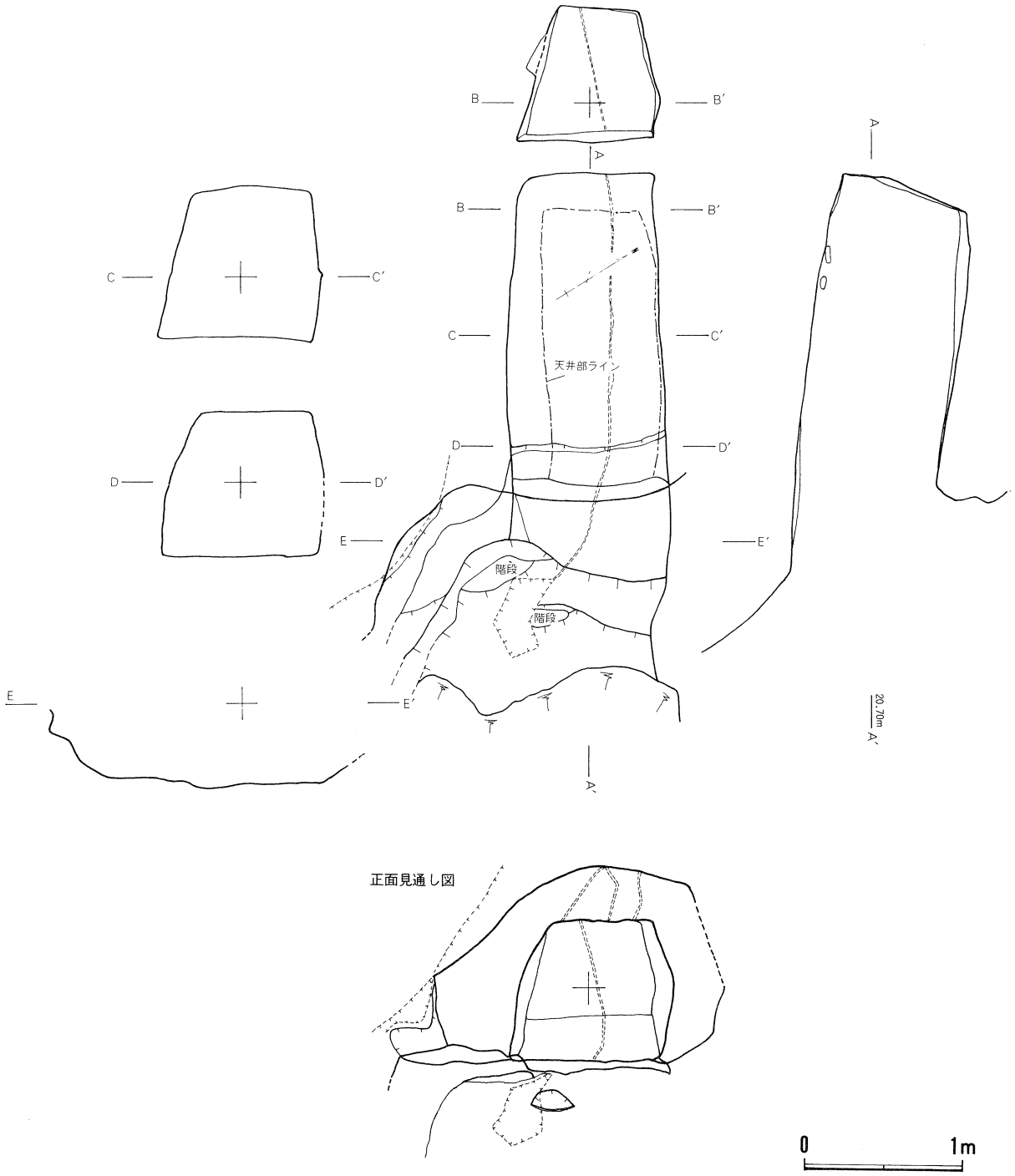
開口部の天井には、巾30㎝前後を測る広い上部平坦面があって、それは右袖部正面にまで及んでいた。左袖部は大部分が調査不能範囲で全容を確認することはできなかったが、観察可能部分から推定すると同様な構造を呈するものらしくみえた。

墓前域：長さ1.6 ｍ前後で、巾は現況で2.0 ｍほどとなるが、その大部分は袖部となる傾斜面で床面部分は玄室巾にほぼ等しい。きわめて短小な長方形をなす墓前域といえるが、その前方は自然面で階段状遺構もあることから、範囲は確定できたと判断している。

墓道等の施設はみられないが、開口部付近の床面上には、ノミ痕が他より多く集中してあたかも床面段差を意識しているかのようであった。こうした状況が、玄室との区別を意味するのかも知れない。

階段状遺構は、開口部右半部で、2段を認めてみたい。

出土遺物：土器類と鉄器類とがあった。玄室内からは、奥壁の手前中央部左側に、須恵器蓋坏等があって、鉄鏃も含まれていた。ほとんどが床面からわずかに浮いていた。　（植松）

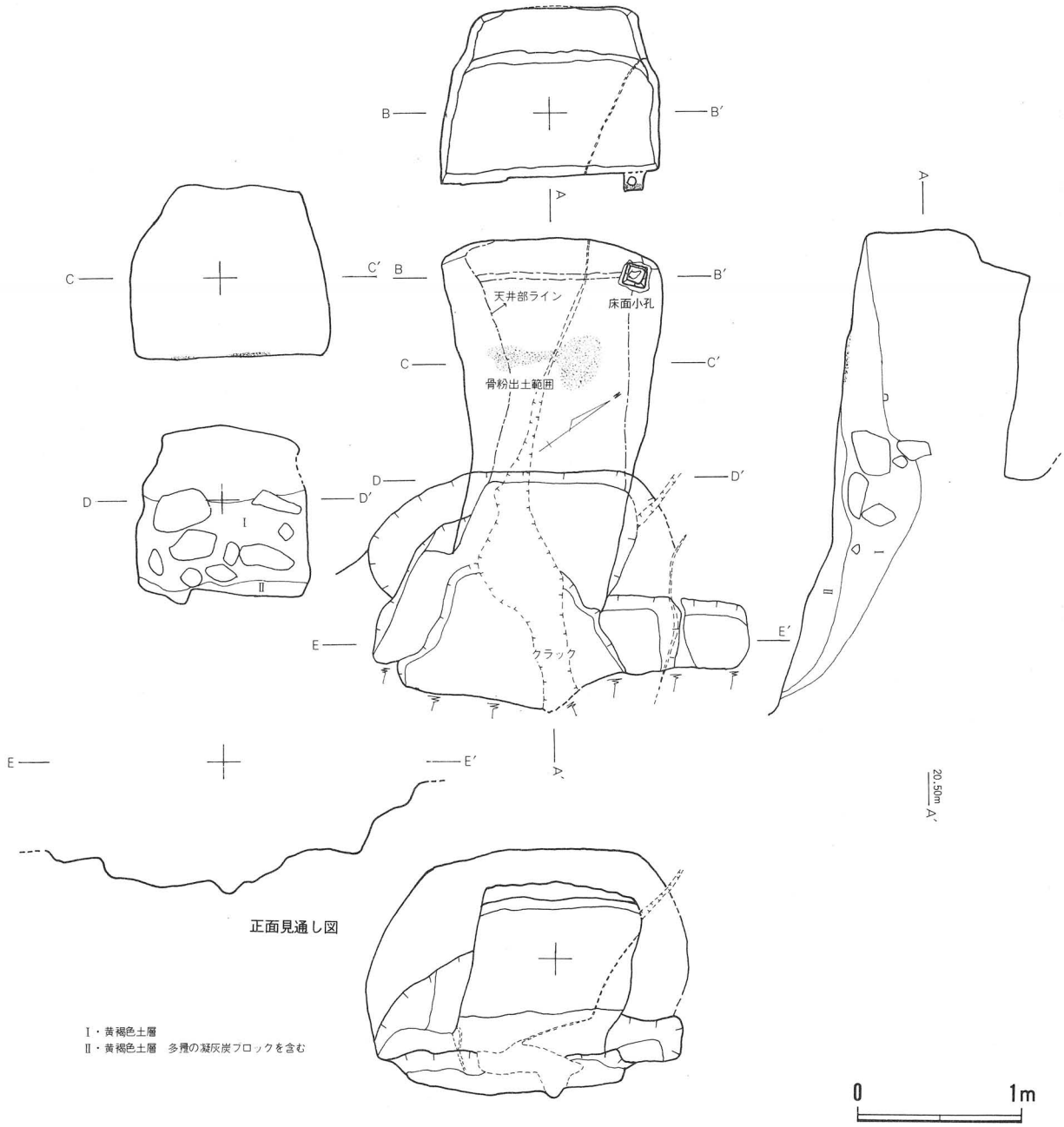



**第53図　37号横穴実測図**

**38 号 横 穴（第54・55図・図版60・61）**

37号横穴に並列してその西隣に位置する。調査前の状況は、天井部から約30～40㎝前後が開口していた。

玄室：長さ 2.28 ㎡、開口部巾 0.96 ㎡、中央部巾 1.14 ㎡、奥壁巾 1.32 ㎡で、平面形はフラスコ形を呈する。床面から天井までの高さは、開口部で 1.02 ㎡、中央部で 1.06 ㎡、奥壁で 0.63 ㎡とほぼ等しい。床面の傾斜は、開口部が奥壁部より約20㎝余も低くつくられて、やや強い。横断面形は、奥壁は角アーチ形、



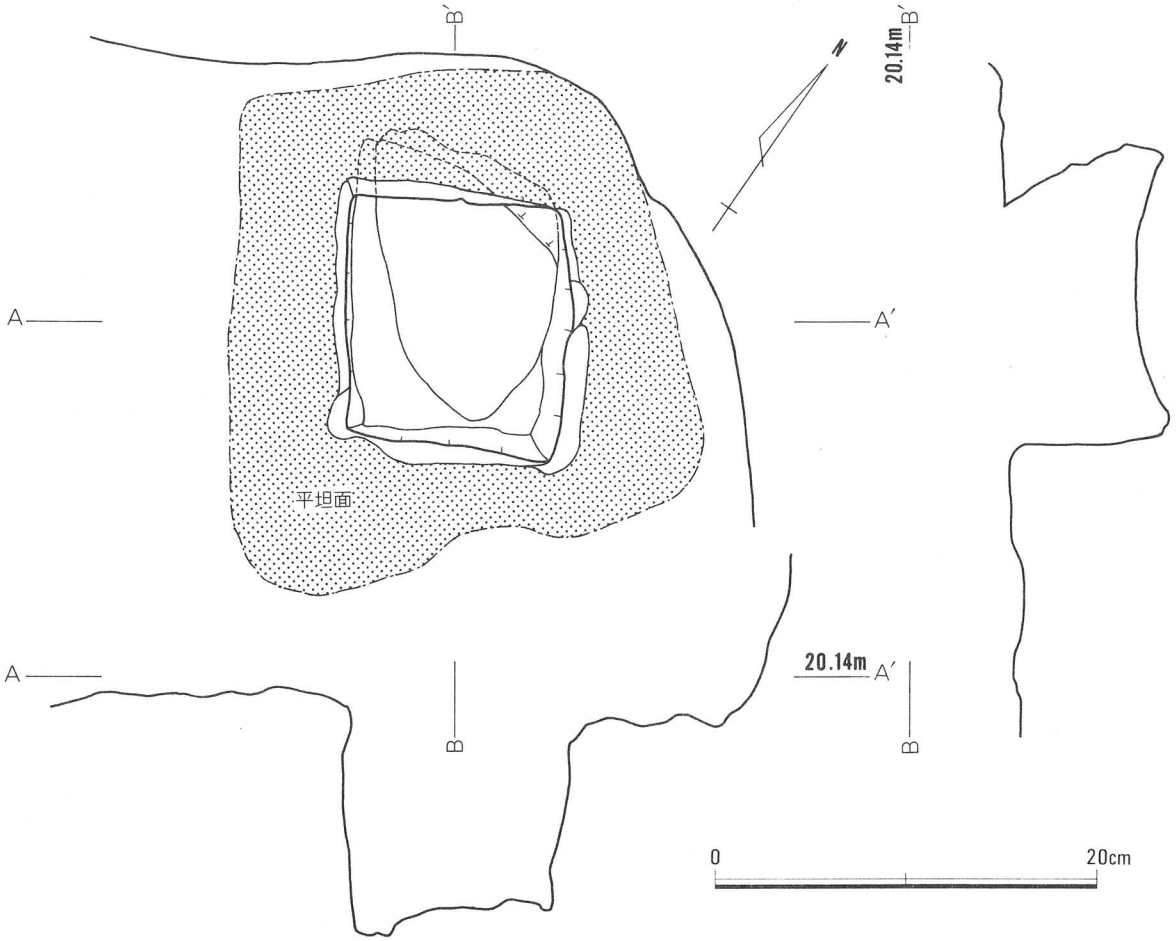

**第54図　38号横穴実測図**

中央部・開口部は台形となる。

奥壁は上端部の約3分の1ほどを約20㎝ほど前に出した形状で、いわゆる2段造りとなっている。27号横穴の奥壁と類似する構造といえるが、詳かにみると、27号横穴では左右側壁に若干の平坦面を残して奥壁をやや小さく堀り込み、本横穴にはそれらがみられない。

開口部の天井には、巾20㎝余を測る平坦面があって、それは左右両袖に連続する形状をつくっていた。

床面小孔：玄室の左奥隅の床面には、12×13㎝ほどの正方形プランで、深さ12㎝ほどの方孔が発見された。それは、27×27㎝ほどの範囲を平ノミでやや低く整形した中央部にあって、その右後側は玄室の奥壁右隅にあたるが、この壁が縦ノミによって変形されている状況が確認された。こうした手法が、本




**第55図　38号横穴床面小孔実測図**

小孔をミニ横穴とそれに伴う付属施設に類するものと扱っておきたい。また、刳り込み内部には、小礫と黄褐色土に混じて骨粉がみられた。

墓前域：長さ 0.6 m 前後で、36号横穴とともに、きわめて短小なタイプとなる。全体としては、大きくラッパ状に開きながら、その中央部はクラックにより大きく破壊されるが、玄室側壁のほぼ延長上に、高さ10㎝前後を測る段差が残っている。その左外側には階段状遺構 2 段もみられるので、墓前域の平坦面を区別する段差とみておこうと思う。そのプランはほぼ台形である。

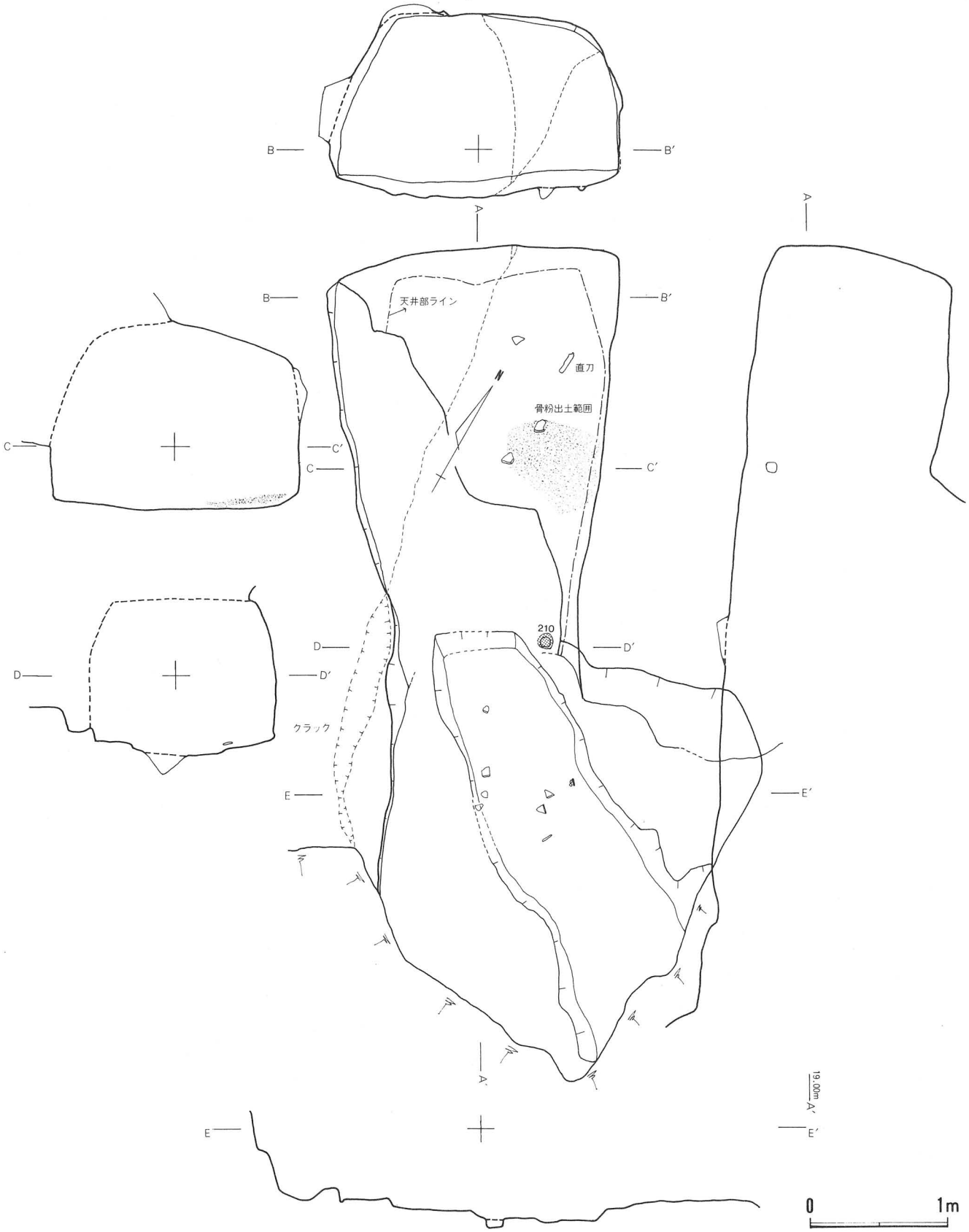
出土遺物：土器類と人骨類がある。土器は土師器甕破片で、玄室中央部のやや奥よりの床面上の、26×33㎝と24×15㎝ほど範囲の 2 個所に、骨片・骨粉を混じる黒色土のまとまりがみられた。両側とも床面に密着して高さ 5 ～ 6 ㎝ほどの高さまでであった。付近に鉄釘等の出土はみられなかった。　（植松）

**39 号 横 穴（第56図・図版62）**

本横穴は、38号横穴の西側で 5 m 前後を測る位置にあり、それより 1.5 m 前後低くつくられている。調査着手前の状況としては、天井部が半分ほどを残して崩落し内部には多量の土砂礫が堆積していた。

玄室：長さ 3.29 m、開口部巾 1.25 m、中央部巾 1.76 m、奥壁巾 2.04 m である。平面プランはフラスコ形を呈し、床面の傾斜はかなり強い。すでに述べたように、天井部の半分と右側壁のほとんどはクラックにより崩壊しているが、横断面形は、奥壁、中央部ともアーチ形を呈する。開口部では残存する左側壁と天井部のごく一部の状況からみて台形らしく推定できるようである。

ノミ痕は、奥壁ではいわゆる〝打ち込み型〟が多く、床面および左側壁では開口部から奥にむかって




第56図　39号横穴実測図

のV字状が一般的で、要するに他の玄室ときわだった相違はみられなかった。

墓前域：長さ2.78 m、最大巾2.6 m前後となる。平面形は、奥壁を広くする菱形プランであるが、その形状は開口部の左側外を大きく1 mほども拡張して、右側にはこうした広がりをみせない。要するに、墓前域は、後述する墓道の方位に示されるように、玄室の主軸方位から大きく右方向へ移動した状況とみてよい。左外への拡張も、そうした構造の反映というべきものである。

中央部には、大きく左方向にむかう墓道が認められ、巾0.6～1.0 m前後、長さ3.23 mを測って、深さは数cmから10cm前後であった。

こうした構造上の特徴に加えて床面におけるノミ痕の特殊性も目立った。それは、巾3.0 cmを測る平ノミを、ほぼ水平にちかく打ち込むことによってつくられる剥離法を床面全域の基本とするものであった。ノミ痕の方向性も注目された。すなわち、墓道内では前から奥へ、左右テラス部ではそれぞれの壁へとむかう傾向が指摘できた。また、墓道内は比較的密に左右テラス部はやや粗とも見えた。

出土遺物：土器類・鉄器類と人骨類とがあった。

玄室内からは、須恵器坏身破片が直刀身（短刀か）とともに出土したり、歯牙類が発見されたりしたが、いずれも撹乱土中であった。注目されたのは、玄室中央部の左側壁に接する70×70cmほどの範囲に、高さ10cm余で発見された人骨群で、床面からわずかに浮くとはいえ、かなり良好な出土状況といえた。

墓前域の中央部墓道床面から、鉄釘3以上および甕破片が出土したが、鉄釘類はほぼ床面直上、甕破片はそれから10cm前後浮いていた。いずれにしても移動したものとみてよかろう。（大川）

**40号横穴（第57図・図版63）**

39号横穴の一段下に位置し、本横穴群の中で最も下位に占地し、開口部床面での海抜値は16.9 mである。調査前の状況としては、現存開口部天井が約0.5 mあいており、内部には崩壊礫が多量に入り込んでいた。本横穴の前面は既に宅造されて、その際玄室前端と墓前域は大きく破壊を受けていた。

玄室：開口部及び墓前域が大きく破壊されているため、全長・玄室長を知ることはできないが岩盤の残存状況等より推定すると全長4.2 m、玄室長2.2 m程度であったと思われる。平面形は長方形で開口部付近で巾1.15 m、奥壁で1.15 mを測る。断面形は角アーチ形で、側壁から天井への変化はそれほど際だってはいない。高さは奥で0.77 m、中央で1.01 m、開口部で1.04 mであり大きな変化はない。

玄室を斜めに輪切りにするようにクラックが走っており奥壁右半及び右側壁は大きく剥落している。床面プランの右側の張り出しはちょうどクラックの部分にあたる。

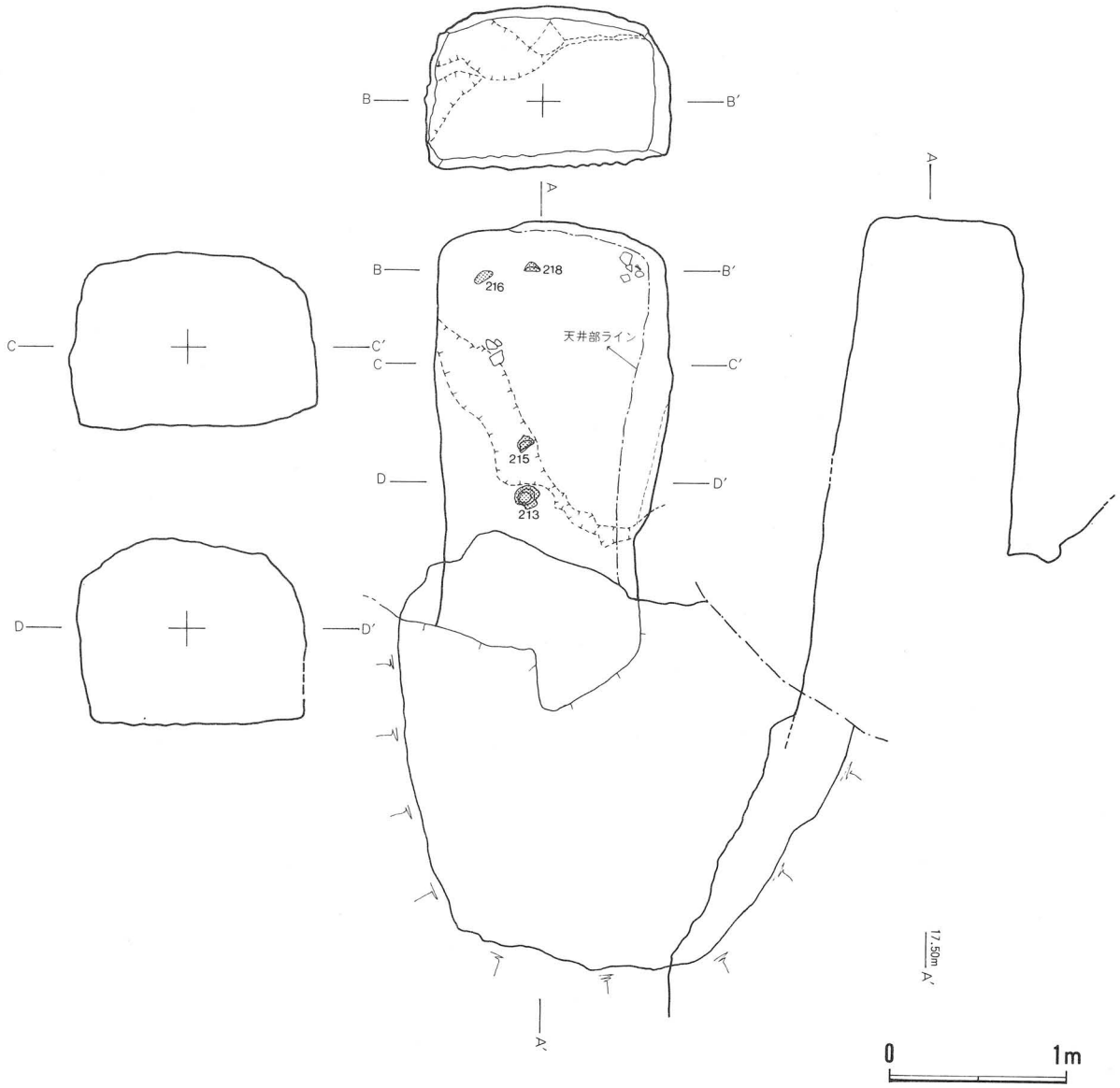
整形は比較的荒く壁面の凹凸は著るしい。奥壁は打ち込み技法で剥ぎ取っており、ノミ巾3.5 cmが計測できる。側壁及天井はV字状痕であるが部分的には平行ノミも観察できる。ノミ巾はほとんど計測できないが数ケ所3.5 cmを測るものがあり同一のノミを使用していたと考えてよいだろう。

出土遺物：玄室内には約10cm前後の流入土が認められ、これを取り除くと床面に接して玄室内開口部付近で須恵器坏蓋、玄室中央右よりで須恵器坏・奥壁付近で坏身・長頸坩破片が出土した。（佐藤）

**5・6・19・20号横穴（図版14）**

これらの横穴は、発掘調査に先立つ全体測量の際にその存在が認められたものの、落盤による破壊が著しく、発掘調査は危険であると判断し略測調査にとどめたものである。

5号横穴：本横穴は4号横穴の東南下方、6号横穴との中間に位置し、開口部天井がほとんど崩落していた。奥壁は巾1.70 mほど、高さ1.20 m前後を測り、アーチ型を呈していた。また玄室長は2.50 mほどと推定されフラスコ型を呈していた。玄室中央部での横断面形はその左半が崩落しているもののアーチ型であると推定できた。比較的規模の大きな横穴である。




**第57図　40号横穴実測図**

6号横穴：5号横穴の東南下位に占地し、やっと這い入ることができる程度開口していた。奥壁は巾2.70 m、高さ2.30 mほどが推定でき、アーチ型を呈する。玄室長は、4 m以上であると思われ開口部側半分が崩落土砂で埋没しており、ほぼフラスコ型の床面が想定できた。1・2・3号、4号、5号、6号横穴等、大北横穴群の最上段を形成する諸横穴が比較的大型の横穴であることは注目してよいであろう。

19号横穴：奥壁は巾1.80 m、高さ1.50 mほどを測る角アーチ形を呈し、玄室は長さ3 mほどの長方形を呈すると想定された。左側壁は下半にV字状のノミ痕が顕著に認められ、その上半には平行ノミ痕が認められた。

20号横穴：本横穴の大部分が崩落しており、また奥壁も下半が埋没していて、奥壁巾1.40 mが推定できたにすぎなかった。

（渡辺）

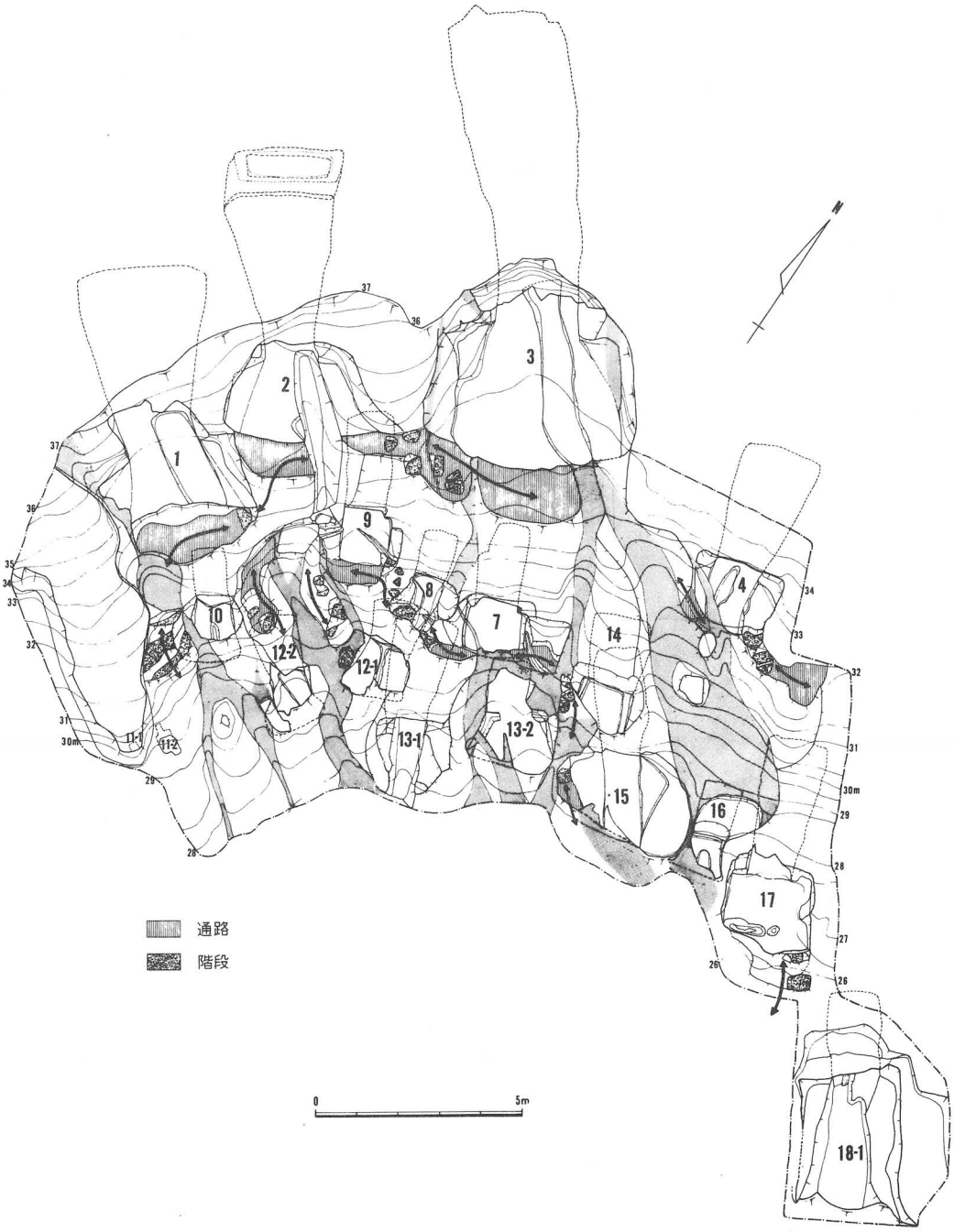
# 第5表 横　穴　一　覧

| 項目／横穴名 | 開口部床面標高 | 主軸方位 | 全長 | 玄室 平面形 | 玄室 横断面形 奥壁 | 玄室 横断面形 中央部 | 玄室 横断面形 開口部 | 玄室 長さ | 玄室 幅 奥壁 | 玄室 幅 中央部 | 玄室 幅 開口部 | 玄室 高 奥壁 | 玄室 高 中央部 | 玄室 高 開口部 | 玄室 床面傾斜 | 墓前域 平面形 | 墓前域 長さ | 墓前域 幅（下段は床面） 奥壁 | 墓前域 幅（下段は床面） 中央 | 墓前域 幅（下段は床面） 前端 | 墓前域 床面傾斜 | 内部主体（含石櫃等） | 開口部施設 | 墓前域施設 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 33.82 | N 40° 50′ W | 6.40 | フラスコ A 形 | アーチ | アーチ | アーチ | 4.67 | 3.12 | 2.42 | 1.68 | 1.97 | 1.77 | | 6° | 台形（広） | 1.73 | 4.10<br>3.10 | 3.80<br>2.80 | 3.30<br>3.10 | 10° | | | 墓道 | |
| 2 | 34.80 | N 33° 30′ W | 8.10 | フラスコ A 形 | アーチ | 角アーチ | 角アーチ | 5.24 | 2.90 | 2.16 | 1.24 | (2.16) | 1.90 | 1.55 | 3° | 台形（広） | 2.80 | 2.50<br>2.30 | 3.40<br>3.00 | 4.30<br>3.80 | 3° | 刳り抜き石棺 | | 排水溝 | |
| 3 | 34.66 | N 40° 30′ W | 11.24 | フラスコ B 形 | アーチ | アーチ | アーチ | 8.16 | 2.55 | 2.25 | 2.00 | 2.04 | 2.13 | 1.81 | 5° | 台形（広） | 3.74 | 4.55<br>3.60 | 5.10<br>3.80 | 5.05<br>4.00 | 5° | | 封鎖施設（部分） | 墓道 | |
| 4 | 32.87 | N 12° 50′ W | 4.73 | フラスコ A 形 | アーチ | アーチ | アーチ | 3.35 | 1.74 | 1.62 | 1.10 | 0.86 | 1.01 | 0.99 | 6° | 長方形（広） | 1.38 | 2.19<br>1.15 | 1.90<br>0.94 | 1.38<br>0.66 | 7° | | 封鎖施設<br>上部平坦面 | 墓道<br>排水溝 | |
| 5 | | | | フラスコ A 形 | アーチ | アーチ | | (2.50) | 1.70 | 1.65 | | 1.20 | | | | | | | | | | | | | 現況略測 |
| 6 | | | | (フラスコ A 形) | アーチ | | | (4.00) | (2.70) | 2.60 | | (2.30) | | | | | | | | | | | | | 現況略測 |
| 7 | 29.34 | N 25° 40′ W | 3.24 | 長方形 | 台形 | 台形 | 台形 | 2.17 | 0.69 | 1.12 | 1.06 | 0.78 | 1.02 | 0.99 | 6° | 長方形〔方形区画(広)〕 | 1.07 | 1.92<br>1.28 | 2.03<br>1.35 | 1.57<br>1.33 | 3° | | 封鎖施設<br>上部平坦面 | | 壇状施設 |
| 8 | 31.05 | N 20° 30′ W | 2.15 | 長方形 | 台形 | 方形 | 方形 | 1.36 | 0.80 | 0.83 | 0.74 | 0.81 | 0.85 | 0.75 | 0° | 長方形〔方形区画〕 | 0.79 | 0.82<br>0.75 | 0.64<br>0.48 | 0.70<br>0.52 | 4° | 石櫃 1 | 床面段差 | 墓道 | 排水溝 |
| 9 | 32.04 | N 30° W | 3.77 | 長方形 | 台形 | 台形 | 台形 | 2.61 | 1.04 | 1.09 | 0.96 | 0.39 | 0.86 | 0.95 | 6° | 長方形〔方形区画(広)〕 | 1.16 | 1.16<br>1.03 | 1.20<br>1.15 | 1.10<br>1.10 | 8° | 石櫃 1（西外） | 封鎖施設<br>上部平坦面 | 排水溝 | 壇状施設 |
| 10 | 30.73 | N 37° 30′ W | (2.29) | 長方形 | 台形 | 台形 | (台形) | (2.05) | 0.77 | 0.83 | 0.85 | 0.64 | 0.72 | 0.76 | 5° | 菱形 | (0.84) | 1.10<br>0.83 | 1.90<br>(1.10) | 2.00<br>1.15 | 8° | 石櫃 1（墓前域） | | 排水溝 | |
| 11-1 | 29.57 | N 72° W | 0.29 | 長方形 | 方形 | 方形 | 方形 | 0.29 | 0.20 | 0.21 | 0.22 | 0.15 | 0.22 | 0.26 | 8° | ―― | | | | | | | 上部平坦面 | | |
| 11-2 | 29.40 | N 45° W | 1.17 | 長方形 | 角アーチ | 台形 | 方形 | 0.33 | 0.19 | 0.20 | 0.20 | 0.14 | 0.20 | 0.17 | 10° | 長方形〔変形方形区画〕 | | 0.55<br>0.45 | 0.66<br>0.47 | (0.27)<br>(0.18) | 4° | | 上部平坦面<br>床面段差 | | 栓 |
| 12-1 | 29.33 | N 20° 40′ W | (2.26) | フラスコ B 形 | 角アーチ | 角アーチ | 角アーチ | 1.20 | 1.32 | 1.25 | 1.00 | 0.80 | 0.82 | 0.81 | 0° | 台形 | (1.06) | 1.20<br>1.10 | 1.38<br>1.25 | 1.51<br>1.51 | 2° | 石櫃 1（墓前域） | 上部平栓面<br>床面段差 | 排水溝 | |
| 12-2 | 29.24 | N 51° W | (2.30) | フラスコ B 形 | 台形 | 角アーチ | 角アーチ | 1.55 | 1.17 | 1.05 | 0.80 | 0.43 | 0.68 | 0.71 | 1° | 長方形 | (0.65) | 1.00<br>0.80 | 0.98<br>0.92 | 0.97<br>0.97 | 7° | 石櫃安置区画 | 床面段差 | 墓道 | |
| 13-1 | 27.83 | N 20° 30′ W | (4.55) | フラスコ B 形 | アーチ | 角アーチ | 台形 | 3.06 | 1.40 | 1.29 | 0.86 | 0.85 | 0.95 | 1.05 | 6° | 菱形（広） | (1.49) | 1.13<br>0.86 | (1.30)<br>0.55 | (0.70)<br>0.37 | 15° | | 床面段差 | 墓道 | |
| 13-2 | 28.27 | N 26° 30′ W | (2.79) | 長方形 | 方形 | | | 1.43 | 0.88 | 0.99 | (0.89) | 0.53 | | | 4° | 台形 | (1.36) | | | | 7° | | 床面段差 | 排水溝 | |
| 14 | 29.35 | N 22° 30′ W | (2.90) | 長方形 | 台形 | 台形 | 台形 | 1.79 | 1.36 | 1.44 | 1.14 | 0.47 | 0.80 | 0.86 | 7° | 長方形 | (1.04) | 1.26<br>1.15 | (1.40)<br>1.25 | | 1° | 石櫃 1〔蓋〕 | 上部平坦面<br>床面段差 | 墓道 | |
| 15 | 27.58 | N 35° 30′ W | 4.96 | 長方形 | 台形 | 台形 | 台形 | 2.43 | 0.97 | 1.22 | 0.88 | 0.82 | 1.22 | 1.02 | 4° | 菱形（広） | 2.53 | 2.03<br>1.14 | 2.57<br>2.27 | 1.43<br>1.41 | 4° | | 床面段差 | 墓道 | |
| 16 | 27.26 | N 17° 20′ W | (2.13) | 長方形 | 台形 | (方形) | (方形) | 1.47 | 0.95 | 0.80 | 0.81 | 0.47 | 0.62 | 0.66 | 4° | 台形 | 0.66 | 1.17<br>0.80 | 1.22<br>(0.75) | 1.33 | 1° | | 床面段差 | | |
| 17 | 26.47 | N 20° W | 4.95 | フラスコ B 形 | 角アーチ | 台形 | 方形 | 3.55 | 1.21 | 1.39 | 1.07 | 0.82 | 1.11 | | 8° | 長方形〔方形区画(広)〕 | 1.40 | 2.14<br>1.95 | 2.10<br>1.28 | 2.18<br>2.12 | 4° | 石櫃 2<br>ミニ（開口部） | 上部平坦面<br>床面段差 | | |
| 18-1 | 24.34 | N 33° 30′ W | 5.33 | 長方形 | 台形 | 台形 | 台形 | 2.37 | 1.14 | 1.31 | 1.17 | 0.86 | 1.02 | 1.24 | 3° | 長方形（広） | 2.65 | 2.48<br>2.17 | 2.47<br>2.22 | 2.60<br>2.57 | 0° | | 上部平坦面<br>床面段差 | 墓道 | 玄室排水溝 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 18-2 | 23.52 | N 29° W | 4.99 | 長方形 | 角アーチ | | | 2.16 | 0.86 | 0.80 | 0.92 | 0.83 | | | 5° | 台形 | 1.54 | 0.94 | 1.29 | 0.71 | 6° | 石櫃 1 | | 墓道 | |
| 19 | | | | 長方形 | 角アーチ | | | (3.00) | 1.80 | | | 1.50 | | | | | | | | | | | | | 現況略測 |
| 20 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 調査不能 |
| 21-1 | 33.01 | N 51° W | 5.07 | 長方形 | 角アーチ | 台形 | | 2.83 | 1.34 | 1.33 | 1.14 | 1.51 | 1.44 | | 8° | 台形 | 2.59 | 1.07<br>1.06 | 1.46<br>1.38 | (1.52)<br>1.39 | 8° | | 封鎖施設<br>床面段差 | 墓道 | |
| 21-2 | 33.37 | N 61° 30′ W | 3.60 | 長方形 | 方形 | 台形 | | 1.83 | 0.82 | 0.96 | 1.10 | 0.75 | 0.92 | | 6° | 台形 (広) | 1.77 | 1.70<br>1.51 | 1.87<br>1.77 | 2.08<br>1.95 | 4° | | 封鎖施設<br>床面段差 | 墓道 | |
| 22 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 調査不能 |
| 23-1 | 31.84 | N 36° 30′ W | 6.22 | 長方形 | 台形 | 台形 | | 2.45 | 0.81 | 0.91 | 1.03 | 0.79 | 0.97 | | 8° | 菱形 | 3.89 | 1.75<br>1.42 | 2.16<br>1.40 | 2.23<br>2.21 | | | 床面段差 | 墓道 | |
| 23-2 | 30.95 | N 44° W | 4.01 | 長方形 | 台形 | | | 1.70 | 0.79 | 0.92 | 0.88 | 0.75 | | | 2° | 台形 | 1.60 | (1.20)<br>0.85 | (1.42)<br>0.94 | 1.67<br>1.16 | 10° | | | 墓道 | |
| 24 | 30.57 | N 35° W | 4.23 | フラスコ B 形 | 台形 | 台形 | 方形 | 2.43 | 1.14 | 0.98 | 0.95 | 0.84 | 1.00 | | 4° | 菱形 | 1.80 | 0.99<br>0.90 | 1.76<br>1.62 | | 1° | 石櫃 1 | 封鎖施設<br>床面段差 | 墓道 | 玄室排水溝 |
| 25-1 | 30.35 | N 61° W | 4.46 | 長方形 | 台形 | 台形 | 台形 | 3.05 | 1.21 | 1.56 | 1.14 | 0.80 | 1.03 | 0.93 | 5° | 長方形〔方形区画〕 | 1.41 | 1.46<br>1.16 | 2.10<br>1.57 | 1.46 | 5° | | | | |
| 25-2 | 35.49 | N 50° 30′ W | 2.66 | 長方形 | 台形 | 台形 | 角アーチ | 1.80 | 0.81 | 0.93 | 0.81 | 0.68 | 0.90 | 0.87 | 15° | 長方形〔方形区画〕 | 0.91 | 1.00<br>0.91 | 1.23<br>(0.98) | 0.89<br>(0.86) | 10° | | | | |
| 26 | 35.90 | N 58° W | 4.44 | フラスコ B 形 | 角アーチ | 台形 | 台形 | 3.28 | 1.87 | 1.82 | 1.44 | 1.28 | 1.30 | 1.14 | 6° | 台形 | 1.88 | 1.33<br>1.33 | 1.40<br>1.13 | 1.30 | 4° | 石櫃1•安置区画(墓前域) | 床面段差 | 墓道 | |
| 27 | 35.19 | N 70° 30′ W | 3.88 | フラスコ B 形 | 台形 | 台形 | 台形 | 2.80 | 1.32 | 1.56 | 1.20 | 1.13 | 1.34 | | 3° | 台形 | 1.08 | 1.75<br>1.21 | 1.98<br>1.46 | 1.92<br>(1.47) | 3° | 石櫃 3 | | 墓道 | 2段奥壁 |
| 28 | 38.37 | N 100° 30′ W | 4.31 | 長方形 | 台形 | 台形 | | 2.60 | 0.99 | 0.92 | 0.87 | 0.75 | 1.00 | | 6° | 台形 | 1.71 | (0.96) | (1.56) | (1.01) | 8° | | | | |
| 29 | 33.79 | N 76° 30′ W | 5.69 | フラスコ B 形 | アーチ | 角アーチ | | 3.83 | 1.51 | 1.54 | 1.12 | 1.18 | 1.22 | | 6° | 台形 | 1.57 | 1.78<br>1.33 | 1.45<br>1.26 | 0.93 | 4° | 石櫃 2 | 区分帯 | 墓道 | |
| 30 | 36.33 | N 82° 10′ W | 4.21 | 長方形 | 台形 | 台形 | | 2.69 | 0.90 | 1.10 | 0.82 | 0.84 | 1.03 | | 2° | 長方形 | 1.77 | 1.47<br>1.35 | 1.45 | 1.58<br>1.21 | 7° | 石櫃 2 床面小孔(墓前域) | 床面段差 | 墓道<br>排水溝 | |
| 31 | | | | | | | 台形 | | | | 1.01 | | | 0.55 | | | | | | | | | | | 調査不能 |
| 32 | 28.34 | N 27° 20′ W | 10.62 | フラスコ A 形 | アーチ | アーチ | 台形 | 4.56 | 3.35 | 2.93 | 1.87 | 2.16 | 1.73 | 1.49 | 2° | 長方形 (広) | 7.02 | 5.56<br>3.16 | 7.15<br>3.04 | | 6° | | 上部平坦面<br>床面段差 | 墓道 | |
| 33 | 25.95 | N 53° W | 4.21 | 長方形 | アーチ | アーチ | 角アーチ | 2.98 | 1.39 | 1.72 | 1.31 | 0.56 | 0.98 | 0.94 | 10° | 長方形 | 1.80 | 2.10<br>1.23 | 2.16<br>1.13 | 1.92<br>1.02 | 4° | | 上部平坦面<br>床面段差 | | |
| 34 | 24.15 | N 51° 30′ W | 4.31 | 長方形 | 角アーチ | 台形 | 台形 | 2.55 | 1.18 | 1.31 | 1.16 | 0.77 | 0.90 | 0.86 | 6° | 台形 | 2.36 | 1.15<br>1.13 | 2.10<br>1.42 | 1.94<br>1.79 | 8° | 石櫃 1<br>(開口部) | 封鎖施設<br>上部平坦面<br>床面段差 | 墓道 | |
| 35 | 23.02 | N 51° 40′ W | 5.03 | 長方形 | 台形 | 台形 | 台形 | 3.34 | 1.26 | 1.23 | 1.24 | 0.93 | 1.08 | 0.99 | 5° | 台形 | 1.20 | 2.04<br>1.21 | 2.03<br>1.33 | 1.76<br>1.61 | 8° | | 上部平坦面<br>床面段差 | 墓道 | |
| 36 | 21.86 | N 69° 30′ W | 3.80 | 長方形 | 方形 | 方形 | 台形 | 2.60 | 0.70 | 0.96 | 1.08 | 0.69 | 0.93 | 0.85 | 6° | 長方形 | 1.20 | 1.50<br>1.08 | 1.33<br>0.92 | 0.90<br>0.66 | 3° | 石櫃1(開口部)<br>ミニ(開口部) | 上部平坦面 | 墓道 | |
| 37 | 20.22 | N 58° 20′ W | 3.42 | 長方形 | 台形 | 台形 | 台形 | 2.08 | 0.81 | 1.00 | | 0.79 | 0.93 | 0.90 | 8° | 長方形 | 1.64 | 1.64<br>1.43 | 1.79<br>1.57 | 1.67<br>1.60 | 2° | | 上部平坦面 | | |
| 38 | 19.96 | N 54° 50′ W | 2.91 | フラスコ B 形 | 角アーチ | 台形 | 台形 | 2.28 | 1.32 | 1.14 | 0.96 | 0.63 | 1.06 | 1.02 | 5° | 台形 | 0.63 | 1.31<br>1.20 | 1.82<br>1.60 | 1.68<br>1.74 | 19° | 床面小孔 | 上部平坦面 | | |
| 39 | 18.44 | N 29° 40′ W | 6.07 | フラスコ B 形 | アーチ | 角アーチ | | 3.29 | 2.04 | 1.76 | 1.25 | 1.23 | 1.36 | | 7° | 菱形 | 2.78 | 2.94<br>2.63 | 2.42 | | 1° | | | 墓道 | |
| 40 | 16.90 | N 41° 50′ W | (2.77) | 長方形 | 角アーチ | 角アーチ | 角アーチ | | 1.15 | 1.29 | 1.15 | 0.77 | 1.01 | 1.04 | 9° | | | | | | | | | | |

## 第 2 節　階段と通路

本横穴群にみられた構造上の特徴の一つにいわゆる階段と通路がある。これには、各横穴の個別に伴うといい得るものと、複数からなる横穴を連絡する状況にあるものとの別がある。もちろん、こうした階段の果す機能は、本横穴群のグループ化や群構成に深いかかわりをもつものといえるが、ここでは、確実に指摘し得る構造上の施設としての階段、通路の具体相について述べておくこととしたい。




**第58図　A群横穴にみる階段と通路**

その遺構としての把握、すなわち構造からすれば、いわゆる通路の確認はかなりむずかしいために、階段としての認定が多い。ここでは、そうした数段からなる階段の1単位を、その付近の横穴名を付して称することとした。例えば、10号横穴の墓前域西外側に接して3段からなる階段があるが、それを〝10号西〟階段と呼称してみたのである。本横穴群の西からほぼ調査次順にしたがって記述してみる。

**10号横穴西階段**　3段

10号横穴墓前域の西外側に接してそれは本横穴群の西限をつくる壁面との隙間を占める位置にある。確実なものとして3段を図示したが、巾70〜80㎝前後で、比高は25・35㎝前後を測る。あるいはその上部に連続する三角形プランの平坦面も加えて4段とすることも可能かも知れないが、それには人為的なノミ痕等が認められないので除外してみた。

本階段の道順としては、11—2号横穴東側付近から10号横穴に西側から入り、さらに上方(1号横穴)への連絡の可能性を有する。

**10号横穴東側階段**　2段

10号横穴墓前域とその東側クラックの隙間にある自然面に、人為的に平坦化した部分があり図化してみた。比高は20㎝前後で階段としてもよいが、下方は12—2号横穴天井部あるいはその東側クラックであって連続性なく、上方は1号横穴への連絡とすると傾斜が強すぎるようである。以上によって、あるいは階段とすべきでないかも知れない。

**13—1号横穴西側階段**　3段

13—1号横穴墓前域の西外側に接してその西半は2号横穴前端部から連続する大きなクラックによって破壊された状況にある。よって、風化激しく現状でノミ痕等を識別することは困難で階段といえる確証はないことになるが、その形状はきわめて良好で3段で約75㎝前後を昇る。

道順としては、13—1号横穴西側から12—1号ないし12—2号横穴方向へであろう。

**9号横穴西下側階段**　4段

9号横穴墓前域西下側で、12—1号横穴の西上部よりにあたる。それは、前述の2号横穴墓前域前端から発する本墓域中で最大といえるクラックのほぼ中央部東縁よりの、いわば残存部にあたる状況にある。4段を図化してみたが、見方によっては、2段目と3段目との間にもう1段認めて5段かもしれない。その状況は、ノミにより大きく凹められており、ここでは平坦面というよりも垂直面と理解しておきたい。

本階段の道順としては、12—1号横穴西側を通って9号横穴墓前域へということになるが、本階段最下段と9号横穴墓前域との比高は約1.1㎝前後となる。また、前述の13—1号横穴西側階段(3段)との連結が可能である状況からすれば、その最下段と9号横穴墓前域との比高は、約3.8〜3.9ｍ前後といえる。

**14号横穴西外側階段**　3段

**15号横穴西外側階段**　1段

15号横穴墓前域の西外側を階段と認めて、その上方、13—2号横穴の東上で、14号横穴の西外側に連結して、その位置は、15・14号横穴と13—2・7号横穴との中間をなす隙間を占める。クラックにより大きく破壊されていて、現存3段もその西半部を失っているようであるが、15号横穴のそれとの間には、

3段前後が復元可能であろう。

残存する4段ともノミ痕は明瞭で、その道順は、15号横穴墓前域西端から、13―2号横穴の東側、14号横穴の西側を経て、7号横穴墓前域方向へと理解できる。

**7号横穴墓前域東外側階段**　　1段

7号横穴墓前域の東端部にある大きなノミ痕を階段と認めておきたい。こうした判断については、すでに7号横穴の項でも記述したが、墓前域の東外側に、墓前域床面より約30㎝前後も高い緩傾面とそれに伴う垂直面を設けて、その下端部を平坦化して、本階段としている。さらにその下側の7号横穴よりには排水溝を窄っているが、その状況は7号横穴墓前域の排水機能を有するものではないので、むしろ上方からの7号横穴への流入を排除する目的を解すべきであろう。

いずれにしても、本階段によって、前述の14号横穴西外側階段からは、スムースに7号墓前域に連続できるが、その中間にも欠失された1段を推定する方がよいようである。すると、前述の15号横穴墓前域西外側から、7号横穴墓前域への連絡は、現存するもの5段、推定復元し得るもの4段として、計9段、歩数にして10段で、その比高差約2㎞を昇ることになる。

**7号横穴墓前域前側通路**　　2.5㎞前後

7号横穴はすでに述べたように方形区画墓前域を有するが、その前端部は一部が崩落していた。それでも墓前域前端の区画の前よりには、巾30～40㎝で、長さ2.5㎞前後の平坦部が、その中央部約1㎞前後を失いながらも残存していた。その部分を、前述の7号横穴墓前域東外側階段から、後述する7号横穴西側階段へ連結するための通路と判断しておきたいのである。ただし、その西端部は中央部よりわずかとはいえ高くつくられる状況も認められたので、ここでは、やや傾斜を有する通路（坂）としておくが、見方によっては階段の一部に含めることもできるかも知れない。

**7号横穴西―8号横穴前東側階段**　　3段

ここでは、7号横穴前通路から8号横穴墓前域まで、ノミ痕の明瞭な階段3段を図示してみた。この最上段が、8号横穴墓域の前側左端部を占めることになるが、ここでの7号横穴前通路との比高は約60～70㎝前後となる。

**8号横穴前西―9号横穴前東側階段**　　5段

8号横穴はその中央部に墓道を伴う墓前城を有するが、その前西端部の平坦面を階段と認めていた。状況からいえば、前述の7号横穴前通路と同様であるが、ここでは、区別された平坦面と観察されたので階段に含めておく。2～4段目は8号開口部平坦面の外に接する。5段目は9号墓前域の排水溝の開口部にあたり、さらに1段昇って、9号横穴前通路に至る。その比高差は1.3㎞前後を測った。

このうち、ノミ痕の明瞭な例は1・4段目で、わずかに認め得るのは2・5段目、やや強いて認めたのが3段目といえる。全体的に、その位置・レベル関係も良好で、比較的整然と残った階段とみてよいものであろう。

**9号横穴前通路**　　1.4㎞前後

9号横穴は、方形区画墓前域を有するが、その前側には、巾50㎝前後で長さ1.4㎞前後を測る緩斜面があった。ここは、玄室から墓前域にまで連続した傾斜が大きな変化をみせる部位にあたり、また墓前域との境目は一見不明瞭で連続するかのようにみえるが、詳細に観察すると、そこには一連の打ち込み

ノミ痕もみられて、明確な区別がなされている状況であった。加えて、その位置は、前述の9号横穴西下および東側階段の各最上段にスムースに連絡できるものであった。こうした諸条件が本緩斜面を通路認定した理由といえる。

また、本通路は、前述の15号横穴墓前域西端部から4.1 m前後の比高差を有していたが、ここで認定された階段は13段、推定復元されたもの4段とすると、歩数では19段を要したことになろう。すなわち、1段では20㎝余という数値が得られたのである。

**17号横穴前東側階段**　　2段

17号横穴は典型的な方形区画墓前域と認められたが、その前方左側の平坦面を階段と認めていた。この付近は、ちょうど比較的大きなクラックの走路にあたるため風化激しくノミ痕等は不明瞭であるが、大略の形状から2段を認めた。17号横穴前方部全域が未発掘であってやや不確実ではあるが認めておく。

**4号横穴東（5号横穴西）側階段**　　3段

5号横穴墓前域前側から4号横穴前へはややレベル差がある。ここに巾5.5㎝の平ノミ痕が目立つので、階段3段を認めて、4段目で4号横穴墓前域に達するとしてみた。下から1・2段目はその平坦部中央に大ノミ痕が明瞭で、3段目はやや風化しているがそれでも大ノミ痕が並列しているらしくみえる。いずれも大ノミ痕の刃先の位置にできた垂直面を階段垂直面に利用している。

**4号横穴墓前域前側通路**　　1.0 m前後

4号横穴の墓前域、とくにその右側には大きなクラックがあって、荒れた状況となっている。この前端に巾30㎝前後、長さ1 m前後の略平坦面がある。ノミ痕も確認できる状況であるが、その前端部は崩落している。

**3号横穴墓前域前側通路**　　3.6 m前後

3号横穴の墓前域は、その前端部に巾1.3 m前後で長さ3.6 m前後を測る緩傾斜面がある。ここは、墓前域にみられる前方から奥へのノミ痕も横方向に変化する例が多く、墓前域の外部と理解できそうである。これを、4号横穴方向から2号横穴方向への通路と理解しておきたい。

**3号横穴前西―2号横穴前東側階段**　　4段

3号横穴前通路と、2号横穴前通路との連結部で、2・3号横穴墓前域が大きく張り出したその先端の前側に位置する。巾40～60㎝前後の平坦面4段を認めて、5段目で2号横穴墓前域に達し得るが、ほぼ同レベルで2号横穴前側通路に連絡し得る。ノミ痕の残存良好で、1段目の奥よりに6.5㎝巾ノミが観察される。

**2号横穴墓前域前側通路**　　4.4 m前後

2号横穴墓前域の前端には、巾60～80㎝ほどで長さ4.4 m前後を測る緩斜面があり、ここを通路と認めてみた。ノミ痕も墓前域床面とは異なって、その傾斜も強く変化したその下段側を墓前域とは区別してみたのである。もちろん、前端側は崩落があるものであろう。

**1号横穴前東側階段**　　1段

1号横穴墓前域前方通路の東端部を階段と認める。1段のみで、状況としては通路の東端部がわずか

に高くなるにすぎないが、通路のV字状ノミ痕に比して、ここでは大きな平ノミ痕数個がみられるので、ここを1段として図化した。すると、その上部にわずかにみられるノミ痕を2段目とすることも可能かも知れないし、さらに2号前方部へ連なる可能性もある。ともかく、本階段は1号墓前域前側と2号横穴のそれとを結びつけるものといえる。

**1号横穴墓前域前側通路**　2.6 m前後

1号横穴墓前域の前よりには、巾0.6～1 mほどで長さ2.6 m前後の緩斜面が、その墓前域よりにやや強い傾斜を残して区別された。1号横穴墓前域の墓道もここまでは延長していないので、よってここを通路と認めてみた。

**38号横穴東側階段**　2段

38号横穴の墓前域前端の東外側に、40×40㎝前後の略方形プランの平坦面が2面みられた。10数㎝ほどの垂直面も設けてあり、墓前域床面から約10㎝ほどで1段、さらに20㎝ほどで2段目となっていた。

**37号横穴前左階段**　2段

37号横穴の外側左に15×30～50㎝ほどの平坦面2面があって、階段と認めた。ノミ痕が良好で、一定の垂直面も造り出した良好な階段といえよう。

**36号横穴墓前域前側通路**　1.0 m前後

36号横穴はすでに述べたようにミニ横穴を付設するが、それに伴う関連施設のさらに前側に、最大巾80㎝前後で長さ1.0 m前後を測る範囲が造り出されていた。ここは、巾3.2 ㎝の大型な平ノミの2回の打ち込みによるもので、一応通路と認めておく。

**23―1号横穴西―25―2号横穴前階段**　5段

現状で5段を認めたいが、それは下から2・3段目と4・5段目の間に失われた段を復元すべきであろう。ノミ痕は4段目が比較的良好で、1・2・3段目もわずかに認められるので、5段目を25―2号横穴前域直前の1段低い部分としてみた。

また、1・2段目から25―1号横穴前方へは約20㎝ほどのレベル差しかないので、現在崩落している24号横穴の上部を通って25―1号横穴という可能性もあろう。

**25―2号横穴墓前域前側通路**　0.8 m前後

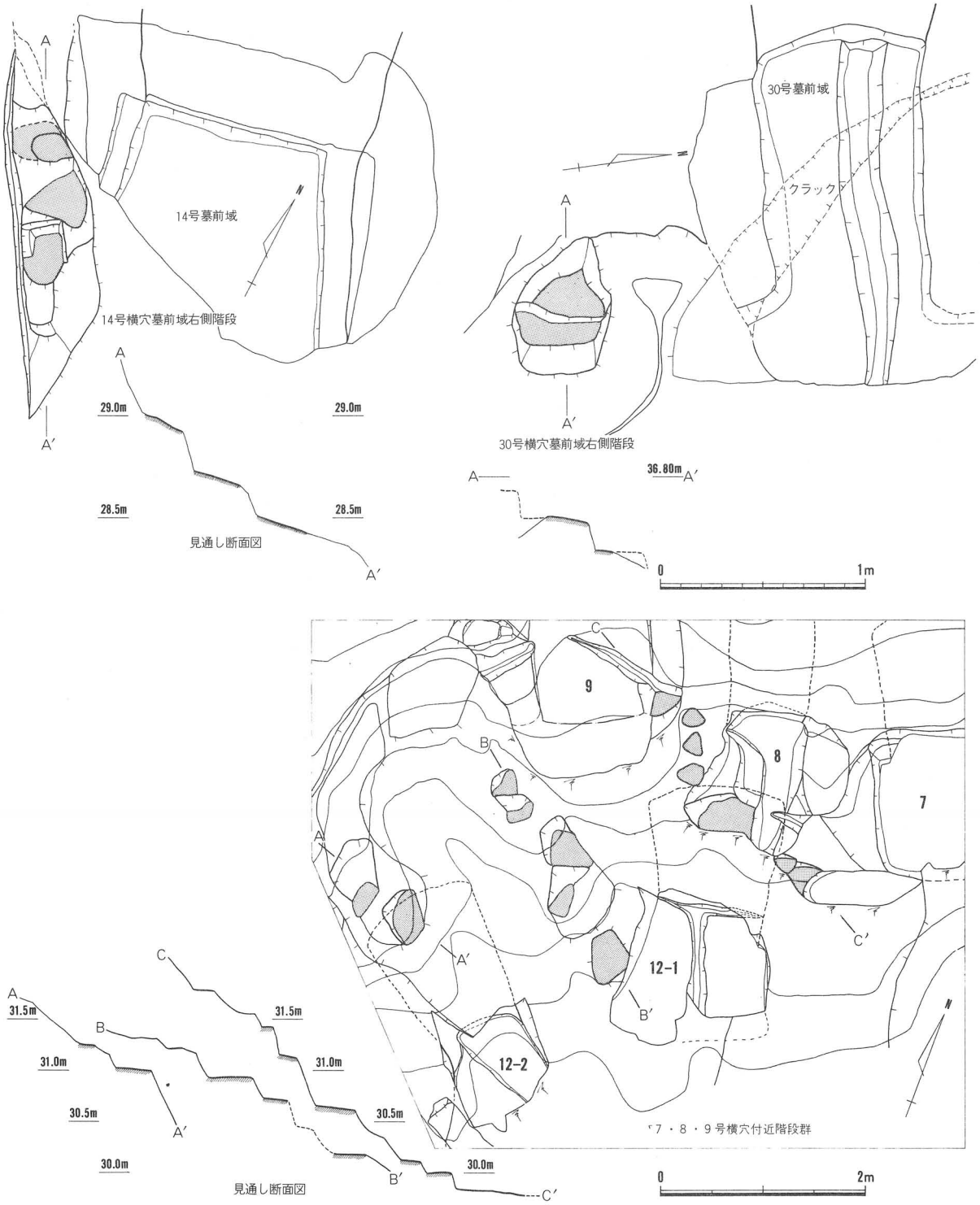
25―2号横穴墓前域の前端に30×80㎝ほどの三角形な平坦面がある。この部分は墓前域とレベル的にもほぼ連続するが、ノミ痕の変化からわずかな段差を認めて墓前域外としてみた。すると、本例も通路に含み得るものとなって、下側階段との連絡が可能となるかも知れない。崩壊の激しい遺構でやや無理な認定であるかも知れない。

**25―1号横穴右前通路**　1.5 m前後

25―1号横穴は方形区画墓前域と認められたが、その右前よりに巾40～60㎝、長さ1.5 m前後の平坦部が、斜め方向に延びていた。レベル的には墓前域床面にほぼ連続して、その右側には壁面も形成されていたが、これを通路と認めた。その前側がクラックにより崩れ全容を残してはいない。

**30号横穴右前側階段**　　1段

30号横穴の墓前域付近は、大きなクラックによる崩落が激しいが、それでも、30×40㎝ほどの平坦面が良好な垂直面を伴って発見され、これを1段と認めた。30号横穴右側を通って29号横穴方面への連絡階段と推定されるが、その上下とも崩壊が激しい。




**第59図　階段と通路集成図**

# 第Ⅳ章　遺　物

## 第 1 節　土　　器

本横穴群の土器としては、須恵器・灰釉陶器・土師器があって、それは奈良時代を主体にその前後を含むものといえた。

それらの土器一覧を第6表に示したが、これによると、図示数は219個体で、うち須恵器146個体・灰釉陶器3個体・土師器70個体となって、時期的には7世紀後葉から9世紀にまで及ぶことが確実であった。ここでは、まず土器の分類についてその大要を述べ、つづいて各土器の観察を表示（第 7 表）しておきたい。

### 1　須恵器・灰釉陶器

〔蓋〕　A・B類

蓋は坏蓋で2種に分ける。頂部に擬宝珠状ツマミを付する形態では共通すると観察されるが、口縁端部に身受けのためのカエリを付するタイプをA類、口縁端部を下方に折り曲げるタイプをB類とした。

A類は4個体を図示したが、うち17号横穴の84、24号横穴の163の2例が全形を知り得るものとなる。前者は口径12.7・最大径15.3・器高3.4㎝の大型で、天井部には明瞭なヘラ整形痕を残して平坦な器形につくる。後者は口径10.1・最大径12.4・器高3.4㎝とやゝ小型化するが、全面ナデ整形による丁寧な仕上げとなる。

B類は蓋の大部をしめて出土例は多く、37個体を図示した。口径は13.3～19.6㎝ほどで、多くは大型品となるが、10号横穴の30が最小例となる。器高は2.5～4.7㎝ほどで、比較的高い形態を低い形態とがみられるが、3号横穴の4が最高例、13－1号横穴の43が最低例となる。口縁端部は下方に折り曲げる特徴をもつが、なかにはわずかに引き出して断面三角形状に仕上げる例もみられる。傾向としては、器高の低くなるものがその口縁部を断面三角形にちかく仕上げるといえるかも知れないが、それを分類と基準とするほど明瞭には把握できていない。

〔坏〕　A・B・C類・灰釉陶器

坏には3種があって、丸底坏をA類、高台坏をB類、平底ないしそれにちかい坏をC類としたが、うちB類は$B_1$・$B_2$類に、C類は$C_1$～$C_4$類に分け得た。さらに灰釉陶器をここに含めて扱った。

A類は、23－1号横穴の154・24号横穴の164の2例とした。ともに口径11.2～11.4㎝前後で類似し、底部は丸底といえるが、かなり広く平坦にしてそこからスムーズに胴部へと連続して、明瞭な境目はみられない。胴部から口縁部にかけては直線状にのびながらやゝ外に開く。全体に器壁は厚く、底部の中央付近にヘラ痕を残すほかは全面をていねいなナデ仕上げとしている。蓋A類とセットになるものである。

B類は高台坏を一括し33個体を図示したが、さらに$B_1$類19個体、$B_2$類14個体に分けた。

$B_1$類は底部を丸底にして、胴部への境には多く不明瞭な稜をもち、胴部から口縁部はやゝ外傾する形態を呈する。口径13.3～16.5㎝前後、器高3.6～4.8㎝前後となる。底部が高台より下方に突き出すタイプと、ほゞ等しくつくられるタイプとがある。前者としては3号横穴の7、15号横穴の77・78、39号横穴の210等が後者としては3号横穴の9・10、17号横穴の95・96等が好例といえるが、いずれにしても高台の機能を果すものとはいゝがたい。

$B_2$類は底部を平底にして胴部との境には比較的明瞭な稜をもち、それより内側に多くは断面長方形にちかくやゝ高い高台を付して、胴部から口縁部はほゞ直線状にのびて外傾する形態となる。口径13.6～17.5㎝で、器高3.7～6.2㎝となる。その大きさからすれば、13－1号横穴の48のみが特大タイプで、口径17.5・器高6.2㎝を測るが、その他は口径13.6～15.6㎝、器高3.7～4.5㎝ほどゝなって、大小のバラエティーは比較的乏しいものとなる。10号横穴の31、13－1号横穴の47・48、17号横穴の97・98、23－2号横穴の159等が好例である。

C類は平底ないしそれにちかい坏とし11個体を図示したが、これを$C_1$類5個体、$C_2$類3個体、$C_3$類2個体、$C_4$類1個体に分け得た。

$C_1$類は丸底またはきわめて小さな平底となるが、底部から胴部にかけての調整をナデおよびノタ目によるものを一括した。形態としてはさらに3タイプに細分し得る。

第1タイプは球形を半載した形状を呈して、いわば半球形タイプといえる。調整は内外面ともナデ仕上げされているが、とくに底部中央付近にはノタ目がそのまゝ残されてやゝ厚い底部が特徴的に目立つものとなる。17号横穴の103が完形品で、口縁部内側には1条の沈線が施されている。破片では13－1号横穴の50・51が本タイプに属する。

第2タイプは、底部が平底と認め得るが、全体の器形は第1タイプによく類似して、その底部付近に残されたノタ目部分がやゝ厚くて広くつくられた状況と観察し得るものであった。いわば第1タイプの亜種とすべきであり、調整その他もほゞ共通している。15号横穴の79が完形で唯一の例となる。

第3タイプは、平底的に広くなった厚い丸底から、胴部への連絡は稜をもたずにゆるやかなカーブで上方に曲がる状況で、口縁部はやゝ外開き状となる。明らかに前2タイプとは異る形態といえるが、とくに、内外面ともノタ目を残す手法のなかで、厚く大きくつくられてナデ仕上げされた底部が目立って特徴的となる。17号横穴の102がほゞ完形で、唯一の例となる。

$C_2$類は、丸底で、底部から胴部への連続もスムースに大きくゆるやかなカーブとなり、その底部に回転ヘラ削り痕を明瞭に残すタイプを一括した。17号横穴の104～106のみで、うち106は口縁部付近にまでヘラ削りが及んでいる。

$C_3$類は、かなり大きくつくる平底で、胴部から口縁部はわずかに外傾しながら直線状にのびる。13－1号横穴と52、23－2号横穴の160の2例がある。前者は底部を丸底風に下方に張り出し、後者はやゝ厚くする底部を上げ底風につくるという相違がみられるが、両例とも大きい底部から胴部・口縁部をかなり直立にちかい形態につくるという特徴が認められた。

$C_4$類は、17号横穴の107のみで、厚い底部から比較的□く外傾しながらのびる胴部・口縁部はやゝ内弯気味となる。

灰釉陶器は、破片ではあるが3例みられた。7号横穴の22、17号横穴の99、34号横穴の187であるが、前者は器高4.6㎝、推定口径14.7㎝と比較的大きなもので、高台もやゝ長いしっかりした形態となる。後2者はともに底部破片で、底径6㎝余の小品で、やゝ巾広の高台を付する。灰釉の発色はいずれもやゝ不良であるが、それでも内面のみに認められるようである。もちろん、断定し得る状況にはない。

〔高坏〕

1例のみ、17号横穴の123が、小破片で出土している。坏部の下端から脚台部の上半が残取したもので、筒状のやゝ長い脚台が特徴的といえる。

〔碗〕　A・B・C類

碗には3種があって、丸底となるものをA類、高台の付されるものをB類、平底となるものをC類と

した。

A類としては13－1号横穴の54が1例のみある。口縁部を欠くが、胴部は球形にちかく張って、頭部の太い形態が特徴となる。

B類は高台を付したものとして10個体を図示した。13－1号横穴の55、27号横穴の177がほゞ完形で、ほかにも数個体のそれにちかい例がある。口縁部はラッパ状にひらいてその直下に明瞭な稜を有する形態で共通するが、底部をやゝ小さくして丸底風に高台より下に突き出すかほゞ等しくするものと、底部をやゝ大きく平底風につくるものとがあり、また肩を比較的スムースにするものと稜をもって張るものとがみられ、こうした各要素が混在する様相となる。なお、口縁部のみからなる破片が3点ほどあるが、一応本類に含めておいた。

C類は小さな平底となるもので2例を図示した。胴下半部に手持ちヘラケズリを施す手法が特徴的で、胴の形態もより球形にちかいものといえる。3号横穴の11、17号横穴の126が好例である。

〔平瓶〕　A・B類

平瓶には2種があって、丸底につくるものをA類、平底になるものをB類としてみた。

A類は13－1号横穴の60のみで、口縁部を欠くが、底部が小さな丸底で胴部へは連続的となるものである。

B類は、2例を図示したが、17号横穴の94・124で、前者は胴底部破片、後者は口縁部破片となる。大きな円形につくる底部は平底にして、明瞭な稜を張って平坦面をつくる肩部から口縁部がのびる形態が特徴的となる。一応別個体として扱ったが、あるいは同一個体の可能性も残る。

〔提瓶〕

2例を図示した。10号横穴の37、13－1号横穴の56で、前者は巾広で短い頭部をもち、後者はやゝ長細い頭部を有する。あるいは他の器種とできる可能性もあるが、一応提瓶としておく。

〔長頸坩〕　A・B類

長頸坩は2種があって、高台が付くものをA類、丸底または平底となるものをB類としたが、さらにA類を$A_1$・$A_2$類に細分した。

A類は高台付で21個体を図示したが、さらに$A_1$類3個体、$A_2$類18個体に分けた。

$A_1$類は7号横穴の24、13－1号横穴の57、15号横穴の82があり、球形ないしそれにちかい胴部をもって底部が高台より下に張り出す形態となる。

$A_2$類は、3号横穴の12、13－1号横穴の58、21－2号横穴の152、35号横穴の193に好例があるが、多少とも肩を張って胴部最大径をつくる形態を呈して、底部は丸底と平底が併存する状況となる。

B類は丸底と平底のものを一括し、4個体を図示したが、これを2タイプに分けておきたい。第1タイプは、丸底となるもので、18－2号横穴の149が口縁部を欠く例で、平底化した丸底で、胴部の形態もわずかに肩を張る球形となる。37号横穴の205も底部破片であるがこれにちかいものとみて本タイプに含めておく。第2タイプは、34号横穴の191が良好な完型品で、口縁部はその先端を肥厚させないで細い頭部に連り、胴部はやゝ横広で肩の稜を明瞭に張って小さな平底の底部をつくる。特徴的な形態で、40号横穴の218も口縁・頸部の残存であるが、本タイプとなし得よう。

〔広口坩〕

3例を図示し広口坩としてみた。10号横穴の36、18－1号横穴の142、33号横穴の186で、うち前者

は口唇部を肥厚させており、後二者は背の高い口縁部であることが明らかである。

〔甕〕

12例を図示した。36号横穴の 194 が唯一の完形で、口径 22.1 ㎝、器高 38.1 ㎝を測り、比較的短い口縁部を有してなめらかに肩を張って胴部最大径をつくり、底部は丸底となり、胴部外面にはタタキ目痕が残る。

## 2　土師器

〔蓋〕

蓋は坏蓋で、それは須恵器坏の類品といえる。18－1号横穴の 136 が大型の好例で、擬宝珠状ツマミを付して口縁部先端を下方に折り曲げる形態となる。13－1号横穴の61もより小型となる口縁部破片である。

〔坏〕A・B・C類

坏には3種があって、高台坏をA類、丸底坏をB類、平底坏をC類としたが、うちA類を$A_1$・$A_2$類に、B類を$B_1$～$B_4$類に、C類を$C_1$～$C_3$類に細分し得た。

A類は3個体を図示したが、それは$A_1$類2個体、$A_2$類1個体であった。

$A_1$類は、18－1号横穴の 137 が口径 18.9・器高 4.7 ㎝の大型につくる好例で、平底の底部から胴部への境はやゝ不明瞭な稜となり、高台はその稜より内側に付いて、口縁部は直線状に外傾する形態となる。17号横穴の 122 もこれに類似するが、小破片であった。

$A_2$類は、40号横穴の 217 の1例のみで、小さな底部にはやゝ高い高台を付して、胴部から口縁部は大きく外方にむけて直線状にひらく。全体に器壁はやゝ厚いようである。

B類は16個体を図示したが、うち$B_1$類1個体、$B_2$類8個体、$B_3$類4個体、$B_4$類3個体であった。

$B_1$類は、29号横穴の 179 の1例のみで、かなり平坦にはなるが丸底の底部破片である。内面にℓ字状のラセン状暗文を施すのが特徴的といえる。

$B_2$～$B_4$類は胴下半部から底部にかけてヘラケズリを施す手法で共通しているが、形態によって細分してみた。まず、$B_2$類は器高が高く、半球形にちかい形態を呈するものとした。器高は17号横穴の109、110 が、 4.3 ～ 4.7 ㎝前後と高い。器壁も口縁部から底部までほゞ等しい厚みを有する例が一般的で、半球形の形態をつくる。たゞ1例、23－2号横穴の 161 のみが口縁部を厚く胴・底部を薄くヘラケズリし、その境には比較的明瞭な稜を付して、$B_3$類に類似した特徴を有する。

$B_3$類は器高を低くして、胴から底部を強くヘラケズリすることによってその器壁を薄く、その境には比較的明瞭な稜を付ける。器高は12－1号横穴の40が 3.4 ㎝を測る。

$B_4$類は底部が丸味を強く残しながらも平底化した状況で、器高は浅く、口縁部が内弯するものとわずかに外反気味となるものとがある。17号横穴の 111 が器高 3.5 ㎝となる。

C類は30個体を図示したが、うち、$C_1$類3個体、$C_2$類11個体、$C_3$類16個体であった。

$C_1$類は平底で、胴部から口縁部はわずかにその先端を内弯させる。器壁は薄く、外面胴部にはヨコヘラミガキ、底部はヘラケズリが施され、内面は放射状暗文が明瞭である。13－1号横穴の63が好例で、口径 11.8・底径 8.4・器高 4.1 ㎝を測り、とくに底部がやゝ下方に膨んだ形態に特徴が認められる。7号横穴の21は底部破片であるが、外面中央に糸切り痕を残しその周囲をヘラで消している。

$C_2$類はやゝ広く厚い平底で、器高は浅くなるが、外上方にのびる口縁部の先端はわずかに外反する例が多く、たゞ1例のみ内弯する例があり、器壁も薄くなる。17号横穴の 114 ～ 117 、18－1号横穴の139・

140が前者の好例で、18－1号横穴の141が後者の好例である。色調も前者は茶褐色系で、後者は橙褐色系となるので、こうした2タイプをそれぞれ9個体・2個体認めておくことにする。口径10.2～13.7㎝、器高3.7～4.1㎝を測る。うち、底部中央に糸切り痕を残すものは112・113・116の3例で、底部内面に放射状暗文を施すものは113・115・116・139・140の5例である。さらに胴部内外を回転ヘラミガキする例もみられて、17号横穴の113、18－1号横穴の139・140に明瞭である。

$C_3$類はその多くが底部に全面糸切り痕を残して、底部をやゝ小さくして大きくひらく口縁部がのびる形状となる。3タイプに細分し得た。まず第1タイプは、やゝ厚い全面糸切り痕の平底から、胴・口縁部が内弯してのびる形態に特徴があって、底径と口径の比は約1：2にちかいもので、17号横穴の121が好例で、橙褐色を呈して、口径12.6・器高3.9㎝を測る。第2タイプは、やゝ小さくなる底部から大きく口縁部がひらくが、それはほゞ直線状となる形態に特徴がある。4号横穴の15・16が好例で、黄褐色を呈し、口径14.8～15.1、器高4.8～5.1㎝を測る大型品となり、その底径と口径との比は1：2よりも底径がやゝ小さくなる。2例とも、底部は糸切り痕をヘラミガキで消しているようにみえる。第3タイプは、多くが底部に全面糸切り痕を残して、胴・口縁部はやゝ内弯気味にのび、やゝバラエテーもみられるがほゞ底径の2倍前後になる口径を有し、色調は茶褐色を呈する。13－1号横穴の64、17号横穴の119・120、34号横穴の189が好例で、口径9.9～12.5、器高3.5～4.4㎝を測る小型品となる。底部調整では、糸切り痕を残すものは13－1号横穴の64、17号横穴の118～120、25－1号横穴の169、34号横穴の188で、ヘラ切り痕を残すものは1号横穴の2で、それらを消しているものは15号横穴の80、34号横穴の189がある。

〔高坏〕

高坏は1例のみみられて、14号横穴の75があった。坏部下端の接合部から脚の中位まで残存したもので、精選された胎土をもちいて、丁寧なヘラミガキを施し、赤褐色を呈する。形態としては筒形に長くなる脚部をもつが、全形は明らかではない。

〔甕〕A・B・C類

甕には3種があって、球胴甕をA類、長胴甕をB類、小型甕をC類とした。

A類は2個体を図示したが、両例とも口縁部の小破片にすぎない。頭部から「く」の字状に外折する口縁部は、その先端を内側に折り返して肥厚させ上部を平坦につくる形態に特徴がある。15号横穴の81、23－2号横穴の162で、口径はそれぞれ18.6・22.0㎝を測って、色調は褐色を呈する。本例では確認しがたいが、肩から胴部にはハケのうえをヘラミガキする調整法となるであろう。

B類は長胴となるタイプで、頸部から「く」の字状に外折する口縁破片が、38号横穴の207にあった。また、本類の底部とみてよい破片が、17号横穴の135にあったが、胴部の立ちあがりにやゝ疑問があるとはいえ、小破片の復元であるので一応認めておきたい。

C類は小型甕を一括したが、いずれも頸部から口縁部が「く」の字状に外折する基本型で共通している。完型品は、13－1号横穴の73、29号横穴の180の2例にすぎず、それぞれ口径は15.2・14.1㎝、器高は16.4・12.2㎝となるが、後者はやゝ背を低くして口径を比較的広くする形態に特徴が認め得る。詳かにみると、頸部をわずかに直立気味とするもの、口唇部をやゝ外開きにしたり薄くしたりする例がみられる。

## 第6表　横穴別出土土器一覧

| 横穴 | | 須恵器 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 土師器 | | | | | | | | | | | | | | | 灰釉陶器 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 坏蓋 | | 坏身 | | | | | | | 高坏 | 𤭯 | | | 平瓶 | | 提瓶 | 長頸坩 | | | 広口坩 | 甕 | 小計 | 坏蓋 | 坏身 | | | | | | | | | | 高坏 | 甕 | | | 小計 | | |
| | | A | B | A | $B_1$ | $B_2$ | $C_1$ | $C_2$ | $C_3$ | $C_4$ | | A | B | C | A | B | | $A_1$ | $A_2$ | B | | | | | $A_1$ | $A_2$ | $B_1$ | $B_2$ | $B_3$ | $B_4$ | $C_1$ | $C_2$ | $C_3$ | | A | B | C | | | |
| 1 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | | | | | 2 | | 2 |
| 3 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓前域 | | 4 | | 4 | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | | | | 10 | | | | | | | | | | | | | | | | | 10 |
| 4 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 5 | | | | | 5 | | 5 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | 2 | | 2 |
| 7 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | 2 | | | | | | | | 2 | | | | | | | 2 | | 4 |
| 8 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 9 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓前域 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 2 | | | | | | 2 | | | | | | | | | 2 | | 4 |
| 10 | 玄室 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | 1 | | 2 | | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | 3 |
| | 墓前域 | | 1 | | | 2 | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | 5 |
| 12－1 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓前域 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 2 | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 | | 3 |
| 12－2 | 玄室 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13－1 | 玄室 | 1 | 1 | | | 3 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 6 | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | | | | 7 | 10 | | 16 |
| | 墓前域 | | 2 | | 1 | | 2 | | | | | 1 | 2 | | 1 | | 1 | 1 | 2 | | | | 13 | 1 | | | | | | 1 | | 1 | | | | | 1 | 4 | | 17 |
| 14 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | 1 |
| 15 | 玄室 | | 1 | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| | 墓前域 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 2 | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | 2 | | 4 |
| 16 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17 | 玄室 | | 2 | | 1 | | | 1 | | | | | | | | 2 | | | | | | 1 | 7 | | | | | 2 | | | | | 1 | | | | 4 | 7 | | 14 |
| | 墓前域 | 1 | 7 | | 3 | 2 | 2 | 2 | | 1 | 1 | | 1 | 1 | | | | | 1 | | | 2 | 24 | | 1 | | | 1 | | 1 | | 6 | 3 | | | 1 | | 13 | 1 | 38 |
| 18－1 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | 2 | 1 | 1 | | | | | | | 3 | | | | | 1 | 6 | | 8 |
| | 墓前域 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 18－2 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 1 | | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 21－2 | 玄室 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 墓前域 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 23－1 | 玄室 | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 23－2 | 玄室 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 墓前域 | | 3 | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 5 | | | | | 1 | | | | | | | 1 | | | 2 | | 7 |
| 24 | 玄室 | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 25－1 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | | 1 |
| | 墓前域 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 26 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓前域 | | 2 | | 1 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 4 | | | | | | | 1 | | | | | | | | 1 | | 5 |
| 27 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | | 1 |
| | 墓前域 | | | | | 1 | | | | | | | 1 | | | | | | 1 | | | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 29 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | 2 | | 2 |
| | 墓前域 | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 30 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 32 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 33 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 34 | 玄室 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | 2 | | | | | 2 | 1 | 4 |
| 35 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | 1 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 36 | 玄室 | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 | | | 1 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| | 墓前域 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 37 | 玄室 | | 2 | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | 1 | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | 7 |
| | 墓前域 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 38 | 玄室 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | 1 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 39 | 玄室 | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 墓前域 | | | | 1 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 40 | 玄室 | | 3 | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | 6 | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 | | 7 |
| | 墓前域 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 表採 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 合計 | | 4 | 37 | 2 | 19 | 14 | 5 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 | 10 | 2 | 1 | 2 | 2 | 3 | 18 | 4 | 3 | 12 | 146 | 2 | 2 | 1 | 1 | 8 | 4 | 3 | 3 | 11 | 16 | 1 | 2 | 2 | 14 | 70 | 3 | 219 |

第7表　土器観察表

| 器　種 | 図版No. | 計測値〔cm〕<br>( )は推定値 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 胎土・焼成・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 1　号　横　穴 | | | |
| 土師器<br>坏　$B_2$ | 64—1 | 口　径（16.3） | 口縁部がゆるく立ち上がり、器高は低く、丸底になると思われる。 | 胴部から底部にかけて手持ちヘラケズリで、内面に放射状暗文を施す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　赤褐色 | 口縁部⅕残<br>墓前域右側出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 64—2 | 底　径　5.4 | 底部は平底をなし、底部中央がやや高くなる。 | 底部は回転糸切り。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　明褐色 | 底部½残<br>ロクロ右回転<br>墓前域右側出土 |
| | | | 3　号　横　穴 | | | |
| 須恵器<br>蓋　B | 64—3 | 口　径　16.8<br>最大径　17.0<br>器　高　4.6 | 擬宝珠状ツマミを付し、器高が比較的高く、口縁部をやや外反させながら、その端部を下方に折り曲げる。 | 外面天井部は回転ヘラケズリで、内面の外縁側に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 64—4 | 口　径　17.0<br>最大径　17.3<br>器　高　4.7 | 擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を下方に折り曲げる。 | 外面天井部は回転ヘラケズリ。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 64—5 | 口　径　15.8<br>最大径　16.2<br>器　高　4.1 | 比較的小さな擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を下方に折り曲げる。 | 外面天井部は回転ヘラケズリで、内面体部には顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 64—6 | 口　径　15.8<br>最大径　16.0<br>器　高　3.6 | 比較的小さな擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を強く下方に折り曲げる。器高は低い。 | 外面天井部は回転ヘラケズリで、内外面ともに顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 64—7 | 口　径　16.0<br>底　径　10.1<br>器　高　4.4 | 底部は丸底を呈し、断面三角形にちかい高台を付すが、その底面は高台より低く造る。 | 底部は回転ヘラケズリ後、高台を付し、ナデ整形。<br>内面に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　やや粗（含、石英粒）<br>焼成　やや不良<br>色調　灰色 | 口縁部、底部⅔残<br>ロクロ右回転<br>墓前域黒色土層中出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 64—8 | 口　径　15.0<br>底　径　9.6<br>器　高　4.7 | 底部は高台とほぼ同じ高さで、ゆるやかな丸底を呈する。高台の断面は台形にちかい。底部と胴部の境は、比較的明瞭である。 | 底部は回転ヘラケズリで、高台接着後、ナデ整形。 | 胎土　密（含、石英粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部¼欠<br>ロクロ右回転<br>墓前域黒色土層中出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 64—9 | 口　径　14.7<br>底　径　9.7<br>器　高　4.4 | 底部は断面台形にちかい高台とほぼ同じ高さの丸底で、口縁部はわずかに外反す | 底部は回転ヘラケズリで、内外面ともにロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>墓前域黒色土層中出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | る。底部と胴部の境は明瞭である。 | | | |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 64—10 | 口　径　15.0<br>底　径　10.8<br>器　高　4.1 | 底部は丸底で、断面長方形の高台とほぼ同じ高さとなる。底部と胴部の境は明瞭である。 | 底部は回転ヘラケズリで、高台接着後、ナデ整形。<br>胴部外面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 口縁部½欠<br>ロクロ左回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>瓶　C | 64—11 | 口　径　9.0<br>胴部最大径 10.2<br>底　径　5.2<br>器　高　12.4 | 底部は平底で、口縁部はラッパ状に大きく開く。胴部から大きく突出した注口部を有する。 | 底部から胴部下方にかけてヘラケズリを有し、注口部接着後、その周囲をナデ整形。 | 胎土　密（含、多量の滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ左回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 64—12 | 口　径　12.0<br>胴部最大径<br>（15.9）<br>底　径（8.0） | 底部は平底で、しっかりした断面長方形の高台を付す。胴部は肩に強い稜線を有し、口縁部は肥厚して巾広く造る。 | 底部から胴部下方にかけて回転ヘラケズリを有する。<br>内面には顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 口縁部¾、胴部⅙残<br>ロクロ右回転<br>若干の自然釉<br>墓前域出土 |
| **4　号　横　穴** | | | | | | |
| 土師器<br>坏　$B_3$ | 64—13 | 口　径（13.4） | 底部はほぼ平底にちかい丸底を有し、底部と胴部の稜線を明瞭に残す。器高は低く、器壁はやや厚い。 | 底部は手持ちヘラケズリで、胴部から口縁部にかけてナデ整形。 | 胎土　密（含、石英粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部⅙残<br>左撹乱土層中出土 |
| 土師器<br>坏　$B_2$ | 64—14 | 口　径（16.0） | 底部は丸底とみられ、その底部からやや内湾気味に連続してやや厚い胴部が造られる。 | 底部から胴部にかけて手持ちヘラケズリ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部⅙残<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 64—15 | 口　径　14.8<br>底　径　7.1<br>器　高　4.8 | 平底の底部を有し、胴部から口縁部にかけては直線状にのびる。 | 底部は全面ヘラケズリによって糸切り痕を消している。特に胴部内面には顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　やや粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　やや不良<br>色調　黄褐色 | 口縁部、底部½残<br>ロクロ左回転<br>封鎖部出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 64—16 | 口　径　15.1<br>底　径　6.8<br>器　高　5.1 | 底部は平底で、胴部から口縁部にかけて直線状にのびる。 | 底部には静止糸切り痕が残り、特に内面にはロクロ目が顕著である。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部、底部½残<br>ロクロ左回転<br>玄室内出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 64—17 | 口　径（12.0）<br>底　径（5.5）<br>器　高　3.5 | 底部は平底で、胴部から口縁部にかけて直線状にのびる。 | 底部はヘラケズリ。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部⅓残<br>ロクロ回転方向不明<br>玄室内出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 64—18 | 口　径（13.5） | 胴部から口縁部がやや内湾気味ながら直線状にのびるタイプで、口縁部はやや肥厚気味となる。 | 内外面ともナデ仕上げとなる。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部⅓残<br>ロクロ回転方向不明<br>玄室内出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 64—19 | 口　径（12.5　） | 胴部から口縁部にかけて直線状にのびるタイプ。 | 内外面ともナデ仕上げ。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部⅕残<br>ロクロ回転方向不明<br>封鎖部出土 |
| **7　号　横　穴** | | | | | | |
| 土師器<br>坏　$C_1$ | 65—20 | 底　径　（7.6） | 底部は平底で、胴部はやや内湾するか。 | 底部は全面ヘラケズリ。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 底部¼残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域撹乱土層中出土 |
| 土師器<br>坏　$C_1$ | 65—21 | 底　径　　6.6 | 底部は平底で、胴部は幾分内湾するか。 | 底部中央に回転糸切り痕を残し、その周囲をヘラケズリする。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 底部½残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 灰　釉<br>陶　器 | 65—22 | 口　径（14.7　）<br>底　径（　8.4　）<br>器　高　　4.6 | 底部は丸底で、断面がほぼ長方形の高台を付すが、その高さはほぼ等しいものとなる。胴部から口縁部にかけては内湾しつつ立ち上がる。 | 底部外面はヘラケズリ。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部、底部¼残<br>ロクロ回転方向不明<br>内外面とも施灰釉<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>甕 | 65—23 | 口　径　27.5 | 頸部から外反気味にのびる口縁部は、その端部をやや上方に引き上げながら断面三角形に造る。 | 二段の斜行するクシ目を頸部上半に付する。 | 胎土　密（含、滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 頸部½残<br>ロクロ回転方向不明<br>内面自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_1$ | 65—24 | 口　径　11.4<br>胴部最大径 14.7<br>底　径　　7.5<br>器　高　20.8 | 底部は丸底で、横広の長方形の高台よりも突出している。胴部は球形状に造る。口縁部下方に一段の稜を付した膨みをもち、口縁部は肥厚して端部を平坦に削り出す。肩部に不明瞭であるが稜が認められる。 | 底部から胴部下方にかけて回転ヘラケズリ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 完形<br>ロクロ左回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| **8　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>甕 | 64—25 | 口　径（26.8） | 外反する口縁部の端部を断面三角形に肥厚させる。 | 口縁部下方に沈線で区画される波状文帯を有する。 | 胎土　密（含、滑石粒）<br>焼成　良<br>色調　黒灰色 | 口縁部⅓残<br>ロクロ回転方向不明<br>開口部出土 |

| 9　号　横　穴 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器<br>蓋　B | 65—26 | 口　径　15.4<br>最大径　15.6<br>器　高　3.6 | 擬宝珠状ツマミを有し、口縁端部を下方に折り曲げる。器高は低い。 | 外面天井部は回転ヘラケズリ。<br>胴部外面はロクロ目をナデ消し。<br>内面にはロクロ目が残る。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄灰色 | 口縁部¼欠<br>ロクロ左回転<br>天井部外面に所謂窯印<br>撹乱土層中出土 |
| 土師器<br>坏　$B_3$ | 65—27 | 口　径（13.5） | 底部は丸底で、胴部中央に稜をもつ。底部から比較的スムーズに連続する胴部は内湾気味であるが、口縁部ではほぼ直立にちかくなる。器高は深いタイプであろう。 | 胴部中央から底部にかけては手持ちヘラケズリ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部½残<br>左撹乱土層中出土 |
| 土師器<br>坏　$B_3$ | 65—28 | 口　径（14.6） | 底部は丸底で、胴部中央に不明瞭ながら稜をもつ。 | 胴部中央から底部にかけて手持ちヘラケズリ。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 口縁部⅕残<br>左撹乱土層中出土 |
| 須恵器<br>甕 | 65—29 | 口　径　25.0 | 頸部から外上方に直線状に口縁部がのびる。 | 沈線によって区画された斜行クシ目文を頸部に付する。（一単位11歯以上） | 胎土　密（含、雲母粒・滑石粒・砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡褐灰色 | 口縁部½残<br>ロクロ右回転<br>外面自然釉<br>墓前域出土 |
| 10　号　横　穴 | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　B | 65—30 | 口　径　13.3<br>最大径　13.7<br>器　高　4.1 | 上面が平坦で小型な擬宝珠状ツマミを有し、口縁部を下方に折り曲げる。小型で器高が高い。 | 天井部外面は回転ヘラケズリで、胴部内外面ともロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ左回転<br>墓前域床面出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_2$ | 65—31 | 口　径　14.9<br>底　径　10.8<br>器　高　3.8 | 底部は平底で、断面長方形の高台を付す。胴部から口縁部は外上方にむかってほぼ直線状にのびる。 | 底部は回転ヘラケズリ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 底部⅔残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_2$ | 65—32 | 底　径（10.2） | 底部は平底で、底部と胴部の境に明瞭な稜を造る。<br>高台は断面を横広の長方形とする。 | 底部は回転ヘラケズリ。 | 胎土　やや粗<br>焼成　やや不良<br>色調　淡灰色 | 底部¼残<br>ロクロ左回転か<br>墓前域床面出土 |
| 土師器<br>坏　$B_2$ | 65—33 | 口　径（12.1）<br>器　高　4.3 | 底部は丸底で、胴部から口縁部はやや内湾している。 | 外面は胴部上方まで手持ちヘラケズリで、内面には放射状暗文を施す。<br>全面丹塗り。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部¼残<br>玄室内上層出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器<br>瑕 B | 65—34 | 口　径　11 | ラッパ状に開く口縁部と頸部との境に、明瞭な稜を残す。 | 口唇部に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部¾残<br>ロクロ右回転<br>内面に自然釉<br>玄室内上層出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 65—35 | 底　径　8.3 | 底部はほぼ平底で、断面四角形の高台を付する。 | 底部から胴部にかけて回転ヘラケズリで、底部内面に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、少量の雲母粒、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐灰色 | 底部⅔残<br>ロクロ左回転<br>墓前域床面出土 |
| 須恵器<br>広口坩 | 65—36 | 口　径（21.0） | 頸部から口縁部にかけては若干外反し、口縁部を肥厚させる。器厚は薄く、広口坩としてみたが、小破片で疑問は残る。 | 内外面ともナデ整形。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 口縁部⅙残<br>ロクロ左回転<br>自然釉<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>提　瓶 | 65—37 | 口　径　10.8 | 底部は丸底で、その中央が厚い。口縁部は外反しながら外上方にのびる。 | 底部外面はヘラによってロクロ目を消しているようであるが、明瞭でない。胴部から底部にかけての内面には、ロクロ目が顕著に残る。 | 胎土　密（含、砂礫）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 底部、口縁部<br>½残<br>ロクロ右回転<br>墓前域上層撹乱土層中出土 |
| **12 — 1 号 横 穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　B | 66—39 | 口　径　14.5<br>最大径　14.8<br>器　高　3.4 | やや小型の擬宝珠状ツマミをつけ、口縁部を断面三角形につくる。器高は浅いタイプ。 | 天井部外面は回転ヘラケズリで、その内面には顕著なロクロ目が残る。その他はナデ仕上げとなる。 | 胎土　密（含、石英粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部⅓欠<br>ロクロ右回転<br>墓前域撹乱土層中出土 |
| 土師器<br>坏　$B_3$ | 66—40 | 口　径（12.7）<br>器　高　3.4 | 底部は丸底で、胴部中央に稜をつくり、そこから口縁部は外上方にのびる。 | 胴部中央から底部にかけて手持ちヘラケズリ。<br>内外面とも丹塗り。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部⅓残<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>甕 | 66—41 | 口　径　26.1 | 口縁部下方に断面三角形の突帯をめぐらして屈折する。口縁部はわずかに肥厚する。 | 内面にロクロ目が残る。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好、堅緻<br>色調　淡灰色 | 口縁部½残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| **12 — 2 号 横 穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　A | 66—38 | 口　径（13.1）<br>最大径（15.6） | 口縁部の内面にはカエリ（身受け）を有する。 | 内外面ともナデ仕上げとなる。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 口縁部一部残<br>ロクロ回転方向不明<br>玄室内出土 |

## 13 — 1 号 横 穴

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器<br>蓋 A | 66—42 | 口 径（10.4）<br>最大径（12.8） | 口縁部の内側にカエリ（身受け）を付ける。 | カエリ部はヘラ状具によって整形され、外面にロクロ目を残す。 | 胎土 密<br>焼成 良好<br>色調 淡灰色 | 口縁部¼残<br>ロクロ回転方向不明<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>蓋 B | 66—43 | 口 径 16.2<br>最大径 16.4<br>器 高 2.5 | 天井部に擬宝珠状ツマミをつける。口縁部は断面三角形で、器高は浅いタイプ。 | 天井部外面は回転ヘラケズリで、体部外面と天井部内面にロクロ目を残す。 | 胎土 密（含、多量の砂粒）<br>焼成 良好<br>色調 淡黄灰色 | 口縁部⅕欠<br>ロクロ右回転<br>外面に自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋 B | 66—44 | 口 径 16.1<br>最大径 16.6<br>器 高 3.9 | 小型でやや高くつくる擬宝珠状ツマミを有し、口縁部を下方に折り曲げる。器高は低い。 | 天井部は回転ヘラケズリで、胴部内面にロクロ目を顕著に残す。 | 胎土 粗（含、砂粒）<br>焼成 不良<br>色調 灰色 | 口縁部、天井部とも¼残<br>ロクロ左回転<br>墓前域床面出土 |
| 須恵器<br>蓋 B | 66—45 | 口 径 14.5<br>最大径 20.1<br>器 高 4.1 | やや小さく高い擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を肥厚させながら断面三角形につくる。器高は低く、大型となるタイプである。 | 天井部外面はヘラケズリ。 | 胎土 密（含、石英粒）<br>焼成 良好<br>色調 淡灰色 | 完形<br>ロクロ左回転<br>内外面とも自然釉<br>重ね焼成痕を有する<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏 $B_2$ | 66—46 | 口 径 14.0<br>底 径 9.8<br>器 高 4.3 | 底部は平底で、胴部との境には明瞭な稜をつくり、断面を横広の長方形とする高台は、それより内側に付けられる。胴部と口縁部はほぼ直線状にのびる。 | 底部は回転ヘラケズリ。 | 胎土 密（含、砂粒）<br>焼成 良好<br>色調 淡黄灰色 | 口縁部、底部とも½残<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏 $B_2$ | 66—47 | 口 径 13.7<br>底 径 10.3<br>器 高 14.0 | 底部は平底で、胴部との境には明瞭な稜をつくり、口縁部は鋭く立ち上がる。高台は断面長方形である。 | 底部は回転ヘラケズリで、底面内部にはロクロ目を残す。 | 胎土 やや粗（含、砂粒）<br>焼成 良好<br>色調 淡黄灰色 | 口縁部¼、底部¾残<br>ロクロ右回転<br>封鎖部出土 |
| 須恵器<br>坏 $B_2$ | 66—48 | 口 径 17.5<br>底 径 10.4<br>器 高 6.2 | 底部は平底で、その稜線を明瞭に残し、断面長方形の高台がその内側に付く。口縁部は直立しながらその端部ではゆるやかに外反する傾向をみせる。器壁はうすく大型品である。 | 底面は回転ヘラケズリで、口縁部ちかくの内外面にロクロ目を残す。 | 胎土 密（含、砂粒）<br>焼成 良好<br>色調 灰色 | 口縁部⅓欠<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏 $B_1$ | 66—49 | 底 径（7.9） | 底部はほぼ丸底で、横広の断面長方形の高台を付す。底部と高台はほぼ同じ高さとなる。 | 底部は回転ヘラケズリで、その内面には顕著なロクロ目を残す。 | 胎土 密<br>焼成 良好<br>色調 灰色 | 底部½残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器<br>坏　$C_1$ | 66—50 | | 底部は丸底で、高台は付けないタイプである。 | 底部外面はナデ仕上げで、内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 底部残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$C_1$ | 66—51 | | 底部は丸底で、胴部は連続してゆるやかに立ち上がる。 | 底部外面はナデ仕上げとなる。 | 胎土　密（含、砂礫）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 底部½残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$C_3$ | 66—52 | 口　径（11.9）<br>底　径（10.6）<br>器　高　3.6 | 底部はゆるやかな丸底で、中央部では平底にちかい状況を呈し、胴部との境に明瞭な稜をつくる。胴部から口縁部はほぼ直立する。 | 底部外面は回転ヘラケズリで、胴部内外面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部、底部とも⅓残<br>ロクロ右回転<br>封鎖部出土 |
| 須恵器<br>瓶.B | 66—53 | 胴部最大径（ 8.6）<br>底　径　5.8 | 底部は丸底で、断面三角形の高台をつけ、その高さはほぼ等しい。肩部にはゆるやかに稜を張り出す。注口部は突出する。小型品である。 | 肩部に沈線区画ヘラによるきざみを有する。注口部はナデつけで正面をヘラで斜めに切り落す。 | 胎土　粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 胴部残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>瓶 A | 66—54 | 胴部最大径（10.4） | 底部は丸底で、肩はゆるやかに張るが、稜は認め得ない。口縁部はラッパ状にひらき、その境には明瞭な稜をつくる。注口部はわずかに突き出す。 | 底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリ。肩部下に二条の沈線をまわす。注口部はナデ付けされる。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 口縁部欠<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>瓶 B | 66—55 | 口　径　10.9<br>胴部最大径 11.7<br>底　径　6.6<br>器　高　13.3 | 底部は平底で、断面が逆台形の高台をつける。肩部は明瞭な稜を付けて強く張る。口縁部下に一段の稜線をつくり、口縁部を平坦にする。突出した注口部をつける。 | 底部から胴部下方にかけて回転ヘラケズリ。肩部下に斜行するクシ目文（一単位8歯）が巡る。注口部はナデつけ。 | 胎土　粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　不良<br>色調　淡灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>提　瓶 | 66—56 | 口　径　7.1 | 肩部は平坦で、口縁部はラッパ状にひらく。 | 胴部と頸部の接合痕を明瞭に残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 頸部残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_1$ | 66—57 | 口　径　9.9<br>胴部最大径 15.1<br>底　径　7.1<br>器　高　19.9 | 底部は丸底で、断面三角形の低い高台よりわずかに下に突き出す。肩部は不明瞭な稜をもって、ラッパ状にひらく口縁部は端部で肥厚させてわずかにひきあげる。 | 底部から胴部中ほどまでは回転ヘラケズリ。 | 胎土　密（含、若干の微細砂）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 66－58 | 口　径　10.1<br>胴部最大径 17.3<br>底　部　9.7<br>器　高　2.7.0 | 底部は平底で、断面台形の高台をつける。肩部はなめらかであるが、稜は一応明瞭である。細長い頸部から口縁部はラッパ状にひらくが、その端部は肥厚している。 | 底部から胴部下方にかけて回転ヘラケズリ。頸部にはロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 完形<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 67－59 | 底　径（ 8.4 ） | 底部は平底で、断面長方形の高台をつける。 | 底部から胴部下方にかけて回転ヘラケズリ。内面に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 底部<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>平瓶A | 67－60 | 胴部最大径 13 | 底部は小さく、肩部がつよく張り出す。 | 底部から胴部下方にかけて回転ヘラケズリ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 口縁部欠<br>ロクロ左回転<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>蓋 | 67－61 | 口　径（13.5）<br>最大径（15.0） | 口縁部の先端を断面三角形につくり、器高を比較的低くするタイプとなる。 | 内外面ともナデ仕上げ。 | 胎土　密<br>焼成　不良<br>色調　赤褐色 | 口縁部一部残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域撹乱土層中出土 |
| 土師器<br>坏　$B_4$ | 67－62 | 口　径（10.9 ）<br>底　径（ 6.7 ）<br>器　高（ 2.8 ） | 底部は平底になるらしく、胴部はゆるやかに内湾しながら外にひらき、その端部ではわずかに外反気味となる。 | 胴部にはヘラケズリが施される。 | 胎土　密（含、石英粒）<br>焼成　やや不良<br>色調　黄褐色 | 口縁部、底部とも⅛残<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_1$ | 67－63 | 口　径　11.8<br>底　径　8.4<br>器　高　4.1 | 底部は丸底で、その外縁部に稜を有し、そこから外上方に立ちあがる口縁はその端部でわずかに内湾する。 | 底部は全面手持ちヘラケズリで、胴部はヨコヘラミガキとなる。内面には放射状暗文を施す。 | 胎土　密（含、雲母粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 完形<br>封鎖部出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 67－64 | 口　径　12.5<br>底　径　5.9<br>器　高　4.0 | 底部は平底で、胴部はゆるやかに内湾気味に立ち上がり、口縁部を外にひき出す。 | 底部は回転糸切りで、二次調整はみられない。胴部外面はロクロ目で、内面はナデ仕上げされる。 | 胎土　密（含、多量の滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>玄室内床上8㎝出土 |
| 土師器<br>坏　$C_2$ | 67－65 | 口　径（11.7 ） | 胴部はゆるやかに立ち上がり、口縁部を外にひき出す。 | 胴部外面にロクロ目を残し、内面はナデ仕上げとなる。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　明褐色 | 口縁部⅙残<br>ロクロ左回転<br>墓前域撹乱土層中出土 |
| 土師器<br>坏　$C_2$ | 67－66 | 口　径（10.2 ）<br>底　径（ 5.6 ）<br>器　高（ 3.8 ） | 底部は平底と思われ、口縁部付近をやや薄くして、その口縁部をわずかに外にひき出す。 | 外内面ともナデ調整する。 | 胎土　粗（含、粗大砂粒）<br>焼成　不良<br>色調　黄褐色 | 口縁部⅕残<br>玄室内出土 |
| 土師器<br>甕　C | 67－67 | 口　径（16.8 ） | 胴部最大径は口縁最大径にほぼ等しい。口縁部は肩上で「く」 | 外面は細かいナナメハケ（11本/㎝）。内面はヨコハケ（7 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好 | 口縁部¼残<br>玄室内出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | の字状に外折してゆるやかに外反する。 | 本/cm）を主体にし、その後指頭整形。口縁部内外はヨコナデ。 | 色調　褐色 | |
| 土師器甕　C | 67－68 | 口　径　(16.0)<br>胴部最大径(16.3) | 胴部最大径は口縁最大径にほぼ等しい。口縁部は「く」の字状に外折してゆるやかに外反する。 | 外面はヘラケズリの後にタテハケ（8本/cm）調整。内面はヨコハケ（10本/cm）を主体にする。口縁部内外はヨコナデ調整。 | 胎土　粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　やや不良<br>色調　黄褐色 | 口縁部¼残<br>玄室内出土 |
| 土師器甕　C | 67－69 | 底　径　7.6 | 底部は平底で、わずかながらいわゆるツキダシがみられる。 | 底部に木葉痕あり。外面は細かいタテハケ（12本／cm）を主とし、内面はヨコハケ（9本／cm）による。 | 胎土　やや粗（含、若干の砂粒）<br>焼成　やや不良<br>色調　黄褐色 | 底部½残<br>玄室内出土 |
| 土師器甕　C | 67－70 | 底　径　6.7 | 底部は平底で、わずかながらいわゆるツキダシがあり、胴部は内湾して立ちあがる。 | 底部に擬似木葉痕。外面はタテハケ（7本/cm）。内面はヨコハケ（7本／cm）。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 底部½残<br>玄室内出土 |
| 土師器甕　C | 67－71 | 口　径（13.4　） | 胴部より「く」の字状に外反する。口縁部はその先端を尖がらしながら外反する。 | 器面が荒れており、調整は不明瞭で観察できない。 | 胎土　粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　不良<br>色調　黄褐色 | 口縁部¼残<br>封鎖部出土 |
| 土師器甕　C | 67－72 | 口　径（15.7　） | 口縁部は大きく外反し、その上半部をさらに外折する傾向をみせる。 | 外面はタテハケ（10本／cm）を主体にして、内面はヨコハケ（9本／cm）調整。口縁部内外はヨコナデによる。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部⅙残<br>玄室内出土 |
| 土師器甕　C | 67－73 | 口　径　15.2<br>胴部最大径 16.2<br>底　径　7.1<br>器　高　16.4 | 胴部上位に最大径を持ち、口縁部は「く」の字状に外折する。底部は平底で、いわゆるツキダシを有する。 | 外面は上半部がナナメハケ（11～12本／cm）。下半部がタテハケ（13本／cm）となる。内面はヨコハケ（8本/cm）を施す。底部に擬似木葉痕。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 口縁部⅘残<br>封鎖部出土 |
| 土師器甕　C | 67－74 | 底　径　6.9 | 底部は平底で、体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。 | 外面はタテハケ。内面はヨコハケ（12本/cm）を主体とする。底部に擬似木葉痕。 | 胎土　粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　不良<br>色調　黄褐色 | 底部残<br>墓前域出土 |
| **14　号　横　穴** | | | | | | |
| 土師器高　坏 | 67－75 | | 筒型の高い脚部を有する。 | 脚部外面はタテヘラミガキ。脚部下方と坏部下方はヨコヘラミガキ。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　赤褐色 | 脚部残<br>墓前域右側出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 脚部内面及び坏部内面はナデ調整。 | | |
| **15　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　B | 67－76 | 口　径　15.0<br>最大径　15.2<br>器　高　3.6 | やや小型の擬宝珠状ツマミを付し、断面三角形の口縁部を有する。器高は低いタイプとなる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリで、内面と口縁部外面には顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 口縁部⅔欠<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 67－77 | 口　径　13.9<br>底　径　10.6<br>器　高　3.9 | 底部は丸底で、胴部への移行はつよく屈折して稜をもち、口縁部にむかってほぼ直線状にのびる。その稜直下に断面長方形にちかい高台を付すが、それは底部より高い位置にあって意味を果し得ない。 | 底部は回転ヘラケズリで、胴部から口縁部はロクロ目となる。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 完形<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 67－78 | 底　径（11.4） | 底部は丸底で、巾広の高台を付すが、それは底部より高い位置にある。 | 底部は回転ヘラケズリとなる。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 底部¼残<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏　$C_1$ | 67－79 | 口　径　13.3<br>底　径　6.0<br>器　高　5.0 | 底部は丸底で、その中央部を肥厚させてあたかも小さな平底であるかのようにみせる。胴部は底部からスムーズに連続して内湾し、口縁部でほぼ直立する。器高は高い。 | 底部はヘラケズリで、その内面にはロクロ目を残す。<br>底部外面に「十」字の窯印を有する。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　不良<br>色調　灰色 | 完形<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 67－80 | 口　径（13.0）<br>底　径（6.2）<br>器　高　3.8 | 底部は平底で、胴部から口縁部は外上方にむかって直線状にのびる。 | 底部は全面ヘラで、ナデにより仕上げられる。 | 胎土　密（含、滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 口縁部⅙、底部残<br>ロクロ左回転<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>甕　A | 67－81 | 口　径（18.6） | 頸部から「く」の字状につよく外折する口縁部はその先端を内側に折り返して肥厚させ上部を平坦につくる。 | 口縁部外面はタテハケ（8本／cm）をナデで消し、内面はヨコハケ（8本／cm）を残す。<br>肩部内面、細かいヨコハケ（11本／cm）である。 | 胎土　粗（含、多量の滑石粒）<br>焼成　不良<br>色調　褐色 | 口縁部⅙残<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_1$ | 67－82 | 胴部最大径　16.5<br>底　径　10.3 | 底部は丸底で、断面逆台形の高台を付すが、底部はそれよりやや突出する。胴部は肩の張る球型で、頸部は細長くのびて | 底部から胴部中央にかけて回転ヘラケズリ。 | 胎土　やや粗（含、石英粒がやや多い）<br>焼成　やや不良<br>色調　淡黄灰色 | 口縁部欠<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域左側出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口縁部でラッパ状にひらくらしい。 | | | |
| **16　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 68－83 | 胴部最大径(15.8)<br>底　径　8.6 | 底部は平底で、断面長方形のしっかりした高台を付し、胴部は内湾しながらつよく立ち上がる。 | 底部から胴部下方にかけて回転ヘラケズリ。内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 胴部¼残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>玄室内出土 |
| **17　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　A | 68－84 | 口　径　12.7<br>最大径　15.3<br>器　高　3.4 | 擬宝珠状ツマミを付し、口縁部にはカエリを有する。天井部は平坦化し、胴部中央で折れる状況となる。 | 天井部外面から胴部中央にかけて回転ヘラケズリで、天井部内面にロクロ目を残す。 | 胎土　やや粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 天井部、口縁部½残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 68－85 | 口　径　15.8<br>最大径　16.1<br>器　高　3.6 | 扁平な擬宝珠状ツマミをつけ、口縁部を下に折り曲げて、比較的薄く長い口唇部をつくる。 | 天井部外面から胴部中央にかけて回転ヘラケズリ。内面にロクロ目を顕著に残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　やや不良<br>色調　灰色 | 天井部¾、口縁部¼残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 68－86 | 口　径　16.4<br>最大径　16.8<br>器　高　3.8 | 比較的扁平な擬宝珠状ツマミをつけ、胴部をスムーズに内湾させて、口縁部を下方に折り曲げ、やや長い口唇部をつくる。 | 天井部から胴部にかけての外面を回転ヘラケズリし、内面にはロクロ目を残す。 | 胎土　やや粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄灰色 | 天井部、口縁部½残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 68－87 | 口　径　15.8<br>最大径　16.7<br>器　高　3.1 | 比較的扁平な擬宝珠状ツマミを付し、天井部から胴部への境にはかなり明瞭な稜を残して、口縁部を下方に折り曲げる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリし、内外面ともにロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 天井部、口縁部とも½残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 68－88 | 口　径　16.2<br>最大径　16.4<br>器　高　3.5 | 扁平な擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を下に折り曲げる。やや長い口唇部をつくる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリ。<br>内面にロクロ目を顕著に残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 天井部、口縁部½残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 68－89 | 口　径　14.6<br>最大径　15.5<br>器　高　4.1 | やや小さな擬宝珠状ツマミをつけ、口縁部を横にひき出してからその端部をやや内側に折り曲げて断面三角形とする。 | 天井部外面はヘラケズリで、その内面に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　やや粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 口縁部¼残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 68－90 | 口　径　15.7<br>最大径　15.9 | 扁平な擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を | 天井部外面は回転ヘラケズリで、その内 | 胎土　密（含、若干の砂粒） | ほぼ完形<br>ロクロ右回転 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 器　高　3.7 | 下方に折り曲げて、薄い口唇部をひき出す。 | 面にロクロ目を残す。 | 焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 68－91 | 口　径（16.3）<br>最大径（16.7）<br>器　高　3.9 | 扁平な擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を下に折り曲げる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリで、その内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 口縁部¼欠<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 68－92 | 口　径　15.5<br>最大径　15.8<br>器　高　4.3 | 扁平な擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を下に折り曲げる。器高は比較的高い。 | 天井部外面は回転ヘラケズリし、その内面にロクロ目を残す。胴部外面にロクロ目を顕著に残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 完形<br>ロクロ右回転<br>封鎖部出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 68－93 | 口　径（15.8）<br>最大径（16.5）<br>器　高　4.0 | 上面が平坦な擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を下に折り曲げる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリする。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 天井部、口縁部共に¼残<br>ロクロ左回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>平瓶 B | 68－94 | 胴部最大径 21.1<br>底　径　14.4 | 底部を円形の平底につくり、ほぼ直線状にのびる胴部は外上方にひらく。 | 底部は回転ヘラケズリ。胴部内面にロクロ目を残す。 | 胎土　やや粗（含、多量の砂礫、特に石英粒が顕著）<br>焼成　良好<br>色調　暗褐灰色 | 胴部、底部残<br>ロクロ右回転<br>一部自然釉（内面）<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 68－95 | 口　径（13.6）<br>底　径　9.7<br>器　高　4.5 | 底部は丸底で、断面三角形にちかい高台を付すが、わずかに底部が突出する。胴部から口縁部にかけてわずかに内湾しつつ立ち上がる。底部は器壁が厚く、全体の器高は深いタイプである。 | 内外面ともに、ナデ仕上げがめだつ。 | 胎土　粗<br>焼成　不良<br>色調　灰色 | 底部、口縁部⅓残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 68－96 | 口　径　14.6<br>底　径　10.0<br>器　高　4.2 | 底部は丸底で、器壁の厚い底部から胴部への境は比較的明瞭となって、口縁部にはわずかに内湾しながら立ち上がる。<br>断面長方形の高台をつけるが、それはわずかに底部より低い。 | 底部外面を回転ヘラケズリし、胴部内外面、及び底部内面にロクロ目を顕著に残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　黄灰色 | 完形<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_2$ | 68－97 | 口　径　15.4<br>底　径　12.1<br>器　高　4.5 | 底部は平底で、器壁は厚く、断面長方形の細長い高台をつける。底部から胴部への境は不明瞭で、そこから口縁部にはわずかに内湾しながら立ち上がる。 | 底部は回転ヘラケズリで、底部内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器 | 68－98 | 口　径　15.6 | 底部は平底で、細長 | 底部は回転ヘラケズ | 胎土　密（含、 | ほぼ完形 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 坏　$B_2$ | | 底　径　12.1<br>器　高　4.3 | く断面長方形の高台をつける。器壁は底部を含めてうすく、全体に大きくなるタイプ。明瞭な底部稜線をつくり出し、それより口縁部にかけてわずかにひらきながらのびる。 | リ。胴部外面にロクロ目を残す。 | 砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | ロクロ左回転<br>墓前域出土 |
| 灰　釉<br>陶　器 | 68－99 | 底　径　6.4 | 底部は平底で、径の小さい断面三角形の高台をつける。 | 底部は回転糸切り痕をナデ消す。 | 胎土　密（含、滑石粒、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 底部残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 68－100 | 底　径　9.6 | 底部は丸底で、断面逆台形の高台をつけ、その高さはほぼ等しい。底部の器壁は厚い。 | 器面が荒れており調整の観察は難しいが、底部はヘラケズリと思われる。 | 胎土　粗<br>焼成　不良<br>色調　淡黄灰色 | 底部残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 68－101 | 底　径　11.1 | 底部は丸底で、断面台形のしっかりした高台をつけ、その高さはほぼ等しい。胴部への稜を明瞭に造る。 | 底部は回転ヘラケズリで、内面中央にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 底部残<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏　$C_1$ | 68－102 | 口　径　14.0<br>底　径　7.7<br>器　高　4.4 | 底部は平底気味の丸底で、弱い底部稜線を有し、口縁部はわずかに外反傾向をみせる。 | 底部に粘土の張り付け痕を有する。内外面とも、ロクロ目を顕著に残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$C_1$ | 68－103 | 口　径　11.9<br>器　高　4.5 | 底部は丸底で、そこからスムーズに連続する胴・口縁部は内湾しながら立ち上がる。全体的に半球形にちかい。 | 底面に粘土紐の張り付け痕が観られ、底部より胴部下方にかけて回転ヘラケズリを施す。口唇部内面に一状の沈線をつける。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 完形<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$C_2$ | 68－104 | 口　径（12.5）<br>底　径（4.8）<br>器　高（3.7） | 底部は丸底で、その中央部はわずかに平底化する。連続する胴・口縁部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、その口唇部では薄く尖らす。 | 底部は回転ヘラケズリ。胴部外面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部、底部とも¼残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$C_2$ | 68－105 | 口　径（14.3）<br>底　径　5.2<br>器　高　4.1 | 底部は丸底で、そこからスムーズに連続する胴・口縁部は、ゆるやかに立ち上がる。 | 底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリ。 | 胎土　密（含、砂礫）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 口縁部⅓、底部残<br>ロクロ左回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$C_2$ | 68－106 | 口　径（15.0）<br>底　径　7.2 | 底部は平底にちかく、胴部への稜は一応認 | 底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズ | 胎土　密<br>焼成　良好 | 口縁部、底部とも¼残 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 器　高　4.0 | め得る。胴から口縁部はゆるやかに立ち上がる。 | り。ヘラによる稜線を明瞭に残す。 | 色調　淡黄灰色 | ロクロ左回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$C_4$ | 68－107 | 口　径（12.4）<br>底　径（8.2）<br>器　高　3.9 | 底部は平底で、器厚は底部が厚く、胴から口縁部はわずかに内湾して立ち上がる。 | 内外面とも、ナデ整形となる。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 口縁部¼、底部⅓残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$B_2$ | 68－108 | 口　径（13.4）<br>器　高（3.8） | 底部は丸底になるものと思われ、スムーズに連続する胴部から口縁部は内湾している。器高は高いタイプとなる。 | 胴部上方から底部にかけての外面は手持ちヘラケズリが施される。内面はナデ調整する。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　赤褐色 | 口縁部⅕残<br>玄室内出土 |
| 土師器<br>坏　$B_2$ | 68－109 | 口　径　14.8<br>器　高　4.7 | 底部は丸底で、スムーズに連続する胴部から口唇部にかけては内湾しながら立ち上がる。器高は高いタイプである。 | 胴部上方から底部にかけての外面に手持ちヘラケズリが施される。内面はていねいにナデ調整される。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　赤褐色 | 口縁部½、底部残<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$B_2$ | 68－110 | 口　径（14.1）<br>器　高　4.3 | 底部は丸底で、胴部から口縁部は内湾する。<br>器高の高いタイプ。 | 胴部から底部にかけての外面は手持ちヘラケズリ。<br>内面はナデ仕上げ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部⅓残<br>玄室内出土 |
| 土師器<br>坏　$B_4$ | 68－111 | 口　径（14.3）<br>底　径（9.7）<br>器　高　3.5 | 底部は丸味のある平底で、胴部中央に稜をもつ。底部から胴部中央付近まで内湾し、口縁部は外反する。 | 胴部稜線から底部にかけて手持ちヘラケズリ。<br>内面はナデ仕上げ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部⅓残<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_2$ | 68－112 | 底　径　6.55 | 底部は平底で、胴部は内湾しながら立ち上がるらしい。 | 底部中央部に回転糸切り痕を残し、底面周辺部をヘラケズリする。 | 胎土　密（含、滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 底部ほぼ残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_2$ | 68－113 | 口　径（12.2）<br>底　径（9.1）<br>器　高　4.1 | 底部は平底で、胴部は内湾して、口縁部で外反する。 | 底部内面に放射暗文状ヘラミガキ。底部中央部に、回転糸切り痕を残し、その周辺部をヘラケズリする。胴部内外面ともに、巾細の回転ヘラミガキ。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 口縁部⅙、底部¼残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_2$ | 68－114 | 口　径（13.0）<br>底　径（10.1）<br>器　高　3.7 | 底部は平底で、胴部はわずかに内湾気味で、口縁部は外反する。 | 底部は全面を手持ちヘラケズリ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 口縁部、底部とも⅓残<br>ロクロ左回転<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_2$ | 68－115 | 口　径（13.0）<br>底　径　9.5<br>器　高　3.7 | 底部は平底で、胴部はほぼ直線状にのびるがわずかに内湾気味となり、口縁部は | 底部はヘラケズリ。<br>底部内面に、放射暗文状ヘラミガキ。 | 胎土　密（含、滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部⅙残、底部残<br>ロクロ回転方向不明 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外反する。 | | | 墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_2$ | 68—116 | 口　径　12.7<br>底　径　8.9<br>器　高　3.7 | 底部は平底で、胴部は内湾し、口縁部は外反する。 | 底部中央部に回転糸切り痕を残し、その周辺部を手持ちヘラケズリする。 | 胎土　密（含、滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 完形<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_2$ | 68—117 | 口　径　10.3<br>底　径　9.3<br>器　高　3.7 | 底部は平底で、胴部は内湾気味で直線状にのびて立ち上がり、口縁部は外反傾向をみせる。 | 底部外面はヘラケズリする。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　軟弱<br>色調　黄褐色 | ほぼ完形<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 68—118 | 底　径　（6.0） | 底部は平底で、その中央部を大きくもりあげる。胴部は内湾しながら立ち上がる。器厚は薄く、小型。 | 底部に回転糸切り痕を残し、その周縁を回転ヘラケズリする。胴部内面に放射状の暗文を施す。 | 胎土　密（含、微細な雲母粒）<br>焼成　良好<br>色調　明褐色 | 底部½残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 68—119 | 口　径　9.9<br>底　径　6.0<br>器　高　3.5 | 底部は平底で、胴部から口縁部にかけてゆるやかに内湾する。器壁は比較的厚い。 | 底部に回転糸切り痕を残す。 | 胎土　粗（含、粗大な滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 完形<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 68—120 | 口　径　10.5<br>底　径　6.2<br>器　高　3.5 | 底部は平底で、胴部から口縁部はゆるやかに内湾する。 | 底部に回転糸切り痕を残す。 | 胎土　粗（含、粗大な滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 完形<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 68—121 | 口　径　12.6<br>底　径　6.9<br>器　高　3.9 | 底部は平底で、その中央部では器壁を薄くする。胴部から口縁部は内湾しながらもほぼ直線状に立ち上がり、口唇部を薄く仕上げる。 | 底部は回転糸切り痕を残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　やや不良<br>色調　明橙色 | ほぼ完形<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$A_1$ | 68—122 | 底　径（12.3） | 底部は平底で、断面長方形の高台をつける。底部稜線はやや不明瞭で、胴部はほぼ直線状に立ち上がる。 | 器面が荒れて観察不能であるが、全面ナデ仕上げと思われる。 | 胎土　やや粗（含、砂粒）<br>焼成　不良<br>色調　橙色 | 底部一部残<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>高　坏 | 69—123 | | 脚部はラッパ状にひらき、坏部は底部を平坦につくる。 | 坏部の底部外面は回転ヘラケズリ。脚部はロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 脚部上半残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>平瓶B | 69—124 | 口　径　7.4 | 口唇部ちかくで径を広くして、器壁はその端部を尖らす。胴部に対して斜めに接合される。 | 内外面ともロクロ目の痕跡を残す。 | 胎土　粗（粗大砂粒が多い）<br>焼成　良好<br>色調　褐灰色 | 頸部残<br>ロクロ回転方向不明<br>自然釉<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>長頸坩 | 69—125 | 口　径　10.5 | 細長い頸部は口縁部で大きくラッパ状に | 口縁部直下に一段の稜を施す。 | 胎土　密（含、砂粒） | 頸部残<br>ロクロ右回転 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| $A_2$ | | | ひらき、その端部をわずかに肥厚させて口唇部をつくる。 | | 焼成　良好、堅緻<br>色調　淡黄灰色 | 自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>瑞　C | 69—126 | 口　径　10.0<br>胴部最大径　9.5<br>底　径　4.0<br>器　高　12.0 | 底部は小さな平底で、胴部上位に最大径をもってなだらかな肩部をつくる。頸部を細く、口縁部はラッパ状に大きくひらきながらその中央部で屈折する。注口部は突出している。 | 胴部下方は回転ヘラケズリ後、一部に手持ちヘラケズリを施す。頸部内面にしぼり目を観察する。注口部はナデ接合。肩部付近に一条の沈線を巡らす。 | 胎土　密（含、石英粒、滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 口縁部⅓欠<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>瑞　B | 69—127 | 口　径　(9.9)<br>胴部最大径 10.6<br>底　径　6.5<br>器　高　11.8 | 底部は平底で、高台をつけるが、高台より底部が低くなる。胴部は肩が大きく張るが底部も大きく逆台形となる。口縁部は二段に屈折する。注口部は突出する。 | 底部から胴部中央にかけて回転ヘラケズリ。胴部中央に二条の沈線を巡らす。注口部はナデ接合する。 | 胎土　密（含、大きな砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 口縁部ほとんど欠<br>ロクロ回転方向不明<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>甕 | 69—128 | 口　径（25.6） | 頸部から口唇部にかけて大きくひらき、口縁部はその端部を肥厚させる。 | 内外面ともに、ロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、砂粒、滑石粒、石英粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄灰色 | 口縁部一部残<br>ロクロ回転方向不明<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>甕 | 69—129 | 口　径（27.1） | 大きくひらく口縁部はその端部を肥厚して口唇部をつくる。 | 内面にロクロ目痕、外面口縁直下に突帯あり。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部¼残<br>ロクロ回転方向不明<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>甕 | 69—130 | 口　径（24.0） | 外反しながらひらく口縁部はその端部がわずかに肥厚する。 | 口縁直下にヘラ描き波状文を施す。 | 胎土　密（含、滑石粒、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 口縁部一部残<br>ロクロ回転方向不明<br>内面は自然釉<br>玄室内出土 |
| 土師器<br>甕　C | 69—131 | 口　径（11.3） | 頸部で「く」の字状に外折する比較的短い口縁部はほぼ直線状にのびる。 | 胴部内面はヨコハケ（7本／cm）。 | 胎土　粗（含、砂粒）<br>焼成　不良<br>色調　黄褐色 | 口縁部一部残<br>玄室内出土 |
| 土師器<br>甕　C | 69—132 | 底　径　（6.3） | 底部は平底で、若干の底部ツキダシを有する。 | 底部に擬似木葉痕。<br>内面はヨコハケ（9本／cm）。 | 胎土　密<br>焼成　軟弱<br>色調　明褐色 | 底部一部残<br>玄室内出土 |
| 土師器<br>甕　C | 69—133 | 底　径　5.8 | 底部は平底で、胴部はゆるやかに内湾する。若干の底部ツキダシを有する。 | 底部に擬似木葉痕。<br>外面、ナナメハケ(8本／cm)。<br>内面、ヨコハケ（6本～7本／cm）。 | 胎土　やや粗（含、石英粒）<br>焼成　やや不良<br>色調　黄褐色 | 底部½残<br>玄室内出土 |
| 土師器<br>甕　C | 69—134 | 底　径　6.1 | 底部は平底で、ツキダシを有し、胴部はゆるやかに内湾する。 | 底部に木葉痕。<br>外面、ナデ整形。<br>内面、ヨコハケ（10 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好 | 底部½残<br>玄室内出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 本／cm） | 色調　黄褐色 | |
| 土師器<br>甕　B | 69—135 | 底　径　（9.0） | 底部は平底で、大型品につくる。 | 底部に擬似木葉痕。<br>外面、タテハケ（7本～8本／cm）<br>内面、ヨコハケ（7本～8本／cm） | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　明褐色 | 底部一部残<br>墓前域出土 |
| **18　—　1　号　横　穴** | | | | | | |
| 土師器<br>蓋 | 70—136 | 口　径　21.0<br>最大径　21.2<br>器　高　5.5 | やや小さく高い擬宝珠状ツマミを付し、胴部はゆるやかにひらいて、口縁部を外にひき出してその端部を下に折り曲げる。 | 内外面とも比較的ていねいなナデ仕上げとする。 | 胎土　密（含、若干の滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　橙色 | ほぼ完形<br>ロクロ回転方向不明<br>玄室内覆土出土 |
| 土師器<br>坏　$A_1$ | 70—137 | 口　径　18.9<br>底　径　13.6<br>器　高　4.7 | 底部は平底で、断面長方形の長い高台を付し、胴部への稜はやや不明瞭にして、そこから口縁部にかけてはほぼ直線状に立ち上がる。大型品である。 | 内外面とも比較的ていねいなナデ仕上げとする。 | 胎土　やや粗（含、滑石粒）<br>焼成　やや不良<br>色調　橙色 | ほぼ完形<br>ロクロ回転方向不明<br>玄室内覆土出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_2$ | 70—138 | 口　径（14.5）<br>底　径（9.8）<br>器　高　3.8 | 底部は平底で、胴部への稜線を明瞭に残し、断面長方形の高台をその内縁部につける。胴部から口縁部にかけてほぼ直線状に立ち上がる。 | 底部外面は回転ヘラケズリで、胴部内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 口縁¼底部一部残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域覆土最上面出土 |
| 土師器<br>坏　$C_2$ | 70—139 | 口　径　12.7<br>底　径　9.2<br>器　高　3.8 | 底部は平底で、胴部はほぼ直線状にのびて口縁部は外反気味となる。 | 底部外面は全面ヘラケズリで、胴部内外面はヘラミガキ。底部内面に放射暗文状ヘラミガキ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | ほぼ完形<br>ロクロ回転方向不明<br>玄室内覆土出土 |
| 土師器<br>坏　$C_2$ | 70—140 | 口　径　13.0<br>底　径　8.8<br>器　高　3.8 | 底部は平底で、胴部下方に微弱な稜を付してほぼ直線状に立ち上がり、口縁部下でわずかに外反する。 | 底部外面は全面ヘラケズリで、胴部内外面ともヘラミガキ。底部内面に放射暗文状ヘラミガキ痕を残す。 | 胎土　密（含、石英粒）<br>焼成　軟弱<br>色調　明褐色 | ほぼ完形<br>ロクロ回転方向不明<br>玄室内覆土出土 |
| 土師器<br>坏　$C_2$ | 70—141 | 口　径　13.7<br>底　径　9.0<br>器　高　4.1 | 底部は平底で、胴部から口縁部へは内湾しながら立ち上がる。器壁はやや厚い。 | 底部外面はヘラケズリで、胴部内外面及び底部内面はていねいなナデ調整が施される。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　不良<br>色調　明橙色 | 完形<br>ロクロ右回転<br>玄室内覆土出土 |
| 須恵器<br>広口坩 | 70—142 | 口　径（19.3） | 頸部から口縁部にかけて、ゆるく外反しながら立ち上がり、その端部をややひらく。 | 頸部中央には一単位5歯のクシガキ波状文を二条施す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部¼残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域覆土上 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 層出土 |
| 須恵器<br>甕 | 70—143 | 口　径（26.3 ） | 頸部から口縁部にかけて外上方にひらき、口唇直下に屈折を付ける。 | 内外面とも、ロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、滑石粒、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　白灰色 | 口縁部¼残<br>ロクロ回転方向不明<br>自然釉<br>墓前域覆土上層出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 70—144 | 口　径　10.9 | 細い頸部から口縁部がラッパ状にひらき、口唇部は肥厚させて、端部をつくる。 | 内外面ともロクロ目の痕跡を残す。 | 胎土　粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 頸部残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>玄室内覆土上層出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 70—145 | 胴部最大径 15.9<br>底　径　8.0 | 底部は平底で、断面長方形の高台をつける。肩部は明瞭な稜をもって最大径をつくり、ふくらみをもって頸部にいたる。 | 底部から胴部下半にかけては、回転ヘラケズリ。胴部内面にロクロ目を顕著に残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 胴部残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域覆土上層出土 |
| 土師器<br>甕　C | 70—146 | 口　径　(16.1)<br>胴部最大径(17.7) | 最大径をほぼ中位にもつ胴部から「く」の字状に短い口縁部がひらく。 | 外面、ナナメハケ（7本／cm）<br>内面、ヨコハケ（5本～8本／cm）<br>口縁部外面はナデ調整。口唇部内面はヨコハケ。 | 胎土　やや粗（含、砂粒）<br>焼成　不良<br>色調　黄褐色 | 口縁部、胴部共に½残<br>玄室内覆土出土 |
| **18　—　2　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 69—147 | 口　径　9.9 | 頸部は筒状で、口縁部がラッパ状にひらき、その口唇部は肥厚して下に折り曲げられて端部をつくる。 | 内外面とも、ロクロ痕を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 頸部残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 69—148 | 口　径　11.8 | 頸部から口縁部がラッパ状にひらく。 | 頸部内面に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部½残、頸部残<br>ロクロ左回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>B | 69—149 | 胴部最大径 13.9<br>底　径　4.8 | 底部は平底化するが丸底で、球型の胴部はやや肩が張る。頸部は細長く、口縁部にむかってゆるやかにひらく。 | 底部から胴部にかけての外面は回転ヘラケズリ。胴部外面はナデ整形される。内面には顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部欠、胴部¼欠<br>ロクロ左回転<br>墓前域出土 |
| **21　—　2　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　B | 70—150 | 口　径　15.1<br>最大径　15.2 | やや小さな擬宝珠状ツマミを付し、胴部 | 天井部外面は回転ヘラケズリ。内外面と | 胎土　やや粗（含、粗大 | 完形<br>ロクロ右回転 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 器　高　3.4 | はゆるやかに内湾させて、口縁部を下方に折り曲げる。 | もにロクロ目を残す。 | な砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 自然釉<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_2$ | 70—151 | 口　径　14.0<br>底　径　9.1<br>器　高　4.1 | 底部は平底で厚く、胴部との稜を明瞭につくり断面長方形の高台をつけ、その高さはほぼ等しい。胴部はほぼ直線状にのびて、口縁部はわずかに外反する。 | 底部は回転ヘラケズリで、胴部内外面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、粗大な滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | ほぼ宗形<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 70—152 | 口　径　(10.6)<br>胴部最大径 16.0<br>底　径　8.6<br>器　高　24.0 | 底部は平底で、巾広のしっかりした高台を付す。肩部に稜をもって最大径をつくり、頸部から口縁部がラッパ状にひらいてその端部を肥厚させる。 | 底部から胴部下方の外面は、回転ヘラケズリ。内面にロクロ目を顕著に残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 口縁部¾欠<br>ロクロ左回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| **23 — 1 号 横 穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　B | 70—153 | 口　径（15.2）<br>最大径（15.5） | 口縁部を下方に折り曲げる。 | 胴部内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 口縁部一部残<br>ロクロ回転方向不明<br>封鎖部出土 |
| 須恵器<br>坏　A | 70—154 | 口　径（11.4 ）<br>器　高　3.4 | 底部は平底気味につくる丸底で、やや不明瞭ながら胴部との稜を残す。胴部から口縁部は直線状にのびる。 | 底部外面は回転ヘラケズリされる。内外面ともにナデ調整。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 底部残、口縁部¼残<br>ロクロ左回転<br>封鎖部出土 |
| **23 — 2 号 横 穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　B | 71—155 | 口　径　14.5<br>最大径　14.7<br>器　高　3.1 | やや小さく扁平な擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を下方に折り曲げる。器高は比較的低いタイプ。 | 天井部外面を回転ヘラケズリ。内面にロクロ目を顕著に残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ左回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 71—156 | 口　径　14.9<br>最大径　15.1<br>器　高　3.1 | やや小さく扁平の擬宝珠状ツマミをつけ、口縁部を下方に折り曲げる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリとなる。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 天井部　口縁部共に½残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 71—157 | 口　径（15.1）<br>最大径（15.5）<br>器　高　3.3 | 扁平で小さな擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を断面三角形にひき出してわずかに内傾させる。 | 天井部外面を回転ヘラケズリし、その内面と胴部外面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 天井部残、口縁部⅙残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器<br>坏　$B_2$ | 71—158 | 底　径　9.6 | 底部は平底で、胴部への境に明瞭な稜をつくる。稜の内縁部に断面長方形の高台を付す。 | 底部外面は回転ヘラケズリする。 | 胎土　密（含、滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 底部3/4残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_2$ | 71—159 | 口　径（14.4）<br>底　径　10.5<br>器　高　3.7 | 底部はやや丸底気味の平底に断面長方形の高台を付け、胴部との稜を明瞭につくる。胴部はわずかに内湾しつつ立ち上がり、口縁部をやや外反する。 | 底部外面は回転ヘラケズリ。 | 胎土　粗（含、砂粒）<br>焼成　不良<br>色調　暗灰色 | 底部1/2残、口縁部1/6残<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏　$C_3$ | 71—160 | 口　径（12.8）<br>底　径（10.3）<br>器　高　3.8 | 底部は平底で、中央がややあがる。胴部から口縁部は外上方に立ち上がる。 | 底部外面は回転ヘラケズリ。体部内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、石英粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 底部残、口縁部一部残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$B_2$ | 71—161 | 口　径（13.5） | 底部は丸底で、胴部中央に稜をつくる。胴部から口縁部は内湾気味に直立し、器高は高い。 | 底部から胴部中央にかけて手持ちヘラケズリし、内面はナデ調整する。 | 胎土　やや粗（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 口縁部1/4残<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>甕　A | 71—162 | 口　径（22.0） | 胴部から「く」の字状に外折して直線状にのびる口縁部は、その端部を内側に折り返して肥厚させる。 | 外面はナデ整形を主体にし、口唇部下方に指頭痕を残す。胴部内面はヨコハケ。 | 胎土　粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　不良<br>色調　褐色 | 口縁部1/3残<br>墓前域出土 |
| **24　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　A | 70—163 | 口　径　10.1<br>最大径　12.4<br>器　高　3.4 | 擬宝珠状ツマミを付し、なだらかにのびる口縁部は内側にカエリを有する。 | 天井部外面は回転ヘラケズリ、内外面ともにナデ仕上げとする。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ左回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏　A | 70—164 | 口　径（11.2）<br>底　径　7.0<br>器　高　3.4 | 底部は平底気味につくる丸底で、胴部から口縁部にかなり急に立ち上がる。 | 底部は回転ヘラケズリで、その他は内外ともていねいなヨコナデ調整がなされる。 | 胎土　密（含、粗大礫）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 口縁部3/4欠<br>ロクロ左回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 70—165 | 底　径（8.5） | 底部は平底で、しっかりとした断面長方形の高台をつける。胴部は内湾する。 | 底部から体部下方にかけて回転ヘラケズリを施す。 | 胎土　やや粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　やや不良<br>色調　淡黄灰色 | 底部2/3残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>甕 | 70—166 | 口　径（21.1） | 頸部から「く」の字状に外折して直線状にのびる口縁部は、その端部を肥厚させて口唇部をつくる。 | 内外ともロクロ目痕を残す。 | 胎土　密（含、砂粒、雲母粒、滑石粒、石英粒、粒は細かい）<br>焼成　良好、堅緻<br>色調　白灰色 | 口縁部一部残<br>ロクロ回転方向不明<br>自然釉<br>下層撹乱土層中出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 70—167 | 口　径（10.4　） | 頸部からく口縁部は、ラッパ状となって、その端部を肥厚させて口唇部をつくる。 | 内外面ともに、ロクロ目痕を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐灰色 | 口縁½、頸部残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| **25　—　1　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>坏　$B_2$ | 71—168 | 底　径　　9.9 | 底部は平底で、断面三角形にちかい高台を付す。 | 底部外面は回転ヘラケズリ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 底部½残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 71—169 | 口　径（11.0）<br>底　径　　5.0<br>器　高　　3.3 | 底部は小さな平底で、口縁部は外上方に大きくひらく。 | 底部は回転糸切り痕を明瞭に残す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　黄褐色 | 底部½、口縁部一部残<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| **26　　号　　横　　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　B | 71—170 | 口　径（14.6）<br>最大径（15.1）<br>器　高　　3.4 | 擬宝珠状ツマミを付した天井部は平担にして稜を有する。口縁部は下方に折り曲げて、その先端をやや内傾させる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリし、胴部内外面ともにロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好、堅緻<br>色調　暗灰色 | 天井部½、口縁部¼残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 71—171 | 口　径（14.9）<br>最大径（15.2）<br>器　高　　3.7 | 擬宝珠状ツマミを付し、口縁部は下にひき出して断面三角形につくる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリ。胴部内面に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 天井部、口縁部一部残、ロクロ右回転、墓前域落込み出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 71—172 | 口　径（14.2）<br>底　径（10.7）<br>器　高　　3.6 | 底部は丸底で、胴部への稜は比較的明瞭で、断面長方形のしっかりした高台を付す。胴部から口縁部は直線状に立ち上がる。 | 底部は回転ヘラケズリで、胴部外面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好、堅緻<br>色調　淡黄灰色 | 底部¼、口縁部一部残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$B_4$ | 71—173 | 口　径（11.9）<br>底　径（　7.3）<br>器　高　　4.1 | 底部は平底で、胴部は内湾しながら立ち上がる。器壁はやや厚い。 | 底部から胴部下半には手持ちヘラケズリで、内面にナデ調整が残る。 | 胎土　粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　やや不良<br>色調　赤褐色 | 口縁部一部残<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>碗　B | 71—174 | 口　径　（9.4） | ラッパ状にひらく口縁部はその中央部で屈折して稜をもつ。 | 内外面ともにナデ調整が目立つ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好、堅緻<br>色調　淡黄灰色 | 口縁部⅓残<br>ロクロ回転方向不明<br>自然釉<br>墓前域落込み出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| **27 号 横 穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>坏 $B_2$ | 71—175 | 底 径（10.1 ） | 底部は平底で、しっかりした高台を付す。 | 底部外面は回転ヘラケズリで、内面にロクロ目を残す。 | 胎土 密<br>焼成 良好<br>色調 淡黄灰色 | 底部⅓残<br>ロクロ右回転<br>墓前域撹乱土層中出土 |
| 土師器<br>坏 $C_3$ | 71—176 | 口 径（12.7）<br>底 径（ 6.7）<br>器 高 4.1 | 底部は平底らしく、胴部から口縁部は直線状にひらく。 | 胴部外面にロクロ目をわずかに残す。 | 胎土 密（含、砂粒）<br>焼成 良好<br>色調 褐色 | 口縁部¼残<br>ロクロ回転方向不明<br>玄室内覆土出土 |
| 須恵器<br>瑞 B | 71—177 | 口 径 9.6<br>胴部最大径 8.9<br>底 径 4.5<br>器 高 10.7 | 底部は小さい平底で、断面長方形の高台を付す。肩部をつよく張って胴部最大径とし、細い頸部から大きくひらく口縁部は中央付近で稜をもって屈折する。 | 底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリ。頸部内面にしぼり目。突出した注口部をナデつける。 | 胎土 密（含、砂粒）<br>焼成 良好<br>色調 白灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ左回転<br>自然釉<br>墓前域覆土出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 71—178 | 底 径 7.8 | 底部は丸底で、断面長方形の高台を付けるが、その高さはほぼ等しい。胴部は内弯しながら立ち上がる。 | 底部から胴部下方にかけて回転ヘラケズリ。内面にロクロ目を顕著に残す。 | 胎土 粗（含、多量の砂粒）<br>焼成 良好<br>色調 灰色 | 底部残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域覆土出土 |
| **29 号 横 穴** | | | | | | |
| 土師器<br>坏 $B_1$ | 71—179 | | 底部は平底化した丸底となる。 | ℓ字状ラセン暗文が内面に施される。底部には細かいヘラミガキが観られる。 | 胎土 密（含、雲母粒、石英粒）<br>焼成 良好<br>色調 赤褐色 | 底部残<br>内外面とも丹塗り<br>玄室内出土 |
| 土師器<br>甕 C | 71—180 | 口 径 14.1<br>胴部最大径 15.2<br>底 径 8.7<br>器 高 12.2 | 底部は厚い平底で、突き出しを有する。胴部中央上位に最大径をもち、口唇部は「く」の字状に短く外折する。 | 外面はナデ整形を主体とする。<br>内面は荒いヨコハケ。底部に擬似木葉痕。 | 胎土 粗（含、多量の砂礫粒）<br>焼成 不良<br>色調 暗黄褐色 | ほぼ完形<br>開口部覆土上層出土 |
| **30 号 横 穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋 B | 71—181 | 口 径 15.1<br>最大径 15.3<br>器 高 3.8 | 擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を下方に折り曲げて、断面長方形につくる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリで、内面に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土 密<br>焼成 良好、堅緻<br>色調 暗灰色 | 天井部、口縁部⅓残、ロクロ右回転、自然釉<br>玄室内黒土層上部出土 |
| 須恵器 | 71—182 | 口 径（13.3） | 底部は丸底で、断面 | 底部外面は回転ヘラ | 胎土 密（含、 | 口縁部⅓、底 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 坏　$B_1$ | | 底　径　9.5<br>器　高　4.1 | 三角形にちかい高台を付し、その外縁には胴部への稜がみられる。口縁部は直線状にひらく。 | ケズリ。その内面にロクロ目を残す。 | 砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 部残<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| **32　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>碗　B | 71—183 | 胴部最大径(10.9)<br>底　径　6.9 | 底部は平底で、断面長方形の高台を付す。胴部中央を最大径として、肩はなめらかとなる。細い頸部から屈折する。口縁部がひらく。注口部は突出する。 | 底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリ。注口部はナデつけされる。 | 胎土　やや粗（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部欠<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓道内出土 |
| 須恵器<br>甕 | 71—184 | 口　径（29.3　） | 外反しながらひらく口縁部は、その先端で肥厚して口唇部をつくる。 | 内外面ともにロクロ目を残す。頸部下方に左下がりのクシ描き文を施す。 | 胎土　密（含、滑石粒、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部⅙残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| **33　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 72—185 | 口　径　10.3 | 細い頸部から、なめらかに外反して口縁部がひらき、その端部が肥厚する。 | 内外面ともロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好、堅緻<br>色調　淡黄灰色 | 頸部残<br>ロクロ左回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>広口坩 | 72—186 | 口　径（19.5） | 口縁部は薄く、なめらかに外反する。 | 内外面にロクロ目をかすかに残す。 | 胎土　密（含、滑石粒、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部⅓残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| **34　号　横　穴** | | | | | | |
| 灰　釉<br>陶　器 | 72—187 | 底　径　6.1 | 底部は小さな平底で、断面長方形の高台を付す。器厚は薄い。 | 底部は高台張り付け後、ナデ調整される。内面にわずかに灰釉を施す。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡黄灰色 | 底部残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域撹乱土層中出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 72—188 | 底　径　5.5 | 底部は平底で、底部から連続する胴部はゆるやかにひらく。 | 底部糸切り後、ナデ調整される。 | 胎土　粗（含、多量の砂粒）<br>焼成<br>色調 | 底部½残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 土師器<br>坏　$C_3$ | 72—189 | 口　径　12.5<br>底　径　5<br>器　高　4.4 | 底部は平底で、中央部が盛り上がる。胴部から口縁部は内湾気味で直線状にひらく。 | 底部は全面ヘラケズリ。胴部下方にかけてヘラケズリ。内面はていねいなナデ調整。 | 胎土　粗（含、多量の砂粒、特に滑石粒）<br>焼成　良好<br>色調　褐色 | 口縁部½、底部⅔残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器<br>瑞　B | 72—190 | 胴部最大径(10.9)<br>底　径　　5.4 | 底部は平底で、断面長方形の高台を付す。肩部を強く張って最大径とし、頸部は細く屈折する。口縁部はラッパ状にひらく。 | 底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリ。突出した注口部をナデつける。 | 胎土　密（緻密）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 口縁部欠<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>封鎖部床上出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>B | 72—191 | 口　径　　8.0<br>胴部最大径 14.2<br>底　径　　5.4<br>器　高　　18.8 | 底部は小さい平底で、肩部を強く張って最大径をつくるが、その器形は扁平となる。頸部は細く、口縁にむかってゆるやかに立ちあがる。 | 底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリがなされる。 | 胎土　密（比較的細かい）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 完形<br>ロクロ左回転<br>自然釉<br>底部に窯道具痕<br>墓前域出土 |
| **35　号　横　穴** | | | | | | |
| 土師器<br>坏　$B_2$ | 72—192 | 口　径（12.0） | 底部は丸底と思われるが、胴部から口縁部は内湾しながらたちあがる。 | 外面の胴部下半は手持ちヘラケズリ。 | 胎土　密（含、砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗褐色 | 口縁部一部残<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 72—193 | 口　径　　11.4<br>胴部最大径 16.9<br>底　径　　8.8<br>器　高　　25.8 | 底部は丸底で、断面長方形のしっかりした高台を付す。肩部は強く張って最大径を測り、頸部から外反する口縁部はその端部を肥厚させて大きくひらく。 | 底部から胴部下半まで回転ヘラケズリ。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡褐灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| **36　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>甕 | 72—194 | 口　径　　22.1<br>胴部最大径 35.0<br>器　高　　38.1 | 底部は丸底で、なめらかな肩部に最大径を測る。頸部から、「く」の字状に外折してひらく口縁部は、その端部で肥厚して口唇部をつくる。 | 胴部外面は叩き整形される。内面は指頭痕がみえる。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 完形<br>自然釉<br>開口部出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 73—195 | 口　径（16.4）<br>最大径（16.5）<br>器　高　　3.3 | 扁平凹頂の擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を下方に折り曲げる。器高は浅いタイプ。 | 天井部外面は回転ヘラケズリ。胴部内面に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　やや粗（含　多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 天井部½、口縁部⅙残<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 73—196 | 口　径（14.9）<br>最大径（15.0）<br>器　高　　3.2 | 扁平な擬宝珠状ツマミを付し、口縁部下方に折り曲げた、器高の浅いタイプ。 | 天井部外面は回転ヘラケズリ。胴部内外面にロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 天井部½、口縁部一部残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>瑞　B | 73—197 | 胴部最大径(10.5)<br>底　径　　5.5 | 底部は平底で、断面長方形の高台を付し、肩部を強く張って胴 | 底部から胴部下方にかけて回転ヘラケズリ。注口部をナデ接 | 胎土　密（含、滑石粒、砂粒、粒は粗） | 胴部残<br>ロクロ右回転<br>底部に「十」 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 最大径とする。突出した注口部を有する。 | 合する。 | 大）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 字の窯印<br>開口部出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 73—198 | 口　径　（9.8） | 口縁部からひらき、その端部が肥厚する。 | 内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　黄灰色 | 口縁部⅓残<br>ロクロ回転方向不明、自然釉<br>玄室内出土 |
| **37　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　B | 73—199 | 口　径（16.3）<br>最大径（16.5） | 口縁部を下方に折り曲げる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリ。胴部内面に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 口縁部¼残<br>ロクロ回転方向不明<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 73—200 | 口　径　14.6<br>最大径　15.3<br>器　高　3.8 | 扁平な擬宝珠状ツマミを付し、器高はやや高い。平坦な天井部から胴部へは稜を有して、口縁部を下方に折り曲げ、断面三角形につくる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリ。胴部内外面と天井部内面中央に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好、堅緻<br>色調　灰色 | 口縁部⅕欠<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>玄室内覆土出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 73—201 | 口　径（15.0）<br>最大径（15.2） | 擬宝珠状ツマミを付して口縁部を下方に折り曲げるタイプで器高は深い。 | 天井部外面は回転ヘラケズリ。胴部内外面に顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好、堅緻<br>色調　暗灰色 | 口縁部⅕残<br>ロクロ回転方向不明<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 73—202 | 口　径　13.8<br>底　径　10.3<br>器　高　4.4 | 底部は丸底で、不明瞭であるが胴部との稜をもち断面長方形の高台を付すが、それは底部より高い。口縁部は内湾気味にひらく。 | 底部は回転ヘラケズリ。底部内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_2$ | 73—203 | 口　径（13.6　）<br>底　径　10.5<br>器　高　4.3 | 底部から胴部への境は明瞭な稜をもち、断面逆台形の高台を付す。口縁部は直線状にひらく。 | 内外面ともにロクロ目を残さない。 | 胎土　粗<br>焼成　不良<br>色調　淡灰色 | 口縁部、底部とも一部残<br>ロクロ回転方向不明、玄室内覆土出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>$A_2$ | 73—204 | 底　径　8.2 | 底部は平底で、断面長方形のしっかりした高台を付し、胴部は内湾しながら立ち上がる。 | 底部は回転糸切り後、底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリを施す。内面にロクロ目を顕著に残す。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 胴部½、底部残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>閉鎖前覆土出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>B | 73—205 | 胴部最大径 14.1 | 底部は丸底で、肩部を強く張るタイプである。 | 底部から胴部中央にかけて回転ヘラケズリ。内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 胴部½残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>玄室内覆土出土 |
| 須恵器 | 73—206 | 口　径（23.6　） | 頸部から「く」の字 | 胴部外面上方に叩き | 胎土　密（含、 | 口縁部½残 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 甕 | | | 状に外折して、大きく外にひらく口縁部は、その先端を肥厚させて口唇部をつくる。 | 目を有し、胴部内面はナデ整形。 | 砂粒、滑石粒、石英粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | ロクロ回転方向不明<br>閉鎖前覆土出土 |
| **38　号　横　穴** | | | | | | |
| 土師器<br>甕　B | 73—207 | 口　径（25.2） | 胴部から「く」の字状に外折する口縁部は、わずかに外反しながらひらく。 | 口縁部内外面はヨコナデ調整し、胴部の外面はナナメハケ（9本／cm）、内面ヨコハケ（8本／cm）となる。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　明橙色 | 口縁部¼残<br>玄室内出土 |
| **39　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 73—208 | 底　径（12.4） | 底部は厚い丸底で、断面長方形の高台をつけるが、その高さはほぼ等しい。 | 底部外面は回転ヘラケズリで、その内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　不良<br>色調　淡灰色 | 底部⅓残<br>ロクロ右回転<br>墓前域出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 73—209 | 底　径　12.0 | 底部は丸底で、断面長方形の高台よりもつよく突出し、高台の意味はなさない。 | 底部外面は回転ヘラケズリで、その内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、多量の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　灰色 | 底部½残<br>ロクロ左回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 73—210 | 口　径　16.5<br>底　径　12.9<br>器　高　4.8 | 底部は丸底で、断面長方形の高台を付すが、底部は高台より低く高台の意味はなさない。不明瞭であるが、胴部との稜をつくり、口縁部にかけて直線状にのびる大型品である。 | 底部外面は回転ヘラケズリ。胴部外面には顕著なロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　淡灰色 | 口縁部⅔欠<br>ロクロ左回転<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>瓶　B | 73—211 | 口　径　12.3 | 頸部からラッパ状に外反する口縁部は、その先端の上面を平坦にひき出している。 | 内外面ともに、ナデ仕上げが目立つ。 | 胎土　密（含、若干の小さな砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗灰色 | 口縁部残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>墓前域出土 |
| **40　号　横　穴** | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　B | 73—212 | 口　径　15.0<br>最大径　15.1 | 口縁部をわずかに横にひき出してから下方に折り曲げている。 | 天井部外面は回転ヘラケズリで、その内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　暗褐灰色 | ツマミ部欠<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>玄室内出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 73—213 | 口　径　15.7<br>最大径　15.9<br>器　高　3.1 | 扁平な擬宝珠状ツマミを付し、器高は低い。口縁部は下に折 | 天井部外面は回転ヘラケズリ。内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の微細砂粒） | ほぼ完形<br>ロクロ右回転<br>自然釉 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | り曲げている。 | | 焼成　良好<br>色調　暗褐灰色 | 焼きぶくれ有り<br>玄室内直出土 |
| 須恵器<br>蓋　B | 73—214 | 口　径（15.8）<br>最大径（16.0）<br>器　高　3.6 | 扁平な擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を一旦横にひき出してから下方に折り曲げる。器高は深いタイプとなる。 | 天井部外面は回転ヘラケズリ。胴部外面と天井部内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の微細砂粒）<br>焼成　良好<br>色調　暗褐灰色 | 口縁部欠<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>玄室内撹乱土層中出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 73—215 | 口　径（14.6）<br>底　径　10.1<br>器　高　3.8 | 底部は丸底で、断面長方形の高台を付すが、その高台は底部より高い位置を占める。胴部はゆるやかに内湾し、口縁部が外反する傾向をみせる。器高は深いタイプとなる。 | 底部外面は回転ヘラケズリ。胴部外面下半にロクロ目を残す。 | 胎土　密<br>焼成　良好、堅緻<br>色調　暗褐灰色 | 口縁部¾欠<br>ロクロ右回転<br>玄室内床直出土 |
| 須恵器<br>坏　$B_1$ | 73—216 | 底　径　10.0 | 底部は丸底で、断面長方形の高台よりも突出するタイプとなる。 | 底部外面は回転ヘラケズリ。 | 胎土　密<br>焼成　不良<br>色調　淡灰色 | 底部¾残<br>ロクロ右回転<br>玄室内直出土 |
| 土師器<br>坏　$A_2$ | 73—217 | 口　径　10.8<br>底　径（7.1）<br>器　高　5.1 | 底部は平底で、大きくひらいて高い断面長方形の高台を付し、口縁部は外上方にひらく。 | 内面はていねいなナデ整形。 | 胎土　密<br>焼成　良好<br>色調　橙色 | 底部½欠<br>ロクロ右回転<br>玄室内撹乱土層中出土 |
| 須恵器<br>長頸坩<br>B | 73—218 | 口　径　12.3 | 細長い頸部からゆるやかに口縁部がひらく。 | 頸部内面にしぼり目を残し、口縁部内面にロクロ目を残す。 | 胎土　密（含、若干の砂粒）<br>焼成　軟弱<br>色調　淡黄灰色 | 頸部残<br>ロクロ右回転<br>自然釉<br>玄室内撹乱土層中出土 |
| 表　　採 | | | | | | |
| 須恵器<br>蓋　B | 73—219 | 口　径（16.6 ）<br>最大径（16.8 ）<br>器　高（ 4.6 ） | 扁平で大型の擬宝珠状ツマミを付し、口縁部を下方に折り曲げるタイプで　器高は深い。 | 天井部外面は回転ヘラケズリ。胴部内面にロクロ目を残す。 | 胎土　粗<br>焼成　不良<br>色調　淡灰色 | 天井部⅓、口縁部1部残<br>ロクロ右回転 |

## 第2節　鉄　　器

量は比較的すくなく、11の横穴から45点以上が検出されている(第8表)。内訳は、釘が最も多く27本以上、鏃5、直刀2、刀子3、足金具1、鐔1を数える。

釘

1号・15号・17号・32号・34号・35号・36号・39号の各横穴より出土している。形態は打曲頭形のものがほとんどで、その他の形式のものは方頭形が2例、傘頭形のものが1例みられるだけである。長さは全長を推定できる8例より計算すると平均9.0㎝である。

断面を観察するとうず巻き状にサビが認められるものもあり、合わせ鍛造ではなく、巻きながら鍛造されたものであることを知ることができる。

34号横穴からは17本以上と最も多く、木製の棺の存在を暗示させる。特に34号においては石櫃も出土しており、それは撹乱をうけて、釘の出土した黒色土層上にのるかたちで上層の褐色土中で検出されている。

鏃

1号・23－2号・34号・36号・37号の各横穴よりそれぞれ1点ずつ検出されている。

1・7は先端部分を欠失しているため明確にはしがたいが、いわゆる広根斧箭式であり側面の観察等からすると11のように方頭を呈するものと考えられる。20は圭頭斧箭式に属するもので基部を欠失してはいるが先端部の造りは非常にしっかりしている。21はいわゆる飛燕形式のもので、後藤守一氏の分類によれば両丸腸抉三角形式にあたる。

刀子

7号・23－2号・25－1号より各1点ずつ出土しているが、いずれも破片で全様を知り得るものはない。10は切先の部分をわずかに欠失しているが刃部の長さ8.2㎝と推定することができる。9は茎が5.7㎝と比較的長いもので、かなり長いものを考えることができる。

直刀

39号横穴玄室内より2口検出されている。22は先端部と基部があり中央部分を欠いているがほぼ全様を知ることができる。全長40㎝以上、身巾2.6㎝、棟巾0.4㎝を測る。目釘穴は1と思われる。23も身巾2.6㎝、棟巾0.6㎝を測り、22とほぼ同程度の大きさのものと考えられる。両者とも全長40～50㎝を想定でき比較的小振りである。

刀装具

23－2号横穴からは足金具が、34号横穴からは喰出鐔と思われるものが検出されている。

10は足金具と考えられるもので、接合しない破片からの推定実測であるので若干の誤差はあるが、全長5.0㎝で鞘(さや)の通る部分は長径4.0㎝、短径2.0㎝の楕円形である。

12はサビが著るしいが喰出鐔と考えられる。長径4.9㎝、短径3.2㎝、厚さ0.4㎝の楕円形で、中央に長径3.1㎝、短径1.3㎝の楕円形の穴があく。楕円ではあるが一方が巾広く隅丸の様相を呈し、一方は巾が狭く丸味を帯びており、上下を認定でき鐔と考えてよいと思われる。

## 第8表　鉄器一覧

| 出土地点 | 種別 | 図版番号 | 形態 | 計測値 cm ( )は現存の値 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1号横穴　墓前域 | 鏃 | 1 | 広根斧箭式 | 長(7.6) | 先端部欠 |
| 〃　〃 | 釘 | 2 | 方頭形 | 長(9.5) | |
| 15号横穴　玄室 | 釘 | 3 | | 長(6.3) | 頭部欠 |
| 〃　〃 | 釘 | 4 | | 長(3.1) | 頭部欠 |
| 17号横穴　封鎖石中 | 釘 | 5 | 傘頭形 | 長(2.2) | 頭部のみ |
| 〃　玄室内覆上 | 刀子 | 6 | | 長(6.0) | 先端部・茎欠 |
| 〃　〃 | 鉄片 | | | | 刀子又は直刀破片？ |
| 〃　墓前域 | 〃 | | | | 〃 |
| 23－2号横穴　墓前域 | 鏃 | 7 | 広根斧箭式 | 長(7.5) | 先端部欠 |
| 〃　玄室 | 足金具 | 8 | | | |
| 〃 | 刀子 | 9 | | 長(11.5) 巾1.1 | 先端部欠 |
| 25－1号横穴　墓前域 | 刀子 | 10 | | 長(9.3) 巾1.2 | 先端部、茎欠、2版片 |
| 〃　〃 | 鉄片 | | | | 釘？ |
| 32号横穴 | 釘 | | 打曲頭形 | 復元長9.2 | 3破片に分かれる、先端部曲る |
| 〃 | 釘 | | 〃 | 長(2.0) | |
| 〃 | 釘 | | 〃 | 長(3.6) | |
| 34号横穴　封鎖部 | 鏃 | 11 | 方頭広根斧箭式 | 長(9.2) 巾8.5 | ほぼ完形 |
| 〃　墓前域 | 鐔 | 12 | 喰出鐔 | 4.9×3.2　厚0.4 | |
| 〃　〃 | 釘 | 13 | 方頭形 | 長9.0 | 先端折れ曲る |
| 〃　〃 | 〃 | 14 | | 長(7.9) | 頭部欠、先端折れ曲る |
| 〃　封鎖石中 | 〃 | 15 | | 長(9.6) | 先端部欠 |
| 〃　〃 | 〃 | 16 | 打曲頭形 | 長8.9 | |
| 〃　〃 | 〃 | 17 | 打曲頭形 | 長8.4 | |
| 〃　〃 | 〃 | 18 | | 長8.0 | |
| 〃　墓前域 | 釘 | 19 | 打曲頭形 | 長7.9 | |
| 〃　〃 | 〃 | | 打曲頭形 | 長(4.8＋2.0) | 黒色土中　No.11 |
| 〃　〃 | 〃 | | | 長(1.3) | 先端部付近破片　No.22 |
| 〃　〃 | 〃 | | | 長(2.8) | 〃　No.8 |
| 〃　〃 | 〃 | | 打曲頭形 | 長(11.7) 推定長12.0 | 先端部わずかに欠 |
| 〃　封鎖部 | 〃 | | 打曲頭形 | 長(4.1) | 先端部欠 |
| 〃　〃 | 〃 | | | 長(5.8) | 頭部欠 |
| 〃　〃 | 〃 | | | 長(9.1) | 〃 |
| 〃　〃 | 〃 | | 打曲頭形 | 長(2.0) | |
| 〃　〃 | 〃 | | 〃 | 長(2.4) | |
| 〃　〃 | 〃 | | 〃 | 長(4.0) | |
| 35号横穴 | 〃 | | | | 先端部破片　No.6 |
| 36号横穴 | 鏃 | 20 | | 長(8.0) 最大巾3.2 | 基欠 |
| 〃　玄室内覆土 | 釘 | | | | 黒色土中　No.5 |
| 37号横穴　玄室 | 鏃 | 21 | 飛燕形式 | 長(9.5) 推定長10.0 最大巾4.0 | |
| 〃　〃 | 鉄片 | | | | 新しいものの可能性あり |
| 39号横穴　玄室 | 直刀 | 22 | | 推定長41.0　棟巾0.4 身巾2.6 | 茎・身一部欠 |
| 〃　〃 | 〃 | 23 | | 身巾2.6　棟巾0.6 | 鋒欠 |
| 〃 | 釘 | | | 長(8.0) | 頭部欠 |
| 〃 | 〃 | | | 長(5.2) | 頭部欠 |

## 第3節　石　　櫃

本調査によって発見した石櫃は、23例となった。

すでに述べたように、それはⅠ次調査において8例、Ⅱ次調査において2例、Ⅲ次調査において13例となるが、その呼称には、〝Ⅰ－1号石櫃〟のようにして、整理段階でもこれを踏襲している。また、その呼称は、出土状況に応じて番号を付しているので、なかには、Ⅲ－5号石櫃のように、〔身・蓋〕がセットで数えられている例もある。よって、石櫃個体数をあげると、身20、蓋4の計24で、身のなかには栓を有するもの6例がある。

### Ⅰ－1号石櫃

8号横穴　玄室内出土

小型方孔多角形　　〔身・栓〕

高さ27.8㎝の小品で、かなり細く割れた状況を接合により復元したが、左側面から屋根にかけてと背面とに大きな欠失部が残っている。

底面は荒れているとはいえ、ノミ痕もみられてよく平坦化されている。他の各部は全体に丸味のつよい稜線をみせているが、なかでも右側面は大きく胴を張る。方孔部を有する正面はかなり垂直を保つ形状となる。天井部は、現況で略三角形を呈する平坦面が横長の頂部平坦面をつくり、そこから前後両方向に強い傾斜をもつ屋根下半部がみられる。さらに、その天井部から正・側面への連結はかなりスムースで、明確な境目をもたない。あるいは厨子形の変形とみることも可能かも知れないタイプである。

刳り込み部は7.0×7.5㎝の径で、わずかに横長となり、隅丸長方形にちかい。栓は明瞭なノミ痕をその胴部に観察できるが、その上端ではいっそう丸味をつよめる。

全体に肌荒れしていて、ノミ痕の詳細な比較検討には無理があるが、正面および屋根・側面の一部を観察すると、正面がよりていねいに整形されていることがわかる。

栓は、縦6.9×横7.7×高さ6.6㎝の直方体となる。ノミ痕もていねいに施されているが、上端より下端部がわずかに細くなる形状を呈する。着装時における刳り込み部の空隙は、わずか4㎝前後にしかすぎない状況となる。

### Ⅰ－2号石櫃

9号横穴　西外出土

小型方孔箱形　　〔身〕

高さ20.0㎝前後の偏平な箱形で、上面中央部に縦11.4×横14.2㎝の長方形で、しかも深さ12.8㎝と比較的深い刳込み部を有する。全体の形状からいえば、上面が大きく波状を呈していて、方孔部付近でもっとも厚く20㎝前後、背面よりでは7.0～8.0㎝ほどと薄くなる傾向がみられる。

その波状をなす上面を含めて、底面をのぞく各面に、細いノミ痕がよく残っている。比較的ていねいに整形した例といえる。底面のノミ痕としては、大きな平ノミによる剥離痕をいくつか確認し得るが、全体としては磨耗が激しすぎるようである。

### Ⅰ－3号石櫃

10号横穴　墓前域下出土（あるいは12－1号出土の可能性もあり）

小型方孔厨子形　　〔身〕

上半部を欠失した厨子形と認定した。かなり大型で、平面形は 34.6 × 41.3 ㎝を測る。

ノミ痕は、欠失面である上面にはみられないが、底面を含むすべての面が細いいわゆるウロコ状のていねいなノミ痕でつくられる。本来、きわめて入念な整形がなされたものであろうと思われる。

刳り込みは、その下半を残すが、巾 20.2 ㎝、深さ 23.8 ㎝で、正面からの細いノミ痕によって整形されたことが確実である。厨子形と認定し得た所以でもある。

**Ⅰ－4 号石櫃**

12 － 1 号横穴　墓前域出土

小型方孔箱形　　〔身〕

全体に剥落が多く、右奥より部の正面の大部が欠失をまぬがれているらしく、薄形の本体の上面に横長の方孔部を窄った形状と判断された。側面観では、正面がもっとも厚く、奥よりがやゝ薄くつくられている。

本例では、正面を底面とする厨子形と解し得る可能性も検討してみたが、この場合、刳り込み部が下むきの状況となって無理であろうと判断できた。また、刳り込み部は縦 7.3 × 横 8.0 ㎝で深さ 8.0 ㎝を測った。

ノミ痕は、各面ともに剥落、磨耗がめだつため観察しにくい。それでも、底部および右上半部の傾斜面は、明らかに人為的な結果と扱ってよいであろうし、正面は剥落がめだつとはいえ、背面はやゝ粗雑につくられた状況と認めてよさそうである。

なお、本例には出土時に蓋らしきものが伴っており、確かにノミ痕の観察し得る面もあったが、確定は避けた。一応、図示しておいた。

**Ⅰ－5 号石櫃**

14 号横穴　玄室出土

家形　　〔蓋〕

刳込み部をもたない家形を呈する、きわめて特異な石櫃である。底面右半部と上面右端にめだつ程度の剥落があるが、全体的には保存良好である。

頂部には 2 本の明瞭な稜線を有して、その中央部を平坦に、その左右を破風の傾斜面としている。短径側を妻入部として、その一方を正面とするが、高さ 18 ㎝前後を測り、背面はそれより約 1 ㎝ほど高くつくっている。前よりが低くなる屋根の傾斜を配慮したものといえよう。

ノミ痕は、上部が風化により不明瞭であるが、背面をのぞく各面は細い〝ウロコ状〟ノミ痕でていねいに整形し、背面のみ荒く大きな〝ウロコ状〟ノミ痕となる。正・背面を識別した所以である。

**Ⅰ－6 号石櫃**

17 － 1 号横穴　玄室出土

小型方孔家形　　〔身・栓〕

上面は縦44.0 × 横42.1 ㎝を測って、かなり正方形にちかいが、長径方向に明瞭な稜 2 本を設けて家形につくる。正面観および横断面形は六角形で、その中央部に、ほぼ正方形といえる刳込み部を設ける。すなわち切妻型の妻入部に方孔部を窄った状況となる。また、六角形とする横断面形においては、その底部側を頂部側より巾広くつくって、その安定を求めている。

ノミ痕は、上半部にあたる屋根側 3 面と正面とに比較的よく残っているが、胴・底部をつくる 3 面と背面は磨耗・風化によりほとんど識別できない。もちろん保存状況とも深くかかわるものであるが、正

面・屋根部が比較的ていねいに整形されたことは確実といえよう。

栓は各稜に欠失がめだち、必ずしも保存良好ではない。

**Ⅰ－7号石櫃**

17号横穴　玄室内出土

大型方孔箱形　　〔身〕

やや横長の平面形で、縦39.2×横48.3㎝を測り、高さは28.0㎝の箱形につくる石櫃である。上面にはやはり長方形を呈する刳り込み部があり、若干の欠失があるが、蓋受け部が残存する。これも内部が長方形となるために、前後と左右ではその厚さがやや異る。また、本体を水平面に据くと、正面が背面より約4㎝前後高くなる。傾斜面に安置するための構造とみてよかろう。

岩質もろく、表面の風化激しいため、ノミ痕等の詳細な観察は不可能であるが、それでも各面はかなりていねいに削り出された状況とみえる。ただ背面の一部には、自然面かと思われる部分も残っている。

なお、本例はⅠ－8号石櫃（蓋）とセットになるものである。

**Ⅰ－8号石櫃**

17号横穴　玄室出土

大型方孔箱形　　〔蓋〕

縦44.3×横47.1㎝を測る箱形石櫃の蓋で、やや横長につくられている。形状・石質等からして、Ⅰ－7号石櫃と蓋身セットになるものである。外観の形状は、直方体の上端4辺を隅どりして、巾狭の傾斜面を付して、上部（屋根部）と4側面を平坦に仕上げている。

下面は方孔部となるが、縦28.2×横34.3㎝で横長を呈する。深さ6.0㎝と浅くつくられる刳り込みで、そのため屋根部はやや厚手の形状となる。

正面の直立する壁面は高さ15.0㎝前後で、背面のそれより約1㎝前後高くつくられている。こうした構造が、Ⅰ－7号石櫃で述べた正・背面の相違とも共通する特徴といえる。

石質軟かく、風化激しいため、各面ともノミ痕は明瞭とはいえない。が、各面が明瞭な稜をもつ平坦面としてかなりていねいに整形されていることは確実であろう。なかでも、左側面には、いわゆる〝ウロコ状〟ノミ痕らしき痕跡が残るが、それも図化し得るほどではない。

**Ⅱ－1号石櫃**

24号横穴　玄室内出土

大型方孔箱形　　〔身〕

縦52.1×横50.6㎝の正方形で、高さ37.4㎝を測る大型品につくる。正面から左側面にかけての下半部と、蓋受け部の左半部に若干の欠失がみられるが、保存状況は良好である。

形状から観察すると、正・背・左右側面とも下ぶくれしてその底部がやや広がった傾向がみられるが、正面ではそうした状況は若干弱まってより垂直にちかいものとなっている。

正面中央部には、「若舎人」銘が認められるが、それは縦20.0㎝・横14.0㎝前後の規模をもち、断面V字状を基本とする薬研掘りで深く鮮明であった。書体はやや横長につくる特徴が認められたが、またその周辺はとくに丁寧な平坦化が工夫された状況とみられた。

刳り込み部は上面で、縦24.8㎝、横23.4㎝の長方形で、深さ19.0㎝を測った。確実に縦長といえる平面プランが注目されたが、こうした傾向は他の大型方孔箱形石櫃にほぼ共通するものといえる。一部欠失がみられるが、刳り込み部の周縁部には、高さ約5㎝・巾6.5㎝前後を測る蓋受けが縁となって残存

する。全体に刳り込み部の整形は丁寧で、正確な直方体に仕上げている。

ノミ痕は、各面とも明瞭で、いわゆるウロコ状ノミ痕が観察できる。正面がとくに丁寧に平坦化された状況にあることはすでに述べたが、両側面におけるノミ痕は巾狭の細いものとなって、多くは4.5×2.5㎝前後の痕跡を残し、それに比すると背面は明らかに巾広で、大略2.0×5.0㎝ほどのやや大きく粗雑に施す相違が目立った。

**Ⅱ－2号石櫃**

26号横穴　墓前域左袖部出土

小型方孔箱形　　〔身〕

高さ32.0、平面形は縦33.1×横42.5㎝の長方形につくる大型品で、岩質の軟弱に加えて、墓前域に安置されていたことから風化激しく、方孔部に蓋受けの縁を設けた形状が確認できるのみで、欠失部も多く、各計測値等は正確を期しがたい。

刳り込み部は、縦14.0×横11.8㎝ほどの長方形で、しかも、それは石櫃本体の短辺方向に長辺をもうける設計が認め得る。その深さは、現状で5㎝前後を測るが、もちろん原形とは若干の誤差をもつかも知れない。

ノミ痕は一切観察し得ない。

**Ⅲ－1号石櫃**

27号横穴　墓前域付近表採

小型方孔厨子形　　〔身〕

高さ46.3㎝を測って、縦19.4×横24.2㎝ほどの角柱状の本体に、軒部が突出する形状を呈する。底部の大部と天井の一部に剥落がみえるが、原形復元には十分な状況といえる。正面を側面よりやや巾広くして、その上端にちかく方孔部を設け、そのわずか上部には現況で高さ3㎝前後、厚さ3.5㎝前後の軒部を付する。

刳り込み部は、10.0×10.4㎝のほぼ正方形で、深さ8.9㎝を測る。その奥端部をやや低くして、外上方にむかう形況に窄っている。

ノミ痕は、正面が良好で、両側・背面にもみられるが、いずれもいわゆるウロコ状で、丁寧に造作されたと認めうる例であろう。

**Ⅲ－2号石櫃**

27号横穴　玄室内出土

小型方孔厨子形　　〔身・栓〕

縦34.5×横39.0㎝の長方形の平面形で高さ49.2㎝を測る大型品となる、 典型的な厨子形でよく原形を保っているといえる。強いていえば、右妻部の稜は剥落とみるべきであろうし、右側壁下端および正面右半の軒部にも若干の剥落が認められる。

形態としては、屋根は切妻型とするがその頂部を平坦にして左右を妻入部とし、正面には軒をつけて突出させるが背面は垂直につくる。なかでも、正面および両側面はとくにていねいに平坦化されて、背面にのみやや凹凸がめだっている。ノミ痕も、屋根および正面に若干の風化がみられるが、全体的に保存良好で、とくに正面にみられるそれは両側面に比すると約2分の1ほどの小痕となっている。

方孔部は、縦12.0×横11.4㎝の小型で、その前よりはかなりていねいに整形され、とくに前端部数㎝ほどには明らかな磨耗痕があって栓の着装痕と観察された。ただし、その奥よりはかなり粗雑な堀穿で、

大きな袋状となって奥壁では凹凸がめだった。

底面は側壁等よりやや粗雑となるが、全面にやや大きなノミ痕を残して整形している。

栓は縦 14.0 × 横 12.5 × 高さ 7.7 ㎝の直方体で奥よりをやや小さめにつくるが、それは前端部から約 3.5 ㎝前後で稜をもって平坦面から傾斜面に変化する状況であった。ノミ痕はきわめてていねいにつくる。なお、栓着装時における、刳り込み部内部は、奥行き 11.0 ㎝ほどとなる。

**Ⅲ－3 号石櫃**

27 号横穴　開口部出土

小型方孔箱形　　〔身〕

岩質軟弱のため、すでに発見時に大きな破砕がめだった。全体の風化と磨耗が激しく、残存部と欠失部との識別も困難であると観察されたので、出土状況図を 2 分の 1 縮尺で作成してみた。採収後の接合も不可能であったので、ここでの数値は出土状況図によるものである。

平面形は 37.0 × 29.5 ㎝前後の範囲で、高さは十数㎝を測る。刳り込み部は上面で、小型方孔を窄ち、その規模は 12.3 × 15.0 ㎝ほどとなるが、うち、確実なのは前者で後者はその中間に大きな破砕部分を含むため一応の参考値として扱いたい。深さはほぼ 10.0 ㎝前後となり、よって石櫃の底部はきわめて薄いものであった可能性がある。

こうした状況から、本例を小型方孔で箱形タイプと分類してみたが、若干の不安定要素を含むものであることはもちろんである。

**Ⅲ－4 号石櫃**

27 号横穴　玄室出土

小型方孔箱形　　〔身・栓〕

縦 54.1 × 横 60.0 ㎝のやや不整な長方形プランで、高さ 43.4 ㎝ほどの大型品である。箱形と認定してみたが、その上面および正・背面・右側面はよく平坦化されている。左側面の後半部が剥落して欠失し、そのためか左側面はかなり現状にちかくみえる。よって、ここを頂部とする厨子形の可能性も検討できないことはなく、たしかに右側面より左側面がかなり短くつくられていることからそうした可能性も想定し得るが、左側面（すなわち厨子形頂部）にノミ痕が観察されず、そのうえ右側面を底面とすると正面となる刳り込み部が前よりを低くした前さがりとなる状況であることから、箱形と扱ってみた。また、正面を底面とした場合にも、小孔部はやや歪んだ状況となる。

刳り込み部は比較的ていねいにつくられ、とくに前端部の数㎝を大きく削りとった形状を呈する。

ノミ痕は全体に粗雑で、いわゆるウロコ状による仕上げ調整の一段階前の工程で終っているかのようであった。

栓は、上面を縦 17.0 × 横 16.3 ㎝、厚さ 8.5 ㎝につくる。とくにていねいに整形されているが、着装による磨耗のため、その奥半部に段を付した形状を呈する。なお、着装時における方孔部空間は約 14.0 ㎝ほどとなる。

**Ⅲ－5 号石櫃**

29 号横穴　玄室内出土

大型方孔箱形　　〔身・蓋〕

1 辺が約 55.0 ㎝ほどの正方形を呈する平面プランで、高さは身蓋ともに約 60.0 ㎝の箱形につくる大型品である。身蓋セットがほぼ原形を保っての発見はめずらしく、本調査中でも唯一の例であった。

身は、縦 56.0 ×横 54.4 ㎝のほぼ正方形を呈するが、詳細に観るとわずかに縦長となるプランを有し、高さは 39.4 ㎝を測る。その形状は、正・背・両側面とも、やや下ぶくれして底部がやや広がった傾向をみせるが、うち正面はそうした状況がもっとも弱まってより垂直にちかく、そのうえ高さも他の各面より高いものとなっている。

刳り込み部は上面にあたって、縦 22.4 ×横 22.2 ㎝ のわずかに縦長なプランで、深さは 16.0 ㎝ の方孔部をつくる。この周縁部には、厚さ 7.0 ～ 7.5 ㎝、高さ 5.4 ㎝ほどの蓋受けが縁をつくっていた。

整形は全体にていねいで、ノミ痕の保存状況も良好である。各面ともよく平坦化されているが、詳細にみると、正面のノミ痕はより細かく、背面のそれはより粗雑となる。さきの面の垂直性と高さに関連して、正面を比定し得る所以である。

蓋は、縦 52.3 ×横 51.7 ㎝、高さ 27.3 ㎝で、やはりわずかに縦長のプランとなる。全体的な形状は、直方体の上面 4 辺を隅切りしたもので、天井部は大きく平坦で、巾 7.0㎝前後の隅切り面をつける。全体に保存良好であるが、左側面の上部にわずかな欠失がみられ、正・上面は風化によりノミ痕等を消している。

上面観からすると、正面はより平坦化が強まって、背面がもっとも膨んだ形況となる。身と同様な傾向が蓋にも認め得るかも知れない。

下面には刳り込み部があって、縦 36.7 ×横 36.4 ㎝、深さ 10.2㎝で、きわめてていねいな刳り込みをみせる。とくに、本刳り込み部では、ノミ痕の残存が良好である。

### Ⅲ－6 号石櫃

29 号横穴　玄室内出土

大型方孔箱形　　〔身〕

縦 44.1 ×横 42.9 ㎝の長方形プランで、高さは 23.6 ㎝を測る。箱形にしては比較的高さを低くつくり、背面の下端部にわずかな剥落がみられる他、全体に保存良好である。その形状は、正面側を高くして背面側を低くする傾向が顕著で、正面の高さ 23.6 ㎝を測るのに、背面では約十数㎝ほどの高さしかもたない。それでも肩部を水平にみると、正・背面ともほとんど直角にちかく、底面のみが背面よりで高くなる構造とみなし得る。

刳り込み部は、縦 20.4 ×横 17.9 ㎝、高さ 11.2 ㎝で、その周縁部に厚さ 4 ～ 5 ㎝、高さ 3 ～ 4 ㎝の縁部を設ける。その平面プランはかなり縦長な長方形で、内部でやや胴張りの袋状となる。

ノミ痕は、各面ともやや荒いが一応識別可能といえる。なかでは、背面のそれがもっとも粗雑で目立つものであった。

### Ⅲ－7 号石櫃

29 号横穴　玄室内出土

大型方孔箱形　　〔蓋〕

縦 49.6 ×横 43.0 ㎝、高さ 27.6 ㎝の直方体をつくる。形状の特徴としては、上面の 4 辺を隅切りして巾のせまい傾斜面を削り出しているが、やや磨耗の激しい部分もあって、一見カマボコ状にみえる。

正・背両側面は、かなり垂直に削り出されている。とくに正面とした面のノミ痕が細かいようにみえるが、風化激しく比較検討は困難である。

刳り込み部は、縦 29.8 ×横 29.7 ㎝の正方形プランとなり、よって、正・背面側と、側面側では厚さがちがうことになる。深さは 9.6 ㎝で、 きわめて浅くつくる特徴が認められる。そのため、天井部の肉厚はきわめて厚くなっている。

**Ⅲ－8号石櫃**

30号横穴　玄室内出土

小型円孔家形　　〔身・栓〕

縦49.0㎝×横42.0㎝の長方形プランで、高さ33.5㎝の屋根形につくる大型品である。ごく一部に剥落等もみられるが、全体に保存良好である。

形状は、頂部を平坦にした切妻形屋根の妻入部を正面として円孔を穿ったタイプである。正面は高さ約33㎝で、背面は高さ約26㎝となって、正面がかなり高くなる。よって、これを横穴床面に据えると、正面はやや後に傾斜をもつが、背面はほぼ垂直にちかいものとなり、屋根は全体として後に傾むく状況を呈する。なお、正面はやや荒れて凹凸をもっているが、それは風化によるためとみるべきものであろう。

刳り込み部は、小円形で、径12.0×11.2㎝、深さ20.0㎝となる。奥端を約18㎝ほどの最大径につくる袋状で、奥よりはかなり低くなる形状を呈する。

観察できるノミ痕は、屋根部が極めて細かいウロコ状で、両側面はやや粗雑となり、底面もほぼ同様で、ともによく平坦化されている。背面は荒れていてノミ痕不明瞭なるが、平坦化はよくなされたものらしい。

栓は、ていねいにつくられた円形で径11.4㎝、高さ9㎝となるが、それは奥よりにむかって徐々に細くなる形状を呈する。上面の一部は剥落しているが、全体の保存良好で、ノミ痕は前端から奥方向へと走っている。なお、栓着装時における、小孔部の空隙は、奥行約17㎝ほどとなる。

**Ⅲ－9号石櫃**

30号横穴　玄室内出土

小型円孔家形　　〔身・栓〕

縦41.1×横43.3㎝の長方形プランで、高さは29.2㎝を測るやや小型の家形で、各面ともていねいに仕上げられている。

形状は、寄せ棟式屋根の頂部を平坦に変化させたもので、その降棟にあたる傾斜部分では、とくに長辺よりに荒いノミ痕が並列されていて、側面との境を意識したようにみえる。それでも全体的に観察すると、各面は丸味をもって胴張りとなる傾向で、いわゆるカマボコ形の断面を呈する。また、側面観は、正面の高さ約24.0㎝、背面の高さ約13㎝ほどで、屋根そのものが大きく背面に傾斜する状況となる。

刳り込み部は、径10.0×10.2㎝の小型円孔で、深さ16.0㎝を測る。比較的円筒状で、わずかに奥が広がる程度である。また、前端数㎝ほどには磨耗痕が明瞭であった。

ノミ痕は、底部のみ風化磨耗により不明瞭となるが、他の各面はよく残っている。基本的には各面とも上方から下方向へとノミを動かしているらしい。

栓は、上面がやや歪んだ円形となって、全体的にきれいに整形されている。奥面をのぞく各面ともノミ痕をよく残している。栓着装時の空隙は約8.0㎝ほどとなる。

**Ⅲ－10号石櫃**

34号横穴　開口部出土

小型円孔厨子形　　〔身〕

縦41.8×横42.1㎝の横長の長方形で、高さ60.0㎝を測る大型品につくる。天井部右端・背面から底部にかけて大きな欠失を有する。

形状は、本来四角形の立柱状のものに小円孔と屋根を付した比較的簡略なものといえる。屋根は切妻

式でその頂部を平坦につくり、軒側を正面とするタイプである。

刳り込み部は径 12.8 × 13.0 ㎝の円形で、筒状の奥側をかなりていねいに穿つ。その前端部には磨耗痕が明瞭に観察される。

ノミ痕は各面とも明瞭であり、屋根および正面は細くていねいなノミ痕を残すが、両側面はやや粗雑に整形される。とくに、底面には大型な平ノミ使用による剥離痕が数点認められて、それを消す仕上げ調整は施されていない。こうした状況が、底面を他の面から区画して比定し得た所以である。

**Ⅲ－11号石櫃**

36 号横穴　開口部出土

小型方孔箱形　　〔身〕

縦 31.5 × 横 32.5 ㎝の長方形プランで、高さ 23.0 ㎝を測る小型品で、大きく 2 分割されており、そのために蓋受けや底部の一部に欠失があるが、一応復元接合できた。

全体にかなりていねいにつくられているが、とくに正面は比較的垂直にちかく整形もよく平坦化した状況であるが、他の各面は下ぶくれの形状で整形もやや粗雑となる。正面を比定した所以である。

刳り込み部は縦 13.4 × 横 12.6 ㎝の長方形で、深さ 10.0 ㎝を測る。本体に比してかなり大きい方孔部というべきで、その周縁の外側には数㎝前後の平坦面しかもたない。縁部となる蓋受けは、高さ3.5～4.0 ㎝前後で、厚さは正背面よりでは 3.0 ～ 4.0 ㎝、側面よりでは 5.5 ～ 6 ㎝前後で比較的しっかりつくられている。

ノミ痕は風化・磨耗によりほとんど確認できないが、本来はかなりていねいにつくられたものと観察し得る。

**Ⅲ－12号石櫃**

37 ～ 39 号横穴　付近表採

小型方孔変形家形　　〔身〕

縦 36.0 ㎝ × 横 43.0 ㎝の長方形にちかい平面プランで、高さ 25.2 ㎝を測る。左側正面を大きく欠失して、それは全体の約 3 分の 1 ほどにもおよぶ。

形状は、上面の背面縁部にみられる傾斜面を基準に、左右側面および正面にもそれを認め得るとすれば、本例は一種の寄せ棟式の頂部を平坦にした変形とみなすことが可能になる。

方孔部は奥よりがやや低くなる状況で、奥端がやや広がるが、それほど目立つものではない。また、この部分のノミ痕はきわめて良好であった。

ノミ痕は、左側面の残存部、上面、背面等にいわゆるウロコ状痕が比較的良好に観察される。右側面は前半部が人為面であることは確実らしいが、磨耗激しく、あるいは剥落を認め得るかも知れない。

**Ⅲ－13号石櫃**

18 － 2 号横穴　玄室内出土

小型方孔多角形　　〔身〕

平面プランは縦 34.0 × 横 41.5 ㎝ほどの隅丸長方形で、高さ 43.4 ㎝を測る。自然面をかなり残してそれを石櫃の稜に利用した状況で、背面をのぞく各面はそれぞれ平坦面を削り出しているが、背面のみつよい胴張りとする。平坦面のなかでは正面がもっとも広いことになって、その中央部に刳り込み部が設けられている。また、上面は前にむかって若干低くつくる傾向を示すが、あるいは厨子形の変形とみてもよいかも知れない。

刳り込み部は、縦 13.1×横 10.5×深さ 16.4 ㎝の横広プランで、全体的には直方体にちかい。

ノミ痕は比較的荒いが、ウロコ状痕によって各面をダイナミックに削り出している。なかでも、正面はよりていねいに平坦化をこころみてるようである。

## 第 9 表　石櫃一覧（付　割山横穴群石櫃）

| 項目／石櫃 | 横穴 | 位置 | 名称 | 種別 | 石質 | 規模 | | | 刳込み部 | | | | | 保存状況 | 人骨 | 出土状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 縦 | 横 | 高さ | 位置 | 形状 | 縦 | 横 | 深さ | | | | |
| Ⅰ－1 | 8 | 玄室 | 小型方孔多角形 | 身、栓 | 凝灰岩 | 20.9cm | 24.3cm | 27.8cm | 正面 | 長方形 | 7.0cm | 7.5cm | 9.2cm | 未開口 | | 横位、床面 | 接合により復元 |
| Ⅰ－2 | 9 | 西外 | 小型方孔箱形 | 身 | 凝灰岩 | 43.6 | 40.0 | 21.2 | 上面 | 長方形 | 10.8 | 13.6 | 12.8 | 開口 | | 逆位、覆土 | |
| Ⅰ－3 | 10（12－1可能性） | 墓前域下 | 小型方孔厨子形 | 身 | 凝灰岩 | 34.6 | 41.3 | (41.5) | 正面 | 方形 | — | 20.2 | 23.8 | 開口 | | 横位、覆土 | 上半部欠失 |
| Ⅰ－4 | 12－1 | 墓前域 | 小型方孔箱形 | 身 | 凝灰岩 | 23.5 | 36.4 | 15.3 | 上面 | 長方形 | 7.0 | 8.0 | 8.0 | 開口 | | 逆位、床面 | 蓋を伴うか |
| Ⅰ－5 | 14 | 玄室 | 家形 | 蓋 | 凝灰岩 | 31.8 | 46.0 | 29.8 | | | | | | —— | | —— 床面 | |
| Ⅰ－6 | 17 | 玄室 | 小型方孔家形 | 身、栓 | 凝灰岩 | 44.0 | 42.1 | 32.6 | 正面 | 方形 | 13.5 | 14.0 | 19.0 | 開口 | | 正位、床面 | |
| Ⅰ－7 | 17 | 玄室 | 大型方孔箱形 | 身 | 凝灰岩 | 39.2 | 48.3 | 28.0 | 上面 | 長方形 | 18.0 | 22.0 | 13.5 | 開口 | 骨粉 | 正位、床面 | ＞蓋身セット |
| Ⅰ－8 | 17 | 玄室 | 大型方孔箱形 | 蓋 | 凝灰岩 | 44.3 | 47.1 | 23.4 | 下面 | 長方形 | 28.2 | 34.3 | 6.0 | 開口 | | 逆位、覆土 | |
| Ⅱ－1 | 24 | 玄室 | 大型方孔箱形 | 身 | 凝灰岩 | 52.1 | 50.6 | 37.4 | 上面 | 長方形 | 24.8 | 23.4 | 19.0 | 開口 | 骨粉 | 正位、床面 | |
| Ⅱ－2 | 26 | 墓前域左袖 | 小型方孔箱形 | 身 | 凝灰岩 | 33.1 | 42.5 | 32.0 | 上面 | 長方形 | 14.0 | 11.8 | (5.0) | 開口 | | 正位、床面 | |
| Ⅲ－1 | 27付近 | | 小型方孔厨子形 | 身 | 凝灰岩 | 19.4 | 24.2 | 46.3 | 正面 | 方形 | 10.0 | 10.4 | 8.9 | 開口 | | 表採 | |
| Ⅲ－2 | 27 | 玄室 | 小型方孔厨子形 | 身、蓋 | 凝灰岩 | 34.5 | 39.0 | 49.2 | 正面 | 方形（袋状） | 12.0 | 11.4 | 16.8 | 開口 | | 正位、床面 | |
| Ⅲ－3 | 27 | 開口部 | 小型方孔箱形 | 身 | 凝灰岩 | (39.0) | 26.3 | (16.6) | 上面 | （方形） | | (10.9) | (11.0) | 開口 | | 正位、覆土 | 実測不可能に付概要 |
| Ⅲ－4 | 27 | 玄室 | 小型方孔箱形 | 身、蓋 | 凝灰岩 | 54.1 | 60.0 | 43.4 | 上面 | 長方形 | 15.4 | 16.4 | 19.8 | 未開口 | 多量 | 逆位、覆土 | |
| Ⅲ－5 | 29 | 玄室 | 大型方孔箱形 | 蓋、身 | 凝灰岩 | (蓋)52.3<br>(身)56.0 | 51.7<br>54.4 | 27.3<br>39.4 | 下面<br>上面 | 方形<br>方形 | 36.7<br>22.4 | 36.4<br>22.2 | 10.2<br>16.0 | 未開口 | 多量 | 正位、床面 | |
| Ⅲ－6 | 29 | 玄室 | 大型方孔箱形 | 身 | 凝灰岩 | 44.1 | 42.9 | 23.6 | 上面 | 長方形 | 20.4 | 17.9 | 11.2 | 開口 | 骨粉 | 正位、床面 | |
| Ⅲ－7 | 29 | 玄室 | 大型方孔箱形 | 蓋 | 凝灰岩 | 49.6 | 43.0 | 27.6 | 下面 | 方形 | 29.8 | 29.7 | 9.6 | 開口 | | 正位、覆土 | |
| Ⅲ－8 | 30 | 玄室 | 小型円孔家形 | 身、栓 | 凝灰岩 | 49.0 | 42.0 | 33.5 | 正面 | 小円形（袋状） | 12.0 | 11.2 | 20.0 | 未開口 | 多量 | 横位、覆土 | |
| Ⅲ－9 | 30 | 玄室 | 小型円孔家形 | 身、栓 | 凝灰岩 | 41.1 | 43.3 | 29.2 | 正面 | 円形 | 10.0 | 10.2 | 16.0 | 開口 | | 逆位、覆土 | |
| Ⅲ－10 | 34 | 開口部 | 小型円孔厨子形 | 身 | 凝灰岩 | 41.8 | 42.1 | 60.0 | 正面 | 円形 | 12.8 | 13.0 | 12.9 | 開口 | | 逆位、覆土 | |
| Ⅲ－11 | 36 | 開口部 | 小型方孔箱形 | 身 | 凝灰岩 | 31.5 | 32.5 | 23.0 | 上面 | 長方形 | 13.4 | 12.6 | 10.0 | 開口 | | 逆位、覆土 | |
| Ⅲ－12 | 37～39付近 | | 小型方孔変形家形 | 身 | 凝灰岩 | 36.0 | 43.0 | 25.2 | 正面 | 長方形 | 13.0 | (18.0) | 18.2 | 開口 | | 表採 | ⅓欠失 |
| Ⅲ－13 | 18－2 | 玄室 | 小型方孔多角形 | 身 | 凝灰岩 | 34.0 | 41.5 | 43.4 | 正面 | 長方形 | 11.6 | 15.0 | 16.4 | 開口 | | 正位、床面 | |
| 割山1 | 6 | 玄室 | 大型方孔箱形 | 身 | 凝灰岩 | 45.0 | 47.0 | 28.5 | 上面 | 方形 | 20.4 | 19.2 | 17.5 | 開口 | | ——覆土上 | |
| 割山2 | 6 | 開口部 | 小型方孔家形 | 身 | 凝灰岩 | 44.5 | 39.7 | 30.2 | 正面 | 長方形 | (15.1) | (13.1) | 18.5 | 開口 | | 正位、覆土 | |
| 割山3 | 6 | 開口部 | 大型方孔箱形 | 蓋 | 凝灰岩 | 35.4 | 40.3 | 20.0 | 下面 | 方形 | 25.4 | 27.0 | 5.2 | 開口 | | 正位、覆土 | |

# 第4節　人　　骨

昭和54年（1979）8月18日、私は斎藤忠博士の要請を受けて遺跡を訪れた。

現地に到着すると、すでに数個の石櫃が横穴より取出されており、石櫃内の人骨は容易に検査できる状態にあった。以下の記載は当日、現地で検査したもののほか、後日、東京大学理学部人類学教室において検査したものを含む。

**1　4号横穴玄室内**

焼骨である。人骨の量はきわめて少なく、総重量は約60 g。ほとんどすべてが四肢骨破片で、そのうち1個は長さ129 mmの脛骨骨幹部である。他のものは長さ48 mmの破片を最大とし、多くはほぼ10～20 mmの小破片である。頭骨と思われるものは1片のみで、ほぼ栂指頭大。成人であるが性別は不明。

**2　5号横穴玄室内（表採）**

ゲッ歯類（ウサギ）の頭骨片3個とともに、ヒトの右肩甲骨破片がある。焼けているかどうかはよく分らない。関節窩の一部が残っており、その大きさからみて男性と思われる。

**3　10号横穴玄室内**

大小6個の四肢骨破片で、焼骨とは断定しがたい。最大のものは大腿骨破片で、その長さは123 mmである。他の比較的大きい破片もおそらく大腿骨であるが、3個の小破片は風化が著しく、骨の種類を同定しがたい。いずれも骨壁が厚く、頑丈であることから、成人男性と考えられる。

**4　11－2号横穴玄室内**

ほぼ大豆大の骨片的10個があるが、微小のためくわしいことはわからない。おそらく人骨であろう。

**5　12－2号横穴玄室内**

大腿骨、脛骨など四肢骨を中心とする小破片で、重量は約250 gである。比較的大きい破片は、右大腿骨骨幹部（長さ213 mm）、左大腿骨骨幹近位部（長さ103 mm）、右上腕骨骨幹遠位部（長さ93 mm）の3個で、他はすべてこれより小さい破片である。頭骨破片も混入しているがきわめて少なく、数片を数えるにすぎない。

一部の骨は完全に焼けているが、焼骨か否か不明のものも少なくない。とくに上述の右上腕骨には小動物の咬痕が認められるので、この骨は生のまま、又は生焼けの状態にあったものと想像される。

骨の大きさからみて成年男性のものと思われるが、体格は男性としてはややきゃしゃであったと思われる。

**6　14号横穴玄室内**

四肢骨の小破片で、全体の重量は約90 g。焼けており、頭骨の破片は見当らない。成人のものと思われるが、性別は不明である。

**7　15号横穴玄室内**

四肢骨の小破片で、重量は約90 gである。大腿骨骨幹中央部の破片のみは比較的大きく、長さは122 mmである。頑丈でかなり大きいことから、成年男性のものと思われる。一部に焼けたあとが認められるが、小動物の咬痕の認められる骨もある。

**8　16号横穴玄室内**

大腿骨骨幹部の破片が3個残されている。表面の風化が著しいので、その部位は確定しがたい。成人

のものであるが、性別は不明である。

**9　17号横穴玄室内床面**

四肢骨の小破片で、重量は約30 g。比較的よく焼けている。小破片のみで骨の部位は同定しがたいが、骨壁の厚さや形態からみて、ほとんどが上肢の骨であろうと思われる。成人であるが、性別は不明。

**10　23号横穴墓前域**

おそらく大腿骨および脛骨と思われる破片が2個保存されている。長さは前者が31 mm、後者が75 mm である。軽く焼けており、又表面の風化が進んでいる。成人であるが、性別は不明。

**11　23号横穴玄室内**

四肢骨の小破片が2個保存されている。その形態からみて下肢骨の一部と思われる。骨質、保存状態ともに上記の墓前域のものとよく似ており、同一個体である可能性が強い。

**12　24号横穴玄室内床面**

よく焼けた四肢骨の小破片で、重量は約10 g にすぎない。きわめて小さい破片なので、骨の部位は同定しがたいが、おそらく上肢骨が主たるもの思われる。成人であるが、性別は不明。

**13　24号横穴Ⅱ—1号石櫃内**

小豆大ないし大豆大の四肢骨破片で、重量は約5 g。上記の骨とよく似た状態にあるので、同一個体であるとの可能性が強い。

**14　27号横穴Ⅲ—4号石櫃内**

比較的よく焼けた小骨片で、全体の重量は約30 g。主として下肢骨の破片で、足骨も混在している。全体として黒っぽいが、これは石櫃内に浸入した泥水により汚染されたためと思われる。成人であるが性別は不明。

**15　29号横穴Ⅲ—5号石櫃内**

今回検査したものの中では最も多量の骨が残っており、残存部位も頭骨、四肢骨、躯幹骨など、ほとんど全身にわたっている。しかし完全な骨はなく、いずれもかなり小さい破片である。

全体としてよく焼けており、熱による変形の著しい骨が多い。保存のよいのは下顎骨で、熱変形は強いが、左半部および右側の下顎体が残っている。歯は全くないが、歯槽の状態からみてすべての歯がよく揃っており、病変も認められない。中葉度の下顎隆起（*torus mandibularis*）が存在し、下顎体はかなり頑丈であったと思われる。

四肢骨骨端部が大きいこと、ならびに左乳様突起が頑丈なことから男性と考えられ、歯の萠出状態からみて成人である。さらに、脊椎骨の一部に骨棘の形成が認められることから、少なくとも中年以上に達していたと考えられる。

保存されている骨の総重量は約780 g である。

**16　29号横穴Ⅲ—6号石櫃内**

指頭大の破片が数個あり、これらは四肢骨の一部と思われる。きわめて小さい破片なので、性別、年令ともに不明である。

**17　30号横穴Ⅲ—8号石櫃内**

全体としてよく焼けている。すべて指頭大ないし数cmの破片で、四肢骨が多いが、頭骨片も混入している。性別は不明であるが、おそらく成人であろう。重量は約190 g である。

**18　38号横穴玄室内床直上**

ほぼ指頭大以下の小破片が14片ある。焼けており、うち1片は頭骨片、他は四肢骨の一部である。性別、年令は不明。

**19　39号横穴墓前域**

2片保存されているが、いずれも獣骨である。

**20　39号横穴玄室内床面**

右下顎第2大臼歯のエナメル冠で、歯根はなく、象牙質は全く溶解し去っている。歯冠の近遠心径は10.8㎜、頬舌径は10.2㎜、咬合面形はＹ5型である。咬耗度はブロカの1～2度である。

**21　39号横穴玄室内床面**

右下顎第1大臼歯の歯冠である。近遠心径11.7㎜、頬舌径10.9㎜でかなり大きく、男性と思われる。咬耗度は舌側半がブロカの2度、頬側半が3～4度に達しているので、年令はおそらく40歳以上であろう。遠心咬頭（*hypoconulid*）がきわめて小さく、咬合面形はＹ4型に近いＹ5型と判断される。上述の第2大臼歯と同個体である可能性が強い。

**22　39号横穴玄室内床面上**

長さ4㎝以内の四肢骨小破片で、少数ながら頭骨破片も混入している。全体としてよく焼けている。おそらく成人で、又骨壁の厚い点から男性と思われる。上述の2本の歯と同一個体であるという可能性も考えられる。骨の全体の重量は約110ｇである。

以上に記載した人骨に関しては、次のような特異点が認められる。

(1)　多くの例が焼骨と認められるが、その火葬の方法、とくに火の温度にはかなり大きな差があったのではないかと考えられる。すなわち、骨の変形が著しく、十分に焼けているものから、ほとんど骨変形がなく、比較的低い温度で焼かれたのではないかと思われるものもある。さらに、骨の一部には動物の咬痕の認められるものがあるが、これは骨が生のままか、あるいは生焼けの状態で葬られたためと考えられる。

(2)　すべての例で骨が小破片に破損しているが、各破片の大きさがかなり揃っていることや、自然にこのように破損する原因が考えられないことから、これらは人為的に砕かれたものと考えられる。おそらく、遺体が火葬に付されたあと、骨を集めて砕いたのであろう。

(3)　各例とも、残された骨は全身ではなく、一部のものにすぎない。その重さは上に記載のとおり、数十グラムから数百グラムであり、最も多く残っている例（29号横穴Ⅲ－5号石櫃）でも800ｇに満たない。一方、現代人晒骨の重量を計ると、少ないもの（女性）で3,000ｇ以上、多いもの（男性）では4,000ｇ以上であった。したがって、焼骨が晒骨より軽いとはいえ、いずれの例においても全身骨が残されているとは考えられない。したがってこれらは、意識的に骨の一部のみを葬ったのではないかと思われる。又多くの例では頭骨片がほとんどないか、あるいはきわめて少ない。これは頭骨と四肢骨が、遺体の処理に当ってべつべつに取扱われたことを物語るものとも考えられる。但し29号横穴の例のように、相当量の頭骨片が四肢骨片と混在している場合もあり、一概に頭骨と四肢骨とをわけたともいえないのかもしれない。

(4)　性別、年令の不明な個体が多いが、推定可能の個体からみる限りほとんどすべてが成人で、又男性が多いようである。

以上のように、大北横穴群の人骨には種々の特異な点があり、その埋葬様式は他に余り類例をみないもののように思われる。

# 第Ⅴ章　考　察

## 第1節　横穴の構造と群構成について

1.　横穴の構造
(1)　玄室の形状
(2)　墓前域の形状
(3)　玄室・墓前域の各部施設
2.　横穴の分類と編年
(1)　横穴の分類
(2)　横穴の編年
3.　横穴の群構成
(1)　群構成の状況
(2)　群構成の内容と変遷
(3)　まとめ

本横穴群では、47基の横穴を確認したが、それはⅠ～Ⅳ次にわたる発掘調査の成果であり、その基数が本横穴群の築成当初の基数にかなりちかいものと推定している。このうち、41基を発掘調査したが、いずれも保存状況は良好で、種々にわたる構造上の特徴が明らかとなった。ここでは、こうした構造を通して横穴の群構成を検討してみたい。

### 1　横穴の構造

本横穴群の構造上の特徴は、すでに述べたように玄室と墓前域からなって、羨道が認められない状況であった。こうした羨道を設けないかあるいはきわめて微弱な痕跡を残すにすぎない横穴は、本地域ではかなり一般的であり、北江間横穴群で発掘調査された本横穴群42基、大師山横穴群6基のうちの5基がそうした様相を呈する。ちなみに、柏谷・大竹・宗光寺の横穴群には、羨道を設ける例が少数ながら共通して認められる。

#### (1)　玄室の形状

まず、玄室の平面形からみよう。この区分には、開口部幅を1として、奥壁幅および玄室長を〝0.5単位〟とする概数値で表示する方式が有効であった。

平面形は、次の3類とした。

①　フラスコA型　(A)

開口部幅1に対して奥壁幅を2とするタイプ。4基。

②　フラスコB型　(B)

開口部幅1に対して奥壁幅を1.5とするタイプ。フラスコA型と長方形型との中間型、11基。

③　長方形型　(C)

開口部幅と奥壁幅がともに1と表現し得るタイプ。26基と多いが、なかには奥壁幅が開口部幅よりやや狭くなる例もみられる。一般的にはやや奥壁側が広くつくられるようである。

一方、玄室長は開口部幅を基準に概数化すると、4～1.5の6段階に分れるといえる。すなわち、開口部幅の4倍が最長で1.5倍が最短ということになる。そのうち、2.5倍の13基、2倍の11基がもっとも多く、全体の過半を占める。

以上の平面形3タイプと玄室長比6タイプを組み合わせると、次表のとおりとなる。

**第10表　玄室形態分類表**

（基数）

| 平面形 ＼ 玄室長（開口部幅＝1） | A類フラスコA型 | B類フラスコB型 | C類長方形型 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 4 | 1 | | | 1 |
| 3.5 | | 4 | | 4 |
| 3 | 1 | 3 | 3 | 7 |
| 2.5 | 2 | | 11 | 13 |
| 2 | | 3 | 8 | 11 |
| 1.5 | | 1 | 3 | 4 |
| 計 | 4 | 11 | 25 | 40 |

すると、平面形からみた、玄室長比の傾向としては、①フラスコA型では一般に玄室長比が長くなるようで、②長方形型では逆に玄室長比は短くなる傾向を示し、③フラスコB型が中間的な状況となりながら、原則的には長方形タイプにちかくなる状況といえよう。また、各タイプはその実測値（絶対値）とも一定の原則的な相関性をもつようであるが、それについてはのちにふれる。

つぎに、玄室の横断面形をみておくこととする。この区分は4基本型からなる。

① アーチ型　（a）
② 角アーチ型　（b）
③ 台形型　（c）
④ 方形型　（d）

いま、各横穴における奥壁と開口部の横断面形をその基数で示してみる。

**第11表　玄室横断面形態分類表**

（基数）

| 横断面形 ＼ 部位 | a類アーチ型 | b類角アーチ型 | c類台形型 | d類方形型 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 奥壁部 | 9 | 8 | 20 | 4 | 41 |
| 開口部 | 3 | 6 | 16 | 6 | 31 |

これによると、奥壁では41基、開口部では31基の資料となり、台形型が、それぞれの約半数を占める。さらに、奥壁と開口部の相関関係を示す操作をしてみた。

**第12表　玄室横断面形相互対応表**

（基数）

| 奥壁部＼開口部 | a類アーチ型 | b類角アーチ型 | c類台形型 | d類方形型 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| a類　アーチ型 | 3 | 2 | 2 | | 7 |
| b類　角アーチ型 | | 2 | 3 | 2 | 7 |
| c類　台形型 | | 2 | 10 | 3 | 15 |
| d類　方形型 | | | 1 | 1 | 2 |
| 計 | 3 | 6 | 16 | 6 | 31 |

奥壁から開口部への変化は、太線の部分が類型の変化しないタイプということになるから、傾向としてではあるが、開口部ほど方形にちかづく状況と認めてよいのではないだろうか。

平面形と横断面形の関係をみるために、奥壁横断面形のみをとりあげて比較してみた。これによると、フラスコA型（A類）はアーチ型（a類）のみとなり、逆に長方形型（C類）では台形型（c類）が圧倒的に多い点が指摘し得る。フラスコB類（B類）は、その中間型ということになる。

**第13表　玄室平面形・横断面形対応表**

| 平面形＼横断面形 | a類　アーチ型 | | b類　角アーチ型 | | c類　台形型 | | d類　方形型 | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 横穴名 | 基数 | 横穴名 | 基数 | 横穴名 | 基数 | 横穴名 | 基数 | |
| A類　フラスコA型 | 1、2、4<br>32 | 4 | | | | | | | 4 |
| B類　フラスコB型 | 3、13—1<br>29、39 | 4 | 12—1、17<br>26、38 | 4 | 12—2、24<br>27 | 3 | | | 11 |
| C類　長方形型 | 33 | 1 | 11—2<br>18—2<br>21—1、34<br>40 | 5 | 7、8、9<br>10、14、15<br>16、18—1<br>23—1<br>23—2<br>25—1<br>25—2、28<br>30、35、37 | 16 | 11—1<br>13—2<br>21—2、36 | 4 | 26 |
| 計 | | 9 | | 9 | | 19 | | 4 | 41 |

**(2)　墓前域の形状**

墓前域の平面形からみよう。ここでは、4区分してみた。

①　台形型　（I）

1～3号横穴を典型例とするタイプで、床面が開口部から前方へ広がり、それに伴って袖部も大

きく開く形状を呈する。

これには2種があって、開口部すなわち墓前域基部が玄室開口部より大きく外に開いて、奥端部の隅を直角状に張るタイプ（広口型と仮称）と、開口部幅をそのまま墓前域奥端幅としてそこから外開きとなるタイプ（狭口型と仮称）とがある。前者は5基あって、うち2例は左側のみが角張る形状となる。後者は12基をあげ得る。

② 略菱形型 （Ⅱ）

15号横穴を典型例としたので、菱形の呼称で表現の統一をはかった。それでも13－1号をはじめやや無理な例が目立つので〝略菱形〟とした。基本的にはⅠ類の亜種ないし変形とみるべきであろう。

やはり、広口と狭口があって、前者は15号横穴を含めて3例、後者も3例あった。とくに、後者は墓前域が左右のいずれかに玄室主軸とは大きく方向を曲げるという特徴で共通していた。

③ 長方形型 （Ⅲ）

4・32号横穴をもって典型例とする。縦長となる18－1・32号横穴と、横長となる4号横穴があり、なかには正方形といえる30号横穴の例もあるが、ここではすべて長方形で統一してみた。

やはり広口と狭口があって、前者はすでに述べた4基、後者は5基を数える。

④ 方形区画型 （Ⅳ）

17号横穴をもって典型例とする。多くは開口部を段差で、左右を側壁で、前方部を溝または段差で方形に区画した墓前域をよぶ。

**第14表 墓前域平面形・墓道対応表**

| 墓道 ＼ 平面形 | | 1類 奥広型 横穴名 | 基数 | 2類 奥丸型 横穴名 | 基数 | 3類 無墓道型 横穴名 | 基数 | 計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ類 台形型 | 広口 | | | 1、3、21－2<br>29 | 4 | 2 | 1 | 5 | 17 |
| | 狭口 | 21－1、34、35 | 3 | 18－2、23－2 | 2 | 12－1、13－2<br>16、26、27、28<br>38 | 7 | 12 | |
| Ⅱ類 略菱形型 | 広口 | 15 | 1 | 13－1 | 1 | 10 | 1 | 3 | 6 |
| | 狭口 | 23－1、24 | 2 | 39 | 1 | | | 3 | |
| Ⅲ類 長方形型 | 広口 | 4、18－1、30<br>32 | 4 | | | | | 4 | 9 |
| | 狭口 | 14 | 1 | 12－2、36 | 2 | 33、37 | 2 | 5 | |
| Ⅳ類 方形区画型 | 広口 | | | | | 7、9、17 | 3 | 3 | 7 |
| | 狭口 | 8 | 1 | | | 11－2、25－1<br>25－2 | 3 | 4 | |
| 計 | | | 12 | | 10 | | 17 | 39 | |

広義には長方形型に含め得るもので、その一種とみてよいであろうが、やはり広口と狭口タイプがあり、前者は3基、後者は4基を数える。後者のうち、11－2号横穴はミニ横穴で特殊であり、8号横穴はやや強いて認定しているという難がある。

つぎに、墓前域中央部にあって、幅広く浅い溝状遺構を墓道とよび、これを3種に分けた。

① 奥広型 （1）

開口部床面段差を墓道奥端として、多くは開口部幅をもって墓道奥端をつくる。よって、前方にむかって狭くなる逆ラッパ状となる。なかにはやや強いて認定された例もあるが、一般に明瞭な構造を示すものが多いようである。12基を数えた。

② 奥丸型 （2）

墓道奥端を広く角張る1型にたいし、その奥端を丸形にすることから、奥・前ともほぼ一定幅につくる。よって、開口部幅よりかなり狭い墓道が設けられることになる。10基を数える。

③ 無墓道型 （3）

墓道を有しないタイプをまとめた。17基を数える。

ここで、墓前域平面形と墓道との相互の関係を示してみよう。これによると、方形区画型（Ⅳ）をのぞく各類とも墓道の形状の有無による差異はめだたないことになる。方形区画墓前域（Ⅳ）が、その構造上の特徴からして、墓道を設ける場合は例外的といえるようであった。

**(3) 玄室・墓前域の各部施設**

以上によって、玄室および墓前域の形状を検討してきたが、さらに玄室・墓前域の各部施設について概観しておこう。

① 開口部床面段差

開口部床面には高さ10㎝前後の段差を設ける構造が認められ、21例を数えた。

前述の奥広型墓道（1類）の奥端部が段差につくられるものが11例あって、もっとも一般的であった。また、奥丸型墓道（2類）には床面段差は伴わないのが原則となるが、なかには、墓道幅が大きく広がってその奥端を段差と認め得る状況もみられ、そうした例として12－1・12－2号横穴の2例をあげ得る。

段差が他の施設の付属構造としてではなく独立して設けられた例として、16・17・21－2・26号横穴の4例をあげ得る。その他、溝状造構と結合した状況を示す、12－1・13－2号横穴等もみられる。

② 開口部上部平坦面

開口部の天井前端の上面に、明らかな人為的加工面が認め得る構造がみられた。多くは緩斜面となる例が多かったが、これを上部平坦面と呼んで区別してみた。なかには認定が困難な状況もあったが、ノミ痕等が観察し得るもののみで、16例を数えた。4・9・14・18－1号横穴がもっとも良好であり、多くは天井部前端の正面を垂直につくる構造を持っていた。また、上部平坦面は認定されなかったが、正面の垂直面のみが設けられた8・13－1号横穴等もあった。

③ 封鎖施設

玄室の封鎖状況を残す施設と認め得るものはきわめて少く、8例にすぎなかった。なかには、施設の一部ではあるが、礫群が床面に接して残存したにすぎなくその構造やあり方を推定する資料とはなし得ないといえる、3・24・34号横穴を含んでいる。

また、7・9号横穴の2例については、やや良好な残存といえたが、それでも、築成当初の施設部分とその後の崩落部分との区別を積極的に証明する手段が明瞭ではなかった。状況から観れば、7号横穴においては、開口部から数十㎝ほどが当初の施設でそれから奥は崩落礫、9号横穴においては、開口部

から60～70㎝ほどが当初の施設、と認め得るようであった。すると、この認定された封鎖部奥端から玄室奥壁までの距離は、7号横穴では1.7ｍ前後、9号横穴では1.9ｍ前後を測ることになる。

ほぼ確実に、築成時における封鎖施設そのものが残ったといえるのは、4・21－1・23－1号横穴の3例であった。

4号横穴においては、すでに述べたように追葬時の築成と推定される状況であったが、開口部にほぼその前端を揃えて数個の円礫を並列し、そこから60～70㎝ほど奥まって長さ60㎝前後の板石を横位にして立てて、この間隙に礫や土砂を詰めて封鎖施設としたものと観察された。ちなみに、本封鎖施設奥端から玄室奥壁までは2.4ｍほどを測り得た。

21－1号横穴においては、墓道奥端の床面段差を利用して、正面観を小口積みとする礫群があって封鎖施設と認められた。しかも、その根石には長さ60～80㎝ほどもある大礫が積まれていたことからすれば、本礫群奥端から玄室奥壁までの2.4ｍほどを有効床面としてよいものであろう。

23－1号横穴においては、開口部床面段差に接する奥よりに、長さは70㎝にちかく、高さ40㎝ほどの板石が横位に立てられてあった。これをもって封鎖施設の残存として扱っておき、その奥端から玄室奥壁までは2.2ｍ前後ということになる。

④　排水溝

玄室または墓前域等に比較的幅の狭い溝状遺構を付設する構造が9例ほどあり、排水溝と称してみた。うち、玄室に付属するもの2例、墓前域に認められるもの6例、墓前域外にあるもの1例ということになる。

玄室に設けられていたのは、18－1・24号横穴で、ともに開口部床面段差に連結する状況で床面のほぼ中央部に位置した。18－1号横穴においては自然のクラックを利用したものらしく、開口部から90㎝ほどには明瞭なノミ痕が認められた。24号横穴の場合には、長さ45㎝前後の小溝で、状況からすれば封鎖施設の下部に窄たれた小溝であるかも知れない。

墓前域に設けたのは、2・4・9・10・12－1・30号の各横穴で、多くは開口部付近から発して墓前域外にまで達して、比較的明瞭といえる構造が認められた。なかには、9号横穴のように排水溝が横穴の長軸方位から大きく斜めに傾く例や、12－1号横穴のように床面段差と連結した特殊な構造を有する例もみられた。

墓前域外としたのは8号横穴で、方形区画墓前域の直前に設けられた階段通路との間隙に位置し、長さ35㎝前後の小溝で、墓前域から延びる墓道から発して横穴の長軸方位とは斜位で階段通路に開口していた。

⑤　石櫃安置施設

確実に石櫃安置のための施設と認め得るのは2例で、12－2・26号横穴の場合である。

12－2号横穴では、玄室の床面中央部に50×60㎝ほどの方形につくる浅い掘り込みがみられた。付載でのべる割山横穴群6号横穴と共通する施設と認めた。26号横穴は、墓前域外の左隅部に、1辺を40㎝前後につくる方形の掘り込みが明瞭で、Ⅱ－2号石櫃が据えられていた。横穴外における石櫃埋葬を証明するものといえよう。

⑥　壇状道構

墓前域の外部に、墓前域床面より約30㎝前後も高い〝壇状〟遺構を設ける施設が2例あり、7・9号横穴にみられた。

7号横穴では、墓前域の左側外に、縦40～60、横90㎝前後の平坦面があり、その右側から前方には溝状道構も付設されていた。9号横穴では、縦25、横40㎝前後の平坦面が、やはり前方に溝状遺構を伴ってあった。ともに、溝状遺構によって区画することからすれば、独立した施設としてみるべきもの

であろうか。機能的についていえば、それを証明する積極的な証拠は何もないが、それでも横穴付近に、それから独立する構造でつくることからして、あるいは石櫃安置のためのものかも知れない。

⑦　ミニ横穴および床面小孔

特殊なものとして、ミニ横穴および床面小孔についてふれておく。ミニ横穴は、17・36号横穴に、床面小孔は30・38号横穴に、各2例ずつあった。

個々の状況については、第Ⅲ章および第Ⅴ章第2節に詳しく述べられているので、ここでは特徴点の指摘にとどめておく。17・36・38号横穴の3例は、本体（ミニまたは小孔）に付設して、その周囲部が平坦化されて削り出していること、その前方部または後方に特殊な細工が認められることが共通していた。そのうえ、17・36号のミニ横穴は栓を着装したと思われる状況が残り、38号横穴の小孔内からは火葬骨片が発見されたことから、この3例は確実に火葬骨埋葬のための施設としてよいものであろう。

30号横穴の床面小孔は、溝状遺構を付設するという点では特異な条件をもっていたが、その断面形は中央部のみを低くする〝V字形〟で、埋葬といえる機能を有する施設とは認めがたかった。

## 2.　横穴の分類と編年

本横穴群の構造上の基本は、いわゆる羨道を付設しない玄室と墓前域からなるものであった。このことは、本横穴群の経営時期が、かなり限定し得るものであることの反映でもあろうが、それでも玄室・墓前域の形態変遷を軸に、分類と編年を試みておきたい。

### (1)　横穴の分類

本横穴群の構造による分類を検討することも含めて作成したのが、第15表である。ここでは、さきに述べた玄室・墓前域の形状分類を組み合わせて、たとえば〝ＡａＩ１〟とすることにしたが、それは前節で詳述したように、玄室平面形・玄室奥壁横断面形、墓前域平面形・墓道の形状の順に記号化したものである。

すでに、玄室平面形と奥壁横断面形、墓前域平面形と墓道のそれぞれの関係については述べてあるので、ここでは、玄室と墓前域の関係を整理概観しておきたい。

①　玄室平面形をＡ類とするタイプ

玄室平面形をＡ類（フラスコＡ型）とするタイプは4基を数える。まず、そのすべてが奥壁横断面形をａ類（アーチ型）とする点に注目できるが、墓前域はその平面形をＩ類（台形型）またはⅢ類（長方形型）として、墓道は1～3類が揃う。

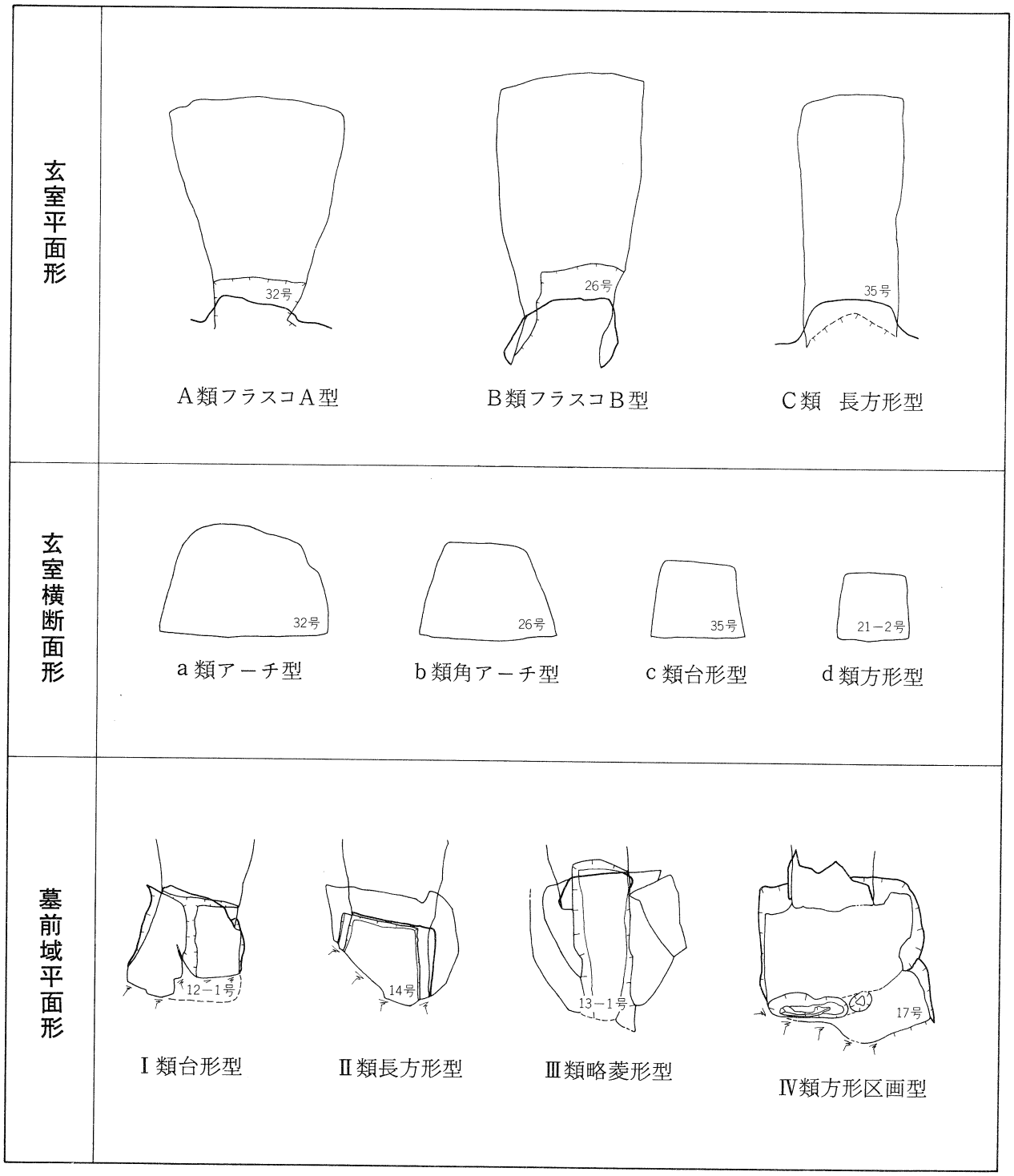
②　玄室平面形をＢ類とするタイプ

玄室平面形をＢ類（フラスコＢ型）にするタイプは11基を数える。全体としてみると、墓前域の形態はＩ～Ⅳ類のすべてが現われるが、うちＩ類（台形型）が6基で約半数を占め、Ⅱ類（略菱形型）の3基を加えると、約3分の2ほどとなる。傾向としては、奥壁横断面形はａ類（アーチ型）・ｂ類（角アーチ型）が多く、墓道の状況はＩ類（奥広型）が多いようである。

③　玄室平面形をＣ類とするタイプ

玄室平面形をＣ類（長方形型）にするタイプは24基を数えて、ほぼ3分の2ほどにちかいものとなる。墓前域ではＩ～Ⅳ類のすべてがみられ、とくにⅢ類（長方形型）・Ⅳ類（方形区画型）がともに6基で目立っている。奥壁横断面形ではＣ類（台形型）が圧倒的に多い。

こうした内容をもつ横穴を分類別に列挙すると次のとおりである。




**第60図　横穴タイプ分類図**

**(2)　横穴の編年**

本横穴群の41基の横穴の分類について種々述べてきたが、こゝではその編年的位置について検討してみたい。

第15表　横穴形態分類表

| 分　類 | 横　穴　名 | 基数 | 分　類 | 横　穴　名 | 基数 |
|---|---|---|---|---|---|
| AaⅠ2 | 1 | 1 | CbⅣ3 | 11－2 | 1 |
| AaⅠ3 | 2 | 1 | CcⅠ1 | 35 | 1 |
| AaⅢ1 | 4，32 | 2 | CcⅠ2 | 23－2 | 1 |
| BaⅠ2 | 3，29 | 2 | CcⅠ3 | 16，28 | 2 |
| BaⅡ2 | 13－1，39 | 2 | CcⅡ1 | 15，23－1 | 2 |
| BbⅠ3 | 12－1，26，38 | 3 | CcⅡ3 | 10 | 1 |
| BbⅣ3 | 17 | 1 | CcⅢ1 | 14，18－1，30 | 3 |
| BcⅢ2 | 12－2 | 1 | CcⅢ3 | 37 | 1 |
| BcⅡ1 | 24 | 1 | CcⅣ1 | 8 | 1 |
| BcⅠ3 | 27 | 1 | CcⅣ3 | 7，9，25－1，25－2 | 4 |
| CaⅢ3 | 33 | 1 | CdⅠ2 | 21－2 | 1 |
| CbⅠ1 | 21－1，34 | 2 | CdⅠ3 | 13－2 | 1 |
| CbⅠ2 | 18－2 | 1 | CdⅢ2 | 36 | 1 |

こうした作業にあたっては、まず各横穴の出土々器、なかでも須恵器の年代を重要な参考とする必要があろう。いま、第17表を作成しておいた。たゞし、それらは本来副葬品であるから、編年操作のためには一定の限界をもつものとみるべきであろう。

よって、横穴編年のための重要な要件としては次のいくつかを指摘できる。

① 石棺を付する横穴から石櫃を伴う横穴への変遷。

2号横穴には刳り抜き石棺が付されていたが、こうした横穴は明確に火葬石櫃を伴う横穴に比して、より古式となるといってよかろう。

② 玄室長の長い横穴から短い横穴への変遷（その〝玄室有効長〟の変遷）

本横穴群における玄室長を比較すると、わずか数十㎝にすぎない11－1・11－2号横穴は別の意味づけをするとしても、それを除く最短は12－1号横穴の1.20ｍから認められて、1.6ｍ未満の横穴が5例、さらに2.0ｍ未満の横穴が4例ほどみられた。すでに述べたように封鎖部を数十㎝から70～80㎝ほどとし得る状況からすれば、2ｍ前後の玄室長ではその〝玄室有効長〟はせいぜい1.5

m前後とみなし得るものであろう。まして、1.6 m未満の横穴においてはその〝玄室有効長〟はほとんど1 m前後となってしまう可能性が指摘できる。

こうした玄室長を有する横穴群のあり方を葬法変遷の反映とみて、本横穴群の場合には玄室長の長い構造から短い構造への変化がみられるとしてよかろう。

③ 石櫃等を有する横穴の2種

本横穴群において、確実に石櫃を伴うといゝ得る横穴としては、8・12－1（墓前域）・14・17・18－2・24・26（墓前域施設）・27・29・34（墓前域）・36（墓前域）が指摘し得るが、さらに玄室床面に石櫃安置のための区画を設けていた12－2号横穴を加えることができる。

いま、これら12基の横穴の玄室長をみると、2 m未満のもの4基、逆に3 mを越えるもの3基がある。こうした石櫃を有する横穴には、その掘穿当初から石櫃安置を計画する設計構造が認め得るとともに、伝統的な設計構造に石櫃を追加した例もみられることゝなる。

以上の諸条件を前提としながら、本横穴群の構造から編年を試みると、ほゞ第16表のようにまとめることができる。

これによると、編年の基本は玄室と墓前域の平面プランに認められた。玄室プランは、フラスコA型（A）⟶フラスコB型（B）⟶長方形型（C）と編年し得ることは確実で、これには横断面形が、アーチ型（a）から角アーチ型（b）・台形型（c）を経て方形型（d）への変化をほゞ伴うといえる。墓前域プランは、台形型（Ⅰ）⟶長方形型（Ⅲ）が基本で、前者の亜種として略菱形型（Ⅱ）が、同様に後者の変化といえる方形区画型（Ⅳ）があるが、墓道との関係では方形区画型（Ⅳ）が多く無墓道型（3）となること以外とくに規則性は認め得なかった。

Ⅰ～Ⅲ期に分けてみた。Ⅰ期は、長大な玄室をもつ構造で、刳り抜き石棺を付する例もある。フラスコA型（A）はこの時期のみで、わずかにフラスコB型（B）も現われる。

Ⅱ期は、やゝ小型化する玄室規模となる構造で、これには石櫃が追葬された状況が多くなる。いわば石櫃の出現期といえるようで、玄室プランではフラスコB型（B）と長方形型（C）が共存するが、墓前域プランでは新たに方形区画墓前域が出現することに注目しておきたい。

Ⅲ期は、玄室が石櫃安置を前提とした規模に変化する時期である。玄室プランは長方形型（C）が主体となるが、こゝでその前半期においた4種は、Ⅱ期との分離がかなりむずかしい。一応中間的なグループとして位置づけておくが、実際にはⅡ期のものとも共存する可能性はある。それでも、より新しいとされた後半期グループは、すべて長方形型（C）で、墓前域プランに方形区画型（Ⅳ）が目立つことは注目してよいものであろう。

### 3. 横穴の群構成

本横穴群においては、未発掘6基を含めてすべてゞ48基の横穴を確認した。こゝでは、これらの横穴群のグルーピング、すなわち群構成について検討してみたい。

本文においては、横穴の分布状況から指摘し得る最小単位としての〝単位群〟と、それらの単位をいくつか内包する〝小支群〟、さらにそうした小支群からなる〝支群〟とに区分することゝする。

#### (1) 群構成の状況

本横穴群において観察された群構成のあり方については第61図に詳しく示したが、それは3支群6小支群19単位群となった。いまその内容を整理概観しておきたい。

① A支群の状況

A支群は、本横穴群の西部にあって、海抜25～35 m前後の南むき傾斜面を占める。よって、横穴群はほゞ開口方位を南にとることになるが、すでに述べたように、西端は低い断層崖、東端は低い丘陵

## 第16表　横穴形態別編年表

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| Ⅰ　期 | | AaⅠ2<br>AaⅠ3<br>↓<br>AaⅢ1 | BaⅠ2<br>BaⅡ2 | |
| Ⅱ　期 | | | ↓<br>BbⅣ3<br>BcⅠ3<br>BcⅡ1 | CaⅢ3<br>CbⅠ1<br>CcⅠ1<br>CcⅡ1<br>CcⅡ3<br>CcⅢ3<br>CdⅢ2 |
| Ⅲ　期 | 前半 | | ↓<br>BbⅠ3<br>BcⅢ2 | ↓<br>CbⅠ2<br>CcⅠ2<br>CcⅠ3<br>CcⅢ1 |
| | 後半 | | | ↓<br>CbⅣ3<br>CcⅣ1<br>CcⅣ3<br>CdⅠ2<br>CdⅠ3 |

## 第17表　横穴総括表

| 支群 | 小支群 | 単位群 | 横穴名 | 分類 | 玄室長(m) | 石櫃等 玄室 | 石櫃等 墓前域 | 編年 Ⅰ期 | 編年 Ⅱ期 | 編年 Ⅲ期 前 | 編年 Ⅲ期 後 | 編年 Ⅳ期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | a | ① | 1 | Aa Ⅰ2 | 4.67 | 石棺 | | ● | | | | |
| | | | 2 | Aa Ⅰ3 | 5.24 | | | ● | | | | |
| | | | 3 | Ba Ⅰ2 | 8.16 | | | ● | | | | |
| | | ② | 4 | Aa Ⅲ1 | 3.35 | | | ● | | | | |
| | | | 5 | | | | | | | | | |
| | | | 6 | | | | | | | | | |
| | | ③ | 19 | | | | | | | | | |
| | | | 20 | | | | | | | | | |
| | b | ① | 10 | Cc Ⅱ3 | (2.05) | 区画 | 石櫃外 | | ● | | | |
| | | | 12－2 | Bc Ⅲ2 | 1.55 | | ? | | | ● | | |
| | | | 12－1 | Bb Ⅰ3 | 1.20 | | 石櫃 | | | ● | | |
| | | ② | 9 | Cc Ⅳ3 | 2.61 | 石櫃 | 石櫃外 | | | | ● | |
| | | | 8 | Cc Ⅳ1 | 1.36 | | | | | | ● | |
| | | | 7 | Cc Ⅳ3 | 2.17 | | | | | | ● | |
| | | ③ | 13－1 | Ba Ⅱ2 | 3.06 | | | ● | | | | |
| | | | 13－2 | Cd Ⅰ3 | 1.43 | | | | | | | |
| | | ④ | 14 | Cc Ⅲ1 | 1.79 | 石櫃 | | | | ● | | |
| | | | 15 | Cc Ⅱ1 | 2.43 | | | | ● | | | |
| | | | 16 | Cc Ⅰ3 | 1.47 | | | | | ● | | |
| | | | 17 | Bb Ⅳ3 | 3.55 | 石櫃 | | | ● | | | |
| | | ⑤ | 18－1 | Cc Ⅲ1 | 2.37 | 石櫃 | | | | ● | | |
| | | | 18－2 | Cb Ⅰ2 | 2.16 | | | | | ● | | |
| | | ⑥ | 11－1 | Cd | 0.29 | | | | | | | |
| | | | 11－2 | Cb Ⅳ3 | 0.33 | | | | | | ● | |
| B | a | ① | 32 | Aa Ⅲ1 | 4.56 | | | ● | | | | |
| | | ② | 33 | Ca Ⅲ3 | 2.98 | | | | ● | | | |
| | | | 34 | Cb Ⅰ1 | 2.55 | | 石櫃 | | ● | | | |
| | | ③ | 35 | Cc Ⅰ1 | 3.34 | | | | ● | | | |
| | | | 36 | Cd Ⅲ2 | 2.60 | | 石櫃 | | ● | | | |
| | b | ① | 37 | Cc Ⅲ3 | 2.08 | | | | ● | | | |
| | | | 38 | Bb Ⅰ3 | 2.29 | | | | | ● | | |
| | | | 39 | Ba Ⅱ2 | 3.29 | | | ● | | | | |
| | | ② | 40 | Cb | | | | | | | | |
| C | a | ① | 21－2 | Cd Ⅰ2 | 1.83 | | | | | | ● | |
| | | | 21－1 | Cb Ⅰ1 | 2.83 | | | | ● | | | |
| | | | 22 | | | | | | | | | |
| | | ② | 23－2 | Cc Ⅰ2 | 1.70 | | | | | ● | | |
| | | | 23－1 | Cc Ⅱ1 | 2.45 | | | | ● | | | |
| | | | 24 | Bc Ⅱ1 | 2.43 | 石櫃 | | | ● | | | |
| | | ③ | 25－2 | Cc Ⅳ3 | 1.80 | | | | | | ● | |
| | | | 25－1 | Cc Ⅳ3 | 3.05 | | | | | | ● | |
| | | | 26 | Bb Ⅰ3 | 3.28 | | 石櫃 | | | ● | | |
| | | | 27 | Bc Ⅰ3 | 2.80 | 石櫃 | | | ● | | | |
| | b | ① | 28 | Cc Ⅰ3 | 2.60 | | | | | ● | | |
| | | | 29 | Ba Ⅰ2 | 3.83 | 石櫃 | | ● | | | | |
| | | | 30 | Cc Ⅲ1 | 2.69 | 石櫃 | | | | ● | | |
| | | ② | 31 | | | | | | | | | |

（── は出土器類の年代）

第18表　A支群構成

| 支　群 | 小支群 | 単位群 | 横穴名 |
|---|---|---|---|
| A | a | ① | 1・2・3 |
| | | ② | 4・5・6 |
| | | ③ | 19・20 |
| | b | ① | 10・12－2・12－1 |
| | | ② | 9・8・7 |
| | | ③ | 13－1・13－2 |
| | | ④ | 14・15・16・17 |
| | | ⑤ | 18－1・18－2 |
| | | ⑥ | 11－1・11－2 |

鞍部によって区画される状況となる。2小支群9単位群とした。

a小支群は3単位群8基とした。うち、1～4号横穴が発掘調査されているが、この墓前域前端に連続して確認された階段・通路によって本単位が認定された。

a－①単位群は本支群の最上段に並列する3基で、なかでは1号横穴がやゝ低い位置を占めるが、巨視的には規模・形状ともよく類似した状況といえる。

a－②単位群は、①単位群の下段東側にある3基で、4号横穴東（5号横穴西）から3号横穴方向へ連絡する階段・道路が認められている。5号横穴は4号よりやゝ低くなる位置で1単位とすることに疑問はないが、6号横穴はさらに約1m前後も低い位置となる。そのうえ開口方位も異る状況にあるので、あるいは本単位群に含めることはやゝ無理かも知れないが、未発掘横穴でもあるので一応内包するものとしておく。

a－③単位群は、未発掘の2基で、やゝレベル差をもつが、東向きの開口方向で共通する。その位置は、本支群東外側の丘陵鞍部からB・C支群方向へ移行するコンターの転換点にあたる。

b小支群は6単位群16基としたが、それはa小支群の下段側に密集する。本小支群認定の基本となったのは、13－1 ── 12－1・12－2 ── 9 ── 8 ── 7 ── 14 ──13－2 ── 15号横穴を連絡する通路階段であった。

b－①単位群は、本小支群中の西端部の中段に位置する3基からなる。10号横穴がやゝ高いレベルをもって、先に述べた階段・通路からも離れる状況にある。

b－②単位群は、本小支群の中央部最上段にある3基で、9号横穴から7号横穴に東下りの状況となる。明瞭な通路階段で連絡し、形態その他の条件も類似している。

b－③単位群は、本小支群の中央部にあって下段に位置する2基である。最下段を占める13－1号横穴が長大な玄室と広大な墓前域を有して形態のうえでも特徴的である。

b—④単位群は、本支群の中央部中段から下段の東側にほゞ連続する4基である。形態・規模のうえで17号横穴がきわめて目立つものといえる。

b—⑤単位群は本小支群の最下段東端部を占める2基とした。その位置は本支群の東端をつくる丘陵鞍部に接する状況で、そのためか開口方位もやゝ東南にちかいものとなる。たゞし、その位置関係はやゝ距離を有するもので、なかでも18—2号横穴はB支群にかなり近いものとなるが、こゝでは開口方位等からして本支群に含めてみた。

b—⑥単位群は、本小支群の最下端西端部にある2基のミニ横穴とした。あるいは、b—①単位群に内包させ得る可能性もあるが、近接したまとまりをみせるので一応別単位としておいた。

② B支群の状況

B支群は、本横穴群の中央部下段よりの海抜20～30m前後にあって、その位置は本横穴群の西側で南斜面をつくる山肌が北側では東斜面に大きく変化するその境目となる。いわゆる鞍部が大きく張り

**第19表　B支群の構成**

| 支　群 | 小支群 | 単位群 | 横穴名 |
|---|---|---|---|
| B | a | ① | 32 |
| | | ② | 33・34 |
| | | ③ | 35・36 |
| | b | ① | 37・38・39 |
| | | ② | 40 |

出す付近を占めることになる。2小支群5単位群と認めた。

a小支群は3単位群5基で、本支群中の上半部を占める。a—①単位群は、本小支群中の最上段に位置する32号横穴1基としたが、規模形態のうえでも特異性の目立つ存在である。

a—②単位群は、a—①単位群の下段東よりにあって2基からなる。両例とも規模形態の類似性が目立つが、こうした傾向はより下段に連続するa—③単位群の2基にも共通する状況といえる。こゝでは別単位として扱っておきたい。

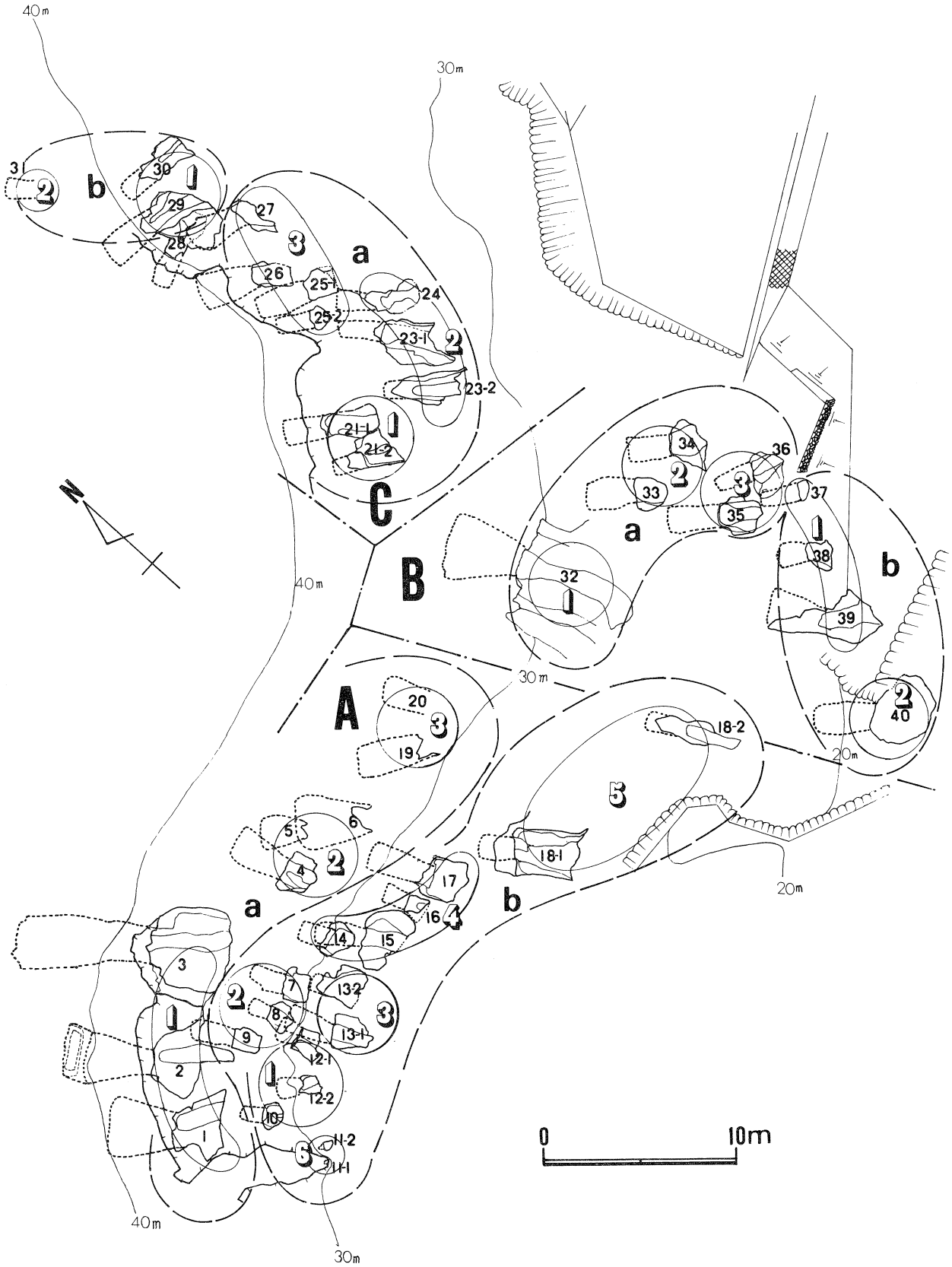
b小支群は2単位群4基からなって、本支群中の下段部を占める。b—①単位群はa小支群の直下に並列する3基で、開口方位・形状等においてa小支群に大略共通する様相が目立っている。たゞ占地のうえでの特徴からすれば、かなり強い急傾斜面に並列して掘穿することから、上方すなわちa小支群への直接的な連絡は不可能と判断された。本小支群をa小支群から独立させ得た所以である。なお、形態的には39号横穴が特異な状況をみせて注目される。

b—②単位群は、本小支群の最下段で、b—①単位群より約2m前後も低い位置を占める1基である。40号横穴で、玄室前端から墓前域をすでに削平されていることもあって詳細は不明である。

③ C支群の状況

C支群は、本横穴群の北側に集中する横穴群で、海抜31～42m前後を占める。その位置は西側から東側に低くなる傾斜面にあって、大略東南方向に開口する例が多い。2小支群5単位群とした。

a小支群は3単位群10基としたが、それは本支群中の南半部で低位を占める横穴群を内包する。本小支群を南側から眺望するとa—①・②単位群とa—③単位群の南端部が観察し得るのみで、a—③単位群の大部分は明らかにその占地する傾斜面が異っている。こうしたかなり変化の激しい地形的条件をみながらも、本小支群における横穴群の開口方位は比較的よく一致する傾向を示してb小支群とは明らかに区分される。




第61図　群構成図

第20表　C支群の構成

| 支　群 | 小支群 | 単位群 | 横穴名 |
|---|---|---|---|
| C | a | ① | 21－2・21－1・22 |
| | | ② | 23－2・23－1・24 |
| | | ③ | 25－2・25－1・26・27 |
| | b | ① | 28・29・30 |
| | | ② | 31 |

a－①単位郡は本支群中の南端部上位に並列する3基で、うち22号横穴は未発掘であるが、調査された2基は規模・形態等比較的よく類似している。

a－②単位群はa－①単位群の下段でやゝ中央よりを占める3基である。うち23－1・24号横穴が同レベルで並列し、23－2号横穴はやゝ離れて低位となる。前2者は規模・形態でかなり類似するうえに、なかでも墓前域は左右対称に設計された可能性が指摘し得るほどの状況であった。23－1・24号横穴と、23－2号横穴は別単位とすべきかも知れない。

a－③単位群は、本支群中のほゞ中央部にあるが、その位置がa－①・②単位群とは地形的に異る条件を占めることはすでに述べた。4基を含めたが、うち東半部は大きなクラックが走って破壊部分が多く、比較的保存良好な西半部の25－2・25－1号横穴に通路階段部が残存していた。それによると、25－2号横穴はa－②単位群の23－1号横穴西からの階段を認め得る状況で、確認はできないが、これから分岐して25－1号横穴右前に残存する通路に連絡する可能性もうかゞえた。すでに述べた開口方位の共通性とともに、本単位群をa小支群に内包した所以である。

b小支群は2単位群4基としたが、それは本横穴群中の北端部となる。b－①単位群は、a－③単位群に連続する位置にあって、それより開口方位を東に集中する状況の3基からなる。クラックによる破壊が激しい地区であるが、それでも30号横穴の右前方に階段が残存していたので、こゝから28号方向への連絡が可能であったのかも知れない。

b－②単位群は1基のみで、しかも墓前域を発掘して横穴であることを確認したにすぎない。b－①単位群からは3 m以上も高い位置にあるので、一応別単位として扱っておきたい。

**(2)　群構成の内容と変遷**

以上によって、本横穴群における群構成の状況をみてきたが、こゝではその内容と変遷について、いくつかの検討を試みたい。

①　単位群と横穴基数

状況を全体的に概観すると、3支群6小支群19単位群としたのであるが、うち、A支群は2小支群9単位群、B支群は2小支群5単位群、C支群は2小支群5単位群となった。いずれも2小支群から構成されることに注目し得るが、内訳としては2単位群を内包するもの2、3単位群からなるもの3、6単位群のもの1群であった。2～3単位群が普遍的で、例外的に6単位群を擁するものがみられるということになる。

単位群は19単位[註1]としたが、その横穴基数はすべてゞ47基であった。内訳は、1基からなるもの2、2基からなるもの6、3基からなるもの8、4基のもの2単位であった。圧倒的に2～3基からなる基数が多く、それが単位群を構成する基本数であることは注目しておきたい。

②　時期的な変遷

本群構成における時期的な変遷についてみよう。まず、総基数47基のうち、Ⅰ期8、Ⅱ期12、Ⅲ前

期11、Ⅲ後期８基の計39基が編年し得たものであった。

さらに詳かにみると、たとえばⅠ期とした８基のうちの４基はＡ支群ａ小支群に集中していて目立った。すなわち、Ⅰ期の横穴は各支群ごとに１～２基ほどが配され、それがⅡ・Ⅲ期の横穴を多くは複数で率いる状況が一般的であるのに、Ａ支群ａ小支群は少くとも時期が把握できた限りでは、Ⅰ期の横穴のみによって構成されていた。本横穴群創設期のグループと認め得る可能性とともに、本横穴群および本支群のなかで他の小支群――可能性としてはＡ支群ｂ小支群か――に継続していくパターンをあるいは推定し得るかも知れない。

Ⅱ期の横穴数は12基で、Ⅲ前期は11期、Ⅲ後期は９基を数える。いま、Ⅰ期のみから構成されるＡ支群ａ小支群をのぞいた各グループをみると、Ⅱ期の横穴を認め得ない小支群はＣ支群ｂ小支群のみで、同様にⅢ前期はＢ支群ａ小支群のみ、Ⅲ後期はＢ支群ａ・ｂ小支群、Ｃ支群ｂ小支群に欠失するということになる。

こうした状況をより詳かに観察すると、Ⅰ期の横穴は、すべての支群に認められるが、Ａ支群ａ小支群をのぞいては各支群とも１～２基でその成立と出発を示すといゝ得るが、いずれもが主墳的位置を有する点は大いに注目できる。

Ⅱ期になると、ほとんどの小支群においてその存在が認め得る状況で、単位群別でもその過半に多くは１～数基を有する。なかには、Ｂ支群ａ小支群のようにⅠ期を主墳としてその他はすべてⅡ期という例もあるが、特殊なパターンとしてよいようである。一般的には、Ａ支群ａ小支群をのぞくと、Ⅱ期を認め得るもの８単位群（うち１単位群はⅠ期からの継続で、４単位群は２基ずつ）で、同様に認め得ないもの８単位群（うち２単位群はⅠ期の出発）という基数からしても、各支群および単位群においては、時期的に併行関係を有する横穴が認められることになる点に注目しておきたい。すなわち、Ⅱ期になると、そのグループ構成の特徴は、複数の被葬主体を想定できる状況に変化するのである。

Ⅲ前期もほとんどの小支群に認められて、単位群では、Ａ支群ａ小支群をのぞくと、８単位群に認め得ることになる。うち、３単位群では２基ずつの複数で存在するが、むしろ注目しておきたいのは、Ⅰ・Ⅱ期から連続するものが６単位群あり、さらにその半数がⅢ後期に連続する状況となることである。こゝでも、複数の併行関係と、前後への連続性を認め得るようである。

Ⅲ後期は横穴数の減少する時期で、Ａ支群ｂ小支群・Ｃ支群ａ小支群にのみ存するが、単位群では５グループに認められた。うち、３単位群ではⅡ・Ⅲ期からの継続性が確認されるが、Ⅰ期からの継続性がまったくみられない点が注目された。Ⅳ期については、土器からの時期設定で、該当する横穴はみることができない。

③　群構成と追葬

一般にこうした横穴群においてはいわゆる追葬を認め得る例が多いようである。本横穴群でも、複数の石櫃の並置をはじめ、時期差を有する土器群の併存等、ほゞ確実に追葬を指摘し得る状況はかなり多い。

第17表をみると、横穴の時期はⅡ・Ⅲ前期がピークとなるのに、土器群の時期はⅢ前・Ⅲ後期が圧倒的に多い。問題は、各単位群における横穴掘穿、より具体的には単位群の出発時期と、土器群によって示される追葬状況との関係であるが、いま、各単位群のなかでⅢ期の横穴を複数で有するグループを数えると11例となる。このうち１例をのぞくすべてがⅠ～Ⅱ期の出発で、Ⅲ期にその出発をもつものは極めて少くなる。このことは、Ⅲ期に出発する単位群が数例にしかすぎないことの結果であることはもちろんであるが、本横穴群においては、Ⅰ～Ⅱ期で創設された単位群がⅢ期に入って最盛期を迎えるその状況が47基中36基を数え得る事実からも指摘し得よう。Ⅰ・Ⅱ期において、多く１ない

し2基で成立し出発する各単位群は、横穴数の増大とゝもに、追葬という継続性をもって拡大をなしとげることによって、本横穴群の完成期としてⅢ期を迎えることになるのである。

ところが、Ⅳ期になると、若干の土器類をもってその存在を示めすが、様相からすれば追葬さえも認めがたいといえる変化がみられる。

**(3) まとめ**

まず、絶対年代にふれておこう。いうまでもなく明証はないが、主に土器の年代観から、Ⅰ期は7世紀中葉以前、Ⅱ期は7世紀後葉、Ⅲ前期は8世紀前半、Ⅲ後期は8世紀後半、Ⅳ期は9世紀以降とみておきたい。

すると、本横穴群は、7世紀中葉前後に、各〝支群〟が成立して、その出発をみせるが、7世紀後葉になると急速に成長して、各〝小支群〟が分立し、あわせてほとんどの〝単位群〟もその姿を明白にする。Ⅲ期になると、各単位群は一層充実し質量ともに拡大をくり返して、その後期には完成期を迎え、すべての横穴がその勢を誇ることとなる。こうしたⅡ・Ⅲ期の発展に伴うのが火葬の導入で、多くの石櫃とゝもに横穴の構造にも変化があらわれてくる。ところが、こうした本横穴群のピークはⅢ期とゝもに終り、Ⅳ期になると急激な凋落をみる。もはや追葬さえも断絶した状況が生み出されるのである。

こうした状況のなかに折出される本横穴群の　支群 ── 小支群 ── 単位群　となる群構成は、通路と階段の認定によってより確実なものとなった。この意味では、〝墓道〟（本横穴群の通路にあたる）を確認した県内唯一の例としての、藤枝市原古墳群谷稲葉支群高原地区の場合にも、小支群── 単位群── 単位という群構成の把握がなされているが、こうした認定は本横穴群における群構成の理解と基本的には共通[註2]したものといえるようである。たゞし、その最小単位をつくる古墳基数が2基を基本型とする点に本横穴群のそれとは相違がみられるようである。

さて、こうした本横穴群の　支群── 小支群── 単位群という群構成は、さらに大きな集積を有する古墳群に連るものといえるようである。すなわち、かって、後藤守一氏が「吉原市の古墳」[註3]や「沼津長塚古墳」[註4]で指摘した　古墳群── 支群── 小支群の理解があるが、こゝでいう古墳群とは〝スルガクニ〟を単位とする古墳のまとまりであって、その下に支群・小支群がくることゝなる。よって、本横穴群の場合には、北伊豆横穴群── 北江間横穴群── 大北横穴群── 支群── 小支群── 単位群　という構成が明らかとなった。

こうした本横穴群にみられる構造が、8世紀を前後する律令体制のどのような部位と深くかかわるものであるのかはもちろん明瞭ではない。それでも、郡衙には実際の行政事務の執行にあたる〝郡雑任〟とよばれる下級官人があり、そのなかには郷別に置かれて徴税業務にたづさわる者があることからすれば、〝依馬〟郷に比定し得る本横穴群付近においても、こうした郡雑任の存在は認め得るもの[註5]かも知れない。すると、本横穴群にみられる状況、とくに〝若舎人〟銘をはじめとする火葬石櫃のもつ意味は、こうした律令体制のあり方を反映するものとできるかも知れないのである。

註1　6単位群からなるのはA支群6小支群であり、そこにおける位置関係からすれば、①～③⑥単位群と④⑤単位群を分割して2小支群とし得る可能性も推定できる。たゞ④単位群の西端に位置する15号横穴西から③単位群の13―2号横穴東に連絡する階段が確認されたので、1小支群としてまとめてみたのである。

2　八木勝行・池田将男　「群集墳における群構成の分析について」── 藤枝市原古墳群谷稲葉支群高草地区の場合 ──『静岡県考古学研究』10　昭和56年6月。

3　後藤守一ほか　『吉原市の古墳』吉原市教育委員会　昭和33年9月。

4　後藤守一ほか　『沼津長塚古墳』沼津市教育委員会　昭和32年3月。

5　吉田　昌　『日本古代村落史序説』　塙書房　昭和55年4月。

# 第2節 石櫃及びミニ横穴の考察

はじめに
I 整理
1. 石櫃の形態
2. 蓋と栓
3. 横穴における各形態の石櫃関係
4. 玄室内の床面に刻りこまれた小孔
5. ミニ横穴
II 考察
1. 石櫃の小孔・床面の小孔・ミニ横穴の容積
2. 石櫃の小孔・床面の小孔・ミニ横穴の性格
3. 石櫃及びミニ横穴の編年的序列
4. むすび ― 8世紀の頃の火葬墓からみた大北横穴群の石櫃・床面小孔・ミニ横穴の地位

## はじめに

ここにいう石櫃とは、火葬骨を納めた石造の櫃形の容器である。一般に、石櫃は、火葬骨が直接納められることもあり、火葬骨を壷に納め、この壷が納置されることもある。前者は、骨そのものの収容施設であり、骨櫃であり、後者は、骨壷の外被施設である。壷を納置した場合、この形態に順応して円孔をうがつことが多いが、直接納める骨櫃の場合は、円孔よりはむしろ方孔又は長方形の孔をうがつことが普通である。石櫃は、特に奈良時代を中心とした頃の各地の遺跡から発見されている事例が多いが、火葬骨壷の外被施設としての石櫃の例がほとんどである。その形態には、のちに述べるように各種ある。最も普通の形で、むしろこの種の石櫃の定型ともいうべきものは、方箱状の身をなし、上面の中央に円孔をうがったものであり、蓋は四注造りの屋根型を呈する。蓋と身とを堅く密閉させる必要上、円孔上縁のまわりに縁を高く設け、蓋は、この縁に当る外周を高縁にして嵌まるようにしている。

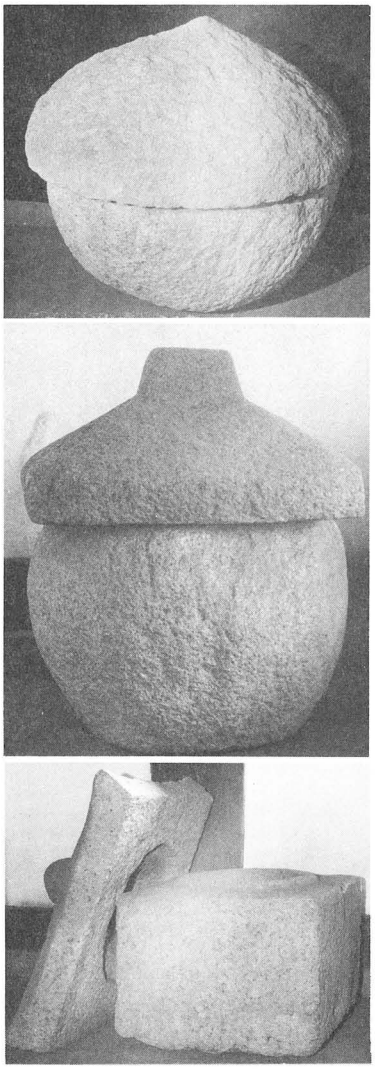
この種の石櫃は、統一新羅時代のものとも見られる。(第62図)

さて、大北横穴群においては、石櫃は身だけでも20個発見されている。他に近くの割山横穴群からは2箇発見されている。同一の遺跡の中で、このように多数発見されている例は、大北横穴群のみといってよかろう。しかも、骨壷の納置施設としての石櫃でなく、火葬骨をそのまま納めた石櫃であること、いわば骨櫃である点も特殊であり、この形態をはじめ孔の形や大きさなどに多種多様なものがあることと相まって、日本の石櫃はもとより広く東アジアの古代石櫃を考える上にも、重要な資料を提供するものである。

## I 整理

### 1. 石櫃の形態

大北横穴群出土の石櫃は、外形・孔の位置・孔の大きさ・孔の形状等にわたって、それぞれ形式を異



**第62図　統一新羅時代の石櫃**
（国立慶州博物館蔵）

にし、きわめて複雑なものがある。

特に、孔の位置が、石櫃を据えた場合の上面の中央に設けられているという、石櫃の通常見られるものと異なって、横の上方近くうがたれており、かつ孔の大きさが、いちじるしく小型のものが多い点など、特異なものがある。

まず、孔の位置が上面にある竪口系と横に向く横口系の二類のあることを一つの大きい基準となし、さらに身の形態、孔の形状、孔の大きさを分類上の重要な要素と考え、これらによる分類にしたがって、各例を説明しよう。

**(1)　孔が上面に向くもの、すなわち竪口式のもの**

①　方箱型、有縁。孔は通常の大いさで、方形のもの、大北横穴群出土の各例の中、最も標準的なものであり、また一般の石櫃の概念の上からも通例のものである。したがって定型といってもよい。もっともこのいくつかには、正整な方箱型でなく、底に下るにしたがって狭まるものもある。孔は方形にうがたれ、大いさも亦40～50㎝ぐらいのもので、大人一体分の火葬骨を納めるにふさわしい。孔のまわりの周縁は、蓋を受けるに都合よくなっている。24号横穴発見の「若舎人」の刻銘のある石櫃もこれに属する。蓋は四注造りの屋根型のものが普通である。

②　①と同じ形式であるが、孔のまわりには縁のないもの。

孔も大型で方形であるが、①と異なる点は孔のまわりに縁がないことであり、この点から一応①と区別した。もっとも、縁が欠失したり磨損したりして、あたかも無縁のようになっているものもあるかも知れないが、識別の困難なものもあり、一応無縁の外観を呈するものを、ここに含めた。

③　方箱状であるが、孔は小さく、かつ方孔をなすもの、また孔のまわりには縁がない。

方箱状は同じであるが、大きい相違点は、孔が小さく、一辺10～15センチ内外になっており、かつ方孔である。縁はない。このような小方孔の場合は、特に蓋として整ったものはなく、一種の栓のようなものを挿入し密閉させることが普通である。

④　③と同じ形式をそなえるが、方箱状のものよりも、かなり不整となっているもの。

小型の方孔も、③と同じであるが、整った方箱状を示さず、かなり荒い削りでかつ形状も整っていない。この形態のものには、③よりも比較的小さいものが多い。

⑤　③と同じく方箱状のもので、小孔であるが、孔は円孔であるもの。

方箱状であり、小孔であるが、異なる点は、この孔が方孔でなく円形である点である。

**(2)　孔が横に向くもの、すなわち横口式のもの**

横に孔がうがたれている。この形式のものはすべて小孔であることが特色である。また孔の形は、方孔が多いが、円孔のものもある。すべて無縁であり、蓋は栓のようなものを挿入した如くであり、

その例も残されている。

石櫃の形態を主として、次のように細分される。

① 石櫃は家型のもので、小孔は円形のもの。

上面は屋根状を呈する。屋根は切妻状のもの、平棟のある切妻状のもの、切妻状であるが、両側の降り面が不均衡のものなど、各種の形式があるが、屋根状をなすことが特色である。小孔は円形である。

② ①と同じ屋根型であるが、小孔は方形のもの。

屋根型形式である。しかし小孔は方形であり、相違がある。

③ 厨子型で、小孔は方孔のもの。

一種の家型で、切妻状の屋根をもつが、あたかも厨子或いは石祠に似たような趣を呈する。便宜、この名を用いる。

④ だるま型で小方孔のあるもの。

これも家形の変形ともいえるが、かなり不整であり、正面からみると、あたかもだるまを据えたような形状にも似ているので、便宜この名を用いた。底も平らかで安定されている。

⑤ 多角型で小方孔のあるもの。

六角形の筒状のものであり、据える底の部分はやや広く据(す)わりはよい。上方は、やや奥の方が斜めにさがっている。正面中央にやや深い方孔がうがたれている。

⑥ 箱型で小孔は方形のもの。

不整な箱型であるが、横口で、しかも小方孔がうがたれている点で特異である。

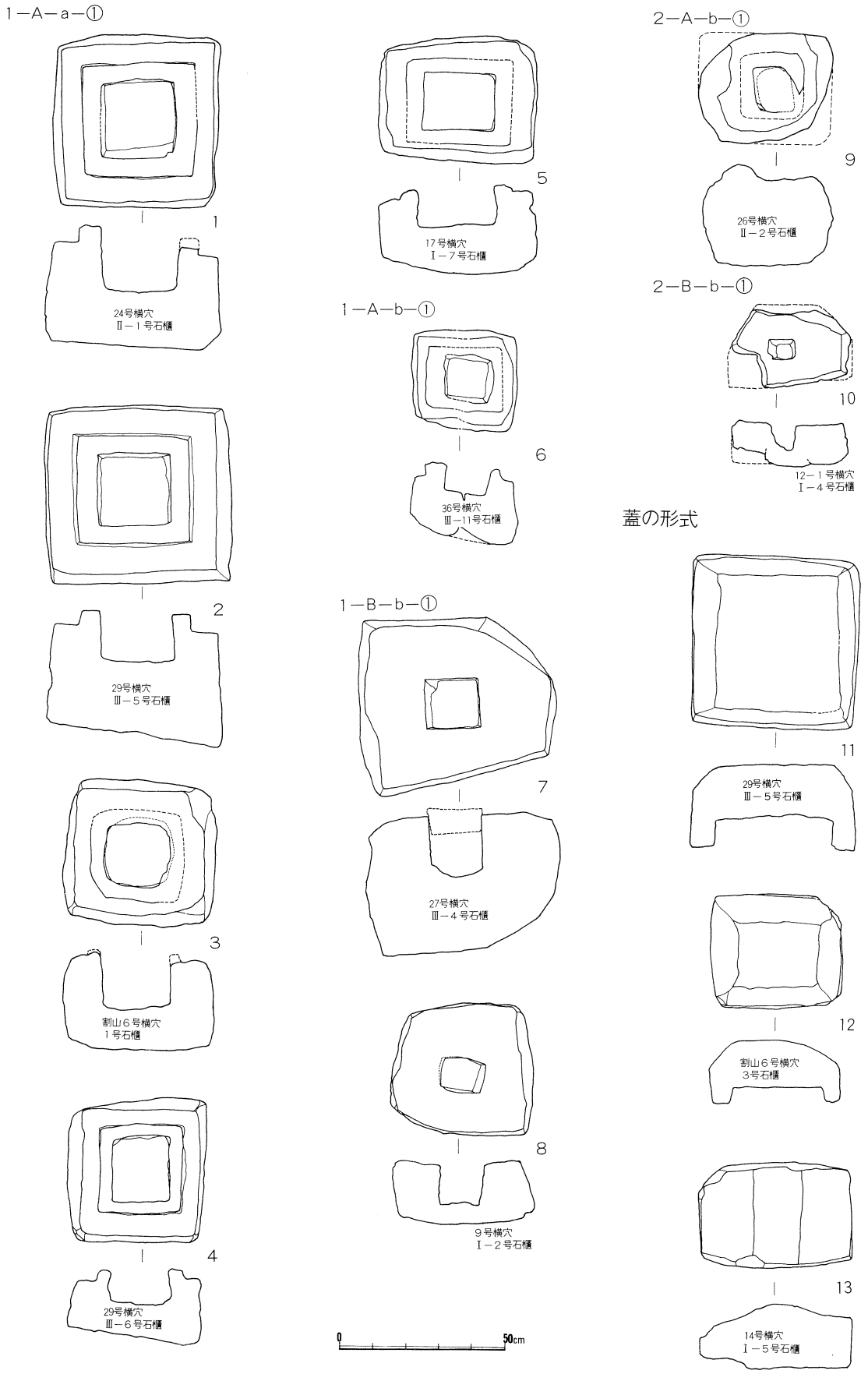
以上述べたような分類にもとづき、それぞれの形式のものを、次のように整理したい。

**第21表　石櫃の形式分類**

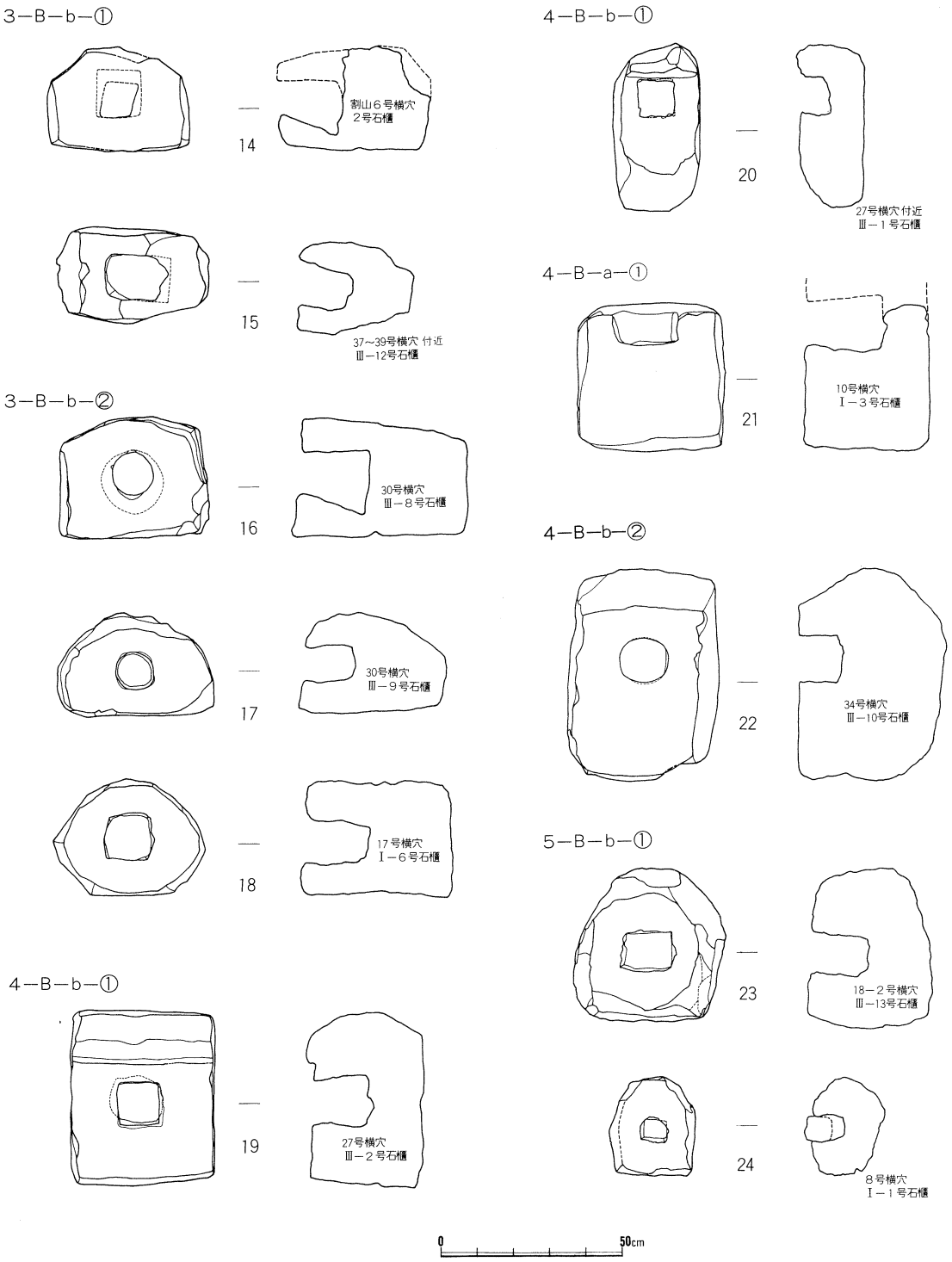
| 孔の位置 | | 孔のまわりの縁の有無 | |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 孔の位置が竪口式の通常なもの。 | A | 孔のまわりに縁のあるもの。 |
| Ⅱ | 孔の位置が横口式の特殊なもの。 | B | 孔のまわりに縁のないもの。 |
| 石櫃の形状 | | 孔の大いさ | |
| 1 | 石櫃が方箱形の定形のもの。 | a | 孔の一辺が30－50センチぐらいで一人分の火葬骨が納入されるもの。 |
| 2 | 石櫃が方箱形であるがやや不整のもの。 | b | 孔の一辺が10－15センチ、径が9－12センチぐらいできわめて小さいもの。 |
| 3 | 石櫃が家形のもの。 | | |
| 4 | 石櫃が厨子形のもの。 | 孔の形 | |
| 5 | 石櫃が多角形をなすもの。 | ① | 孔の形が方形のもの。 |
| | | ② | 孔の形が円形のもの。 |

以上であり、たとえばⅠ－1－A－a－①は、竪口式の孔(Ⅰ)のある方箱型(1)であり、縁は有縁式(A)で、孔は通常の大いさ(a)のもので方孔(①)である。Ⅱ－4－B－b－①は、横口式(Ⅱ)で厨子型(4)で無縁(B)であり、孔は小型(b)で円孔である(②)ということになる。

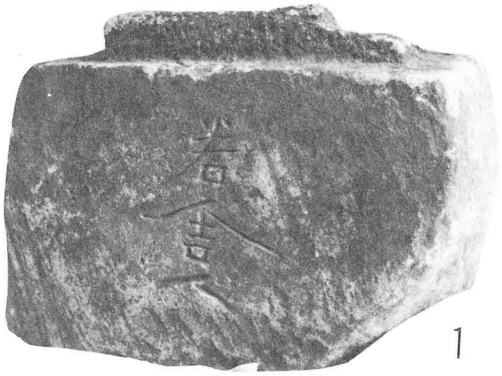
このような分類にもとづいて、形態の分明している24例について、あらためて整理すれば、第11表のようになる。

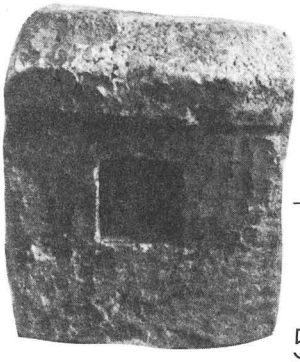

1－A－a－①
1
24号横穴
Ⅱ－1号石櫃
2
29号横穴
Ⅲ－5号石櫃
3
割山6号横穴
1号石櫃
4
29号横穴
Ⅲ－6号石櫃
5
17号横穴
Ⅰ－7号石櫃
1－A－b－①
6
36号横穴
Ⅲ－11号石櫃
1－B－b－①
7
27号横穴
Ⅲ－4号石櫃
8
9号横穴
Ⅰ－2号石櫃
0
50cm
2－A－b－①
9
26号横穴
Ⅱ－2号石櫃
2－B－b－①
10
12－1号横穴
Ⅰ－4号石櫃
蓋の形式
11
29号横穴
Ⅲ－5号石櫃
12
割山6号横穴
3号石櫃
13
14号横穴
Ⅰ－5号石櫃

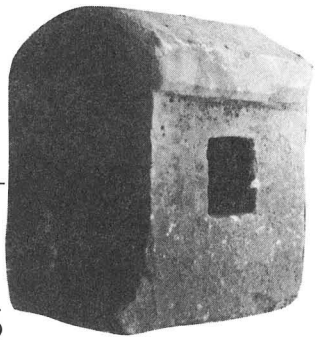
**第63図　石櫃集成図　①**

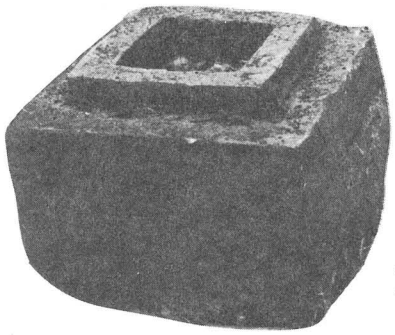

3－B－b－①
14
割山6号横穴
2号石櫃
15
37～39号横穴 付近
Ⅲ－12号石櫃
3－B－b－②
16
30号横穴
Ⅲ－8号石櫃
17
30号横穴
Ⅲ－9号石櫃
18
17号横穴
Ⅰ－6号石櫃
4－B－b－①
19
27号横穴
Ⅲ－2号石櫃
4－B－b－①
20
27号横穴付近
Ⅲ－1号石櫃
4－B－a－①
21
10号横穴
Ⅰ－3号石櫃
4－B－b－②
22
34号横穴
Ⅲ－10号石櫃
5－B－b－①
23
18－2号横穴
Ⅲ－13号石櫃
24
8号横穴
Ⅰ－1号石櫃
0
50cm

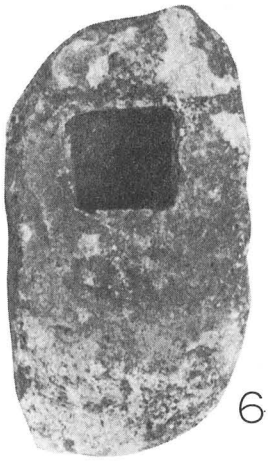
**第64図　石櫃集成図　②**

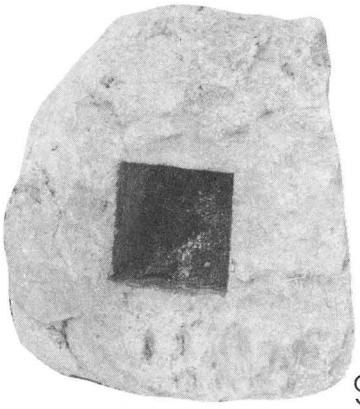


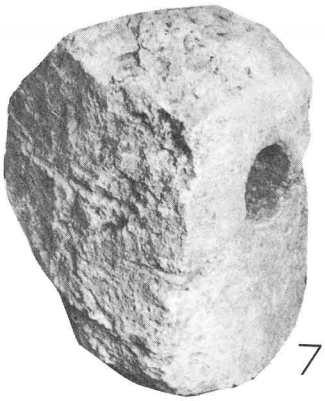



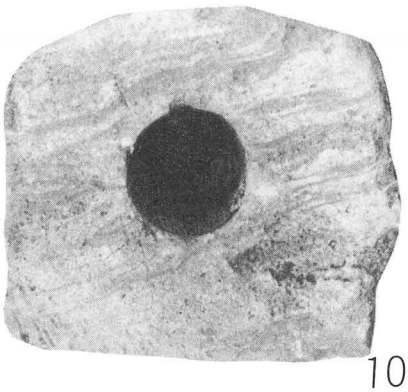



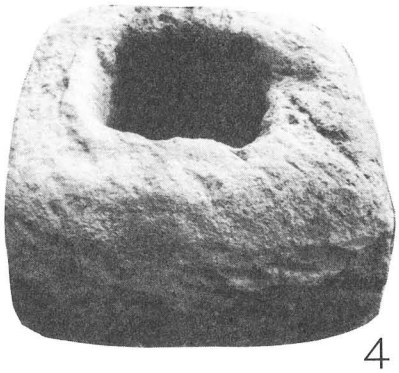


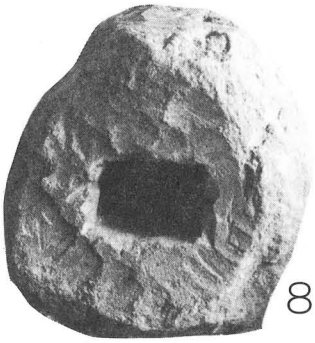



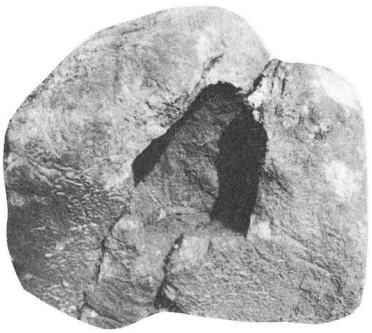






**第65図　石櫃諸形式**

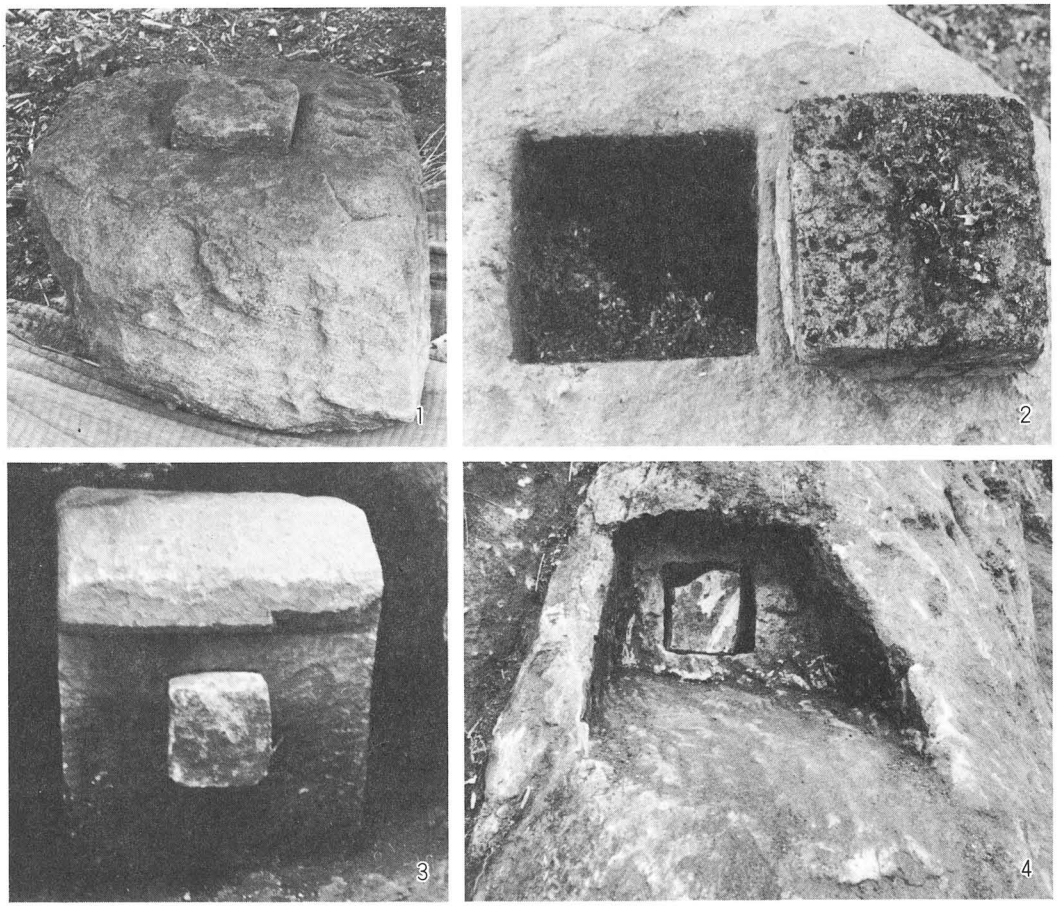
| | | |
|---|---|---|
| 1. Ⅱ－1号石櫃 | 5. Ⅲ－2号石櫃 | 9. Ⅲ－4号石櫃 |
| 2. Ⅲ－5号石櫃(身) | 6. Ⅲ－1号石櫃 | 10. Ⅲ－8号石櫃 |
| 3. Ⅲ－5号石櫃 | 7. Ⅲ－10号石櫃 | 11. 割山2号石櫃 |
| 4. 割山1号石櫃 | 8. Ⅲ－13号石櫃 | |

第22表　石櫃の形式と横穴

| 形　式　名 | 石櫃番号 | 横穴番号 | 集成図・挿図 | 形　式　名 | 石櫃番号 | 横穴番号 | 集成図・挿図 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | | | | Ⅱ | | | |
| 1－A－a－① | Ⅰ－7 | 17 | 63－5 | 3－B－b－① | 割　2 | 割　6 | 64－14 |
| | Ⅱ－1 | 24 | 63－1 | | Ⅲ－12 | 37～39 | 64－15 |
| | Ⅲ－5 | 29 | 63－2 | 3－B－b－② | Ⅲ－8 | 30 | 64－16 |
| | Ⅲ－6 | 29 | 63－4 | | Ⅲ－9 | 30 | 64－17 |
| | 割　1 | 割　6 | 63－3 | | Ⅰ－6 | 17 | 64－18 |
| 1－A－b－① | Ⅲ－11 | 36 | 63－6 | 4－B－a－① | Ⅰ－3 | 10 | 64－21 |
| 1－B－b－① | Ⅲ－4 | 27 | 63－7 | 4－B－b－② | Ⅲ－10 | 34 | 64－22 |
| | Ⅰ－2 | 9 | 63－8 | 4－B－b－① | Ⅲ－1 | 27付近 | 64－20 |
| 2－A－b－① | Ⅱ－2 | 26 | 63－9 | | Ⅲ－2 | 27 | 64－19 |
| 2－B－b－① | Ⅰ－4 | 12－1 | 63－10 | 5－B－b－① | Ⅲ－13 | 18－2 | 64－23 |
| | | | | | Ⅰ－1 | 8 | 64－24 |

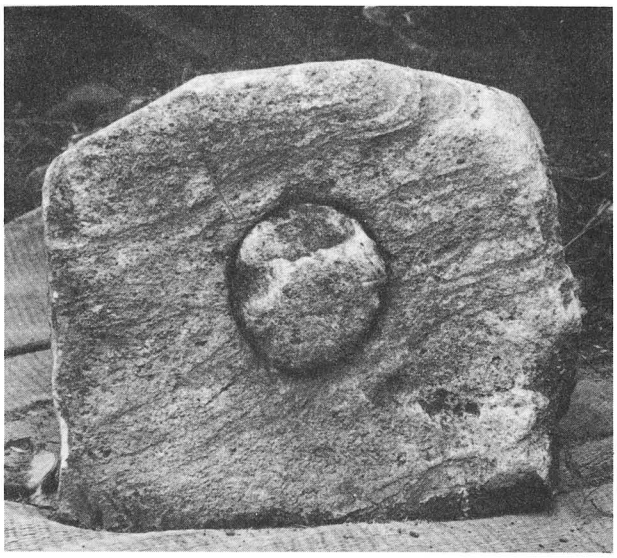
## 2. 蓋　と　栓

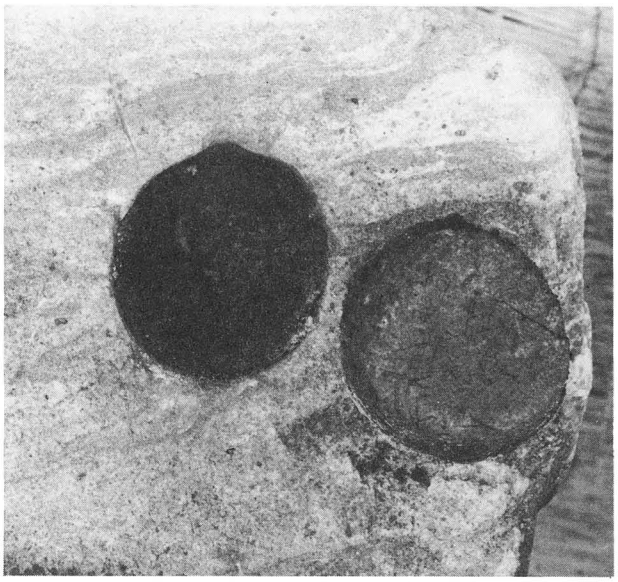
大北横穴群発見の石櫃は、直接火葬骨を納めたものであり、したがって一体分の大人の遺骨を納めた通常の刳り孔は、一辺40～50㎝ぐらいの方型のものである。ほかに、一辺10～15㎝ぐらいの小さい方孔のもの、径10㎝ぐらいの小さい円孔のものもあり、特にこの種のものは、横口をなす特殊なものが

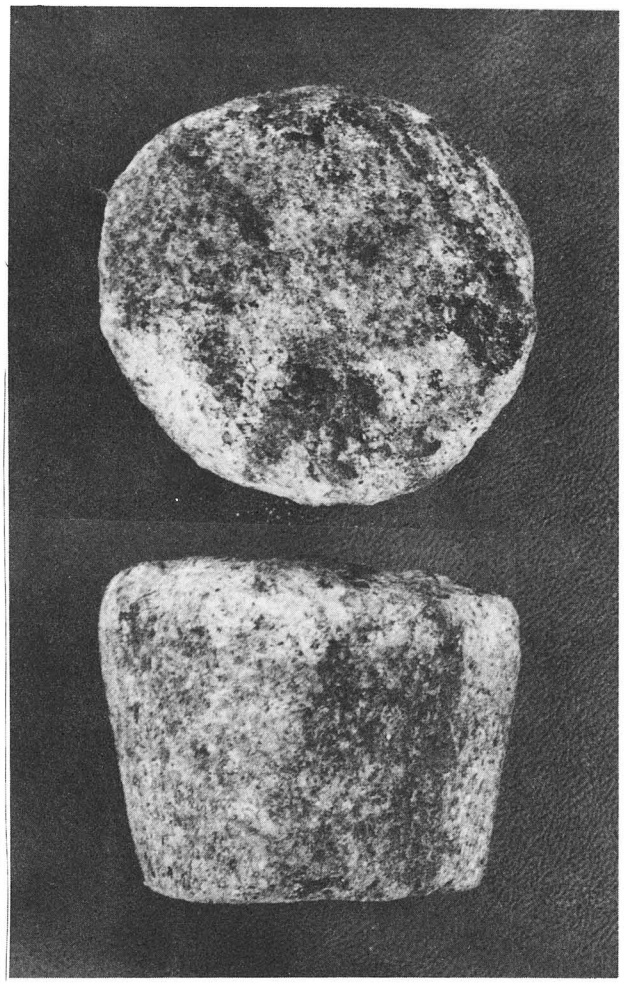


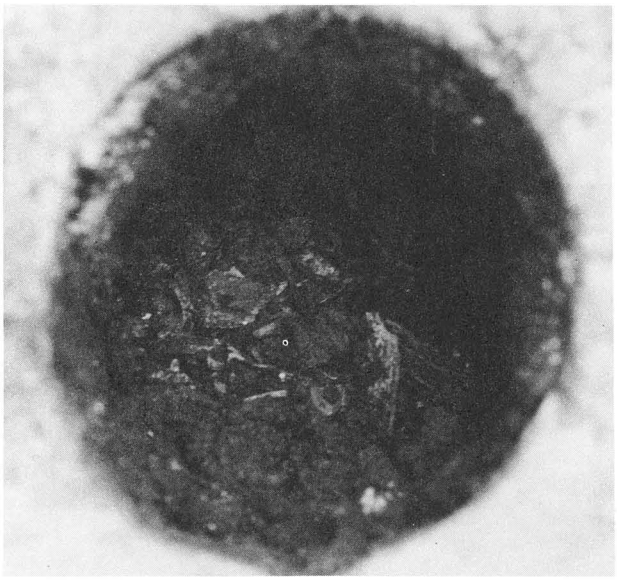
1. 2. Ⅲ－4号石櫃
3. Ⅲ－2号石櫃　4. Ⅱ－2号横穴

第66図　栓の諸形式









第67図　Ⅲ—8号石櫃とその栓

少くない。通常の大いさの方形の孔がうがたれている場合は、当然それを被う蓋が必要であり、この蓋は、身と一体になるように密着させている。身の孔のまわりに縁がある場合は、この外がわに蓋の刳り孔の縁が当たるように作られている。蓋の形式は、上方が四注造りをなし、四隅に稜角がおりている屋根型のものが普通で、29号横穴発見のⅢ－5・Ⅲ－7石櫃、17号横穴発見のⅠ－8石櫃の如きは、このような蓋と身とがそなわっており、ことに29号石櫃は、蓋をあけるにも困難なくらい密閉されている。

この他も、蓋はそなわっているとみなされるが散失している。しかし、若干遊離して発見されたものもあり、この中には定型ともいうべき四注造りの屋根型のほかに、かなり平たいもので、上面が浅く屋根型に加工している簡単なものもあった。

竪口系、横口系のいずれにせよ、小孔のうがたれている場合は、蓋というような概念のものでなく栓ともいうべき石材が嵌められていたものとみられる。ことに27号横穴発見のⅢ－4石櫃（Ⅰ－1－B－b－①型）は、方孔は上面で、15.4×16.4㎝、深さは19.8㎝のものであるが、これと17.0×16.3㎝、厚さ8.5㎝ぐらいの同形の方栓が堅く挿入されている。また30号横穴発見のⅢ－8石櫃（Ⅱ－3－B－b－②型）も、径11.2㎝ぐらいの円孔がうがたれているが、径11㎝ぐらいで、厚さ8.9㎝ぐらいの円い栓が挿入されている。これらは、下の方はいずれも狭まり、身の孔の形にも順応している。

竪口の大型方孔のある通常の石櫃の蓋は、他にも同型のものが多いが、小型の方孔又は円孔にこのような栓が挿入されていることは、大北横穴群に見られる一つの特色として看過することはできない。

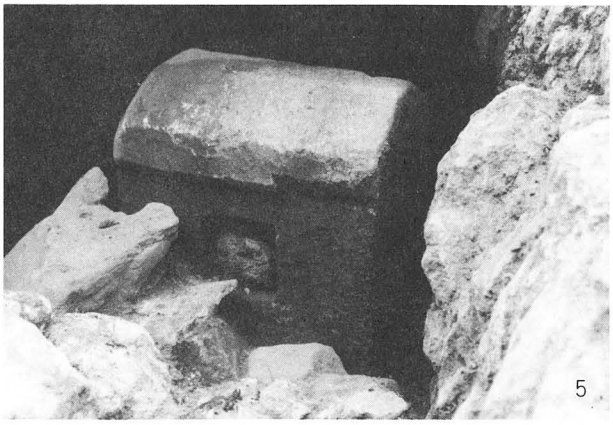
### 3. 大北横穴にみられる各形式の石櫃の関係

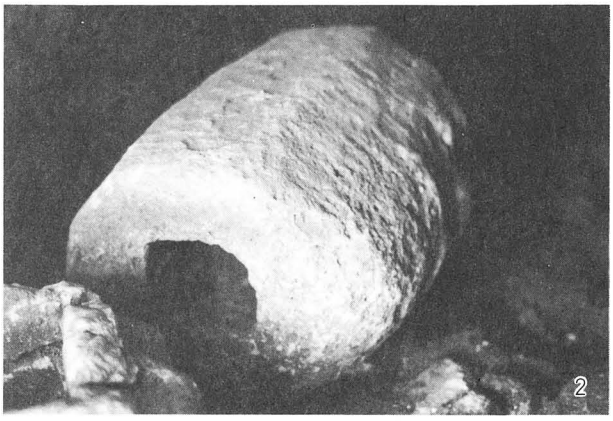
これらの石櫃は、横穴の内部に1箇あるもののほかに、2箇以上存するものもある。

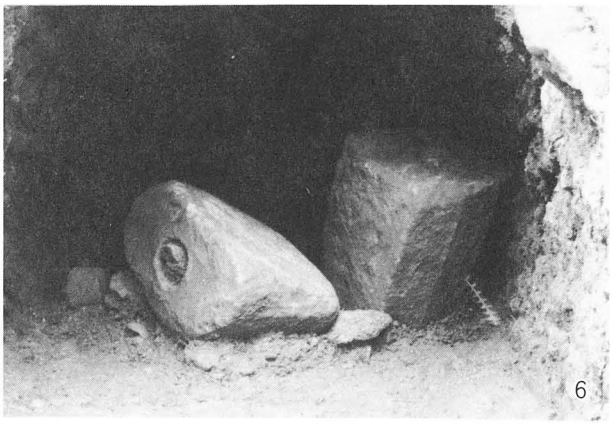
また、横穴の内部に、当初から安置された正常の位置にあるものもあり、後世盗掘等の際移動撹乱された状態で横だおしまたは俯せられてあるものもある。墓前域にあるものもあるが、この場合必ずしも後世の撹乱の除に内部から移動されたとはみなし難く、当初から墓前域又はその近くに安置され、若干

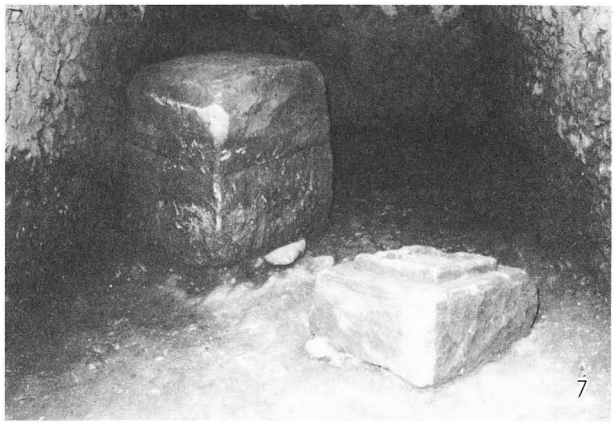
**第23表　石櫃とその出土状態**

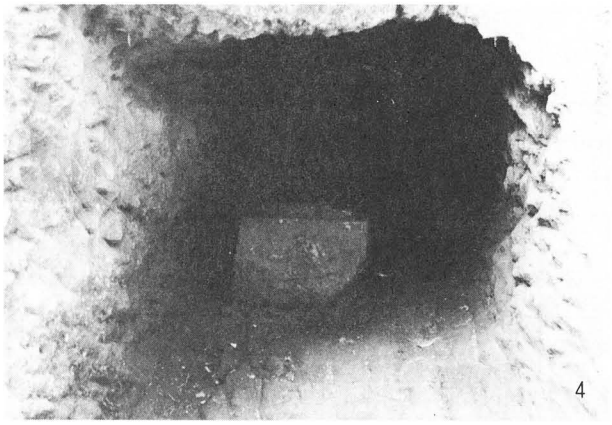
| 横穴番号 | 石櫃数 | 形式名 | 出土状態 |
|---|---|---|---|
| 8 | 1 | Ⅱ－5－B－b－① | 入口近いが、大体もとの位置とみなされる。横位。 |
| 9 | 1 | Ⅰ－1－B－b－① | 床の上面の撹乱されている覆土中。逆位。しかしこの横穴のものとみなされる。 |
| 10 | 1 | Ⅱ－4－B－a－① | 墓前域。下横位で覆土中。 |
| 12－1 | 1 | Ⅰ－2－B－b－① | 墓前域。床面に接し逆位。 |
| 17 | 2 | Ⅰ－1－A－a－①、Ⅱ－3－B－b－② | 正常な位置。玄室内中央から、やや奥まった壁に沿って存する。やや中央に近いものは蓋がある。 |
| 18－2 | 1 | Ⅱ－5－B－b－① | 床面中央 |
| 24 | 1 | Ⅰ－1－A－a－① | 床面中央 |
| 26 | 1 | Ⅰ－2－A－b－① | 墓前域。入口に接し、向って右の袖の部分にある。 |
| 27 | 3 | Ⅰ－1－B－b－①、Ⅱ－4－B－b－①<br>Ⅱ－4－B－b－① | 開口部礫群中。1は逆位、1は正位。 |
| 29 | 2 | Ⅰ－1－A－a－①、Ⅰ－1－A－a－① | 床面。原位置。 |
| 30 | 2 | Ⅱ－3－B－b－②、Ⅱ－3－B－b－② | 奥の部分。撹乱されているが、いちじるしい移動はない。1は横位。1は逆位。 |
| 34 | 1 | Ⅱ－4－B－b－② | 開口部。撹乱による移動を受けている。 |
| 36 | 1 | Ⅰ－1－A－b－① | 開口部。逆位。 |
| 37～39 | 1 | Ⅱ－3－B－b－① | 外部、表面から検出。 |
| 割山6 | 2 | Ⅰ－1－A－a－①、Ⅱ－3－B－b－① | 1は床面。正位。蓋もある。他の1は前面の覆土中。 |

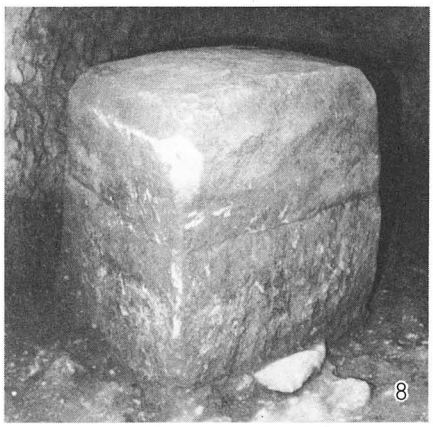





| | |
|---|---|
| 1. 17号横穴玄室内 | 5. Ⅲ—2号石櫃 |
| 2. 1—6号石櫃 | 6. Ⅲ—8・9号石櫃 |
| 3. Ⅲ—13号石櫃 | 7. Ⅲ—5・6号石櫃 |
| 4. Ⅱ—1号石櫃 | 8. Ⅲ—5号石櫃 |

**第68図　石櫃出土状態**

位置が移動したと考えられるものもある。横穴入口の脇に岩盤を利用して台を加工して安置したものもある。

第23表のように、これらを整理した。

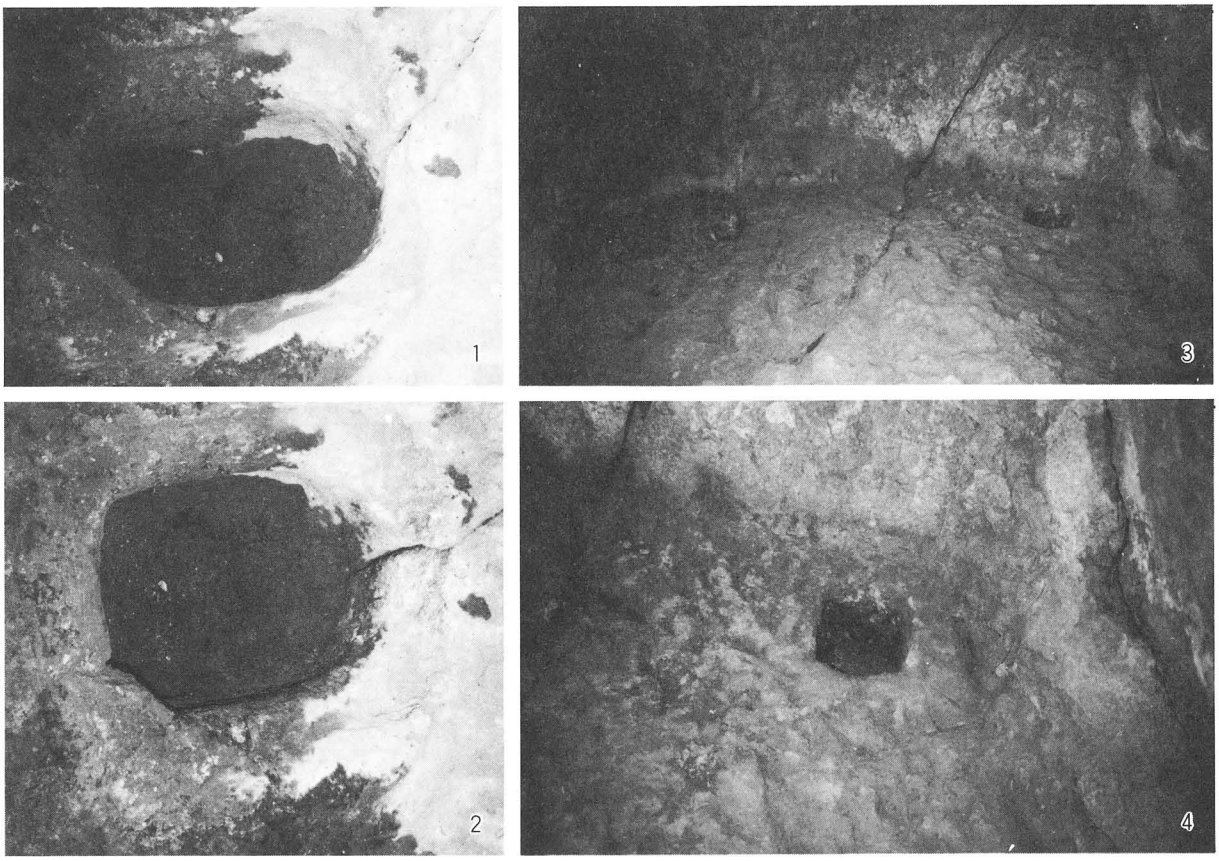
この表示で知られるように、24号（若舎人墓）をはじめ玄室床面中央近く正常な状態で安置されたことのうかがわれるものもあるが、若干撹乱移動されたものもある。しかし、重要なことは、1個のみでなく、2個安置されていたことは 12－1、17、29、30号の例で知られる。これらには、若干移動されたものがあるにしても、土葬における2人分の遺骸の安置と同一の葬法を示すものと思われる。27号のように3個のものも合葬の形式を示すものであろう。

墓前域にあるものとは、内部から移動されたものも考えられるが、すべては必ずしもそうでなく、入口の外部近く、又は墓前域の横わきなどに、当初から据えられたもののあったことも考えられる。このことは、26号において、入口に向って右わきに、岩盤を平らかに削って置いたもののあることによっても判断される。

### 4. 玄室内の床面に刳りこまれた小孔

38号横穴において、床面の左隅角近く、すなわち入口から奥壁に面するときは左側壁と奥壁との隅角近くの位置と、そこにうがたれた小方孔の存することがわかった。一辺12㎝、他辺13㎝、深さ12㎝ぐらいのものであり、石櫃の小方孔の大きさと共通している。

またこの床には、これと対称的な位置にあたる右隅角、すなわち入口から奥壁に向えば左側壁と奥壁と右隅角に当るところにも、一辺32㎝ぐらいの方状に浅く削られている箇所があり、方箱状の石櫃を据えた跡であるものと考えられる。この位置に据えられた石櫃が、通常の大いさの方孔のうがたれていた




1. 2. 大師山1号横穴
3. 4. 大北38号横穴

第69図　床面小孔の集成

ものか、または小型のものであったかは明らかでないが、恐らく後者と考えてよかろう。

さて、床面の左隅角の箇所に、13 × 13 cm、深さ 12 cmとの小方孔のうがたれていることは重要である。これとあわせて考えなければならない点は、本横穴群から 750 mはなれて存する大師山横穴群の 1 号横穴においても、床面の右隅角すなわち入口から奥壁に向って、その左側壁と奥壁との隅角に当るところに、小孔がうがたれていた事実である。この 1 号横穴は、石棺が中央に据えられていることによって重要な意義をもつものであるが、この床面の片隅に小孔があった。

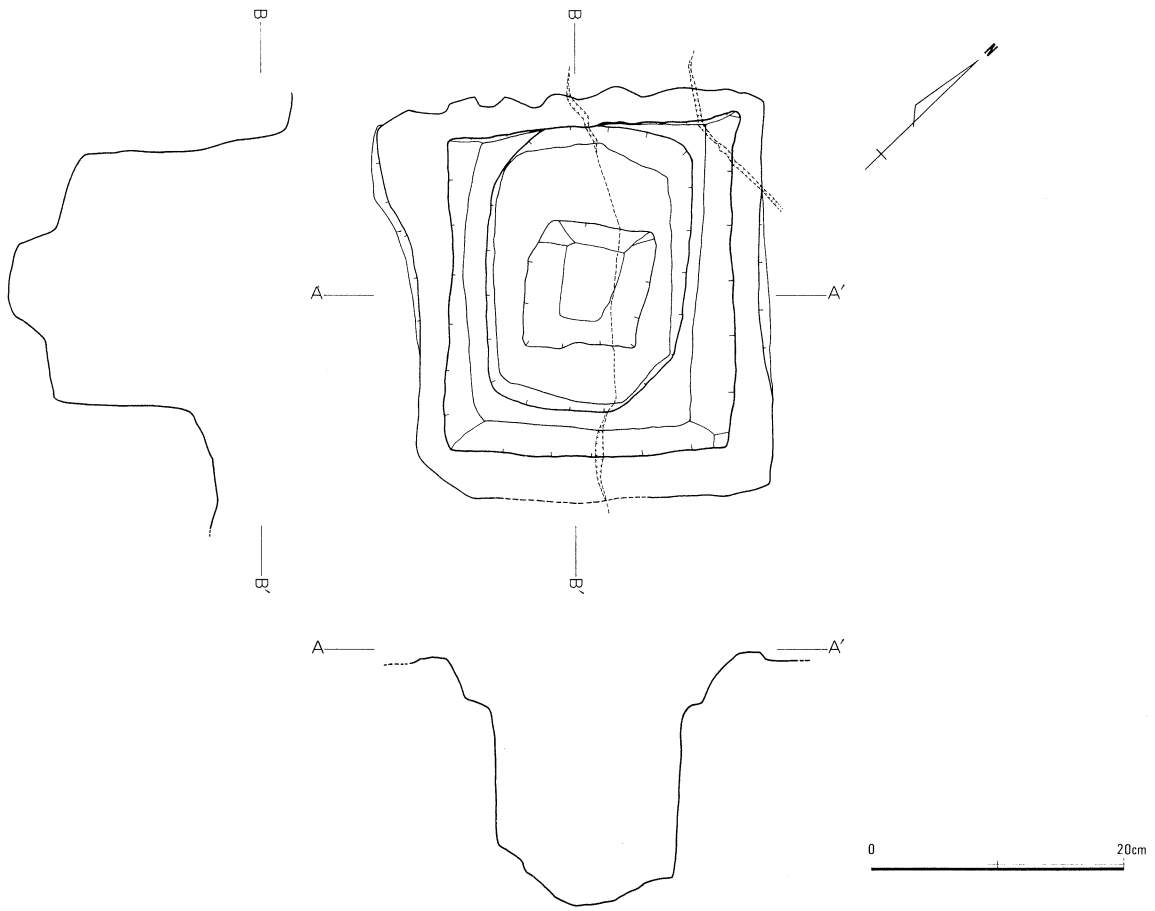
同じ形式の小孔であり、これらは石櫃にうがたれた小孔と性質を同じくするものと考えてよかろう。すなわち、石櫃を作って骨を納める方法をより簡略にし、直接床面に小孔をうがって納骨したことを考えてよい。

このように、石櫃の小孔のほかに、床面に直接うがった例もあるとともに、さらに岩壁に横穴状にほりうがった小型のものも又存在して、本横穴群を特色づけている。次にこれを述べよう。

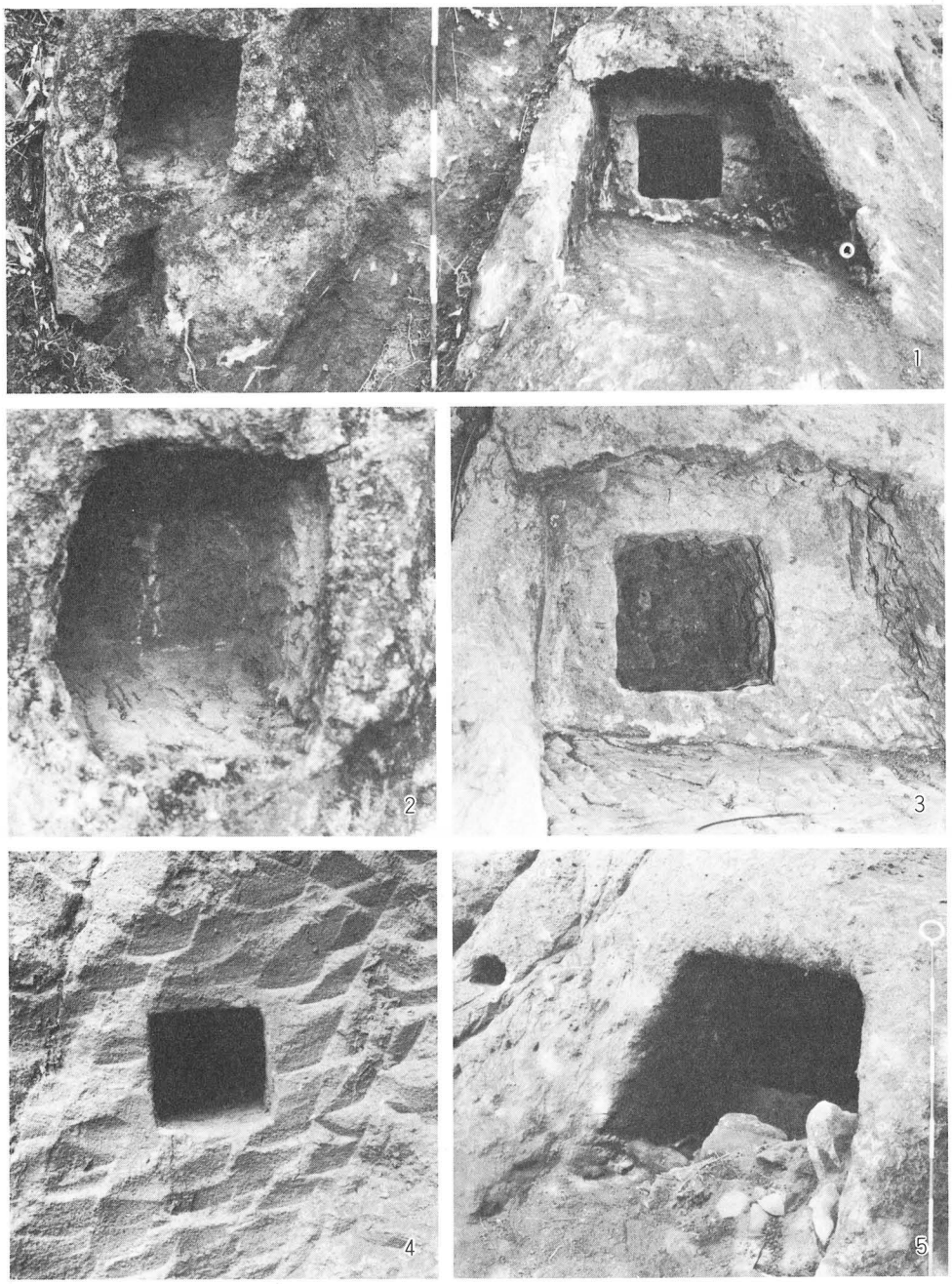
## 5. ミニ横穴

以上のように、石櫃の小孔及び床に直接うがたれた竪小孔もあるが、このほかに岩壁に直接横口式にうがった小方孔が 5 例ある。

横穴群の中にまじって、その外壁近くに、この種のきわめて小型の横穴の方孔が存する事実をたしかめたのは、第 I 次の調査のときであった。すなわち、第 I 次の調査の対象にした南の右端、すなわち岩




第70図　大師山横穴群 1 号横穴内床面小孔実測図



1. 11—1 号横穴・11—2 号横穴
2. 11—1 号横穴　3. 11—2 号横穴
4. 17号ミニ横穴　5. 36号ミニ横穴

**第71図　ミニ横穴集成**

壁に向えば、その左端の下位に2個の小孔が直接うがたれていることを発見した。しかも、その1には石栓のように扉が嵌装されている。最初の印象によって、ミニ横穴という名をつけたのであったが、超小型横穴でもあり、正確には、岩壁刳り込み横口式小方孔ともいうべきであろう。しかし、ここでは、わかり易くミニ横穴の名を用いたいと思う。この後、Ⅲ次調査で1例（36号横穴）が発見された。

また、36号横穴のわきにも1例あることが知られた。

次に、この各々について、私の観察したところを記述しよう。(本文第Ⅲ章第1節各横穴の構造と遺物の出土状態参照)

**1（11－1号横穴）**

12－2号横穴から、向って左の方約2.80mのところに、二つのミニ横穴がある。この12－2号横穴とミニ横穴との中間には、大きい岩塊が突出し、岩脈を異にする。向って左のものすなわち最も端のものを、1（11－1号）、左のものを2（11－2号）として説明する。

1（11－1号）は、墓前域がなく、直接玄門を彫っている。向って左は約30cmで岩脈が絶たれており、全体の横穴群の中でも最も左端に向って左端に位置するわけである。

玄門は高さ26cm、巾22cmの長方形で、向って左の側壁はやや弧状をなす。奥行は29cmで奥に入るにしたがい高さはやや低まる。横巾は中央で21cm、奥壁で20cm。天井部西隅は丸みを帯びている。

**2（11－2号横穴）**

向って左の方に隣接し、約5cmはなれている。間に岩隙がある。1号より約20cm低い。横穴そのものの形式をそなえ、墓前域とその側壁もととのい、玄門の上には屋根の屁状の出張りもある。墓前域は荒いのみの削り痕がある。墓前域の長さ78cm、巾49cm。半楕円状の拡がりをなし、その外端は、急に傾斜する。玄室は、墓前域の面より5.9cm高く、向って左寄りにうがたれている。玄門は高さ17cm、巾20cmで、方形に近い形状を示し、玄室の奥行33.0cm、奥壁は少し狭くなる。天井両隅は不整な隅丸であるが、よく普通の横穴と同じ形態を示している。1（11－1号）と同じように、小さい孔をうがった技術はこまかい。

なお、扉石ともいうべき蓋は、縦16.5cm、横19.3cm、厚さ8.8cmぐらいのもので、蓋としてきちんと玄門に挿入されている。

**3（17号横穴左袖）**

17号横穴に向って右にある。17号横穴の底辺から52cm、向って右側壁から49cmはなれて存する。この部分の岩壁は、特にミニ横穴をうがつために削って調整した痕跡がある。

玄門は10cm四方の小さいもので、奥行は21.0cm、奥の方もほぼ玄門と同じ形をなしており、完存の方孔といってよい。

**4（36号横穴右袖）**

36号横穴の墓前域の左がわ（向って）にある。この36号横穴の向って左には、岩壁が出張っており、この出張った岩壁の一部に35号横穴があるので、むしろこの横穴から測った方が便利である。すなわち、この横穴の入口に向って左の端から19cm、上縁から26cm下にある。

玄門の巾2.0cm、高さ11.3cmで不整な形の入口をなし、奥の方は狭まっている。長さ32.8cm。

## Ⅱ　考　　察

以上、石櫃・床面の小孔・ミニ横穴について、資料の整理を試みてきたのであるが、次にこれらを通じて考えられる2・3の問題を提起したい。

### 1.　石櫃の小孔・床面の小孔・ミニ横穴の容積

石櫃における小方孔または小円孔、床面の奥隅にうがたれた小孔及びミニ横穴は、それぞれ相関連しその納骨の問題を考えしめるものであるが、これを考えるに先だって、その大いさと容積とをあらためて検討したい。これらについて、第13表のように整理しよう。

第24表　石櫃における小孔

| 番　号 | 出土横穴 | 孔の形式 | 孔の大いさ | | | | 容　積（単位　㎤） | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 縦 | 横 | 径 | 深　さ | | |
| Ⅲ－4 | 27 | 方 | 15.4 | 16.4 | | 19.8 | 5000.588 | Ⅰ－1－B－b－① |
| Ⅰ－2 | 9 | 方 | 10.8 | 13.6 | | 12.8 | 1880.064 | Ⅰ－1－B－b－① |
| Ⅲ－11 | 36 | 方 | 13.4 | 12.6 | | 10.0 | 1688.4 | Ⅰ－1－A－b－① |
| Ⅰ－4 | 12－1 | 方 | 7.0 | 8.0 | | 8.0 | 448.0 | Ⅰ－2－B－b－① |
| Ⅱ－2 | 26 | 方 | 14.0 | 11.8 | | 5.0 | 825.000 | Ⅰ－2－A－b－① |
| Ⅲ－10 | 34 | 円 | | | 12.8 | 12.9 | 1659.126 | Ⅱ－4－B－b－② |
| Ⅲ－8 | 30 | 円 | | | 12.0 | 20.0 | 720.0 | Ⅱ－3－B－b－② |
| Ⅲ－9 | 30 | 円 | | | 10.0 | 16.0 | 1256.0 | Ⅱ－3－B－b－② |
| Ⅲ－2 | 27 | 方 | 12.0 | 11.4 | | 16.8 | 2298.240 | Ⅱ－4－B－b－① |
| Ⅲ－1 | 27 | 方 | 10.0 | 10.4 | | 8.9 | 925.500 | Ⅱ－4－B－b－① |
| Ⅲ－13 | 18－2 | 方 | 11.6 | 15.0 | | 16.4 | 2853.6 | Ⅱ－5－B－b－① |
| Ⅰ－1 | 8 | 方 | 7.0 | 7.5 | | 9.2 | 483 | Ⅱ－5－B－b－① |
| Ⅰ－6 | 17 | 方 | 13.5 | 14.0 | | 19.0 | 3591.0 | Ⅱ－3－B－b－② |
| Ⅲ－12 | 37～39 | 方 | 13.0 | (18.0) | | 18.2 | 4258.8 | Ⅱ－3－B－b－① |
| Ⅰ－3 | 10 | 方 | | 20.2 | | 23.8 | 1071.135 | Ⅱ－4－B－a－① |

この表によってもわかるように、500㎤内外のものが3例で、また2000㎤～5000㎤のものもあるが、これらは奥行きがかなり深い関係で、外表面の巾・縦巾・横巾ともに小さい。

ミニ横穴の場合は、最も小さい36号で、1800㎤である。ただ、石櫃の場合にせよ、ミニ横穴の場合にせよ、栓又は蓋がはまっており、この厚さも考慮する必要がある。

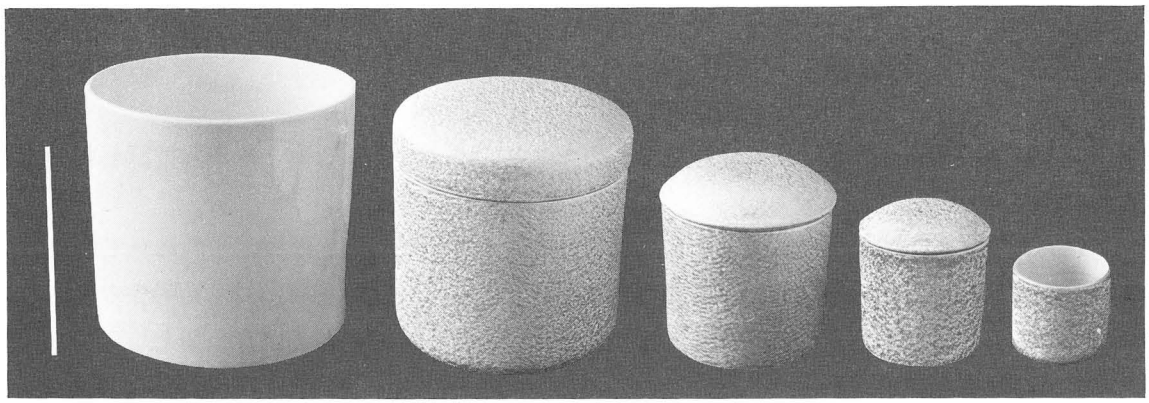
少くともこれらの内、500㎤内外のものは、大人の一体分の火葬骨を納置することの不可能なことはいうまでもない。では、幼児の一体分と解すべきであろうか。この問題は、次節で述べることにし、これらの小方孔・小円孔または床面の削りこみの孔・ミニ横穴の容積を火葬骨収納施設としてとりあつかうとき、現在における火葬骨壷の容積と比較することも必要である。

私は、現地滞在中、葬儀店の好意により、現在の火葬骨壷を借りて、その大きさと容積をしらべた。5通りあり、次のような結果になる。

これらの中、1は普通の大人のものであり、3・4は子供用であり、5は分骨用である。

第25表　現在の蔵骨器計測表

| | | 径 | 高さ | 容　積 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 大型 | 17.35 | 16.5 | 1241.7178㎤ |
| 2 | 中型 | 15.4 | 12.0 | 711.4800 |
| 3 | 小型(1) | 11.5 | 10.9 | 360.3812 |
| 4 | 小型(2) | 8.5 | 8.3 | 149.9187 |
| 5 | 小型 | 6.0 | 5.5 | 49.500 |



第72図　現在の蔵骨器の各種（白線は15 cm）

小方孔・小円孔の石櫃の場合、500㎤内外のものは、1に当る普通の大人のものよりは、はるかに容積も小さい。むしろ3・4の子供用のものに近い。

## 2. 石櫃の小孔・ミニ横穴の性格

前項によって知られるように、この種の小孔の中で深さの浅いものは、到底大人の一体分の火葬骨を納める大きさのものではない。この場合考えられることは、(1) 幼児の火葬骨を納めたか、(2) 火葬の骨の一部を納めたか、(3) または火葬骨を粉にしこれを袋のようなものに納め余分のものを蒔き散らしたか、ということであろう。

一般に、横穴の小型の場合、土葬によってなされたときには、年少者のものと考えられることが多い。茨城県勝田市十五郎穴の横穴群の場合にも、小型の横穴が存する。或いは、この種のものかも知れない。[註1] しかし、本横穴においては、火葬によるものであることに特殊性がある。幼児の火葬骨を納める施設の小孔もあったかも知れないが、石櫃として方箱状の定型のものにも小孔のものがあり、かつ小孔のある例があまりにも多い。また、29号横穴のように定型の方箱状で上面に小孔のあるものが2個含まれており、これは夫婦合葬の形式をとったものとも考えられる。

以上述べたように、もしすべてを(1)のように幼児のものとみなされ難い場合、大人の火葬骨の一部を納めたとする考えが成り立つ。この場合そのすべてが分骨という特殊な方法によったことを考えることも困難であろう。そうすれば、一部のみを納め、他は捨てたとする考えも無視できないが、しかし、それにしても孔はあまりにも小さく、火葬骨の一部としても無理な点がある。したがって、この考え方も適切でない。

このように考えると、(3)の如く火葬骨をかなり破砕したり、或いは粉にして直接又は袋嚢のようなものに納めて安置し、余剰の骨片や骨粉を蒔き散らすという方法が、この種の小孔に対しては最も合理的であったということになる。

また、口は狭いながらも深いものは、その容積からみて大人分の火葬骨を収めることも可能であるが、この場合には、火葬骨をかなり破砕しなければならない。したがって、通常の大きさの定型の火葬石櫃と異なり、やはり火葬骨を破砕するなり、粉にするなどして、納めたとする事が合理的である。ここに、日本において、この頃、土葬以外の遺骸処理で、一体どんな方法が行われていたかをあらためて検討する必要もあり、次のような方法が考えられる。

1　火葬して、その火葬骨をそのまま納める。
2　火葬して、火葬骨の一部を納め、他は捨てる。
3　一旦、遺骸を土中に埋め、骨のみになってからこれを火にあてて納める。
4　一旦、遺骸を土中に埋め骨のみになってから、これをそのまま納める。
5　一旦、遺骸を土中に埋め骨のみになってから、これを粉にして納める。
6　火葬して、その火葬骨を粉にして納める。
7　5または6の方法で粉にしたものを散らし蒔いてしまう。

以上である。この内、1は普通広く行われるものであり、2もまた、これと関連して行われたことが考えられる。

3・4は、再葬であり洗骨葬であり、また一種の改葬である。この問題は民俗学的に見ても重要なものであり、現在、この方面の論文も数多く発表されている。ことに、小松清氏の「光明寺の墓地における墓制について」には、洗骨習俗の存在する各地の例について、沖縄・奄美地方を別としても、80例をあげており、いかに多いかが知られる。[註2]

古代における再葬は、あらためて論議しなければならないであろう。

これを考古学の上から見ても、いくつかの資料が紹介されている。たとえば、徳島県鳴門市樋殿谷の石櫃内の人骨は、熟年男性の洗骨のものが納められたと報告されているが、4の方法によったものであろう。墓誌銘の上[註3]からは、鳥取県岩美郡国府町発見の因幡徳足比賣の墓の場合は、3の方法によったものとも考えられるのである。また、千葉県木更津市江川火葬墓の場合、蔵骨器の中[註4]に、成年(20—30歳)男子のものが約3分の1個体分はいっていたという。この方法かも知れない[註5]。

6は、或いは意外に思われるかも知れないが、7の散骨がこの頃、案外広く行われたことが考えられるのであって、その前提としての6も当然行われたものとみとめてよい。

奈良時代を中心とする遺骸処置の方法の中に、散骨という方法が、かなり多かったのではないかということは、私が機会あるごとに述べてきたことである。

まして、火葬骨を紛にし、これを納めることは、散骨[註6]とともに、行われた一つの風習であったろう。

なお、各地で発見される石櫃内の火葬骨で粉末状になっている例もしばしば報告されている。これらの報告は、その現状のみを記したものであり、永年の空気との接触により、たまたま粉末状になったものもあったであろう。しかし、6によったものもあったかは、再検討すべき余地もあるであろう。

本横穴群の場合、石櫃の小方孔、小円孔、又は床面の小孔やミニ横穴の如きは、火葬骨を破砕したかまたは6の如く粉にしたかを考えてはじめて了解されるものであろう。ことに、横口式のものなどは、ミニ横穴とともに、このような方法を考えて納得されるものである。なお、この場合も、粉にしたものまたは破砕したものを全部収めたものでなく、若干のみ袋に納めて孔に安置し、他は7のような散骨又はこれに準ずる方法によったものかも知れない。

従来発見されている骨壷の中で、いちじるしく小さく、しかも被葬者名や年次も明らかにわかる資料がある。奈良県宇陀郡内牧村大字八瀧発見の文禰麻呂の骨壷であり、これは、緑色のガラスの壷に骨を納め、さらにその外被として金銅壷があり、これを金銅箱に入れた[註7]丁重なもので、墓誌銅版が伴出しており、これによって慶雲四年(707)になくなった将軍左衛士府督正四位上文禰麻呂忌寸が被葬者であったことが知られる。ところが、ガラスの骨壷は身高17.20㎝、胴径は最大の部分で16.5㎝という小型であり、この大きさでは、到底一人分の遺骨を納めることは不可能であり、一部の骨を納めたか、粉にして納めたかのいずれかを考えなければならない。

また、福岡県宗像郡津屋崎町宮地嶽神社境内から発見された、金銅容器の中に納められている緑色のガラス製の蔵骨器も、身高約9.3㎝、胴径は最大の部分で13.6㎝。ほぼ同様の小型のもので、同じように、一部の骨のみ入れたのかまたは粉にして納めたものとしか考えられない[註8]。

他の地方で、骨を納める孔がかなり小さいことの報告されている例は必ずしも皆無ではない。たとえば、群馬県佐波郡赤堀村今井地内の多田山からは、十数個の石櫃が発見され、火葬墓群の痕跡を示すが、これらは身と蓋とをそなえている[註9]。

その1は径40㎝のほぼ円形の身で、径15㎝、深さ10㎝の円孔が蔵骨施設であった。この第2の例は小型のものといってよい。

しかし、大北横穴群に見られるように、より小型の孔をもつ石櫃の多数と形態の多様とは全く特異のものであり、ミニ横穴とともに、この地方にいちじるしく発達した特異な葬法と見るべきであろう。

### 3. 石櫃及びミニ横穴の編年的序列

大北横穴群からは、多種多様の石櫃が発見されており、かつミニ横穴とも称すべききわめて小型の横穴も存する。これらは、どのような編年的な序列の中におかれるものであろうか。

このことを考えるにあたっては、まず石櫃が内部に発見されている横穴において、須恵器が伴出している例を参考にすることが必要である。また、同一横穴に、2個以上の石櫃が存する場合は、これらが

家族のものであり、2個の場合は夫婦のものとする考えの前提のもとに、ほぼ年代の接近していることが考慮されるし、同一横穴内における相互の位置関係から、その前後の時期を推察することも可能であろう。

まず、Ⅰ－1－A－a－①という石櫃として定型ともいうべきものの存する24号横穴は、伴出の須恵器の上から7世紀後半の中頃から8世紀初頃という時期が考えられる。Ⅰ－2－A－b－①の形式の石櫃が発見された26号は、8世紀におかれるものとみなされる。

一方、Ⅰ－1－A－a－①とⅡ－3－B－b－②とが発見されている17号横穴も8世紀と考えられる。しかも、この場合、横穴内における位置からみると、Ⅱ－3－B－b－②の方が時期的に先行することも考えられる。

なおⅠ－1－B－b－①、Ⅱ－4－B－b－①、Ⅱ－4－B－b－①という3個の石櫃の発見された27号横穴は、8世紀後半と考えられ、Ⅱ－3－B－b－②、Ⅱ－3－B－b－②の2個の石櫃の存した30号は8世紀後半とみなされる。ほかに、Ⅱ－4－B－b－②の石櫃がある34号は8世紀後半、である。Ⅰ－1－A－b－①の石櫃の36号は8世紀後半である。

このように、伴出した須恵器の上から判断すると、方箱形で方孔の大型のものが上面にうがたれ、四注造りの屋根をもつ蓋をそなえる、石櫃として最も定型のものは「若舎人」の銘刻のある（24号）の8世紀初頃の頃と推定されるものであり、この形態のものは、8世紀後半までつづき、石櫃の定型をながく保持し得たものと考えられる。ことに、不整箱型で小孔のあるⅠ－1－B－b－①型のⅠ－2号石櫃は、その横穴内から発見された須恵器が8世紀前葉及び後葉のものであるが、土師器は8世紀前葉及び9世紀初頃に位置づけられるものがある。9世紀初頃のものは追納とみとめられるが、石櫃は8世紀後葉のものと考えられる。

これに対し、横口式の小孔をそなえ、家型または厨子型の特殊な石櫃は、27号・30号・34号横穴に示されるように、8世紀後半に発達したものとみなされる。

これらにより通常型のものは大きい主流を示すとともに、被葬者としての地位の一面をも示唆する如くである。

以上述べたように伴出した須恵器を中心として石櫃についての編年的な序列を考えたが、ミニ横穴はこれらの編年の中にどのように位置づけられるのであろうか。4例についてみると、まず横穴群の全体の在り方の中で、一様に下方に見られることが注意される。しかもその小孔は、横口式の石櫃の小孔とかわりない。この点から考えると、横口式の小孔の石櫃の発達した8世紀後半におかれるものではなかろうか。

また、36号に見られるような床面に小孔をうがった例は、石櫃に小孔をうがって納骨する方法をより簡略化し、石櫃を設けず直接納骨したものであり、しかも横穴になされている。これは、やがて岩壁に小孔をほりうがったミニ横穴に先行するものであり、小孔のある石櫃とミニ横穴との中間の存在とみとめられよう。

以上述べた石櫃及び床面小孔ミニ横穴の編年は、葬列上の一般の発達の上からも首肯されるものである。すなわち、火葬がこの地域で採用された恐らく8世紀初頭の頃、石櫃として用いられたのは定型であるⅠ－1－A－a－①型であり、この整った方箱形よりもやや形がくずれ不整になったものも次第に用いられたが、この定型のものは、8世紀を通じて主流をなして存続した。一方、火葬骨に対する措置が次第に簡略化されるにともない、竪口式の小孔をうがち、蓋でなく栓で密閉するという方法のものが発達した。しかし、これは火葬骨を破砕または粉にして処理する上の葬法上の大きい変革でもあった。さらに簡略になると、厨子型や家型のもので、横口式の小孔をうがつ方法も採用され、8世紀後半に行われた。もっとも、これは、石櫃の簡略化のほかに、竪口のものよりも、より水湿を少くするという合

理性或いは遺骸に対する礼拝のより自然的な位置をも考慮に入れたものかも知れない。

一方、床面に小孔を直接うがつものも発達し、さらに、ミニ横穴のようなものに簡略化されたものであったろう。

## 4. むすび — 8世紀の頃の火葬墓からみた大北横穴群の石櫃・床面小孔・ミニ横穴の地位

8世紀を中心として、わが国において火葬が広く行われ、火葬墓が営まれた。火葬骨は蔵骨器に納められ、単独に埋葬されたり、石櫃に納めて、土中に埋められたものもある。また、直接火葬骨を石櫃に納めて埋めたものや、洗骨によったものを石櫃に納めて埋めたものもある。

では、日本の各地でどのような形式の石櫃が発見されているであろうか。あらためてこれを考えて、本横穴群の石櫃の位置づけを明確にしたい。日本の各地から発見されるものを整理すると、およそ次のような各形式のものがある。

**1　方形又は長方形の石櫃、蓋は四注造りなどの屋根形。刳り孔は円。**

この形式が最も通例である。円形の刳り孔は当然、骨壷を納めるにそなえたものである。

丁寧なものは、刳り孔をもつ。京都府久世郡旧大久保村大字広野発見のように、平蓋のある方形櫃で、身の中央に円形の刳り孔のある例、大阪府南河内郡旧西浦村大字蔵之内発見のように、棟をそなえる蓋をもつ長方形の石櫃で蓋と身とに円形の孔のある例もある。[註10]

他に奈良県宇陀郡大字陀町大字拾王出土の例、奈良県北葛城郡香芝町穴出または奈良県桜井市忍陵発見（橿原市考古学博物館蔵）、旧京都府乙訓部旧大枝村大字塚原等その例が多い。[註11]ことに神奈川県川崎市主田8601遺跡では、高さ27㎝、一辺28㎝ぐらいの方形のもので円孔のうがたれているものが発見されている。蓋もそなわり、低い台状のつまみもあり、面取りもある。[註12]

また、岡山県小田郡矢掛町大字東三成における下道圀勝弟圀依母夫人墓は、蓋と身とをもつ石櫃に墓誌銘の刻されている銅壷が納められており、身は不整な方形で、蓋は傘状もなし、蓋の両側に小さい孔がうがたれ、身の縁を密閉する装置をなしている。[註13]

**2　方形又は長方形の石櫃で、方形・長方形、蓋付屋根形又は平蓋。骨を納めるための方形・長方形の孔のあるもの。**

徳島県鳴門市樋殿谷出土の例のように長さ85㎝、巾47㎝、高さ48〜50㎝ぐらいの長方形で、身には長さ42㎝、巾28㎝、深さ21㎝の長方孔がうがたれ、底は狭まっている。蓋は四注造りの屋根型をなすものがある。また、横浜市青木町三ツ沢大森山で発見されたものは、長さ37.5㎝、巾32㎝、高さ28.2㎝の方箱状の身で、中央に18.2×15.2㎝、深さ14㎝ぐらいの長方孔がうがたれている。屋根は四注造りと似て台形状を示す。[註14]

**3　円形又はこれに近い石櫃で、円形或いはこれに近い孔がうがたれているもの。**

群馬県佐波郡赤堀村多田山出土の例である。径40㎝のほぼ円形を呈し孔は径15㎝、深さ10㎝ぐらいの円形で、蓋は自然石のものを用いている。[註15]

ほかに、千葉県市原市姉崎町立野字金出台発見の円形の石櫃で、中央に円形の刳り孔があり、蓋も又円形である例も同様なものといえる。[註16]

**4　変形または多角形の石櫃をなし、円形或いは多角形の円孔がうがたれているもの。**

曽て、大正14年に、大阪府南河内郡旧西浦村大字蔵之内から発見された石櫃は、蓋と身とがそなわり、いずれも不整な六角に近い円形を示し、蓋は瓦棟を有していた。身には、口径16.8㎝、深さ12㎝の円孔がうがたれ、蓋にも同形の円孔がうがたれていた。[註17]

また、新たに紹介された東京都昭島市玉川町の例で、蓋と身とにわかれる。身は八角形で最大巾42㎝高さ32㎝、底径は20㎝。身の中央に径22㎝、深さ18.5㎝の円形の孔がうがたれている。　蓋もこれに[註18]

ふさわしく八角形で、一種の笠形を呈する。

**5　組み合わせ式の長方形の石櫃又は石圍的な施設をなすもの。**[註20]

神奈川県川崎市潮見台の例は、一種の組み合せの身をなすと考えられる。

ほかに、神奈川県座間市鈴鹿横穴においては、一種の石圍の状をなしている。[註21]

**6　平台状の大型の石を身とし、蓋に円孔をうがって、平台の身の中央に据えた骨壷をおおいかぶせるもの。**[註22]

特殊な例であるが、鳥取県岩美郡国府町伊福吉郎徳足比賣の例がこれである。

以上の諸例があり、これらは普通一個所に一例見られることが多いが、群馬県多田山[註23]の場合は、13個ほど発見されている。石櫃は直接火葬骨を納めたものである。また、徳島県樋殿谷の場合は、洗骨によった人骨を納めている。

これらを通じてみると、大北横穴群発見のⅠ型竪口系で、普通の大いさの方孔をもつものすなわちⅠの1－A－a－①、1－B－b－①、2－B－a－①型のものには、ほかに類似のものも少くない。

しかし、定型又は定型と近いこの種の石櫃は、大北横穴群において、8例という多数が発見され、しかも、横穴内であることに特色があるといってよかろう。

また、竪口式のものでも、径10－15㎝ぐらいの小型の孔のあるもの、すなわちⅠ－2－B－b－①型は、群馬県多度山において、径15㎝ぐらいの小孔のある例のほかは、現在のところ例は聞かない。

まして、横口式の諸形式、すなわちⅡの形式に属する例は、他に類似のものを聞かない。

しかも、単に1例のみにとどまらず、11例ほどが同一横穴群から発見されていることにおいて特殊である。ミニ横穴も同じである。床面に小孔のうがたれている例は、今後新たな目を向けることによって、その示例も加わるかも知れないが、現在のところ、大北横穴群と大師山横穴に指摘されるだけである。

このように考えると、大北横穴群のこの種のものは、きわめて特殊なものであり、日本の横穴の中でも特筆すべきものであることが知られる。

註1　『勝田市史』別編Ⅱ考古資料編　昭和54年

2　小松清「光明寺の墓地における墓制について」『史誌』12　昭和54年

3　末永雅雄・島五郎『樋殿谷出土蔵骨器関係資料』徳島県教育委員会　昭和37年

4　斎藤忠「鳥取県伊福吉部徳足比賣の墓について」『仏教史研究』10　昭和50年
『日本古代遺跡の研究』論攷篇　昭和51年

5　保坂三郎・神尾明正「千葉県木更津市江川火葬墓」（『日本考古学事報』10　昭和32年度）昭和38年

6　散骨については、斎藤忠「大蔵考」『日本歴史』3～5　昭和52年　『墳墓』（昭和53年）等に述べている。

7　東京帝室博物館『天平地宝』昭和12年

8　小田幸子「宮地嶽神社境内出土の緑色ガラス製骨壷」『月刊文化財』から　昭和43年

9　尾崎喜左雄「群馬県赤堀村多田山発見の火葬墓群」『古代学研究』15、16　昭和32年

10　和田千吉「奈良時代墳墓の考定に就いて」『中央史壇』12－4　大正15年及び『天平地宝』（前掲註）に紹介されている。浅田芳郎「河内国蔵之内の火葬墳墓」『大和考古学』2－4　昭和7年

11　和田千吉「奈良時代に於ける墳墓の一例」（『考古学』2－3）昭和6年

12　（前掲註7）

13　神奈川県史資料篇20　考古資料　昭和54年

14　梅原末治「備中小田郡に於ける下道氏の墳墓」『考古学雑誌』7－5　大正6年

15　（前掲註3）

16　和田千吉「奈良時代における墳墓の一例」（前掲註）

17　尾崎喜左雄（前掲註）

18　平野元三郎「上総姉崎町の火葬蔵骨器」『古代』29、30　昭和33年

19（前掲註11）

20　和田哲『昭島市玉川町発見の火葬墓』昭島市教育委員会　昭和55年

21　久保常晴「火葬墓」　潮見台遺跡調査会『潮見台』所収　昭和46年

22　下津谷達男「神奈川県座間町鈴鹿横穴古墳」『考古学雑誌』46－4　昭和31年

23（前掲註4）

石櫃を調査する斎藤団長

# 第3節　横穴掘鑿及び石櫃加工の道具について

1. 各横穴でのノミ痕の観察
2. 石材加工の道具―民俗例より―
3. 道具の復原
4. 横穴掘鑿の方法
5. 石櫃加工の方法と道具
6. まとめ

横穴の壁面及び石櫃の各面では明瞭にノミ痕が観察される。ここでは、これらのノミ痕の観察から、横穴掘鑿及び石櫃加工の方法及び道具等について考えてみたい。[註1]

## 1. 各横穴でのノミ痕の観察

各横穴でのノミ痕については、それぞれの横穴の項で詳述してあるが、これを整理すると第26表のようになる。

我々はノミ痕の観察において、V字状・ウロコ状・平行ノミ・打ち込み等の表現でノミ痕を分類した。これは多分に我々だけの呼び方であり、前二者は形状を、後二者は技法を示すものであり統一もとれていないが、現在のところ他に適当な呼称も考えつかないのでとりあえずそのまま使用した。

V字状：断面V字状の溝。一見するとツルハシ状の鋭利な先端を持った道具を想定できるが、V溝の断面の片側が平滑で擦痕があることから刃を壁面に対して斜めにあて、刃の片側だけで削り取る[註2]手法であることがわかる。この手法を脇刃手法とも呼んでいる。

ウロコ状：刃を壁面に対して平行にあて道具を細かく動かし連続的に削り取る。長さ4～8㎝の連続したウロコ状の痕跡を残す。打ち込まれたノミの刃は壁面の途中で止まり、長方形の連続模様をなす場合と、壁面の途中では止まらずにそのまま抜けて、不整なウロコ状の連続模様をなす場合とがある。[註3]

平行ノミ：壁面に対して平行にノミを走らせる。V字状が壁面に対してノミを斜めにあて脇刃を使用しているのに対して全面を使用しているものと理解できる。加えられた力は原則的には壁面内に留まり、長さ10～50㎝あまり走るものと、長さ5㎝程度の短いものとに分けられる。

打ち込み：壁面に対して直角に刃をあてて打ち込み、剥離させる。すべての横穴の奥壁でこの手法が認められる。

以上のような分類でノミ痕を観察してみたが、これらがそれぞれ異った道具によるものであるのか断定はできない。

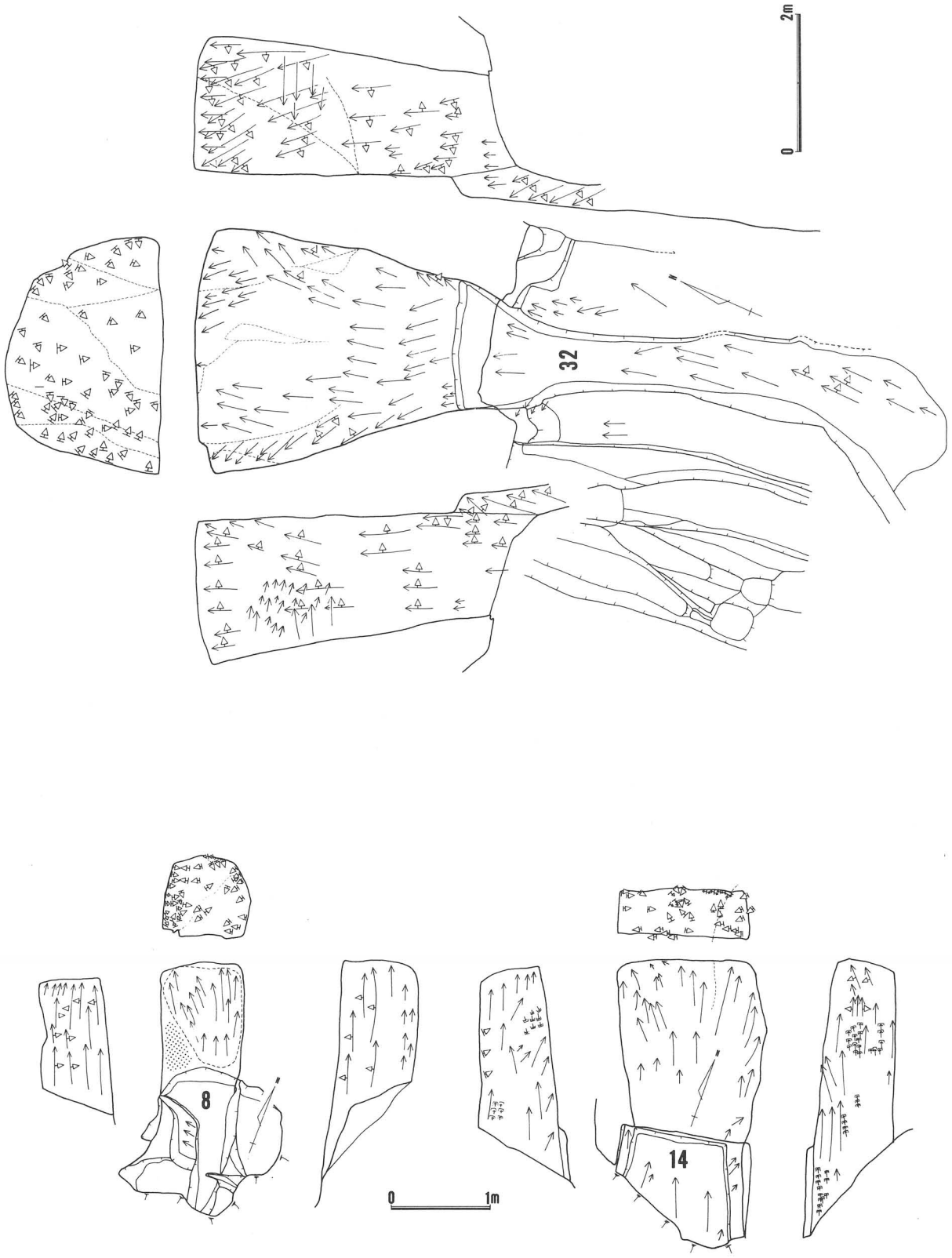
たとえば、8号横穴をみてみよう。右側壁は〝V字状〟で、1回の運動の長さは20㎝～30㎝で床面にほぼ水平方向に動いている。剥離は下半では上向き、上半では下向きである。このV字状の痕跡を残すノミは流れて奥壁との境界では奥壁に打ち込まれ巾を知ることができる。巾4.4～4.5㎝を測ることができた。

左側壁も基本的には〝V字状〟であるが上半部では平行ノミが観察できる。巾は両方とも4.4～4.5㎝で同一の道具である。天井も基本的には〝V字状〟であるが部分的には平行ノミも認められる巾4.5㎝が計測された。奥壁は荒い打ち込みによる剥ぎ取りで巾4.5～4.6㎝が計測できる。刃こぼれ、擦痕の状能

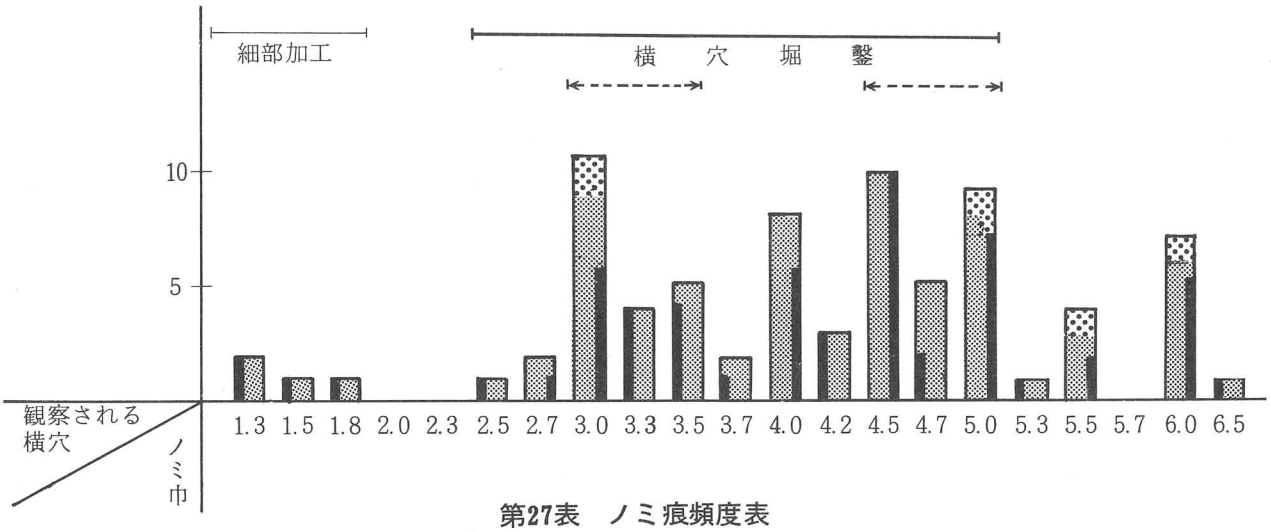
# 第26表　各横穴ノミ痕観察表

| 横穴 | 特徴 | ノミの種類 | 墓前域 ノミ巾 | 墓前域 特徴 | 床面 ノミ巾 | 床面 特徴 | 奥壁 ノミ巾 | 奥壁 特徴 | 右側壁 ノミ巾 | 右側壁 特徴 | 左側壁 ノミ巾 | 左側壁 特徴 | 天井 ノミ巾 | 天井 特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | 3 | 5.9、5.0 | | | | 5.5 | | | | | 開口部付近は細かいV字状 | 5.5 | V字状<br>わずかに平行ノミ | |
| 2 | | 4 | 5.5 | 排水溝の加工 | | | 4.5～4.6<br>4.0 | | 4.5～4.6<br>3.0 | V字状、中央部で上下整形　奥半に平行ノミ | 4.5～4.6<br>3.0、4.0 | V字状、中央部で上下整形 | 4.5～4.6<br>3.0 | | 4.5 棺内下面<br>3.0 棺上面 |
| 3 | | 1 | 6.0 | | | | 5.7～6.0 | | 6.0 | | 6.0 | | 5.7～6.0 | | |
| 4 | 整形良好 | 1 | | | | | 4.9 | 整形良好　打ち込み細かくていねい | 4.9 | V字状、細かい | 4.9 | V字状、細かい | | | |
| 7 | | 2 | | | | | 4.5<br>4.9～5.0 | | 5.0～5.2 | 左側壁に比してていねい | 5.0 | | | | |
| 8 | | 1 | 4.5 | | | 右前半の一部で手法が異る（ノミ痕が細かく不明瞭） | 4.5～4.6 | | 4.4～4.5 | | 4.4～4.5 | | 4.5 | V字状、平行ノミ | |
| 9 | | 2 | | | | V字状 | 2.6～2.7 | | 2.5～2.6 | | 4.0 以上 | | | | |
| 10 | | 1 | 4.7～4.9 | | | | 4.7～4.8 | | 4.8 | | 4.8 | | 4.8？ | V字状、平行ノミ | 排水溝 4.7 を使用 |
| 12－1 | | 4 | | | | V字状、開口部付近では細かくていねい | 4.5～4.6、4.8～4.9<br>1.3、5.6 | | | V字状 | | V字状、大きく惹い | | | 刃こぼれあり |
| 12－2 | | 5 | | | | | 3.0<br>4.6～4.7 | | 1.4～1.5<br>3.0、6.0 | 開口部付近上から下へのノミ(巾6.0)、中央部下半奥→開口部 | 1.8～1.9<br>2.9～3.0 | 開口部下半　上から下へのノミ（巾5㎝前後） | 1.8～1.9 | 平行ノミ、奥→開口部方向のものもあり | 右側壁奥半、左側壁、奥壁同一のノミを使用（巾3.0㎝刃こぼれあり） |
| 13－1 | 整形良好 | 3 | 4.0 | | 4.0 | 凹凸著るしい | 4.0～4.1 | | 4.5 | V字状、整形ていねい<br>ウロコ状 | | | 5.9～6.0 | V字状、側壁に比して惹い | 右側壁の一部にウロコ状あり |
| 13－2 | | 4 | | | 6.5 | | 4.0～4.1<br>6.0 | | | | 6.0～6.2 | | 6.0、5.0 | | |
| 14 | 整形良好 | 2 | | | | | 4.8～4.9<br>6.0 | | | V字状<br>ウロコ状 | 6.0～6.1 | V字状<br>ウロコ状 | | | ウロコ状の整形が各所に認められる |
| 15 | | 2 | | | 5.0 | | 3.3～3.4 | | | | | | 3.4～3.5 | | |
| 16 | | 2 | | | | | 3.9、4.2 | | | | | | | V字状、細かくていねい | |
| 17 | 整形良好 | 2 | | | | | 3.9～4.0 | | 3.9～4.0<br>5.0 | V字状<br>ウロコ状 | 3.9～4.0<br>5.0 | V字状<br>ウロコ状 | 5.0 | | 側壁にクラックを利用 |
| 18－1 | | 1 | 4.6～4.7 | | 4.6～4.7 | | 4.6 | | 4.6 | | 4.6 | V字状、部分的に平行ノミ | 4.6 | | 開口部上部平担面をつくり出す（4.6～4.7） |
| 18－2 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 21－1 | | 2 | | | | | 4.0、4.5 | | 4.0 | V字状 | 4.5 | 刃こぼれ痕あり<br>整形ていねい | | | |
| 21－2 | | 3 | | | | | 4.2～4.3 | | 4.2～4.3<br>3.5、4.5 | | 4.2～4.3 | | 4.2～4.3 | | |
| 23－1 | | 1 | | | | | 2.5～2.6 | | 2.5 | | 2.5～2.6 | | 2.5 | V字状、平行ノミ | |
| 23－2 | | 1 | | | | | 3.7～3.8 | | | | | | | | |
| 24 | | 3 | | | | | 3.5、4.2～4.3<br>4.5 | | | | | | | | |
| 25－1 | | 3 | 4.8 | 墓前域右側造り出し（打ち込み） | | | 3.2～3.3<br>6.0～6.1 | | | | 3.0 | 平行ノミを多用 | | | |
| 25－2 | | 1 | | | | | 4.6 | | 4.6～4.7 | | | | | | |
| 26 | | 2 | | | | | 4.5、3.0 | | | | | | | | |
| 27 | | 1 | | | | | 2.8～3.0 | | | | | | | | |
| 28 | | 1 | | | | | 2.8～3.0 | | | | | | | | |
| 29 | | 1 | | | | | 3.2～3.3 | | 3.3 | V字状<br>開口部付近 ウロコ状 | 3.3 | V字状<br>逆方向のものあり | | V字状 | |
| 3030 | | 2 | | | | 小きざみに使用 | 3.3～3.5 | | 4.0 | V字状 | | | | | |
| 32 | 整形良好 | 2 | 5.5～5.6 | | | | 5.0 | 打ち込み整形良好 | 5.0 | V字状<br>上から下への仕上げ整形 | 5.0 | V字状<br>上から下への仕上げ整形 | | ウロコ状 | |
| 33 | | 1 | | | | | 5.3～5.4 | | | | | | | | |
| 34 | | 1 | | | | | 3.1～3.2 | | | | | | | | |
| 35 | | 1 | | | | | 2.7～2.8 | | 2.7 | | | | | | |
| 36 | | 2 | 3.5 | | | | 3.2 | | 3.5 | | 3.5 | | | | |
| 37 | | 1 | | | | | 2.8～2.9 | | | V字状 | | | | V字状 | |
| 38 | | 3 | | | | | 3.1～3.3 | | 3.6 | | 3.1 | | 3.8 | 放射状 | 床面小孔の加工（1.3） |
| 39 | | 2 | 3.0 | 墓道は整形良好 | | | 4.0～4.1 | | | | 4.0？ | | | | |
| 40 | | 1 | | | | | 3.5 | | 3.5 | | 3.5 | | 3.5 | | |

※ ノミ巾の測定は、測定方法・部位等で同一人の測定でも数㎜の誤差がある。また2度打ち込まれたものを1時のものとして巾広に測定してしまうこともある。この表は変形させたデバイダーにより、確実なものだけをひろったものである。
測定方法は極力統一したが、調査の都合上、その測定は3人の調査員に分担せざるを得なかった。




第73図　32号・8号・14号横穴ノミ痕模式図




**第27表　ノミ痕頻度表**

から同一の道具と考えられる。床面は磨耗しておりノミ巾は測定できないがV字状痕が開口部から奥にむかって放射状に認められる。

以上のように8号横穴では、V字状・平行ノミ・打ち込みの3種のノミ痕が観察されたが、これらは巾4.4～4.6㎝の1種類のノミによってつけられたものであることを知ることができる。

次に上下方向に整形のある32号横穴を見てみよう。墓前域は、風化が著しくノミの刃巾を知る資料はすくなくないが、墓道左側から左袖にかけて巾5.5～5.6㎝を測る例がある。墓前域の加工には平行ノミを多用し、打ち込んで大きく剥ぎ取っている。墓道の加工は基本的にV字状で前方から開口部に向かっている。

玄室内は、基本的に巾5.0㎝のノミで加工されている。左右側壁ともV字状痕で奥に向かって若干下り気味である。剥離方向はほとんどが下方であるが、床面に接する付近においては上向きであることは興味深い。奥壁より1㎜あまりのところで上から下へ平行ノミによる整形が施こされている。それは玄室内で最も高いところである。奥壁も巾5.0㎝のノミによる打ち込みでていねいに整えられている。刃部の形態から側壁加工のノミと同一のものと考えてよい。打ち込みを細かくすることにより凹凸を少なくし、稜線を際だたせている。

以上のように32号横穴においても玄室内では巾5.0㎝のノミ1種類が観察される。

以上述べてきたように、意外に道具の種類のすくないのが指摘できる。第26表をみてみると、12―2号横穴が5種類と最も多いが、他は1～3種類程度が一般的である。また第26表のように使用頻度の多いものは、刃の巾3.0～5.0㎝のもので次に6.0㎝のものが比較的多い。1㎝台のものは細部の加工に使用されたもので横穴掘鑿の基本的道具ではなく、6.0㎝巾のものも墓前域で多く認められている。玄室内の基本的道具は巾3.0～5.0㎝のものと認めてよい。

## 2.　石材加工の道具―民俗例より―

ところで、大北横穴群のあるこの北江間の谷及び、大平山の西斜面内浦湾に面した静浦一帯では、現在でも採石は盛んで何ケ所かの採石場がありまた随所に放棄された丁場の跡が認められる。現在は機械化されてしまったが昭和初期までは手作業での石取りが行われていたとのことで、各種の道具を観察・記録することができた。これらの石屋の技術が時代的にどこまでさかのぼりうるのか問題はあるが、北村誠一氏は「静浦で行われた石屋の系統の技術は鎌倉時代から続いており、北陸から関東・東北にかけて行われていたものである。」[註4]としている。8世紀の技術に関連があるか否かは別として、まず、現在の

石屋の技術を観察しておくこともひとつの手がかりになるであろう。

ひとくちに伊豆石といっても安山岩系の硬い石から凝灰岩質の軟[註5]かいものまでその性質は様々であり、当然のことながら材質によって用途も異なるし、石工の技術や用具も大分違ってくる。静浦地区・大平地区から産出した石材は凝灰岩質の軟石系のもので、大北横穴群と比較するには適切なものである。

静浦では、多比・江ノ浦・口野などから石材が盛んに切り出されていた。山取り石屋と加工石屋の2通りがあり、漁業の副業として石屋をする者も多く、漁師石屋などと呼ばれもした。

山取り石屋は、石丁場で石材を切り出す職人で、技術も3～4カ月、半年あれば十分に修得できたといい、漁師の副業が多かったのはこの方である。

山採り石屋の道具は、両ヅル（ハヅル）・片ヅル・ゲンノウ・ウワマクラ・仕上げの5種類とヤ・テコ・定規・カッサジョレン・スコップ、そのほかに焼き入れ道具として焼き台・フイゴ・ウワナラシ・柄抜きなどがある。

ツル（両ツル）[註6]：ツルハシ状の鋭い先端を両端につける。両ヅル・山ヅルとも呼ぶ。石材を切り出す際の筋溝をつけるのに用いる。約3.8㎏、一貫目ほどの重量を持つ。

片ヅル：片側がツルハシ状となり、片側は巾4㎝程度の柄に対して平行に刃のついたいわゆる縦形の刃になっている。この刃のところで掘る筋をつけ、片ツルの尖ったほう又は両ツルで掘る。両ツルより若干軽く3㎏程度である。

ウワマクラ：形態はツル・片ツルといっしょだが、重量が1㎏前後で約3分の1と軽い。マクラハライともいい、作業の最も初期の段階で岩盤の上下に溝を切るのに用いる。

シアゲ：石材の仕上げ用に用いるもので、両方に刃を入れる穴のあるものと、片方のものとがある。片方のもののほうが後出のようで、ゲンノウと同様に他の一方で石の出っ張りを落とした。サシバも同様の用途に用いたという。

ゲンノウ：石材の仕上げ用に用いるもので片側に刃を差しこめるようになっているものと、一体化したものがある。

以上、両ヅル・片ヅル・ウワマクラ・ゲンノウ・仕上げの5種類が1組で、専業の石屋は1種類の道具を2・3丁持っていたが、副業の石屋はひとそろい5丁だけだったという。道具のバラエティは意外にすくないといわざるをえない。それで一応の仕事ができた訳である。

加工石屋（仕上げ石屋）は、山から切り出された石材を加工する職人で、その技術を修得するには3～4年の年期が必要であった。明治末から昭和にかけて堀・石塔・倉・煮干し釜のカマド・風呂などを作ったという。道具としてはタガネ・ゲンノウ・サシバなどを用いた。

用途に応じて様々な道具が工夫された様でサシバにしてもゲンノウにしても、同じ名称でありながら形態の全く異るものもあり、また重量も、さまざまである。

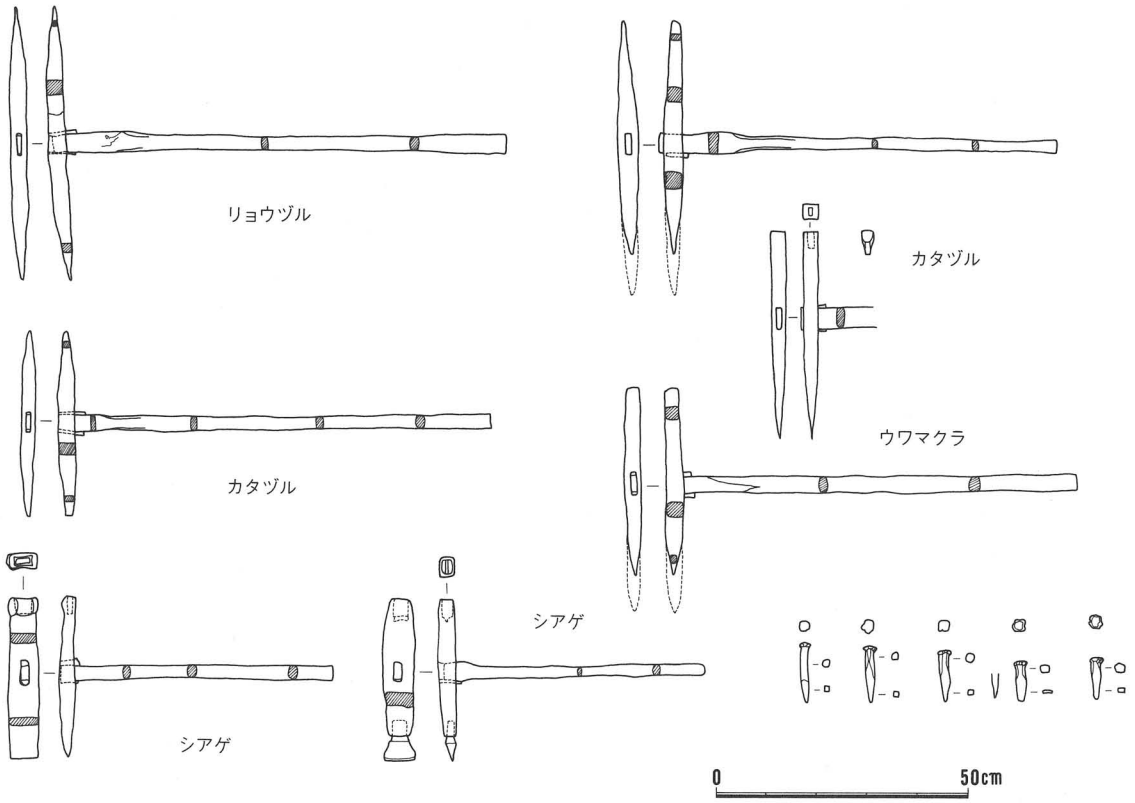
第74図には静浦及び伊豆長岡で採集した道具を列挙した。組織的に採集したものではなく、名称も聞き取りをそのままにしているので、当地方の一般的な呼称であるかどうかは問題が残る。

石工の道具について逆のぼれる最も古い文献資料は、鎌倉時代の作といわれる鎌倉光明寺蔵の『当麻曼荼羅縁起絵巻』である。この中に、天智天皇の時（667～670）染寺の奇石に石仏を彫る場面が描き出されている。それを見ると、足場を作り石像を彫刻している4人の石工が、それぞれ手に道具を持っているが、それはイシノミに類するもので、片刃の平タガネ・先端の尖ったノミを使用しており、片手ハンマーと思われる槌も見ることができる。[註7]

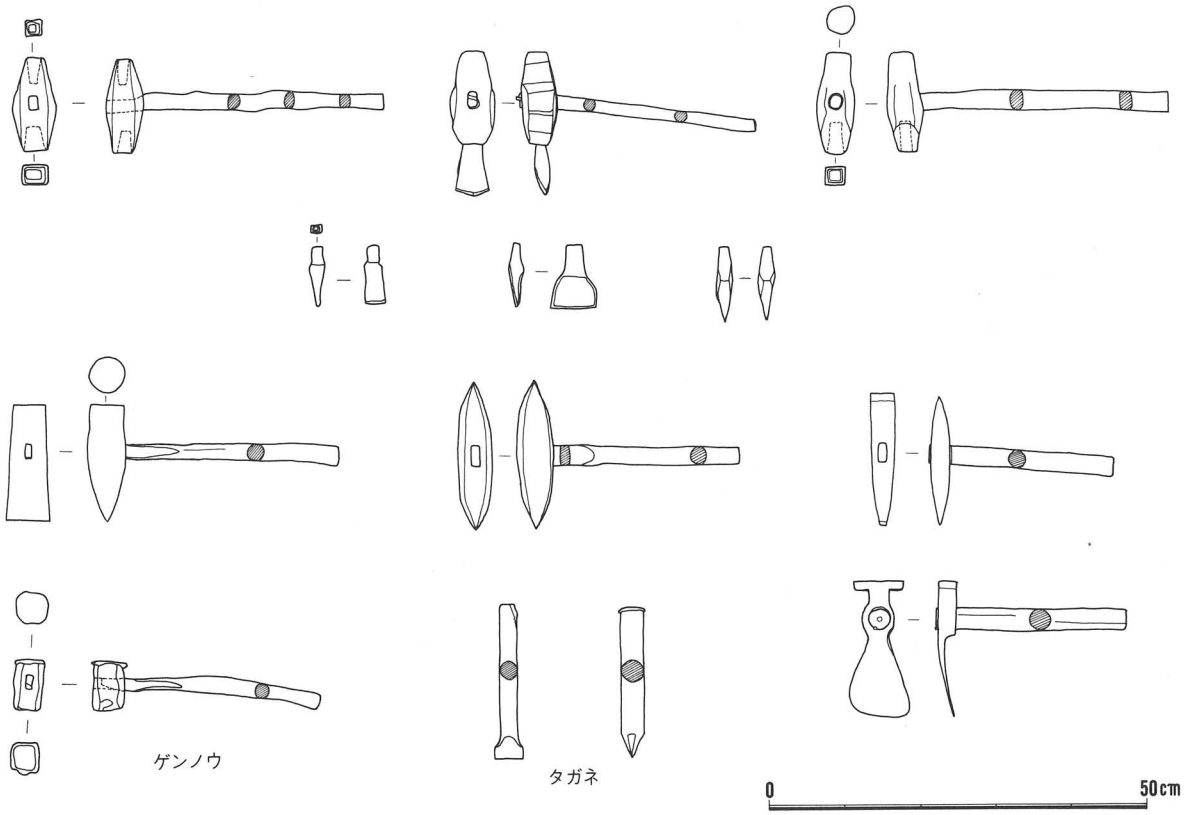
その他、文献に記載された石工具としては、

『人倫訓蒙図彙』：「石伐」道具に矢士龍、玄能などいうものあり、鉄にて是をつくる。[註8]

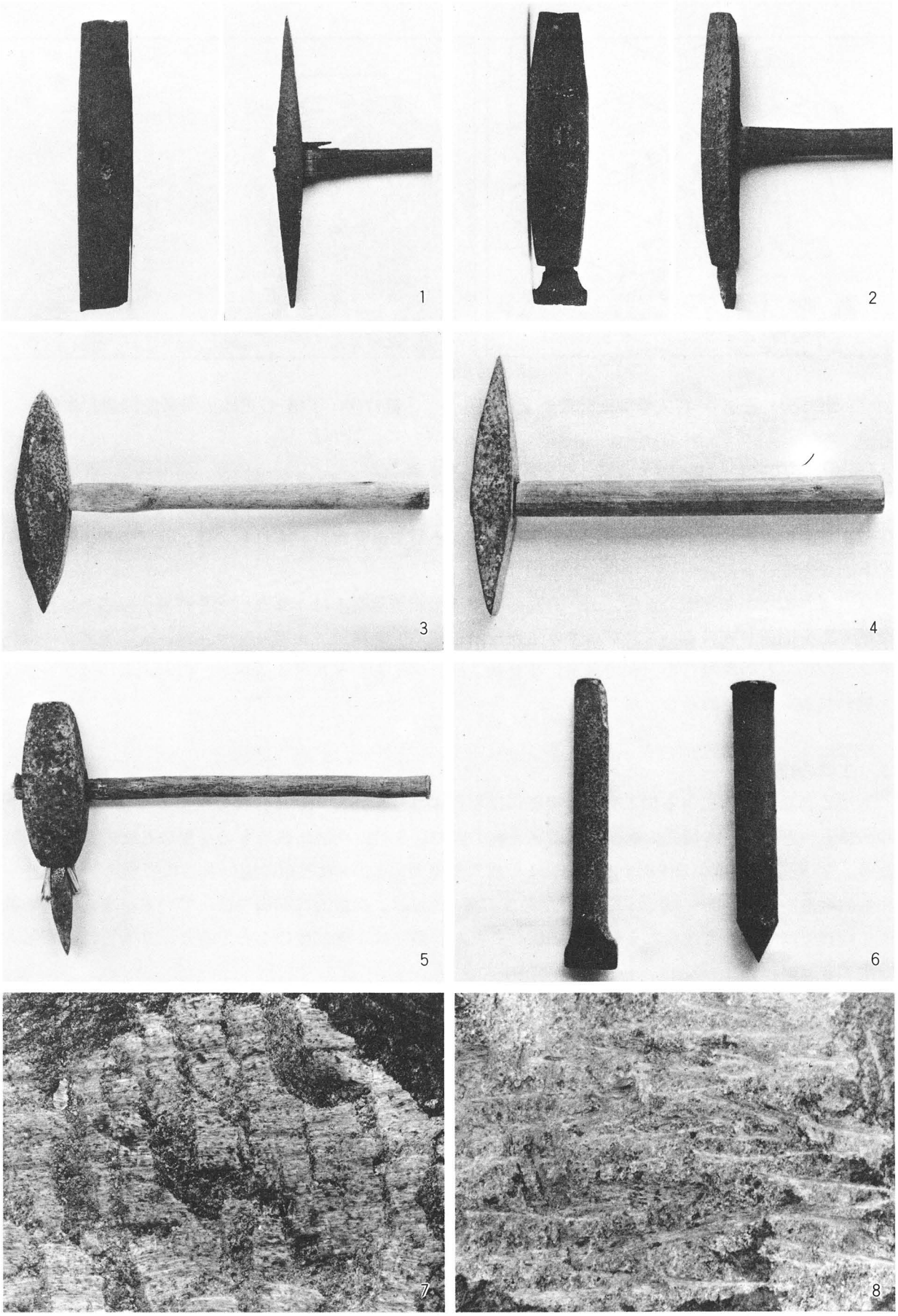
## 山採り石屋の道具



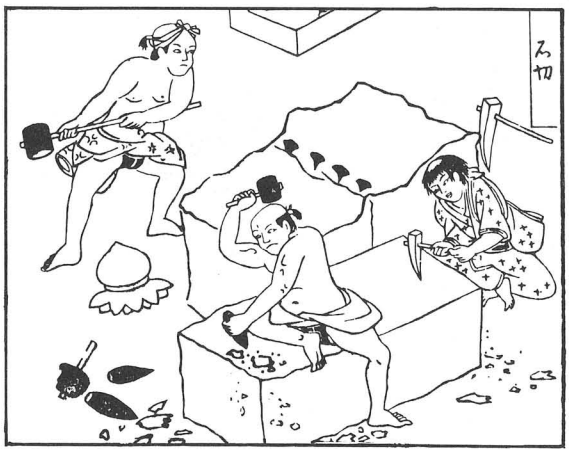

## 加工石屋の道具




第74図　石屋の道具　①




第75図　石屋の道具　②



第76図　石切り（『人倫訓蒙図彙』より）　　第77図　丁場（『日本山海名産図会』より）

『和漢三才図会』：鉾（かなつち）・鎚・大堆、今云源翁之属乎、源翁。

『石垣秘伝』：源翁、石矢、石鑿、鑿鑵（のみつち）、石たたき、はつり。[註9]

などがある。[註10] 対象とする岩石がどのようなものか不明であるが、いずれも〝槌〟と〝のみ〟が道具の基本となっている。

また『日本山海名産図会』巻之二、石品の項で「讃州豊島石」ほか4葉の図を掲げ、採石から加工までの工程を図示している。これをみてみると採石の基本的道具は、大型ハンマーとノミと矢で、その他グンデラ様のものを見ることができる。[註11] また加工は、ノミとツチが基本道具で、両刃あるいはグンデラと思われるものを認めることができる。

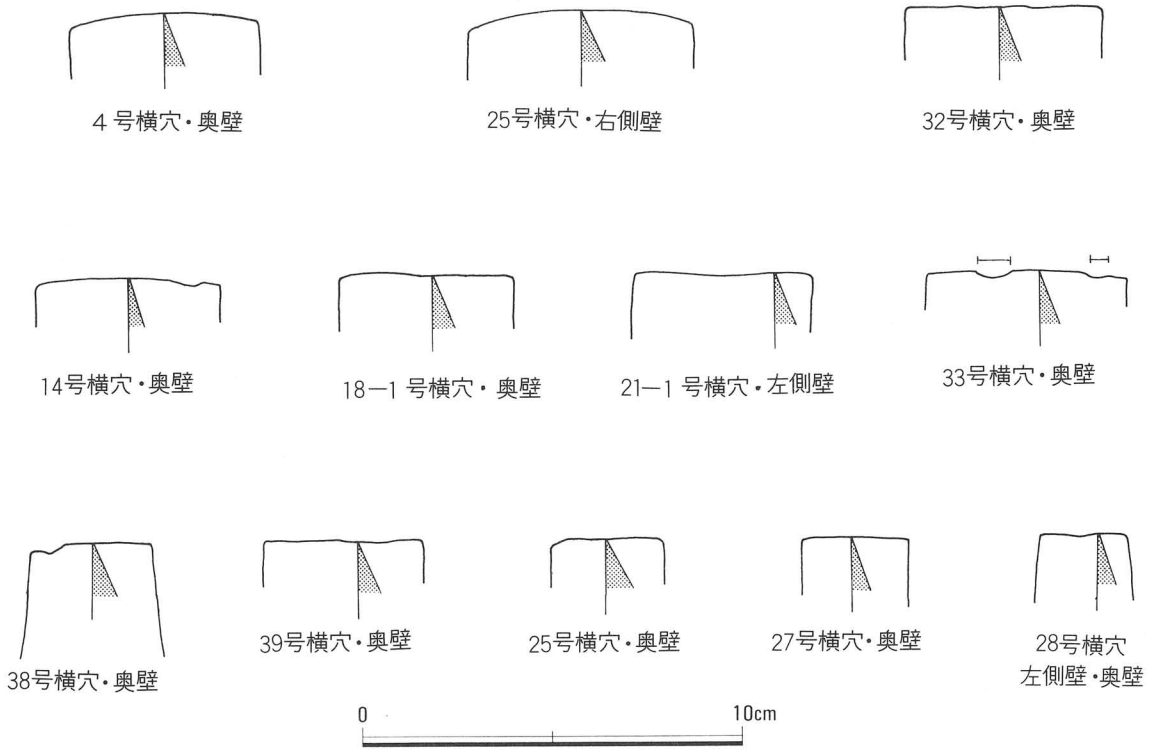
### 3.　工具の復原

さてこれらのノミによる加工痕が、実際にはどのような道具でつけられたものであろうか。その手掛りのひとつとして、各横穴の壁面に残るノミ痕の中で、比較的明瞭に残るものを集成したのが第78図である。25号横穴奥壁の巾6.0㎝のもの、4号横穴奥壁の巾5.0㎝など巾の広いものに弧状の刃線を持ったものもあり、巾3.0～4.0㎝の最も使用頻度の多いものは、直線的な刃線を持っている。また横穴の壁面の観察では片刃と考えられそのように図化したが、痕跡は1㎝前後のことであり、片刃とは必ずしも断定できない。

また第78図[註12]3、4、5、9、11のように刃こぼれのあるものが随所に観察されている。また同一横穴内で、同じ巾で同一のノミと考えられる痕跡で刃こぼれのあるものと刃こぼれのないものとが認められ、しかも刃こぼれのあるものが先に使用されたと考えられる状況が観察されており、刃を焼き直しながら掘鑿を進めていった状況を想定することができる。

さて、先に現用の石屋の道具をみてきたがこれらの道具を実際に使用した時の痕跡と横穴の壁の痕跡とを比較して考察を加えてみる。[註13] ツル・ウワマクラは断面V字状というよりU字状の筋を形づくり大北横穴群中ではこれの使用は認められない。問題はシアゲとサシバである。いずれも面に平行に刃をあてると第75図のように平行ノミとしたものに非常に類似した痕跡を残す。また刃の脇を使用するとV字状と表現したものに非常に類似した痕跡を示す。

〝シアゲ〟〝サシバ〟を短絡的に横穴掘鑿の道具と結びつけるのは問題があるが、[註14] 今まで、ゲンノウと鑿（タガネ）という組み合せで理解されていた横穴掘鑿の道具に対する考え方を転換する必要はあると




**第78図　各横穴ノミ痕実測図**

思われる。

これをふまえながら壁面観察から、道具の復原に関連する問題点を整理してみよう。

• 2号・32号等にみられる上から下への整形は、大型横穴に特徴的に認められるものであり、曲面に対して上から下へノミを動かすためには振りあげて弧を描きながら削り取る道具が想定できる。またこの場合の刃は柄に対して直角につけられたいわゆる横斧でなければならない。

• 側壁及び天井では20～30㎝の走行を持つノミ痕が観察されている1回の打鑿[註15]で数10㎝を一気に削り取るにはかなりの重量のもので大きな力を加えなければならない。タガネとゲンノウで小刻みにたたいた場合、1回の打鑿でノミの動くのは数㎝であり、またずれを生じさせないためにはかなりの努力が必要である。重量のある大型のものでなければならない。

• V字状痕の剥離方向が下向きで、開口部から奥に向かって斜め下方に若干の弧を描いてつけられている。弧を描くことは柄のついた道具を想定させる。しかも弧に対して直角にノミ痕はつけられており、弧の中心（運動の中心）の手と刃部を結ぶ線、すなわち柄に対して直角に刃がつけられていなければならない。

• 開口部から奥に向かってのノミ痕の方向は、手斧様の道具の可能性を否定する。すなわち、手斧の場合は手前から手元への運動方向であり、痕跡の最終点よりも前に身体をおかなくてはならない訳で、横穴内でこの作業姿勢をとることは不可能である。

以上みてきたように、横穴掘鑿の基本的な道具は柄のついたいわゆる横斧を想定せざるを得ない。民俗例であえてあてはめるとすれば、シアゲ・サシバのようなものが想定される。

では具体的な遺物としてそのようなものが残されているのだろうか。残念ながら今までの発掘調査例からはそのような遺物は報告されていない。非常に特殊な道具であり、類例がなくてもなんの不思議も

ないとの考え方もあるが、当時の鉄は貴重品であったと考えられるので、全体を鉄で作るということは無理のあるところであり、ある種の鉄斧を先端につけ使用したと考えたい。[註16]

### 4. 横穴掘鑿の方法

今までノミ痕からどのような道具であったかを考えてきたが、さて、これらの道具をつかって、横穴がどのようにして造られたのか。完成するまでの途中経過を知る資料はなく、現状での横穴の加工の状態の観察から、推定するしかない。本大北横穴群においては整形のための加工と思われるウロコ状・平行ノミの痕跡を持つものと、V字状痕のみのものとが認められ、次の2段階を想定することができる。

I. 荒掘り段階のままのもの

V字状痕が左右両側壁及び天井に残り、奥壁は打ち込みとなる。その中でも不規則なものと（Ia）、規則的に明瞭に残るもの（Ib）がある。[註17]

II. 整形のための加工の加わっているもの

V字状痕の凹凸を側壁に平行にノミをあてて削り取っていくもの（IIa）と、上から下へ削り取っていくもの（IIb・c）とがある。

IIa. ノミを側壁平行にあてて面を整えるもの：V字状痕の凹凸を、側壁に平行にノミをあて削り取っていく。動きの小さな平行のみ、あるいはウロコ状のノミ痕が観察される。13—1号、14号、17号など小型のものが多い。

IIb. 上から下への整形を加えたもの：荒削りをした上で、上から下への方向での整形を加え壁画の凹凸を整える。奥壁は基本的には打ち込みによるはぎ取りであるが、打ち込みを細かくして面をととのえている。

IIa・IIbを比較すると、これは整形の手法のちがいであり、IIaは13—1号、14号、17号等比較的小型の横穴で認められるのに対し、IIbは2号、32号など大規模な横穴に多い。横穴の規模の大小、短的にいえば、作業姿勢に起因するものと考えられる。

**第28表　横穴の加工の状態**

| | 状　態 | 横　穴 |
|---|---|---|
| I | 荒掘り段階 | |
| | a. V字状痕が荒く粗雑 | 8、21—2、23—1、24、28、30 |
| | b. V字状痕が細かくていねい | 1、3、10、13—1、15、25—1、26、29 |
| II | 整形されているもの | |
| | a. 横整形 | 14、12—1、13—2 |
| | b. 上下整形 | 2、32 |
| | c. ウロコ状上下整形 | 17 |

さて、以上のような壁面の観察を横穴掘鑿の順序を考えてみよう。IIの整形されている横穴においてこの整形のためのノミ痕を取り除き整形前の状況をみてみると、側壁は基本的にV字状痕でなり奥壁は打ち込みと、手法のちがいはない。ノミ巾においても例えば、2号は4.5㎝、32号5.0㎝、12—2号3.0㎝、13—1号4.0㎝、14号4.8～4.9㎝のものを多用しており、他の横穴との差はない。

以上の様にみてくると、掘鑿の手順としては、基本的に荒掘りと整形の2段階が考えられる。これに横穴掘鑿以前の墓前域平坦面及び開口部垂直面の造り出し等の作業と、掘鑿後の造り付石棺の挎り込みなどの細部加工を加え、①整地、②荒掘り、③整形、④細部加工の[註18]4段階を考えることができる。

①整地：岩盤を削り取って横穴開口部より若干大きい垂直面を造り出す。同時に作業のための平坦面をつくる。巾6.0㎝前後の巾の広いノミが多用されている。

②荒掘り：巾3.0～5.0㎝のノミによる玄室の基本形の掘鑿で、大北東横穴群8号横穴等にみられるように、固い岩をかんでいるような部分はそのまわりを掘りすすめ一気に崩落させるような手法もとられていたと思われる。

③整形：荒掘りによってつけられたV字状の筋を、平ノミによって横あるいは上下方向に削り取って面を整える。奥壁では、打ち込みを細かくすることにより面を整える。使用するノミは荒掘りの最終段階で使用されたものと同種である。

④細部加工：造り付け石櫃、床面小孔、排水溝等の加工には、本来の鑿状工具も使用されており、それぞれによって、方法・ノミ巾等にバラエティがある。

## 5. 石櫃加工の方法

本横穴群で24例、割山横穴群より3例、総計27例の石櫃が検出されている。これらについては第Ⅳ章に詳しいが、これらのうち各面でノミ痕が比較的良好に観察できる18例について第29表のように整理した。

外形のノミ痕は、ウロコ状がほとんどあり、整形はみな良好で巾4㎝前後のものが多い。しかし各面の整形をよく観察すると、ノミ痕に精粗のあることがわかる。一般的に最も整形の良いものは正面で、次に両側面、3番目に背面の順である。（逆に、この観察により正面を認定した例もある。）

細部加工は、細巾のノミによる打ち込みで挎り込まれている。挎り込みの側面はV字状又は平行ノミの痕跡を残す。挎り込みの深さが20㎝以上のものもあり、長い柄のついたものを想定せざるを得ない。

Ⅰ－2号、Ⅰ－4号などでは、挎り込みの側面は、上下が平行ノミ・両側壁がV字状の痕跡を残しており、石櫃を回転させて（あるいは作業者が移動をして）加工したとは考えられず、1ケ所にすえて加工したと考えたい。

石櫃は軟質の凝灰岩でつくられており、ノミ痕の詳細な観察の可能なものは非常にすくない。ここではデータを示すのみに留め、同様の石製品の製作手法をあたったうえで、改めて考えてみたい。

## 6. ま と め

以上横穴と石櫃のノミ痕を観察してきたが時間的余裕がなく、石櫃については十分なる検討はできずに終ってしまった。以下横穴に限って整理し若干の問題点を指摘しておきたい。

1. V字状・平行ノミ・打ち込み等ノミ痕のバラエティはあっても、同一の道具の使用方法の変化である場合が多い。
2. 道具の種類は比較的すくなく、1～3種である。
3. 横穴掘鑿の基本的な道具は柄のついた鍬状あるいはツルハシ状のいわゆる横斧の系列に属するものであろうと推定される。
4. 作業の工程としては整地・荒掘り・整形・細部加工の4段階を考えることができる。本横穴群の場合、荒掘りの段階で使用されているものが多い。
5. 1号～3号の大型横穴の中で2号のみに上下方向の整形が加えられており、特異な位置にある。小型のものでもていねいな整形が加えられたものもあり、単純に規模の大小だけではない。群構成を考えるひとつの指標となるであろう。

| 番　号 | 特　　徴 | 正　　面 | 側　　面 | 背　　面 | 上　　面 | 底　　面 | 桙り込み |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ－1 | 破損著るし | ノミ巾3.5cm以上のものによる整形 | (左)　破損、観察不能<br>(右)　整形は荒い、巾2.0cm、内外ノミを使用 | (観察不能) | 巾2.0cm内外<br>他面に比して整形良 | 巾1.0～1.5cm<br>整形は荒くノミ方向も不規則 | 打ち込み、巾不明 |
| Ⅰ－2 | 整形比較的良好 | 巾2.0cm前後 | (左)　ウロコ状、巾4.0cm方向不規則<br>(右)　巾4.0cm前後孤状の刃線を持つウロコ状上→下 | 巾4.0cm前後<br>上→下 | | | |
| Ⅰ－4 | 破損著るし | 磨耗著るし | (左)　――――――<br>(右)　磨耗著るし | 磨耗著るし | (観察不能) | 磨耗著るし | 打ち込み、上下整形良好、巾1.5～1.7cm |
| Ⅰ－5<br>(蓋) | 整形良好 | ウロコ状、整形良<br>巾1.5～1.6 | (左)　ウロコ状<br>(右)　ウロコ状 | ウロコ状、巾広<br>(4.0cm以上)<br>荒く、大きい | (観察不能) | ウロコ状、整形良好、ノミ巾不明、方向不規則 | |
| Ⅰ－6 | 磨耗著るしく観察困難 | 磨耗著るし<br>整形ていねい | (左)　ウロコ状、磨耗著るし (右)ウロコ状、磨耗著るし | 磨耗著るし | ウロコ状<br>整形ていねい | 磨耗著るし<br>整形荒い | 打ち込み、巾2.0～2.1cm開口部より上部½はていねい |
| Ⅱ－1 | 整形ていねい | ウロコ状、比較的荒く不規則「若舎人」の陰刻。周辺はていねいに平担化されている。 | (左)　整形ていねい<br>(右)　整形ていねい | ウロコ状、ていねい　上→下<br>左・右側壁に比して巾広で荒い。 | | | 打ち込み |
| Ⅲ－1 | 上部、下部剥落 | ウロコ状、整形ていねい | | 打ち込み<br>1.4～1.5cm | 剥落<br>(観察不能) | 剥落 | 打ち込み |
| Ⅲ－2 | 整形ていねい<br>細かいウロコ状 | ウロコ状<br>上→下<br>きわめてていねい | (左)　ウロコ状<br>(右)　ウロコ状、左側面に比してていねい、上→下、下部の方が荒い | ウロコ状<br>側面に比して荒い | ウロコ状　外→内<br>屋根の斜面を造り出したあとで上部平担面の整形 | 荒い<br>磨耗により把握困難 | 前方はていねいに整形、磨耗痕あり<br>(栓の着装痕)<br>奥は粗雑で凹凸著るし |
| Ⅲ－4 | 比較的荒く自然面を残している部分も多い | 平行ノミ　巾1.8～2.0cm　不規則 | (左)　――――――<br>(右)　打ち込み3.0～3.3cm下部に平行ノミ巾2.5～2.8 | | ウロコ状平行ノミ<br>巾2.3～2.5cm<br>右前部分に打ち込み痕 | 自然面？を多く残す | 打ち込み<br>巾3.8cm |
| Ⅲ－5<br>(身) | 整形良好<br>基準線と考えられる細い溝あり | ウロコ状、V字状痕がわずかに残る水平方向の運動か？ | (左)　ウロコ状、右上方から左下方へ4.0cm前後<br>(右)　2.5、3～3.5の2種類左上方から右下方へ、周辺部では外側から内側へ | V字状、整形荒い<br>右上方→左下方の運動 | ウロコ状、細かくていねい<br>巾1.5～2.0cm | 整形荒い | |
| Ⅲ－5<br>(蓋) | 整形良好<br>面取り段階での基準線と考えられる細い溝あり | 整形良好、ノミ痕わずか2.5～3.0<br>4.4cm | (左)　整形良好、ノミ痕観察不能<br>(右)　ウロコ状<br>他の面に比して荒い | 整形良好<br>屋根部分にウロコ状ノミ痕が明瞭に残る | 右背面近くに打ち込み痕(巾4.5cm)<br>剥落部分はあるが整形良好 | ウロコ状 | 打ち込み、ウロコ状<br>側面に平行な打ち込み痕が多い<br>巾5.6cm丸刃…荒削り用巾3.5cm<br>直刃…仕上げ用 |
| Ⅲ－6 | | ウロコ状 | (左)　ウロコ状<br>他の面に比してていねい<br>(右)　観察不能 | ウロコ状<br>粗雑 | | ウロコ状平行ノミ<br>打ち込み<br>荒い | 打ち込み<br>巾1.5～2.0、<br>3.5～4.0 |
| Ⅲ－7 | 風化著るし | ウロコ状 | (左)　V字状痕が残る<br>(右)　V字状痕が残る、ウロコ状 | ウロコ状痕がわずかに観察される。<br>巾4.3cm | 磨耗観察不能 | | 底面打ち込み、巾3.5cm<br>側面はV字状 |
| Ⅲ－8 | | (観察不能) | (左)　ウロコ状平行ノミ、巾3.0cm前後、下端部分では巾1.5～1.7の平ノミ<br>(右)　ウロコ状平行ノミ、巾4.0cm前後、上半は左上から右下へ、下半は右下から左下方向へ | 観察不能 | 磨耗<br>細かいウロコ状 | ウロコ状平行ノミ<br>巾3.0～4.0cm<br>外縁より中央に向かって、中央部に巾2.0cmの打ち込み痕7ケ所あり | 巾2.4cm　打ち込み<br>側壁では平行ノミ痕となる。 |
| Ⅲ－10 | 自然面を多く残す<br>正面を上にむけて作業？ | 整形ていねい<br>円孔の周囲を回るような方向で | (左)　左上方→右下方、巾2.5cm<br>自然面を残す<br>(右)　剥落、欠失部分多い | 右→左、水平方向<br>巾2.2～2.5cm | ウロコ状<br>屋根部分は、下から上方向 | 荒く平担面をつくり出す<br>巾2.5cm<br>前方→後方 | 底面打ち込み<br>巾1.1cm<br>側面はV字状 |
| Ⅲ－12 | 整形は荒く剥落部分が多い(⅔破片) | | (左)　ウロコ状<br>(右)　ウロコ状<br>巾4～5cm | | 平行ノミ、巾3.8～4.0cm<br>風化のため不明瞭 | 剥落著るし | 打ち込み<br>巾1.5cm |
| Ⅲ－13 | | ウロコ状、整形ていねい桙り込みを中心にして円を描く周辺部では外側→内側、巾6.0cm前後 | (左)　荒い<br>(右)　荒い、下部にウロコ状痕 | 荒い | 自然面？を残す | ウロコ状整形ていねい<br>ウロコ状痕により平担面をつくりだす | 打ち込み |
| 割山1 | 風化、磨耗著るし | ウロコ状<br>巾4.0cm<br>上→下 | (左)　ウロコ状<br>上→下 | | 観察不能 | | |

**第29表　石櫃ノミ痕観察表**

6. 同様の掘鑿方法を持つ横穴は、伊豆長岡町内の各横穴、沼津市静浦湾岸の江ノ浦・多比の各横穴群に広がっている。日守中里・日守岩崎等の大平山の北側及び柏谷・大竹等狩野川右岸の横穴群とは様相を異にする。
註19

以上横穴の壁面観察及び民俗例より横穴掘鑿の道具について考えてみた。もとより資料のすくないことであり、論理の飛躍はいなめない。各地の横穴の観察を続け、さらに検討をすすめていきたい。

おわりにあたって、このような観察のヒントを与えて下さった斎藤忠団長、植松章八氏、藤田等先生、また、現用の道具を見る機会を与えてくれた神野善治氏ほかの方々に感謝したい。

註1　ここでノミ痕とし、ノミと呼んでいるのは具体的な遺物としての〝のみ〟ではなく、横穴掘鑿に用いた鋭利な刃部を持つ工具を総称し、それによってつけられた痕跡をノミ痕とする。具体的には後述するが、タガネ、鉄斧、手斧、ヤリガンナ等のあらゆるノミ形の刃部を持つ工具を含んでいる。

2　後述するようなツルハシ状の先端を持つ〝ツル〟（第74図）を想定することができるが、この場合は、断面凵又はU字状となり、ここでいうV字状痕とは異る。本横穴群中にはこれが使用された痕跡は認められない。

3　刃が壁面でとどまり長方形の連続模様となるものは本来のウロコ状とは異るものである、平行ノミの細かなもので、むしろそちらに近いものである。検討の段階で明らかになったものであり、我々の中で混乱が生じていたのでそのままウロコ状としておく。

4　北村誠一　「静浦の石屋」『静浦の民俗』　沼津市歴史民俗資料館紀要　昭和52年

5　これらの資料については、沼津市歴史民俗資料館　神野善治氏、石寅石材工業　小川敬造氏、丸山幸氏、沼津市多比　川口吉五郎・野村秀雄氏、伊豆長岡長小坂　小野弘氏等の教示をうけた。文献としては、北村誠一「静浦の石屋」『静浦の民俗』沼津市歴史民俗資料館紀要　昭和52年、神野善治「石工の用具」『資料館だより』Vol 6 №5　沼津市歴史民族資料館　昭和56年がある。
以下は上記の文献に若干の新資料を加えて要約したものである。

6　現用の石屋の道具については、礒貝勇『日本の民具』昭和46年、三輪茂雄『臼』昭和53年 等に詳しい。礒貝氏は、愛知県岡崎市での例として、セット（片手ハンマー）、コヤスケ（柄付のタガネ、石材の一部をはつるのに用いる）、ノミ（鋼製のタガネ、片手ににぎりセットで打ちながら石面をはつる）、ヤ（楔）、ゲンノウ（大型ハンマー）をあげている。
また、三輪氏は、げんのう（源翁、大型ハンマー）、矢、のみ、こやすけ（片刃、柄付のひらのみ）、びしゃん（多数の四角錘状突起のある片手ハンマー）、ぐんでら（柄付の両手ハンマー形のみ）、両刃（鋭い刃先を有する両手ハンマー）などをあげている。

7　実見することはできなかった。川勝政太郎『日本石材工芸史』昭和32年に写真が掲載されている。

8　元禄3年（1690）刊行される。田中ちた子・田中初夫編『家政学文献集成続編』江戸期XI　昭和44年

9　正徳2年（1712）寺島良安編。

10　文化・文政（1804～1824）榎本益章・磯具　勇『日本の民具』昭和46年。

11　寛政11年（1799）木村孔恭著、千葉徳爾　註・解説『日本山海名産名物図会』昭和46年

12　片刃のあらわれるのは比較的後のことであり、16世紀末ごろからといわれている。村松真二郎『大工道具の歴史』昭和48年。古墳時代のチョウナは両刃で彎曲した刃線を持っている。

13　石屋の道具として先述のものの他に鍛冶道具として、焼台、フイゴ、ウワナラシなどがあげられている。丁場にフイゴを置いて焼き入れをしながら作業を進めたという。（多比・野村氏の丁場にて実現）37号横穴の玄室内覆土から鉄滓の小魂2個が検出されているのが注意を引く。

14　サシバを実際に使用してみると、1回の打撃で削り取れる岩の量は大きいが、残ったノミ痕の長さは3～5㎝程度である。面の仕上げに有効であり、平行ノミの中でも短かく連続的に使用したものであろう。1回の打撃で数十㎝の長さのノミ痕を残すためには、相当重量のあるものを想定しなければならないであろう。

15　佐原真「石斧論」『考古論集』昭和52年。
このようなノミ痕は遠江の横穴に典型的に認められるもので、天井部から下へ大きく帯状に剥り取られている。道具としては鍬状のものが想定できる。

16　鉄の生産が関東地方で開始されるのは、奈良時代前半と考えられており、それが飛躍的に拡大するのは平安時代にはいってからである。伊豆半島では平安時代中期以降である。

17　この溝状の線に意義を認めようという考え方がある。山下晃氏は「羽状を呈しており装飾的である。両側壁の深いノミ痕とあいまって、実際以上に奥深い感覚を玄室に与えている。」と観察している。(『大北横穴群』)

18　墓前域の加工は巾6.0㎝前後の巾広のものが多用され横穴内のものとは異っている。(第26表参照)。まず作業のための平坦面・垂直面を造り出さなければならないことは、小川敬造・丸山幸氏の教示による。

19　すなわち荒掘りのあと壁面を平滑に仕上げている。ビシャン打ち仕上げさらに磨きをかけたと思われるものさえある。一般にビシャン打ちが花崗岩等の硬い石に対して施されるところから、この両者の技術の差から、伝統的な技術を継承した凝灰岩製作工人集団と高度な新しい加工技術をもった集団の存在を想定しようという考えがある。非常に興味深い問題であるが、これについて考えるのは本稿の主意ではない。ここでは、壁面観察よりみた大北横穴群をはじめとする伊豆長岡町内の横穴は狩野川下流域の田方平野に展開する横穴群よりむしろ山を越えた駿河湾側の江ノ浦・多比等の横穴群と共通するところが多いということを指摘するにとどめたい。

# 第 4 節　土器について

本横穴群には、須恵器・灰釉陶器・土師器があり、その分類についてはすでに述べたとおりである。ここでは、坏を中心にその分類を再整理するとともに、その編年的位置についても検討してみたい。

## 1　坏の整理

すでに第Ⅴ章第1節において示した坏および坏蓋の分類について整理すると次の通りである。

**須恵器・灰釉陶器**

〔A類〕　丸底坏

かなり広い平坦面を丸底につくり、胴部との境は不明瞭となる。蓋は身受けのためのカエリを付するタイプとなる。

〔B類〕　高台坏

$B_1$類── 底部が高台より下に突き出すかもしくはほぼ等しくなるタイプ。いずれも高台としての役目は果さないものといえる。蓋は口縁端部を下方に折り曲げる形状となる。

$B_2$類── 平底に高台を付すタイプ。蓋は$B_1$類と同一の形状で、その分離はかなりむずかしい。

〔C類〕　平底・丸底坏

$C_1$類── 丸底または小さな平底で、半球形にちかい状況で、かなり特徴的なタイプと、底部をノタ目仕上げとするタイプとがある。

$C_2$類── $C_1$類よりやや浅い形状で、その底部には明瞭な回転ヘラ削り痕を残すタイプ。

$C_3$類── 大型につくる平底坏で、口縁部をかなり直立させる特徴がみられる。

$C_4$類── 平底で、やや小さく厚い底部を有する坏。

〔灰釉陶器〕

高台坏であるが、灰釉の発色は不良。

**土師器**

〔A類〕　高台坏

$A_1$類── 須恵器$B_2$類の模造品で、形状その他すべての点で共通した特徴を呈する。蓋は口縁部先端を下方に折り曲げるタイプとなる。

$A_2$類── 小さな底部に比較的高い高台を付する。

〔B類〕　丸底坏

$B_1$類── 平坦化する丸底坏で、内面にラセン状暗文を施す状況が特徴的である。

$B_2$類── 胴下半部から底部にかけてヘラ削りするタイプのうちで、器高が高く半球形にちかい形状を呈するもの。

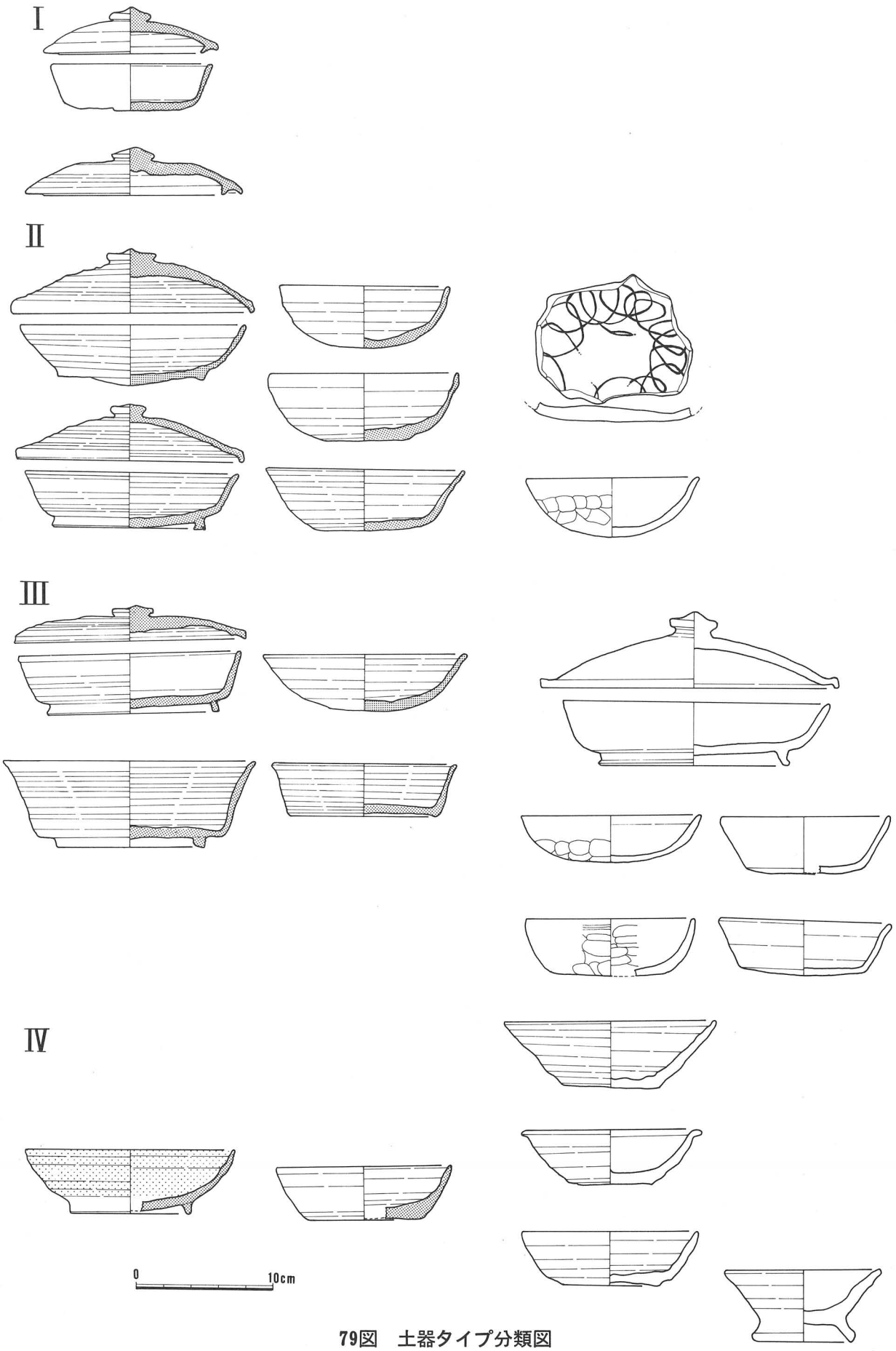
$B_3$類── 同様にヘラ削りするタイプのうち、器高は低いが丸底となるもの。

$B_4$類── 同様にヘラ削りするタイプのうち、器高は低いが低部が丸味を残しながらも平底化した形状となる。

〔C類〕　平底坏

$C_1$類── 器壁が薄く、胴部外面のヨコヘラミガキ、内面の放射状暗文が特徴的で、底径と口径の比は約2：3前後となる。なかには底面中央に糸切り痕を残す例もみられる。

$C_2$類── 器壁は厚く、やや広くつくる底部と浅い器高が特徴的となる。底部中央に糸切り痕を残す例、底部内面に放射状暗文を残す例、さらに胴部内外面を回転ヘラミガキする例もみられる。




79図　土器タイプ分類図

$C_3$類――やや小さな底部から胴口縁部が大きくひらく形状に特徴がある。底径と口径の比は約1：2前後の数値におさまるものとなる。多くは底部全面糸切り痕を残すが、なかにはヘラ切り痕もしくはそれらを消しているものもみられる。

これら坏の分類についてその大略を一覧してみたが、それらを表示すると次の通りである。

**須恵器・灰釉陶器**

- A類　丸底坏　　蓋にはカエりが付く
- B類　高台坏
  - $B_1$類　底部が高台より低くなる
  - $B_2$類　平底に高台を付す
- C類　平底・丸底坏
  - $C_1$類　半球形を呈する
  - $C_2$類　底部に回転ヘラ削り痕を残す
  - $C_3$類　大型の平底坏
  - $C_4$類　小型の平底坏

**土　師　器**

- A類　高台坏
  - $A_1$類　須恵器$B_2$類の模造タイプ
  - $A_2$類　底部小さく高台は大きい
- B類　丸底坏
  - $B_1$類　内面にラセン状暗文
  - $B_2$類　底部ヘラ削りで器高高い
  - $B_3$類　底部ヘラ削りで器高低い
  - $B_4$類　底部ヘラ削りで平底化
- C類　平底坏
  - $C_1$類　器壁薄く外面ヨコヘラミガキ、内面に放射状暗文を施す
  - $C_2$類　器壁厚く、広い底部に浅い器高
  - $C_3$類　多くは全面糸切り痕を施す

## 2　坏の組み合わせと時期

以上によって、坏の分類を整理してみたのであるが、ここでは、その編年上の位置についての若干の検討の前提として、須恵器・土師器の組み合わせとその時間的位置の問題であるが、こうした操作において検討の基準となし得る資料は意外に少ないようである。

まず、本横穴群の出土土器のなかで坏の出土状況から確実にセットと成し得ると判断され得るは、横穴という条件からしてほとんど認め得ない。それでも、39号横穴の（208）（210）が開口部直下で一括と

いえるほぼ唯一の例であったが、それはともに須恵器 $B_1$ 類の組み合わせであって、編年資料としての意味はもち得ないようであった。玄室内資料については明確に一括といえる状況はほとんどみられないが、後述するように18－1号横穴の覆土中から（136）～（142）（144）（146）がほぼ一括で出土した。主な内容は須恵器 $B_2$ 類と土師器 $C_2$ 類であって、編年資料として一定の意味をもつものと判断している。

よって、本資料の編年操作は多く近隣の資料を比較検討する方法によることになるが、ここではまず、須恵器・土師器の共伴資料を中心にして列挙することからはじめてみたい。

**第30表　須恵器・土師器の共伴**

| 遺跡名 | | 須恵器 | | | | | | | | 土師器 | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | $B_1$ | $B_2$ | $C_1$ | $C_2$ | $C_3$ | $C_4$ | その他 | $A_1$ | $A_2$ | $B_1$ | $B_2$ | $B_3$ | $B_4$ | $C_1$ | $C_2$ | $C_3$ | その他 |
| 小山町 | 上横山遺跡 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | SB01 | | ○ | | | | | | | | | | ○ | | | | | | 甕 |
| | SB05 | | ○ | | ○ | | | | 埦 | | | ○ | | | | | | | 甕 |
| | SB09 | | ○ | | | | | | | | | ○ | | | | | | | 甕 |
| | SB12 | | ○ | | | | | | | | | | | | | | ○ | | 盤 |
| | SB20 | | ○ | | ○ | | | | | | | | ○ | | | | ○ | | 甕、坏、埦 |
| 沼津市 | 藤井原遺跡 116号住居跡 | | | ○ | | | | | | | | | | ○ | | | ○ | | 甕 |
| 富士市 | 東平遺跡 第42号住居跡 | | ○ | | | ○ | | | | | | ? | | | | | | | |
| 富士市 | 天間代山遺跡 第7号住居跡 | | (○) | ○ | | ○ | ○ | | 埦 | ○ | | | | | | ○ | ○ | | 甕 |
| 伊豆長岡町 | 大師山横穴群 第8号横穴前溝 | | ○ | | ○ | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| 清水町 | 伏見古墳群 第6号墳 | | | ○ | | | ○ | | | | | | | ○ | | | | | 手捏 |
| 静岡市 | 用宗浅間坂上古墳群 第2号墳 | | ○ | | | | | | 高坏、長頸坩、碗 | | | ○ | | | | | | | |

以上の資料整理によって、次のいくつかの事項が指摘できるようである。

① 須恵器坏 $B_1$ 類と $B_2$ 類は分離できる

$B_1$ 類は本町大師山横穴群第8号横穴・沼津市藤井原遺跡[註1]・富士市東平遺跡・小山町上横山遺跡[註2]、古墳出土例では富士市大塚団地古墳群第2号墳[註3]・静岡市用宗浅間坂上古墳群第2号墳[註4]に良好な資料が知られる。一般的には、湖西市北昇稲川4号窯[註5]の出土資料を標式資料[註6]とし、浜松市伊場遺跡第4次調査で、第3群土器として「辛卯年」（持統天皇[註7]5年　A．D．691年）木簡に伴ったものと理解されている[註8]。

ところで、$B_1$ 類に傾向として2種のタイプがあるらしいことはすでに述べた。すなわち、底部と胴部の境目がスムースに連続して底部が大きく高台より下方に突き出すタイプと、その境目に比較的明瞭な稜をもって底部の突き出しが高台とほぼ等しいほどとなるタイプとである。この2タイプが時期差となる可能性はかつて指摘したことがあるが、あるいは地域差と解すべきかも知れない可能性も認められる。現在の状況では断定的な資料は見出し得ないが[註9]、島田市南原瓦窯跡出土資料の内容等からすれば、地域差すなわち生産窯地の相異といえる可能性は認めておいてよかろうと思う[註10]。すると、県東部に多くなる住居址資料における共存のあり方も首肯し得るものとなる。

$B_2$類は沼津市藤井原遺跡・富士市東平遺跡・同天間代山遺跡、古墳資料としては清水町伏見古墳群出土資料がある。[註11]うち、富士市天間代山遺跡[註12]第7号住居址[註13]がきわめて良好な資料で、土師器類も含めて[註14]典型的なセット資料とみなし得るものとなる。年代的には、浜松市伊場遺跡で、天平7年（A.D.　年）と認め得る木簡に伴出したとして8世紀中葉に編年される坏によく類似したものとなることが指摘されるが、8世紀後半代[註15]といえる土器類が明瞭に分離できない現状からすれば、8世紀後半代という一般的理解にここでも従っておこうと思う。

② 須恵器$B_1$類は須恵器$C_1$類，土師器$B_1$・$B_2$類を共伴する。

須恵器$C_1$類は、大師山横穴群・小山町上横山遺跡に類例があっていずれも$B_1$類と共存するものとみることが[註16]できる。土師器では[註17]$B_1$類が特徴的[註18]タイプで、大師山横穴・小山町上横山遺跡で確実に須恵器$B_1$類に伴うといえる。$B_2$類は類例の比較的少いタイプで、いままではその分類編年もあまり試みられてはいないようである。ここではやや大担に分離してみたが、その検討によれば、小山町上横山遺跡に比較的良好なセットが認められて、須恵器$B_1$類との共存が確実となった。たしかに、ここでも、土師器$B_1$類との共存は認め得ないが、須恵器$B_1$類を共有することからすれば併行関係とみなしてよいようである。

③ 須恵器$B_2$類は須恵器$C_2$・$C_3$類、土師器$A_1$・$B_3$・$B_4$・$C_1$・$C_2$類と共存する可能性がつよい。

須恵器$C_2$類は、富士市天間代山遺跡で須恵器$B_2$類との共存が確認され、島田市竹林寺遺跡でも同様の指摘がなされて一般的理解[註19]となっているが、富士市東平遺跡では須恵器$B_1$類との共存[註20]が報告されている。ここでは、須恵器$C_2$類は$B_2$類と共存するとして[註21]、東平遺跡のあり方は今後の検討として保留しておきたい。

須恵器$C_3$類は富士市天間代山遺跡[註22]、清水町伏見古墳群[註23]にあって、両例とも須恵器$B_2$類との共存が確実である。

土師器では、$A_1$・$C_1$・$C_2$類が、富士市天間代山遺跡でセットと把握されるが、問題はそれらと$B_3$・$B_4$類との関係ということになる。まず、$A_1$類[註24]は、須恵器$B_2$類の類品で比較的丁寧な手法が目立つ。$C_1$類はいわゆる〝甲斐型〟といえるタイプで、富士市東平遺跡[註25]・沼津市藤井原遺跡[註26]にも類例がみられて、須恵器$B_2$類と共存することも確実としてよい。

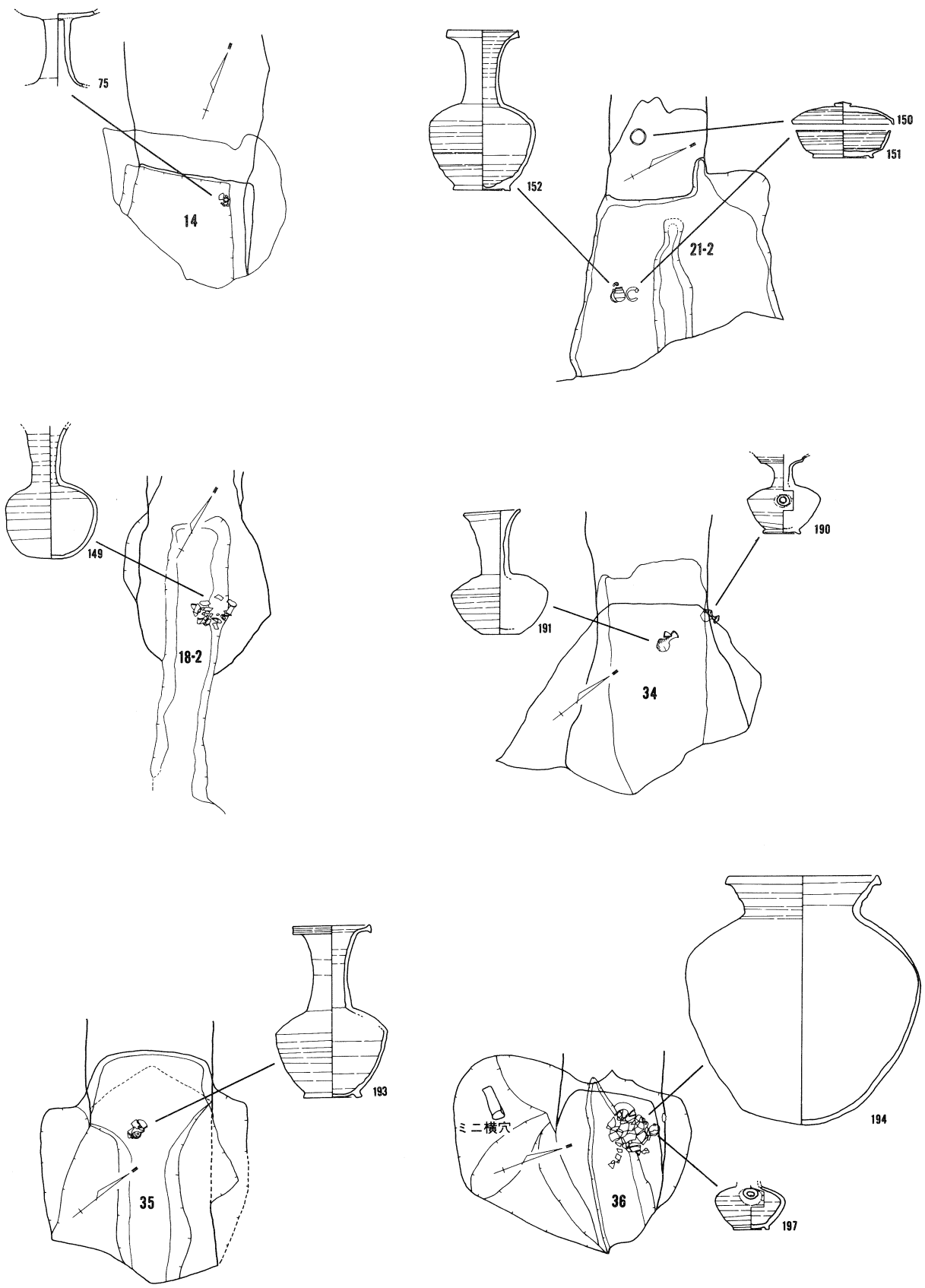
土師器$C_2$類については、天間代山遺跡のほか、沼津市藤井原遺跡でも須恵器$B_2$類と共存し、さらに土師器$B_3$[註27]類を併った例がある。本横穴群[註28]18－1号横穴の玄室[註29]内覆土中の土師器一括でも$A_1$類と共存して須恵器$B_2$類を伴っているので、本類の須恵器$B_2$類とのセット関係は認めてよいものであろう。

つぎに、土師器$B_3$・$B_4$類の分類であるが、必ずしも類例は豊富ではない。$B_3$類は清水町伏見古墳群、沼津市藤井原遺跡において須恵器$B_2$類との共併が確かめられるが、$B_4$類についてはこうした類例はみられない。[註30][註31]よって、この分類が、とくに$B_4$類の分離がどこまで普遍性を有し得るかについては今後の検討課題とする以外ないが、それでも、比較的資料にめぐまれた本資料において一応分離して後考をまつことにしよう。それでも$B_4$類が現状では$B_3$類とほぼ併行関係を有する点は認めておこうと思う。

以上によって、土師器$A_1$・$B_3$・$B_4$・$C_1$・$C_2$類は、いずれも須恵器$B_2$類に併行するものと認めることができることとなった。

### 3　編年上の位置と試案

坏の整理にもとづいてその組み合わせについて若干の検討をしてきたが、これにもとづいて作成した




80図　墓前域出土土器集成図

〝編年試案〟を示すと第31表のとおりである。

**第31表　土器編年表**

| 時期 | 年代 | 坏 | | その他 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 須恵器 | 土師器 | 須恵器 | 土師器 | |
| Ⅰ | 700 | A | | 碌A・B<br>平瓶A<br>長頸坩B・$A_1$ | 甕A・B | |
| Ⅱ | 800 | $B_1$　$C_1$ | $B_1$<br>$B_2$ | $A_2$ | | |
| Ⅲ | | $B_2$　$C_2$<br>$C_3$ | $B_3$<br>$A_1$・$C_1$・$C_2$<br>$B_4$ | C<br>B・B | | |
| Ⅳ | | 灰釉陶器 | $C_3$<br>$A_2$ | | | |

かなり大旦に表示したもので、粗雑さはまぬがれないうえに、年代やその他の器種については明示できる根拠を有するものでもないが、それでも大略の傾向をみるためにあえて作成したものと解されたい。

① Ⅰ期

須恵器A類によって代表される時期で、遠考研編年のⅣ期後半となる。川江秀孝氏[註33]によると、この時期をさらに前中後と3分するよう試みるが、これは[註32]ツマミの形状と口径の小さなものから大きなものへの変化だという。いま、本横穴群の本類をみるとツマミの形状には変化がみられないが、口径10㎝前後のものと、13㎝前後のものに大別できるようである。すると、前者は〝前〟期、後者は〝後〟期となる可能性を有することになる。

この時期の他の器種でいえば、須恵器の碌A・平瓶A・長頸坩Bが、土師器の甕A等が一般的可能性としては共伴があり得る。絶対年代としては、7世紀後半とみておくことにする。

② Ⅱ期

須恵器 $B_1$ 類に代表される時期で、須恵器 $C_1$ 類が併うとみなし得る。土師器では $B_1$ 類が確実で、これに $B_2$ 類が併うものといえる。この時期をかって〝天間代山Ⅰ類期〟として把握したことがあるが[註34]、それは関東地方の真間式Ⅰ類に比定し得るものであった。

他の器種では、須恵器の碌B類[註35]・平瓶A類・長頸坩 $A_1$ 類が、土師器の甕A・B類が共伴してよく絶対年代では8世紀前半とおさえておこう。

③ Ⅲ期

須恵器 $B_2$ 類に代表される時期で、須恵器 $C_2$・$C_3$ 類が共伴する。土師器では、$A_1$・$B_3$・$B_4$・$C_1$・$C_2$ 類がともなって、坏のバラエティーも増大する時期といえる。〝天間代山Ⅱ類期〟[註36]とみて、

関東地方の真間式Ⅱ類期に比定することとする。

他の器種では、[註38]須恵器の碗B類・平瓶A類・長頸坩$A_2$類が、土師器では甕A・B類の共存が認められよう。絶対年代では8世紀中葉から後半としておく。

④　Ⅳ期

一応Ⅳ期と表示してみたが、広く平安時代の土器類を含めておいた。灰釉陶器はたぶん10世紀、土師器では9～10世紀、あるいはさらに下降するものもあるようである。

以上によって、きわめて大雑把に編年的検討を概観したのであるが、これによると、本横穴群出土土器の初現は、7世紀後半代であって、8世紀前・後半が盛期となって、9世紀以降10世紀前後まで何らかの連続性が認められることになる。

註1　斎藤　忠ほか　『大師山横穴群』伊豆長岡町教育委員会　昭和51年

2　瀬名川裕市郎ほか　『藤井原遺跡発掘調査概報』第1～3次　沼津市教育委員会　昭和50年～52年

3　平林将信ほか　『西富士道路遺跡群発掘調査概報』富士市教育委員会　昭和51年～53年

4　佐藤達雄ほか　『上横山遺跡発掘調査概報』小山町教育委員会　昭和56年

5　植松章八ほか　『中里大塚団地古墳』富士市教育委員会　昭和51年

6　後藤守一ほか　『吉原市の古墳』吉原市教育委員会　昭和33年

7　嶋　竹秋ほか　「北早稲川窯址群」『湖西市埋蔵文化財調査報告』昭和50年

8　斎藤　忠ほか　『伊場遺跡第4次発掘調査概報』浜松市教育委員会　昭和50年

9　植松章八ほか　『天間代山遺跡』富士市教育委員会　昭和52年

10　調査者平野吾郎氏の教示による。

11　（前掲註2）

12　（前掲註3）

13　（前掲註9）

14　小野真一ほか『駿河伏見古墳群』沼津考古学研究所・静岡瓦斯株式会社　昭和46年

15　川江秀孝ほか『伊場遺跡第4次調査月報5』遠江考古学研究会　昭和46年

16　須恵器坏G類について、3タイプを指摘し得ることはすでに述べたが、ここでとくにふれておきたいのは特徴的な半球形を呈する第1タイプである。17号横穴の（103）が定型品で、13－1号横穴の（50）（51）も本タイプとなる。きわめて類例に乏しく、同時期の資料を大量に有する富士市東平遺跡、沼津市藤井原遺跡にもみられないらしいが、最近の調査のなかで小山町上横山遺跡に若干の類品が発見された。いわゆる丸底で底部にノタ目を残して、口縁部はやや外に開く一般的なG類坏のなかではきわめて特異ともいうべき形状を呈する。こうした特徴の要因が何であるかはもちろん不明瞭であるが、本横穴群と小山町上横山遺跡に類例がみられることに注意しておきたいと思う。

17　（前掲註1）

18　（前掲註4）

19　（前掲註9）

20　（前掲註10）

21　（前掲註3）

22　（前掲註9）

23　（前掲註14）

24　（前掲註9）

25　（前掲註3）

26（前掲註２）

27　かって、『天間代山遺跡』において、土師器$C_2$類を一括出土品にもかかわらず須恵器$B_2$類から分離して編年を試みたことがあるが、これを誤りと認めて訂正しておきたい。

28（前掲註９）

29（前掲註２）

30（前掲註14）

31（前掲註２）

32　山村　宏ほか『大沢・川尻古窯跡調査報告書』遠江考古学研究会　昭和41年

33　川江秀孝「静岡県下出土の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジューム２須恵器－古代陶質土器の編年－』昭和54年

34（前掲註９）

35　甲野　勇・岡田淳子ほか『八王寺中田遺跡資料篇Ⅲ』八王寺中田遺跡調査会　昭和43年。

36（前掲註９）

37（前掲註35）

# 第5節　地質学上からみた大北横穴群について

Ⅰ．大北横穴群を中心とした沼津市南部静浦山地の地質

1. 地質の概観
2. 横穴群がみられる静浦層群の層序・岩相
3. 静浦山地の地質構造と大北横穴群

Ⅱ．北江間の後背湿地型地形の形成にいたるまでの古環境の変遷

1. 狩野川沖積平野の生いたち
2. 北江間後背湿地の様子

Ⅲ．大北横穴群における横穴の掘削主軸方向と基盤の凝灰岩にみる断裂（割れ目）の走向・傾斜との関係

1. 大北横穴群にみる基盤凝灰岩の特徴
2. 横穴の基盤凝灰岩に発達する（割れ目）断裂系の特徴
3. 横穴の玄室床面にみる主要断裂の分布と、これらが横穴の掘削に与えた影響について
4. あ　と　が　き

自然と人間とのかかわりの中で、人の歴史が築かれていくとき、その背景にある自然環境は大きな意味をもつことになる。時代が溯り、過去の人間の残した痕跡の少ない時代ほど、自然環境はより大きく人の歴史にかかわっていたであろうし、大北横穴群の構築も例外ではないとおもわれる。

大北横穴群の構築された静浦山地の凝灰岩の性質、凝灰岩に発達する断裂（割れ目）系と横穴の掘削との関係、横穴群とかかわりのある集落をみたであろう狩野川沖積平野の末端、北江間の自然堤防、後背湿地型地形の形成過程についてのべる。

## I. 大北横穴群を中心とした沼津市南部静浦山地の地質

**1. 地質の概観**　静浦山地は伊豆半島の頸部に位置し、西に愛鷹・達磨・井田の愛鷹火山列、東に箱根・湯河原・多賀・宇佐美・巣雲の箱根火山列、南に天城火山群などの第四紀火山をみる。本地域は主として、これら第四紀火山の基盤をなす第三紀層から成る。今回までに第32表の層序列関係、第82図の地質図が明らかになっている。すなわち、湯ケ島層群下部層に相当する徳倉変朽安山岩層は、変朽作用を受けない香貫山安山岩層（湯ケ島層群上部層にあたる）に不整合に被われ、最下位とみられる。これら海底火山噴出物からなる湯ケ島層群の上に広域に分布し、不整合で接する、静浦層群の各地層は、礫として徳倉変朽安山岩、香貫山安山岩を含むのでこれより新しく、下田付近の白浜層群（上部中新～下部鮮新統）に対比される内浦火山角礫岩層に不整合に被われること、また貫かれることから、これより古く、時代は約2,000万年前の中新世中期～後期と推定される。これらの第三紀層を不整合におおう長岡段丘堆積物（更新統）は主として、箱根火山新期軽石流よりなり、上に、三島パミスをみせる愛鷹南麓に普通にみる“愛鷹ローム層”の中部ローム以上のローム層をのせている。

横穴群は、これら各層の中、静浦層群の凝灰岩と箱根新期軽石流に集中してみられる。以下、これらの岩相についてのべる。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 新生界 | 第四系 | 完新統（沖積） | 狩野川沖積平野堆積物 |
| | | 更新統（洪積） | 長岡段丘堆積物 ｛ローム層／箱根火山新期軽石流｝ |
| | 第三系 | 鮮新統 | 内浦火山角礫岩層 ｛安山岩岩脈、火山砕屑物／複輝石安山岩層／石英安山岩層｝ |
| | | 上部～中部中新統 | 静浦層群 ｛江ノ浦層 ｛鷲頭山大平山安山岩層／江ノ浦白色凝灰岩層／大井凝灰角礫岩層｝／長岡層　長岡凝灰岩層／日守層　日守凝灰岩層｝ |
| | | 下部中新統 | 湯ケ島層群 ｛上部層　香貫山安山岩層／下部層　徳倉山変朽安山岩層｝ |

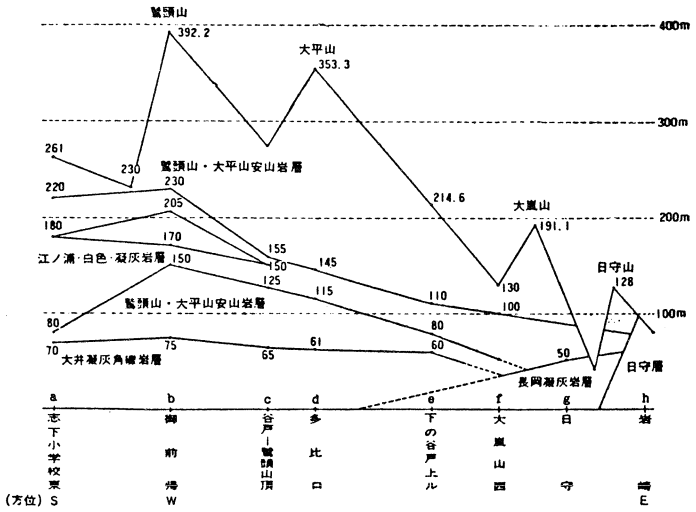
**第32表　地質総括表**

**2. 横穴群がみられる静浦層群の序層・岩相**[註1，2]

静浦層群の層序模式断面は第81図のとおりである。

**(1) 日守凝灰岩層**　日守山西麓で上位の長岡凝灰岩層の赤褐色砂岩がこれを被う。風化面は黄緑色礫質を示す雑色性凝灰角礫岩よりなる。模式地は岩崎の石切場。

**(2) 長岡凝灰岩層**　緑泥石化作用を受け青灰色～緑色～濃緑色を示す凝灰角礫岩および凝灰岩。風化部分は茶褐色、特に砂礫粒子間に白色のシミが目立つ。本層は岩相により、さらに3分される。一般に、南西より、北東に向う程上位層が表われる。下部層は、長岡温泉西方、戸沢部落石切場の淡青色凝灰岩（黄鉄鉱の微晶顕著）で代表される。中部層は、長岡温泉北口の石切場にみられる濃緑色凝灰角礫岩で代表され、緑色変朽安山岩礫、珪質赤褐色安山岩岩礫（1




大北地域では、下位の大井凝灰角礫岩層、長岡凝灰岩層の大部分が江ノ浦白色凝灰岩層となる。

**第81図　静浦層群の層序模式断面図**

～3㎝）を多く含む層が上位に続き、淡黄緑褐色凝灰岩との互層へと漸移する。上部層は長岡町坪内～珍野～口野に至る丘陵に発達する褐色～黄緑色を示す砂質凝灰岩で、サメの歯などを夾在する化石帯（ヒヨク貝、ウニの棘、カキ、フジツボなどが主）がみられ、上位ほど濃緑色硬質の砂岩層と互層し、斜交層理が発達してくる。

本層は、上位の江ノ浦白色凝灰岩層とは指交層理をなし漸移する関係にある。

層厚は長岡温泉付近のボーリング結果75 m～77.5 mで石英安山岩に突き当ることから、少なくとも、180 m－200 m以上800 mくらいと思われる。

**(3) 大井凝灰角礫岩層**　暗灰色1～7㎜程度の安山岩質角礫を同質細粒物質で充填固化したもので、鷲頭山・大平山北麓一帯に分布し、大井から東に向って、安山岩質角礫が同大の淡黄灰色凝灰質角礫と置換して、岩相の変化をみる。上部は砂質部分もみられ、互層をみる。層厚は南に薄く、江ノ浦側、江間側には存在しない。

**(4) 江ノ浦白色凝灰岩層**　石英安山岩質白色凝灰岩で軟弱無層理の部分もあるが、よく斜交層理が発達し、浅海堆積物であることを示している。このほか、淡黄緑色あるいは雑色性の安山岩質凝灰角礫岩の部分、淡黄褐色無層理の泥質～砂質凝灰岩の部分もある。後者は、前二者にはさまれ、層厚35 mほどのレンズをなし夾在する。第81図参照。

これらは、鷲頭山、大平山、徳倉山安山岩層の基底をなし、岩株、多くの岩脈に貫かれている。走向・傾斜はN 60°～40° W、15° EでNE方向に緩い傾斜を示す。

大北横穴群をはじめ、大師山、江ノ浦の横穴群は、この江ノ浦白色凝灰岩層の走向・傾斜に沿って、ときおり狭まる硬く、薄い安山岩の火山角礫岩層をさけ、横穴の配列をみる。岩株、岩脈の貫入は、江ノ浦白色凝灰岩層に働く展張応力により、北西～南東方向、北東～南西に走る幾組かの顕著な割れ目を生じ、横穴を掘り進めるのをより容易にしている。

**(5) 鷲頭山・大平山安山岩層**　鷲頭山は主に複輝石安山岩の砕塊溶岩（Blocklava）、大平山では同質火山角礫岩が卓越する。また下位程無層理の火山角礫岩から成り、両輝石安山岩の溶岩を挟む傾向がある。層厚は210 mほどで、安山岩は黒褐色で、1～2㎜の斜長石の斑晶、普通輝石、紫蘇輝石、磁鉄鉱などを含む。

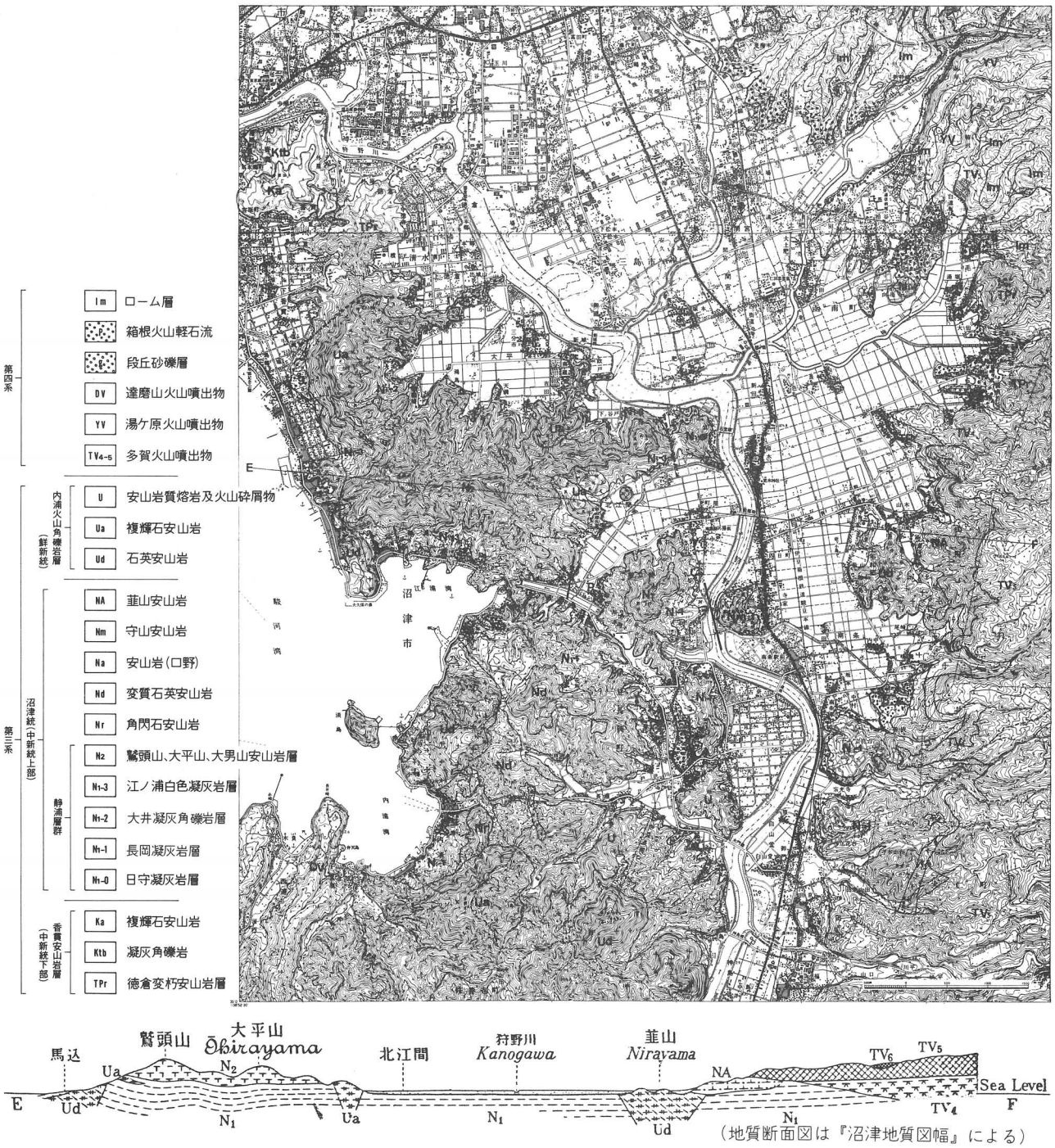
火山角礫岩は、直径5－20㎝程の火山角礫が50％以上をしめ、凝灰質物質が間をうめている。一部に成型の不明瞭な横穴をみる。

**(6) 箱根火山新期軽石流と段丘堆積物**　箱根火山新期軽石流は、49,000±700年B.P.といわれる。箱根の古期外輪山形成後、しばらくして流出したこの軽石流は、高温な水蒸気をともない、熱雲となって古期外輪山の西斜面の谷を流れ下り、古い狩野川の谷を埋めつくした。のち、海水準の低下に伴って浸食がすすみ、三島・函南の箱根火山の西麓では、10－30 mの崖をなし露出し、伊豆長岡周辺では、北江間の長塚・珍野・長岡地域に、いずれも南北に延びる段丘堆積物として、わずかに残っている。

箱根火山新期軽石流は、箱根西麓では、上・下部軽石層に2分され、分布は第82図のとおりである。

下部軽石層は、粒径3～18㎝の新鮮で発泡のよい灰白色軽石を、同質の細かい軽石や、安山岩の小岩片で充填し、膠結し固く締った軽石流である。南西にのびる箱根西麓の尾根には、この下部軽石層に、函南柏谷の百穴・赤王の横穴群をみる。これに反し、上部軽石流には横穴群をあまり見ない。上部軽石層は、下部軽石層の谷を埋めるようにして流れた層理の発達する、粘土化のすすんだ淡黄白色の軽石層で、最上部にオレンジ色の風化軽石の小片が層をなすのをみる。この軽石層は、人工的に乱さなければ数10年は壁面の崩壊をみないほど、軽石粒、砂質粒子、粘土のよくかみ合った組織をみせる。しかし、横穴を掘るには、含水比が高く、粘土化が非常にすすんでいること、湧水をみることが多い点、掘さくは容易だが、保存にはむかないという難点がある。北江間長塚・珍野の段丘堆積物もこの上部軽石層か

らなり、段丘が北にのびている点、南斜面に開口する横穴の掘さくする、立地条件を満たし得ないのかもしれない。より高度の掘さく技術を必要とするものの、軟く、最も均質で、塊状で割れ目の少なく、湧水をほとんど見ることなく、北江間の山裾の南斜面に大きく露出する露岩、江ノ浦白色凝灰岩層に、大北横穴群をみるのも当然のこととおもわれる。



（地質断面図は『沼津地質図幅』による）

**第82図　静浦山地地質図・地質断面図**

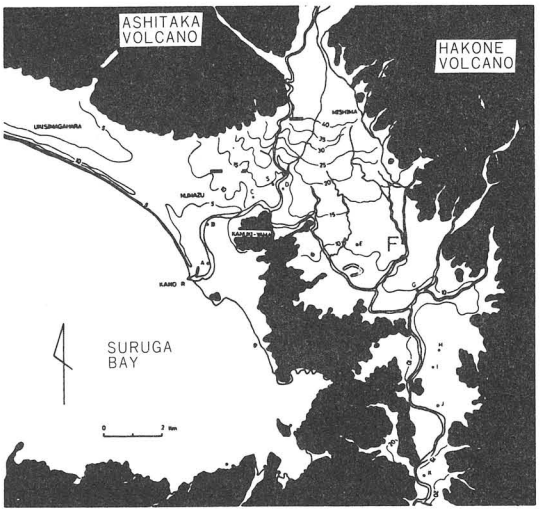
**3. 静浦山地の地質構造と大北横穴群**　本地域の第三系は地塊に分断される傾向がある。褶曲構造として、口野～珍野間にNNE～SSW方向の背斜軸をもつ緩かなドーム構造、珍場にみる安山岩の岩株の貫入は、貫かれた江ノ浦白色凝灰岩層に展張応力が働き、正断層を主とする小断層を生じた。これら2つの小断層群の影響をさける位置に、後背湿地を見下すように、大師山の横穴群があり、大北横穴群はこれらの小断層群のすぐ東側に集中し、江ノ浦白色凝灰岩層を穿っている。

またこの地域には、堰ノ上—大北の東側の日守中里を南北に貫くと考えられる断層があり、これに雁行する南北性の小断層による破砕風化帯が、大北の東側、大嵐山と日守山の鞍部を中心にみられ、茶褐色の風化帯をみせている。大北横穴群は、この破砕風化帯の西に位置するが、先の火山岩の貫入に伴う小断層群をさけ、東側の比較的割れ目の少ない塊状の江ノ浦白色凝灰岩の露岩に構築され、第87図の北江間の後背湿地の広がりを経て、南江間から大北にのびる自然堤防の上に広がる集落を南東に望む位置に、横穴を構築している。

## Ⅱ. 北江間の後背湿地型地形の形成にいたるまでの古環境の変遷

狩野川流域にひろがる北伊豆平野には、静浦山地に胞かれるように、徳倉、大平、北江間の3つの大きな後背湿地がみられる。第83図。これらの地形は、北から南東に拡がりをみせる三島扇状地のため、北に向っていた狩野川の流路が、北西へ転じ、静浦山地の方へ押しつけられ、谷口にみる自然堤防の発達に伴って生まれた。

大北横穴群の眼下には、南に、北江間の後背湿地が望まれる。北江間の後背湿地型地形は、大北横穴群の完成したであろう7～8世紀前半には、ほぼ、現在に近い状況にあったと考えられる。

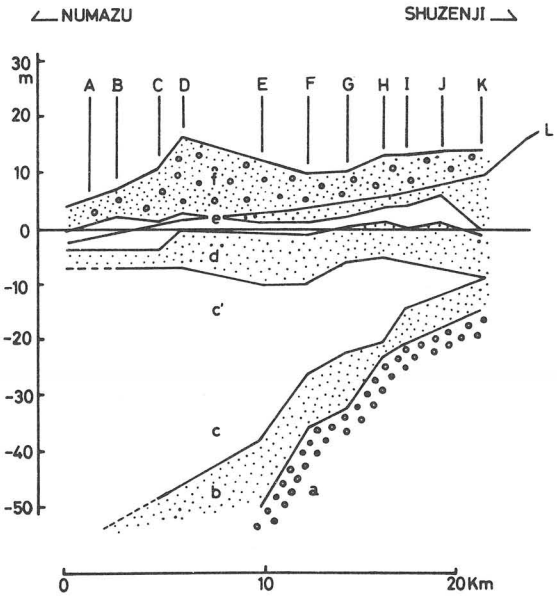



第83図　北伊豆平野の地形図

**1. 狩野川沖積平野の生いたち**　北江間の後背湿地の生いたちを考えるとき、この後背湿地の入口を塞ぎ、狩野川に沿って発達する自然堤防上から掘さくしたボーリングの結果、深度111 *m*で、大男山、長岡北に広く分布する緑色凝灰岩の基盤に達していること、北江間小学校地点では約40～60 *m*で同基盤に達していることに注目したい。つまり、第四紀洪積世の最終氷期の−80 *m*～−100 *m*と考えられている海水準低下に伴って、静浦山地を構成し、江間周辺の山地をつくる古い時代の堆積物・第三紀上部中新統の緑色凝灰岩層は浸食され、100～40 *m*にもおよぶ谷が発達していたことになる。この谷を埋めたて、北江間の地に、山麓との接線もあざやかに平坦な後背湿地をつくり出していったのは、後の理由から、縄文早期の海進によるものと考えられる。

北江間の後背湿地の生いたちは、北伊豆平野を形成する沖積層の生いたちと関連する。

狩野川に沿った各地のボーリング資料をつかい、修善寺から狩野川沿いに沼津に向って、沖積平野を南北に截った断面図を模式的に画くと、第84図のようになる。下位から順に1. 下部礫層a　2. 下部砂層b　3. 下部シルト層C、C′　4. 上部砂層d　5. 上部シルト層e　6. 最上部泥砂礫層f　の6つの層に分けられる。各層の特徴は次のとおりである。また各層の堆積した古環境の移り変わりは、珪藻化石群集の変遷からも推測で




A：港大橋，B：御成橋，C：東京麻糸，D：黄瀬川，E：三島市長伏，F：大場川安久，G：蛇が橋，H：韮山小学校北，I：韮山駅前，J：伊豆長岡駅前，K：白山堂，L：狩野川の現河床面
A-Kはボーリング地点，位置は第10図に示す．
a：下部礫層，b：下部砂層，c, c′：下部シルト層，d：上部砂層，e：上部シルト層，f：最上部泥砂礫層．

第84図　北伊豆平野（沖積層）の模式断面図

きる。第85図は、北伊豆平野を構成する沖積層の代表的層序と、同ボーリング・コア中の珪藻化石群集からみた、沖積層の堆積古環境の変遷を示したものである。地質柱状図横の数字は$^{14}$C炭素14年代（y. B. P.）を示す。（記号B. P. は1950年を起点とする。）

1. 下部礫層a：砂礫層で大部分河成堆積物と判断される。

2. 下部砂層b：砂層であるがシルト・粘土・腐食土層をはさみ、また、一部に海棲の貝殻を含む。

3. 下部シルト層C・C′：上下に2分することができる。下部Cは貝殻混りシルト層、上部C′は貧貝化石かつ腐植土質シルト層からなる。C層にみる貝化石は、外海の影響をうける内湾の浅海砂泥底棲のものからなり、*Proclava pfefferi* ヒメカニモリ、*Anomalodiscus squamosus* シオヤガイなど、現在紀伊半島以南に分布するものをふくむ。産出する貝化石は第20表のとおりである。長岡北小学校地点のC層にも、南江間の南にあたる守山の麓、伊豆中央高校地点のC層からも、シオヤガイを主に、より暖かい海が、この地域に拡がったことを示唆するに充分な貝化石の産出をみる。

| | |
|---|---|
| *Lunella coronata* (Gmelin) スガイ | 1 |
| *Clithon retropictus* (V. Martens) イシマキガイ | 7 |
| *Batillaria multiformis* (Lischke) ウミニナ | 10 |
| *Tiberia pulchella* (A. Adams) クチキレガイ | 1 |
| *Proclava pfefferi* (Dunker) ヒメカニモリ | 14 |
| *Ringicula doliaris* (Gould) マメウラシマ | 3 |
| *Hinia festiva* (Powys) アラムシロガイ | 28 |
| *Niotha livescens* (Philippi) ムシロガイ | 34 |
| *Dentalium octangulatum* (Donovan) ヤカドツノガイ | 2 |
| *Anadara* (*Scapharca*) *subcrenata* (Lischke) サルボオ | A |
| *Mytilus edulis* Linne ムラサキイガイ | 1 |
| *Ostrea denselamellosa* Lischke イタボガキ | C |
| *Pecten* (*Notovola*) *albicans* (Schröter) イタヤガイ | 2 |
| *Fulvia mutica* (Reeve) トリガイ | 8 |
| *Pillucina pisidium* (Dunker) ウメノハナガイ | 1 |
| *Ctena divergens* (Philippi) ヒメツキガイ | 1 |
| *Anomalodiscus squamosus* (Linné) シオヤガイ | A |
| *Dosinia japonica* (Reeve) カガミガイ | A |
| *Tapes* (*Amygdala*) *philippinarum* (Adams et Reeve) アサリ | 5 |
| *Paphia undulata* (Born) イヨスダレ | A |
| *Venus toreuma* (Gould) マルスダレガイ | 6 |
| *Macoma praetexta* (V. Martens) オオモモノハナ | C |
| *Nitidotellina nitidula* (Dunker) サクラガイ | 1 |

A : Abundant, C : Common
（数字は個体数を示す）

**第33表　狩野川下流沖積層Cから産出した貝化石**

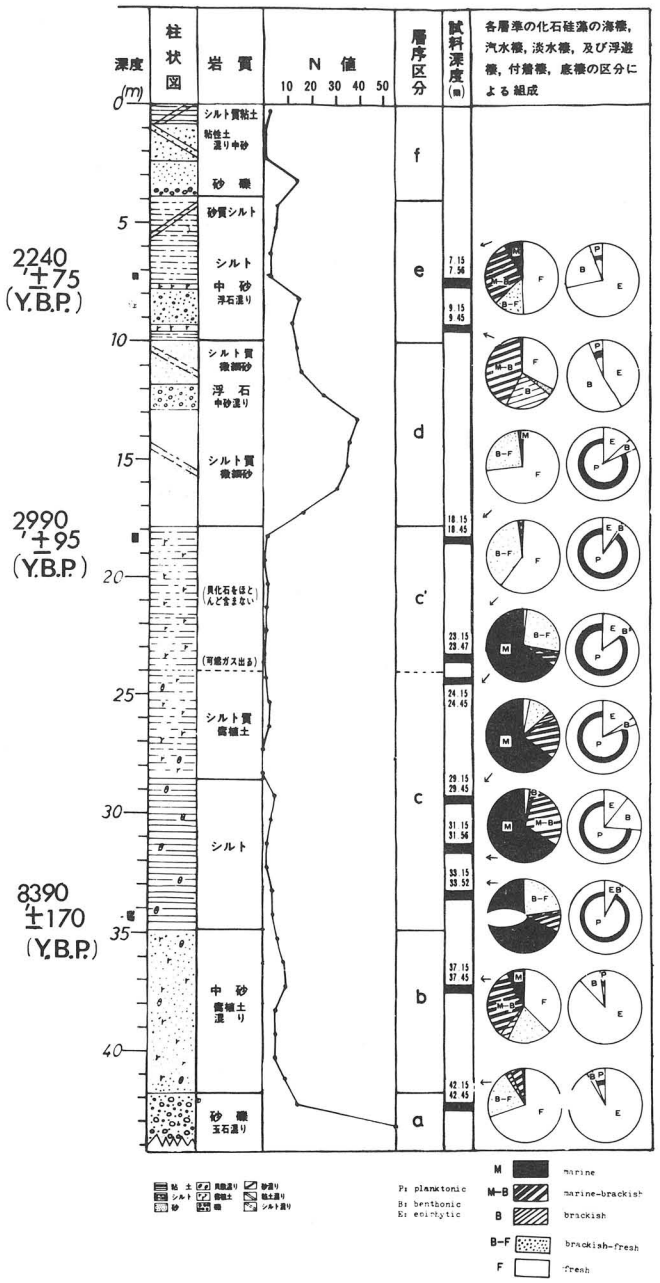
4. 上部砂層d：浮石層をはさむ浮石質砂層。貝殻もみられないし、珪藻などの化石も検出できない。おそらく、汽水ないし河成堆積物とおもわれる。上部砂層に集中する浮石は、浮石に含まれる造岩鉱物の組成と、斜方輝石・角閃石の示す屈折率の測定値から、天城火山カワゴ平の軽石流起源であることを確認している。このことは、天城火山カワゴ平噴出の軽石流にともなう、中伊豆筏場段丘堆積物中にみる神代杉の$^{14}$C炭素14年代2,830±120年B. P. が軽石流の流出年代を示すことから、軽石層の二次堆積をみるまでの、時間的経過をへており、今から約2,700～2,800年前、縄文後・晩期の堆積物と考えられる。第86図の長岡北小学校地点の地質柱状図も、軽石を主体とする上部砂層の存在を明らかに示している。

5. 上部シルト層e：珪藻化石群集から海成～汽水成層と考えられる。浮石質砂層をはさむ。狩野川放水路取水口付近では、ほぼ同層準と思われる砂層から、紀伊半島以南にすむヒメカニモリ、シオヤガイの浅海棲貝化石が報告されている（多田・坂口1954）。この海成～汽水成層の上限の標高は平均＋3㎝である。長岡北小学校地点でも深度5～6㎜にこの層をみる。

6. 最上部泥砂礫層：層相の変化に富む火山砂礫層、腐植土のはさみ込みが多い。北部では、三島扇状地、黄瀬川扇状地をつくる砂礫層であるが、北江間の後背湿地では、暗灰色～暗褐色の泥層が表層を被っている。

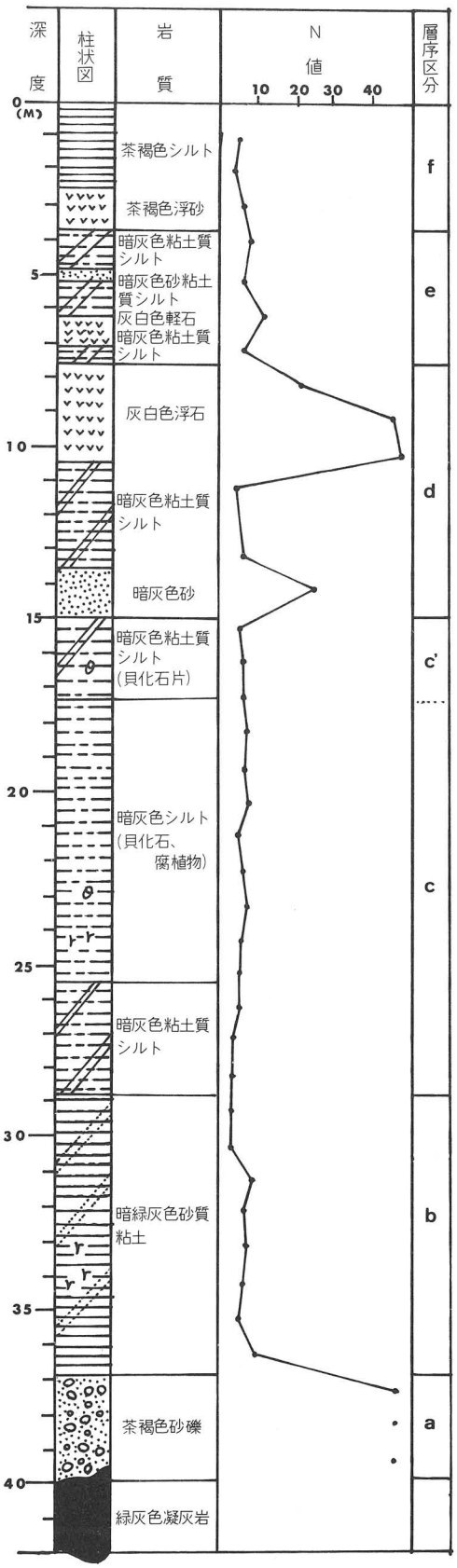
以上、北伊豆平地中央部での沖積層構成層の様子を中心に、これと付合する北江間の後背湿地をつくる各層についてのべた。

つまり、下位から、下部礫層（河成）→下部砂層（汽水成～海成）→下部シルト層（海成から汽水成）→上部砂層（非海成？）→最上部泥砂礫層（陸成）の順に堆積し、海成シルト層を中心に、2つの堆積輪廻が認められる。下部礫層は、現在のところ、沖積層の基底礫層と考える。下部砂層は、北に向って厚くなる。下部シルト層は、南から北へ向って急に厚さを増し、海水準上昇にともなって、北から南へ、海の広がっていく“海進“がすすみ、やがて、全域にわたる内湾“旧期古狩野湾”が形成されたことを示している。その時代は、35㎜付近の貝化石の$^{14}$C炭素14年代が、8390±170年B. P. を示した。縄文早期の海進によるものである。この内湾は、下部シルト層上部から上部砂層にかけて、一時離水化したようで、再び上部シルト層の時期に内湾“新期古狩野湾”がつくられた。この間の変化には、海面上昇




**第85図　北伊豆平野中央部（第83図地点F）のボーリングコア柱状断面図ならびに珪藻化石群集**

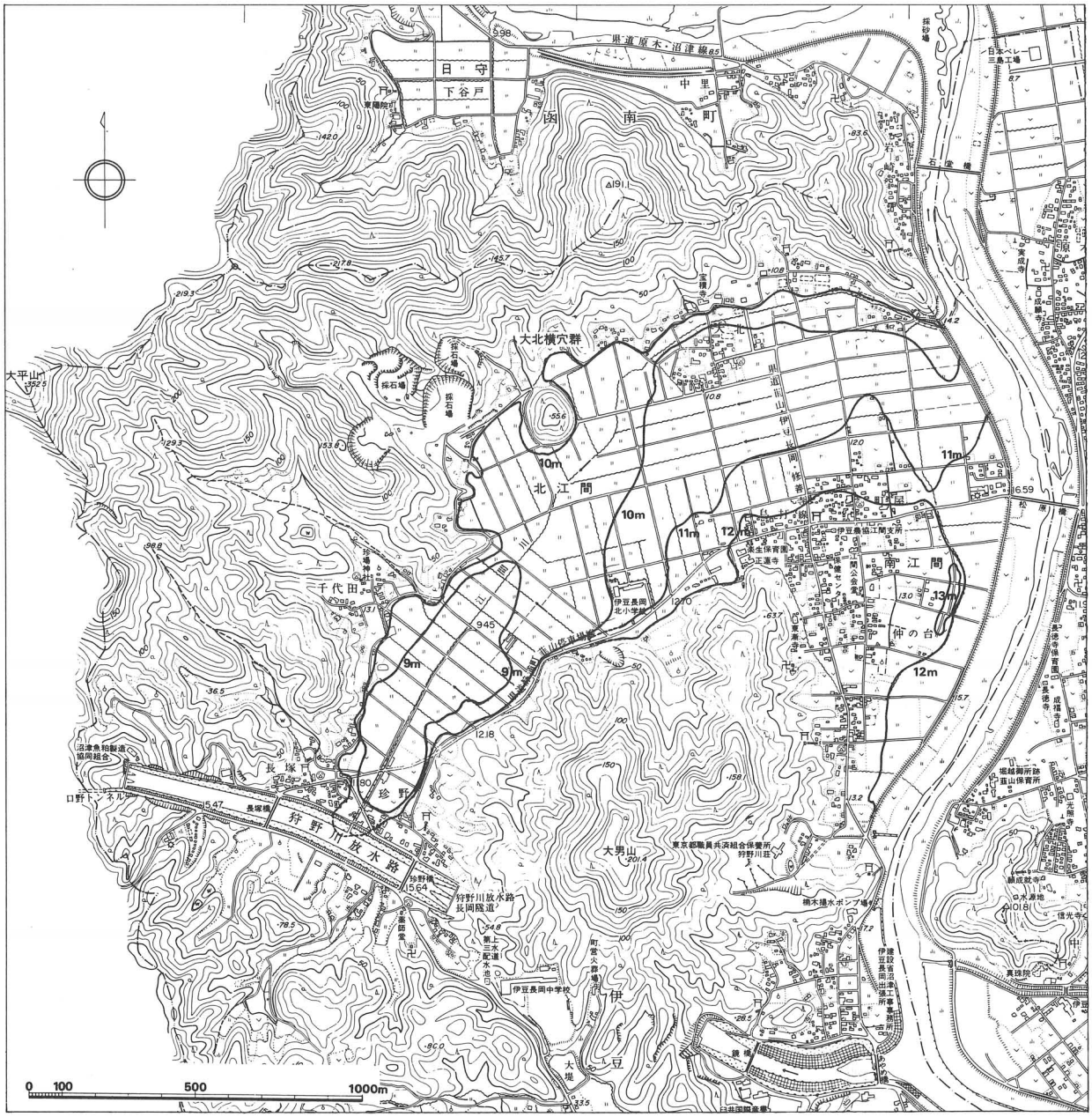
の一時的停滞または小海退が関係しているかもしれない。新期古狩野湾のときまで、おそらく高海水面期がつづいたと考える。この時期の海水準は北伊豆平野中央部で平均＋3 m前後であり、長岡北小学校地点にもその傾向をみ、例外ではない。この時期は、北伊豆平野中央部での泥炭の$^{14}$C炭素14年代測定値が深度7 m付近で2,240±75年B. P.を示すことを確認できたことから、縄文後期～晩期にあたる。やがて海退がすすむにつれて、江間の谷の入口も、狩野川の砂礫で自然堤防が形成され、北江間の後背湿地型地形が




**第86図　北江間後背湿地型地形にみるボーリングコアの柱状断面図（長岡北小学校）**

みられるようになった。

**2. 北江間の後背湿地の様子**　現在の地形面に等高線を引き描いた後背湿地型地形は第87図のとおりであり、9 mの等高線の描く谷奥の低湿地は、弥生、古墳時代を経て7～8世紀にいたるまで、よし、あしの繁る低湿地であったであろう。10 mの等高線は、後背湿地の南から北東へ向けてのび、北側の山裾に押しつけるように排水路・江間川を形成している。10 m以下の等高線で示される、かっての低湿地は後背湿地型地形の約½をしめ、最も低い地点では標高8.4 mを示す。最上部まで粘土層の発達をみ、冠水、湛水を繰り返していた地域とみられる。その意味では11 mの標高をみる広がりは、深さ3.20 m以浅に、砂混りの茶褐色土層の発達をみ、早くから耕土として利用された可能性がある。南江間から北に延びる最高13.6 mの標高をみせ、11 mの等高線で囲まれる自然堤防には、層厚3.7 m内外の砂質褐色土層をみ、北に薄くなっている。花ノ木、鳥井前、窯ノ段の遺跡をのせている。自然堤防～後背湿地中心部の標高差は5.2 mであり、自然堤防の地域では、後背湿地の湛水状況に対応した農耕の発達が可能であったであろうと想われる。

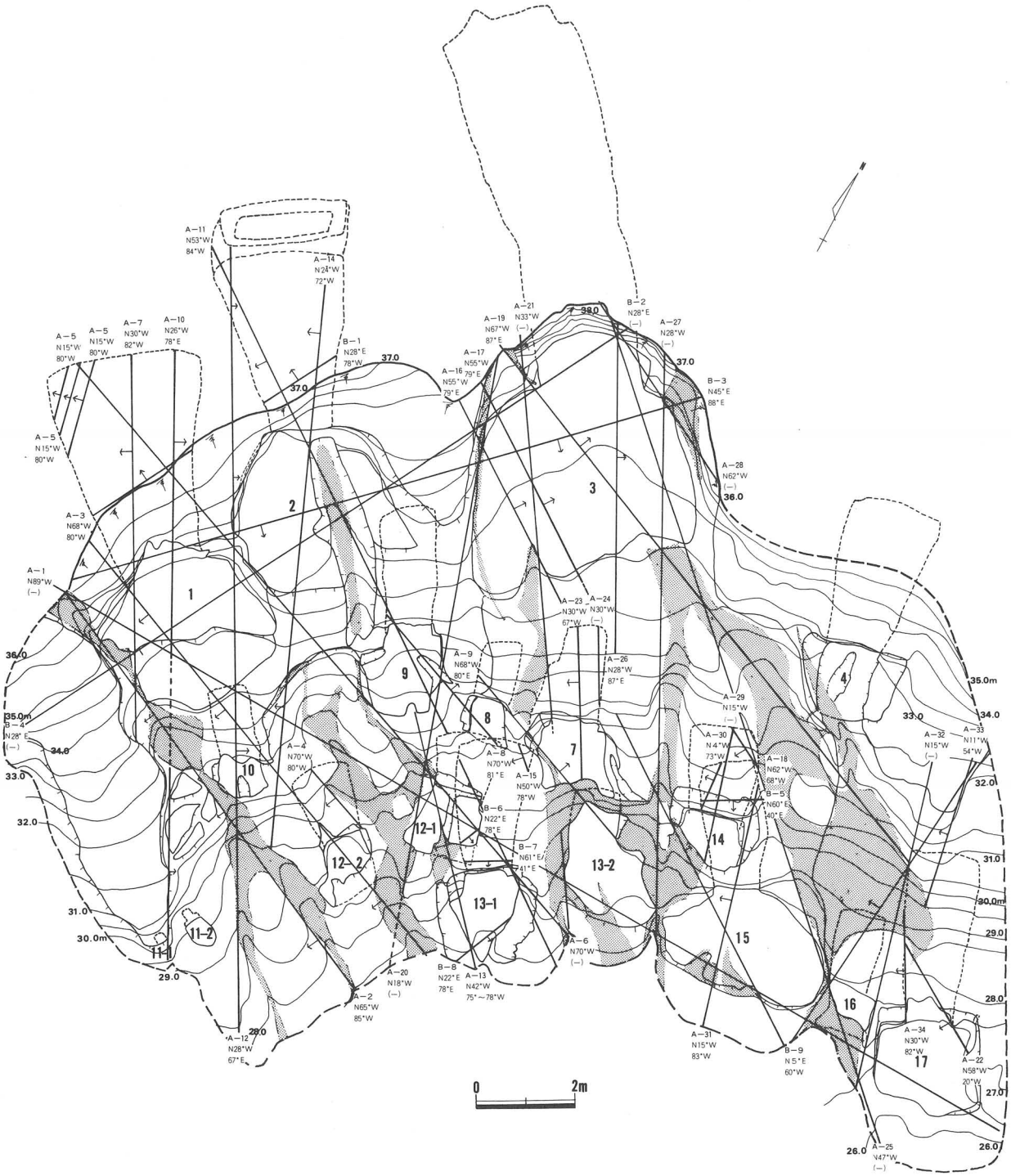



第87図　北江間の後背湿地型地形図

## Ⅲ．大北横穴群における横穴の掘削主軸方向と、基盤の凝灰岩にみる断裂(割れ目)の走向・傾斜との関係

**1. 大北横穴群にみる基盤凝灰岩の特徴**　本来凝灰岩は、火山灰が固結して生じた火砕岩で、構成粒子の大部分が直径4㎜以下の火砕岩の総称である。大北の地の江ノ浦白色凝灰岩は、石英安山岩質・軽石質で軟かく、きめの細かい白色凝灰岩と、やや硬化した灰色凝灰岩の8×4㎝くらいの大きさの団塊から成り、その間隙を粒径2～4㎜の黄緑灰色、紫灰色、黒灰色など雑色性の凝灰岩や安山岩片が埋め、互に膠結されたものである。

凝灰岩層には、走向N60°～40°W、傾斜15°Eと、真北から60°～40°北西方向に延び、東側に15°



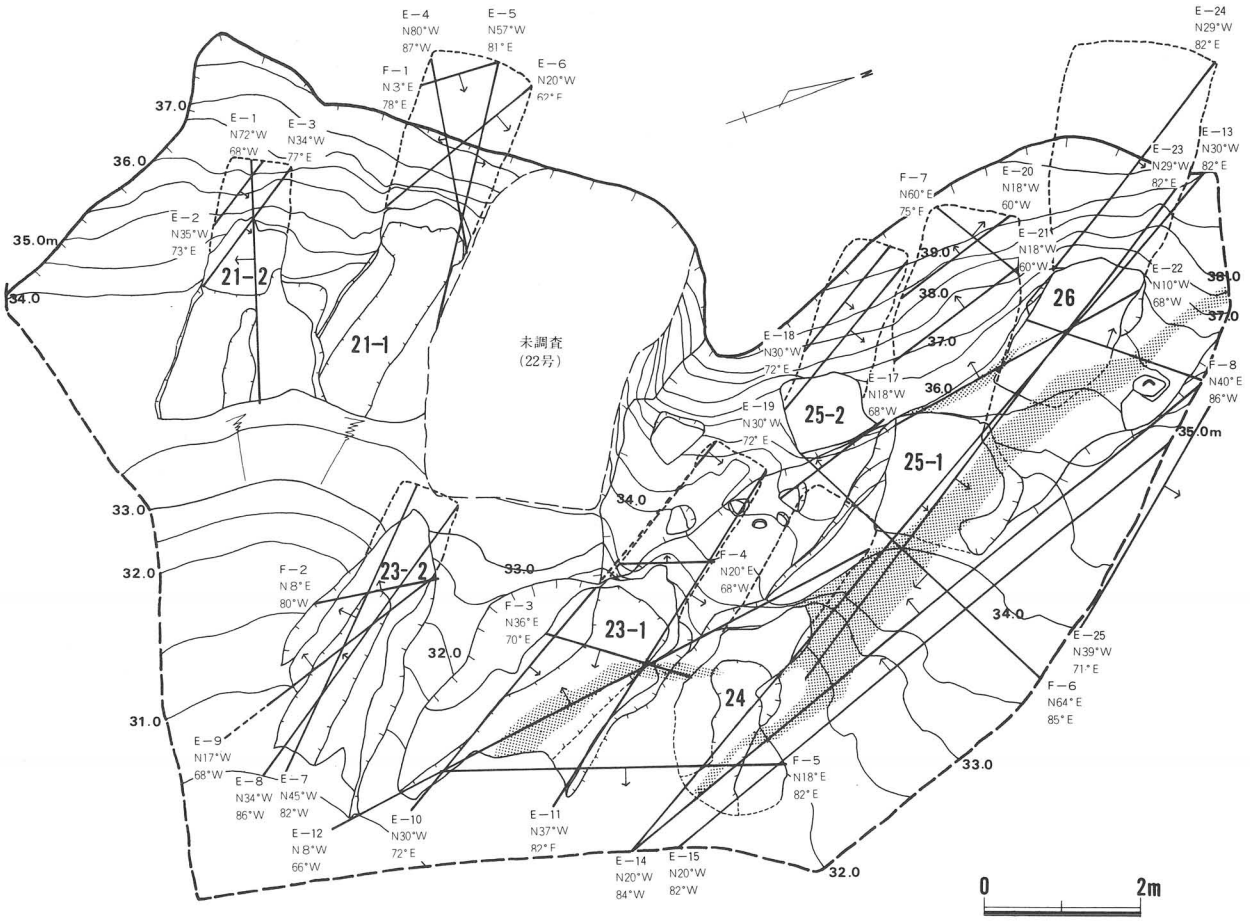

**第88図　大北A群（1～17号）横穴にみる断裂分布図**

傾く層理に平行に、南斜面では右下りに、直径5～15㎝、ときには、25×25㎝・50×50㎝の安山岩塊の集中した10～70㎝の薄層をみることがある。大北横穴群付近では、粒径数㎜～1㎝程度で、層厚10～20㎝の不明瞭な安山岩の火山角礫岩層をみるのみで、大師山のように横穴の配列の決定条件にはなっていないが、配列に、右下りという、多少の影響を与えている。

古い露頭では、大北の凝灰岩のうち、軟かい軽石質・石英安山岩質部分が脱け出し、露頭の斜面に8×4・13×15・25×25（㎝）くらいの孔をなし、ざらざらした岩肌をみせ、風化の激しさをみる。

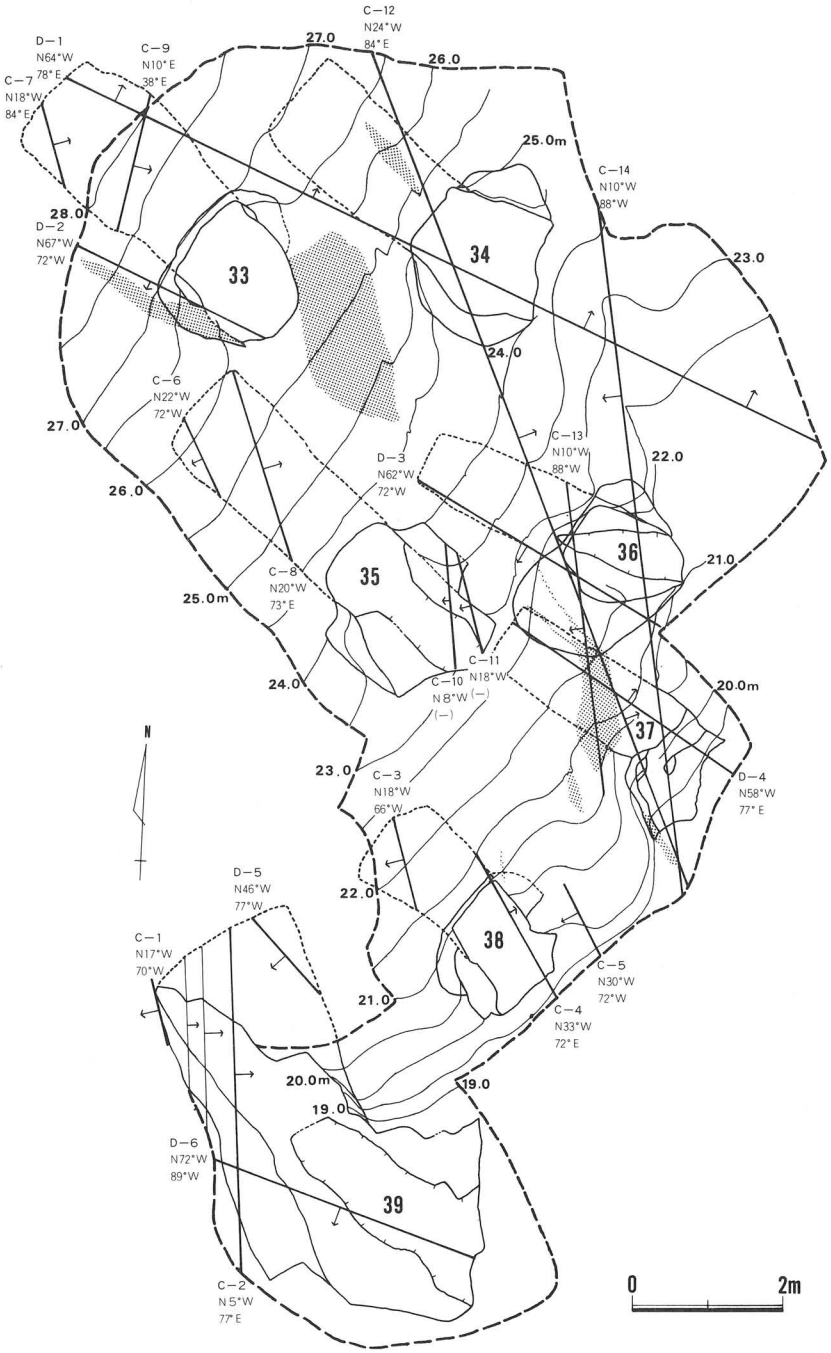
**2. 横穴の基盤の凝灰岩に発達する（割れ目）断裂系の特徴**　大北横穴群を穿った凝灰岩層には、多くの“割れ目”断裂が走る。この（割れ目）を断裂と呼ぶこととする。この断裂のなす面の走向・傾斜を、横穴の床面、一部露岩の斜面で測定し、平面図に投影したのが第89図・第90図であり、その測定値は第34表・第35表・第36表に示したとおりである。図の実線の末端には、各断裂の記号・番号と、断裂のなす面の走向・傾斜を示した。30基について記載した。

断裂のなす面の走向・傾斜を次の方法で、同時に立体的に投影した。第91図のように、断裂のなす面を円盤の平面で表現し、この上に、透明半球をかぶせたとき、円盤の中心に垂直に立てた棒の先端と、透明半球との接点を“極”とよぶこととし、極の透明半球上の位置で、断裂面の走向・傾斜を同時に表わすこととする。例えば、第91図の×印は、断裂面の延びる方向、つまり断裂面の走向が南北N—Sで、断裂面の傾きが水平面を基準に45°東側へ傾く、傾斜45°Eであることを示し、これを、走向方向の“南北”を軸に、円盤を45°東側へ傾けた時指示する“極”の位置で表現している。




第89図　大北C群（21～26号）横穴にみる断裂分布図

第88図・第89図・第90図にみる断裂系を、同様の方法で投影すると、単純化され、第92図・第93図・第94図ようになる。結果、一般的傾向として、少なくとも2組の断裂系をみる。第21表，第22表，第23表の平均値参照。第92図のように、北西―南東方向に共に走向をもちながら、一方の断裂面は北東に70°～80°傾く断裂系を一組確認できる。もう一組、前者と交叉する第94図・第92図のB・第93図Fのような断裂系、つまり、断裂面の走向がN20°～30°Eで、北東―南西方向に共に延び、傾斜70°～80°で、一方の断裂面は北西に70°～80°、他方の面はこれと交叉するように南東に70°～80°傾く断裂系を確認できる。しかし、共役関係にある断裂が、どれと、どれか判定できない。




**第90図　大北B群（33～39号）横穴にみる断裂分布図**

これら2組の断裂は、横穴の床面、側壁の掘削にあたっては、平行に、ときに交叉して表われ、これに雁行する無数の細かい断裂は、横穴の掘削にあたって、ノミをどの方向から扱っても、凝灰岩を、断面がV型の小さなブロック状に剥理し、側壁・床面に、断裂に沿った2組のV型の断面を持つ溝を、平行する波状の起伏を残す可能性がある。したがって、壁面・床面の仕上げは、V型の溝と溝との間の突出した小さな、方向性のある尾根の部分を、平坦になるようノミで削り取ることになり、ノミあとの流れにも少なくとも2組をみる可能性が強い。

一見硬い凝灰岩にも、第95図のような、交叉して組をなす断裂が、少なくとも2組存在し、これと平行した無数の微細な断裂の存在が、ノミによる凝灰岩の剥理を可能に、横穴の掘削、構築を容易にしている点、注目される。

**3. 横穴の玄室床面にみる主要断裂の分布と、これらが横穴の掘削に与えた影響について**　横穴の掘削は、第88図にその例をみるように、大きな断裂を避け、大きな断裂と断裂の“馬の背”の形をした露

| 断裂面の走向・傾斜 | | | 同平均値 |
|---|---|---|---|
| A－1 | N 89° W | (?) | |
| 〃－2 | N 65° W | 80° W | |
| 〃－3 | N 68° W | 80° W | |
| 〃－4 | N 70° W | 80° W | |
| 〃－5 | N 15° W | 80° W | ① N44°W・80°E |
| 〃－6 | N 70° W | (?) | |
| 〃－7 | N 30° W | 82° W | ② N44°W・72°W |
| 〃－8 | N 70° W | 81° E | |
| 〃－9 | N 68° W | 80° E | |
| 〃－10 | N 20° W | 78° E | |
| 〃－11 | N 58° W | 84° W | |
| 〃－12 | N 28° W | 67° E | |
| 〃－13 | N 42° W | 75° W | |
| 〃－14 | N 24° W | 72° W | |
| 〃－15 | N 50° W | 78° W | |
| 〃－16 | N 55° W | 79° E | |
| 〃－17 | N 55° W | 79° E | |
| 〃－18 | N 62° W | 68° W | |
| 〃－19 | N 67° W | 87° E | |
| 〃－20 | N 18° W | (?) | |
| 〃－21 | N 33° W | (?) | |
| 〃－22 | N 58° W | 20° W | |
| 〃－23 | N 30° W | 67° W | |
| 〃－24 | N 30° W | (?) | |
| 〃－25 | N 47° W | (?) | |
| 〃－26 | N 28° W | 87° E | |
| 〃－27 | N 28° W | (?) | |
| 〃－28 | N 62° W | (?) | |
| 〃－29 | N 15° W | (?) | |
| 〃－30 | N 40° W | 73° W | |
| 〃－31 | N 15° W | 83° W | |
| 〃－32 | N 15° W | (?) | |
| 〃－33 | N 11° W | 54° W | |
| 〃－34 | N 30° W | 82° W | |
| B－1 | N 28° E | 78° W | |
| 〃－2 | N 28° E | (?) | |
| 〃－3 | N 45° E | 88° E | ① N33°E・65°E |
| 〃－4 | N 28° E | (?) | |
| 〃－5 | N 60° E | 40° E | ② N33°E・69°W |
| 〃－6 | N 22° E | 78° E | |
| 〃－7 | N 61° E | 41° E | |
| 〃－8 | N 22° E | 78° E | |
| 〃－9 | N 5° E | 60° W | |

**第34表　大北A群の玄室にみる断裂面の走向・傾斜**

A 1～33・B 1～9断裂群

| 断裂面の走向・傾斜 | | | 同平均値 |
|---|---|---|---|
| E－1 | N 72° W | 68° W | |
| 〃－2 | N 35° W | 73° E | |
| 〃－3 | N 34° W | 77° E | |
| 〃－4 | N 80° W | 87° W | |
| 〃－5 | N 57° W | 81° E | |
| 〃－6 | N 20° W | 62° E | |
| 〃－7 | N 45° W | 82° W | |
| 〃－8 | N 34° W | 86° W | |
| 〃－9 | N 17° W | 68° W | |
| 〃－10 | N 30° W | 72° E | |
| 〃－11 | N 37° W | 82° E | |
| 〃－12 | N 80° W | 66° W | |
| 〃－13 | N 30° W | 82° E | |
| 〃－14 | N 20° W | 84° W | ① N32°W・76°E |
| 〃－15 | N 20° W | 82° W | ② N32°W・73°W |
| 〃－17 | N 18° W | 68° W | * E－1, 4, 5をのぞく値　N23°W |
| 〃－18 | N 30° W | 72° E | |
| 〃－19 | N 30° W | 72° E | |
| 〃－20 | N 18° W | 60° W | |
| 〃－21 | N 18° W | 60° W | |
| 〃－22 | N 10° W | 68° W | |
| 〃－23 | N 29° W | 82° E | |
| 〃－24 | N 29° W | 82° E | |
| 〃－25 | N 39° W | 71° E | |
| F－1 | N 3° E | 78° E | ① N31°E・78°W |
| 〃－2 | N 8° E | 80° W | ② N31°E・78°E |
| 〃－3 | N 36° E | 70° E | |
| 〃－4 | N 20° E | 68° W | F－3, 6, 7, 8グループをのぞく値 N12°E・78°W・78°E |
| 〃－5 | N 18° E | 82° E | |
| 〃－6 | N 64° E | 85° E | |
| 〃－7 | N 60° E | 75° E | F－3, 6, 7, 8グループをのぞく値 N50°E・78°W・78°E |
| 〃－8 | N 40° E | 86° W | |

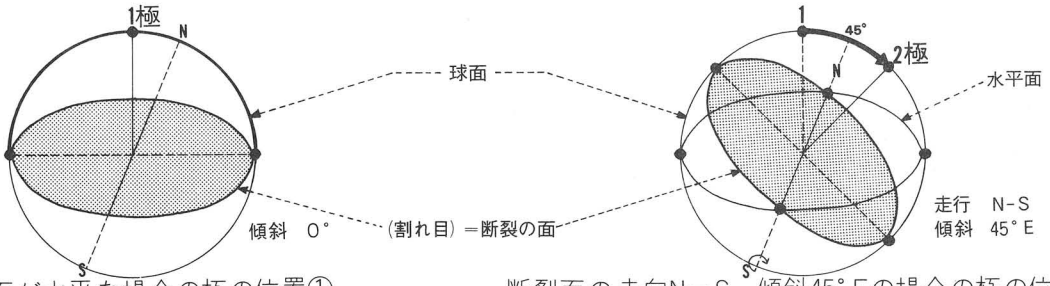
**第35表　大北C群の玄室にみる断裂面の走向・傾斜**

E 1～25・F 1～8断裂群

| 断裂面の走向・傾斜 | | | 同平均値 |
|---|---|---|---|
| C－1 | N 17° W | 70° W | |
| 〃－2 | N 5° W | 77° E | |
| 〃－3 | N 18° W | 66° W | |
| 〃－4 | N 33° W | 72° E | ① N62°W・78°E |
| 〃－5 | N 30° W | 72° W | |
| 〃－6 | N 22° W | 72° W | ② N62°W・78°W |
| 〃－7 | N 18° K | 84° E | |
| 〃－8 | N 20° K | 73° E | |
| 〃－9 | N 10° E | 38° E | |
| 〃－10 | N 8° W | (?) | |
| 〃－11 | N 18° W | (?) | |
| 〃－12 | N 24° W | 84° E | |
| 〃－13 | N 10° W | 88° W | |
| 〃－14 | N 10° W | 88° W | |
| D－1 | N 64° W | 78° E | |
| 〃－2 | N 67° W | 72° W | ① N18°W・71°E |
| 〃－3 | N 62° W | 72° W | ② N18°W・76°W |
| 〃－4 | N 58° W | 77° E | |
| 〃－5 | N 46° W | 77° W | |
| 〃－6 | N 72° W | 89° W | |

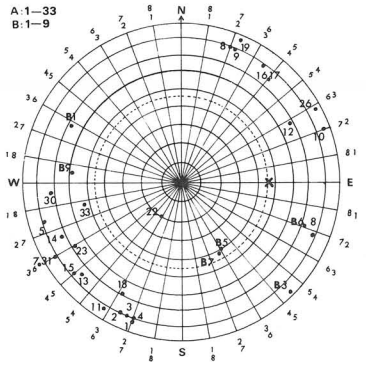
**第36表　大北B群の玄室にみる断裂面の走向・傾斜**

C 1－14・D 1－6断裂群

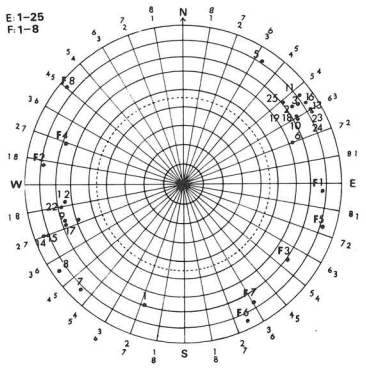



断裂面が水平な場合の極の位置①　　断裂面の走向N－S、傾斜45°Eの場合の極の位置②

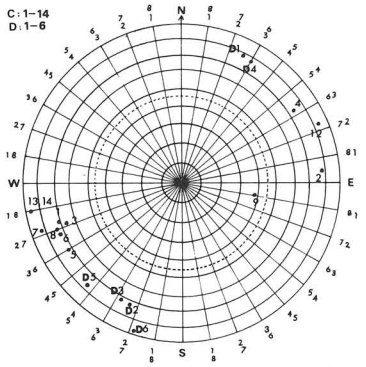
**第91図　(割れ目)の面の示す走向・傾斜模式図**




**第92図　玄室床面にみる主要断裂の走向・傾斜投影図(A群1～17号)**




**第93図　玄室床面にみる主要断裂の走向・傾斜投影図(C群21～26号)**




**第94図　玄室床面にみる主要断裂の走向・傾斜投影図(B群31～39号)**

岩の尾根に、これを構築するという原則がみられる。1—17号横穴群の分布は縦の大きな断裂に規制され、凸部“馬の背”に横穴が集中している。

断裂の少ない“馬の背”の尾根の露岩にも前述の断裂が走るのをみる。尾根に構築した横穴の玄室床面で、これらの断裂系を切ったとき、主要な断裂は、第96図のように、各横穴の床面に表われる。床面の形、南に開口するコの字の中に、模式的に断裂を示し、類型化したものである。巨視的にみた断裂の分布には、次の傾向をみる。

(1)　左右いずれかの側壁に平行な断裂をみる横穴＝D2型—7基、D3—2、E3—2、F2—1＝39.6％

(2)　側壁に沿う断裂、中央を縦貫する断裂をみる横穴＝B3—1、G1—1、G3—1＝9.9％

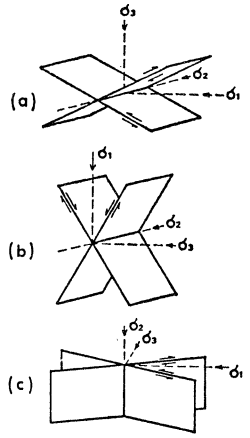
(3)　両側壁に沿う断裂をみる横穴＝C2—1、G2—2（C2は両側壁に沿い奥に広がる横穴をつくるので、ここに入れる)＝9.9％

(4)　中央を縦貫する断裂をみる横穴＝D1—2、E1—2＝13.2％

(5)　側壁に交叉する断裂のみをみる横穴＝A2—2、A3—4、C1—2＝26.4％

30基の調査結果である。横穴の側壁に沿って走る断裂をみる横穴は、実に、全体の73.6％、側壁の左右いずれにみるかは、右：左＝9：5で、右手に走る断裂に沿って横穴の掘削を進める傾向がやや強い。中央に断裂をみる横穴も、末広がりに奥に広いC2を加えて4基をみる。このように、傾斜70°～80°と垂直に近い断裂面を中央・左右いずれかに配し、これを基準に横穴の掘削を進めている傾向をみる。奥壁、玄室入口の面にも、一部東西方向の走向をみせる断裂に沿ったものがみられた。

**4. あとがき**　凝灰岩に構築する横穴群については、1. 横穴掘削の対象となる露岩の性質を明確にし、その露岩分布、標高、横穴群の分布や配置との関係。2. 露頭斜面の傾斜と墓前域構築の作業量を含め、横穴の位置との関係。3. 断裂と横穴の主軸方向、露頭斜面の最大傾斜角と横穴の開口方向。4. 露岩の面の方位と開口方位との関係。など明らかになる可能性の大きい問題が多くみられた。




第95図　断裂（割れ目）の面の広がる方向と角度

| 類型 | 主要断裂の分布型 1 | 2 | 3 | a b c 1 | a b c 2 | a b c 3 | 分布率 % |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | | | | | 25-2<br>26 | 9<br>8<br>12-1<br>13-1 | 20. |
| B | | | | | | 12-2 | 3.3 |
| C | | | | 25-1<br>39 | 2 | | 10. |
| D | | | | 23-2<br>35 | 15 33<br>16 37<br>21-2<br>24 38 | 34<br>36 | 36.7 |
| E | | | | 10<br>14 | | 13-2<br>17 | 13.3 |
| F | | | | | 21-1 | | 3.3 |
| G | | | | 7 | 3 23-1 | 1 | 13.3 |

南に開口する横穴床面
断裂（割れ目）

a：1～17号（A群横穴）
b：21-1～26号（C群横穴）
c：33～39号（B群横穴）

第96図　横穴の玄室床面にみる主要断裂の分布模式図


註 1.　高橋　豊「静浦山地の地質」『静岡地学』第7号　5－9　昭和40年

2.　地質調査所「沼津地質図幅・同説明書」昭和30年

3.　高橋　豊・土　隆一「東海地方の沖積海岸平野とその形成過程」『地質学論集』No.7　27－37　昭和47年

# 第6節　北伊豆の横穴について

は　じ　め　に
1.　各横穴の概要
　(1)　狩野川右岸地帯
　(2)　狩野川左岸地帯
　(3)　駿河湾沿岸地帯
　(4)　他の伊豆半島の横穴
2.　分布の特色
　(1)　地質的分布
　(2)　地域的分布
　(3)　垂直分布
3.　横穴群の構成単位
　(1)　単独横穴
　(2)　2基横穴
　(3)　3基横穴
　(4)　4基横穴
　(5)　5基横穴
お　わ　り　に
○年代の問題
○集落・身分・生業等の問題
○横穴と火葬の問題

## は　じ　め　に

北伊豆の横穴については、古くは明治35年（1902）に、大野雲外氏が考古学雑誌に、伊豆長岡町の大師山横穴群中の2基「大師窟」と「鍛冶窟」とを紹介し、つづいて高橋健自氏によって大正11年(1922)の著書「古墳と上代文化」（文献③）に同じく大師山の2窟、大正14年（1925）には同じ著者によって考古学雑誌第5巻2号に、同じ横穴が紹介され「珍場の横穴」（文献⑥）として注目を集めた。その後も断片的調査もあったが、その頃の結果を集大成したのが、昭和5年に刊行された「静岡県史」第1巻（文献⑦）である。当時としては知り得られる限りの横穴を網羅している。それによれば、伊豆半島基部で12個所の横穴または横穴群が知られていた。それらには、今日すでに湮滅したものも多い。戦後、いち早く軽部慈恩氏によって、昭和22年（1947）に、函南町柏谷百穴横穴群のうち111基が発掘調査された。（文献⑧）北伊豆横穴群の最初の学術調査であった。柏谷百穴については、その後昭和48年（1973）測量調査（山内昭二）が実施され、翌49年には一部発掘調査（山内昭二他・文献⑰）が行われた。

その間、昭和22年には宗光寺横穴群の一部が調査され（長田実・文献⑩）当時としては極めて珍しい火葬骨を納めた箱形石櫃を発見したが、三島南高等学校の火災で、すべての資料を焼失した。その後昭和32年にこの横穴群のうち4基が調査された。（中川成夫他・文献⑯）

また昭和38年（1963）には三島市赤王の4基が調査された。（山内昭二・文献⑮）これは4基づつの

4グループで構成される赤王横穴群のうちの1グループであるが、その後赤王横穴群は消滅した。49年には同じく三島市塚原の山の神の3基が調査されているが（山内昭二・文献⑲）箱根バイパス建設に伴う調査であったから、これもすでに消滅した。

一方、駿河湾に面した沼津市江ノ浦横穴群が、昭和50年（1975）に確認のための測量調査が行われ（瀬川裕市郎他・文献⑱）92基の群在が判明した。

またその前年昭和49年には、長岡町教育委員会によって、待望の大師山横穴群の実測及び発掘調査が実施され（斉藤忠他）幾多の基礎的資料を得た。この調査中、北江間一帯からつぎつぎと横穴群が発見されたが、そのうち最も数が多く、複雑な様相を持つ大北横穴群が、長岡町教育会によって、昭和52年から55年にかけて4回にわたり発掘調査が行われ（斉藤忠他・文献㉒・㉓・㉔）幾多の新しい知見を加えることができたのである。またこの調査中、新しい横穴の発見も相次ぎ、北伊豆の横穴所在地は急速に数を増した。

昭和40年（1965）の「静岡県埋蔵文化財包蔵地地名表」によると、当地方の横穴群の数は27個所、大師山横穴群の報告書（1976 文献⑳）に記載されたものは33個所、数次にわたる今回の調査では46個所に達した。若干確認できなかったところもあるが、ほぼ出揃ったと思うのである。実際に踏査してみると、地名表に登載されている横穴でも、実在しなかったり、誤認されたものもあり、遺跡名として適当を欠くものなども判明したので、それらは適当に訂正した。

## 1. 各横穴群の概要

叙述の便宜上、(1) 狩野川右岸地帯（三島市・函南町・大仁町に所在する11個所）(2) 狩野川左岸地帯（清水町・沼津市大平地区・函南町日守地区・伊豆長岡町に所在する30個所）(3) 駿河湾沿岸地帯（沼津市5個所）に分けて、北から南へと順次述べることにする。三島市を狩野川右岸と呼称することなど、問題もあろうが、何より分布図と対象して理解しやすいからである。（遺跡番号は北伊豆横穴地名表の番号である）

### (1) 狩野川右岸地帯

① 三島市寺門

一丁田から徳倉に至る道路の東側、箱根西麓台地の末端に位置する小丘陵の裾部に10基ばかりあったという。（文献⑦・文献⑬）

全部湮滅したが、位置は比較的明確である。

標高60$m$位、比高10$m$程の箱根火山新期軽石流の層である。県史では凝灰岩としている。似ているがそうではない。

② 同　一丁田

同じく箱根西麓台地の一つである千枚原丘陵の西南中腹、標高50$m$ばかりのところに、箱根火山新期軽石流を穿って数個の穴がある。著るしく変型しているので、横穴か否か問題があったが、よく観察すると1穴は羨門部に原形を留め、他の1穴は玄室部中央に原形が残されている。もともとあった横穴を利用して堀り拡げて、防空壕・貯蔵庫等に利用し、さらには人間が居住したことがあったと伝えられている。向って右即ち西から番号を付せば、1・2号は奥壁の一部を残して落磐し、3号は入口部に原形を残し、4号は中央部に一部原形を留め、5・6・7号は奥で連結するように変形され、8・9号も同様であって、原型を留めない。

③ 同　山の神

国道1号線箱根バイパス工事に伴う事前調査の際に、新たに発見された4基のうち3基が調査さ

れた。（文献⑲）それによると、標高150ｍの高地に、人工的と考えられる小さな谷に面して、墓前域を共有する３基の横穴があった。地層は不明だが、位置的にみて箱根火山新期軽石流とは考えられず、箱根ローム層の疑いがある。そうだとすると、この地方では横穴の新例となる。付近に平地をみることのない山奥に位置することとともに、極めて特異な横穴である。

④　同　法師隠

大場赤王地区を南流する宮川の奥の西側丘陵の標高50ｍ位の地点、南に向って開く谷の奥の斜面に８基開口している。地層は箱根火山新期軽石流である。７・８号は前部が取られているが、他は比較的保存が良い。いずれも玄室・羨道の区別のないもので、平面は長方形又はフラスコ形、奥壁はアーチ型が多い。４号の奥行4.1ｍ、奥壁巾2.8ｍ、入口巾1.11ｍ、玄室高1.8ｍ、入口高1.1ｍ、天井は前下り。これを最大とし、他は奥行3.0ｍ以下である。１・２号は他の６基とはやや離れ、独立した群を構成している。

⑤　同　赤王

大場赤王の開田院付近には、もと多数の横穴があったが、現在は消滅した。そのうちの４基がかつて調査され、記録を留めた。（文献⑮）それによると、４基を単位群とする４群があったという。調査された４基のうち、３基は玄室の平面形が矩形で羨道を持ち、柏谷に多くみられる形式であり、１基は袋状の平面を持ち玄室と羨道の区分のない形式で、この地方で最も一般的な末期横穴である。

⑥　同　如来

赤王横穴から約200ｍばかり西に寄った標高35ｍあまりの山腹に、箱根火山新期軽石流を穿って２穴開口している。奥で連結する如く加工され、長く浮浪者の住居として利用されていたらしく、横穴としての痕跡は全く留めていないが、古老の話では横穴だったという。２穴並列の状態からも、もともとは横穴であったと推定して間違いあるまい。

⑦　函南町八重窪（図版107）

大竹地区の国鉄東海道線トンネルの北側丘陵の南斜面、標高80～90ｍ位の比較的高所に位置している。堀鑿しやすい箱根火山新期軽石流の層に、組織的に築造されている。横にほぼ一線をなす如く31基が並び、少し下って２基が並存している。31基は、それぞれ横列する４基を単位群とするもの４群16基、２基１群、１基（単独）、12基１群に構成されているようであるが、12基の１群はさらに４基３群に分けられるように観察される。北伊豆横穴群の単位要素を分析研究のために、最も基準的な資料を提供しそうである。今後の精査が期待される。形式は玄室と羨道の区別がなく、平面は短形、天井アーチ型を基準にするようである。

⑧　同　上沢

県史等に名称だけ記載されているこの横穴は、大場から函南駅に至る道路の北側、丘陵地にかかろうとする現寺岡ゴムの敷地内にあった。箱根火山新期軽石流の層に築かれたことは間違いないが、消滅し詳細は不明。

⑨　同　柏谷百穴

北伊豆最大の横穴群で、古くから知られていた。狩野川の支流である来光川と柿沢川に夾まれた、比較的平坦な丘陵の南に向って開けた大きな谷の斜面に、箱根火山新期軽石流の層を穿って、膨大な数の横穴が構築されている。昭和22年に軽部慈思氏が111基を調査しているが、東北400ｍ、南北250ｍに至る地域に、かつては数100あったといわれ、人によって約300位あるいは約500位ともいわれる。少くとも300基に近い数であったろうと推定される。羨道と玄室とを区別する整った形式も多く、軽部氏は111基を５型式に分類している。そのうちの第１類型とした、玄室床面がほぼ長方形を呈し、天井はアーチ状で、羨道を有するものが最も多い。特殊な遺構として、棺座のあ

るもの２基、別室を有するもの３基が報告されている。

その後、昭和48・49年の２年間にわたり実測及び一部発掘調査が行われた。（文献⑰）その結果、占部関係の墓所、ないしは伊豆に導入された新技術者集団の墓所の可能性が提唱された。

⑩　大仁町宗光寺

宗光寺部落の背後の南斜面、標高30～40m付近の凝灰岩層に、19基が開口し、または痕跡をとどめている。かつては30基ほどあったという。昭和22年に調査した際に、未開口の１基から、火葬骨を納めた石櫃（箱形、凝灰岩製）が発見されたことがあった。（文献⑩）しかしすべての資料は三島南高校の火災時に焼失した。その後、昭和32年に４基が中川成夫氏などにより調査された。(文献⑯)それによると、平面形はフラスコ型または袋状を呈し、玄室と羨道との区分のないものである。この横穴群には、両袖を持つものや、かつて棺座を有する横穴もあった。この横穴群で何よりも注目されるのは、火葬骨を納めた石櫃の発見されたことであろう。火葬は仏教の風習である。この横穴の被葬者が仏教の影響を受けたことは否定できない。すると、この横穴から南西約400ｍばかりのところに相対する丘陵上に、宗光寺廃寺跡に存在することを、考慮しないわけにはいかない。宗光寺廃寺の創建は白鳳期の末頃とされ、（文献⑬）宗光寺横穴群のある時期と重複する。石櫃の盛行する北江間の諸横穴群とも、時間的に重複することは、頗る暗示的である。

⑪　同　守木

守木山田地区を西流する山田川の右岸、標高70ｍ位の急斜面、かなり大型の安山岩を捕獲している凝灰岩の層に５基開口している。

東から１～４号は並び、５号はやや離れている。また１・２号は接近して並列、３・４号は少し下った位置に接近して並んでいる。方向も１～４号がほぼＥ－30－Ｓ前後で、５号はほぼ真南を向く。いずれも玄室と羨道の区分なく、平面は袋状。２号のみ天井は平面型、他はアーチ型。奥行180～220㎝、入口巾70㎝前後で比較的小形である。

**(2)　狩野川左岸地帯**

⑫　清水町江畑

沼津市外原に近い中徳倉谷戸の丘陵、標高20ｍ程の所に、凝灰岩類似層を穿って２基並んで開口していたというが、宅地造成で破壊され、現在は消滅した。

⑬　同　杉沢（十二穴）

杉沢部落の西側に屹立する徳倉山（標高256ｍ）の急斜面をかなり登った標高130～140ｍ付近に、２基並んであったのを確認したが、山が荒廃しジャングル化していて、他を認めることができなかった。土地では12穴あると伝えているが、県地名表では18基記載されている。現認した２基は極めて接近し、付近に横穴をみなかったので、２基を最少単位として群が構成されているのかも知れない。少くとも２基を単位とする群が一つは存在する。

極めて高所に位置するかが特徴である。三島市神の山に次いで高い。比高では山の神をはるかに圧して、飛び抜けて高い。

⑭　同　弁天穴

県史に数値まで記載されていながら、久しく所在不明で、地名表からも抹殺されてしまったが、今回の調査で確認できた。杉沢部落の東方弁天山の標高約30ｍ位のところに、北東面を向いて開口している単独横穴である。

捕獲岩を持たない良質の凝灰岩の露出した層を穿ち、唯１基である。計側価は県史記載と一致するので、それを再掲する。「長さ３ｍ、巾羨門にて93㎝、玄室中央部及奥壁にて1.39ｍ、天井はア

ーチ形をなし、高さ羨門にて96㎝、玄室中央にて1.21m、奥壁にて1m。」

玄室と羨道との区別はないが、羨門より約60㎝程のところに、巾8.5m～9.0㎝位の切り込みがあって、木製扉を使用したのではないかと疑われる。工具痕もよく残り、ツルハシ状の先の尖った工具と、刃巾5.0㎝位の平ノミを使用している。あるいは、切り込みは後世の加工かも知れない。

⑮　沼津市大平小山

字小山の星谷氏宅の屋敷神社裏の丘陵斜面、標高約25m位のところに、露出した凝灰岩を穿って1基開口している。他に横穴は認められず、存在の可能性も少なく、単独横穴と考えられる。すぐ下方のやや平坦になったところ、石室の一部が露れている。円墳である。横穴との関係は不明である。県史によると小山に大なる横穴があったと伝うとあり、あるいは、これかも知れない。

⑯　同　松下

字松下の標高30m付近の凝灰岩層に、2基あったというが（文献⑦）現在は採石のズリ石に埋没した。土地ではバクチ穴という。

⑰　同　南蔵

字南蔵と字吉田との境界をなす尾根の東斜面、標高30m付近に2基開口している。凝灰岩は良質で保存状態もよい。ほぼ東向き。羨道と玄室の区別なく、平面は短形に近い。2基がかなり上下差があるので、他に存在する可能性がまったく無いとはいえないが、土地の人々は2基のみ明治以降より開口し、他には無いと信じている。

⑱　函南町日守政戸境

沼津市大平の政戸と函南町日守との境界をなして、狩野川に延びる低い丘陵の南側斜面、標高15～20位のところに3基並んで開口している。いずれも玄室前半部を欠く。3号は床が他より50㎝程低い。

地質は火成岩の基磐に乗る凝灰岩で、径10㎝内外の角礫を含んでいる。

⑲　同　下ノ谷戸

大嵐山の西側、標高50m付近に、頁岩質の凝灰岩を穿って、かなり大形の横穴が単独に開口している。玄室前半部を欠くが、奥壁部で巾220㎝、玄室中央部で巾180㎝、高さ奥壁部で155㎝、玄室前部で250㎝、天井は前上り。主軸はほぼ東南を向く。単独横穴の一例とみられる。この下方約20m程離れた神社裏手にも、凝灰岩にやや口の聞いた穴があるが、直ちに横穴と断定できる段階ではない。

なお大嵐山の台の山というところに、単独横穴があるというので、2回踏査したが、ついに発見できなかった。

⑳　同　中里

中里部落の東側丘陵南斜の標高40～50m位の凝灰岩露出層に、5段にわたって、14基の横穴が開口している。最上段3、第2段4、第3段4基が、それぞれ小群をなしており、東方にやや下って2基並んでいるが、破壊が甚だしい。さらに下ってかなり離れて1基が単独に存在する。地主の話によれば、ジャングル化した東方の斜面にも存在するというが、到底立入ることはできなかった。第1、第2の群はほぼ南向き、第3群は西向きであるが、この相違は、いつに岩層の在り方による。

㉑　同　岩崎

岩崎と中里部落との境界をなして、狩野川に向って延びる小丘陵の稜線部にあり、稜線の東側（岩崎）に6基、西側（根岸）に4基開口している。戦時中、防空壕として利用されたり、石切場になったりしたので、破壊や変形が著るしい。中里側第4号は大型、保存も比較的良好で、奥に棺座らしい造り付けが見られる。奥行き555㎝、高さ最高部210㎝。この群の中では主墳に相当しよ

う。奥壁上部に文字が刻まれ天明の年号がある。古老の話では天明の地震で崩壊したと伝える。一つの尾根の両側に築造された横穴群は珍しく、現在のところここが唯一の例である。この横穴群は中野国雄氏によって発見された。

㉒　伊豆長岡町女坂

大北から函南町日守へ抜ける山道を登った中腹、標高50mあたりに2基並列しているというが、今回は山が荒廃して、位置が確認できなかった。すでに長岡町の文化財委員会で踏査している。

㉓　同　大嵐

大嵐山の南側斜面、大北横穴群から東北方へ直線距離約250m、標高50m位のところに、凝灰岩を穿って4基が並んで開口している。1号は片袖、2号は入口に扉の痕跡があり、3号は極めて小形、4号が最も大きい。(奥行3.1m) 平面形はフラスコ型もしくは矩形。

㉔　同　大北東

大北横穴群と大嵐横穴群との中間の斜面にある。標高50～65mの間に、凝灰岩を穿って15基が確認された。昭和55年に略測をした。2基（8号•10号）に石櫃が認められ、最下段の4基は極めて小規模で、ミニ横穴に移行する過程を示す横穴かも知れない。15基の分布はかなり不規則であることは、大北と同様に割れ目の多い凝灰岩であるためであろう。

㉕　同　大北

47基群在。うち41基発掘調査。石櫃23個発見、そのうちに「若舎人」の刻銘のある石櫃あり。ミニ横穴などの新発見が多い。昭和52～55年調査。(斉藤忠他)（文献㉒㉓㉔及び本報告書）

㉖　同　大北西

大北横穴群の反対側斜面。標高50m位の凝灰岩の露出岩層に2基開口。うち1基に石櫃がみられる。主軸は西向き。

㉗　同　横根沢B

大師山横穴の北方直線距離的250m、標高60m程の地点に2基並列して開口。奥行220～260㎝、入口巾80～90㎝位の比較的小型。やや北向き。玄室と羨道の区別はない。安山岩の角礫をわずかに捕獲した凝灰石。

㉘　同　横根沢A

横根沢Bと、小さな谷を隔てた下方に当り、標高約40m位の地点に3基開口している。

1・2号は近接し、3号は250㎝ばかり西に離れている。いずれも玄室と羨道との区別はなく、平面形は胴張りの長方形、方向は東南。

岩質は前者と同じ。

㉙　同　大師山

千代田区大師山の南斜面、標高25～30mのところに10基で1群と構成している。1・2号は古くから珍場の横穴として知られ、北伊豆横穴研究の端緒を開いたものである。1号は大師窟と称せられ、挎抜式家型石棺を有し、2号は鍛冶窟といい、造付石棺を持ち、雄大である。昭和49年、静岡県教委・長岡町教委の共同で発掘調査し、新たに3号～10号が知られた。そのうち8号は造付石棺を2個有する大型の横穴である。この地方の横穴研究にとっては、記念碑的報告書となった。(文献⑳）10基を構成する単位群として、1～6号をA、7～10号をBの2群に分ける考え方と、1・2号を別として、3群とする見方もある。北伊豆の横穴群を単位小群に分析する考え方は、この報告書で始めて導入された。

㉚　同　割山

大師山の尾根を越えた西北方、標高約50m付近に14基の横穴がある。(図版102)昭和54年調査（斉

藤忠他)、6号横穴を発掘し、3個の石櫃を得た。形式はいずれも玄室と羨道の区分の明確でなく、平面は長方形またはフラスコ型を示す。9・10号、13・14号は2基を単位としているようであるが、凝灰岩の性質に支配され、複雑な組合わせになるかも知れない。主軸の方向は南もしくは南西である。

㉛ 同　東洞

割山から西北へ約80mばかり寄った標高50m位のところに、2基並んで開口している。

他に横穴は認められず、2基だけと思われる。

㉜ 同　子之神社

墹之上にある子之神社（大国主神社）の本殿横、標高50m位のところに、凝灰岩の斜面を穿って、南西を向き5基が開口している。

大半が玄室と羨道の区別のないフラスコ型か、長方形である。

㉝ 同　墹之上B

子之神社の西方、谷一つ距てた標高40m位の東向き斜面に、比較的良質な均質的凝灰岩を穿って、6基の横穴が、南下がりに一列に並んで開口している。いずれも奥行き230～300㎝程度。玄室と羨道の区別なく、平面は胴張り長方形。この丘陵の南先端に円墳が1基ある。

㉞ 同　墹之上A

狩野川放水路直上、標高40m位のところに4基あったというが、放水路工事で、未調査のまま消滅した。

㉟ 同　谷戸洞

現三養荘敷地内、源氏山丘陵の東北端、標高28～29m位のところに、2基が上下に並んで残存している。かつては数基あったが、削りとられた。現存する横穴も著るしく変形し前方が削られている。県地名表では3基とあるが、もとはもっとあったという。いわゆる伊豆石という良質な凝灰岩層である。

㊱ 同　鏡池

谷戸洞の反対側の斜面、標高50m付近に、僅かに露出した凝灰岩を穿って、唯1基だけ開口している。付近を観察しても、他に存在する可能性は極めて乏しく、単独横穴と考えて差支えないであろう。東南を向く。玄室と羨道の区別はない。

㊲ 同　細洞

源氏山の西斜面、標高50m付近の露出凝灰岩層に2基開口していたものが、かつて観光道路の工事で1基が消滅、残存した1基も現在位置不明。崖崩れで埋没したと思われる。

㊳ 同　多聞山

源氏山東側斜面、標高50～60m付近に、10数基あるというも、山が荒廃していて、現状を確認できない。県史の万法院山横穴がこれに当る。それによると、いずれもアーチ形という。また玄室の中に、凝灰岩製の蓋付箱形石櫃を有する横穴があった。納められた人骨は火葬されたものではないと記されているが、おそらく火葬骨の誤認であろう。石櫃の文献としては、これが最初である。

㊴ 同　岩鼻

源氏山丘陵の南端、最明寺の裏山に当る。

標高50～60m付近に数基存在したという。県地名表には7基が記載されているが、現在は僅かに2基が残存しているにすぎない。1基は比較的保存状態も良いが、他は前半部が崩壊している。奥行300m、平面長方形、天井ドーム型、玄室と羨道の区別なし。

㊵ 同　花坂口

長岡から沼津に通ずる県道から、花坂部落に至る道路を少し東に入った、標高40m位の地点に道路沿いに1基開口している。入口部が削られ、空カン等の捨場になっているので、内部構造は不明。当初から単独であったのか、他が失われたのか、にわかに断定できない。他に存在したとしても、おかしくない地形でもあるが、単独の可能性もある。

㊶ 同　竹の花

花坂口横穴より約250mばかり南、同じく県道より東へ入った道路に面して、標高35m位の露出した凝灰岩を穿って、1基だけ開口している。地形的にみて、他に近接して存在するとは思えないので、単独横穴の一例として差支えないであろう。

**(3) 駿河湾沿岸地帯**

㊷ 沼津市霊山寺

香貫山の西麓、霊山寺の墓地が凝灰岩の山裾に接するところ、標高10m位に4基認められるが、いずれも入口をコンクリートで塞いである。詳細は不明。

㊸ 同　江ノ浦

鷲津山の南麓、江ノ浦湾に向って大きく展開する浸蝕谷に、また小さな谷間が形成されている。その幾つかに江ノ浦横穴は造られている。昭和50年、沼津市教育委員会の測量調査の結果92基の横穴を確認した。(文献⑱) 伊豆半島基部では、柏谷百穴につぐ規模を持つ横穴でである。A地区は74基、B地区2基、C地区14基、最も下方の標高20m付近のD地区2基と分布している。A地区が最も密度が高い。これらの横穴は、いずれも玄室と羨道の区分が明瞭でないことを共通とし、平面形は大型の袋状を呈するものと、小型の長方形を至するものとに大別されるという。天井は台形平面とアーチ状のものとがあるようだ。横穴の分布は、かなり不規則で統一性に欠け、柏谷百穴や八重窪などとは異なり、むしろ大北に近いことを思わせる。おそらく地質的に大北に近く、かなり地質的条件に支配されたのではないかと想定されるが、実地踏査の際に、草木の繁茂が甚だしく、詳細に観察できなかった。この横穴群は直ちに海に面し、その間には猫額大の平地をみるに過ぎない。被葬者たちの集落をどこに求め、生業をいかに考えるか、今後に残された課題であろう。また、横穴群の上方に在る4基の古墳との関連も興味ある問題である。

㊹ 同　多比

江ノ浦の東隣りの多比部落の北に展開する谷頭にも、標高25～40m位のところに、相当数の横穴が開口している。県地名表によれば、24基とある。貯蔵庫として利用するために、著るしく変形され、すでに原形を留めないものも多い。ここは良質の凝灰岩であるためか、かなり組織的に堀鑿され、4基を単位群として構成される傾向を示している。羨道と玄室との区別は、ここでも明瞭ではなく、平面は矩形を基本としているようだ。

㊺ 同　海豚洞

重寺の海岸に向って突出する丘陵の南側斜面、標高25m位の凝灰岩層を堀鑿して、5基の横穴が開口している。東から番号を付けると、1～4号はほぼ同一平面に近接して並び、西端の5号はやや離れて独立している。いずれも玄室と羨道との区別の明瞭でない形式である。海岸に面して、横穴からは展望絶佳であるが、集落と生業とをいかに考えるか、大きな問題であろう。

㊻ 同　三津

三津の水族館付近の県道に治った凝灰岩層に、数基の横穴が開口していた。県地名表では5基。県道の拡張工事で消滅した。

### (4) 他の伊豆半島の横穴

㊼ 伊東市宇佐美離山

県史で東山横穴とし、伊東市史では宇佐美隧道東側横穴群と称したものである。県地名表では離山とあるので、それに従った。県史では7基、市史ではうち6基を確認している。市史の実測図によると、いずれも僅かながら羨道を持ち、玄室平面は円形に近い形を呈しており、伊豆半島では他に類のない珍しい形態である。

㊽ 河津町谷津

賀茂郡の東海岸、河津川口に海岸に面した山の中腹に数基あったが、道路工事のため破壊されたと県史にある。数年前には、いまだに1基だけ一部が残っていた。

下田市に所在する洞穴墓は、自然洞窟を利用したもので、いわゆる横穴とは異なる。

## 2. 分布の特色

### (1) 地質的分布

以上述べた横穴の占地には、二つの地質的特色がある。第1は、三島市及び函南町箱根台地に位置する横穴群である。この計9個所の横穴群は、三島市山の神を除いて、すべて「箱根火山新期軽石流」地帯にあり、その推積層を堀鑿して、横穴を築造していることである。この層は比較的軟かく加工しやすい。そのかわり風化しやすいが、整然と並列して構築することができる。函南村柏谷百穴横穴群はその代表である。この地層であるから、数百基が、整然と規則的に堀鑿されたのであろう。同じく函南村大竹に在る八重窪横穴群も、規模は小さいが、同様に整然と構築されている。この地方最大の柏谷百穴群が、この地質地帯に営まれたことは、決して偶然ではなく、この地質的条件と深いかかわりあいがあるに違いない。

第2は北伊豆横穴の特色として古くからいわれているように、いわゆる凝灰岩層を堀鑿して構築する場合である。遺跡の数からすれば、この方が圧倒的に多い。現在37個所発見されている。しかし、同じ凝灰岩であっても、ところによって相当に様相が異っている。狩野川と駿河湾とに夾まれた鷲津山を主峯とする山魂は、代表的凝灰岩地帯で、かつては江ノ浦凝灰岩と一括して呼ばれていたが、場所によってかなりの変化があるようである。(第Ⅱ章第1節 参照) しかし安山岩を基磐とした凝灰岩地帯であることはかわりない。この地帯の横穴は、安山岩の露出しているところを避けて、必ず凝灰岩の露頭を選定して築かれている。安山岩の露出している層に、横穴群をみないのである。同じ凝灰岩であっても、大きな安山岩を多量に捕獲している地層は、できるだけ避けるように配慮している。要するに工作しやすい凝灰岩の露出層を選んで横穴を築造しているのである。だが同じ凝灰岩で工作しやすい条件を満たしていても、割れ目の多い地層では、横穴は自然の割れ目に支配されて、整然と横穴を配列することができず、配置は相当に不規則になり、画一性を欠くことになる。大北横穴群の場合が、その典型である。(第Ⅱ章第2節参照) 江ノ浦横穴群の不規則な配置も、地質構造と関連があるのではなかろうか。適当な凝灰岩の露出層を探して横穴を堀鑿しなければならない地帯では、柏谷百穴のような一個所に大規模に集中する横穴群を構築することは不可能である。横穴群の大小には、社会的要因だけでなく、地質上の理由に基づく自然的要因も、少なからず作用していたのではなかろうか。

北伊豆の横穴は、①箱根火山新期軽石流の構成する地層と、②凝灰岩層とに限定されて構築されるという、極めて大きな特色を持っている。

### (2) 地域的分布

分布図を一見して気付くように、最も濃密に分布しているのは、鷲津山魂の裾部である。とくにその東南麓に当る伊豆長岡町北江間地区に集中的に分布している。それらには2基あるいは4基というよう

な小群もあるが、群在することは注目に価いしよう。その分布図の一角に、最も雄大にして古いと思われる大師山横穴群の1号（大師窟）、2号（鍛冶窟）が位置していることは、興味深い事実である。

伊豆長岡町では、いま一つ、源氏山を中心とする分布圏がある。墹之上から源氏山南端には、小さな横穴群が集中している。半島基部にみられる46個所の横穴のうち20個所が、この伊豆長岡町北江間地区と、源氏山地区に集中し、この両地区に、石櫃に象徴される火葬の風習が、特別に発達したことは注目に価いしよう。

しかしこれらの横穴群も、北伊豆全体からみれば、柏谷百穴や宗光寺など、田方平野の周辺に分布する大きな一群に包括されるであろうし、三島市北部は小さいながらも一つのグループをなし、駿河湾沿岸は特殊な立地からこれを一つのグループとみることができる。

以上の他、伊豆半島の横穴は、東海岸に僅かに2個所を数えるのみである。その一つは、伊東市宇佐美留田の離山横穴群（県史では7基、市史では6基確認実測）であり、いま一個所は南伊豆の河津町谷津である。海岸に面した断涯に、道路工事の際に数基発見された。（文献⑦）半島の中・南部にも凝灰岩層は諸方に露出しているが、現在のところ確実な横穴は発見されていない。中伊豆町八幡付近にそれらしいものがあるというが、現在では確実に横穴とは断定できないようだ。同じ地質条件を持ちながら、半島基部のみに集中している事実は、古墳の分布とも類似している。

だが古墳の豊富な愛鷹山麓台地には、横穴をまったくみることができない。軽石流や凝灰岩がないからという理由だけであろうか。箱根山麓台地でも、ローム層地帯にほとんど横穴をみないことと、軌を一にしている。

### (3) 垂直分布

標高の示すところによれば（2万5千分の1または3千分の1の地図上の推定であるから、必ずしも正確ではない）沼津市霊山寺の10m、函南町日守の政戸境の13～15mを最低と、三島市山の神を特異な例として除外すれば、清水町杉沢の130～140mを最高地とする。狩野川に沿った沖積平野の標高が10～12mであるから、前2者の比高は殆んど0に近い。しかしこれは例外的で、横穴は通常30～50mのやや高めで眺望の良い場所に位置し、概ね南向きで、だが適当な露岩のない場合には、高さもまちまちになり、方向も原則として南向きをとりながらも、東西に大きく振れるし、時には北に近い方向をとる場合もある。専ら凝灰石の適否に左右されているように観察される。比高は概ね20m前後が普通である。標高70mの大仁町守木でも、80～90mの函南町八重窪にしても、比高はせいぜい30m前後である。

だが清水町杉沢（十二穴）の場合は、急峻な徳倉山（標高256m）の南斜面130～140mのところにあり、はるかに見上げる高所で、奇異の念を覚える。横穴を穿つための適当な凝灰岩の露頭をここにしか求められなかったのか、それ以外に何等かの理由があったのか、いまのところ確実なことは分らない。

三島市塚原の山の神も標高150mの高所で、しかも平野から遠く入りこんだところで、比高を算定すべき平地もない。しかもローム層に堀鑿したらしく、北伊豆としては極めて特異な例外的横穴である。少くとも水田農業を主たる生業とする人々のものではあるまい。

## 3. 横穴群の構成単位

柏谷百穴のように数百基、大北のように数十基で構成される横穴群には、それを構成する要素として、さらに小さなグループ（単位群）がある。すでに消滅した三島市赤王では、4基を1グループとした4群で構成されていた。（文献⑮）大師山では10基の群を、6基と4基の単位群、または2・4・4の単位群と考え、その場合に、最も大規模な1・2号を夫婦の墓と考えている。（文献⑳）大北横穴群でも幾つかのグループ分けができることは、本報告書で述べている通りである。（V考察1参照）

今回、北伊豆の横穴をつぶさに実地踏査したところ、単独あるいは2基としか考えられない横穴が、案外に存在したことに気付いた。この事実は、いままでほとんど見逃していたことではなかったかと思う。この事実を踏まえて、横穴群を観察すると、新しい知見を得たので、以下それを述べる。

### (1) 単独横穴

1基のみが単独に存在することは、従来の横穴の概念からは考えられなかった。1基あれば、当然他にも存在するものとして周囲を探査するか、新たに発見できなければ、何等かの理由で他が消滅したと考えるのが、常識であった。当然そうした考えにもとづいて、随分注意して周囲を観察し、古老の話を聞いてもみたが、露岩の状況などからも、たしかに単独の横穴としか考えられないものがある。

沼津市大平の弁天穴は、県史には単独のように記載されているが、久しく所在が不明で、地名表からも、削除されていた。今回新たに再発見したが、たしかに単独横穴であった。他に清水町小山、函南町日守下ノ谷戸、伊豆長岡町鏡池、同じく竹の花などは、単独横穴と認めてよいし、花坂口もその可能性が絶無とはいえない。かりに単独横穴の存在が相当数認められるならば、横穴被葬者の身分を老える上に、大きな示唆を与えるものであろう。少くとも一般庶民にまで普及した墓とは考えられまい。

### (2) 2基横穴

何等かの工作によって一部が失われて、2基だけが残存したと思われる場合を除き、当初より2基だけが独立して築造されたと考えられる場合として、伊豆長岡町女坂、大北西、東洞があり、横根沢Bは極めて顕著な例である。沼津市大平の南蔵もその可能性がないとはいえない。現在は埋没等で不明であるが、県史、地名表や実際に当時調査した人達の話などを総合して、2基横穴として推定されるのは、沼津市大平の松下、伊豆長岡町の細洞などを数えることができる。同一横穴群の中にありながら、明らかに他の群と離れて2基が並列している場合は、三島市赤王の法師隠れ、清水町の杉沢、伊豆長岡町の割山、大北東などを顕著な例としてかなり多数みられる。大師山の1・2号の例に関する斉藤忠博士の解釈に従えば、あるいは夫婦の墓と解される。

### (3) 3基横穴

この顕著な例は多くない。函南町日守の政戸境が3基であるが、破壊されたものがあるかも知れないので、いま少し検討してみる必要がある。だが伊豆長岡町の横根沢Aの場合は、明かに3基である。すでに概要のところで説明したように、1・2号はきわめて接近し、3号はかなり離れている。2基＋1基という形である。単独横穴と2基横穴が結合して、一群を構成したと解せられなくもない。

### (4) 4基横穴

4基を1単位群として、横穴群を構成している顕著なものは、函南町の八重窪である。函南町日守の中里でも明かに認められるし、すでに消滅した三島市赤王では、4基を1群とする4グループがあったことは前述した通りである。沼津市の多比でも、その傾向が認められる。北伊豆では横穴群を構成する単位群として4基が最も一般的なのかも知れない。

4基のみが単独で存在するのは、伊豆長岡町北江間の大北東Bだけである。しかし、これが最も基本的形態かも知れないのである。4基は2基＋2基と考えられないであろうか。

### (5) 5基横穴

5基単独で横穴群を構成しているのは、沼津市重寺の海豚洞、大仁町の守木である。海豚洞では4基

が近接し、1基が少し離れているために、見落されたらしく、地名表には4基となっている。守木でも4基が近接し、1基がやや離れ主軸の方向も少し異る。

これらの事実から5基横穴は4基＋1基の形態を示し、さらには2基＋2基＋1基と分析できるであろう。

以上が伊豆半島基部の横穴の構成を分析する基本的単位になると考えられるのである。かかる見地から、横穴群をいま一度見直し、検討する必要があるのではないだろうか。横穴のさまざまな問題を解く鍵は、大横穴群より、むしろ小群横穴にあるのかも知れない。

## おわりに

（年代の問題）

北伊豆には多数の横穴があるにもかかわらず、調査が遅れ、発生や終末を想定するには材料が不足であった。大師山と大北の調査によってかなり資料が集りその年代がわかり、発生と終末についても明かになりつつある。大北横穴群の場合7世紀中葉から後葉に、8世紀前半に最も盛行し、後半になっても、新たに幾つかが造られたことが考えられる。これは伊豆地方の横穴の一般的傾向であろう。江ノ浦横穴群の何れかの横穴から採集されたという須恵器の中に、いわゆる第Ⅲ期末と思われるものがあるから、いまのところ、これがもっとも古いことになる。伴出須恵器は必ずしも実年代を示すものではない。少くともそれ以前に出現したものと考えなくてはならない。いずれにしても7世紀を遡ることはないであろう。遠州地方では6世紀にすでに盛行することに比べると、著るしく遅れるが、それは古墳の出現の遅れとも類似する。

北伊豆の横穴の型式は、柏谷百穴の一部などを除けば、大半は玄室と羨道の区分を明瞭にしない末期横穴である。赤星直忠博士の分類に従えば概ね$I_3$・$I_4$もしくは$J_3$・$J_4$のうちに包括されるといってよい。8世紀後半にかけてということになる。大仁町宗光寺横穴を調査した中川成夫氏らは（文献⑯）宗光寺横穴を、赤星氏分類のI様式3・4・5ないしJ様式3・4・5に相当させ、出土須恵器により、8世紀前半として、赤星氏の年代観がやや新しすぎるとしている。だが大北横穴群の調査によれば、8世紀後半には、前代に造られた横穴を利用したり、新たに築造も行われている。横穴のもっとも新しい形式を8世紀後半に適用した赤星氏の見解は、北伊豆においては支持できるであろう。もっとも赤星氏の年代観は、横穴より発見される火葬骨が、奈良時代後半に相模地方に普及した風習と考えるところによる。だが、北伊豆、とくに大北を中心とする北江間横穴における石櫃の盛行からすると、8世紀前半にはすでに火葬の風習が入っていたのではないかと考えられるので、その点からのみ時代をさげるのは賛成しかねるのである。

この地方の横穴は7世紀中葉もしくは前葉を始源とし、8世紀前半に盛行し、引続いて後半にも使用され、新たに掘鑿も行われたが、築造はそれで終ったと思われる。しかし、追葬や墓前の祭りは9世紀に入っても、一部で依然として行われたものと考えられる。

（集落・身分・生業等の問題）

たとえば柏谷百穴のように、膨大な数の横穴群を残した人々の集落や生活はどうであったか。おそらく、脚大な人口を有する連合集落があったに違いない。それはどこにあったか。いかなる生業、職業、身分の人達であったか。山内昭二氏は、亀卜が行われた痕跡が認められたことにより、占部氏の墓地、あるいは中央から新たに流入した新技術者の墓である可能性を提唱しているが、それだけではこの膨大な横穴を満たすことはできない。大北のように約50基の横穴を持つ集団、あるいは10数基、さらにはそれ以下の横穴群を構成する集団は、どのように関連するのか。この規模の差は生活集団の大小によるも

のか、職業、氏族などの差によるものか、さまざまな問題が提示されている。8世紀には、すでに民衆は律令体制に組み入れられていた。人為的行政区分として、戸（1戸）一保（5戸）一里（50戸）一郷（500戸）という単位集団の積みあげ方式が適用されていた。戸にあっても、家長を戸主として、その統率する家口を戸口として戸を編成したと推定され、戸口数100人を越す戸もあったといわれるが（吉田考「岩波講座『日本歴史』3」）東国のような後進地域内一般民衆に、同じような戸主が存在したか疑わしい。しかし、実際の集落が自然発生的形態をとりながらも、律令制の方向をとらざるを得なかったであろう。とすれば、この行攻区分は、何等かの形で横穴にも反映してくるのではないか。横穴群の大小と深いかかわりあいがあるように思える。

そうした状況で、どのような身分の者を横穴に葬ったのであろうか。この点、本文に記されているように、大北横穴群から「若舎人」の刻銘のある石櫃が発見されたことは、極めて暗示的である。舎人という身分あるいは職分を与えられる者の、地方における身分が判明するならば、横穴の被葬者の身分もある程度明かになるであろう。いままでみてきたように、単独横穴の存在、2基横穴の独立して存在する事実は、横穴被葬者は、地方において相当な身分を有する人達であったことを示すものに外ならない。

横穴を造営した人々の居住したと思われる集落なり住居跡は、北伊豆ではまったく知られていない。大北横穴群の東南約1500$m$程のところに、4～8世紀に亘る広大な遺跡がある。狩野川の自然堤防上に営まれた集落跡であり、大北横穴と重なる時期がある。それは同時に、大北横穴群の目前にある横穴式石室を有する箱根山古墳群とも重なり合っている。この三者の関係が、今後追求されなければなるまい。

また横穴被葬者の生業を考える上で、江ノ浦横穴群の存在を無視することはできない。直接海岸に面し、猫額大の平地しか持たないのであるから、原則として横穴の付近に居住したとすれば、水田農業を主たる生業とする集団とは考え難いのである。この横穴群の直ぐ上に4基の古墳が存在することも、両者の関連を考察する資料を提供するかも知れない。

（横穴と火葬の問題）

北伊豆の横穴を著るしく特徴づけるのは、大北を中心として、主として北江間地区の横穴から発見される石櫃である。これが火葬骨収納容器であることは、すでに明かであるから、この地方に早くから火葬の風習が、横穴被葬者に流行した。この視点から石櫃や類似施設を持たない横穴について、今後火葬骨の有無を検出することが重要な横穴の研究になるであろう。横穴と火葬との関係を追求するには、北伊豆は欠くことのできない地となった。

この地方にこの風習が流入し盛行したのは、意外に早かった。この事実は、宗光寺横穴群の西南の向いに、白鳳末期創建といわれる宗光寺廃寺の存在と無縁とは思えない。横穴と寺院跡との関係という新たな問題が提出された。

（分布図・地名表の作製は小野と長田とが共同で行い、本文の執筆は長田が担当した。）

## 第37表　北伊豆横穴地名表

〔狩野川右岸〕

| | 名称 | 所在地 | | 標高 | 地質 | 現況 | 県遺跡地図 | 文献 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 寺門 | 三島市 | 寺門 | 60m？ | 箱根火山新期軽石流 | 消滅 | 11－55 | ⑦⑬ | 10基位あったという。県史では凝灰岩 |
| 2 | 一丁田 | 〃 | 一丁田 | 50m | 〃 | 千枚原丘陵西南中腹、すべて変形、他に転用 | なし | | 1～2基に部分的に原型が残り、横穴と推定される |
| 3 | 山の神 | 〃 | 塚原新田寺屋敷 | 150 m | ？ | 消滅 | 11－141 | ⑲ | 調査済（3基） |
| 4 | 法師隠 | 〃 | 赤王法師隠 | 50m | 箱根火山新期軽石流 | 8基、いずれも前方部崩壊 | なし | | |
| 5 | 赤王 | 〃 | 赤王 | 30m？ | 〃 | 消滅 | 11－138 | ⑦⑬⑮ | 調査済（4基）4基のもの4群ありと |
| 6 | 如来 | 〃 | 赤王如来 | 35m | 〃 | 2基並列するも著るしく変形後世利用 | なし | | 古老の話より横穴利用と思われる |
| 7 | 八重窪 | 函南町 | 大竹八重窪 | 80～90m | 〃 | 33基確認、4基を単位群として構成する如し | 11－14 | ⑦ | |
| 8 | 上沢 | 〃 | 上沢 | ？ | 〃 | 消滅 | なし | ⑦ | 現地ききとり、現寺岡ゴム工場敷地 |
| 9 | 柏谷 | 〃 | 柏谷 | 20～30m | 〃 | A～E地区に亘り広範に分布108基現存 | 12－53 | ⑦⑧⑬⑰ | 3回に亘り調査、国指定史跡・地名表106穴 |
| 10 | 宗光寺 | 大仁町 | 宗光寺659 | 30～40m | 凝灰岩 | 19基確認 | 12－18 | ⑩⑯ | 石櫃があった |
| 11 | 守木 | 〃 | 守木（山田）北山655 | 70m | 〃 | 5基確認 | 12－17 | | |

〔狩野川左岸〕

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12 | 江畑 | 清水町 | 徳倉谷戸 | 20m位 | 凝灰岩 | 消滅 | 11－16 | ⑦ | 2基並列していたという |
| 13 | 杉沢（十二穴） | 〃 | 下徳倉杉沢 | 130～140 m | 〃 | 極めて高地にあり、2基を確認、他は不明 | 12－13 | ⑦ | 県地名表では18基 |
| 14 | 弁天穴 | 〃 | 〃 | 35m位 | 〃 | 単独、他に存在したとは思われない | なし | ⑦ | 県史のみにあり |
| 15 | 小山 | 沼津市 | 大平小山（星谷氏宅内） | 30m | 〃 | 単独、前方に円墳の石室天井石一部露出 | なし | | |
| 16 | 松下 | 〃 | 大平松下 | 30m位か | 〃 | 2基ありというも現在埋没不明 | 12－241 | ⑦⑭ | |
| 17 | 南蔵 | 〃 | 大平南蔵 | 30m | 〃 | 2基 | 12－241 | ⑦⑭ | |
| 18 | 政戸境 | 函南町 | 日守政戸境 | 15～20m | 〃 | 3基並んで開口 | なし | | |
| 19 | 下ノ谷戸 | 〃 | 日守清水 | 50m | 〃 | 1基単独、かなり離れた下方にやや口の開いた岩穴あるも横穴か不明 | 12－44 | | 遺跡地図の範囲は誤り |
| 20 | 中里 | 〃 | 日守中里 | 40～50m | 〃 | 14基確認、うち1基はかなり下部に単独開口 | なし | | 他にも数基存在する模様 |
| 21 | 岩崎 | 〃 | 日守岩崎・根岸 | 25～30m | 〃 | 東側（岩崎）に6基<br>西側（根岸）に4基 | 12－45 | | 県地名表では「中里」 |
| 22 | 女坂 | 伊豆長岡町 | 北江間女坂 1524 1573 | 50m | 〃 | 2基、現在山が荒廃して不明 | なし | | |
| 23 | 大嵐 | 〃 | 北江間大嵐 1587 | 50m | 〃 | 4基開口 | なし | | 県地名表は「宝積寺」 |
| 24 | 大北東 | 〃 | 北江間大嵐 1611 1612 | 50～65m | 〃 | 15基（うち小型4基）石櫃2基 | なし | | |
| 25 | 大北 | 〃 | 北江間男坂 1617 1618 | 17～43m | 〃 | 47基、石櫃23、詳細本報告書 | 12－14 | ㉒㉓㉔ | 昭和52～55年に亘り、発掘調査 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 26 | 大北西 | 伊豆長岡町 | 北江間若宮 1648 | 50m | 凝灰岩 | 2基並んで開口 | なし | | |
| 27 | 横根沢B | 〃 | 北江間横根沢 1707 | 60m | 〃 | 2基並んで開口 | 12－3 | | 県地名表は「大師山裏」 |
| 28 | 横根沢A | 〃 | 〃 1706 | 40m | 〃 | 3基、1～2号は接近し、3号はやや離れてある | なし | | |
| 29 | 大師山 | 〃 | 北江間大師山 1709－1 | 25～30m | 〃 | 10基 | 12－1 | ①③④⑥⑳ | 昭和49年度正式調査、国指定史跡 |
| 30 | 割山 | 〃 | 北江間大師山 1717－1・1718 | 50m | 〃 | 14基、6号には3個の石櫃 | 12－2 | | 昭和54年度測量、県地名表は「東洞」 |
| 31 | 東洞 | 〃 | 北江間東洞 1724 | 50m | 〃 | 2基 | 12－2 | | 昭和53年発見 |
| 32 | 子之神社 | 〃 | 堀之上子之神社横 | 40m | 〃 | 南斜面に5基並列に開口 | なし | | |
| 33 | 堀之上B | 〃 | 堀之上 167－1 | 40m前後 | 〃 | 6基やや傾斜もって並列開口 | なし | | |
| 34 | 堀之上A | 〃 | 堀之上放水路上 | 40m位？ | 〃 | 消滅 | 12－16 | | 放水路工事で湮滅。県地名表では4基 |
| 35 | 谷戸洞 | 〃 | 堀之上谷戸洞 2701（三養荘内） | 27～28m | 〃 | 2基残存、1基は著るしく破損 | 12－18 | | |
| 36 | 鏡池 | 〃 | 堀之上鏡池 642 | 50m | 〃 | 1基単独 | なし | | |
| 37 | 細洞 | 〃 | 長岡細洞 | 50m位か | 〃 | 2基のうち1基残存したが、現在不明、埋没か | 12－34 | | |
| 38 | 多聞山 | 〃 | 長岡多聞山 1331 | 50～60m位か | 〃 | 現在位置不明 | 12－35 | ⑦ | 県史では「万法院横穴」とあり10数基、うち1基には石櫃ありと |
| 39 | 岩鼻 | 〃 | 長岡町岩鼻 1332 | 50～60m | 〃 | 現在2基残存 | 12－37 | | 数基ありと、県地名表では7基 |
| 40 | 花坂口 | 〃 | 長岡堤入 1415 | 40m | 〃 | 1基のみ道路端に開口 | なし | | |
| 41 | 竹の花 | 〃 | 長岡竹の花 1416 | 35m | 〃 | 1基のみ道路端に開口 | なし | | |
| 〔駿河湾沿岸〕 | | | | | | | | | |
| 42 | 霊山寺 | 沼津市 | 上香貫東本郷 | 10m | 凝灰岩 | 4基確認、いずれもコンクリートで入口を塞ぐ | 11－207 | ④⑭ | |
| 43 | 江ノ浦 | 〃 | 江ノ浦大洞・東山 | 20～60m | 〃 | A地区74基・B地区2基・C地区14基・D地区2基。草木繁茂確認できず | 12－251 | ⑭⑱ | 昭和50年沼津市教委測量調査。A地区県指定史跡 |
| 44 | 多比 | 〃 | 多比田坂 | 25～40m | 〃 | 破壊変形著るしく、東入口の数基原形を留める | 12－252 | ⑭ | 県地名表では24基 |
| 45 | 海豚洞 | 〃 | 重寺海豚洞 | 25m | 〃 | 海岸に面して5基開口 | 12－257 | ⑭ | 県地名表では「重寺」4基 |
| 46 | 三津 | 〃 | 三津久伏 | 20m位 | 〃 | 消滅 | 12－270 | ④⑭ | 県地名表では5基 |

**註** 1　遺跡番号は夫々の地域で北から南へ順次付し、分布図番号と一致させた。

2　三島市は便宜上狩野川右岸に包括した。

3　文献欄の番号は北伊豆横穴関係文献の番号を示す。

すでに湮滅したといわれている横穴もすべて実際に確かめた。

1遺跡について最小2人（小野・長田）は同時に立会った。場所によっては、県教委文化課の植松章八、佐藤達雄の両氏及び渡辺康弘、久松義明の両君が参加した。

4　北伊豆横穴関係の文献は下記の通りである。番号は本文と対照させた。

# 北伊豆横穴関係文献


① 大野延太郎　「伊豆横穴を観る」東京人類学雑誌200号　明治37年

② 勝間田恭平　『伊豆鏡』　大正4年

③ 高橋健自　『古墳と上代文化』　大正12年

④ 足立鍬太郎　「狩野川中流左岸地方の古墳」『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1　昭和1年

⑤ 清水吉彦　「田方郡中郷村函南村に亘る横穴古墳群について」『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』第4　昭和2年

⑥ 高橋健自　「伊豆国田方郡北江間字珍場の横穴」考古学雑誌第5巻2号　昭和4年

⑦ 静岡県　『静岡県史』(1)　昭和5年

⑧ 軽部慈恩　「伊豆柏谷古墳群の発掘について」日本考古学論誌第2号　昭和23年

⑨ 三島二高郷土研究部　「狩野川流域における横穴古墳群の研究」古代1－2　昭和23年

⑩ 長田実　「伊豆半島の古代文化」国立公園候補地伊豆半島学術調査報告書『伊豆半島』静岡県　昭和26年

⑪ 内藤晃・長田実　「古墳時代の静岡県」『静岡県社会文化史』(上)　昭和29年

⑫ 小野真一　『静岡県東部古代文化総覧』　昭和32年

⑬ 三島市　『三島市誌』(上)　昭和33年

⑭ 沼津市　『沼津市誌』(下)　昭和33年

⑮ 山内昭二　「三島市大場赤王横穴墳調査報告」日本大学文理学部(三島)研究年報第13輯　昭和40年

⑯ 中川成夫・岡本勇　「伊豆宗光寺横穴群の調査」史苑第26巻2・3号　昭和41年

⑰ 山内昭二他　『伊豆柏谷百穴』静岡県教委・函南町教委　昭和50年

⑱ 沼津市歴史民俗資料館　『江ノ浦横穴群・古墳群測量調査報告書』沼津市教委　昭和50年

⑲ 山内昭二　『初音原・寺屋敷遺跡発掘調査概報』中部地方建設局　静岡県教委・三島市教委　昭和50年

⑳ 静岡県教委　『大師山横穴群』伊豆長岡町教委　昭和51年

㉑ 後藤清隆　「柏谷百穴出土の須恵器」駿豆考古第19号　昭和52年

㉒ 静岡県教委　『大北横穴群Ⅰ』(昭和52年発掘調査概報)伊豆長岡町教委　昭和53年

㉓ 〃　『大北横穴群Ⅱ』(昭和53年発掘調査概報)伊豆長岡町教委　昭和54年

㉔ 〃　『大北横穴群Ⅲ』(昭和54年発掘調査概報)伊豆長岡町教委　昭和55年

# 第 VI 章　総　　括

## I　はじめに

大北横穴群の存在する大字北江間の地は、『倭名類聚抄』に「依馬」の郷名で記されている地域の一部に当るものと伝えられている。この依馬郷は7世紀から10世紀前半の頃に存在したことは明らかであるが、恐らく8世紀における郷がその母胎をなしていたものであったろう。

8世紀中葉を中心として、7世紀後半の頃から、およそ50基にわたる横穴群を墓地とした大北横穴群の被葬者たちも、生前居住した村落は、この依馬郷の中にあったものとみなされるが、この地を明確に求めることはできない。本横穴群から1.5㎞ぐらい離れて存する狩野川流域には、かつてこの川の放水路工事によって発見された珍野遺跡或いは防堤工事の際検出された鳥井前遺跡や直線距離でわず1㎞ほどに過ぎない地にある花の木遺跡などがあり、土師器の出土する集落遺跡であることも知られているが、この墓地との関係は明らかでない。墓地は、9世紀の頃は、墓祭のかすかな痕跡も指摘されるようであるが、この頃から次第に忘れられ、これら被葬者に関係した人々の村落も亦或いは消滅し、或いはこの居を変更したものと思われる。そして、この後はいわゆる荒墓として荒廃の一途をたどった如くである。

江戸時代には、これらの横穴群は、古墳として、または異様な岩窟として人々の目に映った。『増訂豆州志稿』には大字北江間の大師窟横穴について

大師窟、鍛冶窟ト称スルニ窟アリテ、窟中各大ナル石棺の置ク、是レ貴人ノ墳墓ナル可シ。

とし、同じく北江間の入定山横穴については、

近年石槨ヲ掘出ス。内ニ骨片、銀、管玉、石瓶等アリキ

として紹介した。また、嘉永2年北江間村で編さんした「地誌御調売上帳」には、大北横穴群をはじめ、この地の多くの横穴を「岩窟」として把え

1.岩窟之義名目有之者少く多くは無名之岩窟ニ御座候。寸尺之義も相知候は聊ニ而何れも差埋罷在聢と相分り不申候掘貫候年代等之義は申傳も無御座相知不申候

となし、大北横穴群については31基を数えて、次のように説明をなした。

大北　1岩窟　三拾壱

但深凡67尺より壱丈位過半差埋寸尺相知不申候か。右之岩窟は字若宮山之内所に御座候

明治から大正にかけては、石棺を内部にもつ大師山の横穴が学界に注目され、明治35年大野雲外は「伊豆国横穴を観る」と題して『東京人類学会雑誌』（200号）に紹介し、その後この横穴は「珍場の横穴」として学界に周知された。しかし大北横穴群はなお世人の視点から遠ざけられてきたのであり、まして学界においては全く未知な存在でもあった。

この大北横穴群がようやく注目されはじめたのは、大師山横穴群の調査の行われた昭和48年頃からであり、これには町の文化財専門委員でもある小野弘氏の努力も銘記されなければならない。

このようにして、ようやくこの存在が知られたが、しかも岩山の採掘は、この近くまで及んでおり、民有地である本地域が将来どのような危機に遭遇するか予測の許さぬものもあった。

幸いにして、町当局の文化財行政の熱意は、地主伊奈昌孝氏の好意と地元の人の協力と相まって、県及び文化庁の援助のもとに、その全面的な調査を遂行することになったのである。調査は昭和52年から同55年

にⅣ次にわたって行われたが、その結果約20の火葬石櫃や「若舎人」銘の石櫃の検出をはじめ、同一の横穴群において、土葬から火葬の採用された経過を知る上にも横穴研究の上に画期的な成果をもたらしたのであった。ながい間人々を遠ざけ、山丘の草叢雑木の中に埋没していた横穴群は、ここに学界に貴重な資料を提供し、文化財として保存され活用されることになった。

私は総括のペンを執るに当り、大北横穴群の遠い過去の歴史的背景に思いを馳すとともに、永く荒廃のまま埋もれていた遺跡が、多くの人々の善意によって顕彰されたことを喜び、これらの関係の人々に感謝の言葉をささげたいと思う。

## Ⅱ　要　　約

大北横穴群の第Ⅰ次からⅣ次にわたる調査の成果について、まず簡単に要約すると次のようである。

### 1　横穴の形態と群構成

横穴は、調査したもの44基、開口等によって確認されたが、危険なため調査を行わなかったもの6基、総じて50基ほどより成っている。

これらの形態と群構成とをまとめると、次のようである。

① 横穴は、いずれも、玄室と墓前域からなる形状で、羨道を有しないタイプであった。この形態は、北伊豆地方一般に共通するものであるが、柏谷・大竹・宗光寺等には、わずかに羨道部を設ける例がみられるようである。

② 玄室の平面形は、3種に別けられたが、これには、墓前域の形状4種を結合できるものであり、こうした編年操作は、玄室はフラスコ形から長方形へ、墓前域は台形から長方形への基本変化を認め得た。最も注目されたのは方形区画墓前域と呼称した形状で、その特徴となる構造とともに、本横穴群の各期を通じて設置された事実も確認された。

③ 群構成については、A・B・C3群が、さらに単位群からなる構成が明らかとなった。すなわち大別すると1・2・3号を中心とするA群、32号を中心とするB群、21～31号のC群に分けられ、それらはさらにいくつかの単位群に細分される。

A群は刳り抜き石棺を有する2号、本横穴群中最大規模の3号を最上段とし、11－1号のように開口部が16×25㎝、奥行き33㎝という超小型横穴までバラエティに富んでいる。

B群は32号最上段とする40号までのグループで、本横穴群中の最下段のグループである。32号は本横穴群中第2の規模を有し、その整形は最も丁寧である。

C群は規模の大小は比較的すくない。特筆すべきことは、この群中の調査横穴12基より合計10の石櫃が検出されていることである。特に24号横穴内の石櫃には正面に「若舎人」の文字が刻まれている。また26号横穴では、玄室外の墓前域左側に石櫃がすえられている。なお、A群は9単位群、B群は8単位群、C群は7単位群となって、1単位群は2～3基からなっていた。この単位群は数単位群がグループとなって、小群をつくっていた。A群は2小群、B群は3小群、C群は3小群に構成できた。この小群を推定するうえで、通路・階段等が重要な役割をもつようであった。

④ 階段・通路についても、とくにA群で多く注意された。うち、通路では、1～3号横穴や7～9号横穴の前端部分を墓前域から分離して認定してみた。こうした階段・通路のあり方は、本横穴群の特徴の一つといいうるものであった。

## 2　石　　櫃

大北横穴群の特色は、火葬石櫃が身だけでも20例ほどの多数が発見され、しかも、これに各形態のあることである。恐らくこの数は、この複雑な形態と相まって、日本の一遺跡から発見されたものとしては最大といってよかろう。これらについて、次のような点が要約される。

① 石櫃はいずれも骨を直接納めた骨櫃であり、方形箱型で方孔が上面にうがたれている、いわば定型ともいうべきもの（若舎人銘石櫃等）のほかに、孔がきわめて小さく、円孔のものもある。

② 孔が横にうがたれている横口式というべきものもあり、この場合の孔は方孔が多いが、円孔のものもあり、しかもきわめて小さい。これも、家型・厨子形等各種の形態がある。

③ これらの小孔のものには栓がさしこまれているものがあり、納入された骨は幼児のものでなく大人のもので、粉にした一部のみのものとも考えられる。

④ 定型ともいうべき石櫃から、小孔のうがたれを竪口式、さらに横口式のものと推移していたようにも思われる。

## 3　ミニ横穴及び床面に刳りこまれた小孔

本横穴群には、超小型でありながらも、横穴の形態をもったものが、5箇所在している。中には蓋で閉鎖されたものもある。また床面の奥壁の隅に小さい孔のうがたれたものもある。

これらの存在は、本横穴群を特色づけるものでもあるが、これらも必ずしも幼児の火葬骨を納入したものでなく、大人のそれを粉にしてこの一部を納めたものとも考えられる。そしてこの時期は竪口式小孔の石櫃の発達から、さらに簡略された最終的のものであり、8世紀後半の頃のものとも考えられる。

## 4　土　　器

今回の調査で出土した土器は須恵器、土師器の厖大な量に達したが、これらを通じてみると次のような成果が見られる。

① 土器は7世紀後葉から8世紀が主体で、それは3時期に区分された。この時期細分の基準はもちろん須恵器であった。

② とくに、土師器坏類が比較的量も多く、3種に別け得た。うち、いわゆる在地型と呼んだタイプが、甲斐型としたタイプと一定の併行関係を有していたを明らかにできた。

## 5　ノ ミ 痕

なお、Ⅳ次にわたる調査においては、特に横穴にみられるノミ痕についても、こまかい観察を示した。

① 横穴にみられるノミ痕は①V字状②平行ノミ③打ち込みの3種を基本型と認識できる。これらは同種の工具の使用法の変化である。

② 1基の横穴を掘鑿する際の使用工具の種類は比較的すくなく、1～3種程度である。

③ 横穴掘鑿の基本的な工具は、刃に対して直角に柄のついた鍬・ツルハシ状のものと推定される。

④ 作業工程として①整地②荒掘り③整形④細部加工の4段階を考えることができる。本横穴群の場合荒掘りの段階で使用されているものが多い。

⑤ 同様の掘鑿方法を持つ横穴は伊豆長岡町内の各横穴群、沼津市江ノ浦・多比横穴群などに広がっている。日守中里・日守岩崎等大平山北側及び柏谷・大竹等狩野川右岸の横穴群とは様相を異にする。

## 6　地学上からの考察

今回の調査では、地学上からの考察もなしたが、その結果は次のように要約される。

① 横穴群は、静浦層群の疑灰岩と箱根新期軽石流に集中してみられる。
② 大北横穴群は、上記静浦層群のうち江ノ浦白色疑灰岩層を掘穿する。
③ 横穴群の前面南方には北江間低湿地が拡がっているが、2240±75年B.P.のころから、以降になって谷の入口に自然堤防が形成され、後背湿地形がみられるようになったという。問題はこの江間低地における集落の成立であるが、それは、古墳時代前期以降のなることは確実である。南江間では珍野遺跡が低地に突き出した小舌状台地上に縄文晩期から弥生時代を経て古墳時代に至る集落を形成しているが、少なくとも本横穴群の前面をなす北江間においては弥生遺跡の痕跡はみられないといえよう。
④ 本横穴群の占地のうえでは、その岩層にあらわれた断裂（クラック）との関係も大きな意味をもつようであり、こうした傾向を明らかにするために各断裂の計測を試みた。その結果、多くの横穴では傾斜70°～80°と垂直にちかい断裂面を玄室の中央・左右いずれかに配し、これを基準に掘穿を進めたものであろうことが明らかとなった。

### 7 北伊豆の横穴

なお、本横穴群調査の一環として、北伊豆横穴群の全面的な再踏査を実施した。その成果の要約は、次のようである。
① 46におよぶ横穴群を登録したが、それは昭和40年の『県地名表』27箇所、昭和51年の『大師山横穴群』38箇所を大きく上廻わるものとなった。
② とくに、本調査においては、久しく不明とされて放置されてきた横穴群を再踏査するなかで、横穴群名、所在地とその基数を、現況で可能な限りといえる正確さで把握したといえる。本地名表をもって、北伊豆横穴群調査の決定版として、長く斯界に貢献し得るものと信ずる。
③ 併せて、各横穴群の掘穿された岩質を明らかにしたことは、一般に北伊豆横穴群のすべてが凝灰岩地帯のみと理解されることが多かった状況のなかで、横穴群の位置づけにも関わる重要な意味をもつものといえよう。

## Ⅲ 2、3の問題

以上、この成果のいくつかを要約したが、そのほか、それぞれの横穴の前庭部に溝があり、これは横穴間の岩脈の調整によって巧みに傾斜面に雨水を流す施設をもなしていることや、参道ともいうべき通路も考えられるなど、多くの重要な点も指摘される。これらをもう一度整理すれば、次のようにもなる。
① およそ50基の横穴は7～8世紀の時期のもので、それぞれ支群、単位群に分けられ、被葬者の地位や家族群、時期の変遷・被葬者の村落・社会的、経済的背景などの研究に資料を提供する。
② 刳抜き石棺を有する大規模なもの、石櫃を有するもの、火葬骨を真接納めたと考えられる超ミニ横穴まで変化に富み、葬制の研究に重要な資料を提供する。
③ 「若舎人」という人物銘のある石櫃が発見され、被葬者とその背景を知る古代の墓の稀有な例となっていること。
④ 蔵骨器である石櫃が20例以上発見され、石櫃資料として最もまとまっていること。
⑤ 石櫃の形式は多種多様であり、一人分の火葬骨を納める通常のものから小型のものまで、火葬の方法のバラエティを知ることができる。

しかし、なお、これらに関連して、2、3の問題を考察しよう。

### 1 大北横穴群における土葬から火葬への転移の問題

本横穴群においては、刳り抜きの棺身を認える2号横穴をはじめとし、遺骸を安置したとみなされる

土葬墓のものが、およそ20数基ほどあるとともに、火葬骨を納めたとみなされる石櫃のある横穴も指摘され、一方、ミニ横穴というべき火葬骨納入の超小型横穴5基ある。しかも、火葬石櫃のものも、同一横穴で複数で発見され、夫婦或いは家族墓としての横穴の形態を把えることができる。一方石櫃の小孔のうがたれたものやミニ横穴は次第に簡略化した傾向の中の所産であることも知られる。

一横穴群において、このように土葬から火葬への採用の変化を示す顕著なものは、本横穴群のみといってよかろう。しかも、これは、これを墓地として経営する村落の葬法風習の変化でもあり、社会環境の変革でもあった。

この村落に火葬が採用されるのはいつであったろうか。少なくとも本横穴にみられる最も早い火葬採用の例は、定型の石櫃のものである。この時期は、8世紀の前半ことに初頭の頃であったと言えよう。

日本における火葬の採用をもって、文武天皇四年（700）の道昭が嚆矢とすることには問題があるとしても、少なくともこの頃から急速に流行したことは考えられるであろう。

とかく、中央から遠い東国の火葬採用の時期をもってかなり遅れたものと解釈され勝ちであるが、伊豆国における採用は8世紀の初頭であり、中頃をピークとして土葬から火葬への変化を示し、しかも次第に簡略化した墓に推移していったものと考えられる。

東国の火葬採用とその発展の時期の問題の考察に、本大北横穴群は欠くことのできぬ資料であろう。

### 2　火葬骨納入の方法の多様さ

葬制史上の重要な問題は、本横穴群において、火葬石櫃としても通常の型式のものでなく、小孔のうがたれた竪口式・横口式の各形式のものが発見され、併せて、ミニ横穴や床面刳り込みの小孔の発見されたことである。

これらには、夫婦合葬とみなされるものもあり、そのすべてが乳幼児のものとは見なされ難い。もし大人の火葬骨とすると、粉にし、その一部のみ納入したということになる。他の余剰のものは、分骨と考えられない以上、散骨によったともみなされる。

石櫃に火葬骨の全体を納骨することから、さらにその一部のみ納入となり、やがて粉にして小孔に納める葬法に変化し、他を散骨の方法によって処理したとする風習が、東国の一角に8世紀の中頃を中心として流行したとすると、古代葬制の上で重要な問題ともなるのである。もっとも、これが、この地域のみの特殊なものか、広く行なわれていたものかは、今後の資料にまたなければならないが、新しく関心を寄せなければならぬものであろう。

### 3　「若舎人」銘石櫃の問題

24号横穴床面に、ほぼ定位置で存した定型石櫃の正面に「若舎人」の三字が刻まれていたことは、大きな課題ともいえるが、古代のこの種の石櫃に銘の刻された唯一の資料であるとともに、「若舎人」という被葬者をめぐる研究上の重要な資料でもあった。

舎人は言うまでもなく、7・8世紀の頃地方の名門の出身の子弟の中から選ばれて、天皇・皇太子の側近に位えた身分のものであり、朝廷では下級官史であったとしても、帰郷後はそれぞれの地域社会において、かつての宮中の出仕者として誇り高い地位をもち、社会の信望も厚かったに違いない。地方における「若舎人」関係の名は、『万葉集』防人の歌の中に、茨城郡若舎人部広足の名が見えるが、舎人の名を記した考古学上の資料も少ない。平城宮木簡の中には、「大舎人」の名の例（『平城木簡』1―78、昭和45年）が報告されているが、宮城県桃垂郡矢本町赤井字星場からも「舎人」のへら書きの土器が発見されている（三宅宗議「矢本町赤井字星場出土のヘラ書き土器」『石巻地方の歴史と民俗』昭和48年及び『矢本町史』昭和48年）。このように、地方においても舎人関係の資料は少ない。

若舎人も、この舎人に関連したものと考えられる。しかも、被葬者として「若舎人」の名のあらわれているのは最初の事例であろう。若舎人そのものについては、古代史上なお考察の問題が残されているとしても、少なくともこの地における火葬採用の早い時期に、「若舎人」という舎人に関係したとみなされる人物が、この地における土葬から火葬に移行しはじめた頃に、この遺跡で火葬にされ、土葬による時期からの長い伝統をもった横穴に埋葬された事実が認められるのである。或いは、「若舎人」を家族の一員にもった家系の人々は、この祖先から子孫へとこの墓地の経営の有力な一環をになっていたかも知れないのである。

### 4　大北横穴群を含む北江間横穴群の位置

ここで北江間横穴群とは、さきに調査された大師山横穴群、新たに発見された割山横穴群、及び、大北横穴群と大北東横穴群等を中心とする、北江間地域横穴群の総称である。これが、10横穴群101基を数え得ることは、すでに詳しく述べたが、ここではその時間的関係をはじめとする位置づけがいかに考えられるであろうかについてふれたい。

まず、時間的な問題からみると、調査によって時期の確認できたのは、大師山・割山・大北の3横穴群で、うち大師山・大北については、ほぼその大部を調査したが、割山ではわずか1基を発掘したにすぎない。それによると、もっとも早い例は、大師山横穴群8号横穴にみられた7世紀中葉で、ついで大北横穴群17・24号横穴等から出土した7世紀後葉の土器ということになる。ただし、両横穴群とも、その主体となる時期は8世紀といえることは明らかで、ともに圧倒的な出土量を有した。また、割山横穴群は8世紀に含め得るものであった。

いま、広く北伊豆地方横穴群にそれを求めても、やはり時期の確認できている例はごく少ないようである。函南町柏谷、大仁町宗光寺、沼津市江ノ浦の各横穴群の出土資料によると、確実なところは7世紀中葉といえる。たしかに、柏谷および江ノ浦横穴群の各採収資料として報告されたもののなかには、7世紀前葉までさかのぼり得る例が含まれているが、信憑性に問題の残る資料を根拠に北伊豆地方横穴群の出発年代を決めることは避けておこうと思う。すると、本北江間横穴群における大師山横穴群は、柏谷・宗光寺横穴群等とともに7世紀中葉ごろにその始期を求めることができ、7世紀後葉から8世紀にかけて、隆盛期を迎えることになり、こうした過程で本大北横穴群の形成もみられたのであった。

つぎに、横穴群の地位についてふれておこう。本北江間横穴群は、10横穴群101基であることはすでに述べたが、うちもっとも有力なものは、大北横穴群47基で、ついで、大北本横穴群15基、割山横穴群14基、大師山横穴群10基ということになる。

いま、第37表「北伊豆横穴地名表」によると、10基前後以上の基数が確認された横穴群は以外に少ない。三島市赤王、函南町八重窪・柏谷・中里、大仁町宗光寺、清水町松沢、沼津市江ノ浦・多比等の各横穴群にすぎない。こうした、現在確認し得る横穴の基数からしても、本北江間横穴群が、北伊豆地方横穴群のなかで、もっとも有力なものの一つであることは認めてよいものであろう。

さらに、横穴群の内容についてであるが、その比較検討のためには資料がきわめて不十分といわざるを得ない。それでも、たとえば、横穴の形状については、本大北横穴群では、羨道の付設しない玄室と墓前域のみからなる、いわゆる退化形態のみであることが明らかになったが、同様の傾向は、江ノ浦横穴群においても確認されている。また、さきに調査した大師山横穴群でも、ただ一基に羨道を有するタイプとなし得る例が確認されているが、柏谷や、宗光寺横穴群ではかなり一般的な形状とみてよいようである。こうした、横穴群のあり方が、いかなる地域性として把握し得るであろうかは今後の課題であるが、さきに述べた「若舎人」銘石櫃の存在とも関連して、本北江間横穴群が、伊豆地方横穴群のなかでも特徴ある横穴群を形成していることは確かである。

# 付 載 1　　割山横穴群の発掘調査

## 1. はじめに

割山横穴群は、大師山横穴群の北方直線距離で約1㎞に位置する。地籍としては伊豆長岡町北江間字大師山及び珍場洞にまたがっている。

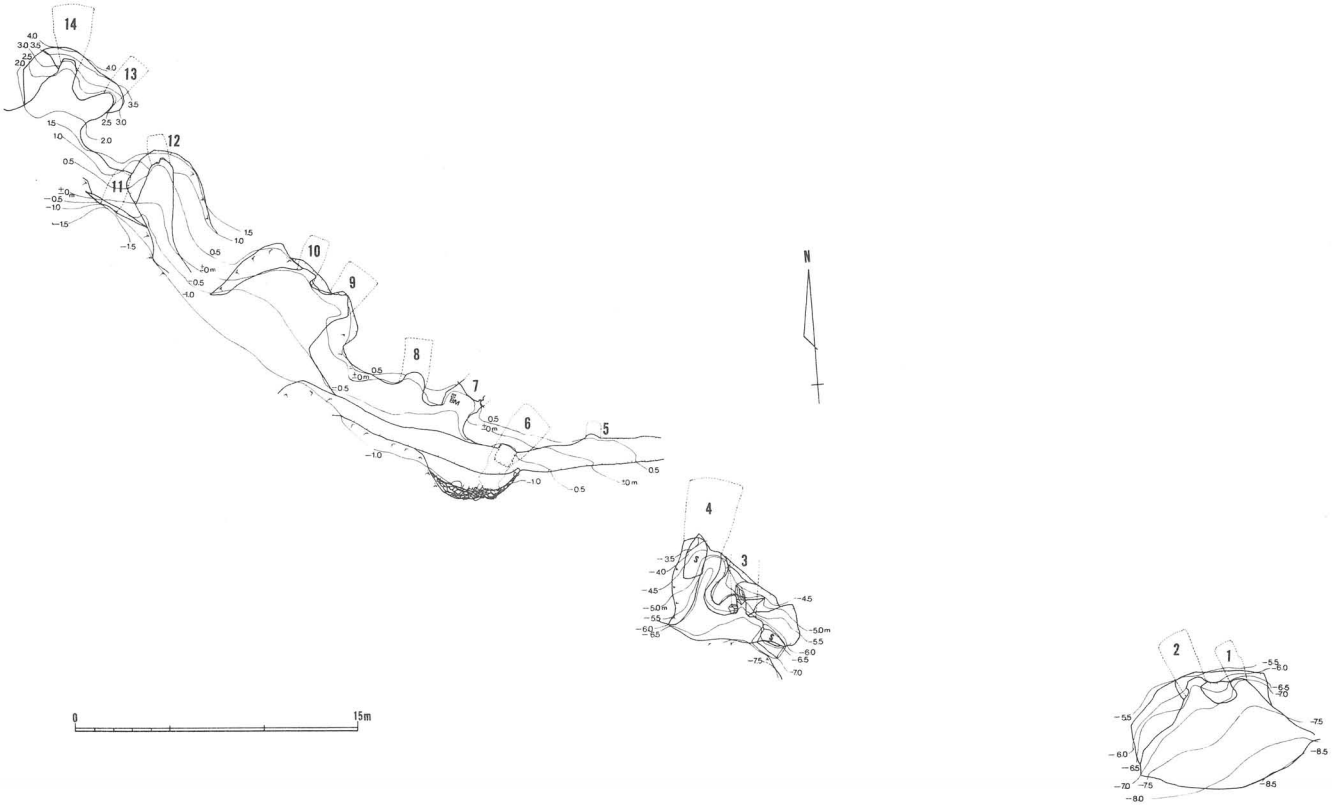
大北横穴群の第Ⅱ次調査の際の周辺横穴踏査において、石櫃が存在することが確認されたため、大北横穴群の関連調査として昭和54年12月10日～12月22日に実施された。調査は伊豆長岡町教育委員会が調査主体となり、大北横穴群調査団のメンバーがこれにあたった。

従来、珍場東洞横穴群、大師山西横穴群等の名称で仮称されてきていたが、横穴群の背後の山が地元で〝割山〟と呼ばれていることから、今回の調査において割山横穴群と呼称することとした。

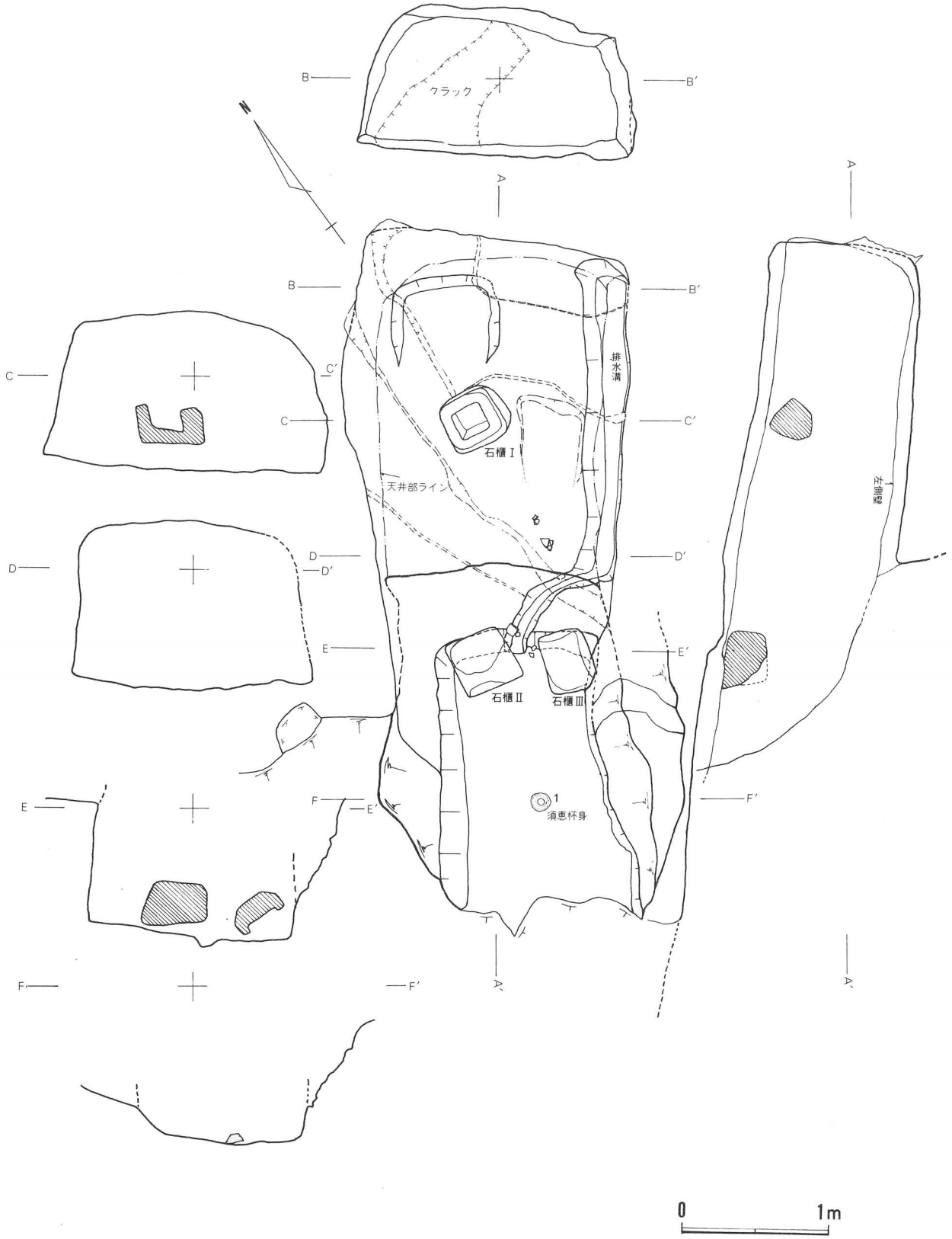
今回の調査は、分布の状況及び横穴群の性格を把握することを主目的として、総基数14基を確認、これらの位置関係図を作成するとともに、石櫃を持つ6号横穴の発掘調査を実施した。

## 2. 横穴群の概要

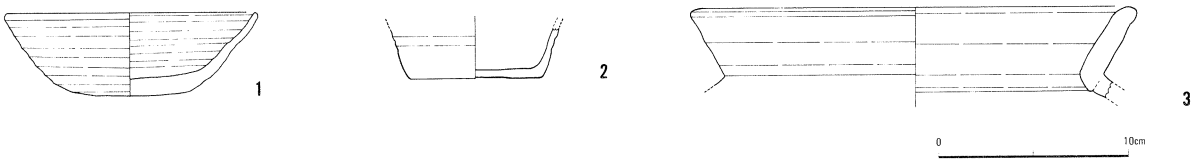
標高40～50ｍあまりで、舌状に張り出した丘陵の西側斜面に南北に連らなって開口している。現状で14基を確認し、南側より1号～14号の番号を付した。レベルとしては1号が最も低く14号が最も高くて両者の差は10ｍである。配置からみると、1～2、3～4、5～10、11～14のグループに大別できる。さらに5～10は5～8、9～10、11～14は11～12、13～14の2グループに細分が可能である。




第97図　割山横穴群横穴配置図




第98図　割山横穴群 6 号横穴実測図




**第99図　割山横穴群6号横穴出土土器実測図**

2基のグループでまとめられる点は興味深い。しかし各横穴の位置関係を考えるとまだ埋没している可能性は強い。

最も大きなものは4号横穴で、玄室長6.4 m奥壁巾2.8 m高さ2.3 m、最も小さなものは5号横穴で、開口部が若干削り取られこわされてはいるが、現状で開口部巾0.8 m奥行0.9 m。大小、バラエティに富んだ横穴群である。

単位m

| | 玄室長 | 開口部巾 | 奥壁巾 | 奥壁高 |
|---|---|---|---|---|
| 1号 | — | — | — | — |
| 2号 | (2.80) | (1.40) | 1.68 | 0.93 |
| 3号 | — | — | — | — |
| 4号 | (5.60) | (2.02) | 2.87 | 2.30 |
| 5号 | — | — | — | (0.75) |
| 6号 | 3.25 | 1.28 | 1.70 | 0.87 |
| 7号 | — | — | — | — |
| 8号 | 2.20 | 1.50 | 1.42 | 0.72 |
| 9号 | 2.04 | 1.60 | 1.94 | 1.08 |
| 10号 | (2.40) | (1.06) | 1.00 | 0.92 |
| 11号 | 2.00 | 0.82 | 0.78 | 0.40 |
| 12号 | 1.60 | 0.92 | 0.84 | 0.49 |
| 13号 | 2.48 | 0.87 | 1.22 | 0.80 |
| 14号 | 3.20 | 0.93 | 2.18 | 1.20 |
| 15号 | 2.50 | 0.74 | 1.67 | 1.26 |
| 16号 | (4.00) | (1.16) | 2.73 | — |
| 17号 | — | — | — | — |
| 18号 | — | — | — | — |
| 19号 | 4.42 | — | 1.42 | (1.64) |
| 20号 | — | — | — | — |

**第38表　割山横穴群横穴一覧**

### 3.　6号横穴

調査前の状況：前面に石垣が積まれ、石切場への小路が通っている。そのレベルは開口部より高いが、開口部付近で縦に穴が掘られ、横穴内にもぐりこめるようになっていた。床面上約20㎝の流入土が認められ、石櫃はその上にあり、あきらかに当初の状態ではないことがわかる。

玄室：開口部付近が剥落して失われているため明確には決しがたいが、巾の最も狭ばまる点をもって開口部とし、玄室長3.25 mとした。巾は奥壁で1.7 m中央部が最大で1.92 m開口部で1.28mを測る。右奥壁が深くまた右側壁が中央部で膨らみ、不規則なプランを持つ。断面形は丸味を帯びた台形で、奥壁では丸味が強いが開口部では陵をしっかりもった台形となっている。

玄室床面の整形は剥落と摩耗が多く観察困難であるが、他の面に比して比較的ていねいであるといってよいであろう。右奥には70×60㎝深さ約8㎝の方形の凹み部分が認められる。石櫃をすえるための加工と理解できる。左側開口部付近にも、わずかではあるが同様の凹みの痕跡が認められる。また左側壁にそって巾25㎝深さ約5㎝の排水溝が認められる。この排水溝は奥から左側壁にそって約2.2 m延び、墓道中央に連ながっている。

封鎖施設：開口部付近に若干の礫が認められたが黒褐色土上にのっており、当初のものとは認められない。この礫群中に石櫃が2検出されている。

墓前域：長さ1.4 m巾1.3 mほどの方形で、左壁から中央部は巾1.1 mの墓道となっており、右側壁に沿って約20㎝のテラスを有するのみである。

墓道は全長2.0 mで、奥壁より2.75 mのところまで延びている。玄室床面と墓道との段差は約10㎝である。

## 4.　6号横穴の遺物

今回の調査において、石櫃3・須恵器坏1及び破片若干を検出している。また過去の踏査において須恵器大甕破片を表採している。

### 石　櫃

玄室内より1（割山1号石櫃）、開口部礫群より2（割山2号石櫃、割山3号石櫃）検出されている。玄室内検出のものは、流入土である褐色土上面にのって全体を露出させており、後世の撹乱をうけたと思われる。また開口部礫群中より検出されたもののうち中央部に位置するもの（割山2号石櫃）は、小型方孔家形のもので½に割れ、方孔部にも褐色土がつまっていた。また左側の割山3号石櫃は大型方孔箱形で、1号石櫃の蓋と考えられる。

①　割山1号石櫃

割山横穴群6号横穴　玄室内出土（表採）

大型方孔箱形　　〔身〕

縦47.4×横45.2㎝のほぼ正方形で、わずかに縦長となり、高さ28.5㎝を測る。底部の背面側を大きく欠失し、刳り込み部の縁部をほとんど失っているが、全体的には保存良好である。

形状としては、各面ともほぼ同様な垂直性と平坦性をもって、整形のうえでは差違らしいものは観られない。

刳り込み部は、縦20.4×横19.2㎝、深さ17.5㎝で、一応大型方孔に含める。その周縁には、巾数㎝前後を測る蓋受けが縁部として設けられていた痕跡が明瞭であった。

ノミ痕は、正面・右側面のみに良好な残存で、他の各面では風化が激しい。ともに、斜にはしるノミ痕を残す使用法で、やや粗雑なウロコ状痕が明瞭である。その両面を比較すると、正面がよりていねいに調整されて、側面との差違が認められた。正面を比定し得た所以である。

②　割山2号石櫃

割山横穴群6号横穴　開口部出土

小型方孔家形

縦44.5㎝×横39.7㎝のほぼ長方形プランで、高さ30.2㎝を測る。石質軟質で、大きく破砕しているが、接合により復元し得た。それでも、上面の正面側には大きな欠失が目立つ。

全体の形状は、寄せ棟式の頂部を平坦にしたタイプで、いわゆる斜棟にあたる周辺傾斜面が比較的大きくつくられる。頂部の平坦面はその中央部をやや高くして胴張り的につくる状況で、正面観はややカマボコ形にちかづく。

この寄せ棟の短辺側を正面として、その中央部やや上よりに横口式の刳り込み部を穿っている。縦15.1×横13.1㎝×深さ18.5㎝で、内部では袋状に大きく膨んでやや下向きとなる。この部分におけるノミ痕は良好で、細いノミ痕が良好に残る。

全体のノミ痕は、風化によりほとんど観察できないが、それでも、かなりていねいに調整されたものであることはうかがい得る。

③　割山3号石櫃

割山横六群6号横穴　開口部出土

大型方孔箱形　　〔蓋〕

35.4×40.3㎝の長方形プランで、高さ20.0㎝を測る。粒子の細い岩質で、やや黄灰色を呈し、比較的軟質で、隅の一部を欠失している。

形状は、長方体の上面4辺を大きく面とりしたタイプで、その頂部は20×25㎝ほどの平坦面となるが、咆哮は剥落と風化によりかなり荒れている。下面の刳り込み部は、24.0×27.0㎝で深さは5.6㎝ときわ

めて浅く、そのため、屋根部がきわめて厚いという特徴が指摘できる。また、上面の面とり部の外縁部には、巾 1.5 ～ 2.0 ㎝前後の減じ削り込みがみられて、側壁との連結をはかっている。

岩質軟弱で風化が激しいため、ノミ痕は観察できない。

なお、本例は、岩質、規模、形状等からして、1号石櫃とセットになることはあり得ない。

**土器類**

須恵器坏身が墓前域中央床面直上の黒色土中より検出されている。口径 13.4 ㎝、器高 4.4 ㎝、底部はヘラ切りののちヘラナデが加えられ丸底の様相を呈している。青灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

大北横穴群13－1号横穴・17号横穴等に類例があり、須恵器編年Ⅴ期後半に位置づけられるものと思われ、8世紀後半の絶対年代を与えてよいと思われる。

その他に須恵器大甕破片等が若干採集されているが、器形・時期を明確にする資料とはならない。

## 5. まとめ

14基の横穴を確認し、内1基の発掘調査を実施した。調査の結果をまとめてみると次の様である。

1. 2～3基を1単位とした6のグループに分けることができる。2基をひとつの単位とすることは興味あるところである。
2. 大型の横穴から全長1 ｍに満たない小型横穴までバラエティに富み、また石櫃を持つ横穴の存在等土葬から火葬への変化をうかがわせる。
3. 6号横穴の須恵器坏より、8Ｃ後半の時期を与えることができる。他に石櫃の存在等を考えあわせると大師山横穴群よりおくれ、大北横穴群とほぼ同時期に営まれたものであろう。
4. 左側壁に沿って排水溝を持っており、北江間の横穴群では類例のないものである。遠江の横穴群中にはこのような排水溝を持った横穴が散見されるが、伊豆での類例としては沼津市江ノ浦横穴群Ａ－8号にあるのみである。

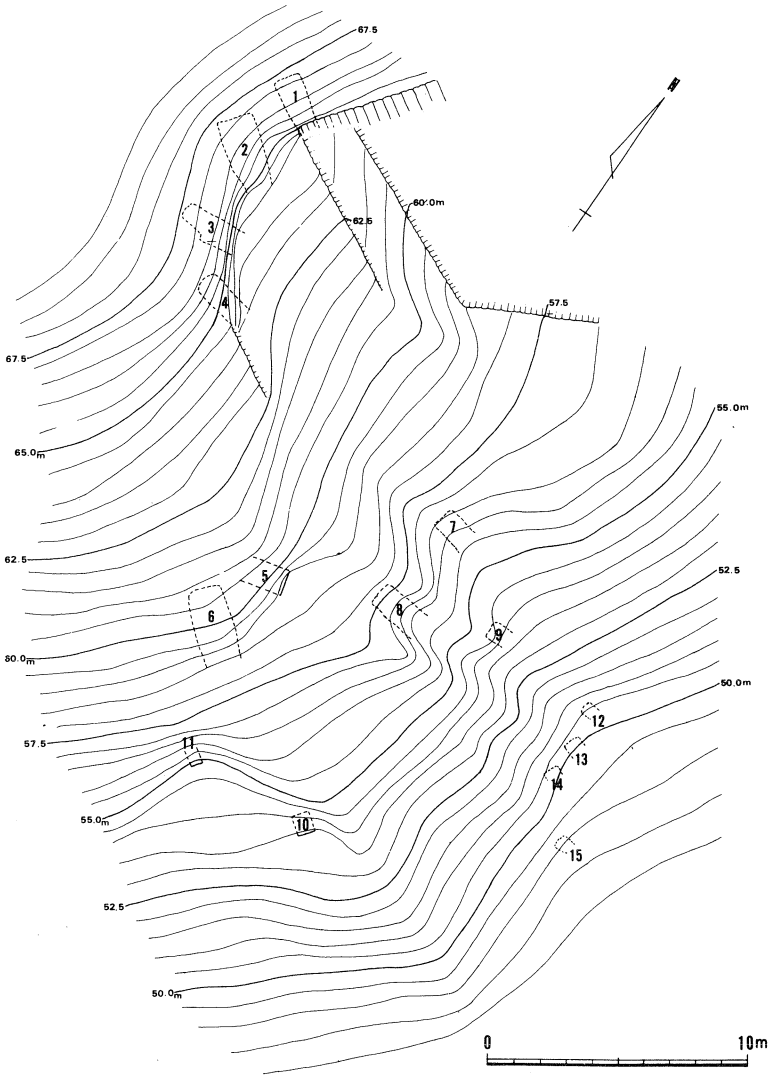
# 付 載 2　　大北東横穴群の測量調査

大北東横穴群は、北江間大嵐 1611 ・ 1612 に所在する。大北横穴群・大師山横穴群と共に既に江戸時代よりその存在が知られていたが、昭和 51 年、大北横穴群の発掘調査に先立って行なわれた周辺横穴群踏査の際、標高 60 *m* 付近を中心に 15 基の横穴が開口しているのを確認した。伊豆長岡町では、大北横穴群の発掘調査に伴せて、現状での保存状態を確認するため、本横穴群の測量調査を実施することとし、昭和 55 年 8 月末から 9 月頭初に業者に委託して全体測量を実施した。また大北横穴群第Ⅳ次調査の際に、本横穴群のそれぞれの横穴について略測し、現況写真撮影を行なった。(図版 106 )

その際、横穴番号は、先の踏査時に付した番号を保持し、実測図は平面全測図を 1 / 100 、個々の横穴を 1 / 20 にて略測し、後日両図を合成し、現況図(第 100 図)を作製した。

さてここで、本横穴群の構造について簡単に述べてみよう。

本横穴群は、大北横穴群の一つ東側の谷戸の奥端に近い西側斜面に占地し、高位の 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 号横穴が標高 65 *m* 前後、低位の 12 ・ 13 ・ 14 ・ 15 号横穴が標高 50 *m* 前後に計 15 基が開口しており、




**第 100 図　大北東横穴群現況平面図**

東西約30 m、南北約25 mの範囲に、3支群を形成している。

横穴群全域には、笹や低雑木が密生し、当時の地形をほぼ残しているものと言えるが、この地は、かつて伊豆石の石切場として使用されたことがあり、本横穴群の最も北側の高位置に占地する1号横穴は、その墓前域及び玄室の前端を採石によって破壊されていた。

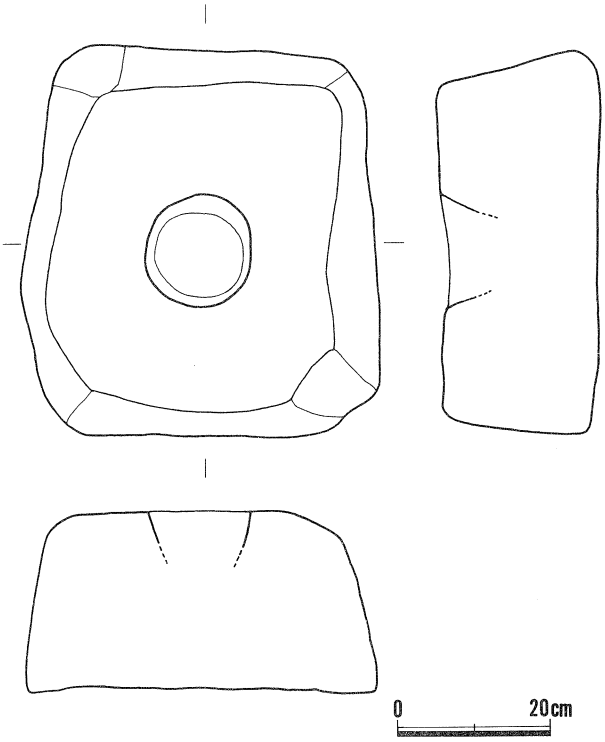
本横穴群は、横穴が占地する微地形と横穴の規模を考慮し、3つの支群に分けることができよう。横穴の規模については第39表に示した。

まず第一の支群は、高位置に占地する1・2・3・4号横穴の4基で構成され、北側グループを形づくる比較的同一規模の横穴で、標高65 m前後に並んで東面して開口する。中でも3号横穴開口部左袖にはミニ横穴が付随する状況が観られた。

第2の支群は、5・6・10・11号横穴の4基で構成され、本横穴群の西側グループを形づくり、標高53 mから60 mにかけて南東に面して開口する。上位に位置する5・6号横穴に比べ、下位に位置する10・11号横穴は、その規模が小型である点が注目されよう。また10号横穴玄室内には石櫃が存在しているのが認められた。

第3の支群は、7・8・9・12・13・14・15号横穴で構成され、第一支群下方の小さな谷地形で一括できる。標高は49 mから56 mを測り、東面し開口する。また8号横穴の墓前域に石櫃が認められたことは注目されよう。これは、第101図図版106に示したが、51㎝×48㎝の方形をなし、厚さ23㎝を測った。その中央に径15㎝の円孔を有する石櫃で、円孔中には火葬骨が全く認められなかった。この石櫃は墓前域表土上に観られ、明らかに後世の撹乱が加えられたものと判断できた。この支群も先の第二支群と同様、その上位に7・8号横穴といった比較的大型の横穴を配し、下位に9・12・13・14・15号横穴はそれに対し小型であるという特徴を認め得た。

以上のように本横穴群はさらに1ないし2基づつの単位群に分かれるようであり、例えば、第3支群では、大型の7・8号横穴のA単位群、小型である9号横穴のB単位群、さらに小型の12・




第101図　8号横穴墓前域出土石櫃実測図

単位m

| | 玄室長 | 開口部巾 | 奥壁巾 | 奥壁高 |
|---|---|---|---|---|
| 1号 | (1.36) | (0.74) | 1.04 | 0.74 |
| 2号 | 2.98 | 0.96 | 1.42 | 0.96 |
| 3号 | 2.40 | 0.98 | 0.78 | 0.64 |
| 4号 | 1.90 | — | 0.90 | 0.82 |
| 5号 | 2.84 | 1.58 | 2.00 | — |
| 6号 | 3.08 | — | 1.35 | 1.15 |
| 7号 | — | — | — | — |
| 8号 | 2.20 | 1.08 | (1.06) | 0.72 |
| 9号 | 1.45 | 1.40 | 1.50 | — |
| 10号 | 0.78 | 0.80 | 0.80 | — |
| 11号 | — | — | — | — |
| 12号 | — | 0.94 | — | — |
| 13号 | (0.94) | 1.20 | 1.24 | — |
| 14号 | 1.28 | 1.33 | 1.26 | — |
| 15号 | 1.20 | 0.80 | 1.00 | — |

第39表　大北東横穴群横穴一覧

13・14・15号横穴のC単位群に分かれるようである。こうした横穴群の構造は、北江間横穴群を概観した時ほぼ普遍的に指摘でき、また石櫃やミニ横穴といった西隣りの大北横穴群とも関連する要素が認められたことは、今後、伊豆の横穴群を考える上で重要なモーメントを提供できたと信ずるものである。

遺物は全く認められず、本横穴群の造営時期は確定できないが、横穴群の構成や、石櫃、ミニ横穴等、大北横穴群とその内容が類似することから、ここでは、大北横穴群とほぼ同時期を想定しておくこととし、今後の課題としておきたい。

# 関　係　者　名　簿

## 伊豆長岡町

町　　長：松本重造
助　　役：津田重行（～54年12月）　西湖正四郎（55年1月～）
収入役：西湖正四郎（～54年12月）　小沢国男（55年1月～）
教育長：大川　元（～55年9月）　中野　勇（55年10月～）
事務局長：平沢修一（～54年12月）　足立喜美雄（55年4月～）
担　　当：内田敏夫　森谷　圭（～53年3月）　植松とよ子（53年4月～）

## 町文化財保護審議委員

稲垣顕道　小野　弘　久保田健治　中野文海
花房昭二　平沢貞秀　鴨下繁利　山口博正
津田重行（55年1月～）

## 大　北　区

町会議員：久保田庄司（～54年4月）　伊奈重美（54年4月～）
区　　長：八木　清（～53年12月）　久保田利徳（54年1月～）
副区長：石井　肇（　〃　）　高井正弘（　〃　）
部農会長：伊奈平作（　〃　）　青木　武（　〃　）
地　　主：伊奈昌孝
町文化財委員：久保田健治

## 調　査　団

団　　長：斎藤　忠
副団長：長田　実
調査員：山下　晃（静岡県教育委員会文化課・Ⅰ次）
植松章八（　〃　・Ⅱ～Ⅳ次）
佐藤達雄（　〃　・Ⅱ～Ⅳ次）
高橋　豊（沼津北部高校）
調査補助員：大川敬夫（大正大学大学院院生）　宮本達希（立正大学学生）
小林深志（立正大学学生）　高森明代（立正大学学生）
渡辺康弘（大阪外国語大学学生）　久松義昭（花園大学学生）
福尾正彦（九州大学大学院院生）　岡田洋一（日本大学大学院院生）
渡辺淳美（奈良大学学生）　青野富士夫（日詰遺跡調査団）
現地調査：今井弥太郎　鈴木克彦　八木　清　笹原秋男
岩田芳男　岩田　実　伊奈　実　土屋藤善
伊奈　刺　久保田利徳　岩田　功　久保田一裕
今井　衛　久保田次郎　久保田利秋　青木敏夫

伊奈英輔　高井正弘　久保田庄司　青木弘二
小沢重信　青木紋治　岩田昭吾　真野芳孝
遠藤茂　伊奈元一　青木武　石井肇
八木文男　伊奈平作　久保田茂矩　石井寿能
石井正寿　石井貢　久保田昭寛　伊奈英敏
八木勇作　伊奈重美　久保田喜温　殿岡稔
谷田和明　高橋定一　杉本修　郷原重広
古谷静夫　長谷川勝己　石井直　鈴木常男
勝又守　今井昭一　栗林輝起　井上菊平
重田孝治　小沢源吾　河原昌博　土屋直
伊奈豊　安藤保男　守野悦正　伊奈重徳
久保田通夫　青木秀司　臼井利男　今井堅固
岩田友男　津田幸祐　小沢半作　土屋保
相磯広光　北条省吾　相磯温美　鴨下春男
菊地要人

資料整理：久保田富士子　高井明美　伊奈京子　青木菜穂美
鈴木清子　丹嶋かつ子　川崎陽子

# あ　と　が　き

本町ならびに周辺地域は、埋蔵文化財の包蔵地として貴重な遺跡の存在が確認されていますが、この尊い先人の残した文化財を永くいつまでも後世の人々に残すことが、現在の我々に課せられた責務であると思います。

このたび昭和52年より4か年に亘って発掘調査研究された伊豆長岡町北江間の大北横穴群の調査報告書が刊行されることになり、誠に喜ばしい限りであります。

特にこの発掘調査は、膚を裂く冬期から炎熱の夏期と数次に亘る長期の難作業であり、また報告書の刊行は、膨大な資料をもとに研究検討を重ねた編集作業であり、この労苦はたいへんなものでありました。これは、調査団長である斎藤博士と副団長の長田実先生の熱心なご指導と県教育委員会文化課の職員各位のご努力によるものと深く感謝を申し上げる次第です。なかでも第Ⅰ次を担当された山下晃先生、第Ⅱ次以降第Ⅳ次まで担当された植松章八、佐藤達雄の両先生、調査補助員の学生の皆様、本当にご苦労さまでした。おかげをもちまして多くの成果を挙げ調査を無事終了することができました。

また、つねに理解を示してくれた地主の伊奈昌孝氏、終始あたたかいご協力を下さった地元関係者の皆様には、心より感謝の意を表するものであります。

ここに、刊行をみた本報告書が本町および周辺地域の古代史を知り郷土を育む好資料として、皆様方のご参考になれば幸甚に存じます。

筆を擱くにあたり、私は「若舎人」銘の石櫃の発見された昭和53年8月の際、その終了の慰霊式に臨んで、団長斎藤忠博士が詠ぜられた次の和歌が、参列者にきわめて印象的なものをあたえたことを記し添えたいと思います。

若舎人　魂（たま）安かれと
我等みる
手を合わすれば
ひぐらしのなく

昭和56年3月

伊豆長岡町教育委員会
教育長　中　野　　勇

大　北　横　穴　群

昭和56年3月30日

編　集　　大北横穴群調査団

発　行　　伊豆長岡町教育委員会

印　刷　　静岡市豊田三丁目5番30号

株式会社　三　　創

TEL（0542）82－4031